茨城県教育財団文化財調査報告第30集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書11

南三島遺跡6・7区（上）

昭和60年10月

住宅・都市整備公団　茨城開発局
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第30集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書11

南三島（みなみみしま）遺跡6・7区（上）

昭和60年10月

住宅・都市整備公団　茨城開発局
財団法人　茨城県教育財団

序

龍ヶ崎市の北部台地における龍ヶ崎ニュータウンの建設が，住宅・都市整備公団により進められておりますが，その予定地内には，いくつかの埋蔵文化財包蔵地が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は，これらの埋蔵文化財を記録保存するため，住宅・都市整備公団と埋蔵文化財発掘調査事業について委託契約を結び，昭和52年度以降埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりました。

昭和58年度は，南三島遺跡６・７区の調査を行い，貴重な成果を上げ，昭和59年度に南三島遺跡６・７区の報告書を刊行するはこびとなりました。本書が学術的な資料としてはもとより，教育・文化の向上の一環として広く活用されますことを希望いたします。

なお，調査・整理を進めるにあたり，御指導,御協力を賜った住宅・都市整備公団をはじめ，茨城県教育委員会，龍ヶ崎市教育委員会，地元関係者各位に対し，衷心より深く感謝の意を表します。

昭和60年10月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　竹　内　藤　男

例　　言

1　本書は，住宅・都市整備公団の委託により，財団法人茨城県教育財団が，昭和57年度から昭和58年度にわたって調査を実施した龍ヶ崎市羽原町に所在する南三島遺跡６・７区の発掘調査報告書である。

2　南三島遺跡６・７区の調査・整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		大金新一	～昭和58年11月
		竹内藤男	昭和58年12月～
副理事長		古橋靖	～昭和58年７月
		川又友三郎	昭和58年７月～
常務理事		綿引一夫	
事務局長		小林義久	～昭和58年３月
		小林洋	昭和58年４月～
調査課長		寺内寛	～昭和59年３月
		青木義夫	昭和59年４月～
企画管理班	班長	圷秀雄	～昭和57年５月
	〃	今村信夫	昭和57年６月～昭和59年３月
	〃	市毛洋一	昭和59年４月～
	主任調査員	加藤雅美	
	主事	鈴木三郎	
	〃	海老沢一夫	
	〃	綿引良人	～昭和58年３月
	〃	大曽根徹	昭和58年４月～
調査第二班	班長	石井毅	昭和57年度
	〃	渡辺千秋	昭和58年度
	主任調査員	沼田文夫	昭和57年度調査
	〃	山本静男	〃
	〃	人見暁朗	〃
	調査員	瓦吹堅	〃
	主任調査員	中村幸雄	昭和58年度調査
	〃	和田雄次	昭和58年度調査，昭和59年度整理・執筆
	調査員	斉藤弘道	昭和58年度調査，昭和59年度整理・執筆
整理班	班長	渡辺千秋	昭和59年度

3　本書は，発掘担当者の協力を得て，遺構を和田雄次が，遺物を斉藤弘道が執筆・編集を担当した。

4　本書に使用した記号については，第３章第１節２の記載方法の項を参照されたい。

5　発掘調査及び出土遺物の整理等に際して，御指導，御協力を賜った関係機関，各位に感謝の意を表します。

目　　次

── 上　巻 ──

序
例　言
目　次
第１章　調査経緯……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査方法……2
　　1　地区設定……2
　　2　基本層序の検討……2
　　3　遺構確認……2
　　4　遺構調査……4
　第３節　調査経過……6
第２章　位置と環境……9
　第１節　地理的環境……9
　第２節　歴史的環境……10
第３章　南三島遺跡６区……14
　第１節　遺跡の概要と遺構と遺物の記載方法……14
　　1　遺跡の概要……14
　　(1)　遺構の概要……14
　　(2)　遺物の概要……14
　　2　遺構と遺物の記載方法……16
　　(1)　遺構の記載方法……16
　　(2)　遺物の記載方法……20
　第２節　竪穴住居跡と出土土器……23
　第３節　土壙と出土土器……270
　第４節　溝と出土土器……413
　第５節　埋甕遺構と出土土器……427
　第６節　炉穴と出土土器……433

第７節　土器以外の人工遺物……438
1　把手……438
2　土製品……448
3　石器……473
4　貝製品……492
5　古銭……492
第８節　自然遺物……494

── 下　巻 ──

第４章　南三島遺跡７区……505
第１節　遺跡の概要……505
(1)　遺構の概要……505
(2)　遺物の概要……505
第２節　竪穴住居跡と出土土器……507
第３節　土壙と出土土器……636
第４節　溝と出土土器……743
第５節　埋甕遺構と出土土器……764
第６節　地下式壙と出土土器……773
第７節　粘土貼り遺構……778
第８節　土器以外の人工遺物……779
1　把手……779
2　土製品……781
3　石器……794
4　古銭……803
第９節　自然遺物……812
第10節　グリッド出土土器……812
第５章　まとめ……813
第１節　遺構……813
1　竪穴住居跡について……813
2　土壙について……823
3　溝について……826

4　埋甕遺構について…… 828
5　炉穴について…… 831
6　地下式壙について…… 831
7　粘土貼り遺構について…… 832
第2節　遺物…… 832
1　土器について…… 832
(1)　野島式土器について…… 833
(2)　加曽利EⅢ・Ⅳ式土器について…… 838
(3)　有孔鍔付土器について…… 845
(4)　器台形土器について…… 848
(5)　台付土器について…… 853
2　土製品について…… 855
(1)　土器片錘について…… 855
(2)　土製円板について…… 857
終　章　む　す　び…… 860

挿　図　目　次

第 1 図　南三島遺跡１～７区配置図・大調査区名称図…… 3
第 2 図　南三島遺跡６・７区大調査区・小調査区名称図…… 4
第 3 図　小区画名称図…… 5
第 4 図　南三島遺跡土層柱状図…… 5
第 5 図　南三島遺跡１～７区地形図…… 8
第 6 図　南三島遺跡周辺地形及び周辺遺跡位置図…… 12
南　三　島　遺　跡　6　区
第 7 図　南三島遺跡６区遺構分布図…… 23
第 8 図　第１号住居跡実測図…… 24
第 9 図　第１号住居跡出土遺物拓影図…… 25
第 10 図　第２号住居跡実測図…… 26
第 11 図　第２号住居跡出土遺物拓影図…… 27
第 12 図　第３号住居跡出土遺物拓影図…… 27
第 13 図　第３・４・５号住居跡実測図…… 28
第 14 図　第５号住居跡出土遺物拓影図…… 29
第 15 図　第６号住居跡実測図…… 30
第 16 図　第７号住居跡実測図…… 31
第 17 図　第８号住居跡実測図…… 32
第 18 図　第９号住居跡実測図…… 33
第 19 図　第10号住居跡実測図…… 34
第 20 図　第11号住居跡実測図…… 35
第 21 図　第11号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)…… 36
第 22 図　第11号住居跡出土遺物拓影図(2)…… 37
第 23 図　第12号住居跡実測図…… 38
第 24 図　第12号住居跡出土遺物拓影図…… 39
第 25 図　第13号住居跡実測図…… 39
第 26 図　第13号住居跡出土遺物拓影図…… 40
第 27 図　第14・17号住居跡実測図…… 41
第 28 図　第14号住居跡出土遺物実測図・拓影図…… 42
第 29 図　第15号住居跡実測図…… 43
第 30 図　第15号住居跡出土状態図…… 44
第 31 図　第15号住居跡出土遺物実測図(1)…… 47
第 32 図　第15号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)…… 48
第33 図　第15号住居跡出土遺物拓影図(3)…… 49
第 34 図　第15号住居跡出土遺物拓影図(4)…… 50
第 35 図　第16号住居跡実測図…… 51
第 36 図　第16号住居跡出土遺物拓影図…… 52
第 37 図　第17号住居跡出土遺物拓影図…… 53
第 38 図　第18号住居跡実測図…… 53
第 39 図　第18号住居跡出土遺物拓影図…… 54
第 40 図　第19号住居跡実測図…… 55
第 41 図　第20号住居跡実測図…… 56
第 42 図　第20号住居跡出土遺物拓影図…… 56
第 43 図　第21号住居跡実測図…… 57
第 44 図　第21号住居跡出土遺物拓影図…… 58
第 45 図　第22号住居跡実測図…… 59
第 46 図　第23号住居跡実測図…… 60
第 47 図　第23号住居跡出土遺物拓影図…… 61
第 48 図　第24号住居跡実測図…… 62
第 49 図　第24号住居跡出土遺物拓影図…… 63
第 50 図　第25号住居跡実測図…… 64
第 51 図　第25号住居跡遺物出土状態図…… 65
第 52 図　第25号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)…… 66
第 53 図　第25号住居跡出土遺物拓影図(2)…… 67
第 54 図　第26号住居跡実測図…… 68
第 55 図　第26号住居跡遺物出土状態図…… 69
第 56 図　第26号住居跡出土遺物拓影図(1)…… 70
第 57 図　第26号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)…… 71
第 58 図　第27号住居跡実測図…… 72
第 59 図　第27号住居跡出土遺物実測図・拓影図…… 73
第 60 図　第28号住居跡実測図…… 74
第 61 図　第28号住居跡出土遺物拓影図…… 74
第 62 図　第29号住居跡実測図…… 75
第 63 図　第29号住居跡出土遺物拓影図…… 76
第 64 図　第30号住居跡実測図…… 76
第 65 図　第30号住居跡出土遺物拓影図…… 77

第 66 図　第31号住居跡実測図…… 78
第 67 図　第31号住居跡遺物出土状態図…… 79
第 68 図　第31号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(1)…… 80
第 69 図　第31号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(2)…… 81
第 70 図　第32号住居跡実測図…… 82
第 71 図　第32号住居跡遺物出土状態図…… 83
第 72 図　第32号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(1)…… 84
第 73 図　第32号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(2)…… 85
第 74 図　第33号住居跡実測図…… 86
第 75 図　第33号住居跡出土遺物拓影図…… 86
第 76 図　第34号住居跡実測図…… 87
第 77 図　第34号住居跡出土遺物実測図
・拓影図…… 88
第 78 図　第35号住居跡実測図…… 89
第 79 図　第35号住居跡出土遺物拓影図…… 90
第 80 図　第36号住居跡実測図…… 91
第 81 図　第36号住居跡出土遺物拓影図…… 91
第 82 図　第37号住居跡実測図…… 93
第 83 図　第37号住居跡出土遺物拓影図…… 93
第 84 図　第38号住居跡実測図…… 94
第 85 図　第38号住居跡出土遺物実測図
・拓影図…… 95
第 86 図　第39・40号住居跡実測図…… 97
第 87 図　第39号住居跡出土遺物拓影図…… 98
第 88 図　第40号住居跡出土遺物拓影図…… 99
第 89 図　第41号住居跡実測図……100
第 90 図　第41号住居跡出土遺物実測図
・拓影図……101
第 91 図　第42号住居跡実測図……103
第 92 図　第42号住居跡出土遺物実測図
(1)……105
第 93 図　第42号住居跡出土遺物実測図
(2)……107
第 94 図　第42号住居跡出土遺物実測図
(3)……109
第 95 図　第42号住居跡出土遺物実測図
(4)……111
第 96 図　第42号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(5)……113
第 97図　第42号住居跡出土遺物拓影図
(6)……115
第 98図　第42号住居跡出土遺物拓影図
(7)……116
第 99図　第42号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(8)……117
第100図　第43号住居跡実測図……118
第101図　第43号住居跡出土遺物拓影図……119
第102図　第44号住居跡実測図……120
第103図　第44号住居跡出土遺物拓影図……121
第104図　第45号住居跡実測図……122
第105図　第45号住居跡出土遺物実測図
(1)……123
第106図　第45号住居跡出土遺物拓影図
(2)……125
第107図　第45号住居跡出土遺物拓影図
(3)……127
第108図　第46号住居跡実測図……129
第109図　第46号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(1)……130
第110図　第46号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(2)……131
第111図　第47号住居跡実測図……133
第112図　第47号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(1)……135
第113図　第47号住居跡出土遺物拓影図
(2)……136
第114図　第48号住居跡実測図……137
第115図　第48号住居跡遺物出土状態図……138
第116図　第48号住居跡出土遺物実測図
(1)……141
第117図　第48号住居跡出土遺物実測図
(2)……143
第118図　第48号住居跡出土遺物実測図
(3)……145
第119図　第48号住居跡出土遺物実測図
(4)……147
第120図　第48号住居跡出土遺物実測図
(5)……150
第121図　第48号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(6)……151

第122図　第48号住居跡出土遺物拓影図(7)……152
第123図　第48号住居跡出土遺物拓影図(8)……153
第124図　第48号住居跡出土遺物拓影図(9)……154
第125図　第48号住居跡出土遺物拓影図(10)……155
第126図　第48号住居跡出土遺物拓影図(11)……156
第127図　第49号住居跡実測図……158
第128図　第49号住居跡出土遺物実測図(1)……160
第129図　第49号住居跡出土遺物実測図(2)……162
第130図　第49号住居跡出土遺物実測図・拓影図(3)……163
第131図　第49号住居跡出土遺物拓影図(4)……164
第132図　第49号住居跡出土遺物拓影図(5)……165
第133図　第49号住居跡出土遺物拓影図(6)……166
第134図　第50号住居跡実測図……168
第135図　第50号住居跡出土遺物拓影図　169
第136図　第51号住居跡実測図……170
第137図　第51号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)……172
第138図　第51号住居跡出土遺物拓影図(2)……173
第139図　第51号住居跡出土遺物拓影図(3)……174
第140図　第52号住居跡実測図……176
第141図　第52号住居跡出土遺物実測図・拓影図……177
第142図　第53号住居跡実測図……178
第143図　第53号住居跡出土遺物拓影図　179
第144図　第54号住居跡実測図……181
第145図　第54号住居跡出土遺物拓影図　182
第146図　第55号住居跡実測図……183
第147図　第55号住居跡出土遺物実測図(1)……185
第148図　第55号住居跡出土遺物実測図(2)……187
第149図　第55号住居跡出土遺物拓影図(3)……189
第150図　第55号住居跡出土遺物拓影図(4)……191
第151図　第55号住居跡出土遺物拓影図(5)……193
第152図　第55号住居跡出土遺物拓影図(6)……194
第153図　第55号住居跡出土遺物拓影図(7)……195
第154図　第56号住居跡実測図……197
第155図　第56号住居跡出土遺物拓影図……198
第156図　第57号住居跡実測図……199
第157図　第57号住居跡出土遺物実測図・拓影図……200
第158図　第58号住居跡実測図……202
第159図　第58号住居跡出土遺物拓影図(1)……204
第160図　第58号住居跡出土遺物実測図(2)……205
第161図　第59号住居跡実測図……206
第162図　第59号住居跡出土遺物実測図・拓影図……207
第163図　第60号住居跡実測図……209
第164図　第60号住居跡出土遺物実測図・拓影図……210
第165図　第61号住居跡実測図……211
第166図　第61号住居跡出土遺物実測図・拓影図……212
第167図　第62号住居跡実測図……214
第168図　第62号住居跡出土遺物拓影図……215
第169図　第63号住居跡実測図……216
第170図　第63号住居跡出土遺物拓影図……217
第171図　第64号住居跡実測図(1)……218
第172図　第64号住居跡実測図(2)……219
第173図　第64号住居跡出土遺物拓影図……219
第174図　第65号住居跡実測図……220
第175図　第65号住居跡出土遺物実測図・拓影図……221
第176図　第66号住居跡実測図……222

第177図　第66号住居跡出土遺物実測図・拓影図……223
第178図　第67号住居跡実測図……224
第179図　第67号住居跡出土遺物拓影図……225
第180図　第68号住居跡実測図……226
第181図　第68号住居跡出土遺物実測図・拓影図……227
第182図　第69号住居跡実測図……229
第183図　第69号住居跡出土遺物拓影図……230
第184図　第70号住居跡実測図……231
第185図　第70号住居跡出土遺物拓影図(1)……232
第186図　第70号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)……234
第187図　第71号住居跡実測図……235
第188図　第71号住居跡出土遺物拓影図(1)……237
第189図　第71号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)……238
第190図　第72号住居跡実測図……238
第191図　第72号住居跡出土遺物拓影図……239
第192図　第73号住居跡実測図……241
第193図　第73号住居跡出土遺物拓影図……242
第194図　第74号住居跡実測図……243
第195図　第74号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)……245
第196図　第74号住居跡出土遺物拓影図(2)……246
第197図　第75号住居跡実測図……247
第198図　第76号住居跡実測図……249
第199図　第76号住居跡出土遺物拓影図……249
第200図　第77号住居跡実測図……250
第201図　第77号住居跡出土遺物実測図・拓影図……251
第202図　第78号住居跡実測図……252
第203図　第79号住居跡実測図……254
第204図　第79号住居跡出土遺物拓影図……254
第205図　第80号住居跡実測図……255
第206図　第80号住居跡出土遺物拓影図……256
第207図　第81号住居跡実測図……258
第208図　第81，81・84・85号住居跡出土遺物拓影図(1)……260
第209図　第81，81・84・85号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)……262
第210図　第81，81・84・85号住居跡出土遺物実測図・拓影図(3)……263
第211図　第82号住居跡実測図……264
第212図　第82号住居跡出土遺物拓影図……265
第213図　第84号住居跡実測図……267
第214図　第84号住居跡出土遺物拓影図……268
第215図　第85号住居跡実測図……269
第216図　第85号住居跡出土遺物拓影図……269
第217図　第１号土壙出土遺物拓影図……270
第218図　第57号土壙出土遺物拓影図……271
第219図　第61Ａ・Ｂ号土壙出土遺物実測図・拓影図……272
第220図　第63号土壙出土遺物拓影図……273
第221図　第69号土壙出土遺物実測図・拓影図……274
第222図　第74Ａ・Ｂ号土壙出土遺物実測図・拓影図……276
第223図　第78号土壙出土遺物拓影図……276
第224図　第79号土壙出土遺物拓影図……277
第225図　第84号土壙出土遺物拓影図……278
第226図　第87号土壙出土遺物拓影図……278
第227図　第114号土壙出土遺物拓影図……279
第228図　第124号土壙出土遺物拓影図……279
第229図　第135号土壙出土遺物実測図・拓影図……281
第230図　第142号土壙出土遺物拓影図……282
第231図　第144号土壙出土遺物拓影図……282
第232図　第149号土壙出土遺物拓影図……283
第233図　第150号土壙出土遺物拓影図……284
第234図　第153号土壙出土遺物拓影図……285
第235図　第155号土壙出土遺物拓影図……286
第236図　第156号土壙出土遺物拓影図……286
第237図　第162号土壙出土遺物実測図・拓影図……288
第238図　第164号土壙出土遺物拓影図……289
第239図　第165号土壙出土遺物拓影図……289
第240図　第177号土壙出土遺物拓影図……290
第241図　第178号土壙出土遺物拓影図……290
第242図　第179号土壙出土遺物実測図・拓影図……291

第243図　第180号土壙出土遺物拓影図……292
第244図　第181号土壙出土遺物拓影図……292
第245図　第182号土壙出土遺物拓影図……293
第246図　第185号土壙出土遺物拓影図……293
第247図　第194号土壙出土遺物実測図
(1)……295
第248図　第194号土壙出土遺物拓影図
(2)……296
第249図　第196号土壙出土遺物拓影図……298
第250図　第197号土壙出土遺物拓影図……299
第251図　第198号土壙出土遺物実測図
・拓影図(1)……301
第252図　第198号土壙出土遺物実測図
・拓影図(2)……302
第253図　第199号土壙出土遺物実測図
・拓影図……303
第254図　第205号土壙出土遺物拓影図……304
第255図　第212号土壙出土遺物拓影図……304
第256図　第215号土壙出土遺物拓影図……305
第257図　第231号土壙出土遺物実測図
・拓影図……306
第258図　第249号土壙出土遺物実測図
・拓影図……307
第259図　第251号土壙出土遺物実測図
・拓影図……308
第260図　第252号土壙出土遺物拓影図……309
第261図　第257号土壙出土遺物拓影図……310
第262図　第260号土壙出土遺物実測図
・拓影図……311
第263図　第267号土壙出土遺物拓影図……312
第264図　第268号土壙出土遺物拓影図……312
第265図　第272号土壙出土遺物拓影図……313
第266図　第274号土壙出土遺物拓影図……314
第267図　第281号土壙出土遺物実測図
・拓影図……315
第268図　第291号土壙出土遺物拓影図……316
第269図　第303号土壙出土遺物拓影図……317
第270図　第308号土壙出土遺物拓影図……318
第271図　第309号土壙出土遺物拓影図……318
第272図　第310Ａ・Ｂ号土壙出土遺物
拓影図……319
第273図　第312号土壙出土遺物拓影図……320
第274図　第333号土壙出土遺物拓影図……321
第275図　第337号土壙出土遺物拓影図……322
第276図　第338号土壙出土遺物実測図
・拓影図……323
第277図　第346号土壙出土遺物拓影図……324
第278図　第354号土壙出土遺物拓影図……325
第279図　第355号土壙出土遺物拓影図……325
第280図　第361号土壙出土遺物拓影図……326
第281図　第362号土壙出土遺物拓影図……327
第282図　第363号土壙出土遺物拓影図……327
第283図　第364号土壙出土遺物拓影図……327
第284図　第365号土壙出土遺物実測図
・拓影図……329
第285図　第370号土壙出土遺物拓影図……330
第286図　第383号土壙出土遺物実測図
・拓影図……331
第287図　第388号土壙出土遺物実測図
・拓影図……332
第288図　第389号土壙出土遺物実測図
・拓影図……332
第289図　第390号土壙出土遺物拓影図……333
第290図　第392号土壙出土遺物実測図
・拓影図(1)……334
第291図　第392号土壙出土遺物拓影図
(2)……335
第292図　第393号土壙出土遺物拓影図……336
第293図　第394号土壙出土遺物実測図
・拓影図……337
第294図　第398号土壙出土遺物実測図
・拓影図……339
第295図　第402号土壙出土遺物実測図
・拓影図……340
第296図　第412号土壙出土遺物実測図
・拓影図……341
第297図　第416号土壙出土遺物実測図
・拓影図……343
第298図　第417号土壙出土遺物拓影図……343
第299図　第419号土壙出土遺物拓影図……344
第300図　第420号土壙出土遺物実測図
・拓影図……345
第301図　土壙実測図(1)……358
第302図　土壙実測図(2)……359

第303図　土壙実測図(3)……360
第304図　土壙実測図(4)……361
第305図　土壙実測図(5)……362
第306図　土壙実測図(6)……363
第307図　土壙実測図(7)……364
第308図　土壙実測図(8)……365
第309図　土壙実測図(9)……366
第310図　土壙実測図(10)……367
第311図　土壙実測図(11)……368
第312図　土壙実測図(12)……369
第313図　土壙実測図(13)……370
第314図　土壙実測図(14)……371
第315図　土壙実測図(15)……372
第316図　土壙実測図(16)……373
第317図　土壙実測図(17)……374
第318図　土壙実測図(18)……375
第319図　土壙実測図(19)……376
第320図　土壙実測図(20)……377
第321図　土壙実測図(21)……378
第322図　土壙実測図(22)……379
第323図　土壙実測図(23)……380
第324図　土壙実測図(24)……381
第325図　土壙実測図(25)……382
第326図　土壙実測図(26)……383
第327図　土壙実測図(27)……384
第328図　土壙実測図(28)……385
第329図　土壙実測図(29)……386
第330図　土壙実測図(30)……387
第331図　土壙実測図(31)……388
第332図　土壙実測図(32)……389
第333図　土壙実測図(33)……390
第334図　土壙実測図(34)……391
第335図　土壙実測図(35)……392
第336図　土壙実測図(36)……393
第337図　土壙実測図(37)……394
第338図　土壙実測図(38)……395
第339図　土壙実測図(39)……396
第340図　土壙実測図(40)……397
第341図　土壙実測図(41)……398
第342図　土壙実測図(42)……399
第343図　土壙実測図(43)……400
第344図　土壙実測図(44)……401
第345図　土壙実測図(45)……402
第346図　土壙出土土器拓影図(1)……403
第347図　土壙出土土器拓影図(2)……404
第348図　土壙出土土器拓影図(3)……405
第349図　土壙出土土器拓影図(4)……406
第350図　土壙出土土器拓影図(5)……407
第351図　土壙出土土器拓影図(6)……408
第352図　第１号溝実測図……409
第353図　第２号溝実測図……411
第354図　第３号溝実測図……414
第355図　第４・７号溝実測図……415
第356図　第５号溝実測図……416
第357図　第６号溝実測図……417
第358図　第８号溝実測図……419
第359図　第９号溝実測図……422
第360図　第10号溝実測図……423
第361図　第11号溝実測図……424
第362図　第12号溝実測図……425
第363図　第13号溝実測図……425
第364図　第15号溝実測図……426
第365図　第１号埋甕遺構実測図……427
第366図　第１号埋甕遺構出土土器実測図・拓影図……427
第367図　第２号埋甕遺構実測図……428
第368図　第２号埋甕遺構出土土器実測図……429
第369図　第３号埋甕遺構実測図……429
第370図　第３号埋甕遺構出土土器実測図……430
第371図　第４号埋甕遺構実測図……430
第372図　第４号埋甕遺構出土土器実測図……431
第373図　第５号埋甕遺構実測図……431
第374図　第５号埋甕遺構出土土器拓影図……432
第375図　第６号埋甕遺構実測図……432
第376図　第６号埋甕遺構出土土器実測図……433
第377図　第１号炉穴出土遺物拓影図……434
第378図　第２号炉穴出土遺物拓影図……434
第379図　第３号炉穴出土遺物実測図・拓影図……436

第380図　第５号炉穴出土遺物拓影図……437
第381図　把手実測図(1)……444
第382図　把手実測図(2)……445
第383図　把手実測図(3)……446
第384図　把手実測図(4)……447
第385図　土器片錘実測図(1)……464
第386図　土器片錘実測図(2)……465
第387図　土器片錘実測図(3)……466
第388図　土器片錘実測図(4)……467
第389図　土器片錘実測図(5)……468
第390図　土器片錘実測図(6)……469
第391図　土製円板実測図……470
第392図　有孔円板実測図……471
第393図　土製品実測図……472
第394図　石器実測図(1)……481
第395図　石器実測図(2)……482
第396図　石器実測図(3)……483
第397図　石器実測図(4)……484
第398図　石器実測図(5)……485
第399図　石器実測図(6)……486
第400図　石器実測図(7)……487
第401図　石器実測図(8)……488
第402図　石器実測図(9)……489
第403図　石器実測図(10)……490
第404図　石器実測図(11)……491
第405図　古銭拓影図……493
南　三　島　遺　跡　７　区
第406図　南三島遺跡７区遺構分布図……507
第407図　第１号住居跡実測図……508
第408図　第１号住居跡出土遺物拓影図……509
第409図　第２号住居跡実測図……510
第410図　第２号住居跡出土遺物拓影図……510
第411図　第３号住居跡実測図……512
第412図　第３号住居跡出土遺物拓影図(1)……513
第413図　第３号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)……514
第414図　第４号住居跡実測図……515
第415図　第４号住居跡出土遺物拓影図……515
第416図　第５号住居跡実測図……516
第417図　第５号住居跡出土遺物拓影図……517
第418図　第６号住居跡実測図……518
第419図　第６号住居跡出土遺物実測図・拓影図……519
第420図　第７号住居跡実測図……520
第421図　第７号住居跡出土遺物拓影図……520
第422図　第８号住居跡実測図……521
第423図　第８号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)……523
第424図　第８号住居跡出土遺物拓影図(2)……524
第425図　第９号住居跡実測図……525
第426図　第９号住居跡出土遺物拓影図……526
第427図　第10号住居跡実測図……527
第428図　第10号住居跡出土遺物実測図・拓影図……528
第429図　第11号住居跡実測図……530
第430図　第11号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)……531
第431図　第11号住居跡出土遺物拓影図(2)……533
第432図　第11号住居跡出土遺物実測図・拓影図(3)……534
第433図　第12号住居跡実測図……536
第434図　第13号住居跡実測図……537
第435図　第13号住居跡出土遺物拓影図……537
第436図　第14号住居跡実測図……539
第437図　第14号住居跡出土遺物実測図・拓影図……540
第438図　第15号住居跡実測図……541
第439図　第15号住居跡出土遺物実測図(1)……543
第440図　第15号住居跡出土遺物拓影図(2)……545
第441図　第15号住居跡出土遺物拓影図(3)……547
第442図　第15号住居跡出土遺物拓影図(4)……549
第443図　第15号住居跡出土遺物実測図・拓影図(5)……550
第444図　第16号住居跡実測図……551
第445図　第16号住居跡出土遺物拓影図……552
第446図　第17号住居跡実測図……553
第447図　第18号住居跡実測図……554

第448図　第18号住居跡出土遺物拓影図……555
第449図　第19号住居跡実測図……556
第450図　第19号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(1)……557
第451図　第19号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(2)……558
第452図　第20号住居跡実測図……559
第453図　第21・24号住居跡実測図……561
第454図　第21号住居跡出土遺物実測図
・拓影図……562
第455図　第22号住居跡実測図……564
第456図　第22号住居跡出土遺物拓影図……565
第457図　第23号住居跡実測図……566
第458図　第23号住居跡出土遺物実測図
(1)……568
第459図　第23号住居跡出土遺物拓影図
(2)……569
第460図　第23号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(3)……570
第461図　第24号住居跡出土遺物拓影図
(1)……573
第462図　第24号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(2)……574
第463図　第25・27号住居跡実測図……576
第464図　第25号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(1)……578
第465図　第25号住居跡出土遺物拓影図
(2)……579
第466図　第25・27号住居跡出土遺物実
測図・拓影図……581
第467図　第26号住居跡実測図……582
第468図　第27号住居跡出土遺物実測図
(1)……584
第469図　第27号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(2)……586
第470図　第27号住居跡出土遺物拓影図
(3)……588
第471図　第27号住居跡出土遺物拓影図
(4)……590
第472図　第27号住居跡出土遺物拓影図
(5)……591
第473図　第27号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(6)……592
第474図　第28号住居跡実測図……594
第475図　第28号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(1)……595
第476図　第28号住居跡出土遺物拓影図
(2)……596
第477図　第29号住居跡実測図……597
第478図　第29号住居跡出土遺物拓影図……598
第479図　第30号住居跡実測図……599
第480図　第30号住居跡出土遺物実測図
(1)……601
第481図　第30号住居跡出土遺物実測図
(2)……603
第482図　第30号住居跡出土遺物拓影図
(3)……605
第483図　第30号住居跡出土遺物拓影図
(4)……606
第484図　第30号住居跡出土遺物拓影図
(5)……607
第485図　第30号住居跡出土遺物拓影図
(6)……608
第486図　第30号住居跡出土遺物拓影図
(7)……609
第487図　第31号住居跡実測図……611
第488図　第31号住居跡出土遺物実測図
(1)……612
第489図　第31号住居跡出土遺物拓影図
(2)……613
第490図　第32号住居跡実測図……614
第491図　第32号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(1)……616
第492図　第32号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(2)……617
第493図　第33号住居跡実測図……619
第494図　第33号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(1)……620
第495図　第33号住居跡出土遺物拓影図
(2)……621
第496図　第34号住居跡実測図……622
第497図　第34号住居跡出土遺物実測図
・拓影図(1)……624
第498図　第34号住居跡出土遺物実測図

・拓影図(2)……625
第499図　第35号住居跡実測図……626
第500図　第35号住居跡出土遺物拓影図……627
第501図　第36号住居跡実測図……629
第502図　第36号住居跡出土遺物拓影図……630
第503図　第36・37号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)……632
第504図　第36・37号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)……633
第505図　第37号住居跡実測図……634
第506図　第37号住居跡出土遺物拓影図……635
第507図　第13号土壙出土遺物拓影図……636
第508図　第34号土壙出土遺物拓影図……637
第509図　第97号土壙出土遺物拓影図……637
第510図　第136号土壙出土遺物拓影図……638
第511図　第138号土壙出土遺物拓影図……638
第512図　第141号土壙出土遺物拓影図……639
第513図　第143号土壙出土遺物拓影図……640
第514図　第153号土壙出土遺物拓影図……640
第515図　第154号土壙出土遺物拓影図……641
第516図　第155号土壙出土遺物拓影図……642
第517図　第160号土壙出土遺物実測図・拓影図……643
第518図　第199号土壙出土遺物実測図・拓影図……643
第519図　第201号土壙出土遺物拓影図……644
第520図　第215号土壙出土遺物拓影図……645
第521図　第223号土壙出土遺物拓影図……645
第522図　第255号土壙出土遺物拓影図……646
第523図　第279号土壙出土遺物拓影図……646
第524図　第282号土壙出土遺物拓影図……647
第525図　第283号土壙出土遺物拓影図……648
第526図　第284号土壙出土遺物拓影図……648
第527図　第289号土壙出土遺物拓影図……649
第528図　第295号土壙出土遺物拓影図……650
第529図　第304号土壙出土遺物拓影図……650
第530図　第313号土壙出土遺物拓影図……651
第531図　第316号土壙出土遺物拓影図……652
第532図　第320号土壙出土遺物拓影図……652
第533図　第321号土壙出土遺物拓影図……653
第534図　第323号土壙出土遺物拓影図……654
第535図　第342号土壙出土遺物拓影図……654
第536図　第346号土壙出土遺物拓影図……655
第537図　第353号土壙出土遺物拓影図……656
第538図　第354号土壙出土遺物拓影図……657
第539図　第355号土壙出土遺物拓影図……657
第540図　第357号土壙出土遺物拓影図……658
第541図　第358号土壙出土遺物拓影図……659
第542図　第384号土壙出土遺物拓影図……659
第543図　第386号土壙出土遺物拓影図……660
第544図　第387号土壙出土遺物拓影図……660
第545図　第388号土壙出土遺物拓影図……661
第546図　第393号土壙出土遺物拓影図……661
第547図　第395号土壙出土遺物拓影図……662
第548図　第401号土壙出土遺物拓影図……663
第549図　第407号土壙出土遺物実測図・拓影図……664
第550図　第409号土壙出土遺物実測図・拓影図(1)……665
第551図　第409号土壙出土遺物拓影図(2)……667
第552図　第409号土壙出土遺物実測図・拓影図(3)……669
第553図　第409号土壙出土遺物実測図(4)……670
第554図　第409号土壙出土遺物実測図・拓影図(5)……671
第555図　第413号土壙出土遺物拓影図……672
第556図　第415号土壙出土遺物実測図・拓影図……674
第557図　第422号土壙出土遺物拓影図……675
第558図　土壙実測図(1)……690
第559図　土壙実測図(2)……691
第560図　土壙実測図(3)……692
第561図　土壙実測図(4)……693
第562図　土壙実測図(5)……694
第563図　土壙実測図(6)……695
第564図　土壙実測図(7)……696
第565図　土壙実測図(8)……697
第566図　土壙実測図(9)……698
第567図　土壙実測図(10)……699
第568図　土壙実測図(11)……700
第569図　土壙実測図(12)……701
第570図　土壙実測図(13)……702

第571図　土壙実測図(14)……703
第572図　土壙実測図(15)……704
第573図　土壙実測図(16)……705
第574図　土壙実測図(17)……706
第575図　土壙実測図(18)……707
第576図　土壙実測図(19)……708
第577図　土壙実測図(20)……709
第578図　土壙実測図(21)……710
第579図　土壙実測図(22)……711
第580図　土壙実測図(23)……712
第581図　土壙実測図(24)……713
第582図　土壙実測図(25)……714
第583図　土壙実測図(26)……715
第584図　土壙実測図(27)……716
第585図　土壙実測図(28)……717
第586図　土壙実測図(29)……718
第587図　土壙実測図(30)……719
第588図　土壙実測図(31)……720
第589図　土壙実測図(32)……721
第590図　土壙実測図(33)……722
第591図　土壙実測図(34)……723
第592図　土壙実測図(35)……724
第593図　土壙実測図(36)……725
第594図　土壙実測図(37)……726
第595図　土壙実測図(38)……727
第596図　土壙実測図(39)……728
第597図　土壙実測図(40)……729
第598図　土壙実測図(41)……730
第599図　土壙実測図(42)……731
第600図　土壙実測図(43)……732
第601図　土壙実測図(44)……733
第602図　土壙実測図(45)……734
第603図　土壙実測図(46)……735
第604図　土壙実測図(47)……736
第605図　土壙実測図(48)……737
第606図　土壙実測図(49)……738
第607図　土壙実測図(50)……739
第608図　土壙出土土器拓影図(1)……740
第609図　土壙出土土器拓影図(2)……741
第610図　土壙出土土器拓影図(3)……742
第611図　第１号溝実測図……745
第612図　第２号溝実測図……747
第613図　第３号溝実測図……749
第614図　第４号溝実測図……753
第615図　第５号溝実測図……755
第616図　第７号溝実測図……758
第617図　第６号溝実測図……759
第618図　第８号溝実測図……759
第619図　第９号溝実測図……759
第620図　第10号溝実測図……761
第621図　第11号溝実測図……762
第622図　溝・地下式壙・グリッド出土遺物実測図・拓影図……763
第623図　第１号埋甕遺構実測図……764
第624図　第１号埋甕遺構出土土器実測図・拓影図……765
第625図　第２号埋甕遺構実測図……767
第626図　第２号埋甕遺構出土土器実測図……767
第627図　第３号埋甕遺構実測図……768
第628図　第３号埋甕遺構出土土器実測図……769
第629図　第４号埋甕遺構実測図……769
第630図　第４号埋甕遺構出土土器実測図……769
第631図　第５号埋甕遺構実測図……771
第632図　第５号埋甕遺構出土土器実測図……772
第633図　第１号地下式壙出土土器実測図……774
第634図　第１号粘土貼り遺構実測図……778
第635図　把手実測図(1)……780
第636図　把手実測図(2)……780
第637図　土器片錘実測図(1)……789
第638図　土器片錘実測図(2)……790
第639図　土器片錘実測図(3)……791
第640図　土器片錘実測図(4)……792
第641図　土製円板実測図……793
第642図　有孔円板実測図……793
第643図　石器実測図(1)……798
第644図　石器実測図(2)……799
第645図　石器実測図(3)……800
第646図　石器実測図(4)……801
第647図　石器実測図(5)……802

第648図　古銭拓影図(1)……808
第649図　古銭実測図(2)……809
第650図　古銭実測図(3)……810
第651図　古銭実測図(4)……811
第652図　加曽利ＥⅢ期住居跡分布図……820
第653図　加曽利ＥⅢ～ＥⅣ・ＥⅣ期住居跡分布図……821
第654図　称名寺期等住居跡分布図……822
第655図　南三島遺跡１・２・６・７区内溝方向図……827
第656図　埋甕遺構・炉穴分布図……829
第657図　埋甕遺構の掘り方の長径方向……830
第658図　埋設土器の傾斜角度……830
第659図　茨城県内出土有孔鍔付土器……847
第660図　茨城県内出土器台形土器……852

表　目　次

表 1　南三島遺跡周辺遺跡一覧表…… 13
表 2　土壙一覧表（６区）……345
表 3　把手一覧表（６区）……443
表 4　土器片錘一覧表（６区）……452
表 5　土製円板一覧表（６区）……460
表 6　有孔円板一覧表（６区）……462
表 7　土製品一覧表（６区）……463
表 8　石器一覧表（６区）……477
表 9　古銭一覧表（６区）……492
表10　土壙一覧表（７区）……676
表11　把手一覧表（７区）……779
表12　土器片錘一覧表（７区）……783
表13　土製円板一覧表（７区）……788
表14　有孔円板一覧表（７区）……788
表15　土製品一覧表（７区）……788
表16　石器一覧表（７区）……795
表17　古銭一覧表（７区）……803
表18　住居跡分類集計表……814
表19　住居跡一覧表（６区）……816
表20　住居跡一覧表（７区）……818
表21　土壙形態別集計表……825

写真図版目次

南三島遺跡6区

ＰＬ　1　発掘前全景
ＰＬ　2　第１～６号住居跡
ＰＬ　3　第７～10号住居跡
第11号住居跡炉（土器片囲い炉）
第12号住居跡
ＰＬ　4　第13～17号住居跡
ＰＬ　5　第18～23号住居跡
ＰＬ　6　第24号住居跡・第61Ａ号土壙
第25号住居跡・貝層堆積状況
第26～28号住居跡
ＰＬ　7　第29・30号住居跡
第31号住居跡・第194号土壙
第32号住居跡・第196・199号土壙
第33号住居跡
第34号住居跡・第197号土壙
ＰＬ　8　第35～40号住居跡
ＰＬ　9　第41号住居跡・出土遺物
第42～45号住居跡
ＰＬ　10　第46号住居跡・出土遺物
第47～50号住居跡
ＰＬ　11　第51～54号住居跡
第55・74・75号住居跡
第56～79号住居跡
ＰＬ　12　第57・61号住居跡
第62～64号住居跡
第64・66号住居跡
第69～71号住居跡
ＰＬ　13　第74号住居跡炉（土器埋設炉）
第76・77号住居跡
第80号住居跡
第81・84・85号住居跡
第82号住住跡
ＰＬ　14　第１・57・63・69・74・78・79・84号土壙
ＰＬ　15　第86～88・100・124・135・142号土壙
第144号土壙・遺物出土状況
ＰＬ　16　第149・153・155・156・162・164・165・176号土壙
ＰＬ　17　第178～183・185・205号土壙
ＰＬ　18　第215・231・249・251・252・257・260・264号土壙
ＰＬ　19　第267・268・272・281・291・303・308・309号土壙
ＰＬ　20　第333・337・354・355・359・361～363号土壙
ＰＬ　21　第364・365・383・388・392～394・398号土壙
ＰＬ　22　第402・412・416・417・419・420号土壙
ＰＬ　23　第２号溝・第３～８号溝
第６～10号溝
ＰＬ　24　第15号溝
第１～４号埋甕遺構
ＰＬ　25　第５・６号埋甕遺構・作業風景

南三島遺跡7区

ＰＬ　26　第１～５号住居跡
第６号住居跡・出土遺物
ＰＬ　27　第７～12号住居跡
ＰＬ　28　第12号住居跡出土遺物
第13～18号住居跡
ＰＬ　29　第19～27号住居跡
ＰＬ　30　第28～34号住居跡
ＰＬ　31　第35～37号住居跡
第13・34・97・136号土壙
ＰＬ　32　第138・141・153～155号土壙
ＰＬ　33　第160・164・194・199・201・215・223・255号土壙
ＰＬ　34　第279・282・295・304・320・321・323・333号土壙
ＰＬ　35　第342・346・353・357・358・384・386・387号土壙
ＰＬ　36　第388・393・401・407・409・413・415・422号土壙
ＰＬ　37　第１～８号溝
ＰＬ　38　第９～11号溝
第１号地下式壙・古銭出土状況
ＰＬ　39　第１号地下式壙灯明皿出土状況
第２・３・５号地下式壙
第４号地下式壙工具痕

第１号埋甕遺構
ＰＬ　40　第２～５号埋甕遺構
第１・２号粘土貼り遺構
ＰＬ　41　作業風景・現地説明会
ＰＬ　42　全景
6　区　出　土　遺　物
ＰＬ　43　住居跡・土壙出土土器(1)
ＰＬ　44　住居跡・土壙・埋甕遺構出土土器(2)
ＰＬ　45　住居跡・土壙出土土器(3)
ＰＬ　46　住居跡・土壙・溝・埋甕遺構・グリッド出土土器(4)
ＰＬ　47　住居跡・土壙・溝・埋甕遺構出土土器(5)
ＰＬ　48　住居跡出土土器(6)
ＰＬ　49　把手(1)
ＰＬ　50　把手(2)
ＰＬ　51　把手(3)
ＰＬ　52　土器片錘(1)
ＰＬ　53　土器片錘(2)
ＰＬ　54　土器片錘(3)
ＰＬ　55　土器片錘(4)
ＰＬ　56　土器片錘(5)
ＰＬ　57　土器片錘(6)
ＰＬ　58　土器片錘(7)
ＰＬ　59　土器片錘(8)
ＰＬ　60　土器片錘(9)
ＰＬ　61　土製円板(10)
ＰＬ　62　土製円板・有孔円板(11)
ＰＬ　63　有孔円板・土製品(12)
ＰＬ　64　土製品(13)
ＰＬ　65　石器(1)
ＰＬ　66　石器(2)
ＰＬ　67　石器(3)
ＰＬ　68　石器(4)
ＰＬ　69　石器(5)
ＰＬ　70　石器(6)
ＰＬ　71　石器(7)
ＰＬ　72　石器(8)
ＰＬ　73　石器(9)
ＰＬ　74　石器(10)
ＰＬ　75　住居跡出土貝(1)
ＰＬ　76　住居跡出土貝(2)・貝刃
ＰＬ　77　古銭
7　区　出　土　遺　物
ＰＬ　78　第１号埋甕遺構出土土器(1)
ＰＬ　79　住居跡・土壙出土土器(2)
ＰＬ　80　住居跡・土壙・埋甕遺構出土土器(3)
ＰＬ　81　住居跡・土壙・埋甕遺構出土土器(4)
ＰＬ　82　住居跡・土壙・地下式壙・グリッド出土土器(5)
ＰＬ　83　土器片錘(1)
ＰＬ　84　土器片錘(2)
ＰＬ　85　土器片錘(3)
ＰＬ　86　土器片錘(4)
ＰＬ　87　土器片錘(5)
ＰＬ　88　土器片錘(6)
ＰＬ　89　土器片錘・土製円板(7)
ＰＬ　90　有孔円板・土製品(8)
ＰＬ　91　石器(1)
ＰＬ　92　石器(2)
ＰＬ　93　石器(3)
ＰＬ　94　石器(4)
ＰＬ　95　石器(5)
ＰＬ　96　第１号地下式壙出土古銭(1)
ＰＬ　97　第１号地下式壙出土古銭(2)
ＰＬ　98　第１号地下式壙出土古銭(3)
ＰＬ　99　第１号地下式壙出土古銭(4)
ＰＬ　100　第１・４号地下式壙出土古銭(5)

第１章　調査経緯

第１節　調査に至る経過

龍ヶ崎ニュータウン建設計画は，昭和46年１月に「龍ヶ崎・牛久都市計画事業」として市街地開発事業に関する都市計画として策定された。事業名を「北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整理事業」と称し，当初，日本住宅公団が計画した。その後，昭和51年４月宅地開発公団茨城開発局の設立により，上記事業を引き継ぎ実施することになった。ニュータウンの収容人口は75,000人が予定されているが，既に，昭和56・57年に工事を完了した北竜台地区の松葉地域には，新居住者約2,000人が入居している。なお，宅地開発公団は，日本住宅公団と昭和56年10月１日に統合し，新たに「住宅・都市整備公団」として発足した。この統合に伴い，従来の契約によって生じた権利・義務はそのまま住宅・都市整備公団に受け継がれ，現在に至っている。

土地区画整理事業の施行地区は，北竜台では小柴新田町，柏田町の全域と若柴町，稲荷新田町，馴馬町，馴柴町，南中島町，別所町の一部で326.6ha，龍ヶ岡で貝原塚町，羽原町，八代町，長峰町の各一部で344.9haの計671.5haである。開発前の現況は，北竜台においては山林原野が約70％，畑及び水田等の耕地が約24％を占め，龍ヶ岡においては山林原野が50％，畑及び水田等の耕地が約40％以上を占めていた。

茨城県教育委員会は，龍ヶ崎市教育委員会と昭和45年に開発地域内の埋蔵文化財の分布調査を実施し，22遺跡について文化財保護の立場から必要な措置を講ずるため協議を重ねた。その後，昭和51年７月に再度分布調査を実施して，新たに７遺跡を追加し，さらに，昭和57年までに５遺跡を追加した。昭和56年５月には，この分布調査の結果に基づいて，茨城県教育委員会は龍ヶ崎市教育委員会，宅地開発公団と北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整理事業地内の埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて再度協議を行い，35遺跡（北竜台18遺跡，龍ヶ岡17遺跡）のうち31遺跡については，現状保存が困難なため記録保存の措置を講ずることになった。

茨城県教育財団は，当時の宅地開発公団と「北竜台及び龍ヶ岡土地区画整理事業の施行に係る埋蔵文化財発掘調査」の業務委託契約を締結し，調査第二班を配置して，昭和52年４月，北竜台の松葉遺跡，龍ヶ岡の外八代遺跡から順に調査を実施してきた。その後も発掘調査を継続して実施し，昭和57年度は龍ヶ岡の町田遺跡，南三島遺跡２区・６区，昭和58年度は，龍ヶ岡の屋代Ｂ遺跡と南三島遺跡６・７区の発掘調査を実施した。

第２節　調査方法

１　地区設定

南三島遺跡の地区設定は，昭和56年１区の地区設定の際，１区から７区まで遺跡全体を包括する大調査区を設定した。日本平面直角座標系第Ⅸ座標内のＸ軸（南北）－8,540ｍ，Ｙ軸(東西)＋33,500ｍの交点を１区東端に設定し，これを基準としてＸ軸は南北へ40ｍずつ，Ｙ軸は西へ40ｍずつ平行移動して，南北16個，東西10個の計160個の大調査区を設定した。名称は北から南へ「Ａ」・「Ｂ」・「Ｃ」……「Ｏ」・「Ｐ」，西から東へ「１」・「２」・「３」……「９」・「０」とし，Ａ１区，Ｂ２区等のように呼称した。この地区設定によって，Ｃ２区からＰ８区，Ｋ10区の範囲に南三島遺跡のすべてを包括した。（第１図）

また，大調査区内を４ｍ四方の小調査区（グリッドと呼称）に分割した。すなわち，大調査区内に100のグリッドを設定した。グリッドの名称は北から南へ小文字で「ａ」・「ｂ」……「ｉ」・「ｊ」，西から東へ「１」・「２」……「９」・「０」とし「$E3a_1$」・「$E3c_0$」・「$G5h_7$」のように呼称した。（第２図）

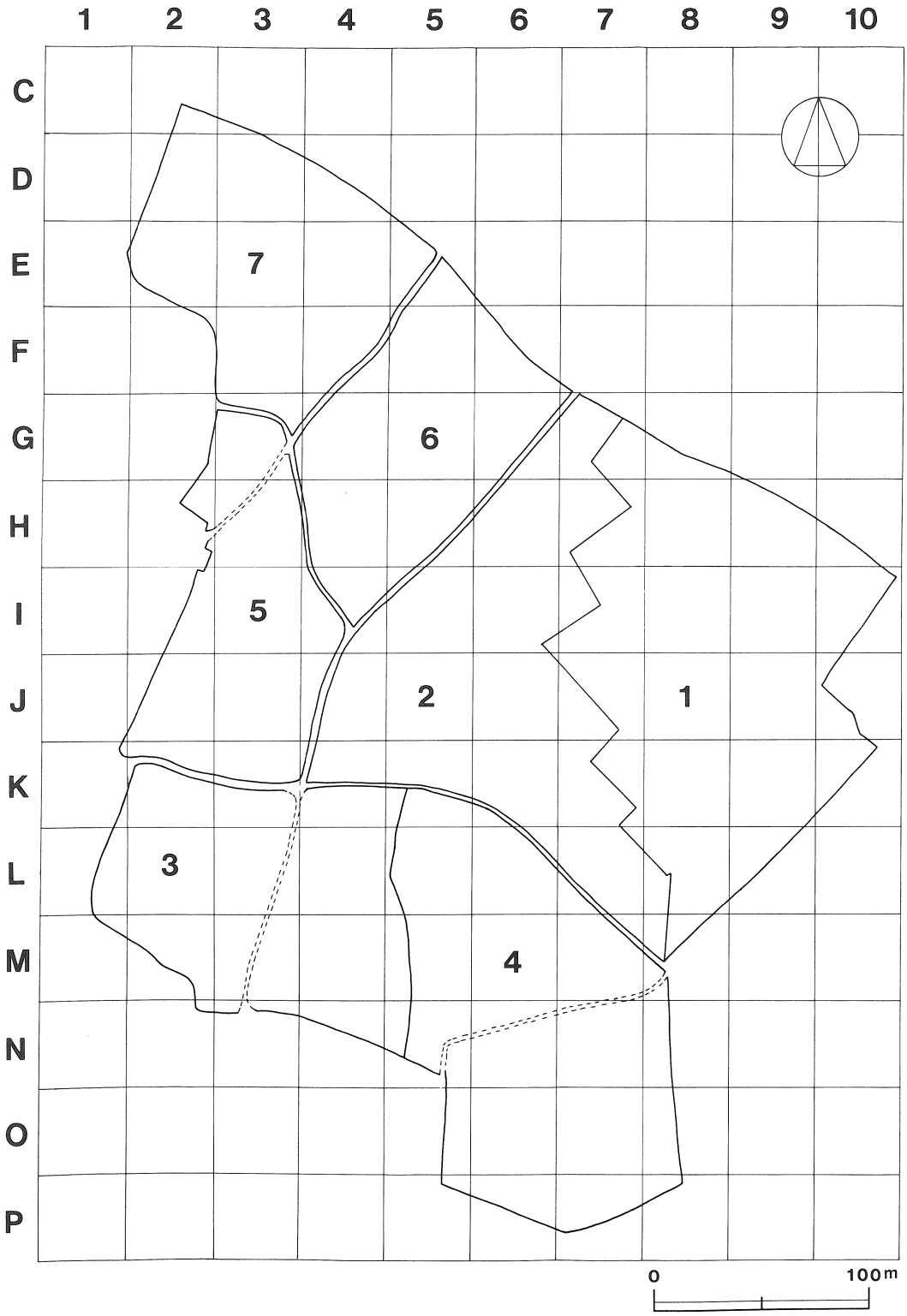
２　基本層序の検討

当遺跡の基本的層序は，１層が表土層で26cmほどの厚さを有し，耕作土層となっている。２層は極暗褐色土層で，ローム層への漸移層と考えられる。３～９層はローム層で，2.6ｍほどの厚さを有している。ローム層は，色調や含有物の相違及び粘性などから細分した。当遺跡における遺構の掘り込みは，ほとんどが６層までである。９層は粘土粒子が多く混入しており，ローム層から粘土層への漸移層と考えられる。また，一部に鉄分を含み，酸化した部分がみられる。10層は粘土層で，一部緑化した部分がみられる。（第４図）

３　遺構確認

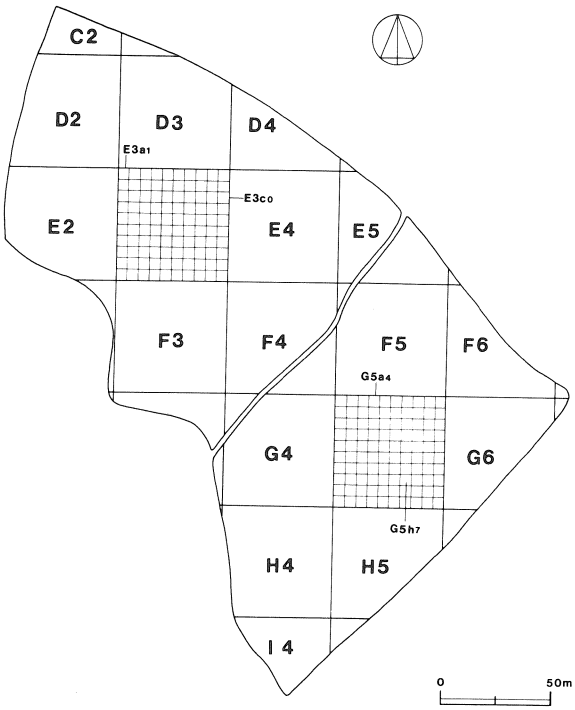
当遺跡６区は，トレンチによる試掘調査の結果，全域に遺構が確認され，表土も30～40cmあるため，重機によって全面遺構確認面まで表土除去を行った。その後遺構確認を行ったところ，２・５区の隣接地域に遺構が濃密に確認できた。７区に近い地域は耕作による溝状の攪乱が数条残っており，確認作業に困難をきたした。

７区も６区と同様の手順で重機によって表土除去を行ったが，残土が厚く堆積しており遺構確認が出来ないため，トレンチを80ｍ間隔で４本井桁(いげた)状に入れた。その結果，遺構の確認面までに表土と漸移層が５～20cmの厚さで残っていることが判明したので，残土の除去を手掘りで行うこ



第１図　南三島遺跡１～７区配置図・大調査区名称図

とにした。また，７区は立木の根が多数残っていたので，抜根作業の後，遺構確認を行った。７区からは，２・６区ほど遺構は確認されず，比較的少数の遺構を認めるにとどまった。



第２図　南三島遺跡６・７区大調査区・小調査区名称図

４　遺構調査

竪穴住居跡については，土層観察用ベルトを長径方向とそれに直交する方向に設けて，十字に残す四分割法で調査を行い，住居跡内の地区割は北から時計回りに１～４区とした。遺構が重複している場合は，切り合いが把握できるようにベルトを追加して設定した。

土壙については，長径で二分する二分割法で実施したが，大形のものは竪穴住居跡の調査法に準じて四分割法で調査した。

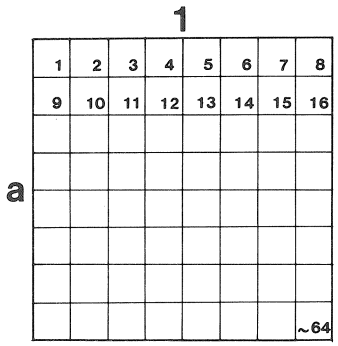
溝は５～20ｍ間隔に土層観察用ベルトを残して掘り込みを実施した。

土層観察は色相・含有物の種類や量及び粘性，締まり具合を観察し，分類の基準とした。色相の判定は『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著，日本色研事業株式会社）を使用して行った。

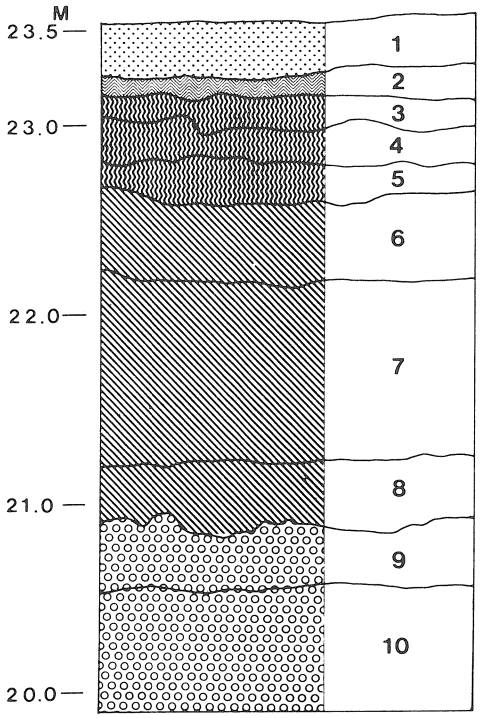
遺構や遺物の平面実測は，水糸方眼地張り測量で行った。土層断面や遺構断面の実測図は，水糸を海抜高に合わせ，水糸を基準線として作成した。縮尺は二十分の一を基本とし，炉等は十分の一の縮尺で実測した。

遺物出土状況の実測は，原位置を保って記録し，遺物の取り上げはレベルも記入した。

記録の過程は，土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順を基本とした。図面や写真等に記録できない事項に関しては，調査日誌，遺構カード等に記録した。



第3図　小区画名称図



土層解説

1	Hue	7.5YR	2/2	黒褐色　表土層（耕作土）
2	Hue	7.5YR	2/3	極暗褐色　表土からローム層への漸移層
3	Hue	7.5YR	4/6	褐色　ローム
4	Hue	10 YR	4/6	褐色　ローム（ロームブロック含む）
5	Hue	10 YR	5/6	黄褐色　ローム（ロームブロック含む）
6	Hue	10 YR	5/6	黄褐色　ハードローム
7	Hue	7.5YR	4/4	褐色　ハードローム
8	Hue	10 YR	5/6	黄褐色　やや粘性をおび，スコリアを含む。
9	Hue	2.5YR	4/4	にぶい赤褐色　やや粘性をおび，スコリアを含む。部分的に酸化している。
10	Hue	10 YR	5/4	にぶい黄褐色　きわめて粘性強く，スコリアを含む。

第4図　南三島遺跡土層柱状図

第３節　調査経過

南三島遺跡６区の調査対象面積は，10,451㎡で，昭和57年12月１日に発掘調査を開始し，昭和58年10月20日に終了した。７区は調査対象面積が，11,312㎡で，昭和58年７月11日から発掘調査を開始し，昭和59年３月23日に終了した。以下，６・７区ごとに簡単に経過を記述する。

６区の経過

昭和57年度

12　月　　上旬に遺構確認，調査区の分割，基準杭打ちなどを行った。８日から溝の調査を開始した。15日から土壙の掘り込み，下旬からは住居跡の掘り込みも始めた。24日まで調査を進め，年末年始の休暇に入った。なお，16日には日本考古学研究所の小川和博氏を招き，「土壙の性格について」の班内研修会を開いた。

１　月　　７日から調査を再開，住居跡，土壙，溝と調査を進めた。中旬に溝の調査を終了させた。11日から住居跡の10号台の調査を進め，24日には２区の航空写真撮影を実施した。

２　月　　１日から20号台の住居跡を掘り込み，３日から土壙も100号台の調査に入った。144号土壙からは完形の石皿２点が出土した。５日には２区の現地説明会を行った。中旬に30号台の住居跡の掘り込み，20号台の実測を進めた。下旬に100号台の土壙の実測，30号台の住居跡の実測を行った。

３　月　　上旬に200～205号土壙を調査，中旬に15号住居跡の調査を終了して，16日から25日まで，写真整理・出土遺物の整理をし，57年度の調査を完了した。

昭和58年度

４　月　　新体制で，18日から調査を開始した。遺構確認を行い，住居跡は41号，土壙は206号から調査を始めた。41号住居跡から石棒が２点出土した。

５　月　　上旬，48号住居跡から大量の遺物が出土した。中・下旬にかけて200号台の土壙，40号台の住居跡の実測を行った。30日には50号台の住居跡の掘り込みを始めた。

６　月　　上旬に300号台の土壙の掘り込みを開始し，６日からは溝の掘り込みも始めた。下旬に300号台の土壙，50号台の住居跡の実測に入った。

７　月　　上旬に60号台の住居跡の掘り込みを開始した。この時点で57号住居跡を中心に住居跡が６～10軒程度重複していることが判明した。少人数で慎重に掘り進めていった。中旬，溝（10～15号）の調査を終了した。

８　月　　９日に70号台の住居跡の掘り込みに入った。中旬，60号台の住居跡の実測を行った。下旬の27日，夕刻から雷雨があり，夜半突風が遺跡一帯を通り抜けた。このため現場倉

庫・小屋などが倒壊し，翌28日に後始末を行った。

9　月　初旬に400号台の土壙の掘り込み，中旬に80号台の住居跡の掘り込みを行った。また，70号台の住居跡の実測に入った。

10　月　18日に85号住居跡，423号土壙の実測を終了させ，６区の調査を完了した。

７区の経過

昭和58年度

7　月　上旬から６区の調査と並行してグリッド発掘を始めた。溝２条を確認した。

8　月　上旬に基準杭打ちと溝１・２号の掘り込みを開始し，グリッド発掘も続けた。中旬に溝１・２号の実測を行った。下旬には県立龍ヶ崎二高の体験学習を８号住居跡を利用して実施させた。溝１・２号は調査を終了した。30日には８号住居跡も調査を終了した。

9　月　８月に引き続いてグリッド発掘を行った。住居跡７軒，溝１条を確認した。９号住居跡は溝１・２号の下層に確認された。

10　月　残っているグリッド発掘を行い，中旬に終了させた。住居跡３軒を確認し，住居跡は全部で37軒になった。中旬に草刈りを行い，溝３・４号の掘り込みを始めた。下旬には溝７・８号の掘り込みと，溝３・４号の実測を行った。

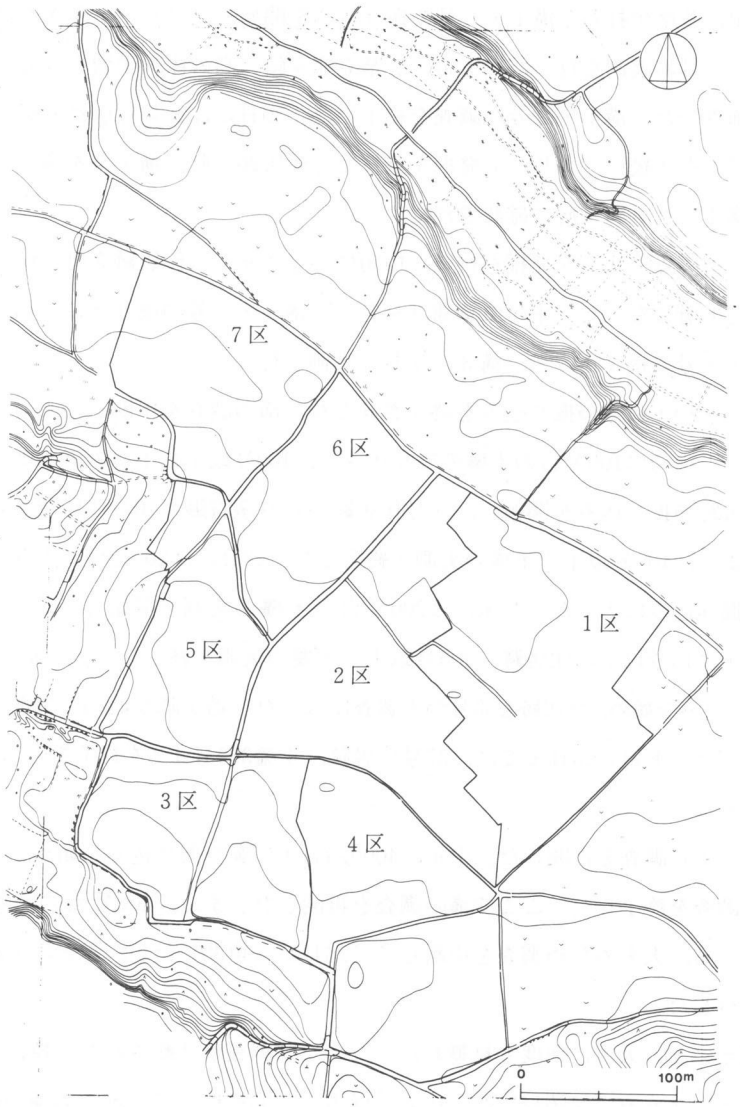
11　月　溝９・10・11号の掘り込みを終了させた後，溝の調査を中断して土壙の掘り込みを先行した。中旬に100号台の土壙の掘り込みと，100号以下の土壙の実測に入った。14日から住居跡の掘り込みを開始し，５号住居跡から有茎石鏃，10号住居跡から伏甕（ふせがめ）が出土した。また，100号以下の土壙の実測が終了した。22日には200号台の土壙，20号台の住居跡の掘り込みに入った。月末には200号台の土壙の実測を開始した。

12　月　上旬に10号以下の住居跡，200号以下の土壙の実測を終了した。中旬に300号台の土壙の掘り込みを始め，住居跡も30号台の調査に入った。霜が降り始め，午前の調査に困難をきたした。下旬の23日までに，27号住居跡，土壙359号までを終了させて，年末年始の休暇に入った。

1　月　９日から調査を再開した。中旬，400号台の土壙の掘り込みを始め，20号以下の住居跡の調査を終了した。ここで溝の調査を再開した。また，400号台の土壙の実測も行った。下旬，大雪のため調査を中断して，26日から再開したが，雪どけのぬかるみで調査は難行した。

2　月　例年にない大雪に何度も見舞われ，たびたび調査が寸断された。特に，午前の凍土と午後のぬかるみには閉口した。中旬，降雪の合間をぬって，地下式壙の掘り込みを行った。地下式壙からは多数の古銭が出土した。下旬には地下式壙の実測に入った。

3　月　上旬に，降雪のため中断していた溝の実測を行った。5日までに地下式壙4基の調査を終了した。6日に残った1基の掘り込みを行った。8日，協力員への報告会を開き，現地説明会の準備にとりかかった。10日，現地説明会（6・7区）を実施し，約40名の出席者があった。中旬，最後の26号住居跡の調査を終了させ，土壙の掘り込みを終了した。15日までには，7号溝の実測，469・473号土壙の実測を終了させ，すべての遺構調査が完了した。午後から，航空写真撮影のための準備を行った。19日に，全景写真撮影，22日に，航空写真撮影を行い，後日の危険性を考え，地下式壙を埋め戻した。23日には用具等の整備を行い現場を閉鎖した。



第5図　南三島遺跡1～7区地形図

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

南三島遺跡６・７区は，茨城県龍ヶ崎市羽原町字南大藤1504－１ほかに所在する。

龍ヶ崎市は茨城県の南部に位置し，東西12km，南北９km，面積約75km²である。東方は新利根村，西方は藤代町，そして南方は利根町，河内村に接し，市域の北方は，牛久町に接している。また，市域は北部の筑波・稲敷台地と，南部の鬼怒川・小貝川低地から成り立っている。筑波・稲敷台地は，北西の真壁台地から連なり，桜川低地と小貝川低地に挟まれながら南東方に延び，東は霞ヶ浦，南は利根川下流低地に至っている。標高は南東部が26～29ｍで，北西部はそれよりやや低い比較的平坦な台地である。また，北西－北東方向の小野川の支谷によって複雑に浸食を受けている。(1)

鬼怒川・小貝川は栃木県から流下し，鬼怒川は守谷町で，小貝川は利根町で，それぞれ利根川に合流する支流で，この３本の河川によって茨城県南部一帯に沖積地を形成している。この沖積地は幅10kmにも及ぶ広大な低地で，県内有数の穀倉地帯をなしている。中程には標高21ｍの奥山台地がほぼ独立した形で存在し，北西の猿島・北相馬台地の先端となっている。また，鬼怒川・小貝川低地に向かい合って，利根川を挟んで千葉県木下（きおろし）台地が存在する。

地質は海成の成田層，河成の成田砂礫層を基盤とし，その上に厚さ１ｍほどの常総粘土層が重なり，更にその上に厚さ２～３ｍほどの関東ローム層が堆積している。低地谷津部には軟弱な粘土および，腐植土の堆積がみられる。

また，茨城県を北上する常磐線の佐貫駅から東へ関東鉄道龍ヶ崎線が延び，その終点龍ヶ崎駅から東方へ市街地の中心が広がっている。現在の人口は約４万8000人であるが，ニュータウン建設後の収容人口７万5000人を合わせて10数万人の人口を有する都市に変わろうとしている。

南三島遺跡はこの筑波・稲敷台地の南端部に位置し，龍ヶ崎市街地から2.5km北方に離れた羽原町の台地に所在する。この台地は，龍ヶ崎ニュータウン建設用地である龍ヶ岡地区の一部で，遺跡の位置する台地北側は，八代町から貝原塚町に樹枝状に入り込んだ支谷が形成され，縁辺部は比高差12.5ｍの沖積低地へと急斜面で落ちている。南側縁辺部も，龍ヶ崎市街地を含む沖積低地へと急傾斜を示している。調査対象面積は６区が10,451m²，７区が11,312m²あり，現況は６区が畑，７区は畑・山林で，両区とも農道で周囲が区画されている。

第2節　歴史的環境

稲敷台地の縁辺部には，日本人による最初の学術的な貝塚発掘として知られる陸平貝塚[(2)]（美浦村）をはじめ，縄文時代前期の興津貝塚（美浦村），後期の椎塚貝塚（江戸崎町），後・晩期の広畑貝塚（桜川村），弥生時代の殿内遺跡（桜川村），古墳時代の愛宕山古墳（龍ヶ崎市），中世の馴馬城跡（県指定史跡，龍ヶ崎市）などが所在し，遺跡が濃密に分布する地域である。また，龍ヶ崎市の北部台地上に所在する南三島遺跡の周辺も，龍ヶ崎ニュータウン建設に伴い，当教育財団が発掘調査を実施した遺跡だけに限っても，一定の地域内での遺跡の時代的変遷を追うことが可能となっている。

当財団が調査した遺跡で最も古いものは，北竜台地区中央部北側の沖餅遺跡[(3)]があげられ，先土器時代終末期に属する舟底形石器や削器などが出土している。さらに沖餅遺跡と同一台地上の松葉遺跡[(4)]や赤松遺跡[(5)]からも先土器時代の遺物とみられる石器が発見されている。

縄文時代にはいると，北竜台の別所集落の西方にある廻り地Ｂ遺跡[(6)]からは，早・前期の住居跡，炉穴や礫群を検出し，土器片，石器類を出土している。前期では龍ヶ岡の貝原塚集落北方の町田遺跡[(7)]の集落跡が上げられ，前・中期の遺跡としては，前述の赤松遺跡があり，ほぼ環状に分布する住居跡群と袋状土壙群が検出されている。中期になると，小集落を検出した打越Ａ遺跡[(6)]や打越Ｃ遺跡[(6)]が別所集落の西側谷津を隔てた舌状台地上に存在する。また，北竜台南東端部に位置する仲根台Ｂ遺跡[(7)]からも後期前半の遺構・遺物が検出されている。さらに，北竜台の馴馬集落の北西台地上にある廻り地Ａ遺跡[(8)]は中期末から後期前半の時期にかけての大集落で，地点貝塚や多くの土壙群を伴っている。しかし，龍ヶ崎市内では今のところ，晩期の遺構を伴う遺跡は調査されていない。

弥生時代では，龍ヶ岡の南部，幅400～500ｍの広い屋代台地上に，外八代遺跡[(9)]，屋代Ａ遺跡[(10)]が所在し，弥生時代後期の遺構が検出されている。

古墳時代になると，北竜台のほぼ中央に位置する大羽谷津遺跡[(6)]があり，古墳時代前期の遺構を検出している。馴馬台地の西方の小舌状台地の縁辺近くには成沢遺跡[(10)]があり，低湿地に面して集落が形成されていた。また，前述の松葉遺跡・沖餅遺跡も古墳時代前期の集落跡であった。中期には，馴馬台地のほぼ中央部に平台遺跡[(11)]がある。その他，屋代Ａ遺跡では古墳時代全時期を通じた住居跡と歴史時代（国分期）の住居跡が検出され，外八代遺跡では古墳時代前・後期と歴史時代（国分期）の住居跡が検出されている。

中世には，貝原塚集落南方の前清水遺跡[(6)]があり，地下式壙を含む土壙群が検出されている。また，前述の外八代遺跡からは，堀・掘立柱建物跡・柵列などのほか地下式壙が検出されている。

龍ヶ崎市の北部台地には，このように多くの遺跡が存在し，原始・古代から各時代にわたって

人々の生活が営まれていたことがうかがえる。

文　献

(1)　日本地誌研究所　「日本地誌　第５巻」　関東地方総論　茨城県　栃木県　昭和50年

(2)　茨城県　「茨城県史料　考古資料編」　先土器・縄文時代　昭和54年

(3)　茨城県教育財団「沖餅遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告３』　昭和55年

(4)　茨城県教育財団「松葉遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告Ⅰ』　昭和54年

(5)　茨城県教育財団「赤松遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告Ⅳ』　昭和55年

(6)　茨城県教育財団「前清水・大羽谷津・打越Ａ・打越Ｃ・廻り地Ｂ遺跡・仲根台塚群」『茨城県教育財団文化財調査報告Ⅶ』　昭和56年

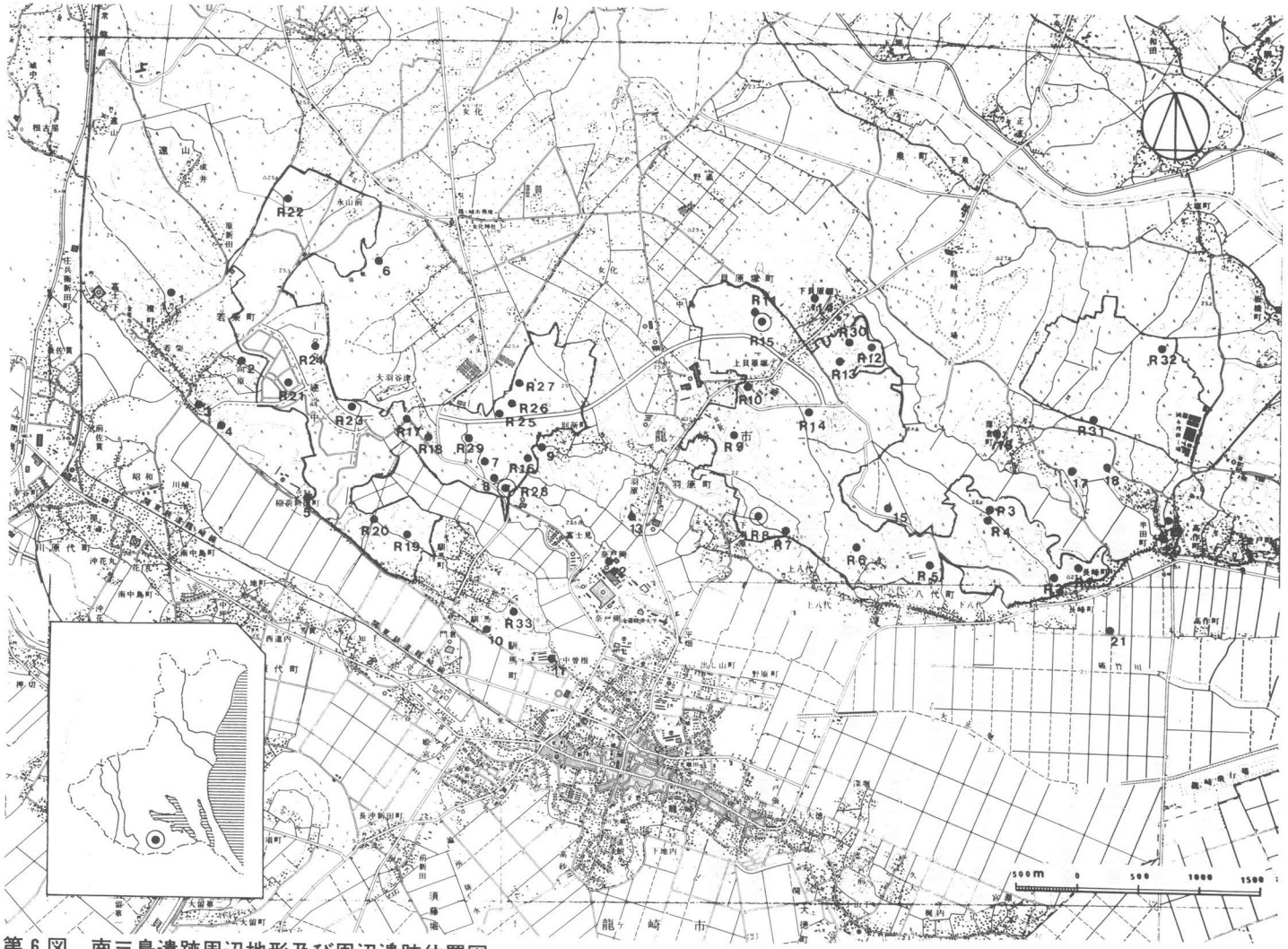
(7)　茨城県教育財団「仲根台Ｂ・町田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告25』　昭和59年

(8)　茨城県教育財団「廻り地Ａ遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告Ⅻ』　昭和57年

(9)　茨城県教育財団「外八代遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告Ⅱ』　昭和55年

(10)　茨城県教育財団「成沢・屋代Ａ遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告ⅩⅣ』　昭和57年

(11)　茨城県教育財団「平台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告19』　昭和58年



第６図　南三島遺跡周辺地形及び周辺遺跡位置図

表1　南三島遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	遺跡の時代				
			先土器	縄文	弥生	古墳	その他
R1	長峰城跡	城館跡					○
R2	長峰古墳群	古墳群				○	
R3	十三塚塚群	塚群				●	●
R4	尾坪台遺跡	集落跡		●		●	
R5	外八代遺跡	集落跡・城館跡			●	●	●
R6－A	屋代A遺跡	城館跡・集落跡			●	●	●
R6－B	屋代B遺跡	城館跡・集落跡		●	●	●	●
R7	稲荷塚古墳群	古墳群				○	
R8	南三島遺跡	集落跡		●	●	●	●
R9	ダンゴ塚	塚					○
R10	町田塚群	塚群					●
R11	かがみ塚	塚					○
R12	高井城下城跡	城館跡・寺院跡					○
R13	前清水遺跡	集落跡・貝塚・塚群				●	●
R14	塚下遺跡	塚群他					●
R15	町田遺跡	集落跡		●			●
R16	行部内遺跡	集落跡・貝塚		○			
R17	大羽谷津遺跡	集落跡				●	
R18	廻り地A遺跡	集落跡		●		●	
R19	平台遺跡	集落跡				●	
R20	成沢遺跡	集落跡				●	
R21	松葉遺跡	集落跡・塚群	●			●	●
R22	庚申塚遺跡	集落跡		○		○	
R23	沖餅遺跡	集落跡	●	●		●	
R24	赤松遺跡	集落跡	●	●		●	●
R25	打越A遺跡	集落跡		●			
R26	打越C遺跡	集落跡		●			
R27	ウツブタ遺跡	集落跡		●			
R28	仲根台塚群	塚群(1～2号)		●			●
R28－A	仲根台塚群	塚群(3・4号)					●
R28－B	仲根台B遺跡	集落跡		●		●	●
R29	廻り地B遺跡	集落跡		●			
R30	白蔵寺遺跡	包蔵地					
R31	薄倉古墳	塚					●
R32	稲荷峰古墳	塚					●
R33	山王台遺跡	集落跡				●	●
1	金塚遺跡	集落跡	○	○		○	
2	林遺跡	集落跡				○	
3	若柴城跡	城館跡					○
4	宿畑遺跡	集落跡				○	
5	稲荷古墳	古墳				○	
6	永山前遺跡	集落跡		○			
7	仲根台遺跡	集落跡・古墳		○		○	
8	奈戸岡古墳群	古墳群				○	
9	堂ノ下貝塚	貝塚群		○			
10	馴馬城跡	城館跡					○
11	愛宕山古墳	古墳				○	
12	奈戸岡祭祀遺跡	祭祀跡				○	
13	西花輪貝塚群	貝塚群		○			
14	貝原塚城跡	城館跡					○
15	向井原遺跡群	集落跡	○	○		○	
16	西平遺跡	集落跡		○			
17	馬込稲荷遺跡	集落跡		○			
18	要害山館跡	城館跡					○
19	半田遺跡	集落跡				○	
20	登城山館跡	城館跡					○
21	向須賀遺跡	包蔵地		○	○		

●印は発掘調査を実施した遺跡

第３章　南三島遺跡６区

第１節　遺跡の概要と遺構と遺物の記載方法

１　遺跡の概要

(1)　遺構の概要

南三島遺跡６区は，大規模な南三島遺跡を１区～７区に分けた集落跡の一部である。調査の結果，縄文時代の住居跡，埋甕遺構，炉穴，縄文時代を中心とした土壙，時期不明の溝等を検出した。

住居跡は縄文時代中・後期の遺構で，数は84軒である。調査区全域から検出されているが，遺跡東部のG5区，G6区は比較的数が少ない。また，遺跡南部のH4･H5･I4区には，住居跡が10～13軒切り合っていて，重複が著しい。住居跡84軒の中で，炉を有しているものは43軒，炉をもたないものは37軒，炉を有していたが，土壙等で削られたと考えられるものが４軒である。

埋甕遺構は６基で，遺跡南西部のG4区から２基，H4区から４基検出されている。そのうち住居跡内から検出されたものが４基，土壙内から検出されたものが１基，単独で検出されたものが１基である。

炉穴は５基で，遺跡の北東部・南東部の２区に隣接する位置から検出されている。また，炉穴とは断定できないが炉穴状のものが10基ほど検出されている。

土壙は422基で，調査区の全域から検出されている。形状で多いものは，楕円形（不整楕円形を含め196基），次いで円形（不整円形を含め115基）である。大きさでは，長径が１ｍ以上２ｍ以下の規模のものが226基である。

溝は，14条で，遺跡の北部・中央部・北西部・南部から検出されている。２区の溝とつながるものが２条，７区の溝とつながるものが３条含まれている。

(2)　遺物の概要

南三島遺跡６区から出土した遺物は，人工遺物と自然遺物に大別され，その大半が人工遺物の土器である。

人工遺物の出土量は，収納ケース（60.0×40.0×15.0cm，60.0×40.0×20.0cm）で114箱であり，土器，土製品，石器などである。

自然遺物は，収納ケースで24箱であり，貝類が大半を占めている。他に馬骨の出土もみられたが遺存状態が悪い。

人工遺物のうち，主体をなす土器については，縄文時代の草創期[(1)]から晩期にかけての資料が出

土しているが，量的に多いのは，住居跡や土壙などの遺構を伴う中期後半の土器である。これまでに判明した土器型式を列挙すれば，次のとおりである。稲荷台式土器，野島式土器，黒浜式土器，浮島式土器，興津式土器，阿玉台式土器，加曽利ＥⅢ式・Ⅳ式土器，称名寺式土器，堀之内式土器，加曽利Ｂ式土器，安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲａ式土器，前浦式土器である。これらのうち，遺構を伴うものは，炉穴などが検出されている野島式期，土壙が調査されている阿玉台式期，住居跡・土壙が多数調査されている加曽利ＥⅢ・Ⅳ式期，および住居跡が検出されている称名寺式期である。この他にも，加曽利Ｂ式期の遺構と推定されるものもあるが，明確ではない。野島式土器については，施文手法などからその編年的位置づけをおこなうことが可能である。加曽利ＥⅢ・Ⅳ式土器は多量に出土し，器形・施文手法などを基に各式とも数種に細分される。これらについては後記する。また，称名寺式土器といわれるものに関しても，器形・施文手法・胎土および出土状況などから細分することが可能である。その他の土器は，極少量の出土である。

加曽利ＥⅢ式期の第48号住居跡から出土した土器の量は，収納ケース16箱にも及んでおり，あたかも土器捨て場のような状況を呈していた。第42・55号住居跡からも大量の土器が出土している。

中期縄文土器の器種としては，深鉢形・鉢形土器が主体を占めているが，特殊なものとして，有孔鍔付土器・壺形土器・器台形土器および台付土器などが出土している。有孔鍔付土器は数も少なく破片であるが，いずれも鍔に孔を穿（うが）っている。器台形土器も破片が多いが，半完形のものが第46号住居跡から出土し，これには粒の大きな縄文が付されている。台付土器は，深鉢形・鉢形土器の底部に台部が取り付けられたもので，縄文中期中葉から後半にかけてやや目立つようになり，後・晩期の台付土器へと変遷するものと考えられる。当遺跡では破片だけであったが，かなりの量が出土しており注目される。これらの有孔鍔付土器・器台形土器・台付土器については別に記している。また，第47号住居跡から出土した小把手付の浅鉢状の土器は，珍しいものである。鳥頭形ないしは蛇頭状把手と称されているものも若干出土している。

土製品としては，土器片錘・土製円板・有孔円板および耳栓・土製垂飾・管状土製品・棒状土製品・塊状土製品などが出土している。土器片錘は全体で540点出土しているが，特異な出土状況を示してはいない。土製円板・有孔円板に関しても同様である。前者は74点，後者は56点である。耳栓は第55号住居跡から断片１点が出土している。土製垂飾と明瞭に判るものは，第70号住居跡から出土した１点だけである。他に第49・59号住居跡から，管状土錘状の穿孔品が計３点出土している。これらの用途は不明であるが，垂飾品と考えるには整形の悪いもの（第49号住居跡出土の２点）と整形の良好なもの（第59号住居跡出土の１点）がある。棒状土製品は，第55・63号住居跡および第344号土壙から各１点ずつ出土しているが，使途は判明しない。塊状土製品としたものは，粘土塊が焼成を受けたものであるが，中には網代様の圧痕をもつ資料も含まれている。これ

らはいくつかの住居跡や土壙から出土している。

石器のうち，定形石器としては石鏃・石錐・尖頭石器・掻器・磨製石斧・打製石斧・礫器・磨石・石皿・凹石・敲石・浮子・砥石・石棒などが出土しており，他に石核や剥片類もみられる。剥片は不定形をなすが，使用痕の観察できるものもある。石器の中では，磨石42点，石鏃14点，磨製石斧９点などが量的に目立つ方であるが，全体として，数量は多いとはいえない。これは利根川下流域に所在する各遺跡にほぼ共通する事柄といえよう。石器の出土状況としては，完形の石皿２点が第144号土壙から出土したことは，類例が少なく注目される。また，石棒は第41号住居跡の覆土中から横転して出土している。

自然遺物としては，住居跡・土壙内から投棄されたような状態で出土した貝類が収納ケースで10箱ほどある。第15・25・49号住居跡および第149・194・392号土壙から貝類が出土しているが，最も多量に出土したのは第25号住居跡である。主体貝種は，シオフキとハマグリで，斧足綱11種，腹足綱６種および陸産の腹足綱３種の合計20種が同定されたが，陸産貝種は縄文時代のものとは断定できない。

註(1)　草創期の区分と内容については，故山内清男博士の説に従う。

2　遺構と遺物の記載方法

(1)　遺構の記載方法

本書における遺構の記載方法は，下記の要領で統一して記載した。

(1)使用記号

住居跡――SI　　土壙――SK　　溝――SD　　埋甕――M　　粘土貼り遺構――SX(7区)

地下式壙――SY(7区)　　ピット――P

(2)遺構の表示方法

＝炉　跡　　 ＝焼　土　　 ＝貝　層　　 ＝粘　土

(3)土層の分類

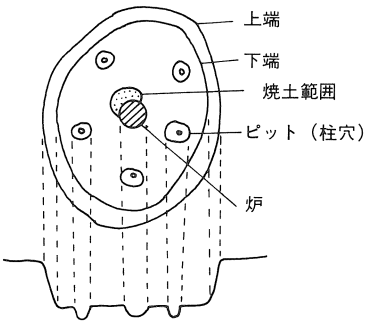
当遺跡内の土層色調は「新版標準土色帖」(小山正忠，竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社)を使用し，下記のように土色名を分類した。また，土層内含有物と量も同書によって分類し，挿図の中に記号で表示した。攪乱を受けている土層は「攪乱」とした。

番号	土色名		含有物			
				（中）	（少）	多量
1	暗褐色	7.5YR 3/3	ハードローム	a	a′	a″
2	〃	7.5YR 3/4	ソフトローム	b	b′	b″
3	〃	10YR 3/3・3/4	ハードロームブロック	c	c′	c″
4	褐色	7.5YR 4/3	ソフトロームブロック	d	d′	d″
5	〃	7.5YR 4/4	ロームブロック	e	e′	e″
6	〃	7.5YR 4/6	ローム粒子	f	f′	f″
7	〃	10YR 4/4	焼土ブロック	g	g′	g″
8	明褐色	7.5YR 5/6	焼土塊	h	h′	h″
9	〃	7.5YR 5/8	焼土	i	i′	i″
10	極暗褐色	7.5YR 2/3	焼土粒子	j	j′	j″
11	にぶい褐色	7.5YR 5/3・5/4・3/6	炭化物	k	k′	k″
12	黒色	7.5YR 2/1	炭化粒子	l	l′	l″
13	黒褐色	7.5YR 2/2・3/1・3/2	灰	m	m′	m″
		5YR 2/1・2/2	黒色土ブロック	n	n′	n″
		10YR 2/2・3/1・3/2	黒色土（粒子）	o	o′	o″
14	にぶい橙色	7.5YR 6/4	褐色土ブロック	p	p′	p″
15	橙色	7.5YR 6/6・6/8	褐色土（粒子）	q	q′	q″
16	黄橙色	7.5YR 7/8	黒褐色土ブロック	r	r′	r″
17	灰褐色	7.5YR 4/2	黒褐色土（粒子）	s	s′	s″
		5YR 4/6・4/8	暗褐色土ブロック	t	t′	t″
18	暗赤褐色	5YR 3/2・3/3・3/4・3/6	暗褐色土（粒子）	u	u′	u″
		2.5YR 3/6	粘土ブロック	v	v′	v″
19	赤褐色	5YR 4/6・4/8	粘土（粒子）	w	w′	w″
		2.5YR 4/6・4/8	砂	x	x′	x″
20	明赤褐色	5YR 5/6・5/8	貝	y	y′	y″
		2.5YR 5/8	骨（粉）	z	z′	z″
21	極暗赤褐色	5YR 2/3・2/4				
22	にぶい赤褐色	5YR 4/3・4/4・5/4				
23	にぶい黄褐色	10YR 5/4・6/4・5/3				
24	黄褐色	10YR 5/6・5/8				
25	明黄褐色	10YR 6/6				

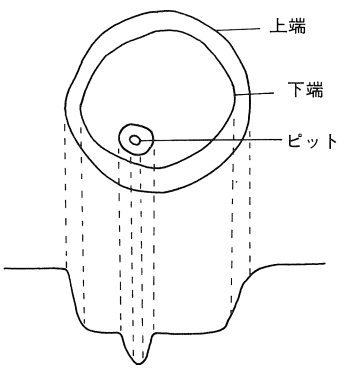
土層断面における含有物の面積割合が，およそ30%以上を多量，10%以下を少量とした。

(4)遺構実測図の作成方法と掲載方法

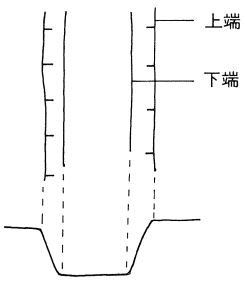
〈住居跡〉



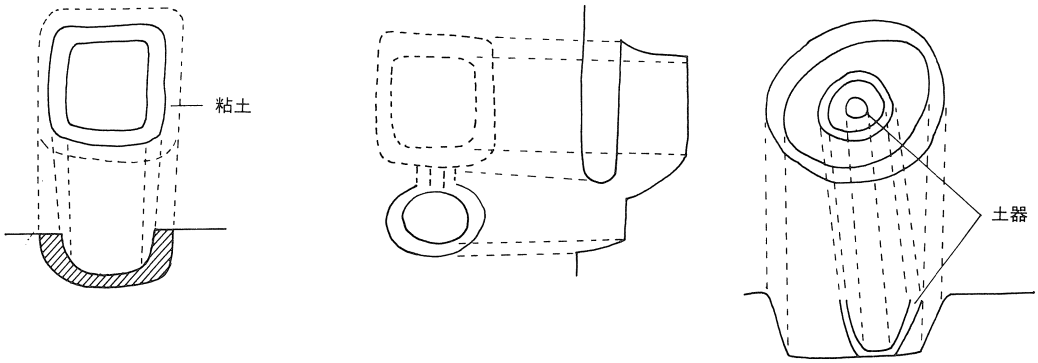
〈土壙〉



〈溝〉



〈粘土貼り遺構〉(７区)　　〈地下式壙〉(７区)　　〈埋甕遺構〉



○住居跡・土壙・地下式壙・粘土貼り遺構は，縮尺1/20の原図をトレースして版組し，それをさらに大きさに応じて1/3・1/4に縮小して掲載した。

○埋甕遺構は，縮尺1/10の原図をトレースして版組し，それを1/3に縮小して掲載した。

○溝は縮尺1/40の原図をトレースして版組し，それをさらに1/4に縮小して掲載した。さらに長いものについては，２段か３段に分けて掲載した。

○レベルの掲載は同一遺構内，同一版組内では同じレベルを使用し，一つの記載をもって表している。単位はｍである。

(5)一覧表について

〈住居跡一覧表〉

番号	位置	長径方向	平面形	規模		床面	ピット数	炉		覆土	時期	備考
				長径×短径(m)	壁高(cm)			位置	種類			

○番号は，住居跡を通し番号で付し，83を欠番とした。

○位置は，遺構が最も広い面積を占める小調査区で表示した。

○長径方向は，座標北と長径のなす角度で示し，平面形が円形のものについては，空欄とした。

○平面形は，確認面の形状を表した。推定のものは（　）書きをし，不明のものは空欄とした。

○規模は，次のように表現した。

円径……径○ｍ，楕円形……長径×短径，方形……辺○ｍ，長方形……長軸×短軸

○壁高は残存壁高の計測値で表し，壁が検出できなかったものは空欄とした。

（６区SI－75・７区SI－26）

○壁の立ち上がりは，次のように分類して表現した。

90°～71°の傾き―垂直　　70°～51°の傾き―外傾　　50°以下の傾き―ゆるやかに外傾

○床面は，次のように分類して表現した。　平坦——，凹凸～～～，起伏∿，傾斜＼

○ピットの数は，その住居跡に伴うと考えられる数を記入し，検出されないものは空欄とした。

○炉は，炉の位置と種類を記入し，検出されないものは空欄とした。

○覆土は，層の数を記入した。

○出土遺物は，その遺構から出土した土器片の量，土器片以外の代表的な遺物名を記した。

○時期は，出土遺物から時期判定の可能な範囲で土器型式を記した。不明のものは空欄とした。

○備考は，重複関係を記した。

〈土壙一覧表〉

番号	位　置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	ピット数	出土遺物（点）	形態分類	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)							

○番号は通し番号を付し，１基の土壙でＡ・Ｂ壙に分かれるものは，それぞれＡ・Ｂとも１基の土壙として記入してある。

○欠番は地下式壙，粘土貼り遺構となったものである。

○位置・長径（長軸）方向・平面形・規模・覆土・出土遺物・備考は，住居跡一覧表の記載方法に準じた。

○壁面は，住居跡と同じ記載方法であるが，ひフラスコ状を追加した。

○出土遺物は，出土した土器片の総点数を記した。

○底面は，住居跡の床面と同じ記載方法であるが◡皿状を追加した。

○形態は次の要領で分類した。

分類　平面形と断面形でＡ～Ｆに，規模でⅠ～Ⅲに，深さで１～３に，ピットの有無でａ・ｂに分類した。

(1)平面形と断面形

Ａ　平面形が円形・楕円形で，壁は外傾し緩やかに立ち上がるもの。

Ｂ　平面形が円形・楕円形で，壁が垂直に立ち上がるもの。

Ｃ　平面形が円形・楕円形で，壁がフラスコ状に立ち上がるもの。

Ｄ　平面形が方形・長方形のもの。

Ｅ　平面形が不定形のもの。

Ｆ　攪乱穴。

(2)規模

Ⅰ　長径が１ｍ未満

Ⅱ　長径が１ｍ以上２ｍ未満

(3)深さ

１　深さが50cm未満

２　深さが50cm以上１ｍ未満

Ⅲ　長径が２ｍ以上　　３　深さが１ｍ以上

(4)ピットの有無

ａ　壙底にピットを持つもの

ｂ　壙底にピットを持たないもの

(2)　遺物の記載方法

本報告書には，南三島遺跡６・７区から出土した全遺物の中から選別，抽出したものを掲載した。住居跡から出土した土器は，遺構とあわせて掲示し，土壙・溝・炉穴・地下式壙から出土した土器については，その一部は遺構とともに掲載し，説明を加えた。残りの大半の土壙から出土した土器については，一括して図示し，表示するにとどまった。また，溝・地下式壙およびグリッドから出土した土器および表面採集の土器については，紙面の都合上ほとんど図示できなかった。

土器以外の土製品・石器・古銭その他の遺物に関しては，個別に実測図・写真・拓影図などにより掲載し，説明を加え，さらに表にまとめた。

貝類については，出土遺構ごとに同定種・数量・計測値などについて記述した。

その他の自然遺物（馬骨）については，遺存状態が悪く，出土した事実の記載だけにとどめた。

全体として，各種の遺物について，でき得る限り類例を渉猟（しょうりょう）し，その使途・性格などを究明しようと努めた。

(1)　使用記号と一覧表の見方

遺構の使用記号については，遺構の記載方法に準じた。遺物の使用記号については，記録（実測・写真・拓本）を残したもの１点ずつに対して，下記の記号を用いて通し番号を付した。一覧表における台帳番号は，この通し番号を示している。

実測土器　Ｐ　　拓本土器　ＴＰ　　土製品　ＤＰ　　石器　Ｑ　　金属製品　Ｍ

貝製品　　Ｓ　　自然遺物　Ｎ

縄文原体の表記については，故山内清男博士の『日本先史土器の縄紋』に従った。

把手一覧表

挿図番号	写真番号	出土位置	台帳番号

土器片錘・土製円板・有孔円板一覧表

挿図番号	写真番号	縦　横　厚　重	出土位置	備　　考	台帳番号

法量の欄で，縦・横・厚さ・径の計測値の単位はcm，重さの単位はｇである。（　）を付し

て記入したのは現存値である。これらは他の一覧表も同じである。

出土位置の欄においては，炉内および床面とピット出土のものだけを記入した。その他は覆土中からの出土である。この点も他の一覧表と同じである。

備考の欄には，整形方法，残存状態およびその他必要と考えられる観察事項を記入した。土器片の部位については，特記していないものは胴部片である。

整形方法については次のように区分し，記号で表記した。

A　周縁がすべて磨(す)られているもの

B　打ち欠いたままで，磨耗もしていないもの

C　打ち欠いたり，周縁を磨ったりして整形したものと思われるが，磨耗などにより不明なもの。

残存状態については図版未掲載のものだけ記入した。この点は，他の一覧表も同じである。

半欠　2分の1以上残存しているもの

残欠　2分の1以下残存しているもの

一部欠　周縁部のごく一部を欠損しているもの

有孔円板の穿孔方向は，図版未掲載のものだけ記入した。但し，穿孔方向が不明のものは，穿孔途中としてある。

土製品一覧表

挿図番号	写真番号	名称	縦横厚重	出土位置	備考	台帳番号

石器一覧表

挿図番号	写真番号	器種	縦横厚重	出土位置	石質	備考	台帳番号

古銭一覧表

挿図番号	写真番号	銭貨名	初鋳年	径	重	出土位置	備考	台帳番号

古銭の出土位置の欄におけるNo.は，第1号地下式壙の出土状態図の番号と対応している。

(2)　遺物実測図の作成方法

遺物実測の方法は次のようにした。

ア　土器

○実測方法は4分割法を用い，左側に外面，右側に内面および断面を実測することを基本としたが，土器によっては適宜に工夫した。

○拓影図の断面は，右側に置くことを原則とし，裏面の拓本を採った場合には，断面を中

央に示した。

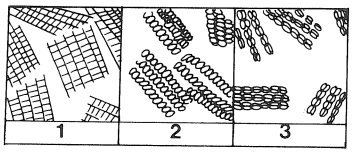
イ　土製品

○土器片錘は，土器本来の形状を基本として実測し，断面は，拓影図の場合と同様とした。

○その他の土製品については，土器片を利用したものに関しては，土器片錘の実測方法を基本とし，利用目的のために製作されたものについては，効果的と考えられる方法で実測した。

ウ　石器

○石器については，正面図・側面図・断面図をあらわすことを基本としたが，石器によっては一部を省略したものもある。



(3)　遺物実測図の掲載方法

遺物実測図の掲載方法は，次のようにした。

ア　土器

○隆線は で，微隆線は で表現した。

○沈線は で示し，縄文は挿図のように示した。　1　無節縄文　2　単節縄文　3　複節縄文とした。その他については適宜に工夫した。

○土器のうち赤彩されているものは であらわし，胎土中に繊維を含むものは，断面に のスクリントーンを貼って示した。

イ　石器

○敲きの範囲は，

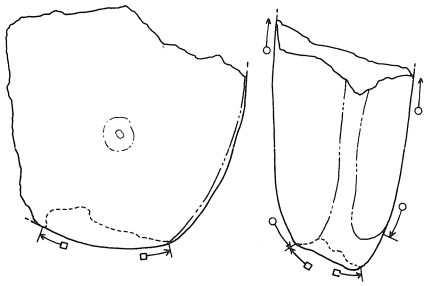
および破線 で表現した。

○磨りの範囲は，

および２点破線 で表現した。

○凹みの範囲は，１点破線 で表現した。

○砥石の使用範囲は， で表現した。

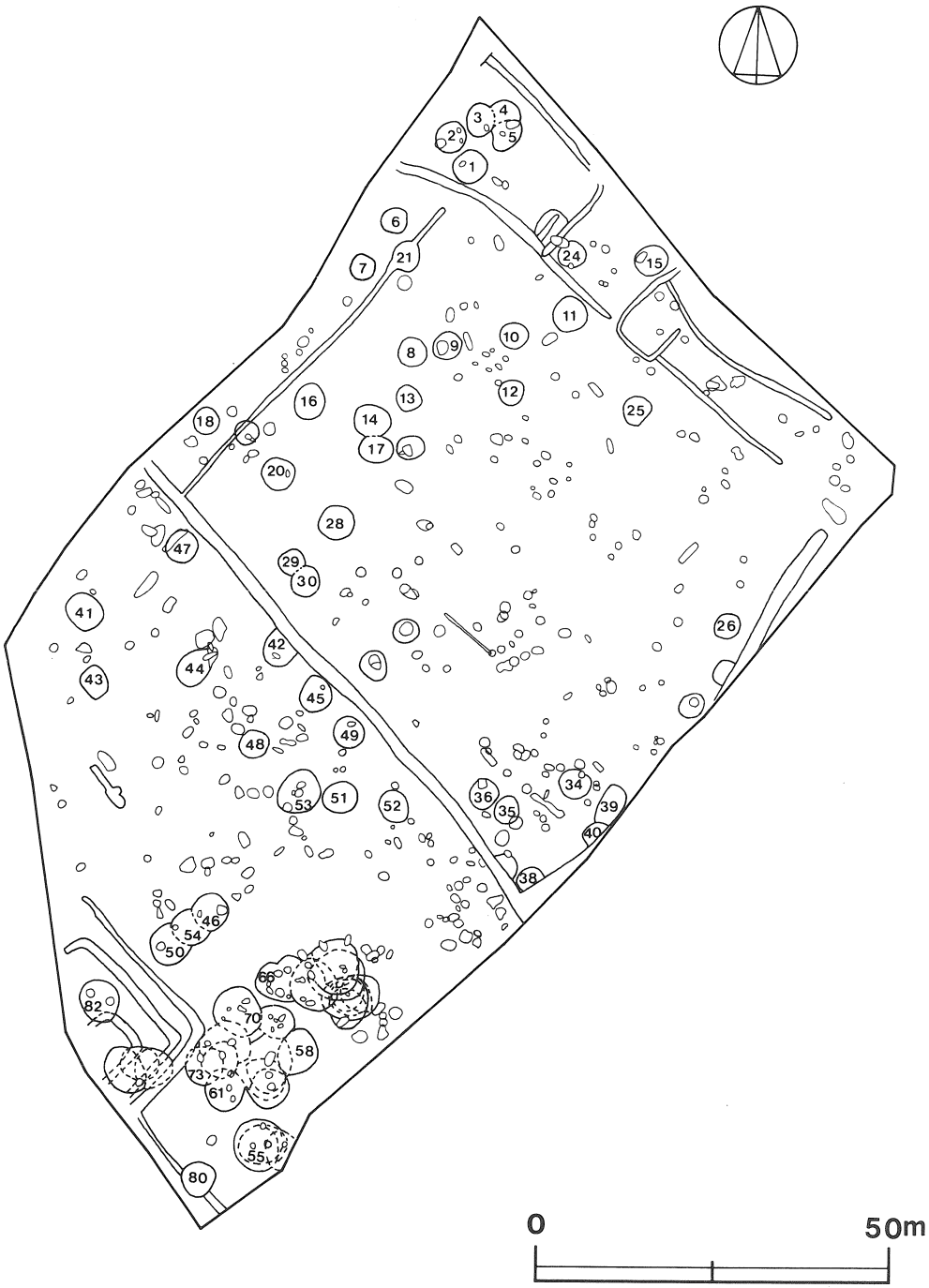


ウ　縮尺の表示

○土器の実測図については，３分の１を基本としたが，２分の１，４分の１，６分の１のものもある。

○土器の拓影図および土製品・石器などの実測図も３分の１を基本としたが，１分の１，２分の１，６分の１のものもある。

第２節　竪穴住居跡と出土土器



第７図　南三島遺跡６区遺構分布図

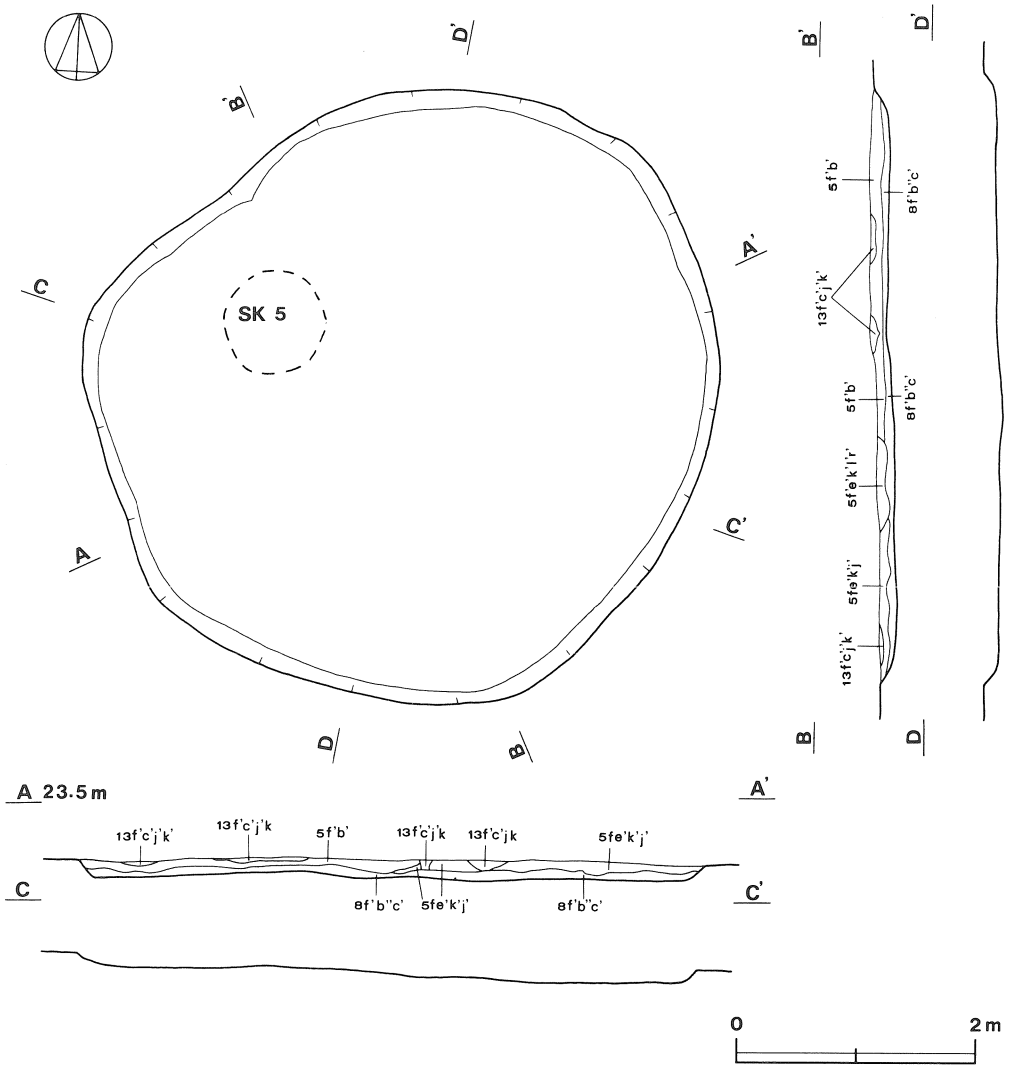
第１号住居跡（第８図）

本跡は，遺跡の北部F5j_6区を中心に確認されたもので，北西側で第５号土壙と重複している。第５号土壙との新旧関係は不明である。

平面形は，長径5.4ｍ・短径5.3ｍの不整円形で，北西側の一部が内側に凹んでいる。壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がり軟らかである。壁高は，８～12cmである。床面は平坦で軟らかく，北西側がやや高く，南東側は低く，北西側から南東側へ傾斜をしている。炉及びピットは検出されていない。

覆土は４層からなり，すべて褐色土である。また，どの層も粘性，締まりがある。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

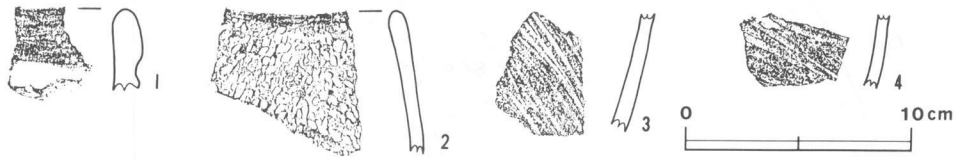


第８図　第１号住居跡実測図

第１号住居跡出土土器（第９図１～４）

１は，口縁部片で，太い沈線を巡らしている。２は，加曽利Ｂ式期の粗製土器の口縁部片で，粗い縄文が施されている。３，４は，安行式期の粗製深鉢形土器の胴部片である。

本跡から出土した土器は，わずかで住居跡の時期決定資料とはならない。



第９図　第１号住居跡出土遺物拓影図

第２号住居跡（第10図）

本跡は，遺跡の北部E5i_5区を中心に確認されたもので，第１号住居跡の北側0.6ｍに位置している。第２・３・４号土壙と重複している。新旧関係は不明である。

平面形は長径4.8ｍ，短径4.6ｍの不整円形で，北側が外側にふくらんでいる。壁は北東側が床面から垂直に立ち上がる他は，緩やかに外傾して立ち上がっており軟らかである。壁高は，10～14cmである。床面は全体的に軟弱で，平坦であるが，北東側から東側にかけて５～10cm低くなっている。ピットは東側に１か所検出され，径30cm・深さ29cmである。炉は，検出されていない。

覆土は２層からなり，暗褐色土・褐色土が堆積している。１層は粘性がある。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第２号住居跡出土土器（第11図１～４）

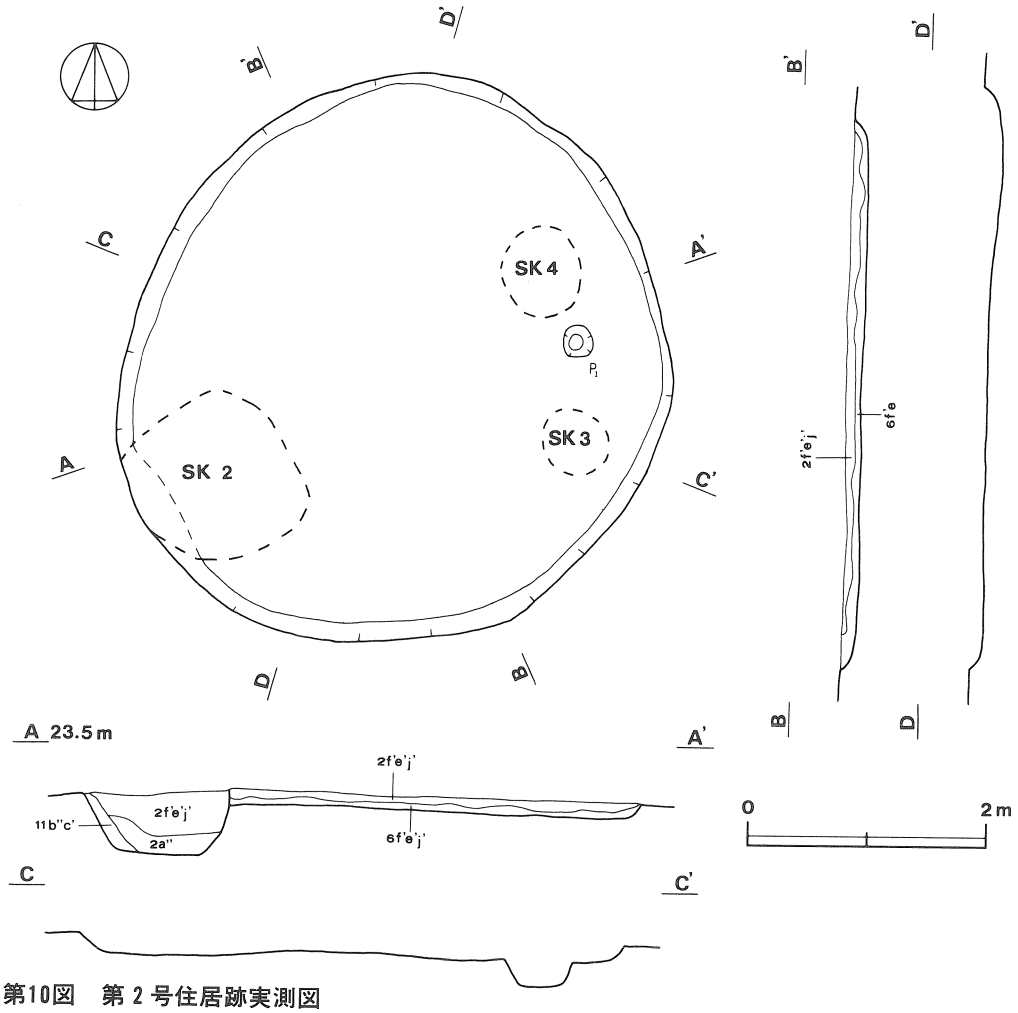
１～４は，いずれも第１号住居跡出土の２と同一個体である。３は，第１号住居跡出土の６点と本跡出土の２点が接合したものである。胴下半部には縄文が付されていない。口縁部が内湾する深鉢形土器で，縄文原体は単節ＲＬで横位回転を主としている。胎土には小石粒，砂粒を含んでおり緻密（ちみつ）で，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。

本跡から出土した土器は，少量で住居跡の時期決定はむずかしい。

第３号住居跡（第13図）

本跡は，遺跡の北部E5h_7区を中心に確認されたもので，第２号住居跡の北東側0.6ｍに位置している。東側で第４号住居跡，南東側で第８号土壙と重複している。第８号土壙との新旧関係は不明であるが，第４号住居跡との新旧関係は，土層から本跡の方が新しいと考えられる。

平面形は，長径4.9ｍ・短径3.9ｍの楕円形で，長径方向は，Ｎ－5°－Ｅを指している。壁は床面から外傾して立ち上がり軟らかである。壁高は，10～12cmとほぼ一定の高さである。床面は平



第10図　第２号住居跡実測図

坦で軟らかく，中央部分が２～３cm高く盛り上がっている。ピットは本跡に伴うものとして，南東側に１か所，南西側に１か所の計２か所が検出されている。ともに径34cmで，深さも35cm・30cmと似かよっている。炉は検出されていない。

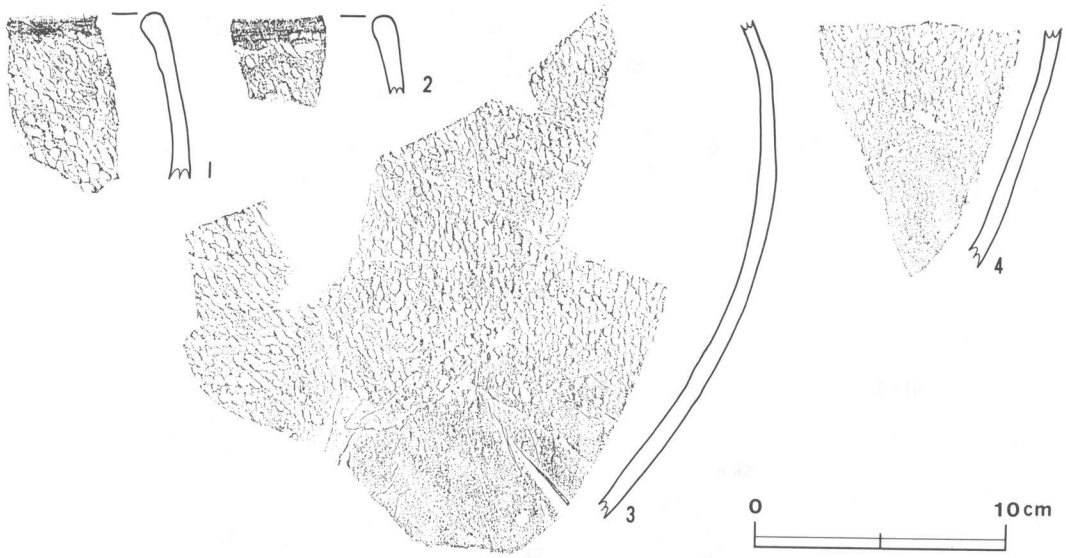
覆土は３層からなり，黒色土・暗褐色土・褐色土の順で堆積している。どの層も粘性がある。

遺物は，縄文土器片が覆土から１点出土している。

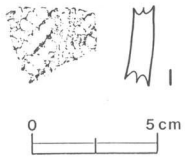
第３号住居跡出土土器（第12図１）

１は，斜縄文の施された小破片である。胎土には石英粒，砂粒を含んでおり，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。縄文時代後期の土器片と考えられる。

本跡から出土した土器は，少なく住居跡の時期決定はむずかしい。



第11図　第２号住居跡出土遺物拓影図



第12図　第３号住居跡出土遺物拓影図

第４号住居跡（第13図）

本跡は，遺跡の北部E5h_7区を中心に確認されたもので，第１号住居跡の北側2.1ｍに位置している。西側で第３号住居跡，南側で第５号住居跡，第６号土壙とそれぞれ重複している。第５号住居跡・第６号土壙との新旧関係は不明である。

平面形は，重複のため長径5.7ｍ（推定）・短径4.8ｍ（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，N－3°－Wを指している。壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がり軟らかである。壁高は，10cmである。床面は軟らかく平坦である。ピットは，北側のP_1（径24cm・深さ37cm）・南東側のP_2（径28cm・深さ31cm）・南西側のP_4（径30cm・深さ28cm）の計３か所が検出されている。３か所とも規模と配列から主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

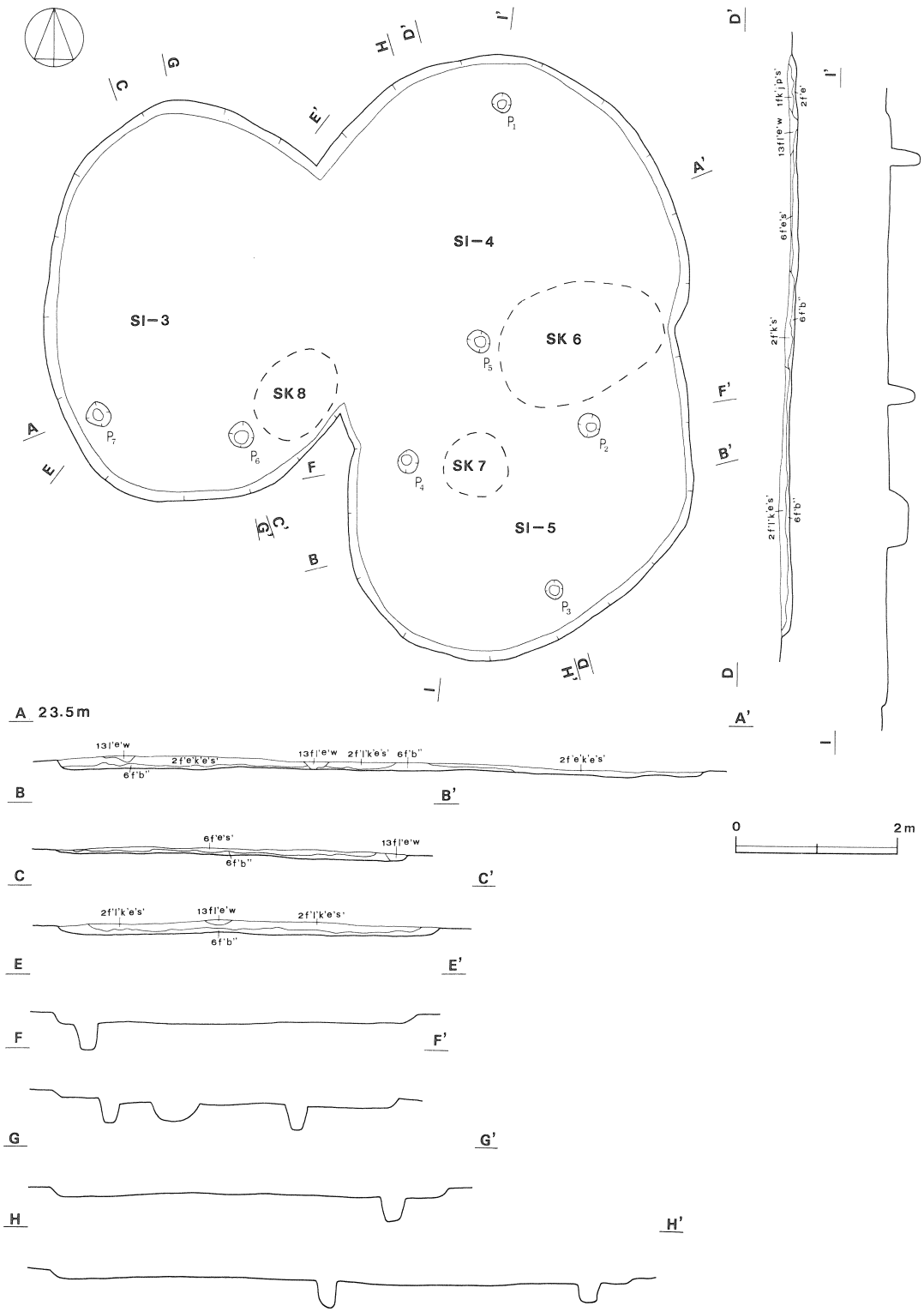
覆土は３層で，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。いずれの層も粘性はあるが，あまり締まっていない。

遺物は，皆無である。

第５号住居跡（第13図）

本跡は，遺跡の北部E5i_7を中心に確認されたもので，第１号住居跡の北東側２ｍに位置している。北側で第４号住居跡，中央で第７号土壙と重複している。新旧関係は，第４号住居跡・第７号土壙とも不明である。

平面形は，重複のため長径５ｍ（推定）・短径4.1ｍ（推定）の楕円形状と思われる。長径方向



第13図　第３・４・５号住居跡実測図

は，N－29°－Eを指している。壁は床面から緩やかに立ち上がり軟らかである。壁高は，4～12cmである。床面は平坦でやや締まっている。ピットは，南東側のP_3・西側のP_4・北側のP_5の計3か所が検出されている。P_3・P_5は本跡に伴うピットであるが，西側のP_4はその配列からみて第4号住居跡のピットとも考えられる。規模は，径30～40cm・深さ24～33cmの円形である。炉は，検出されていない。

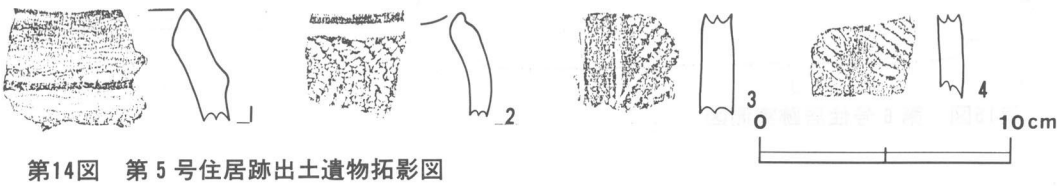
覆土は4層で，褐色土が主である。4層とも締まっており，粘性がある。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第5号住居跡出土土器（第14図1～4）

1は，口縁部片で胴部には縄文が施されている。2は，波状を呈すると思われる口縁部片で，縄文は単節RLである。3・4は，胴部片で，3は単節縄文，4は無節縄文を用いた磨消懸垂文が施されている。1の胎土には大粒の石英，長石粒が混じり粗雑であるが，他は良好である。いずれも加曽利EⅢ式期のものと考えられる。

本跡から出土した土器は，少ないが覆土から出土した土器から考えて，本跡の時期は加曽利EⅢ式期と考えられる。



第14図　第5号住居跡出土遺物拓影図

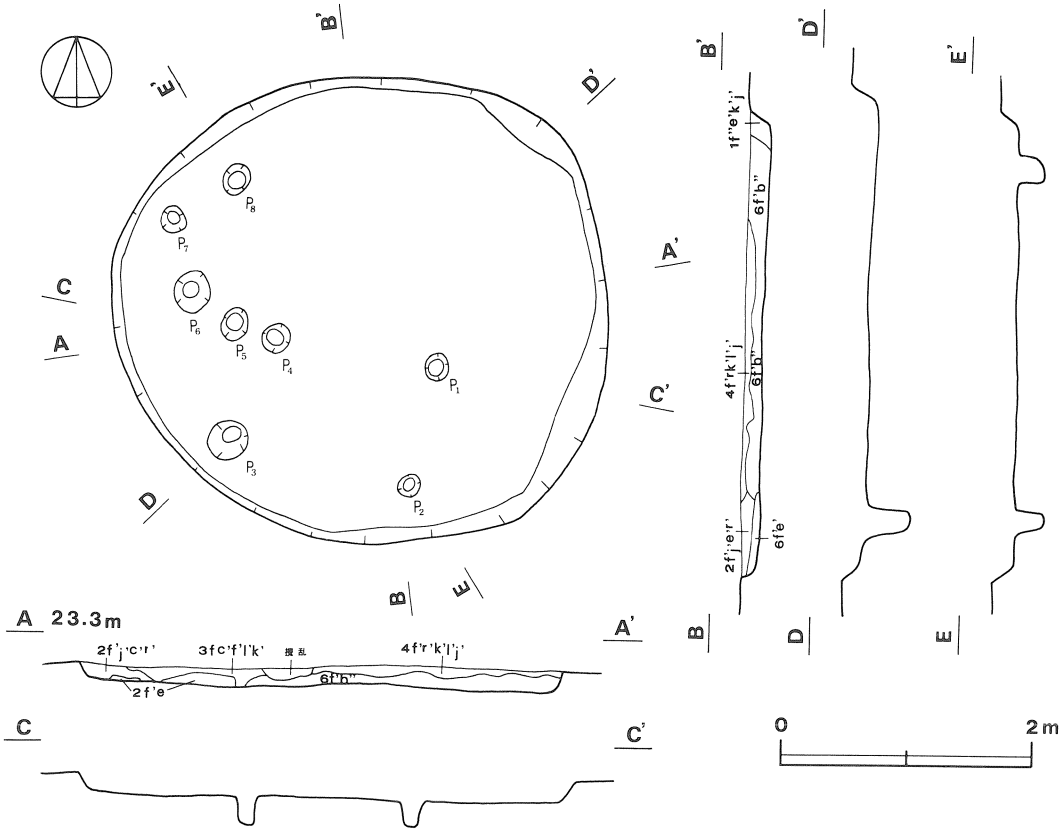
第6号住居跡（第15図）

本跡は，遺跡の北部F5b₃区に確認されたもので，第1号住居跡の南西側8mに位置している。

平面形は，長径4.0m・短径3.7mのほぼ円形である。壁は軟らかく，南西側が床面から垂直に立ち上がるほかは，緩やかに外傾している。壁高は，13～17cmである。床面は平坦で軟らかである。ピットは8か所検出されているが，全体として南側と西側に片寄っている。径34cmの大きさのピット2か所と，径18～26cmの小形のピット6か所に分かれている。いずれも深さは，17～36cmである。不規則な配列のため，主柱穴は判別できない。炉は検出されていない。

覆土は8層からなり，暗褐色土と褐色土の2層が主体で，この2層は締まっているが，粘性はあまりみられない。ほかの層は後世の攪乱をうけたものが多い。

遺物は，皆無である。



第15図　第６号住居跡実測図

第７号住居跡（第16図）

本跡は，遺跡の北西部F2c₂区を中心に確認されたもので，第６号住居跡の南西側４ｍに位置している。

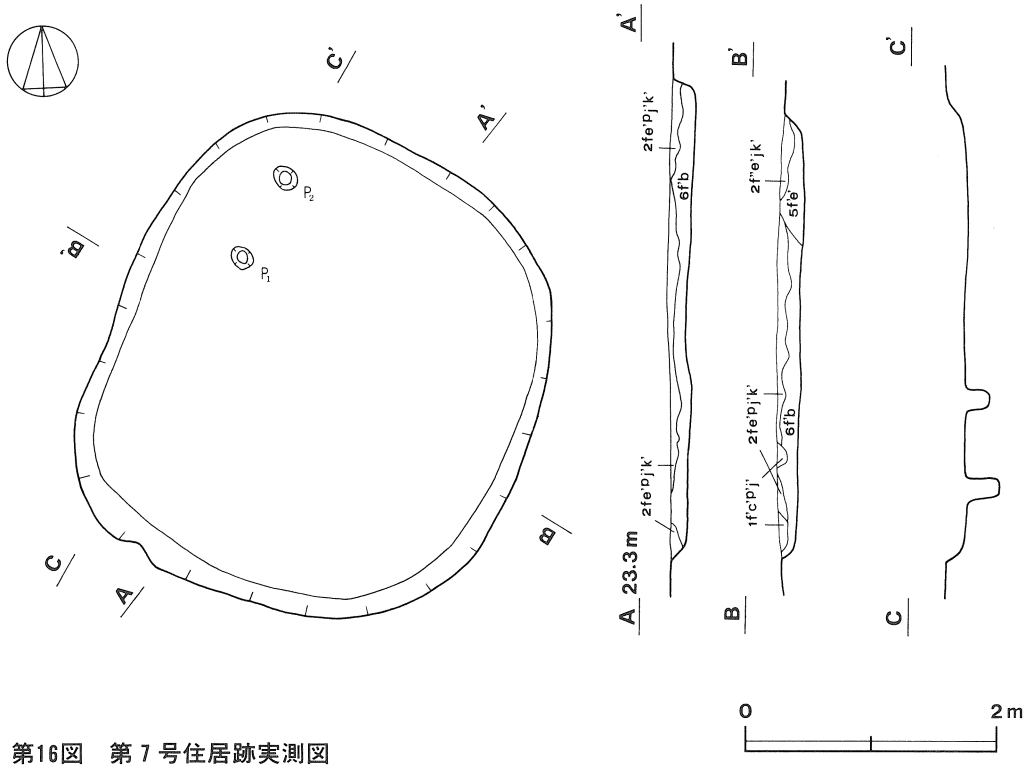
平面形は，長径4.0ｍ・短径3.9ｍの不整円形である。壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がり，特に南西側は緩やかで全体的に軟らかである。壁高は，10～13cmである。床面は平坦で軟らかである。ピットは２か所検出され，径20cm・21cmで，深さは20cm・28cmとほぼ同じ大きさであり，いずれも北側に片寄っている。炉は，検出されていない。

覆土は５層からなり，暗褐色土と褐色土が主体である。一部に攪乱もみられるが，全体的には自然堆積である。５層とも締まりはない。

遺物は，皆無である。

第８号住居跡（第17図）

本跡は，遺跡の北西部F5f₄区を中心に確認されたもので，第１号住居跡の南東側10ｍに位置し



第16図　第７号住居跡実測図

ている。

平面形は，長径4.4ｍ・短径3.9ｍの楕円形で，長径方向は，N－6°－Wを指している。壁は北東側が床面から垂直に立ち上がっているほかは，緩やかに外傾して立ち上がっており，軟らかである。壁高は，14～17cmである。床面は平坦で軟らかである。ピットは７か所検出されたが，全体として中央から西側に片寄っている。P_3・P_6は深いピットで，そのほかのピットは，規模が径20～34cm・深さ14～43cmとまちまちである。不規則な配列のため，主柱穴は判別できない。炉は，検出されていない。

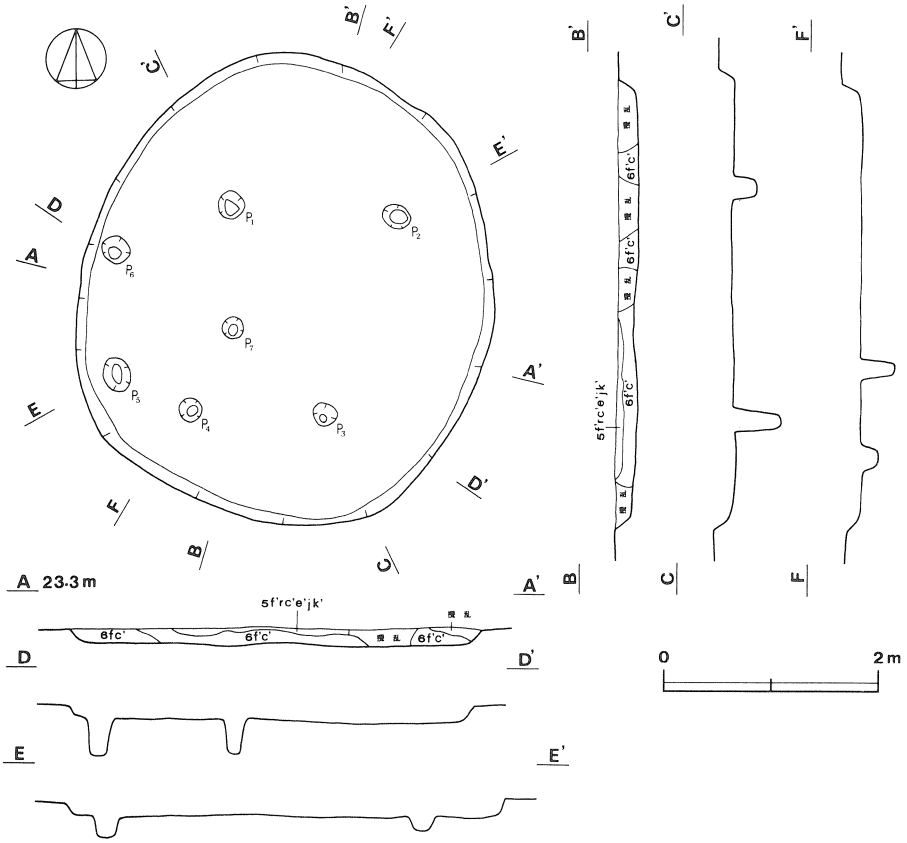
覆土は５層からなり，主に褐色土と黒褐色土が堆積している。２・３層は締まっている。

遺物は，皆無である。

第９号住居跡（第18図）

本跡は，遺跡の北西部F$5f_4$区を中心に確認されたもので，第８号住居跡の東側１ｍに位置している。西側の床面を切って第39・40号土壙が存在している。第39・40号土壙との新旧関係は，本跡の覆土や床を切っていることから，本跡の方が古いと考えられる。

平面形は，長径4.3ｍ・短径3.7ｍの楕円形で，長径方向は，N－38°－Eを指している。壁は軟



第17図　第８号住居跡実測図

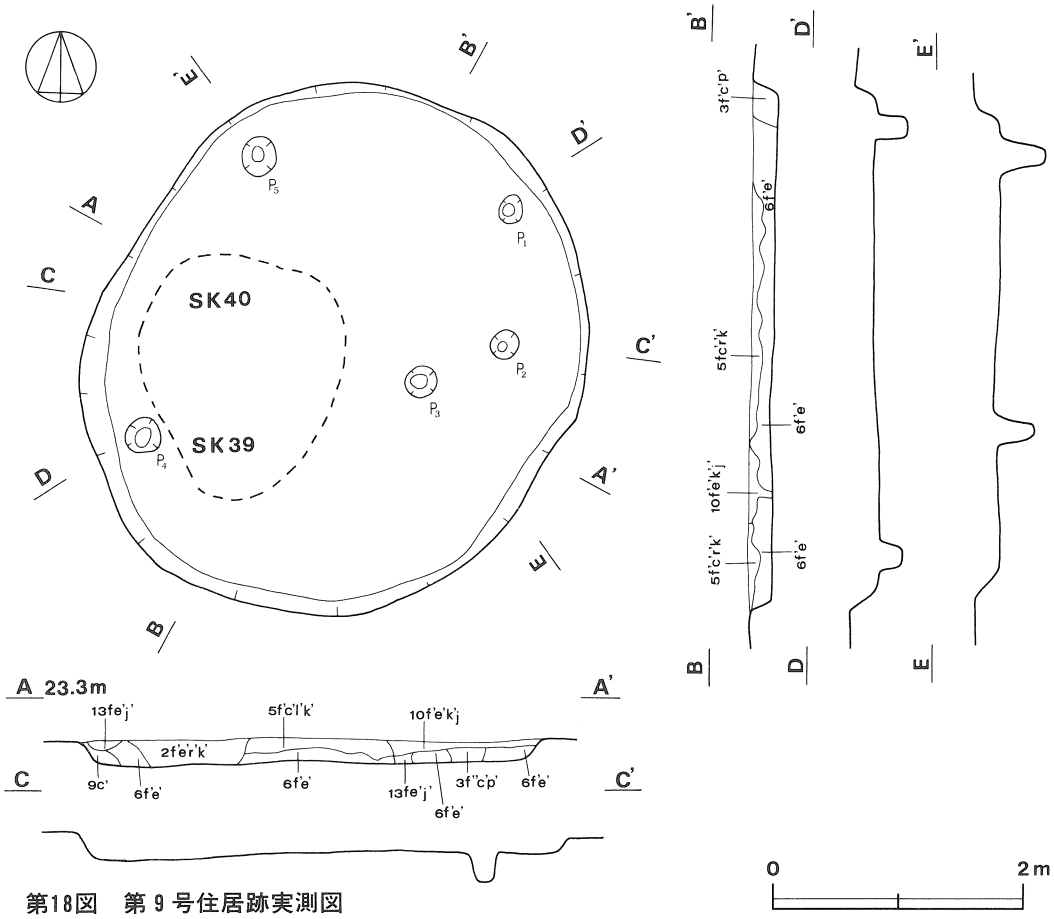
らかく，北西側及び北側が床面から垂直に立ち上がっているほかは，緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は，12～20cmである。床面は軟らかく全体的に平坦であるが，北側から中央にかけては５～７cm高くなっている。ピットは５か所検出され，規模は径24～30cm・深さ21～37cmである。P_3を除いたピットの，P_1・P_2・P_4・P_5が壁にそって台形状に配列されているため，主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない

覆土は７層で，主に黒褐色土・暗褐色土・極暗褐色土・褐色土・明褐色土が堆積している。一部に攪乱が認められるが，耕作によるものと思われる。下層では締まっており，粘性がある。

遺物は，皆無である。

第10号住居跡（第19図）

本跡は，遺跡の北部F5e_8区を中心に確認されたもので，第９号住居跡の東側７ｍに位置している。



第18図　第９号住居跡実測図

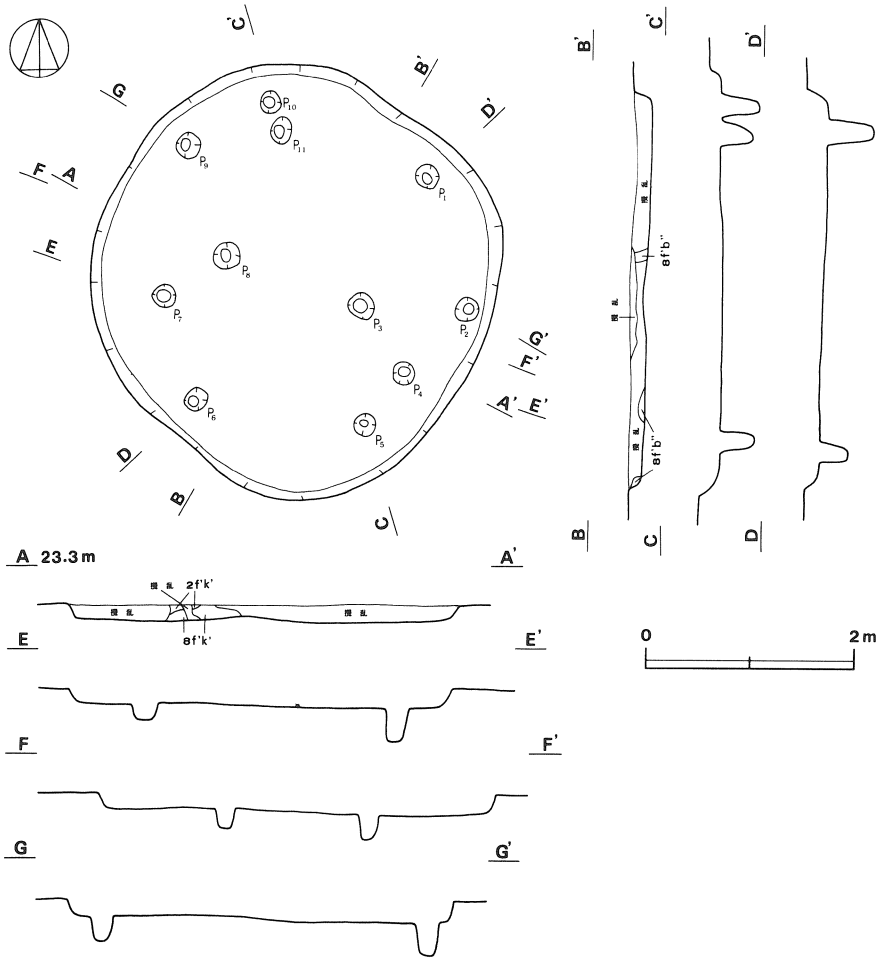
平面形は，長径4.2ｍ・短径3.8ｍの不整円形で，南側が外側へ張り出している。壁は全体的に軟らかであり，南東壁が床面から垂直に立ち上がっているほかは，緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は，11～20cmである。床面は比較的硬く，中央から北東側と南東側にかけてわずかに傾斜をしている。ピットは11か所検出され，規模は径24～28cm・深さ16～45cmである。その中でもP_1・P_3・P_8・P_{11}の深さが一定しており，いずれも対角線上に配列されているところから主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

覆土は７層で，主に暗褐色土・褐色土の順に堆積している。２・４層は締まっており，粘性がある。

遺物は，皆無である。

第11号住居跡（第20図）

本跡は，遺跡の北部F5e_0区を中心に確認されたもので，第10号住居跡の北東側４ｍに位置している。

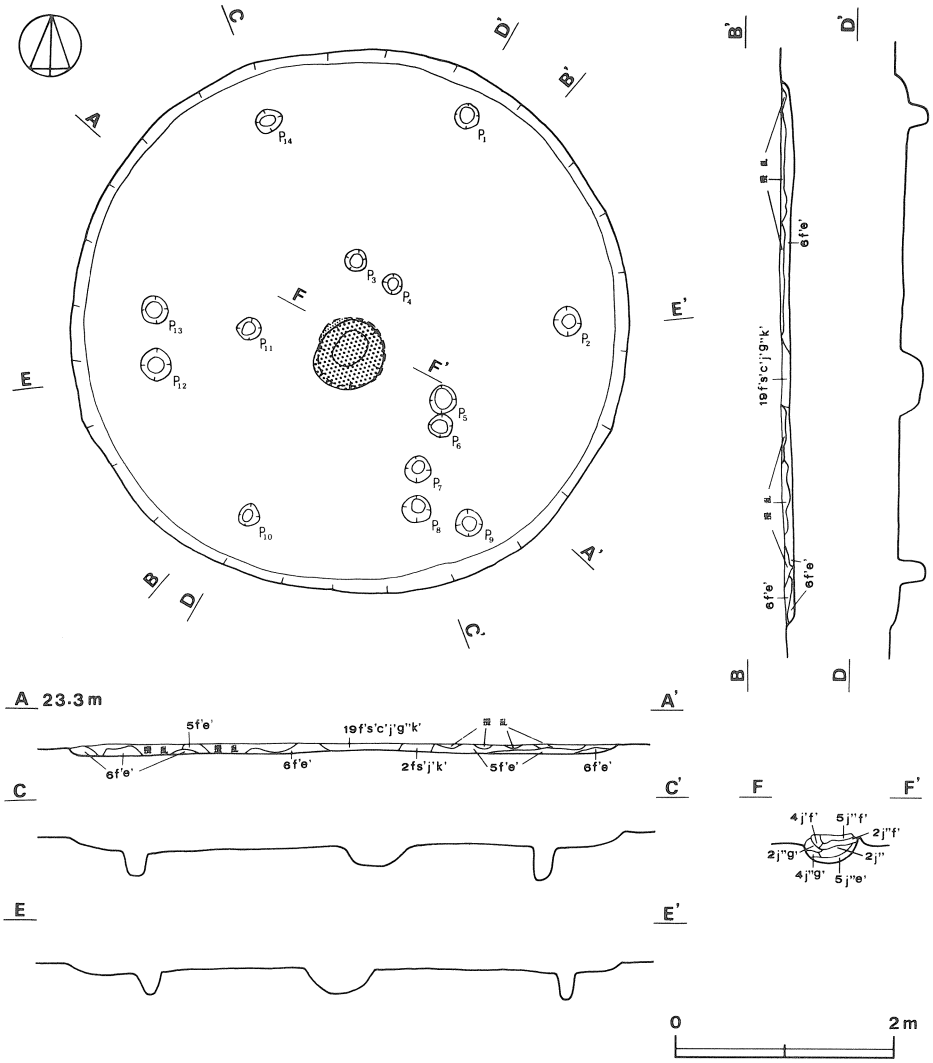


第19図　第10号住居跡実測図

平面形は，径5.1ｍの円形である。壁はよく締まっており，床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は，５～10cmと浅い。床面は踏み固められて硬く，平坦であり，中央に検出された炉の部分が１～２cm高くなっている。ピットは14か所検出され，規模は径18～30cm・深さ18～33cmである。その中でもP_1・P_2・P_9・P_{10}・P_{13}・P_{14}が六角形に配列され，深さも一定しているところから主柱穴と考えられる。炉は径68cmの円形状で，床面をやや深めに掘り凹め，まわりを土器片で囲った土器片囲い炉である。使用されている土器片を接合した結果，深鉢の胴部片であることが判明した。焼土は厚く堆積しており，長期間の使用がうかがえる。土器片囲いのため，炉床・炉壁ともさほど焼けてはいないが，炉の覆土には焼土が充満している。

覆土は６層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。耕作による攪乱が認められる。２・３・６層は締まっている。

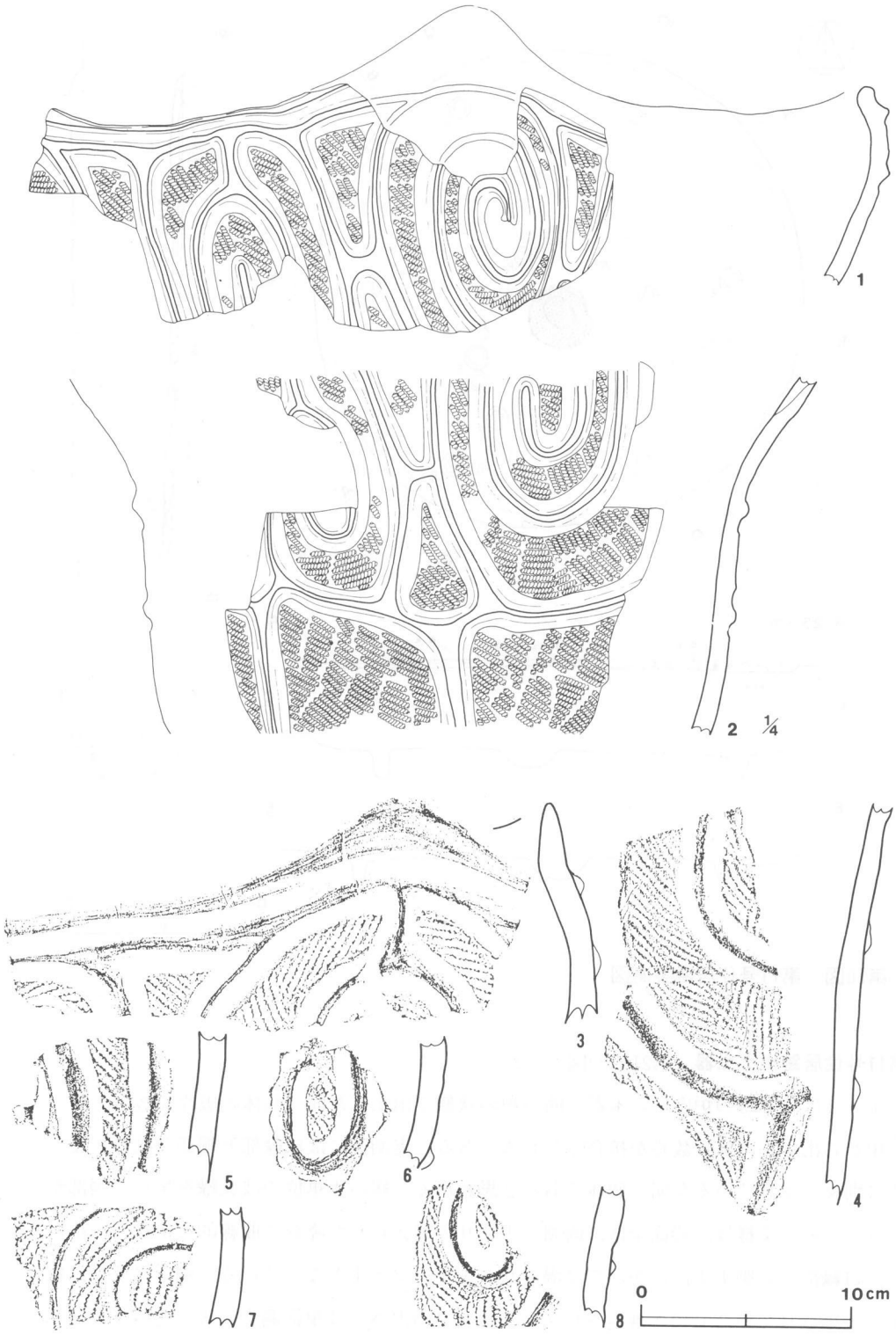
遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。



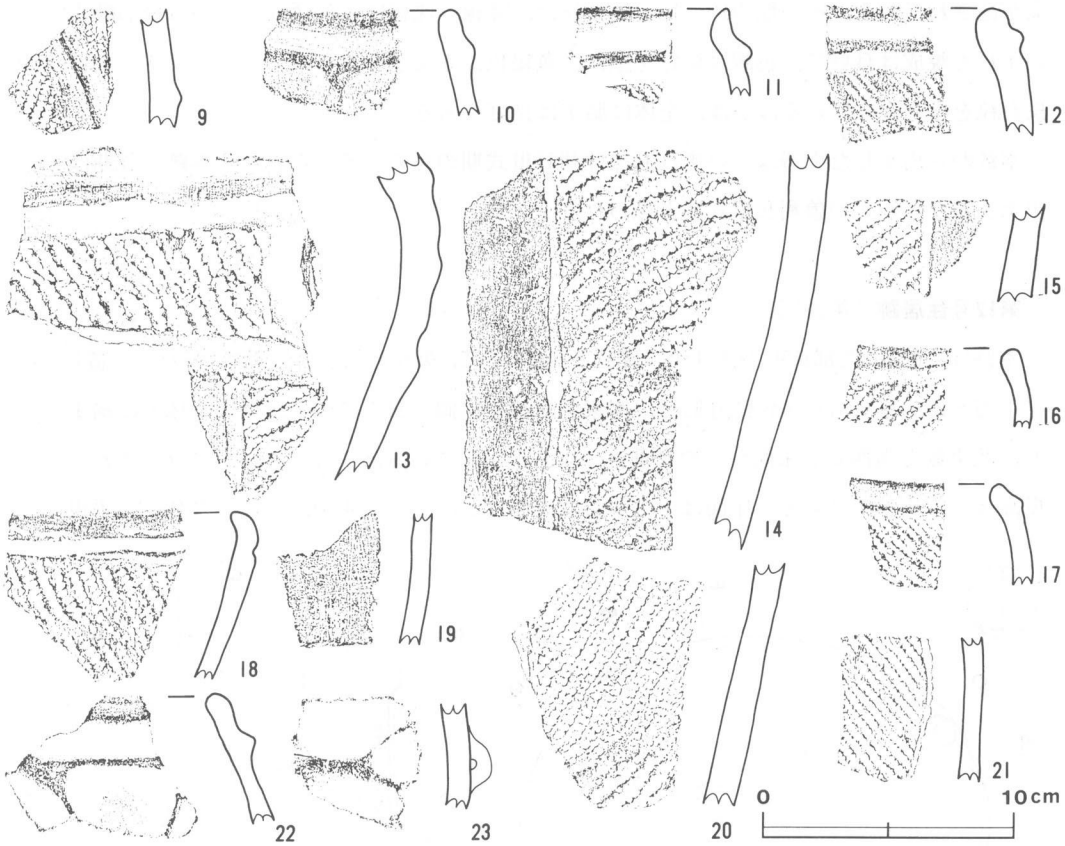
第20図　第11号住居跡実測図

第11号住居跡出土土器（第21～22図１～23）

１・２は，本跡の炉内から土器片囲い炉の状態で出土した同一個体の破片10数点と炉上面の覆土中から出土した破片数点が接合したものである。実測図には口縁部と胴部が接合しなかったために別々に示しているが同一個体であると思われる。緩い４単位の波状縁を呈し，胴部が緩くくびれている。文様は，器面全体に両側にナゾリの加えられた隆線で曲線的モチーフが描かれている。口縁部から胴上半部にかけては渦巻状のモチーフが主となっている。胴下半部には縦長の区画文が施されていたものと推定される。モチーフの内外には単節縄文ＬＲが充填されている。胴上半部には器面の磨滅部分が少しみられる。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが加えられて



第21図　第11号住居跡出土遺物実測図・拓影図　(1)



第22図　第11号住居跡出土遺物拓影図　(2)

いる。胴部に明確な無文帯を有さない点は注目される。胎土には小石粒，砂粒が混入し，焼成は良好である。色調は全体として褐色を呈しているが，一部に暗褐色の部分もみられる。本跡の時期決定資料として充分なものと考えられる。推定口径は41.0cmで，胴部最大径は46.0cmを測れるのでかなり大形の土器と思われる。

14・15・20・21の4点は，本跡の炉内から出土したものである。いずれも胴部片で，磨消懸垂文の14・15・20が特徴的である。15・20が複節縄文で，他は単節縄文である。10～13・16～19は，覆土，セクションベルト内から出土したものである。22・23は隆線だけによる施文の土器で，壺形を呈するものと思われる。3～9は，隆線で渦巻状，曲線的モチーフを描いている土器片で，縄文が充填されている。3は，第147号土壙から同一個体の破片が出土している。4・5は器面に磨滅が目立っている。5の内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが加えられている。13は，キャリパー形を呈する深鉢形土器の口辺部から胴部にかけての大破片である。口縁部文様帯には，隆線と沈線による区画文を有し，胴部は磨消懸垂文である。19は，多截竹管状施文具による条線

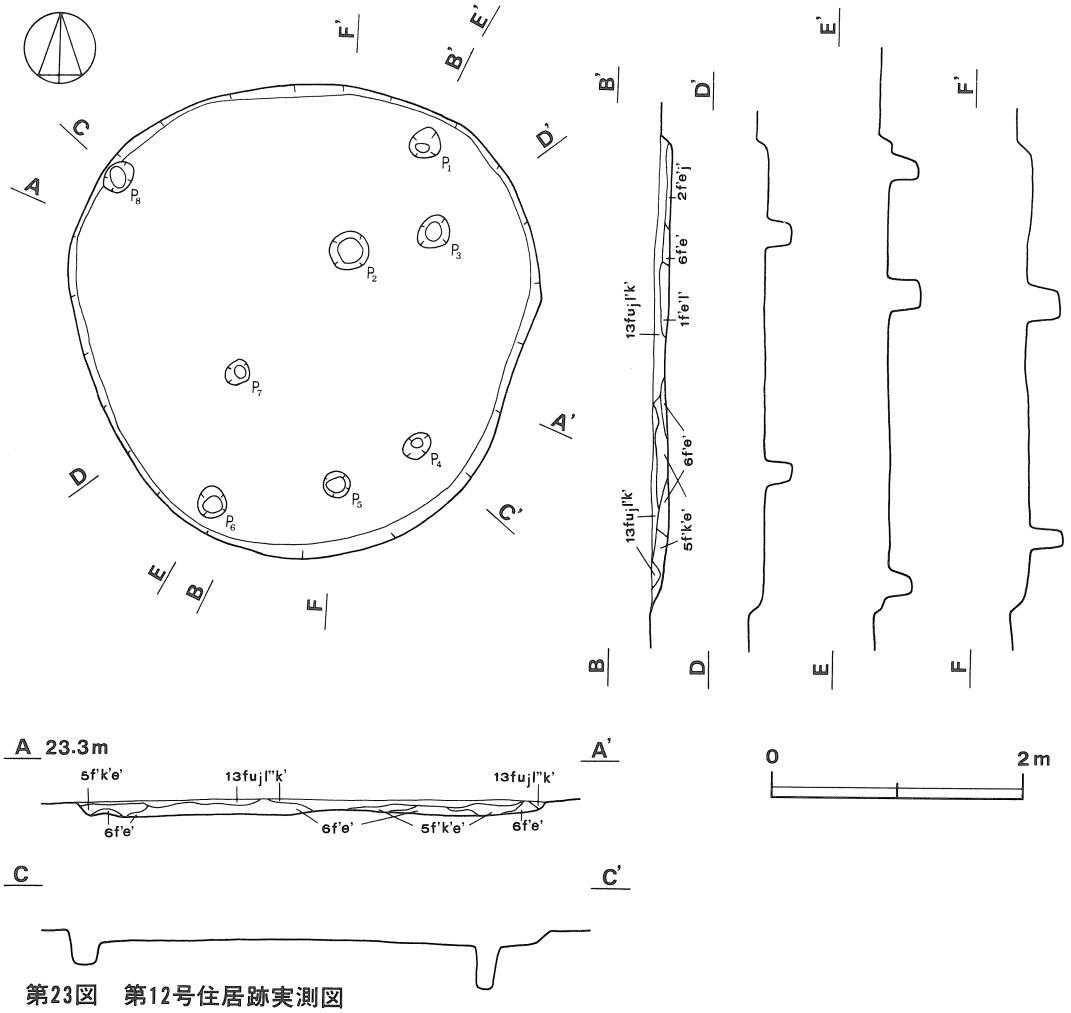
文が施されている。その他の10～12・16～18は，隆線，沈線による区画をもつ口縁部破片である。いずれも焼成は良好で，色調は褐色を主に，黄褐色，赤褐色などを呈している。9が大粒の石英，長石粒を多く含んでいるほかは，全体に胎土は良好である。

本跡から出土した土器は，いずれも加曽利EⅢ式期のものと考えられる。本跡の時期は，炉内出土土器などから加曽利EⅢ式期と思われる。

第12号住居跡（第23図）

本跡は，遺跡の北部F5h_8区を中心に確認されたもので，第10号住居跡の南側4.5mに位置している。

平面形は，径3.8mの不整円形で，南東側がやや内側に凹んでいる。壁は全体的に締まりがあり，北東側と南西側が床面からやや垂直に立ち上がっているほかは，外傾して立ち上がっている。壁高は，7～11cmである。床面は中央から北東側にかけて3～4cm高いが，全体的に平坦でよく

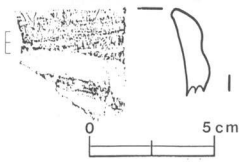


第23図　第12号住居跡実測図

締まっている。ピットは８か所検出され，規模は径22～32cm・深さ19～35cmである。中央寄りのP_2は，径32cmと最も太いものである。P_1・P_4・P_6・P_8は深さも一定しており，台形状に配列されているところから，主柱穴と思われる。炉は，検出されていない。

覆土は５層で，主に黒褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。２層だけ締まっている。

遺物は，縄文土器片が覆土から１点出土している。



第24図　第12号住居跡出土遺物拓影図

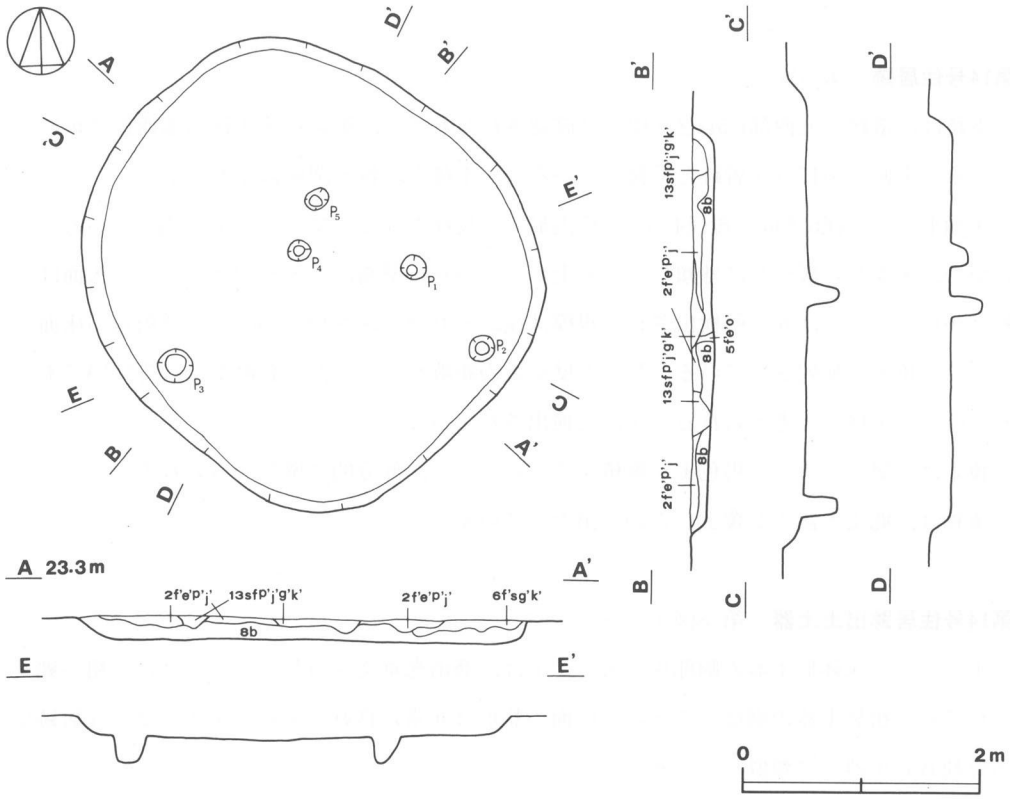
第12号住居跡出土土器（第24図１）

１は，キャリパー形を呈する深鉢形土器の口縁部片である。口縁部文様帯は，隆線と沈線による区画がなされている。胎土には，わずかの砂粒を含み緻密で，焼成は良好である。色調は，黄褐色を呈している。加曽利ＥⅢ式期のものと考えられる。

本跡から出土した土器は，わずかで時期決定はむずかしい。

第13号住居跡（第25図）

本跡は，遺跡の北西部F5h_4区を中心に確認されたもので，第８号住居跡の南側３ｍに位置している。



第25図　第13号住居跡実測図

平面形は，長径4.0m・短径3.8mの不整円形で，南側がやや外へ張り出している。壁は軟らかであり，南東側と北西側が床面から垂直に立ち上がっているほかは，緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は，12～20cmである。床面は平坦で軟らかである。ピットは5か所検出され，規模は径20～30cm・深さ16～29cmで，全体として，中央から南側に片寄っている。炉は，検出されていない。

覆土は4層で，主に黒褐色土・暗褐色土・明褐色土の順で堆積している。2・3層は締まっている。

遺物は，縄文土器片が覆土から2点出土している。

第26図　第13号住居跡出土遺物拓影図

第13号住居跡出土土器（第26図1～2）

1・2は，ともに胴部片で，1は磨滅，損傷が著しいものである。胎土には，小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は，1が赤褐色，2が褐色を呈している。加曽利E式期の土器片と思われる。

本跡から出土した土器は，わずかで時期決定はむずかしい。

第14号住居跡（第27図）

本跡は，遺跡の北西部F5i_3区を中心に確認されたもので，第13号住居跡の南西側2mに位置している。南側で第17号住居跡と重複しているが，本跡との新旧関係は不明である。

平面形は，長径5.5m・短径4.8mの楕円形で，長径方向は，N－73°－Wを指している。壁は軟らかで，床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は，8～13cmである。床面は平坦で軟らかい。ピットは6か所検出され，規模は径23～31cm・深さ13～25cmで，壁周辺の床面に壁にそって六角形に配列されている。しかも壁からの距離やピット間の距離がほぼ等間隔であるので，6か所とも主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

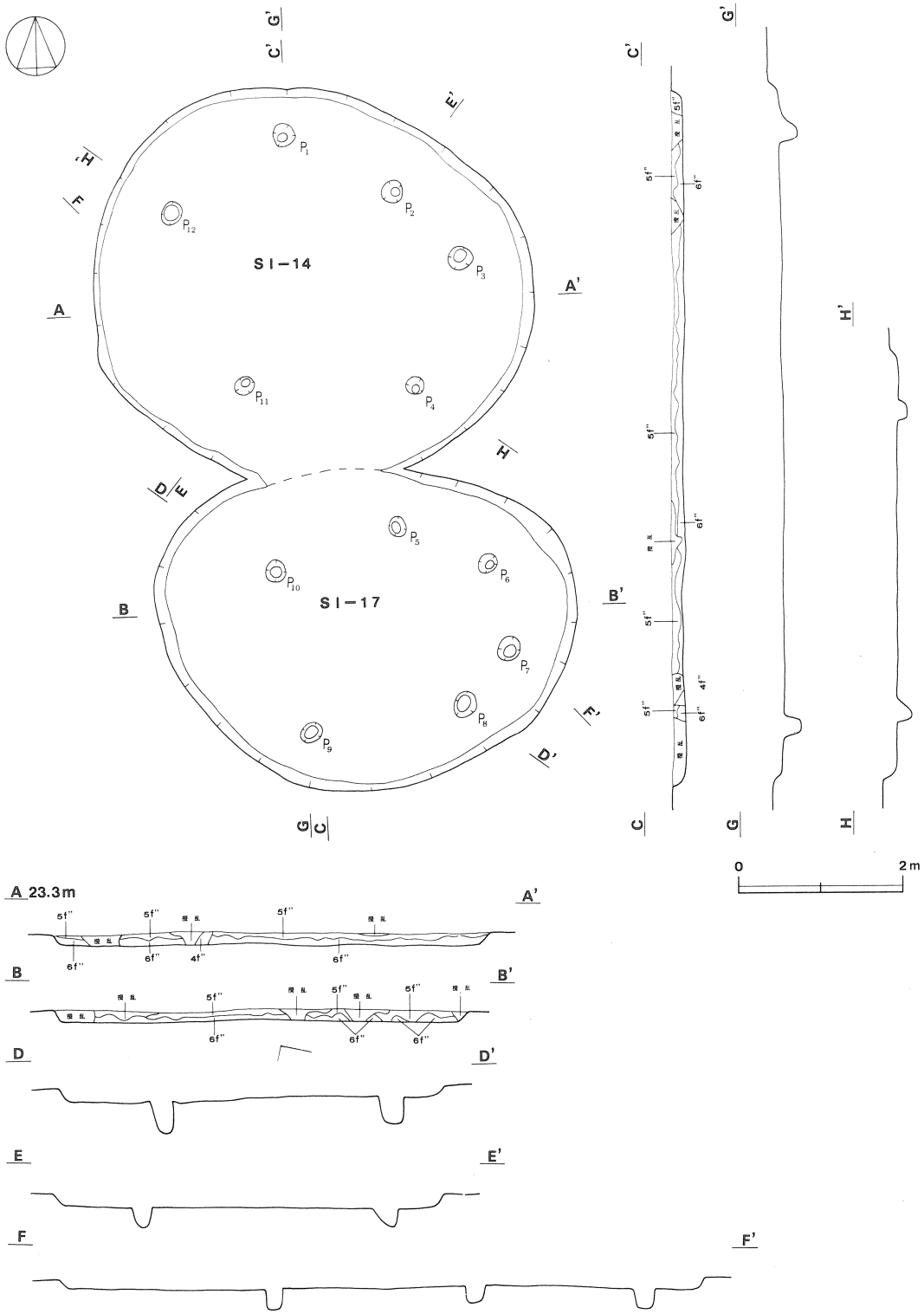
覆土は3層で，すべて褐色土が堆積している。また，部分的に攪乱がみられる。

遺物は，縄文土器片が覆土から19点出土している。

第14号住居跡出土土器（第28図1～5）

1・2は，深鉢形土器の胴部片である。1は，磨消懸垂文を有している。3は，粗い縄文が施されている粗製土器の胴部片である。内面の整形は非常に良好である。第1・2号住居跡出土の加曽利B式土器片に類似している。

4は，本跡北東側のピット2付近から一括して出土した破片を中心に，他の若干の破片が接合



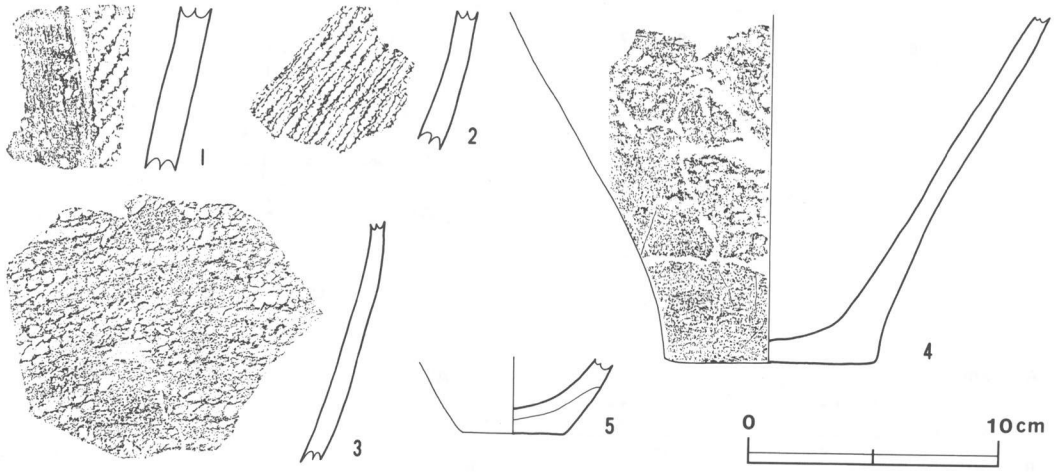
第27図　第14・17号住居跡実測図

したもので，深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての土器である。外面は磨滅していて，縄文も不明瞭となっている。粒の粗い単節縄文ＬＲが斜位回転で施文され条が横走している。胴下半部には，横方向のヘラけずり状の強いナデが観察される。内面は，丁寧な横ナデ調整が施されている。胎土には，小石粒，砂粒が目立ち粗いものであるが，焼成は良好である。色調は，褐色を呈している。外面の一部に黒斑がみられる。底径は8.6cmで，現存高は13.9cmである。加曽利Ｂ式期の粗製土器である。

５は，本跡の覆土から出土した底部片である。外面には沈線がわずかに認められるが，意図的なものかどうかは分からない。外面は縦ナデ，内面はナデが施されている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面がにぶい赤褐色を呈している。底径4.2cmで，現存高は2.8cmである。

１・２・５は加曽利ＥⅢ期のもの，３・４は加曽利Ｂ式期のものと考えられる。

本跡から出土した土器は，少なく時期決定はむずかしい。

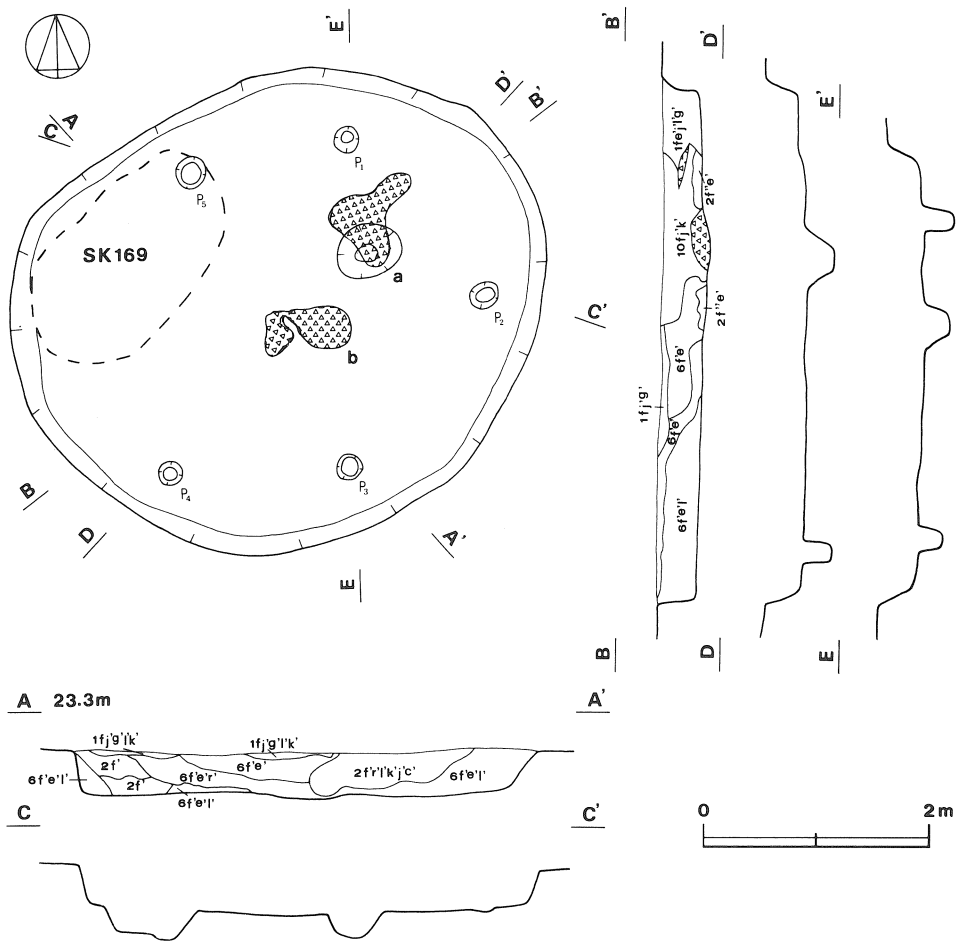


第28図　第14号住居跡出土遺物実測図・拓影図

第15号住居跡（第29・30図）

本跡は，遺跡の北部F6c₃区を中心に確認されたもので，第11号住居跡の北西側９ｍに位置している。北西側で第169号土壙と重複している。第169号土壙との新旧関係は，床面の切り合いから本跡が古いと考えられる。

平面形は，長径4.8ｍ・短径4.0ｍの楕円形で，長径方向は，Ｎ－75°－Ｅを指している。壁は硬

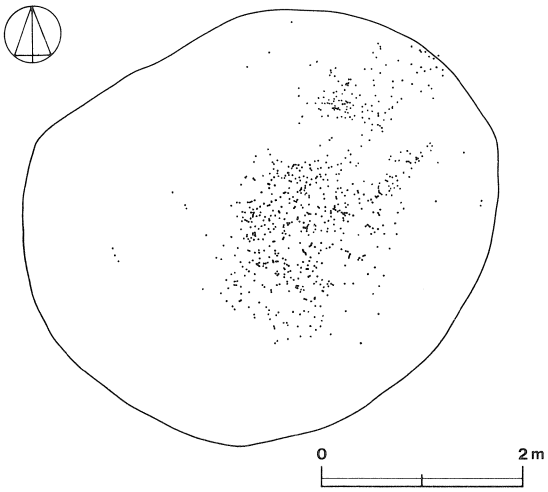


第29図　第15号住居跡実測図

く締まっており，床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，28～32cmと比較的高い。床面はよく踏み固められて硬く締まっており，中央の一部が壁際より一段低く，４～８cmの高低差がみられる。ピットは５か所検出され，規模は径22～28cm・深さ22～32cmで，壁にそってめぐるように配列されている。そのうち１か所は第169号土壙の底面から検出され，推定であるがもう１か所は第169号土壙によって切られたものと考えられる。この６か所を本跡の主柱穴として検討すると，ピット間の距離は等間隔になり，残存の５か所は主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。また，中央に地点貝塚が２か所検出された。床の直上から堆積しているので，住居廃絶直後に捨てられたものと考えられる。

覆土は10層からなり，主に褐色土・暗褐色土・極暗褐色土が堆積している。１・２・５・８層は締まっている。

遺物は，貝以外に，縄文土器片が覆土から大量に出土している。



第30図　第15号住居跡遺物出土状態図

第15号住居跡出土土器（第31～34図１～70）

１は，本跡の北東部の覆土から出土した破片２点と中央部やや南側の覆土から出土の破片１点が接合したもので，波状縁の深鉢形土器の口縁部片である。口縁部は内湾し，幅の狭い無文帯をナゾリにより形成し，波頂部には突起を有している。突起の数は不明である。突起上には太い沈線と縄文が付されている。胴部には全面に縄文が施され，曲線的な磨消帯を構成している。縄文は単節ＲＬで，無文帯直下は横位に，突起上および胴部には縦位に回転施文されている。内面は，横ナデ調整されている。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は，内外面とも暗褐色を呈している。現存高は，11.6cmである。

２は，本跡の中央部，南東部，北東部の覆土から出土の破片が接合したもので，緩い４単位の波状縁を呈する深鉢形土器の口縁部片である。口唇部は少し肥厚し，胴部の器壁は薄いものである。口縁部に幅の狭い無文帯を有し，１列の刺突文が左から右方向へ施されている。以下全面に単節縄文RLを施し，２本組の沈線で曲線的モチーフを描き，沈線間を磨り消している。構成は不明である。内面は横ナデ整形されている。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は，褐色を呈している。推定口径は16.7cmで，現存高は6.9cmである。

3は,本跡の北東側の覆土から出土の口縁部の大破片と中央部の覆土から出土の小破片が接合したもので，口縁部から胴部のくびれ部にかけての破片である。口縁部は内傾し，胴部は強くくびれている。口縁部無文帯は幅１cm程度で狭いが，丁寧な横ナデにより滑沢を有している。内面上半部には縦および斜位のナデ調整が加えられている。くびれ部以下はやや調整が雑である。口縁部無文帯直下には，１条の断面三角形の隆線が貼り巡らされている。以下は無節縄文Lが縦位，斜位に回転施文されている。胎土には，若干の小石粒と微砂を含み，焼成は良好で，色調は暗褐色を呈している。内面は黒褐色である。推定口径は18.8cmで，現存高は12.6cmである。

４は，本跡の東側の覆土から出土した破片３点が接合したもので，深鉢形土器の口縁部片である。

平縁で小さな突起を有しているが，単位数は不明である。口縁部無文帯を１条の貼付隆線で区画し，以下は全面に縄文を施している。縄文原体は単節ＲＬと思われるが，施文が浅く明瞭でないために確実ではない。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが施されている。胎土には，小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は黒褐色を呈している。推定口径は18.8cmで，現存高は7.9cmである。

５は，本跡の中央部から東側と北東側にかけての覆土から出土の破片17点が接合したもので，平縁の小形の深鉢形土器である。全体の３分の１と胴下半部以下を欠損している。外面は磨滅が著しい。口縁部に幅の狭い無文帯を残し，円形刺突文を巡らしている。口縁部が内湾し，胴部が緩くくびれている。胴部には単節縄文ＬＲが，条が横走するように斜位回転で施文されているが，磨滅が激しいために確実ではない。内面の上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが施されている。胎土には石英粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は，外面ににぶい黄褐色の部分と黒褐色の部分がみられ，内面は褐色を呈している。推定口径は12.2cmで，現存高は11.5cmである。

６は，本跡のほぼ中央部の覆土から出土の破片などが接合したもので，深鉢形土器の口縁から胴部にかけてが残存するものである。口縁部が内傾し，ゆるい弁状の突起が４～５か所つけられていたものと考えられる。口縁部には幅の狭い無文帯を有し，以下は全面に無節縄文Ｌが縦位回転されている。器壁は，胴下半部に至り厚くなっている。内面上半部には横ナデの後に縦ナデが加えられ，若干の炭化物も付着している。胎土には小石粒，微砂を含み，焼成は良好である。色調は，内外面ともに暗褐色を主としているが，一部に赤褐色の部分がみられる。推定口径は22.0cmで，現存高は20.7cmである。

７は，本跡の東側の覆土から出土の破片２点と東壁際および南側の覆土から出土の各１点の破片が接合したもので，深鉢形土器の底部片である。胴下半部には縦ナデが加えられた後に，縄文ＬＲが施文されている。施文は粗雑である。底部は突出気味で，底面近くは強い横ナデ調整が施され，浅い沈線状を呈している。内面は，縦ナデが加えられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗灰褐色を呈している。推定底径は6.2cmで，現存高は10.2cmである。

８は，本跡の中央部および南東側の覆土から出土した破片が接合したもので，深鉢形土器の口縁から胴部にかけての破片である。口縁部には約２cm幅の無文帯を有し，以下全面に単節縄文ＲＬが縦位に回転されている。きれいな整った縄文である。内面は，横ナデ調整が加えられている。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は，灰褐色から褐色を呈している。推定口径は23.6cmで，現存高は12.9cmである。

９は，本跡の北東側の壁近くの覆土から正位で出土した深鉢形土器の底部片である。胴下半の残存部はきれいに打ち欠かれている。器面にはヘラ状工具による条線文が施されている。底面近く

は縦ナデを主とし，部分的に横ナデも認められる。底面は平坦ではなく不安定である。内面は横ナデ調整痕が砂粒の移動により明瞭に観察できる。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は，外面が褐色で，内面が暗褐色を呈している。底径は6.3cmで，現存高は9.2cmである。

10は，本跡の中央部から東側にかけての覆土から出土した破片20数点が接合したもので，深鉢形土器の胴部から底部までが残存するものである。胴部には，全体に無節縄文Lが縦位に回転されている。底部近くは雑な横ナデが加えられている。残存部内面の上位には，横ナデ，下位には縦ナデが施されている。器壁は，比較的薄い。残存部上端は，輪積み部で剝(は)がれている。上端の一部には炭化物の付着が認められる。胎土には微砂を含み緻密で，焼成は良好であり，色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。底径は6.7cmで，現存高は15.5cmである。

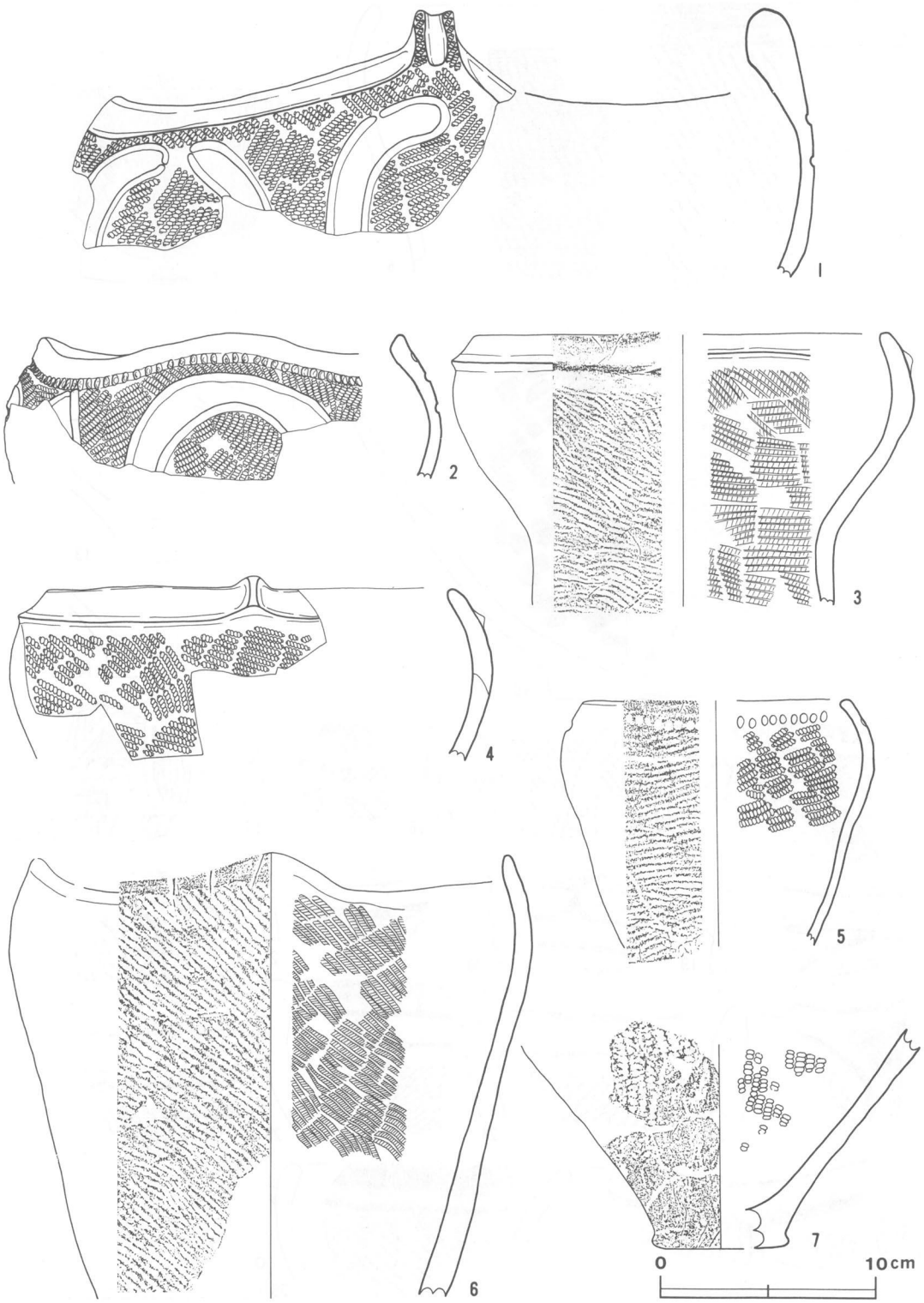
11は，本跡の中央やや東側の覆土から正位で出土した台付土器の台部片である。台部は完存しているが，上部は欠損しており，残存部内外面とも縦ナデが加えられている。台部には円孔が4か所穿(うが)たれており，孔は上方から下方にむけてあけられている。胎土には小石粒，砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。底径は5.2cmで，現存高は4.2cmである。

12は，本跡の西南西側の覆土から逆位で出土した台付土器の台部片である。外面は横ナデが施され，上部の内面および台部の内面にもナデが加えられている。台部は短く，脚端部は磨滅している。胎土には，小石粒，砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗灰褐色を呈している。推定底径は5.0cmで，現存高は2.3cmである。

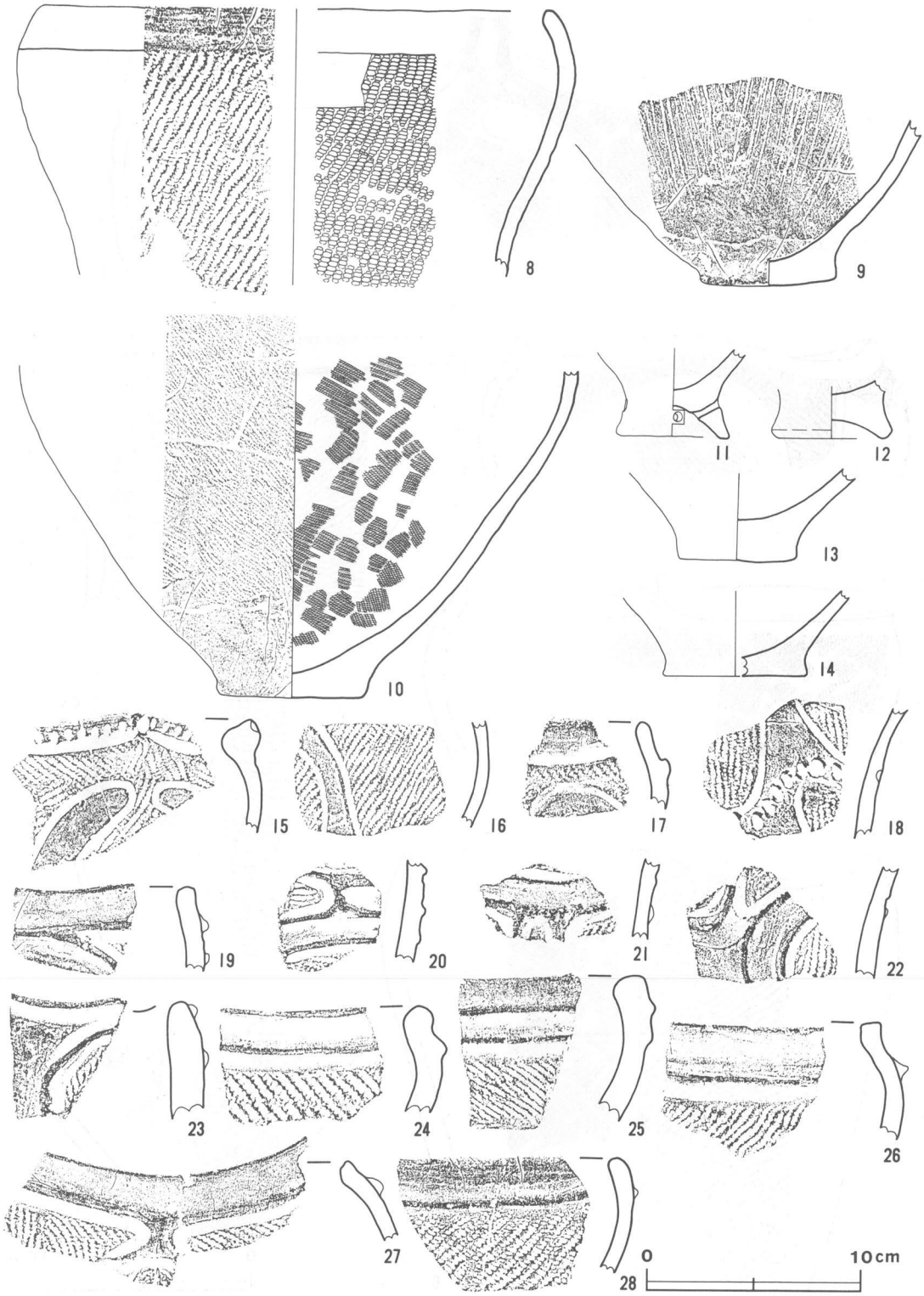
13は，本跡の中央部やや南東側の覆土から出土した破片4点が接合した底部片である。外面には縦ナデが施され，底面近くは横ナデが施されている。また，内面にも横ナデが施されている。内面には炭化物が付着している。胎土には，小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は，暗褐色を呈している。底径は5.7cmで，現存高は4.0cmである。

14は，本跡の北東側の覆土から正位で出土した底部片である。外面は縦ナデを施し，底面の近くは横ナデが施されている。内面は縦ナデが加えられ，炭化物の付着も認められる。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が灰黄褐色を呈している。推定底径は6.8cmで，現存高は3.7cmである。

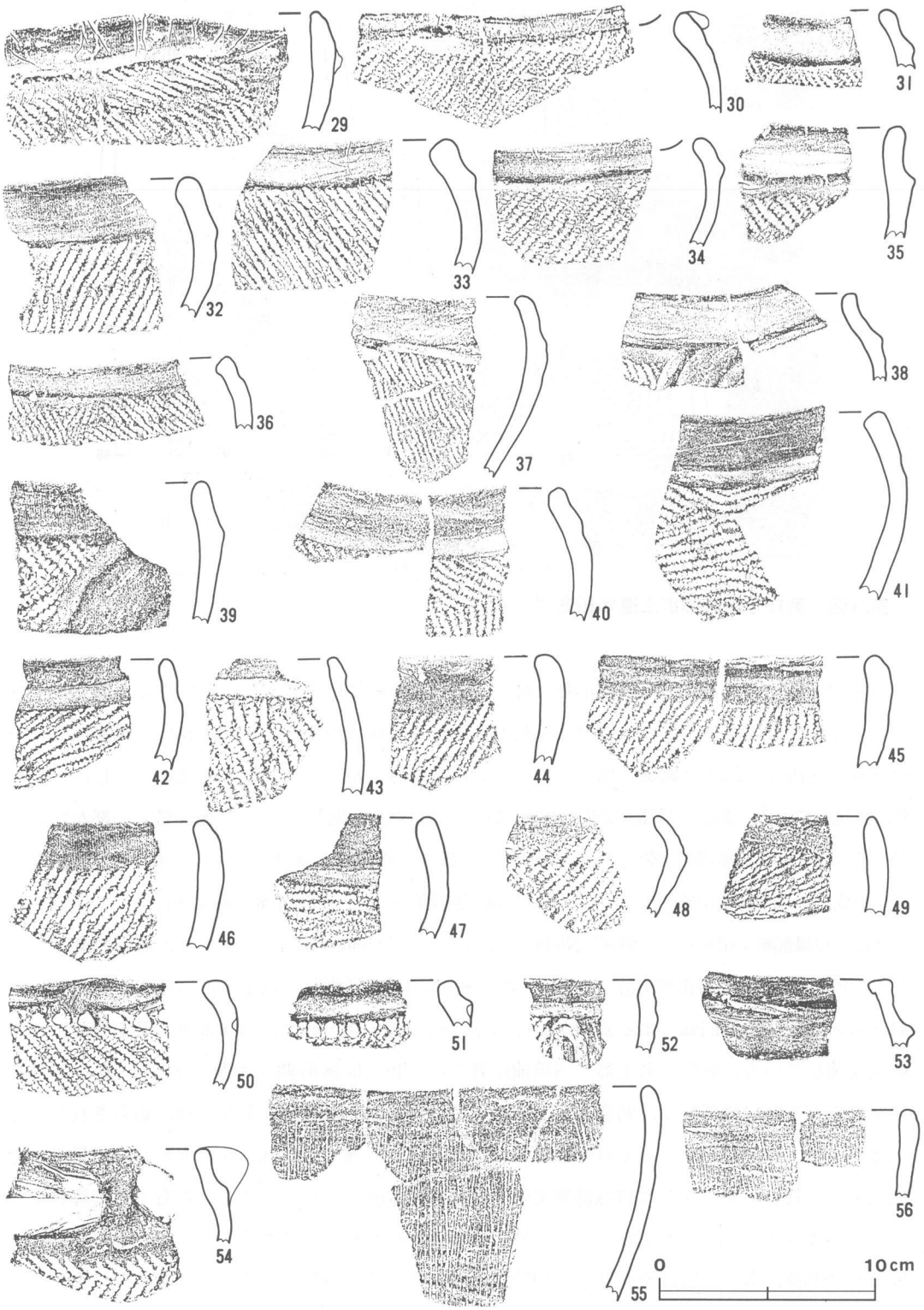
15は，波状縁を呈する口縁部片で，刺突文が波状縁に沿って巡り，波頂部には円形の刺突を有している。胴部には曲線的モチーフが磨消手法で表現されている。16は，2本単位の細い沈線による逆U字状文が施されている。17は，黒色を呈する口縁部片で，沈線による文様が描かれている。18は，胴部のくびれ部片で，U字状，逆U字状の区画文が上下に付され，くびれ部に下から突き上げるような刺突文が並んでいる。特異なものとして注目される。19～22は，隆線による区画を有する口縁部，口辺部，胴部片である。区画内に縄文を充填している。23～25は強いナゾリを加えた隆線で口縁部文様帯を区画しているもので，胴部にも同様な手法によるモチーフが描か



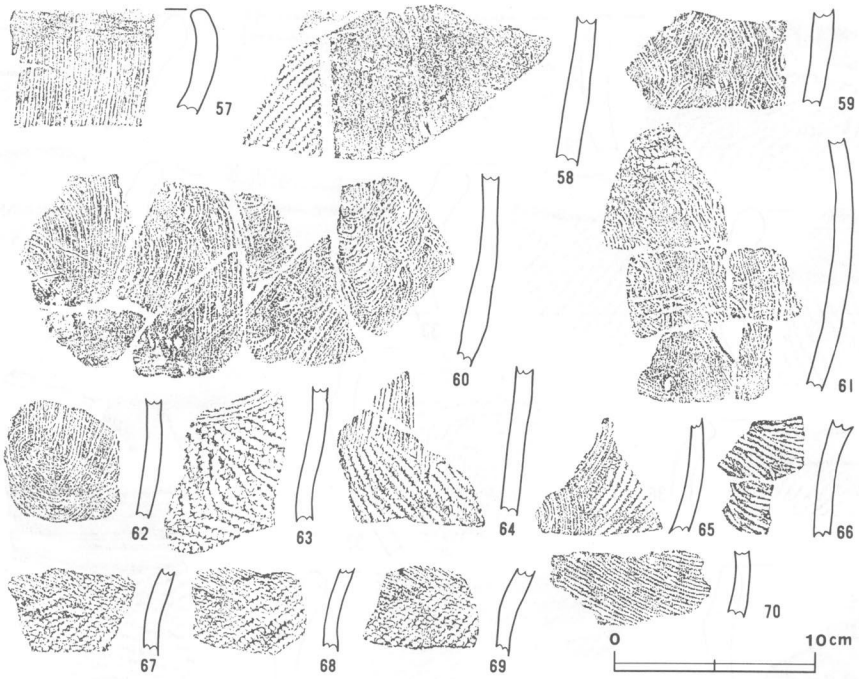
第31図　第15号住居跡出土遺物実測図　(1)



第32図　第15号住居跡出土遺物実測図・拓影図　(2)



第33図　第15号住居跡出土遺物拓影図　(3)



第34図　第15号住居跡出土遺物拓影図　(4)

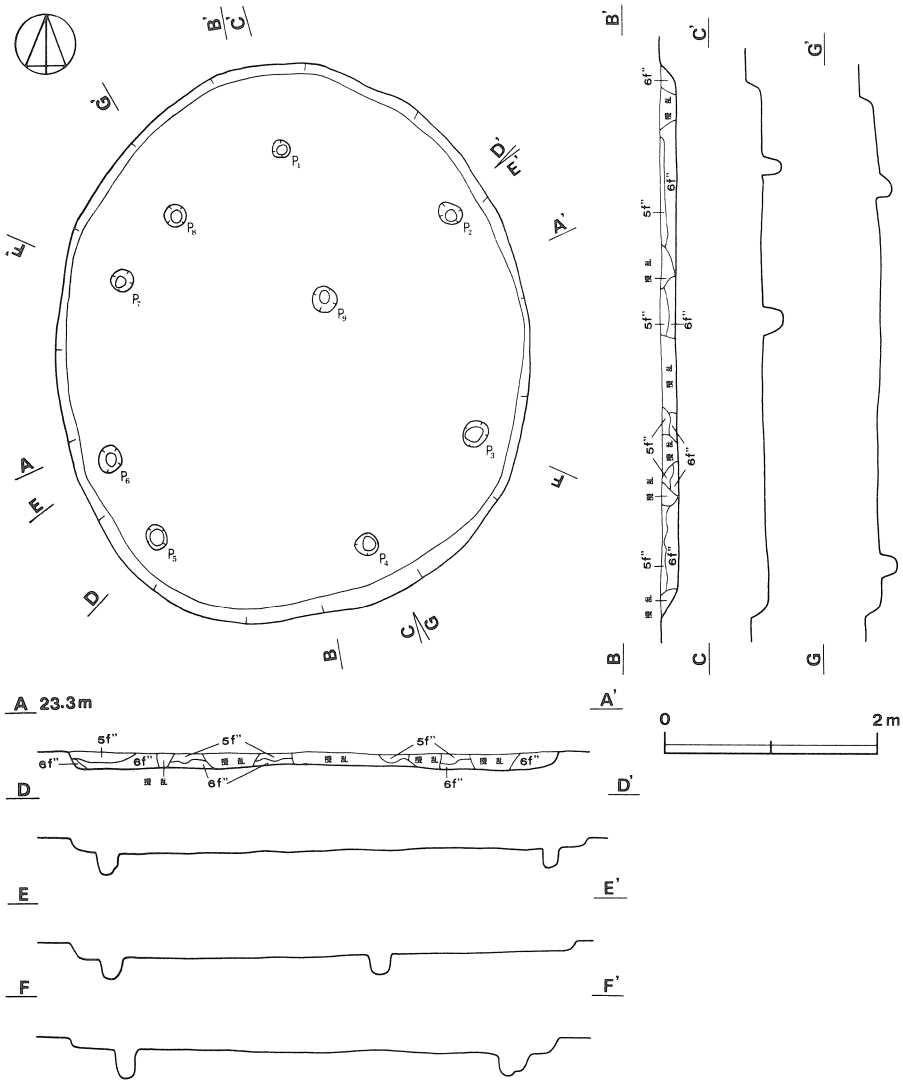
れるものと考えられる。26は口縁部無文帯を1条の微隆線で区画され，以下は全面に縄文が施されている。27は隆線によって口縁部文様帯を区画し，口縁は内傾している。28は口縁部無文帯を微隆線で区画し，以下は縄文を施している。29は微隆線に沿ってナゾリ状の沈線を付し，以下に縄文を施している。30は口縁部無文帯を有し，以下全面に縄文が施されており，無文帯の一部が突出している。31～35は口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し，以下縄文が施されている。36は幅の狭い無文帯を形成し，以下縄文が施されている。37は口縁部無文帯を有し，以下全面に縄文が付されている。38・39は，口縁部無文帯を有し，胴部に微隆線によるモチーフが描かれており，39はやや器面が磨滅している。40～43，47は口縁部無文帯を1条の沈線ないしは凹線で区画し，以下全面に縄文を施している。41・47の縄文は斜位回転による施文が主である。44～46・48・49は，口縁部無文帯を残し，以下縄文を施している。48は小形土器で内湾曲が著しい。49には無節縄文が施されている。50は緩い突起を有する口縁部片で，刺突文が1条巡っている。51は口縁部に刺突文列が巡らされている。52は沈線で文様が描かれている口縁部の小片である。53は無文の口縁部片であるが，口唇部が角頭状を呈し特異である。54は口縁部無文帯を微隆線で区画しているもので，左右からの隆線がせり上りつまみ状の突起を形成している。55～57はいずれも縦位の条線文を有している口縁部片で，56はやや器壁が薄く，57はやや厚手で明瞭な口縁部無文帯を有している。58は幅の広い磨消帯を有する胴部片である。胎土には石英，長石粒をかなり多く含んでいる。59・60・62は曲線的条線文

が付されている胴部片である。61・63～65は縄文と条線文が併用されている胴部片である。64は条線文が先で縄文が後である。66～70はいずれも縄文だけが施文されている胴部片である。67～69は単節縄文と無節縄文が同一器面に施されている。66は胴部のくびれ部片で，無節縄文が施文されている。70は細かな縄文を施している。

本跡から出土した土器は，加曽利EⅢ式期の後半からEⅣ式期の前半にかけてのものと思われ，本跡の時期は加曽利EⅢ式期からEⅣ式期にかけての時期と考えられる。

第16号住居跡（第35図）

本跡は，遺跡の北西部F4h₀区を中心に確認されたもので，第14号住居跡の北西側4.5mに位置



第35図　第16号住居跡実測図

している。

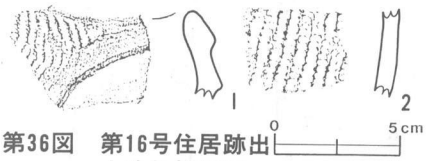
平面形は，長径5.2m・短径4.5mの楕円形で，長径方向は，N－6°－Eを指している。壁は床面から垂直に立ち上がり，締まっている。壁高は，8～17cmである。床面は軟らかく，北側から南側にかけて傾斜をし，その差は4～8cmの高低差である。ピットは9か所検出され，規模は径18～26cm・深さ15～27cmである。P_1～P_8は壁にそって八角形状に配列されているところから主柱穴と考えられる。炉は検出されていない。

覆土は3層で，主に暗褐色土と褐色土が堆積している。3層とも締まりや粘性はない。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第16号住居跡出土土器（第36図1～2）

1は，波状縁を呈する深鉢形土器の口縁部片で，波底部である。隆線による区画と縄文を施文している。胎土には石英粒を少し含んでおり，焼成は良好で，色調は褐色を呈している。2は，縄文だけの胴部片である。いずれも加曽利EⅢ式期のものと思われる。



第36図　第16号住居跡出土遺物拓影図

本跡から出土した土器は，少なく時期決定はむずかしい。

第17号住居跡（第27図）

本跡は，遺跡の北西部F5j_3区に確認されたもので，北側で第14号住居跡と重複して位置している。

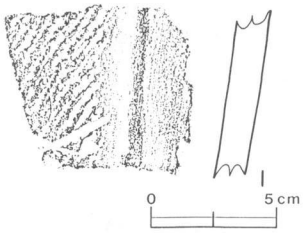
平面形は，重複のため長径5.2m・短径3.9m（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，N－84°－Wを指している。壁は南側と東側の一部が床面から垂直に立ち上がっているほかは，外傾して立ち上がっている。壁高は，12～14cmである。床面は全体として平坦であるが，南東側と南側の一部がほかの床面に比べて3～6cm低くなっている。ピットは6か所検出され，規模は径26～34cm・深さ21～40cmである。6か所とも壁にそって六角形状に配列されているので，主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

覆土は5層からなり，主に暗褐色土と褐色土が堆積している。5層とも締まりや粘性はない。

遺物は，縄文土器片が覆土から1点出土している。

第17号住居跡出土土器（第37図1）

1は，深鉢形土器の胴部片で，隆線が垂下し，縄文が施されている。胎土には微砂を含み緻密で，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。加曽利EⅢ式期の土器片と思われる。器面には磨滅や損傷があり，この土器片1点で本跡の時期決定をすることは困難である。



第37図　第17号住居跡出土遺物拓影図

第18号住居跡（第38図）

本跡は遺跡の北西部F4i_7区を中心に確認されたもので，第16号住居跡の西側11mに位置している。

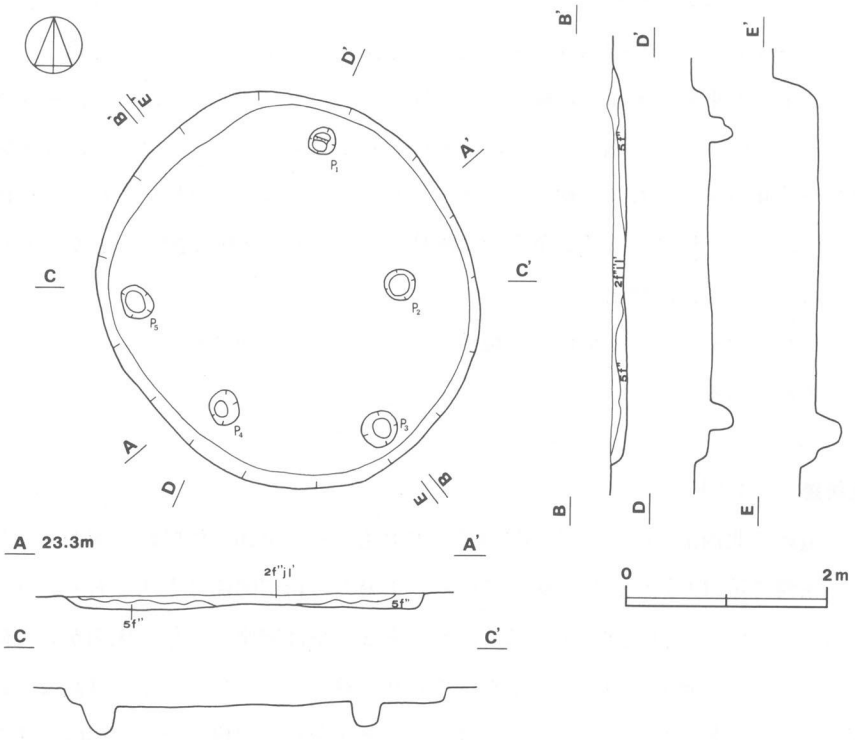
平面形は，長径4.1m・短径3.7mの楕円形で，長径方向は，N－20°－Eを指している。壁は北西側がやや高くなっているが，どの壁も床面からやや垂直ぎみに立ち上がっており，締まっている。壁高は，14～23cmである。床面は軟らかく，南西側と西側が4～5cm低くやや傾斜をしている。ピットは5か所検出され，規模は径28～36cmの円形や楕円形で，深さは24～28cmと一定している。壁にそって五角形状に配列されている。しかもピット間の距離はほぼ等間隔であるので5か所とも主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

覆土は2層で，暗褐色土と褐色土が自然堆積している。2層とも締まりや粘性はない。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第18号住居跡出土土器（第39図1～4）

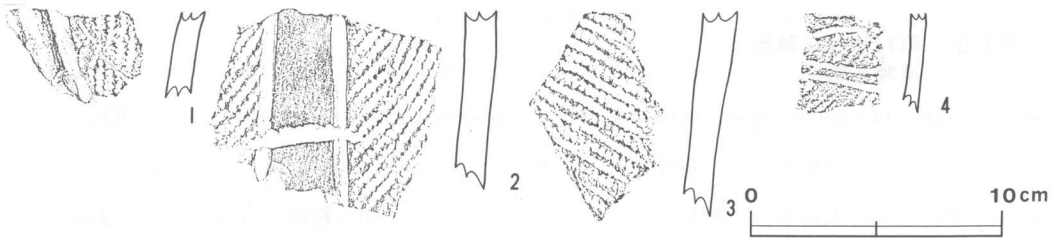
1～3は，深鉢形土器の胴部片である。1は隆線による区画を有している。2は磨消懸垂文を



第38図　第18号住居跡実測図

垂下させている。3は縄文だけの破片である。いずれも褐色を呈している。4は，薄手の磨消縄文を有する胴部片で，磨滅が認められる。1～3は加曽利EⅢ式期のもの，4は加曽利B式期後半のものと考えられる。

本跡から出土した土器片は，少なく時期決定はむずかしい。



第39図　第18号住居跡出土遺物拓影図

第19号住居跡（第40図）

本跡は，遺跡の北西部F4i_8区を中心に確認されたもので，第18号住居跡の東側2mに位置している。南西側から北側にかけて第9号溝が横切り，南東側で第122・123号土壙と重複している。第122・123号土壙との新旧関係は，土層からみて本跡が古く，溝との新旧関係も，底面の切り合いから本跡が古いと考えられる。

平面形は，長径3.7m・短径3.4mの不整円形で，長径方向は，N－88°－Wを指している。壁は軟らかく，北東側と東側が床面から緩やかに外傾して立ち上がっているほかは，垂直ぎみに立ち上がっている。壁高は，10～12cmである。床面は北側と北東側が3～6cm高く，北東側から南西側にかけてやや傾斜をしており，軟らかい床である。ピットは5か所検出され，規模は径20～30cm・深さ8～23cmで，壁にそって五角形状に配列されている。規模や配列などから5か所とも主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

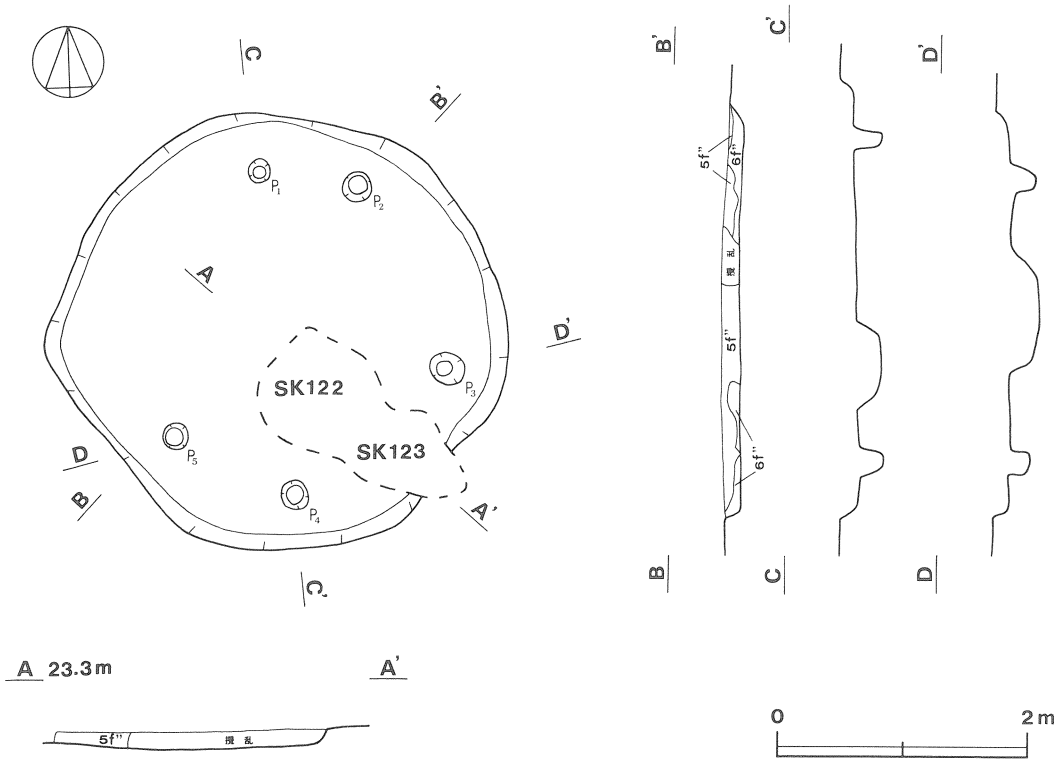
覆土は3層からなり，すべて褐色土が堆積している。粘性や締まりはない。

遺物は，皆無である。

第20号住居跡（第41図）

本跡は，遺跡の北西部G4a_9区を中心に確認されたもので，第16号住居跡の南西側6.5mに位置している。東側で第119号土壙と重複している。土壙との新旧関係は不明である。

平面形は，長径5.0m・短径4.6mのほぼ円形である。壁は南側の一部が床面から外傾して立ち上がっているほかは，垂直ぎみに立ち上がっており，締まりをおびている。壁高は，12～17cmである。床面は平坦で軟らかである。ピットは6か所検出され，規模は径26～34cm・深さ16～27cmである。P_6は深さが16cmと浅いが，ほかは深さが一定している。P_1～P_5は深さが一定しており，



第40図　第19号住居跡実測図

壁にそって五角形状に配列されているので，主柱穴と考えられる。炉は検出されていない。

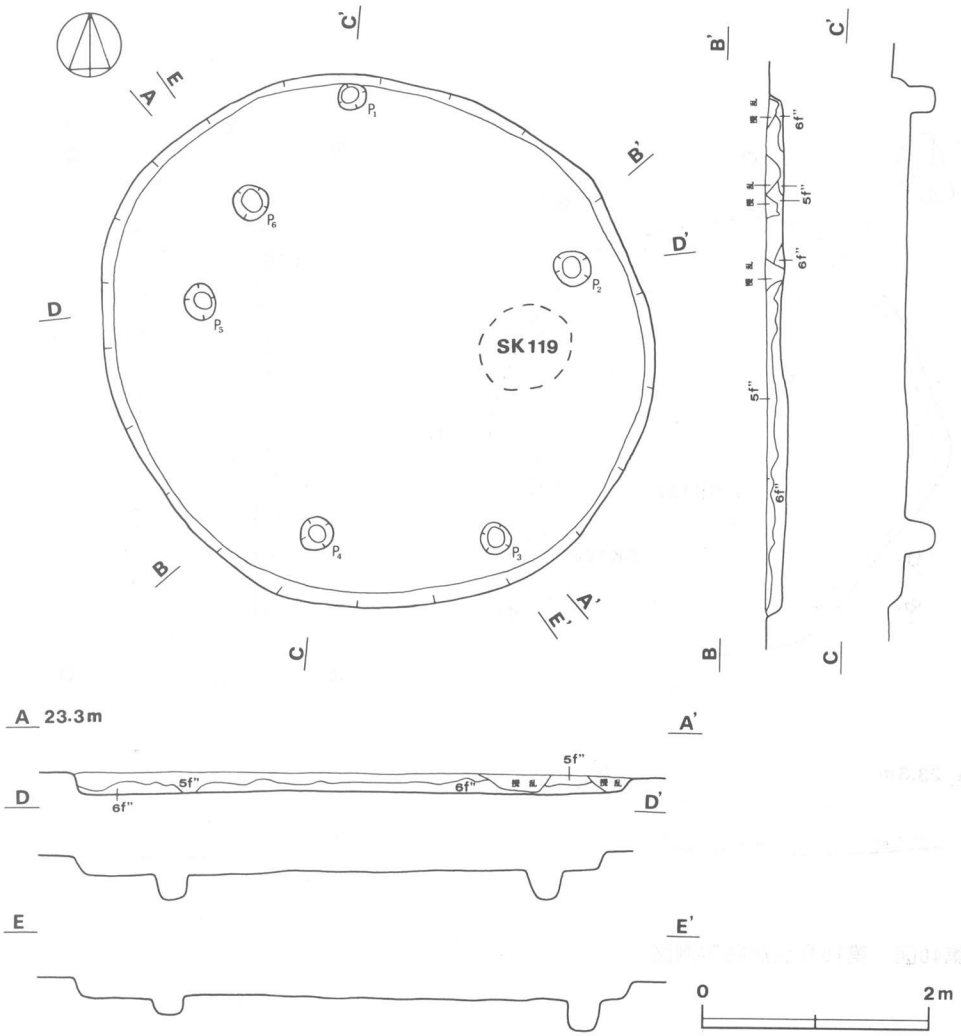
覆土は３層からなり，主に褐色土・暗褐色土の順で堆積している。３層とも締まりや粘性はない。

遺物は，縄文土器片が覆土から３点出土している。

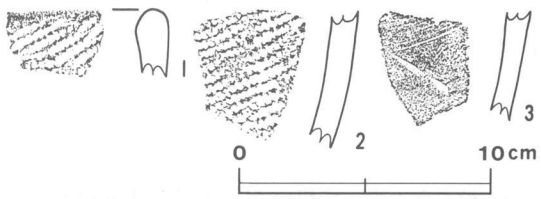
第20号住居跡出土土器（第42図１～３）

１・２は縄文が施された破片で，２の胎土には小石粒を含んでいて粗いが，１は胎土が緻密である。ともに加曽利Ｅ式期のものと思われる。３は，擦痕状の整形痕を有する胴部片で，時期は不明である。

本跡から出土した土器片は，少なく時期決定はむずかしい。



第41図　第20号住居跡実測図

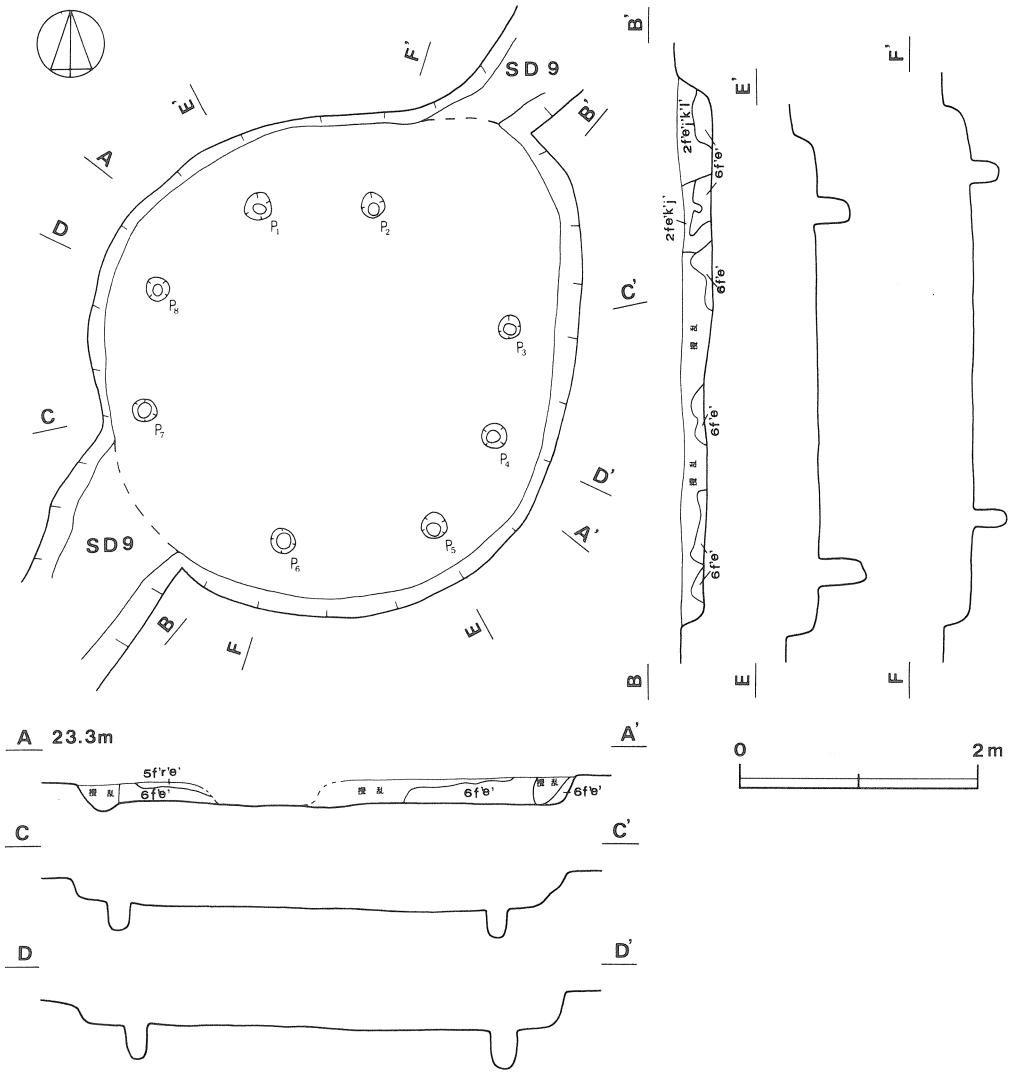


第42図　第20号住居跡出土遺物拓影図

第21号住居跡（第43図）

本跡は，遺跡の北部F5c$_4$区を中心に確認されたもので，第６号住居跡の南側1.5ｍに位置している。本跡の北側から南西側にかけて第９号溝と重複している。溝との新旧関係は，底面の切り合いから本跡が古いと考えられる。

平面形は，長径4.6ｍ・短径4.2ｍの楕円形で，長径方向は，N－34°－Eを指している。壁はよく締まっており，北東側が床面から外傾して立ち上がっているほかは，垂直に立ち上がっている。

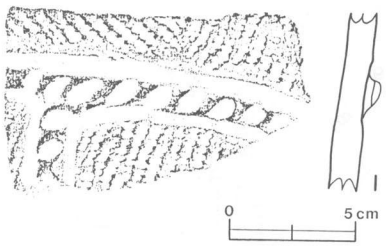


第43図　第21号住居跡実測図

壁高は，16～29cmである。床面はよく踏み固められており，西側から東側にかけて6cm差の傾斜をしている。ピットは8か所検出され，規模は径20～24cm・深さ24～41cmである。この8か所のピットは壁にそって円形に配列され，ピット間の距離，壁からの距離は一定であるので，主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

覆土は7層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。全体として締まりがなく，ざくざくした堆積である。

遺物は，縄文土器片が覆土から3点出土している。



第44図　第21号住居跡出土遺物拓影図

第21号住居跡出土土器（第44図１）

１は，深鉢形土器の胴部片である。横位と縦位の押圧痕を有する貼付隆帯が特徴的である。器面は磨滅が著しい。胎土には微砂が混じるが良好である。加曽利ＥⅢ式期のものと思われるが，類例はあまりみられない。

本跡から出土した土器は，少なく時期決定はむずかしい。

第22号住居跡（第45図）

本跡は，遺跡の北西部F5j_4区を中心に確認されたもので，第17号住居跡の東側0.5ｍに位置している。西側で第76号・118号土壙とそれぞれ重複している。第76号・118号土壙との新旧関係は不明である。

平面形は，長径4.2ｍ・短径3.6ｍの不整楕円形で，東側がやや内側へ凹んでいる。長径方向は，N－68°－Eを指している。壁は軟らかく，北東側と東側が床面から垂直に立ち上がっているほかは，緩やかに立ち上がっている。壁高は，８～14cmである。床面は全体的に平坦で，よく踏み固められているが，中央が周囲に比べて４cm低くなっている。ピットは６か所検出されている。P_1～P_4・P_6は細く，径22～28cm・深さ16～28cmの規模であるが，P_5は径48cm・深さ66cmと太くて深いものである。P_1・P_2・P_4・P_6は深さが比較的一定しており，壁にそって台形状に配列されているので，主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

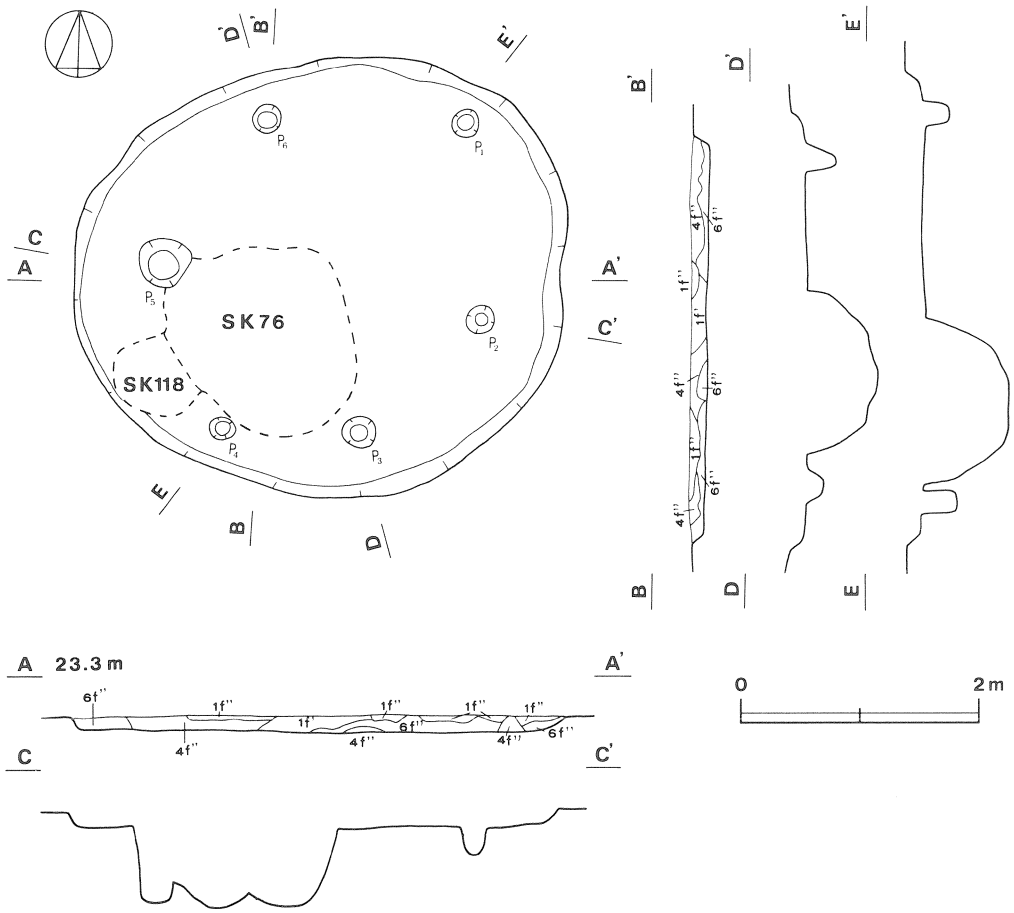
覆土は４層からなり，主に褐色土・暗褐色土が堆積している。４層とも締まりや粘性はない。

遺物は，皆無である。

第23号住居跡（第46図）

本跡は，遺跡の北部F5b_9区を中心に確認されたもので，第１号住居跡の南東側0.3ｍに位置している。南西側から北側にかけて第７号溝，南東側から北東側にかけて第８号溝，南東側で第61Ａ号土壙とそれぞれ重複している。溝や土壙との新旧関係は，土層から本跡が最も古く，次いで第61Ａ号土壙，第７・８号溝の順と思われる。

平面形は，長径5.2ｍ・短径4.2ｍ（推定）の楕円形状と思われ，長径方向は，N－35°－Eを指している。残存している壁は締まりがなく軟らかで，床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は，10～15cmである。床面は平坦で軟らかである。ピットは10か所検出され，規模は径20～30cm・深さ18～39cmで，そのうちP_2・P_3・P_8・P_{10}は深さが一定しており，対角線上に配列



第45図　第22号住居跡実測図

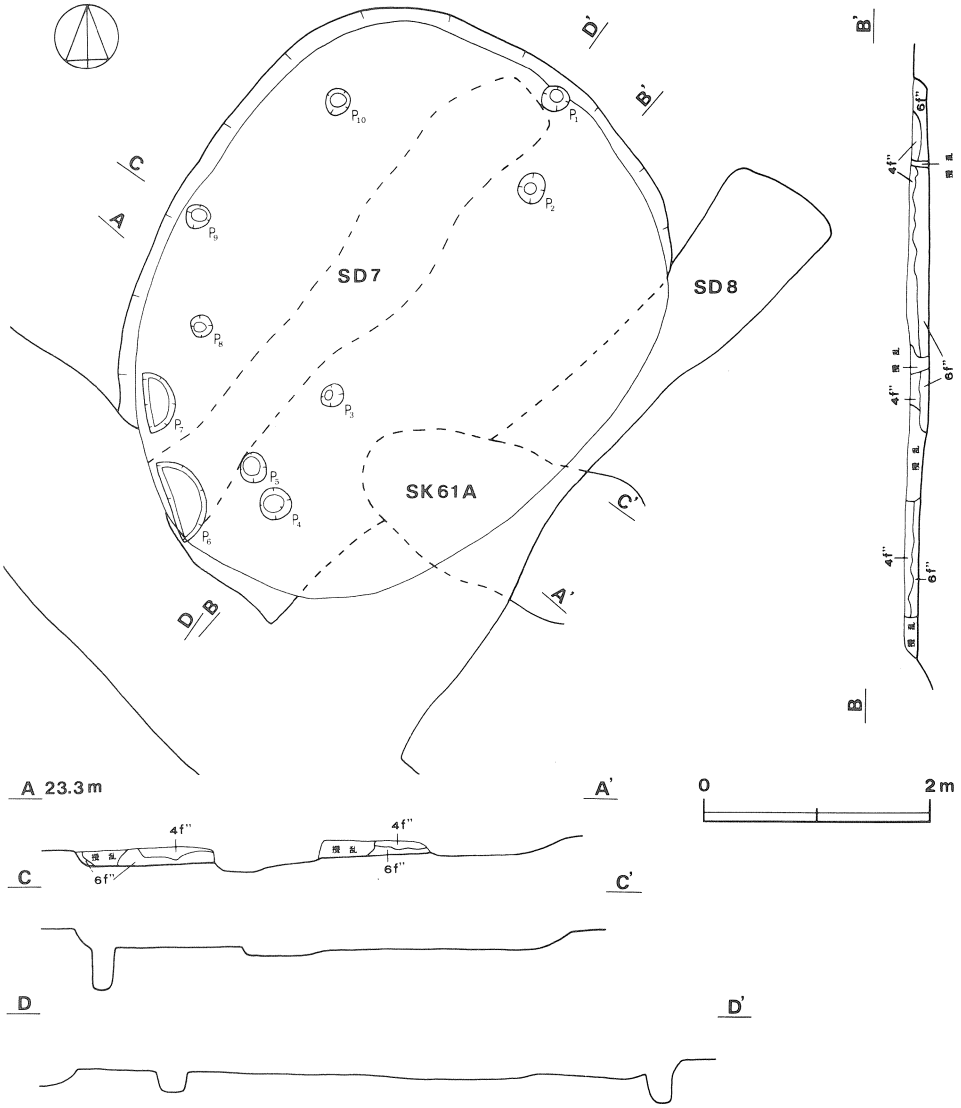
されているので，主柱穴と考えられる。東側・南東側のピットは第８号溝で欠損されたと考えられる。炉は，検出されていない。

覆土は３層からなり，１層は攪乱で，２・３層は褐色土が自然堆積している。

遺物は，縄文土器片が覆土から２点出土している。

第23号住居跡出土土器（第47図１～２）

１は，深鉢形土器の胴部片で，２種の縄文原体を使用している。上半部は粒の粗い縄文で，下半部は粒の細かい縄文である。また，拓影図の右端には棒状施文具による沈線文がみられる。縄文原体はともに単節縄文ＬＲの縦位回転である。類例は少ないものと思われる。２は，縄文だけの小片であり，胎土に石英粒や雲母片が多く含まれている。色調は，１・２ともに褐色を呈している。



第46図　第23号住居跡実測図

本跡から出土した土器は，少なく時期決定はむずかしい。

第24号住居跡（第48図）

本跡は，遺跡の北部F5c₀区を中心に確認されたもので，第23号住居跡の南東側0.5ｍに位置している。北西側で第61Ｂ号土壙，南側で第120号土壙と重複している。第61Ｂ号・120号土壙との新旧関係は不明である。

第47図　第23号住居跡出土遺物拓影図

平面形は，径4.2ｍで，東側がやや外へ突き出た形の不整円形である。壁はよく締まっており，東側の一部が床面から外傾して立ち上がっているほかは，垂直に立ち上がっている。壁高は，12～16cmのほぼ一定した高さである。床面は平坦で，よく踏み固められている。ピットは10か所検出され，規模は径20～32cm・深さ11～56cmで，北側のP_1だけが深さが56cmと比較的深い。不規則な配列のため，主柱穴は判別できない。炉は，検出されていない。

覆土は７層からなり，主に黒褐色土・褐色土・暗褐色土の順で堆積している。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第24号住居跡出土土器（第49図１～５）

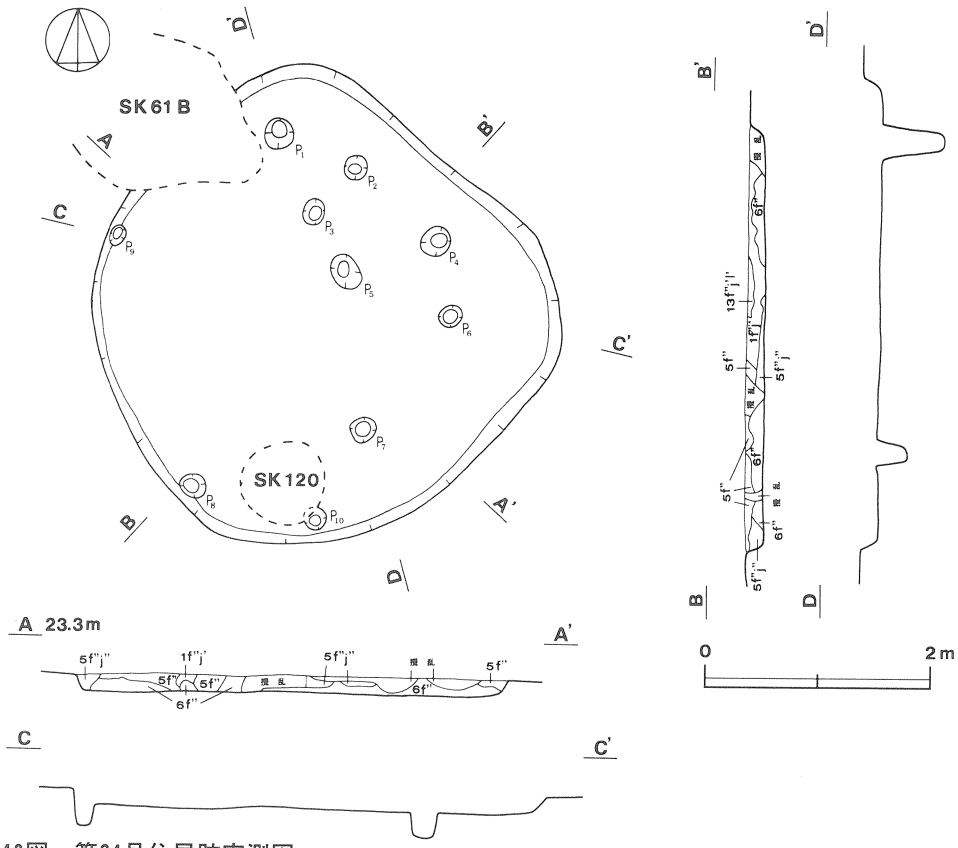
１は，第21号住居跡出土の第44図１と同一個体の深鉢形土器であるが接合はできない。色調は褐色を呈している。２は，薄手の胴部片で磨消懸垂文を有している。３は，条線文が施されている口縁部片である。４・５は，縄文だけの胴部片である。いずれも加曽利ＥⅢ式期のものと思われる。

本跡から出土した土器片は少ないが，本跡は加曽利ＥⅢ式期のものと推定される。

第25号住居跡（第50・51図）

本跡は，遺跡の北部F6i_2区を中心に確認されたもので，第11号住居跡の南東側16ｍに位置している。

平面形は，長径4.3ｍ・短径3.9ｍの不整円形で，南東側が内側へ凹んでいる。壁は硬く，南壁と西壁の一部が床面から外傾して立ち上がっているほかは，垂直に立ち上がっている。壁高は，６～12cmである。床面はよく踏み固められており，北東側が南西側に比べて６cmほど高く，北東側から南西側にかけて傾斜をしている。ピットは８か所検出されているが，規模はP_3（径56cm・深さ114cmの円形）・P_7（径70cm・深さ67cmの楕円形）を除いて，ほかは径22～26cm・深さ19～33



第48図　第24号住居跡実測図

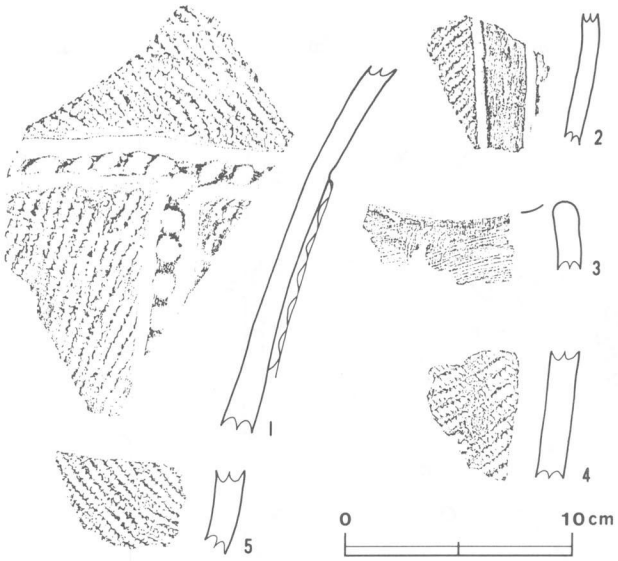
cmである。P_3・P_7を除いたピットが，壁にそって六角形状に配列されているので，主柱穴と考えられる。炉は本跡の中央に検出され，径76cmの円形で，床面を30cm程掘り凹めた地床炉である。炉壁や炉床が赤く焼けており，長期間の使用がうかがえる。貝が中央から東側にかけて，床面から覆土の上部まで堆積している。炉の覆土にも含まれているところから，住居廃絶後，投棄されたものと考えられる。

覆土は4層からなり，主に褐色土・極暗褐色土が堆積している。

遺物は，縄文土器片及び土製品が覆土から93点出土している。

第25号住居跡出土土器（第52～53図1～25）

1は，本跡の中央部の覆土から出土した大破片2点が接合したものである。緩い4単位の波状縁を呈する深鉢形土器の口縁部片である。口縁部無文帯を1条の太い沈線で区画し，以下は縄文が施文されている。胴部には逆U字状のモチーフを描き，区画内を磨消している。縄文は単節LRで横位回転を主としている。内面は横ナデにより調整されている。胎土には砂粒を含み，焼



第49図　第24号住居跡遺物出土拓影図

成は良好である。色調は，外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。外面の一部に黒斑がみられる。推定口径は40.3cmで，現存高は16.7cmである。

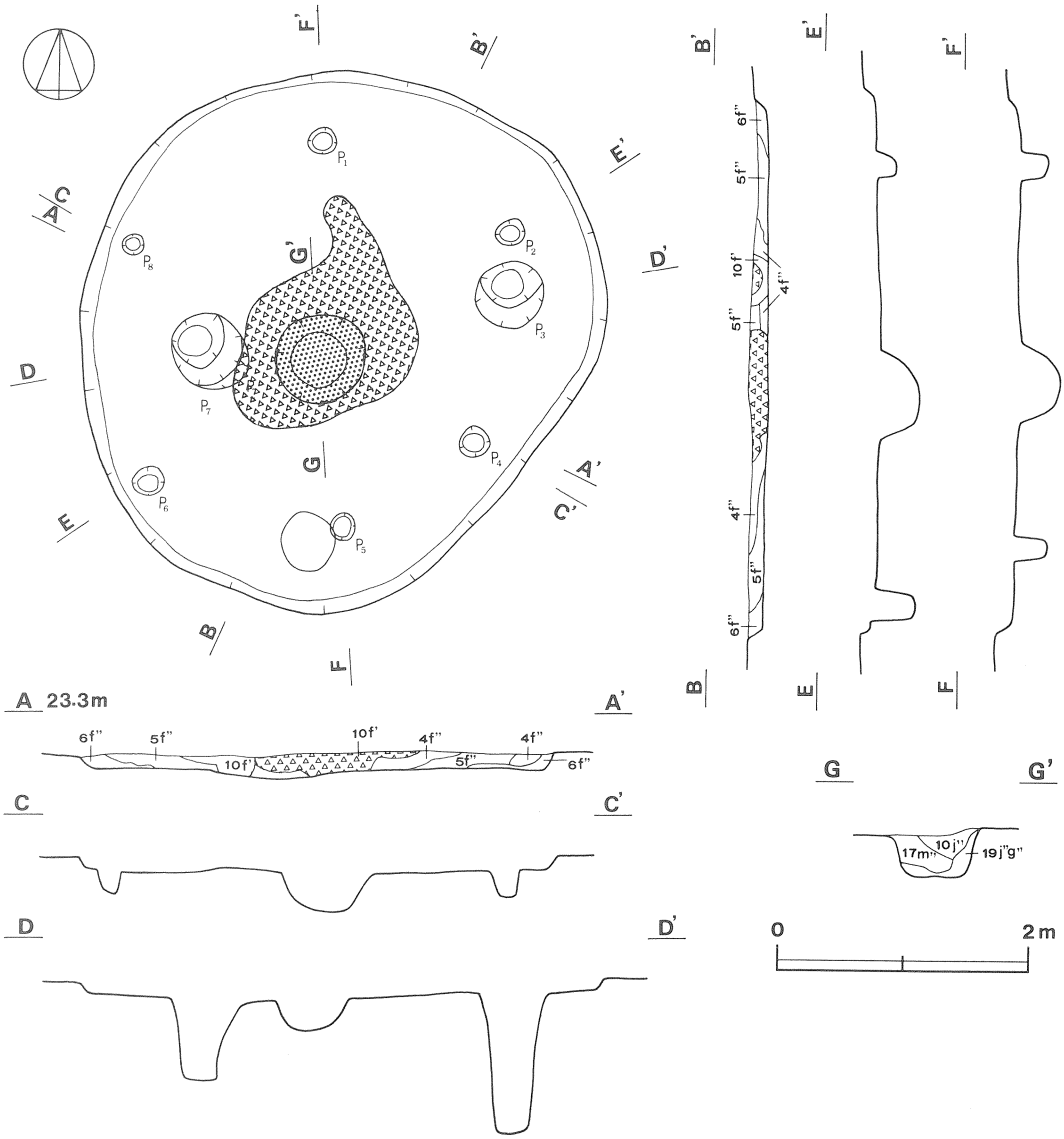
2は，本跡の中央部の覆土から出土した底部片である。上端部は輪積み部分できれいに剝がれており，それをみると輪積みの粘土の幅は約3cmであることが判る。外面には垂下する磨消懸垂文が施され，区画内には単節縄文ＲＬが縦位回転により施文されている。磨消帯および底部近くは，縦位のナデ整形が施されている。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデである。外面の一部に炭化物の付着痕がみられる。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が灰褐色を呈している。底径は6.4cmで，現存高は12.0cmである。

3は，本跡の中央部やや南側の覆土から正位で出土した底部片である。外面上端部にわずかに縄文が認められるが，原体の撚りは不明である。外面は縦ナデを加え，底面近くは丁寧に横ナデされている。内面は縦ナデを施している。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗灰褐色を呈している。底径は5.8cmで，現存高は5.3cmである。

4は，本跡の覆土から出土した底部片で，外面に無節縄文Ｌを縦位回転で施文している。底面近くは横ナデされている。内面には軽いナデを加え，炭化物がわずかに付着している。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面がにぶい赤褐色，内面が暗褐色を呈している。推定底径は5.6cmで，現存高は3.1cmである。

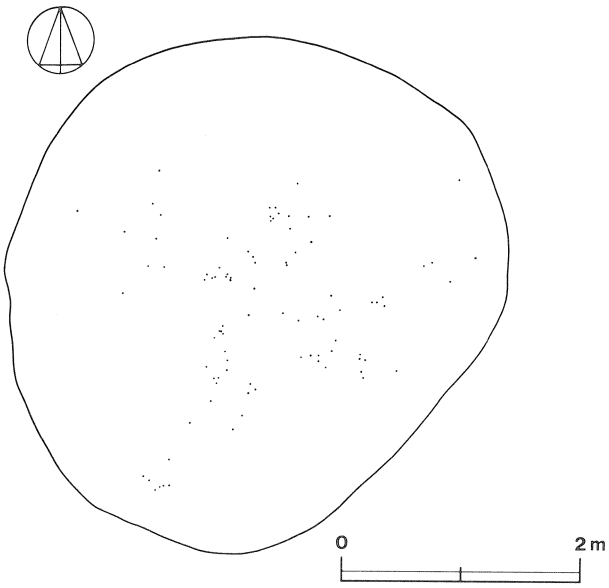
5は，本跡の北東側の覆土から正位で出土した底部片である。外面に単節縄文RLが縦位回転で施文され，底面近くの幅1cmほどだけが横ナデされ無文となっている。内面はナデが施されている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は内外面ともに灰褐色を呈している。推定底径は11.6cmと大きく，大形の深鉢形土器の底部と思われる。現存高は5.2cmである。

6・7は，口縁部と胴部の境が稜をなしているもので，6は黒色を呈している。8は断面三角形の隆線によるモチーフが描かれている胴部片である。9～13は，口縁部無文帯を1条の沈線ないしは凹線を巡らして区画し，以下は縄文を施している。10は赤褐色を呈している。14は，無節縄



第50図　第25号住居跡実測図

文が施されている口縁部の小片である。口縁部にわずかの無文帯を残し，口唇部断面が尖っている点に特色がある。15は，磨消懸垂文を有する胴部片で，上端の断面には輪積み接合のためのキザミ目が付けられている。16も薄手の磨消懸垂文を有している胴部片であるが磨滅が著しい。17は，薄手の胴部片で，曲線的沈線文が付されている。18・19は，条線文を有している口縁部片である。20・21は乱雑な条線文が施されている胴部片である。22・25は無節縄文を施している胴部



第51図　第25号住居跡遺物出土状態図

片である。22の上端には条線文がみられる。23・24は縄文だけの胴部片で，23は厚手である。24は単節縄文ＬＲが縦位回転で施文されている。

本跡の出土土器からみて，本跡の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

第26号住居跡（第54・55図）

本跡は，遺跡の東部G6f_6区を中心に確認されたもので，第23号住居跡の南東側12ｍに位置している。

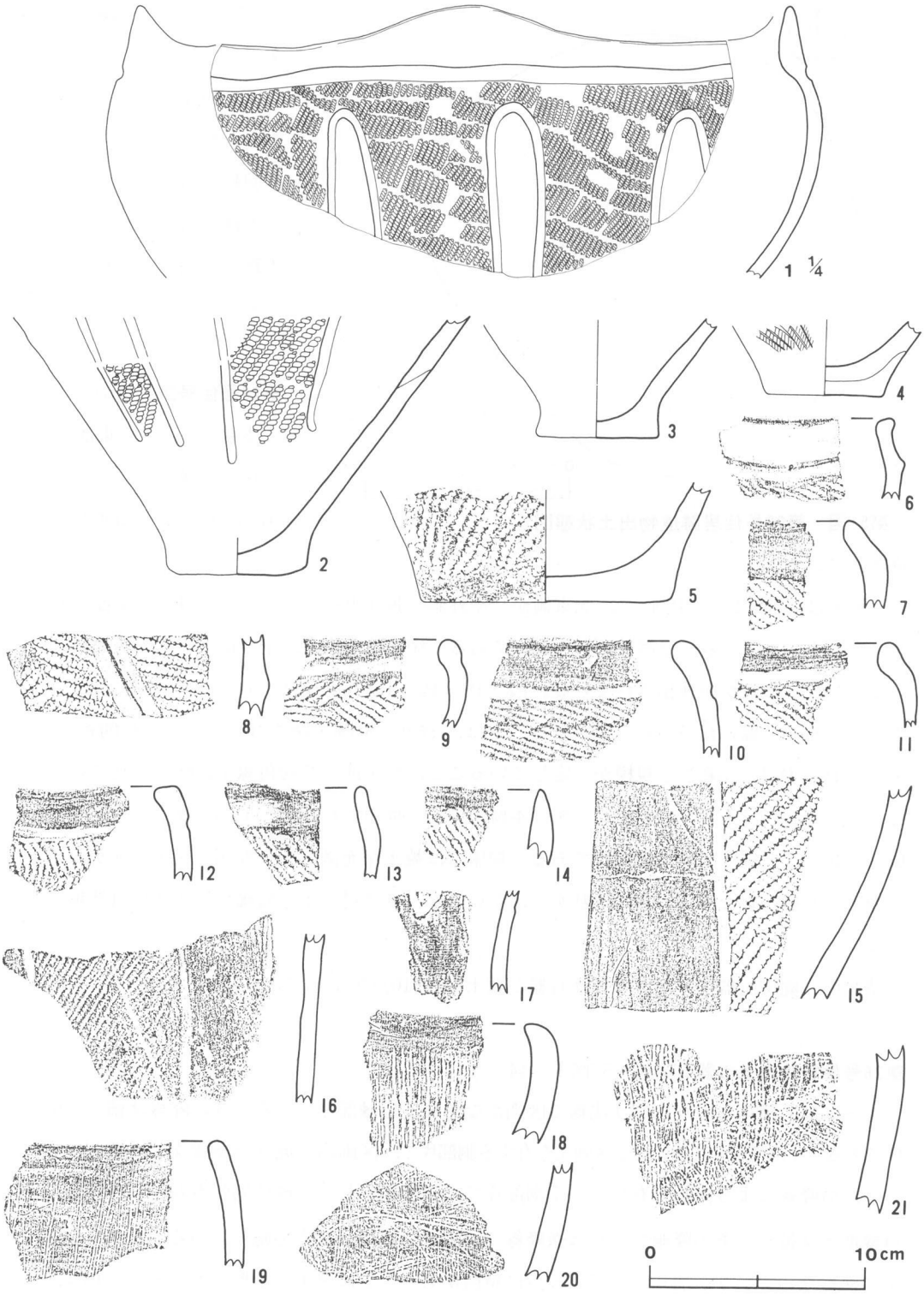
平面形は，径4.2ｍの円形で，北東側がやや外側へ張り出している。壁は硬く，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，16～20cmである。床面は平坦で，全体的によく踏み固められている。ピットは11か所検出されている。P_4・P_5・P_9・P_{11}の規模は，40～48cm・深さ32～55cmと太くしっかりと掘られている。残りのピットは，径26～32cm・深さ21～49cmと比較的細い。P_4・P_5・P_9・P_{11}は，深さと規模が一定していること，炉を囲んで対角線上に配列されていることなどから主柱穴であると思われる。炉は本跡の中央に検出され，長径110cm・短径85cmの楕円形で，床面を40cmほど掘り凹めた地床炉である。炉床には焼土が充満し，長期間の使用がうかがえる。

覆土は６層からなり，一部に攪乱をうけているが，主に褐色土・暗褐色土の順で自然堆積している。

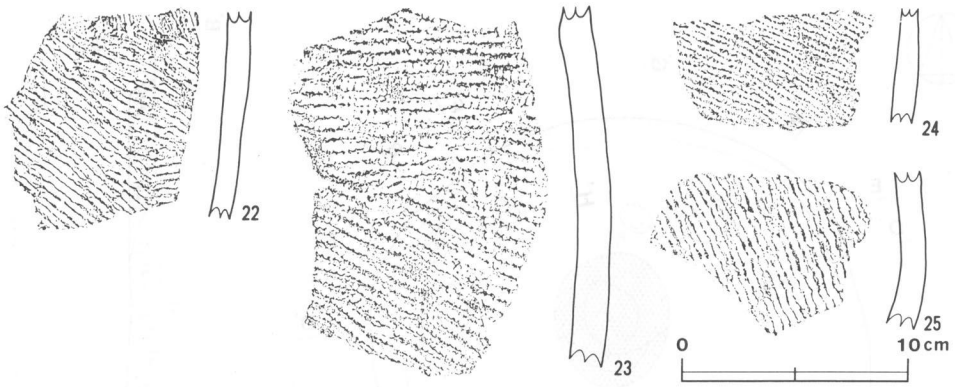
遺物は，縄文土器片，土製品及び石器が覆土から510点出土している。

第26号住居跡出土土器（第56～57図１～44）

１～３は，隆線とそれに沿う沈線で区画がなされる口縁部片である。３の隆線は細く，微隆線的である。４は隆線と沈線による区画文を有する胴部片で，区画内に縄文と条線文が充填されている。５は，微隆線による区画を有している胴部片で，単節縄文ＲＬが縦位回転されている。６～９は，口縁部無文帯を１条の隆線ないしは微隆線で区画し，以下は縄文を施している。６・９は隆線直下に沈線状のナゾリが加えられている点に特徴がある。７は薄手で小形土器である。10は，沈線による施文が主となっている。11は，口縁直下に１条の太い沈線を巡らし，逆Ｕ字状の区画を縄



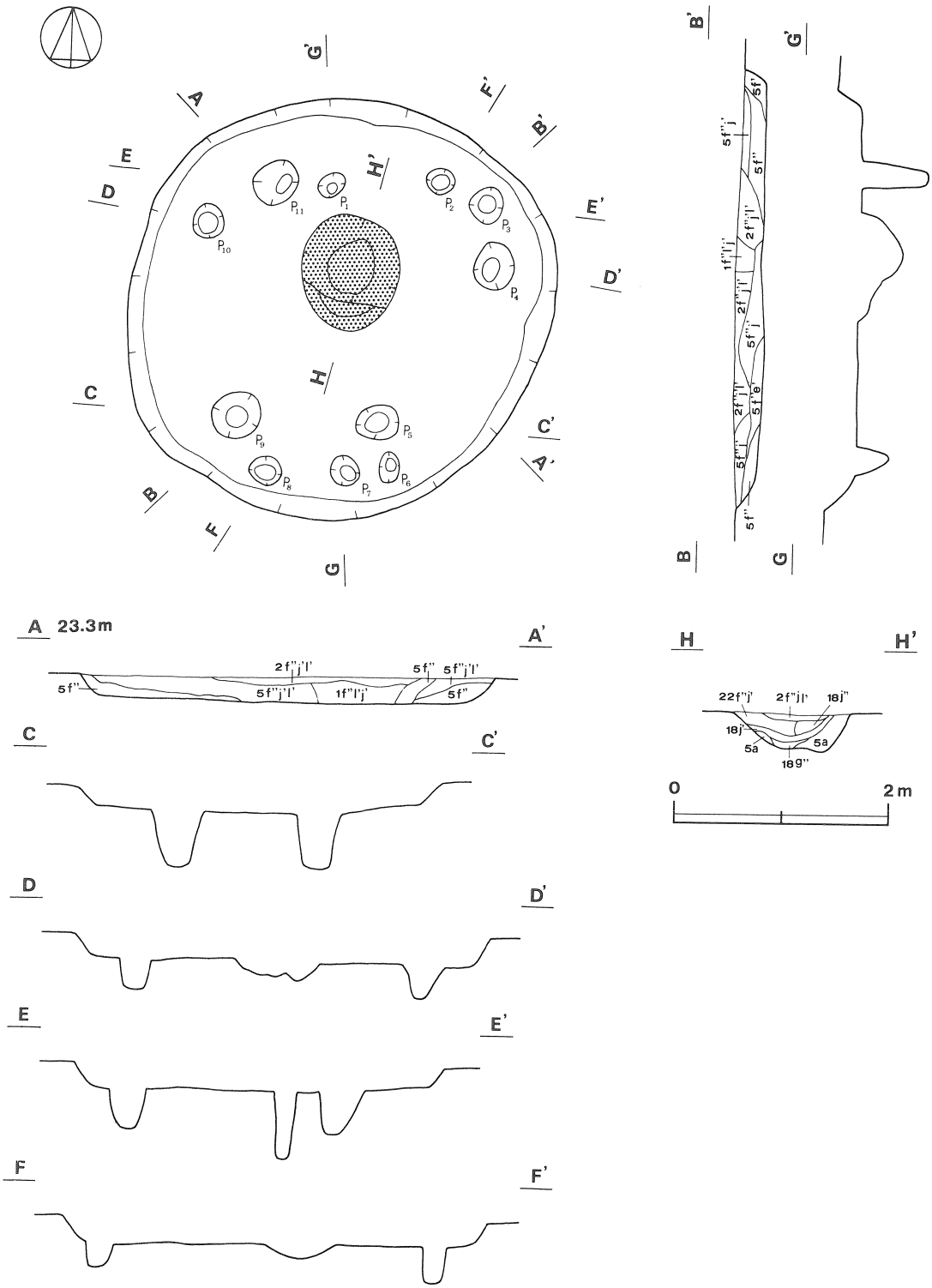
第52図　第25号住居跡出土遺物実測図・拓影図　(1)



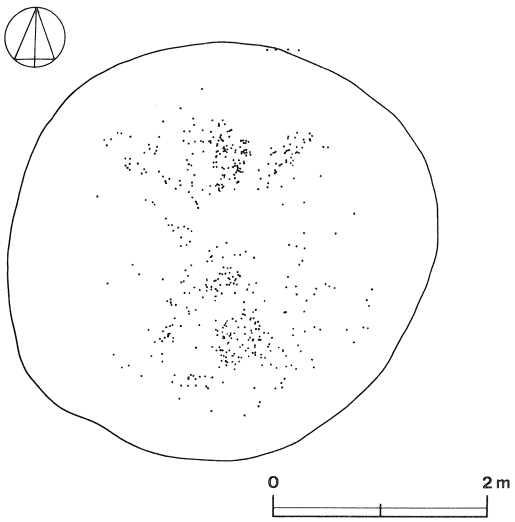
第53図　第25号住居跡出土遺物拓影図　(2)

文施文後に加え，区画内を磨り消したようにみえる。12は，深鉢形土器のくびれ部片で上下に文様帯を有している点が注目される。13は，直線的磨消懸垂文を有する胴部片である。14～20・22は，深鉢形土器の口縁部片で，口縁部無文帯を1条の沈線ないしは凹線を巡らして区画し，以下は縄文を施している。16・18は同一個体と思われる。いずれも口縁部が内傾している。17は無文帯の幅が広い。20は，縄文の回転方向が沈線直下では横位で，それ以下では縦位である。22は，薄手で口縁直下の沈線も細く他とは異なっている。器形も22だけが波状縁を呈していると思われ，無節縄文Ｌが縦位回転で施文されている。21・23・26は口縁部に無文帯を有し，以下は縄文を施文している。26は，口縁部が外反している点に特色がみられる。24は，口縁直下にわずかの無文帯をもち，以下は縄文が施されている。25は，全面に縄文が付されているものと思われるが，小破片のため明らかではない。27は，縄文が器面全体に施されており，無節と単節の2種の縄文が認められる。28は，内湾する深鉢形土器の口縁部片である。縄文だけが施されているが，無節縄文ともう1種の別の縄文が認められ，あるいは反撚りの縄文と考えられるが明らかではない。29は，口縁部の沈線を挟んで2段の円形刺突文が施されたものである。30は，刺突文が口縁部に1列付されている。刺突は下から突きあげるように施されている。31は，くびれ部の破片で縄文地文上に1列の爪形文が付されている。32～34は，櫛描条線文が施されている。32・33は口縁部片，34は胴部片である。いずれも曲線的な施文である。35は，縄文と条線文が同一器面に施されている。36は，縄文とヘラ状施文具による沈線が同一器面に付されている。37は，湾曲する胴部片で，無節縄文が付されている。38は，単節縄文ＲＬの横位と縦位の回転による縦位の羽状縄文が施されている。39は，無節と単節縄文による羽状縄文を施している。単節縄文は異条縄文と思われる。40は，単節縄文ＲＬが施されている胴部片である。

41は，本跡の南側の覆土から出土した破片5点が接合した底部片である。外面には単節縄文ＲＬが縦位，斜位回転で施文されている。縄文原体は，太さの異なる2本の撚紐を合わせた異条縄



第54図　第26号住居跡実測図



第55図　第26号住居跡遺物出土状態図

文と考えられる。縄文の施文後に縦位の強いナデを加えている。底面近くは横ナデである。内面は縦ナデが施されている。底面は平坦ではなく，若干傾き，底面の中央部が少し凹んでいる。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，暗褐色，黒褐色，内面が暗褐色，黒褐色を呈している。底径は7.3cmで，現存高は12.3cmである。

42は，本跡の覆土から出土した底部片である。外面に縦位の沈線が数条垂下している。底面近くと内面は横ナデが施されている。底部は突出気味である。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗灰色を呈している。推定底径は6.3cmで，現存高は3.5cmである。

43は，本跡の中央部やや北側の覆土から正位で出土した底部片である。全体に調整が良く，外面は横ナデ，内面は縦ナデが加えられている。胎土には砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗灰褐色を呈している。底径は5.6cmで，現存高は4.3cmである。

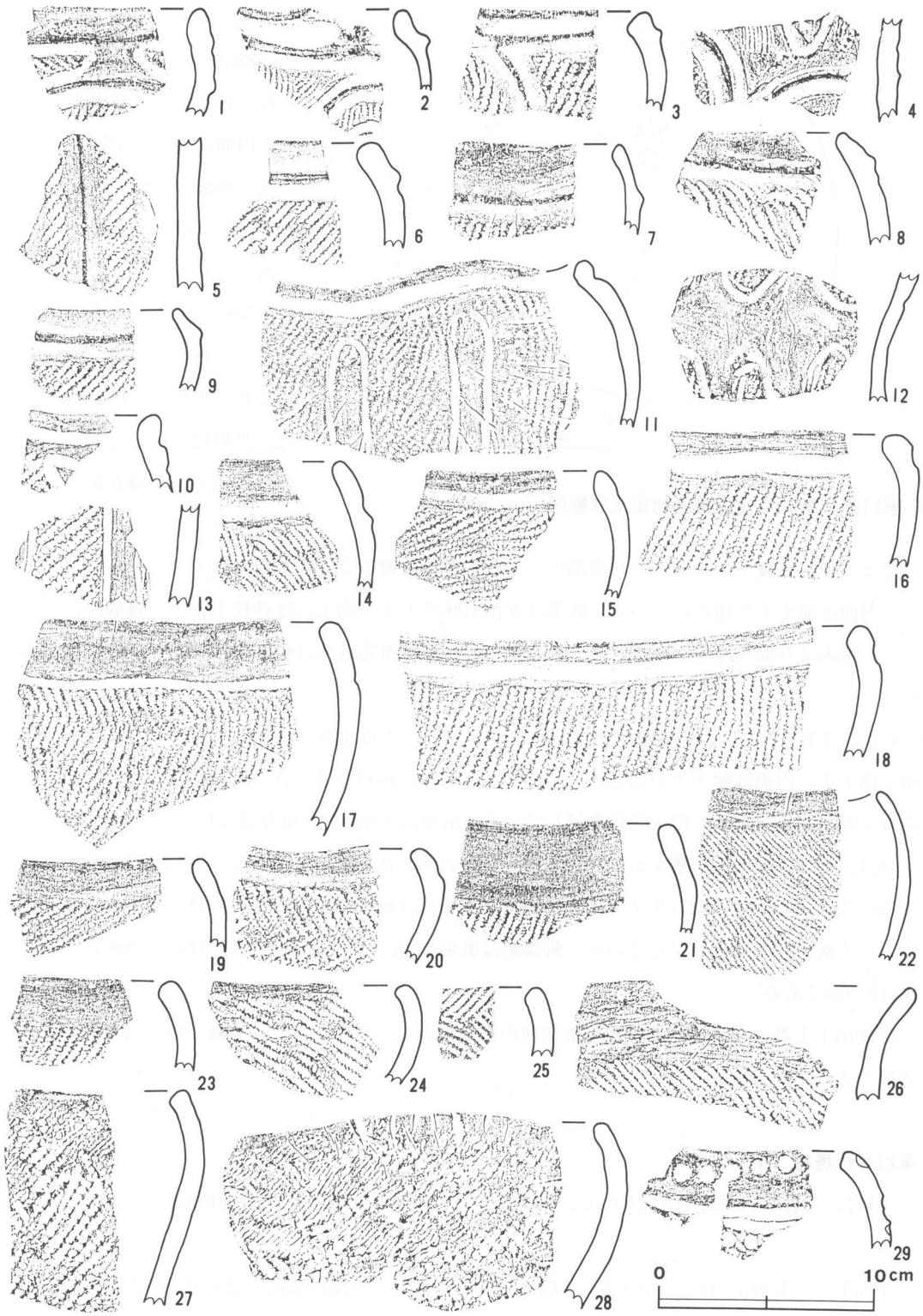
44は，本跡の南西側の覆土から正位で出土した台付土器の台部片である。外面は横ナデを施し，上部の内面，台部の内面にはナデを加えている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調はにぶい赤褐色，黄褐色を呈している。脚端部は磨滅気味である。推定台部径は5.8cmで，現存高は2.9cmである。

本跡出土土器の大半は，加曽利EⅢ式期のものである。したがって，本跡の時期は加曽利EⅢ式期と考えられる。

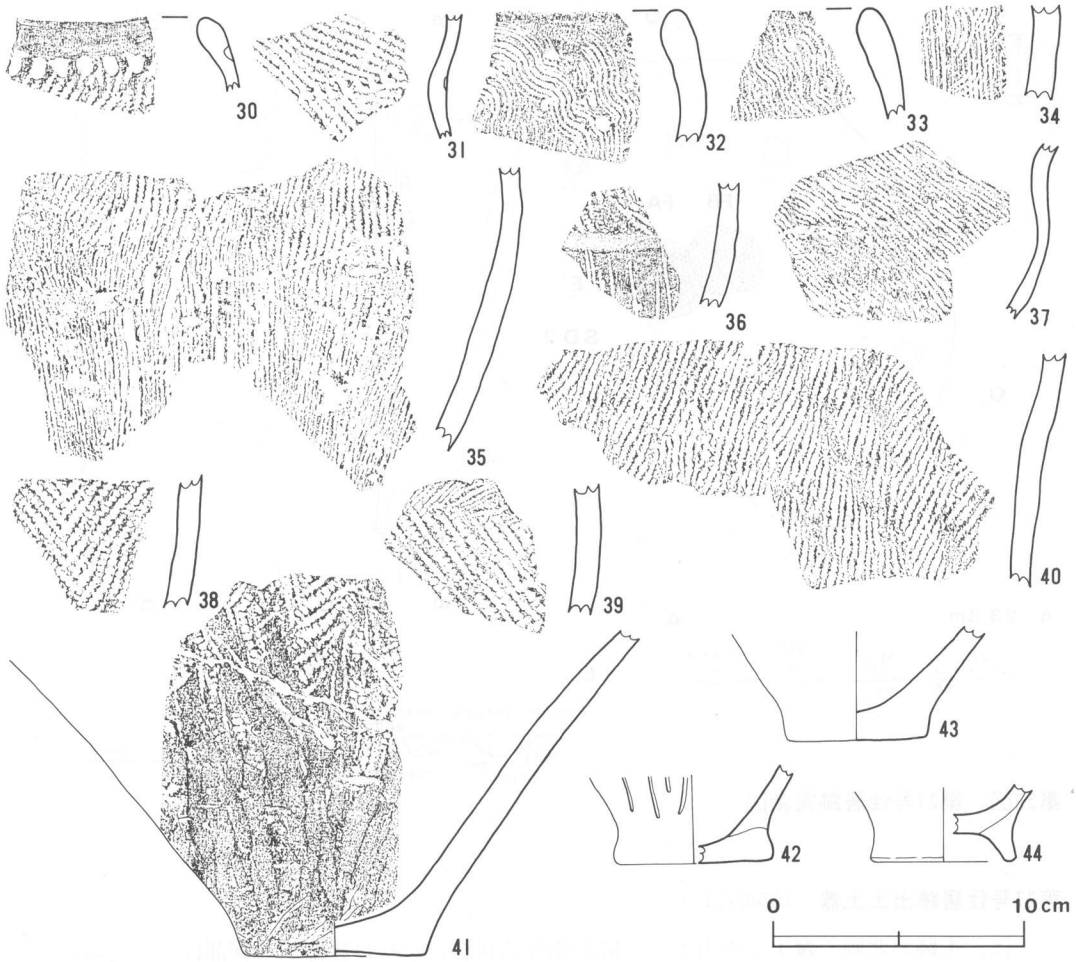
第27号住居跡（第58図）

本跡は，遺跡の東部G6h_5区を中心に確認されたもので，第26号住居跡の南側29mに位置している。

平面形は，長径3.7m・短径3.5m（農道下のため推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，N－32°－Eを指している。壁はよく締まっており，床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。



第56図　第26号住居跡出土遺物拓影図　(1)

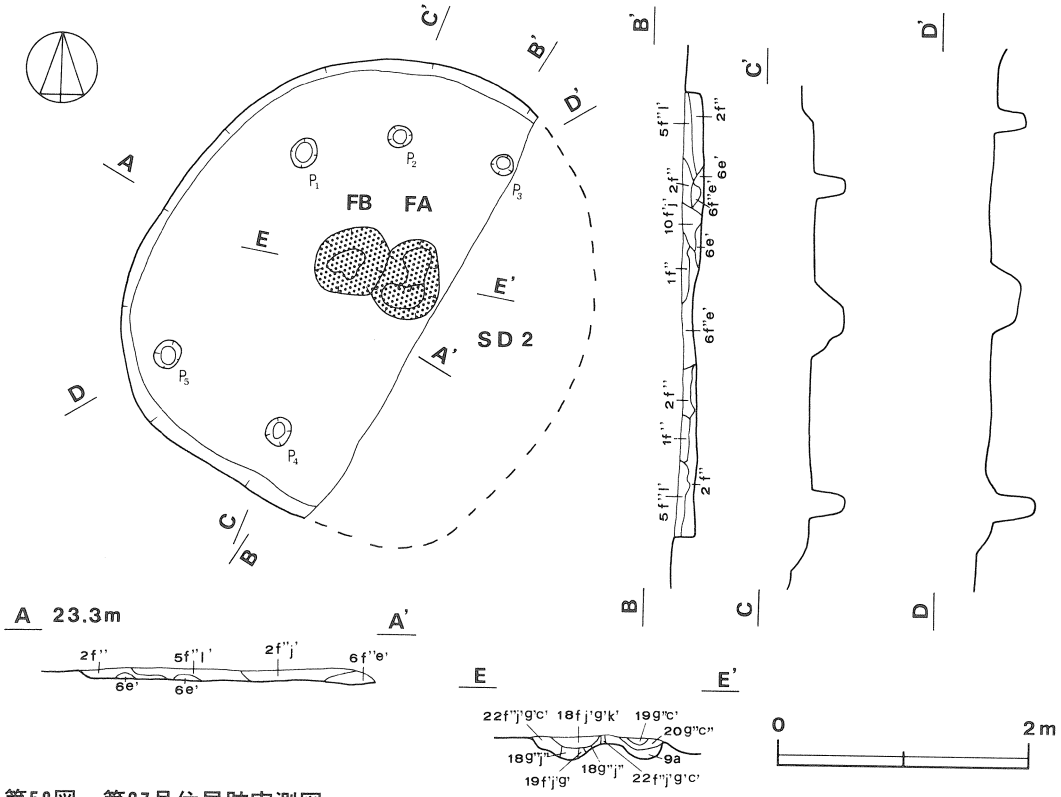


第57図　第26号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)

壁高は，６～12cmと低い。床面は平坦で，全体的によく踏み固められている。ピットは５か所検出され，規模は径18～26cm・深さ25～37cmで，壁にそって円形状に配列されている。東側は農道下で調査できなかったが，遺構の広がりからみて道路下にもピットがあったものと考えられる。５か所とも主柱穴と考えられる。炉は本跡のほぼ中央に２基検出されている。ＦＡは楕円形で，規模が長径60cm・短径45cm・深さ25cmの地床炉，ＦＢは楕円形で規模が長径55cm・短径45cm・深さ17cmの地床炉である。ＦＡは炉床もよく焼けており，長期間の使用がうかがえるが，ＦＢの炉床はそれほど焼けていない。ＦＢはＦＡの西側に接続して掘りこまれ，ＦＡの覆土を切っているので，ＦＢが新しいと考えられる。

覆土は８層からなり，主に褐色土・暗褐色土・極暗褐色土が堆積している。

遺物は，縄文土器片及び石器が覆土から29点出土している。

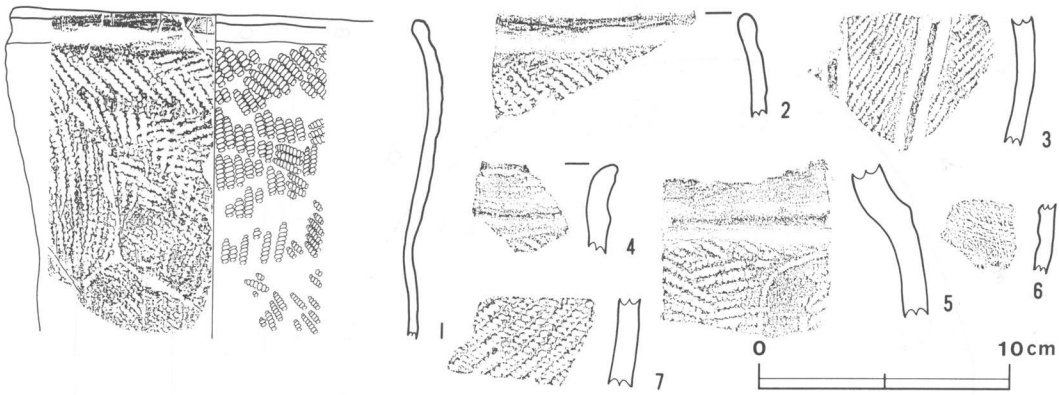


第58図　第27号住居跡実測図

第27号住居跡出土土器（第59図１～７）

１は，本跡の北側の覆土から出土した破片相互の接合により口縁部から胴部にかけての部分が復元されたものである。小形平縁の深鉢形土器で，胴部はくびれている。口縁部直下に１条の凹線を巡らし，以下縄文が全面に施文されているが，胴下半部は稀薄になっている。器壁も胴下半部は薄くなり，調整も良くない。内面は横ナデが加えられている。縄文は単節縄文ＲＬの横位と斜位回転施文が主となっているが，一部にはＬＲの横位回転施文かと思われる部分もみられる。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面上半部が暗褐色，下半部が褐色，内面が暗褐色である。口径は16.0cmで，現存高は12.9cmである。

２は，口縁部に凹線を１条巡らし，以下は縄文が施されている。あるいは１と同一個体かもしれない。３は，隆線とこれに沿う沈線による施文が加えられている胴部片である。４は，口縁部無文帯を有し，以下は縄文が施されている。５は，深鉢形土器の口辺部片で，口縁部無文帯下には細い沈線による逆Ｕ字状文が認められる。６は，櫛描条線文を有する小破片である。７は，縄文だけが付されている胴部片である。１～７のような土器の組みあわせは，加曽利ＥⅢ式期のものと考えられる。５にみられる細い沈線はやや新しい様相を示すものかもしれない。



第59図　第27号住居跡出土遺物実測図・拓影図

本跡から出土した土器の大半が，加曽利EⅢ式期のものと考えられるので，本跡の時期は，加曽利EⅢ式期と思われる。

第28号住居跡（第60図）

本跡は，遺跡の北西部G5c$_1$区を中心に確認されたもので，第20号住居跡の南西側６ｍに位置している。

平面形は，長径5.3ｍ・短径4.8ｍの不整楕円形で，長径方向は，N－90°－Eである。壁は締まっており，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は，15～19cmである。床面は平坦で軟らかい。ピットは８か所検出され，規模は径26～30cm・深さ20～44cmである。P$_7$だけが44cmと深く，他の深さは20～26cmである。８か所とも壁にそって円形状に配列されているので，主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

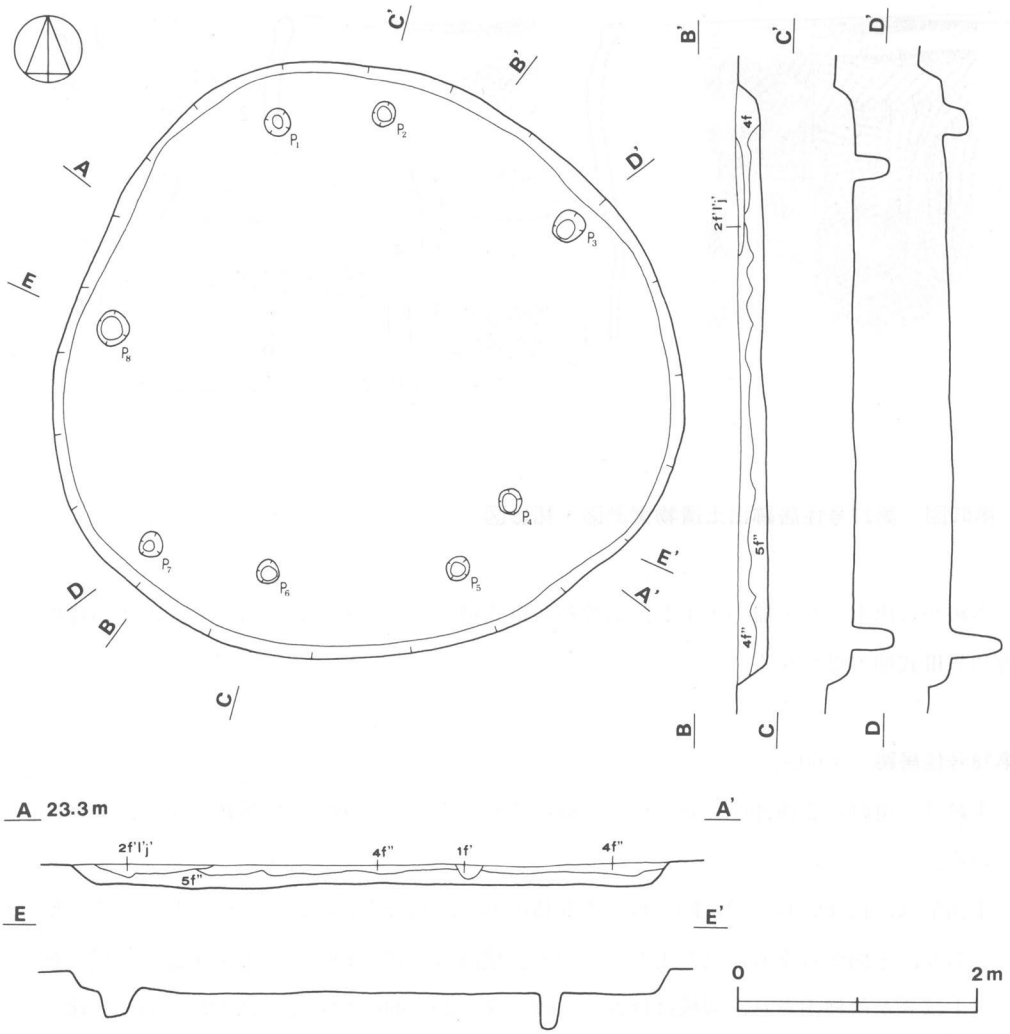
覆土は４層からなり，主に暗褐色土と褐色土が自然堆積している。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

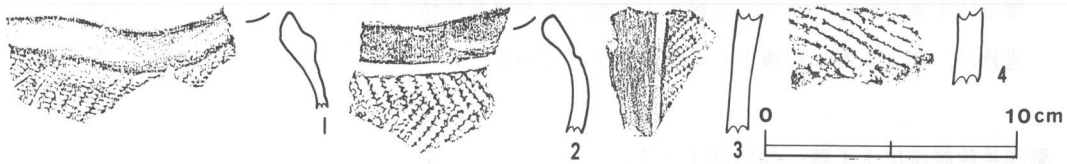
第28号住居跡出土土器（第61図１～４）

１は，緩い波状縁を呈する深鉢形土器の口縁部片である。無文帯は微隆線により区画され，波頂部下はやや突出している。２は，口縁部無文帯下に１条の沈線を巡らし，胴部は縄文を施している。３は，磨消懸垂文をもつ胴部片である。４は，縄文だけの胴部片である。

本跡からの出土土器は，少ないが加曽利EⅢ式期のものと考えられる。１はやや新しくEⅣ式に近いものと思われる。本跡の時期は，加曽利EⅢ式期と推定される。



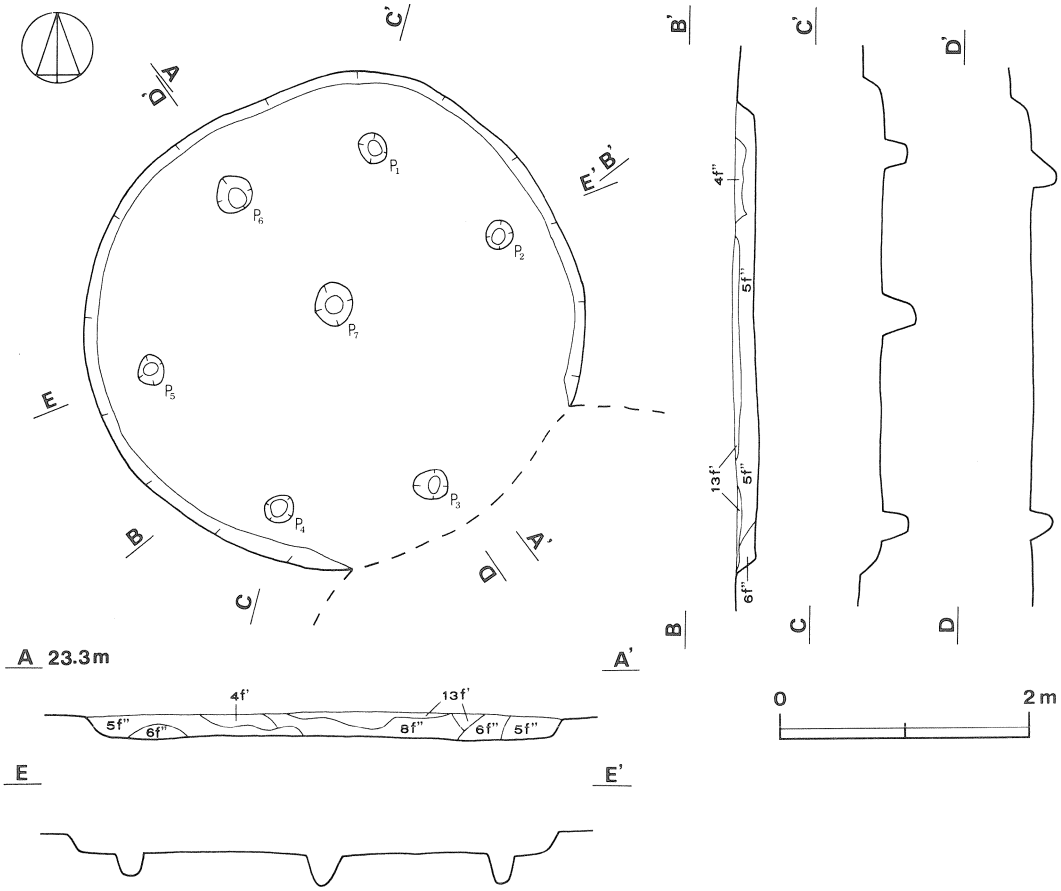
第60図　第28号住居跡実測図



第61図　第28号住居跡出土遺物拓影図

第29号住居跡（第62図）

本跡は，遺跡の北西部G4d₀区を中心に確認されたもので，第20号住居跡の南側8.5mに位置している。南東側で第30号住居跡と重複している。第30号住居跡との新旧関係は，第30号住居跡が



第62図　第29号住居跡実測図

本跡の床をわずかながら切っているので，本跡が古いと考えられる。

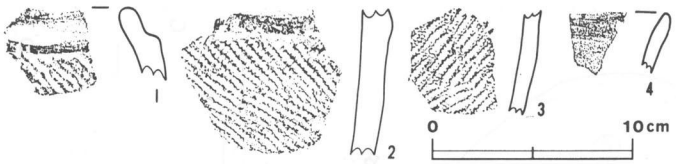
平面形は，径3.9mの円形である。壁はいずれも締まっており，南壁の一部が床面から外傾して立ち上がっているほかは，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は13～16cmである。床面は平坦で，全体によく踏み固められている。ピットは7か所検出され，規模は径24～34cm・深さ20～27cmである。P_7は中央に掘られていて，ピットの中では径34cm・深さ27cmと規模が最大である。ほかのピットはP_7を囲んで六角形状に配列されている。しかも，各ピットは等間隔で，壁からも同じ距離である。6か所とも主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

覆土は5層からなり，主に黒褐色土・褐色土・明褐色土が堆積している。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第29号住居跡出土土器（第63図1～4）

1は，口縁部無文帯をもち，以下は無節縄文が施されている。2は，太めの低い隆線による施



第63図　第29号住居跡出土遺物拓影図

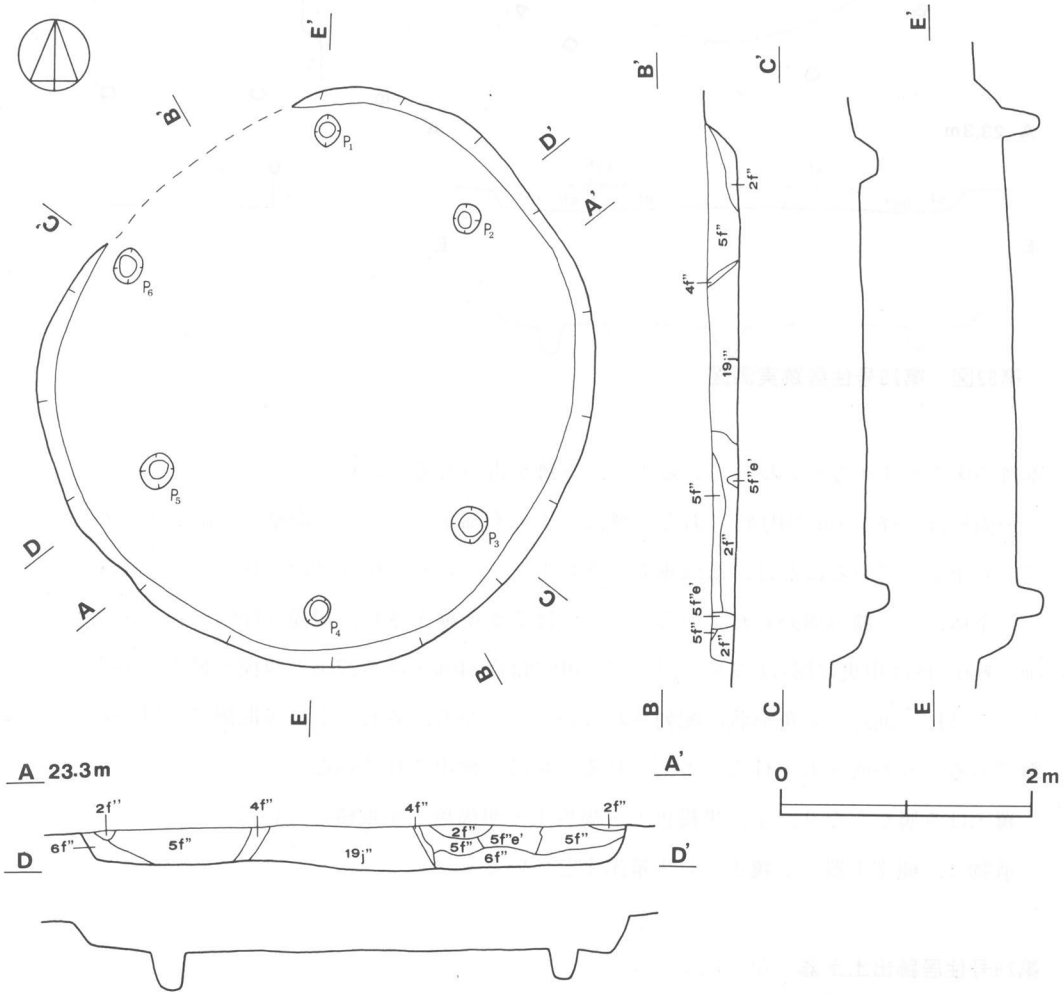
文を有する大形の深鉢形土器の胴部片である。胎土には大粒の長石，石英粒を多く含み，粗雑である。

3は，縄文だけの胴部片である。4は，無文の小破片である。

本跡から出土した土器は，わずかで型式的特徴に乏しい土器片のため，時期については明確ではないが，加曽利EⅢ式期のものと考えられる。本跡は，加曽利EⅢ式期のものと考えられる。

第30号住居跡（第64図）

本跡は，遺跡の北西部G4e₀区を中心に確認されたもので，第29号住居跡の南西側に，同住居跡と



第64図　第30号住居跡実測図

重複して位置している。

平面形は，径4.5ｍの円形である。壁は締まっており，北東側の壁が床面から垂直に立ち上がっているほかは，外傾して立ち上がっている。壁高は，18～30cmである。床面は軟らかく全体的に平坦であるが，北側がやや高くなっている。ピットは６か所検出され，規模は径24～32cm・深さ18～25cmで，壁にそって六角形状に配列されている。６か所とも主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

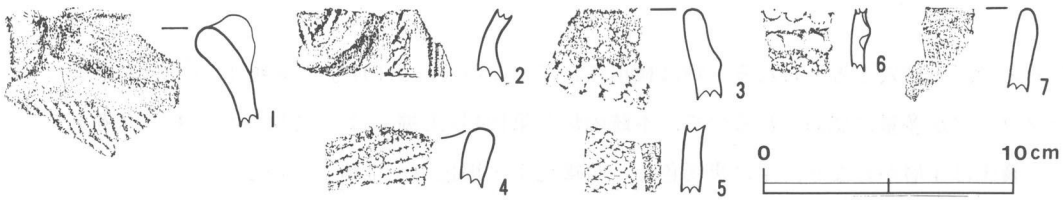
覆土は５層からなり，主に褐色土・暗褐色土が堆積している。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第30号住居跡出土土器（第65図１～７）

１は，赤褐色のやや磨滅した感のある口縁部片で，微隆線によるモチーフが描かれている。左右からの微隆線の接点は突出している。２は，隆線による施文をもつ胴部片である。３・４は，共に口縁部片で，３は口縁部無文帯を有し，以下に縄文を施している。４は，緩い波状縁を呈し，口縁直下からいきなり縄文が施文されている。５は，磨消懸垂文が施されている胴部片である。６は，刺突文が２段に付されている口辺部片である。非常に薄く，小形土器と思われる。７は，条線文が施されている口縁部片である。１は，加曽利ＥⅣ式期のものと思われるが，その他は加曽利ＥⅢ式期のものと考えられる。

本跡も出土土器が少なく，明瞭な時期決定はむずかしいが，加曽利ＥⅢ式期のものと思われる。

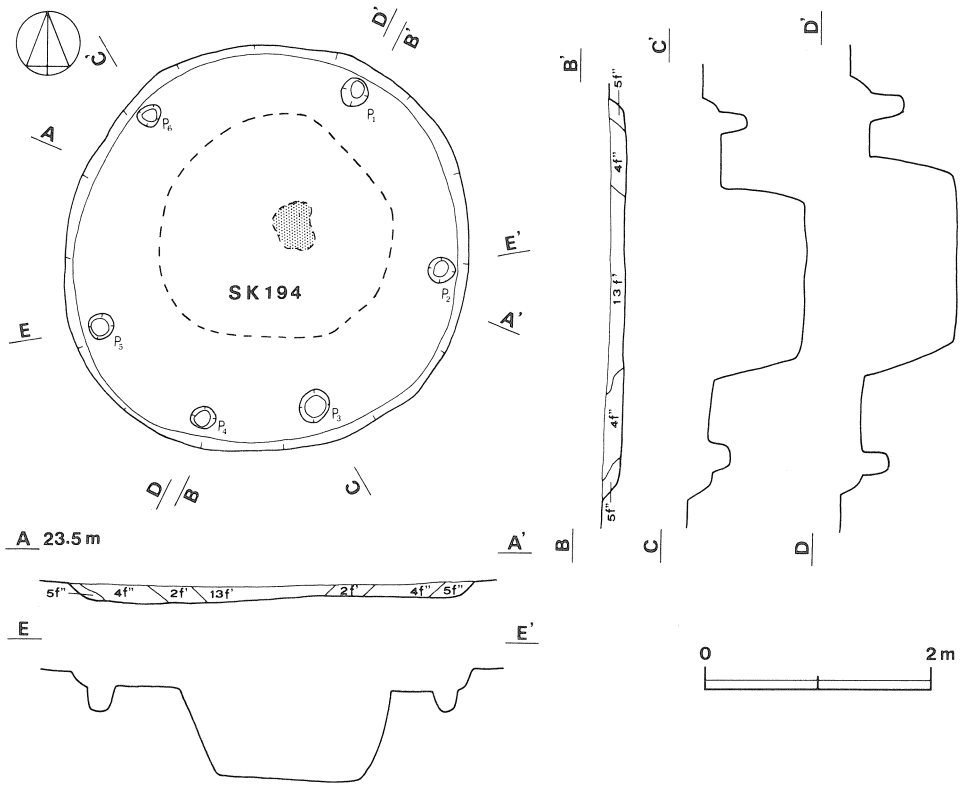


第65図　第30号住居跡出土遺物拓影図

第31号住居跡（第66・67図）

本跡は，遺跡の中央部G5f$_4$区を中心に確認されたもので，第30号住居跡の南東側12ｍに位置している。中央で第194号土壙と重複している。土壙との新旧関係は，土層から本跡が第194号土壙よりも古いと思われる。

平面形は，径3.6ｍの円形である。壁は締まっており，床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，12～16cmである。床面はソフトロームで軟らかく，第194号土壙に中央の大部分を切られている。残っている部分は平坦である。ピットは６か所検出され，規模はP$_3$を除いて径20～30cm・深さ11～30cmである。P$_3$は11cmと浅いが，６か所とも壁にそって，六角形状に配列されてい



第66図　第31号住居跡実測図

るので，主柱穴と考えられる。炉は検出されていないが，第194号土壙覆土の１層の中央に焼土ブロックが多量に認められるので，本跡の炉が第194号土壙によって壊されたものと考えられる。

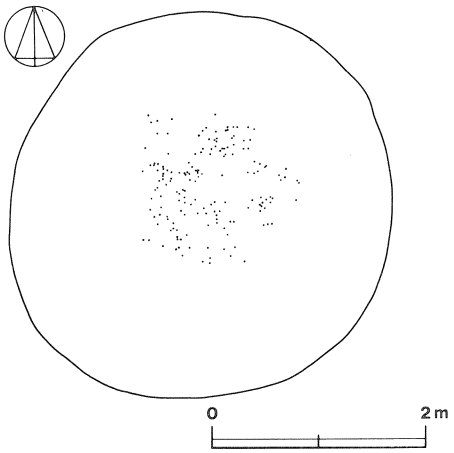
覆土は４層からなり，主に黒褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。

遺物は，縄文土器片及び石器が覆土から172点出土している。

第31号住居跡出土土器（第68～69図１～25）

１は，本跡の覆土から出土の破片３点と本跡と重複している第194号土壙の覆土から出土の破片２点の計５点が接合した深鉢形土器の口縁部片である。口縁部無文帯を微隆線で区画し，以下は縦長の方形区画を連続させている。区画内には単節縄文ＬＲが縦位回転で充塡されている。微隆線はあまり細く鋭いものではない。内面は横ナデが施されている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は30.0cmで，現存高は5.4cmである。

２は，本跡の中央部やや南東寄りの覆土から出土した破片６点が接合したもので，深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての大形の破片である。口縁部にナゾリによる微隆線を１条巡らし，以

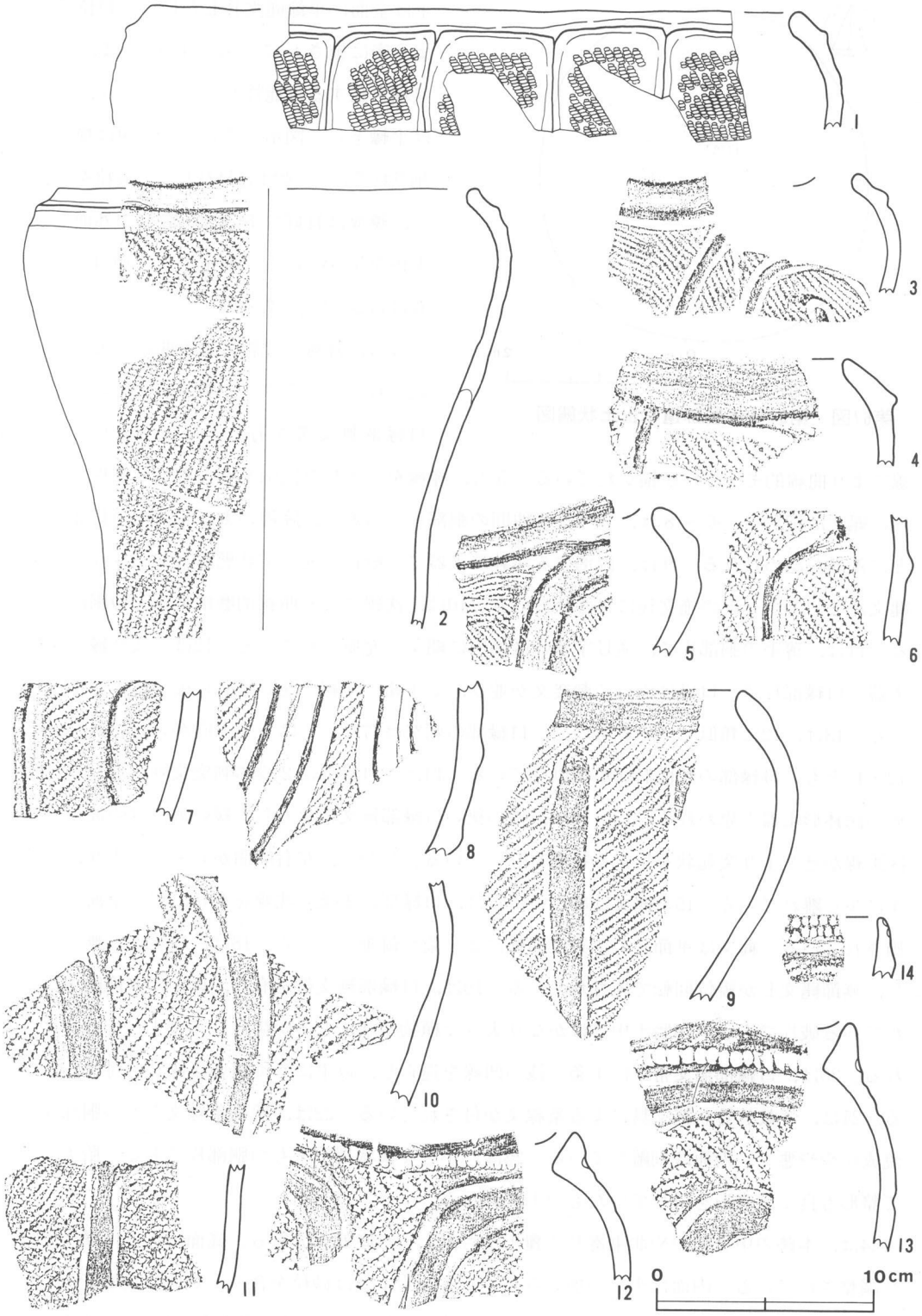


第67図　第31号住居跡遺物出土状態図

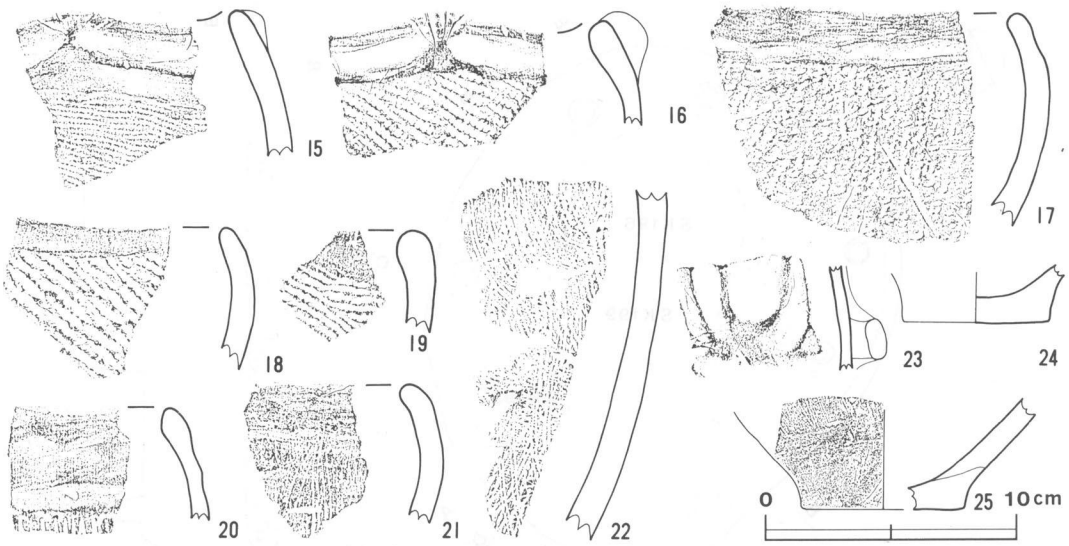
下は全面に単節縄文ＲＬが横位，斜位回転により密に施されている。口縁部は，緩い波状縁を呈する可能性がうかがえるが，ここでは平縁として図示している。内面は横ナデが施されている。胎土には長石，石英粒を多く含み，焼成は良好である。色調は内外面ともに褐色を呈している。推定口径は19.4cmで，現存高は20.2cmである。

３は，隆線と沈線による曲線的モチーフが描かれているもので，磨滅が著しい。４は，口縁部無文帯を有し，隆線とこれに沿う沈線により曲線的モチーフが描かれている。５も，隆線を主とした区画を有する口縁部片で，区画内の縄文は細かい。６～８は，３～５の仲間の胴部片であるが，隆線の太さや沈線の付加状態などに差異が認められる。９は，内湾する深鉢形土器で，縦長の逆Ｕ字状懸垂文が施されている。縄文はこのモチーフの施文後に付されている。10は，沈線による曲線的磨消帯をもつ胴部片である。11は，薄手の胴部片で，逆Ｕ字状の区画内に縄文が充塡されている。12は，波状縁の深鉢形土器の口縁部片で，口縁に沿って刺突文が並び，２本組の沈線で逆Ｕ字状のモチーフが描かれている。13は，12に類似しているもので，口縁部の刺突は右ないしは右下方向から行なわれている。12・13ともに口縁部の断面形状が類似している。14は，口縁部に２段の刺突文列を有している小形の深鉢形土器と思われる。15・16は，幅の狭い口縁部無文帯をもち，緩い波状縁の波頂部分で区画線がせり上り突起状を呈する特徴をもっている。しかし，左右両側からのせり上りは密着せずに少し離れている。15の縄文は細かい。17は，口縁部に１条の沈線を有し，以下全面に縄文が施されている。縄文は単節ＲＬで斜位回転により条が縦走している。18は，口縁部に無文帯を残し，無節縄文Ｌが縦位回転で施されている。19は，口縁部無文帯を有し，以下は無節縄文が施されている破片であるが，胎土中にはかなり大きな植物茎状のものが炭化して含まれており注目される。20は，口縁部無文帯下に１条の浅い凹線を巡らし，以下にやや粗い条線文を付すものである。21は，多截竹管状施文具による条線文が付されている。22は，櫛描条線文をもつ胴部片で，焼成がやや悪く，内面は剥離している。23は，小さな橋状把手をもつ胴部片である。胎土は緻密で整形も良く，壺形を呈していたものと思われる。

24は，本跡の中央部やや北東寄りの覆土から出土した底部片である。底面の近くは横ナデにより調整されている。内面はナデが加えられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。推定底径は5.8ｍで，現存高は1.9cmである。



第68図　第31号住居跡出土遺物実測図・拓影図(1)



第69図　第31号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)

25は，本跡の覆土から出土した底部片である。外面には条線文が施され，底部の近くは横ナデにより整形されている。内面は縦ナデが丁寧に加えられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が灰褐色，黒褐色，内面が暗灰褐色を呈している。推定底径は6.6cmで，現存高は3.8cmである。

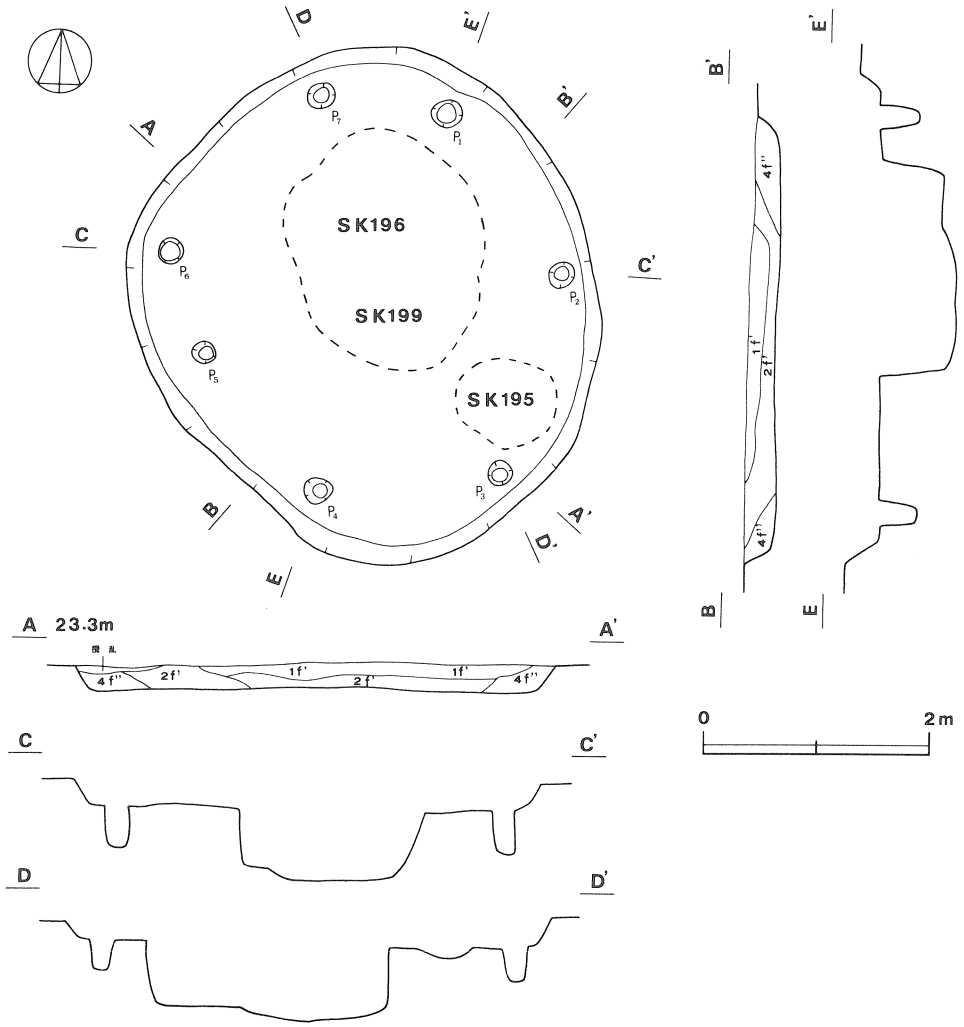
本跡から出土した土器の大半は，加曽利EⅢ式期のものと考えられる。したがって，本跡の時期は加曽利EⅢ式期と推定される。

第32号住居跡（第70・71図）

本跡は，遺跡の中央部G5h_3区を中心に確認されたもので，第31号住居跡の南西側12mに位置している。中央で第196・199号土壙，南東側で第195号土壙とそれぞれ重複している。土壙との新旧関係は土層からみて，本跡が第195・196・199号土壙よりも古いと考えられる。

平面形は，長径4.5m・短径4.0mの楕円形で，長径方向は，N－12°－Wを指している。壁はロームブロックを含むソフトロームで，締まっている。南東壁の一部が床面から垂直に立ち上がっているほかは，外傾して立ち上がっている。壁高は，14～30cmである。床面はハードロームブロックを含むソフトロームでよく踏み固められ，平坦である。ピットは7か所検出され，規模は径22～26cm・深さ27～40cmで，壁にそって七角形状に配列され，ピット間も等間隔である。7か所とも主柱穴と考えられる。炉は検出されていないが，第199号土壙覆土の1層に焼土ブロックが認められたことから，第199号土壙を構築する際に壊されたと考えられる。

覆土は5層からなり，主に黒褐色土・暗褐色土・褐色土の順で自然堆積している。どの層にも



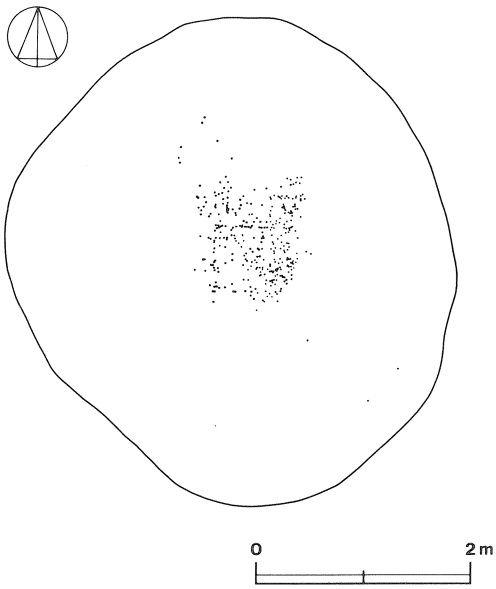
第70図　第32号住居跡実測図

ローム粒子が含まれている。

遺物は，縄文土器片及び石器が覆土から374点出土している。

第32号住居跡出土土器（第72～73図１～24）

１は，本跡の中央部の覆土から出土した６点の破片が接合したもので，波状縁を呈する深鉢形土器で口縁部から胴部にかけて残存している。波頂部は４か所と思われ，口唇部は内側に突出している。口縁部に１条の沈線を巡らし，胴部全面にＨ字状の磨消帯を施し，区画外には単節縄文ＬＲが施文されている。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが加えられている。胎土には微砂

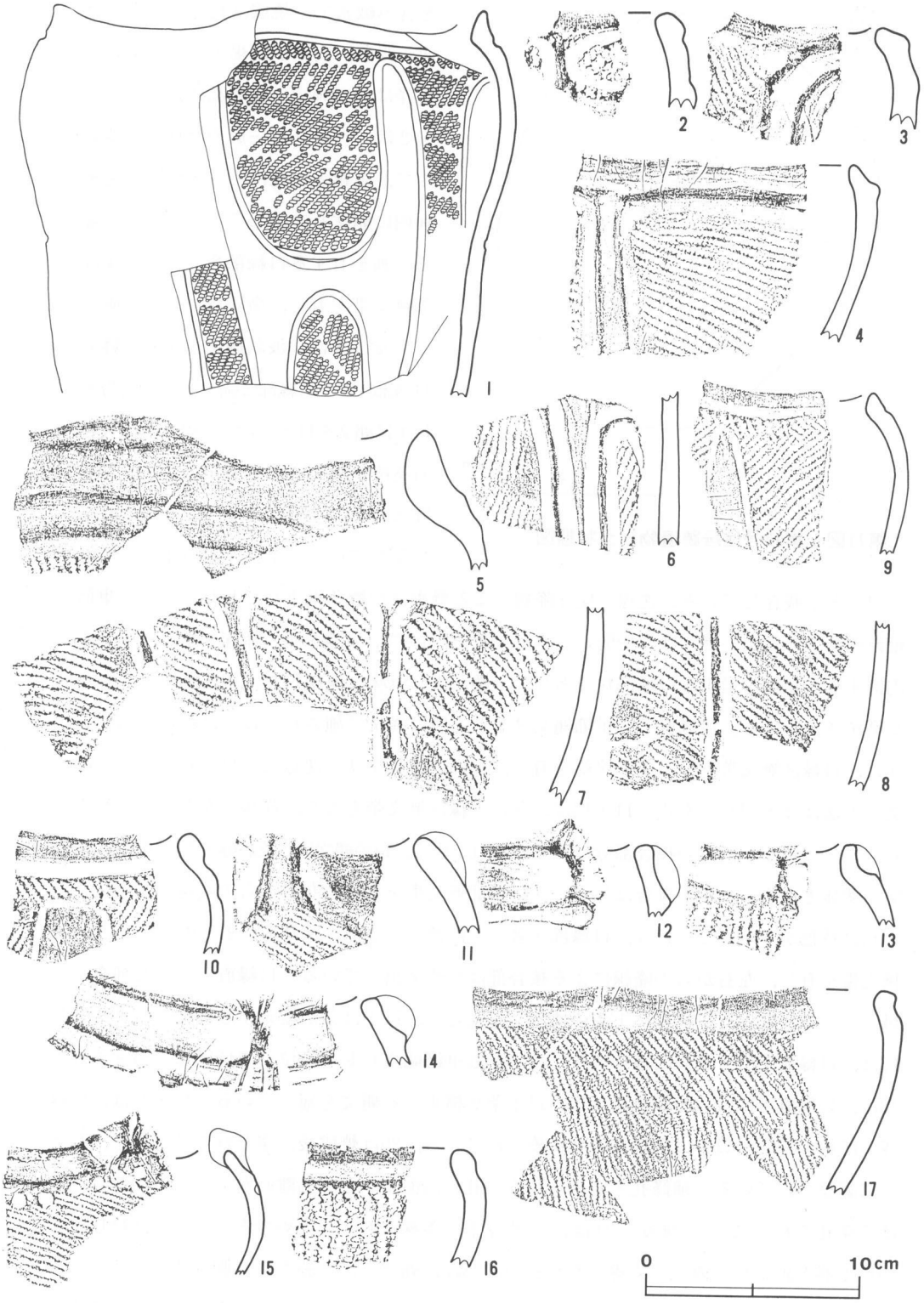


第71図　第32号住居跡遺物出土状態図

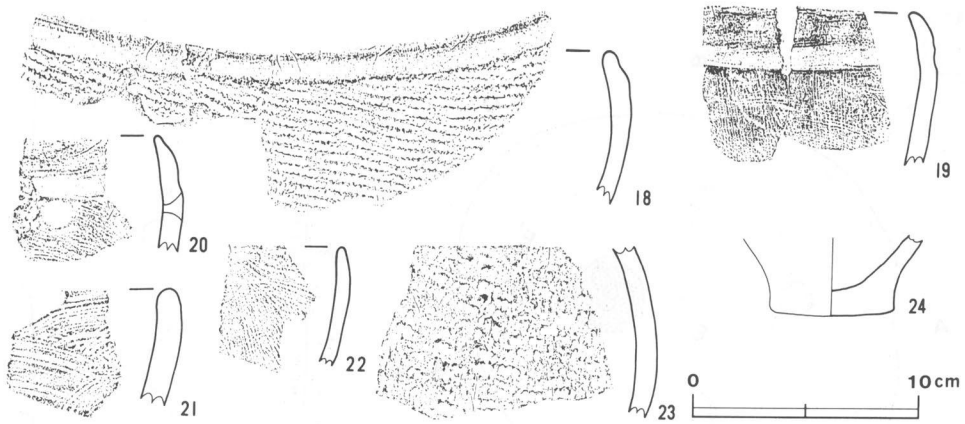
を含み緻密で，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。推定口径は20.0cmで，現存高は18.1cmである。

2は，キャリパー形の深鉢形土器の口縁部片で，隆線と沈線による楕円区画を施し，区画内に縄文を充填している。3は，隆線による区画を有する口縁部片である。4は，口縁部無文帯を有し，微隆線により区画がなされている。5は，波状縁を呈する深鉢形土器の口縁部片で，口縁部に幅の広い無文帯を設け，以下は縄文を付している。胎土には大粒の長石，石英粒を含み粗いが，焼成は良好である。6は，隆線による区画がなされている胴部片で，黒色を呈している。7は，胴下半部片であり，約半周ほどが残存している。沈線を伴う隆線による懸垂文が数条垂下しており，縄文は単節ＬＲの縦位回転であるが，撚りはやや弱い。8は，胴下半部片で，沈線を伴う隆線が垂下している。9は，内湾する波状縁を呈する口縁部片であり，上端が尖り気味に連結した沈線区画が行なわれ，内部が磨消されている。口縁直下に単節縄文ＲＬが1段は横位に施され，以下は縦位回転されている。10は，口縁部無文帯下に1条の沈線を有し，胴部に逆U字状の沈線文が付されている。縄文の施文の方法は9と同じである。11・13は，共に口縁部無文帯をもち，隆線が左右よりせり上り突起状を呈しているが，11の接合部分はかなり離れている。13の縄文は，条が縦走し，粗い。12・14は，同一個体と考えられるが接合はしない。口縁部無文帯を有し，左右からの隆線による接合部が高い点に特色がみられる。15は，口縁部が著しく内湾する小形の深鉢形土器と思われる。口縁部に無文帯を有し，左右からの隆線による接合部はやや突出している。口縁直下に円形刺突文を1列付している。16は，口縁部に1条の沈線文を巡らし，以下は条が縦走する縄文が施されている。17は，口縁直下に1条の凹線を巡らし，以下は単節縄文ＲＬが横位，斜位回転で施文されている。18は，口縁直下に浅い凹線を巡らし，以下条が横走する縄文を施している。19・20は，口縁部に浅い凹線を施し，以下に櫛描条線文が施されている。20は焼成後に穿(うが)たれた孔を有し，孔はきれいに調整されている。補修孔と考えられる。孔の内面に小さな剝離痕があり，外面から内面に向けて穿孔(せんこう)されたことが判る。21は，やや厚手で条線文も少し太めである。これに対して22は，小形土器と思われ，薄手で条線もやや細い。23は，縄文だけが施された胴部片である。

24は，本跡の中央部やや南東寄りの覆土から逆位で出土した底部片である。外面は横ナデ，内



第72図　第32号住居跡出土遺物実測図・拓影図　(1)



第73図　第32号住居跡出土遺物実測図・拓影図（2）

面はナデが加えられている。底面には小さな孔が多数付いている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。底径は5.4cmで，現存高は3.4cmである。

本跡から出土した土器の大半は，加曽利EⅢ式期のものであるが，一部には加曽利EⅣ式期のものもみられる。本跡の時期は，加曽利EⅢ式期と考えられる。

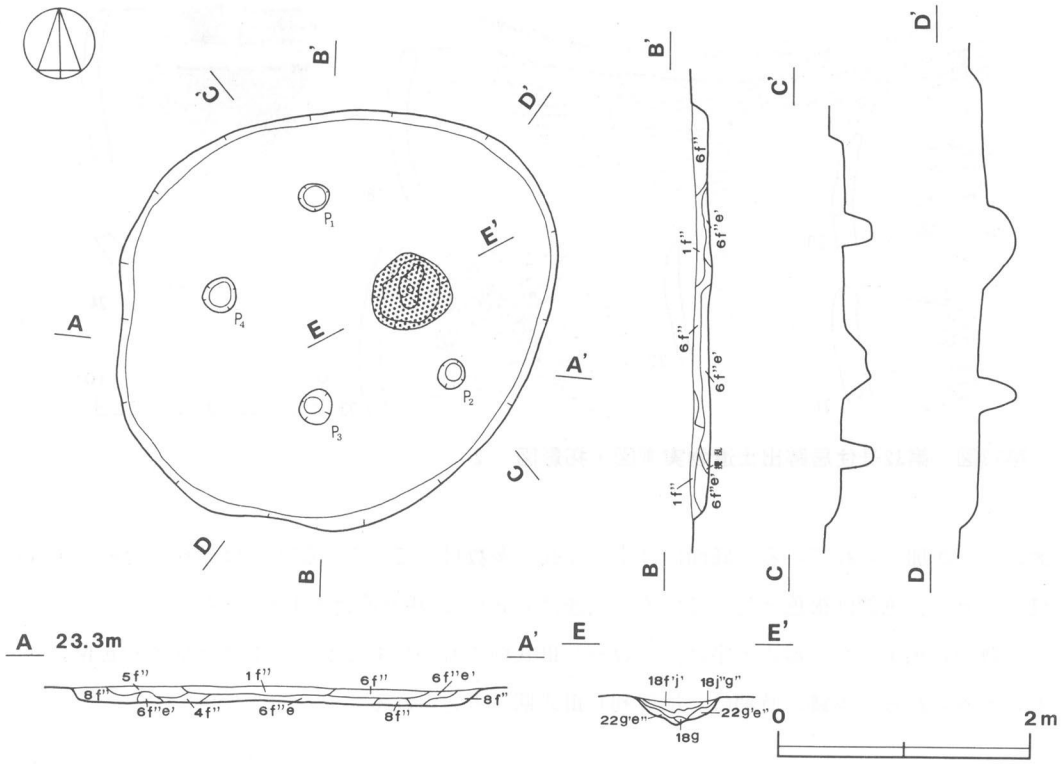
第33号住居跡（第74図）

本跡は，遺跡の東部G6i_4区を中心に確認されたもので，第27号住居跡の南西側3mに位置している。

平面形は，長径3.7m・短径3.3mの不整楕円形で，長径方向は，N－34°－Eを指している。壁はロームブロックを含むソフトロームで，やや締まっている。北西壁の一部が床面から垂直に立ち上がり，北東壁の一部が緩やかに立ち上がるほかは，外傾して立ち上がっている。壁高は，8～11cmと低い。床面はソフトロームで軟らかく，平坦である。ピットは4か所検出され，規模は径22～30cm・深さ19～30cmで，床の中央を囲むように配列されている。しかも，ピット間の距離はほぼ等間隔で，また，壁からも一定の距離をおいて掘られており，4か所とも主柱穴と考えられる。炉は本跡の中央寄り北東側に検出され，径65cmの円形で，床面を23cmほど掘り凹めた地床炉である。炉の覆土には焼土が少量であったが，炉床は赤く焼けて硬化しており，長い間使用されていたと考えられる。

覆土は5層からなり，主に暗褐色土・褐色土の順で自然堆積している。どの層にもローム粒子を多く含んでいる。

遺物は，縄文土器片及び石器が覆土から9点出土している。



第74図　第33号住居跡実測図

第33号住居跡出土土器（第75図１～５）

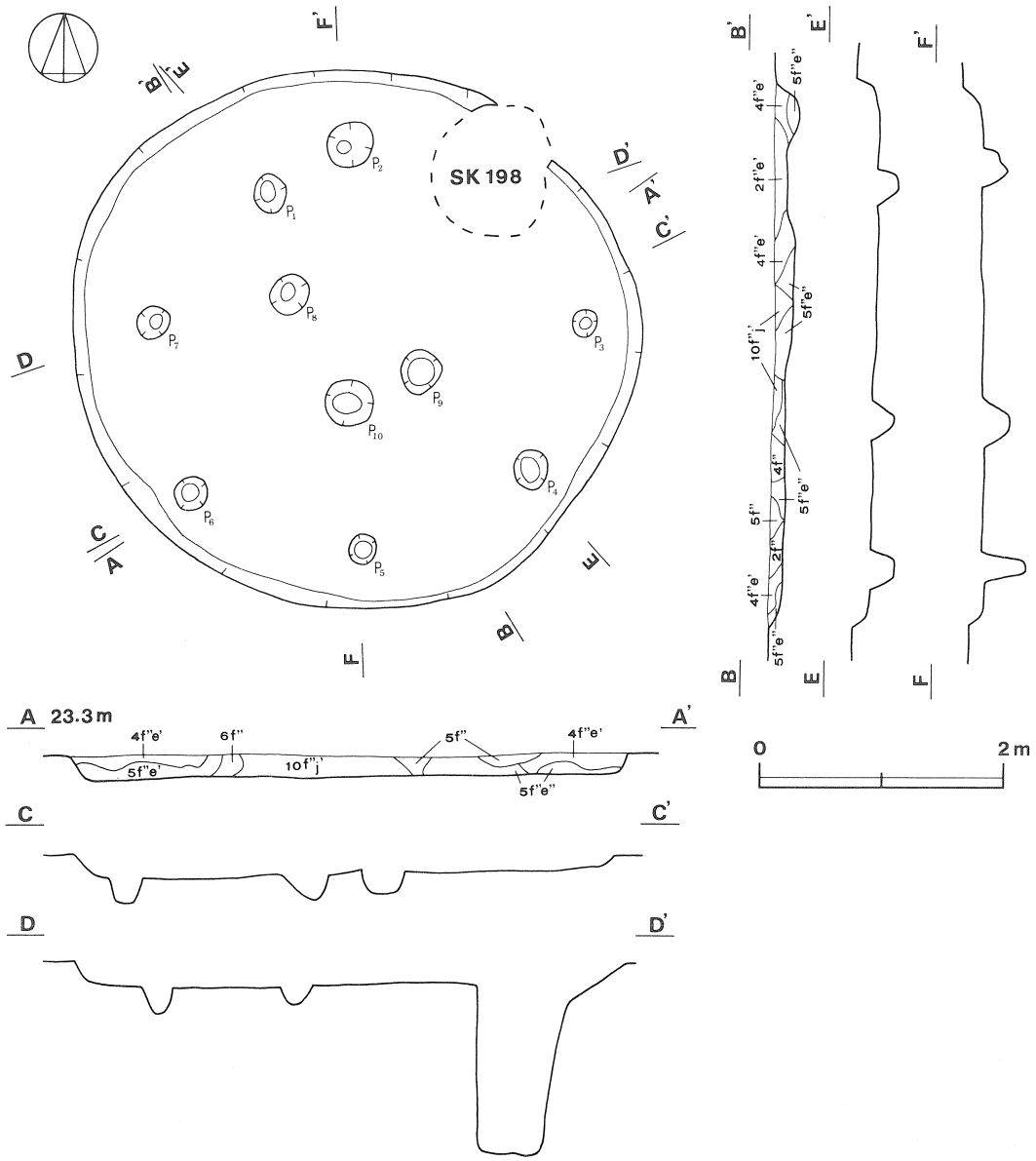
１は，口縁部無文帯を有する小片である。２は，胴部の小片で，沈線による区画内に縄文を充塡している。３は，縄文だけが施された胴部片である。４・５は条線文が施された胴部片で，４は弧状を呈し，５は縦位に付されている。

本跡から出土した土器片は少ないが，加曽利ＥⅢ式期のものと考えられる。したがって，本跡の時期は，加曽利ＥⅢ式期と推定される。

第75図　第33号住居跡出土遺物拓影図

第34号住居跡（第76図）

本跡は，遺跡の東部H5b$_7$区を中心に確認されたもので，第32号住居跡の南東側29ｍに位置し



第76図　第34号住居跡実測図

ている。北側で第198号土壙と重複している。土壙との新旧関係は不明である。

平面形は，長径4.7m・短径4.3mの楕円形で，長径方向は，N－86°－Wを指している。壁はあまり締まりがなく，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，10～16cmである。床面は平坦で，全体によく踏み固められている。ピットは10か所検出されている。P_1・P_3～P_7の規模は，径21～32cm・深さ19～33cmで，比較的細く深い。P_2・P_8～P_{10}の規模は，径34～40cm・深さ19～24cmで，太く浅めに掘られている。P_1・P_3～P_7までは壁にそって六角形状に配列され，ピット間の距離は

ほぼ等間隔に並んでいるので，主柱穴と考えられる。ほかのピットは，性格不明である。炉は，検出されていない。

覆土は７層からなり，主に褐色土・極暗褐色土・暗褐色土が堆積している。どの層にもローム粒子・ロームブロックを含んでいる。

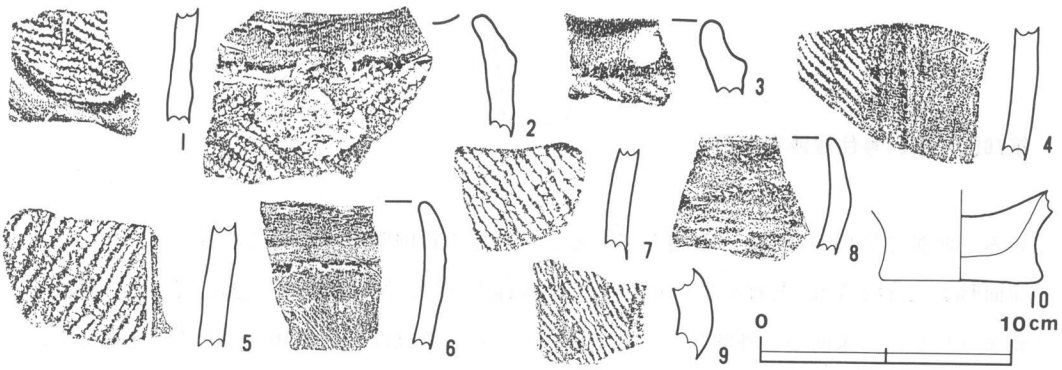
遺物は縄文土器片が覆土から21点出土している。

第34号住居跡出土土器（第77図１～10）

１・４は，微隆線による区画を有する胴部片で，１は曲線的に，４は直線的にモチーフを構成するものと思われる。２・３・８は，口縁部無文帯を有し，以下は縄文が施されている。２は，器表面が大きく剝落している。縄文は単節ＬＲで，上位は横位で，その下は縦位回転と観察される。３は，口縁部無文帯の幅が狭く，左右からの隆線によるせり上りが認められるが，右側は欠損している。突出部の左側は少し凹んでいる。８は，器面が磨滅しており，横位の無節縄文が観察しにくくなっている。５は，胴部片で細い沈線による区画が認められる。６は，口縁部に浅い１条の凹線を巡らし，以下は斜位の細い条線文が付されている。６の胎土は緻密で非常に良い。７は，無節縄文が施された胴部片である。９は，橋状把手部片である。

10は，本跡の南西側の覆土から正位で出土した底部片である。外面は横ナデ，内面はナデが加えられている。底面は一部を除き欠損している。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は内外面ともに褐色を呈している。推定底径は6.5cmで，現存高は2.8cmである。

本跡から出土した土器は，加曽利ＥⅣ式期のものと考えられる。したがって，本跡の時期は，加曽利ＥⅣ式期と推定される。



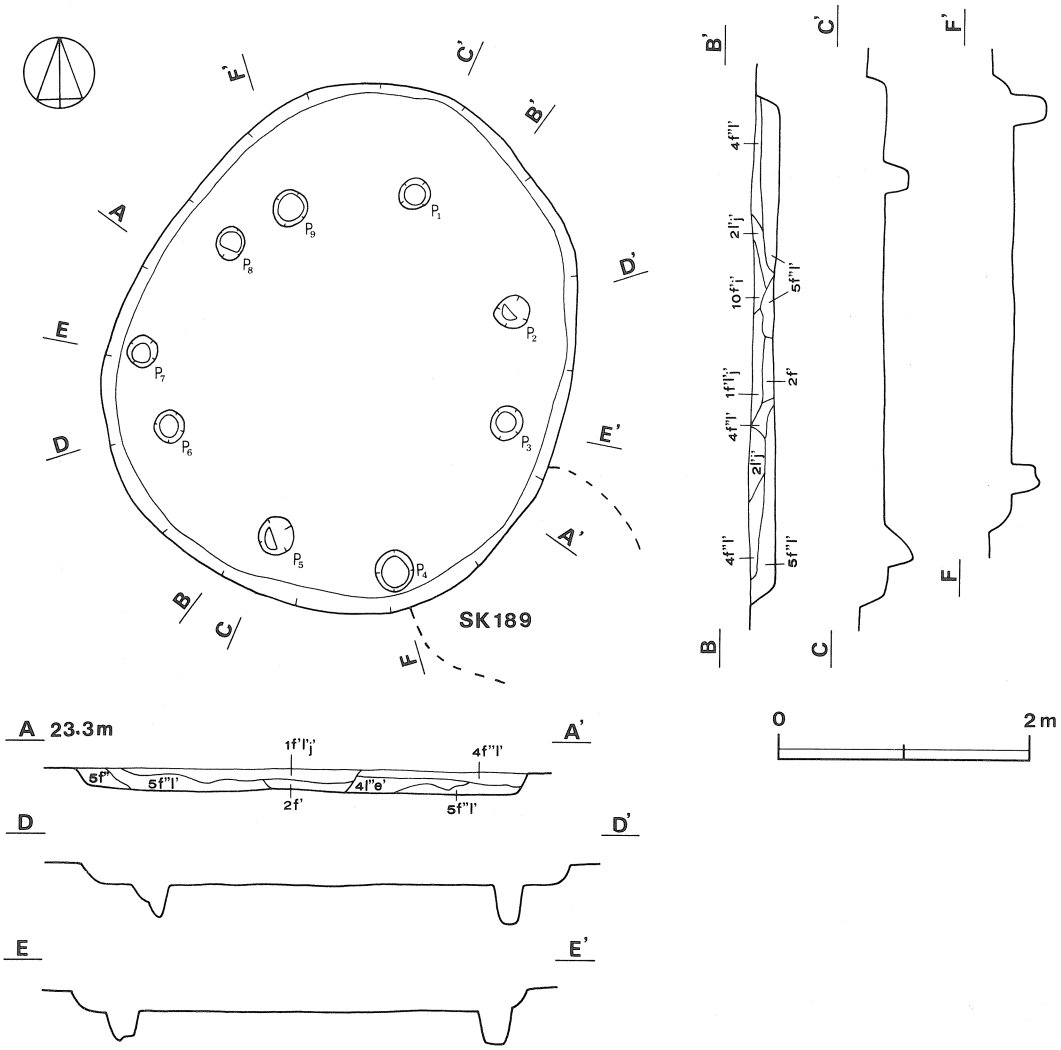
第77図　第34号住居跡出土遺物実測図・拓影図

第35号住居跡（第78図）

本跡は，遺跡の東部H5c_8区を中心に確認されたもので，第34号住居跡の南東側6.5ｍに位置している。南東側で第189号土壙と重複している。土壙との新旧関係は不明である。

平面形は，長径4.2ｍ・短径3.6ｍの楕円形で，長径方向は，N－2°－Wを指している。壁はソフトロームであまり締まりがなく，北壁と南東壁の一部が床面から垂直に立ち上がっているほかは，外傾して立ち上がっている。壁高は，14～20cmである。床面はロームブロックを含み，よく踏み固められている。北側が南側に比べて４～６cm高く，北側から南側にかけてやや傾斜をしている。ピットは９か所検出され，規模は径24～34cm・深さ14～31cmである。P_1～P_6・P_8の深さは一定しており，壁にそって七角形状に配列され，主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

覆土は８層からなり，主に褐色土・暗褐色土・極暗褐色土が上層に，主に褐色土・暗褐色土が



第78図　第35号住居跡実測図

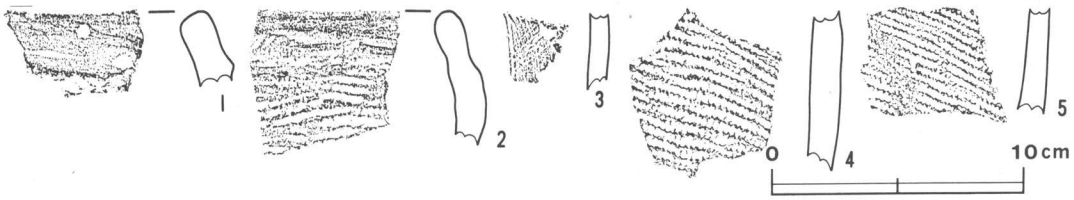
下層に堆積している。

遺物は，縄文土器片が覆土から９点出土している。

第35号住居跡出土土器（第79図１～５）

１・２は，口縁部無文帯を有し，以下は縄文が施されている。共に無節縄文と観察される。３は，小片ながら条線文が付されている。４・５は，縄文だけが施された胴部片である。

本跡から出土した土器は，少ないが加曽利Ｅ式期後半の土器片と思われる。したがって，本跡は，加曽利Ｅ式期のものと考えられる。



第79図　第35号住居跡出土遺物拓影図

第36号住居跡（第80図）

本跡は，遺跡の東部H5b₀区を中心に確認されたもので，第34号住居跡の東側8.5ｍに位置している。北側で第197号土壙と重複している。土壙との新旧関係は，底面の切り合いから本跡が古いと考えられる。

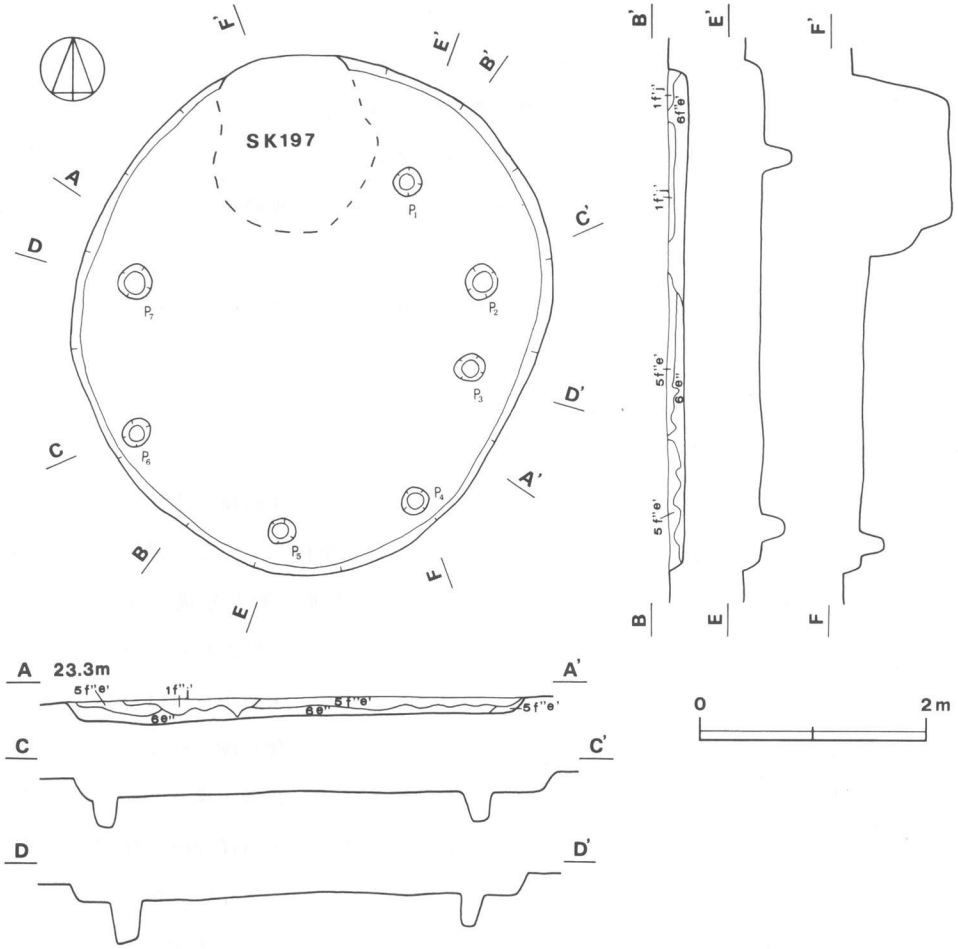
平面形は，長径4.6ｍ・短径4.2ｍの楕円形で，長径方向は，N－7°－Eを指している。壁はソフトロームでやや締まりがあり，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は，13～15cmである。床面はロームブロックを含み，軟らかい。全体的に平坦であるが，中央から西側にかけて６cmの高低差があり，中央から西側にかけて傾斜をしている。ピットは７か所検出され，規模は径26～32cm・深さ20～38cmで，壁にそって円形状に配列されている。７か所とも形状や配列などから主柱穴と考えられる。北側にもう１か所存在したと思われるが，第197号土壙を構築する際に壊されたものと考えられる。炉は，検出されていない。

覆土は４層からなり，すべて褐色土である。一部攪乱をうけた部分も見られるがほぼ自然堆積である。

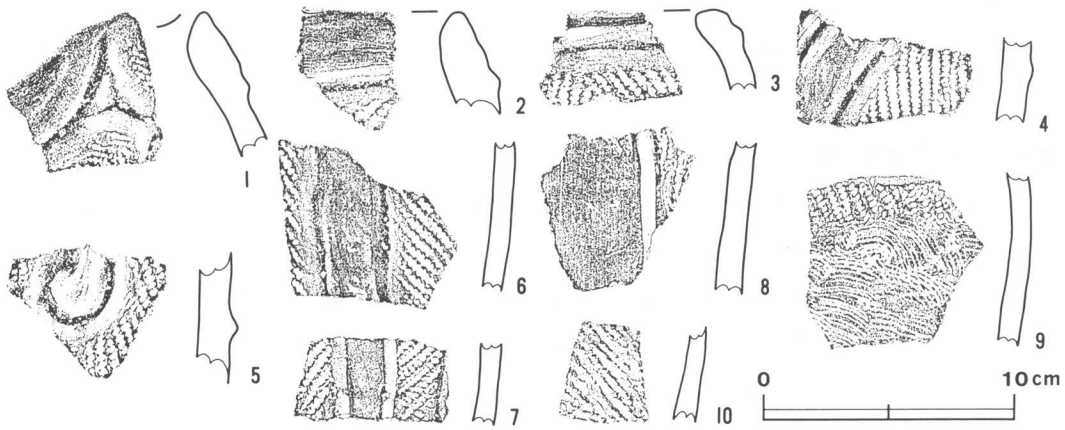
遺物は，縄文土器片及び石器が覆土から少量出土している。

第36号住居跡出土土器（第81図１～10）

１・４～６は，微隆線による施文が主となっている深鉢形土器片である。１は，波状縁を呈す



第80図　第36号住居跡実測図



第81図　第36号住居跡出土遺物拓影図

る口縁部片で，４～６は胴部片である。５は，曲線的モチーフが描かれている。２・３は，口縁部無文帯を有し，以下は縄文を施しているもので，２は厚手である。１・２・５の胎土には目立って大粒の石英，長石粒を含んでいる。７は，磨消懸垂文を有する胴部片である。８・９は，胴部片であり，縄文と条線文の複合施文という共通の手法が認められる。８は幅の広い磨消懸垂文を有している。９の上端には横位の１条の沈線が走っている。10は，無節縄文を施している胴部片である。

本跡から出土した土器には，加曽利ＥⅢ式期からＥⅣ式期にかけてのものが含まれている。本跡の時期は，明瞭ではないが，加曽利ＥⅣ式期と考えられる。

第37号住居跡（第82図）

本跡は，遺跡の東部H5c_8区を中心に確認されたもので，第35号住居跡の南側４ｍに位置している。北側で第201号土壙，西側から南東側にかけて第１号溝と重複している。溝・土壙との新旧関係は，底面の切り合い関係から本跡が古く，次いで第201号土壙，第１号溝の順と考えられる。

平面形は，第１号溝と重複のため，径3.8ｍ（推定）の円形状と思われる。重複のため大部分の壁は破壊され，残っている壁はロームブロックを含んで硬く，床面からほぼ外傾して立ち上がっている。壁高は12cmで一定している。床面はロームブロックを含み硬く締まっており，平坦である。ピットは６か所検出されているが，P_1～P_5は規模が径12～22cm・深さ25～31cmで細く，比較的深いものである。P_6の深さは30cmであるが，規模は長径60cm・短径28cmの楕円形で，ほかのピットよりも格段に大きい。不規則な配列のため，主柱穴は判別できない。炉は本跡の中央に検出され，長径80cm・短径68cmの楕円形で，床面を25cmほど掘り凹めた地床炉で，炉床はあまり焼けていないが，覆土には焼土が充満している。

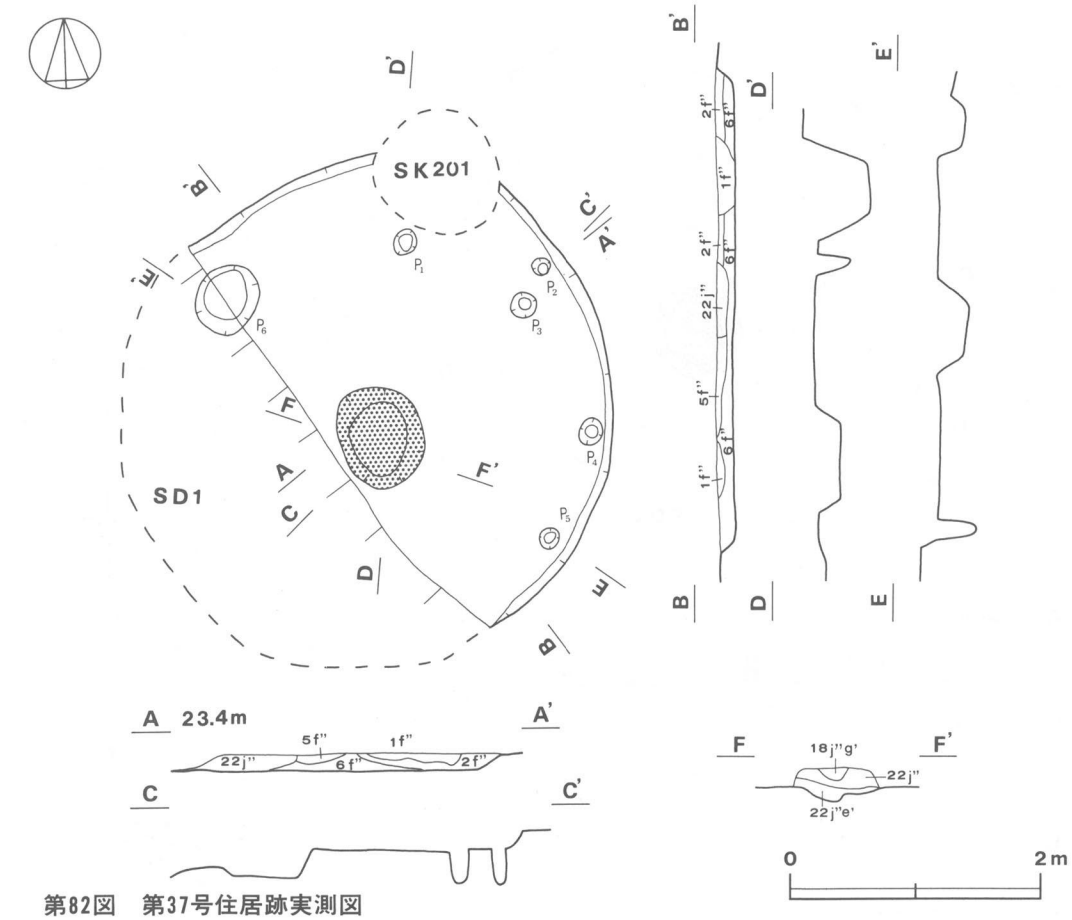
覆土は５層からなり，主に褐色土・暗褐色土の順で堆積している。一部攪乱もみられるが，自然堆積をしている。

遺物は，縄文土器片が覆土から２点，床面から５点出土している。

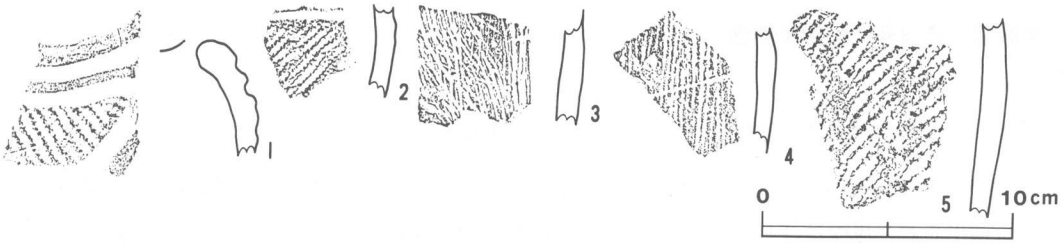
第37号住居跡出土土器（第83図１～５）

１・２は，沈線による施文がなされている口縁部ないしは口辺部片である。１は，波状縁を呈し，太い沈線により楕円形の区画を行なっている。３・４は，条線文が施されている。４はやや太めのもので，多截竹管状施文具によるものと思われる。５は，縄文だけの胴部片である。

本跡からの出土土器はごく少ないが，加曽利ＥⅢ式期のものと思われる。したがって，本跡の時期は，加曽利ＥⅢ式期と推定される。



第82図　第37号住居跡実測図

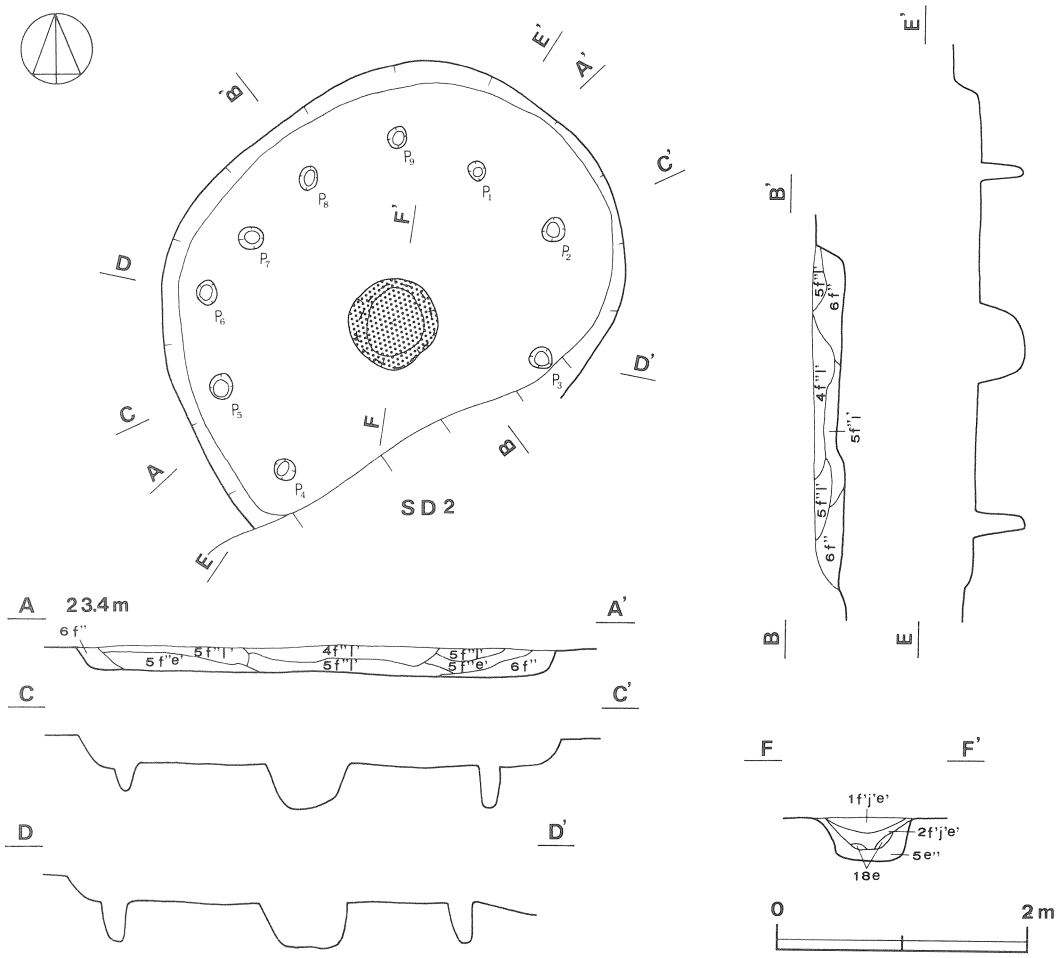


第83図　第37号住居跡出土遺物拓影図

第38号住居跡（第84図）

本跡は，遺跡の東部H5e9区を中心に確認されたもので，第37号住居跡の南東側0.5mに位置している。南側から南東側にかけて第２号溝と重複している。溝との新旧関係は，底面の切り合いから本跡が古いと考えられる。

平面形は，重複のため長径3.8m・短径3.3m（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，



第84図　第38号住居跡実測図

N－38°－Eを指している。壁はよく締まっており，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は，16～22cmである。床面は，ロームブロックを含みよく踏み固められており，平坦である。ピットは，9か所検出され，規模は径16～20cm・深さ21～40cmで細く浅いものである。P_1・P_3・P_4・P_7は深さが一定しており，炉を囲んで対角線上に配列されているので，主柱穴と考えられる。炉は本跡の中央に検出され，径70cmの円形で，37cm床面を掘り凹めた地床炉である。炉床は硬く焼け，覆土には焼土が充満しており，長期間の使用がうかがえる。

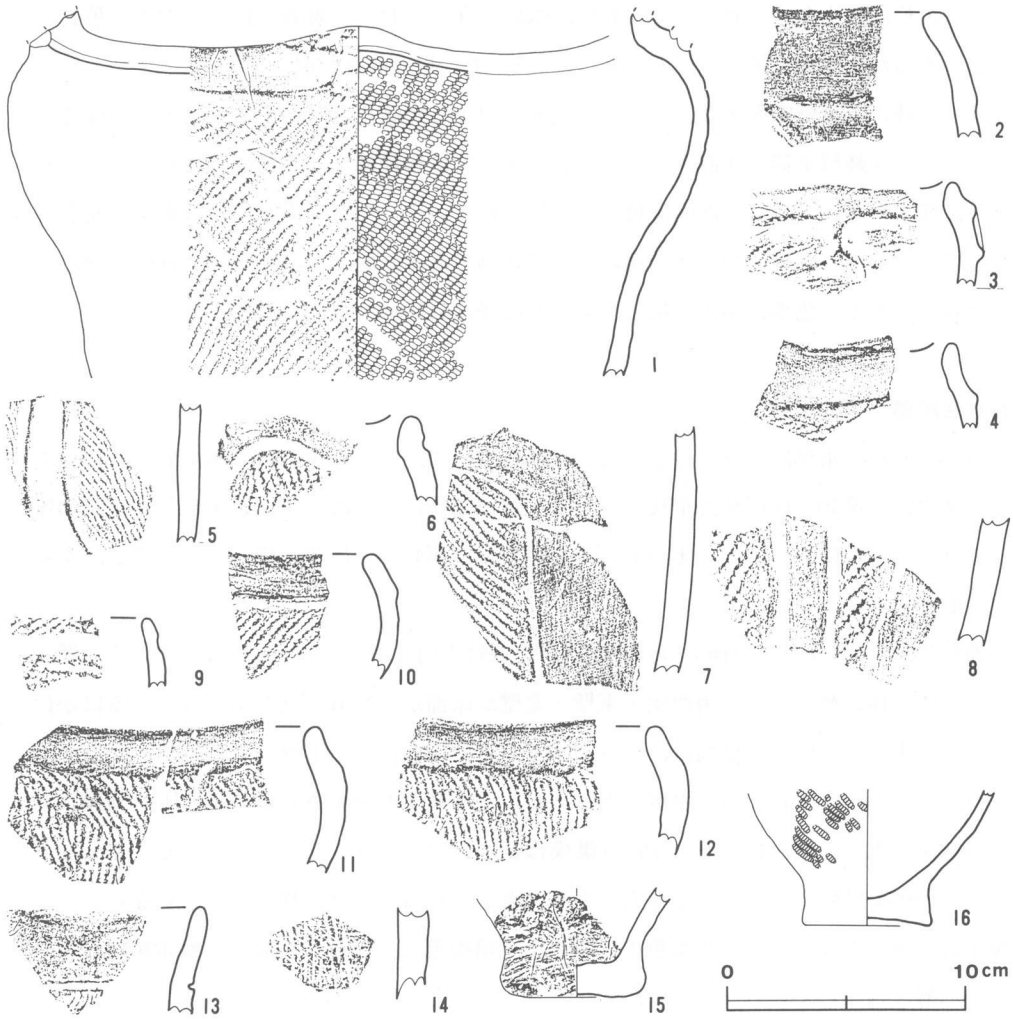
覆土は5層からなり，すべて褐色土でほぼ自然堆積である。どの層にもローム粒子が含まれている。

遺物は，縄文土器片及び石器が覆土から少量，南側の床面から縄文土器片が微量出土している。

第38号住居跡出土土器（第85図１～16）

１は，本跡の南東側の床面上から一括して出土した破片と炉跡内から出土した破片が接合し，復元されたもので，本跡の時期決定に有力な資料と考えられる。口縁部が内傾し，胴部がくびれる器形を呈しており，４単位の波状縁をなすものと推定される。そのうち２か所には小さな橋状把手が付されていたものと思われるが，欠損している。口縁部には１条の微隆線で区画された無文帯を有し，以下全面に単節縄文ＲＬが縦位回転されている。内面には，横ナデが加えられているが，あまり丁寧ではない。胎土には砂粒を多く含んでおり，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。口径の推定はむずかしいが，約25.0cm前後と思われる。現存高は15.2cmである。

２は，幅の広い無文帯を有する口縁部片で，以下微隆線よる区画を行なっている。３は，緩い波状を呈する口縁部片で，左右から隆線が寄り合い長楕円形状の区画を表している。４・10～



第85図　第38号住居跡出土遺物実測図・拓影図

12は，口縁部に無文帯を有し，以下は縄文が施されている。4は内傾し，10は内湾している口縁部片である。11・12の縄文は，撚りの弱い単節縄文と思われる。5は，微隆線により曲線的モチーフが描かれている胴部片である。6は，波状を呈する口縁部片で，沈線によって曲線的区画がなされ，内部に縄文が充填されている。7・8は，沈線による区画をもつ胴部片である。7は，細い沈線による逆U字状の区画を施し，8は，直線的な磨消懸垂文を施している胴部片である。9は，口縁部の小片で，太く浅い凹線が口縁直下に巡らされている。13は，口縁部無文帯下に1条の沈線を巡らし，以下は条線文が付されている。14は，乱雑な格子目状を呈する条線文が施されている。

15は，本跡の覆土から出土した底部片である。底面近くは，ヘラ状工具による横ナデが著しく，内面は調整が粗く凹凸が激しい。なお，底面中央部には刺突痕がみられるが，意味は不明である。全体的に調整は良くない。胎土には小石粒，微砂を含んでおり，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が灰黒色を呈している。底径は5.5cmで，現存高は4.6cmである。

16は，本跡の南東側床面上に伏せられた状態で出土した破片と炉跡内から出土した破片が接合したもので，深鉢形土器の底部片である。胴下半部には単節縄文ＬＲが縦位回転されている。底面近くは横ナデされている。内面は縦ナデが施されている。なお，本土器片は器厚が左右で著しく違っている。厚い部分で約6㎜，薄い部分で3㎜である。胎土には小石粒，砂粒を含んでおり，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。底径は5.1cmで，現存高は5.7cmである。

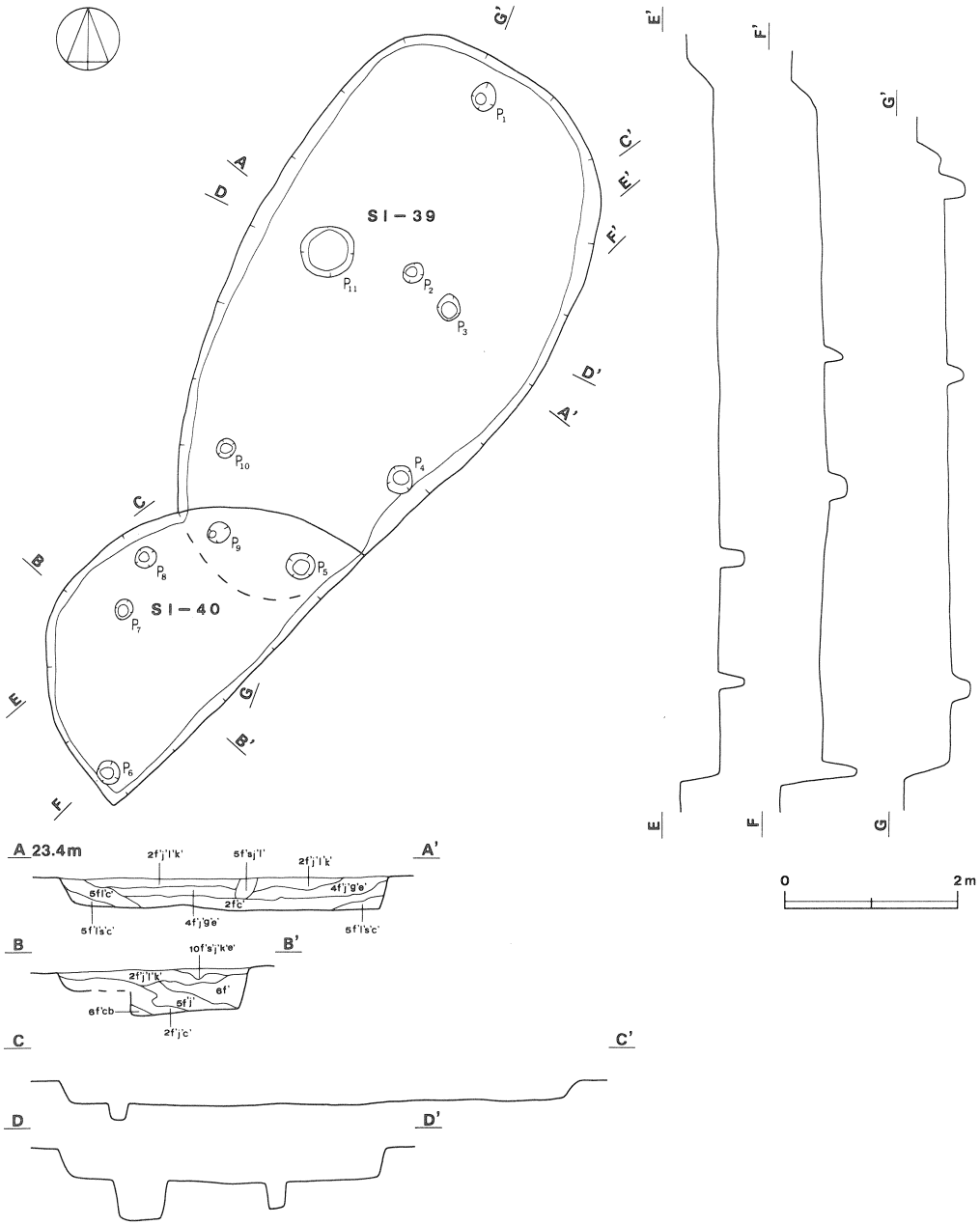
第39号住居跡（第86図）

本跡は，遺跡の東部H6c_1区を中心に確認されたもので，第34号住居跡の南東側2ｍに位置している。南西側で第40号住居跡と重複している。新旧関係は，本跡の床面が第40号住居跡の床面に比べて高いレベルにあり，貼り床のあともないので，第40号住居跡に切られたと考え，本跡が古いと判断される。

平面形は，長径6.8ｍ・短径3.7ｍの楕円形で，長径方向は，N－26°－Eを指している。壁はソフトロームで全体に軟らかい。南西壁・東壁・北壁が床面から垂直に立ち上がっているほかは，外傾して立ち上がっている。壁高は，21～33cmである。床面はソフトロームで締まりがなく，ロームブロックが少し含まれており平坦である。ピットは8か所検出されている。P_{11}の規模は径60cm・深さ47cmで太く，P_1～P_5・P_9・P_{10}の規模は径24～34cm・深さ21～32cmである。P_1～P_5・P_9・P_{10}の7か所は配列などから，主柱穴であると考えられる。炉は，検出されていない。

覆土は5層からなり，主に暗褐色土・褐色土・暗褐色土・褐色土の順で自然堆積をしている。大部分の層は締まっている。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。



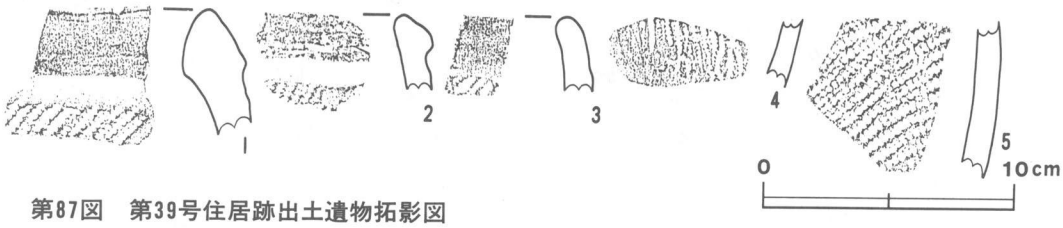
第86図　第39・40号住居跡実測図

第39号住居跡出土土器（第87図１～５）

１～３は，口縁部無文帯を有し，以下は縄文が施されており，１は非常に厚手である。１・２の胎土には，大粒の石英，長石粒を多く含んでいる。特に２は，混入が著しく粗雑な胎土である。４は，胴下半部の小片で，磨消懸垂文の下端がみられる。５は，縄文だけが施された胴部片である。

内面には赤彩痕が認められ注目される。

本跡から出土した土器は，加曽利ＥⅢ式期のものと思われる。したがって，本跡の時期は，加曽利ＥⅢ式期と考えられる。



第87図　第39号住居跡出土遺物拓影図

第40号住居跡（第86図）

本跡は，遺跡の東部H6d₁区を中心に確認されたもので，第34号住居跡の南東側3.5ｍに位置している。北東側で第39号住居跡と重複している。

平面形は，長径4.6ｍ・短径4.2ｍ（農道下に広がるため推定）の楕円形状と思われ，長径方向はＮ－62°－Ｗを指している。壁はソフトロームで硬く，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，20～45cmと比較的高い。床面は，ロームブロックを含みよく踏み固められて，平坦である。第39号住居跡の床面と比べると，８～14cm低くなっている。ピットは５か所検出され，規模は径24～34cm・深さ23～44cmである。５か所とも壁にそってめぐる配列から，主柱穴と考えられる。炉は，検出されていないが，本跡のプランから農道下に築かれていることも考えられる。

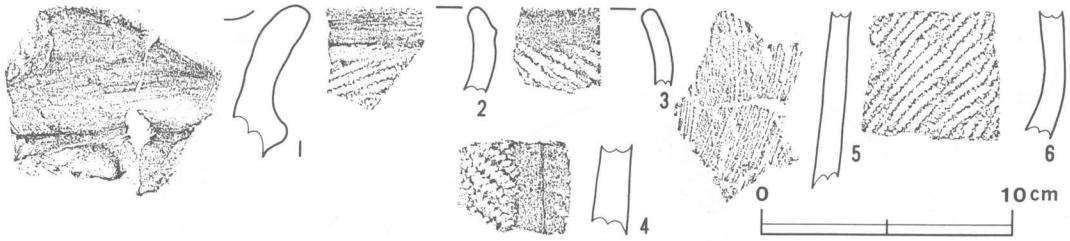
覆土は６層で，主に暗褐色土・褐色土・極暗褐色土・褐色土の順で堆積している。大部分の層がローム粒子を少量含み，締まっている。一部攪乱とみられるところがあるが自然堆積である。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第40号住居跡出土土器（第88図１～６）

１は，大形の深鉢形土器の口縁部片で，隆線による区画内に縄文が充填されている。２・３は，口縁部無文帯を有し，以下は縄文を施している。４は，微隆線と縄文をもつ胴部片である。５は，条線文をもつ胴部片である。６は，縄文だけが施されている胴部片である。

本跡から出土した土器は，少ないが加曽利ＥⅣ式期のものと思われる。したがって，本跡の時期は，加曽利ＥⅣ式期と考えられる。



第88図　第40号住居跡出土遺物拓影図

第41号住居跡（第89図）

本跡は，遺跡の西部G4f$_2$区を中心に確認されたもので，第30号住居跡の西側27ｍに位置している。

平面形は，径5.5ｍの不整円形である。壁は南側が高く，北西側へかけてやや低くなっている。どの壁も床面から外傾して立ち上がり締まっている。壁高は，10～19cmである。床面は褐色土で，硬く踏み締められている。また，全体的にほぼ平坦であるが，中央から西側にかけては６cm低くなっている。ピットは11か所検出され，規模は径30～56cmであるが，深さは23～79cmとばらつきがみられる。配列は不規則で，主柱穴の関係は不明である。なお，P_1・P_3・P_6・P_9は２段に掘りこまれている。炉は本跡の中央に検出され，規模は長径90cm・短径80cmの楕円形で，床面を25cm皿状に掘り凹めた地床炉である。炉壁と炉床は硬く焼けており，長期間の使用がうかがえる。

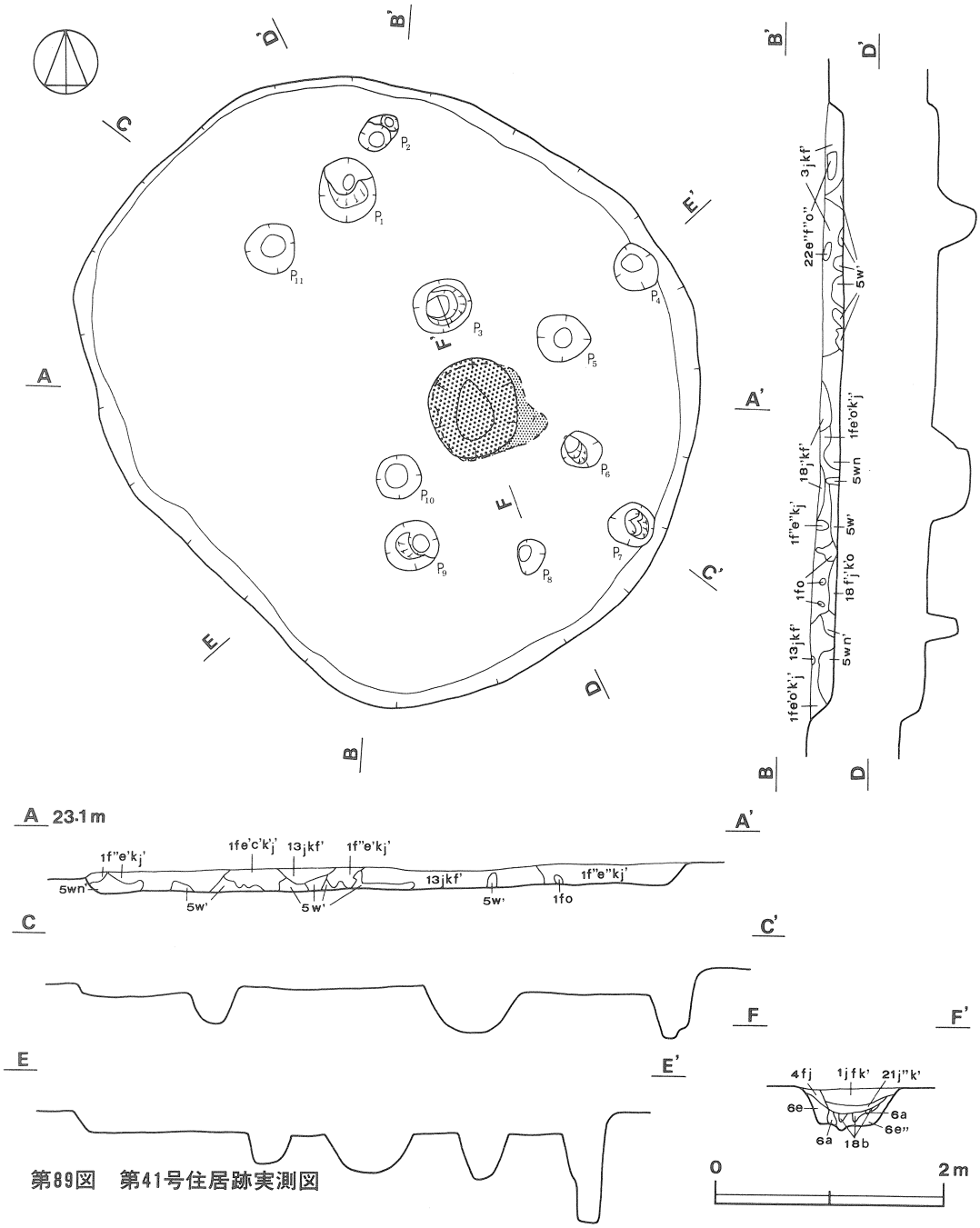
覆土は９層からなり，主に黒褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。大部分の層は締まっており，粘性がある。

遺物は，縄文土器片および石器が覆土から少量，床面から12点，炉の覆土から４点出土している。なお，覆土から出土の石器には石棒が１点含まれている。

第41号住居跡出土土器（第90図１～19）

１は，本跡の炉跡内から出土した破片を中心として，炉跡周辺の床面および覆土から出土した破片10点が接合したものである。内傾する大形の深鉢形土器の口縁部片である。口縁部無文帯を有し，以下は単節縄文ＬＲを縦位回転で施文している。無文帯と内面は横ナデにより調整されている。器面には若干炭化物が付着している。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を主としているが，部分的に赤味の強い部分と黒味の強い部分がみられる。推定口径は44.0cmで，現存高は8.2cmである。

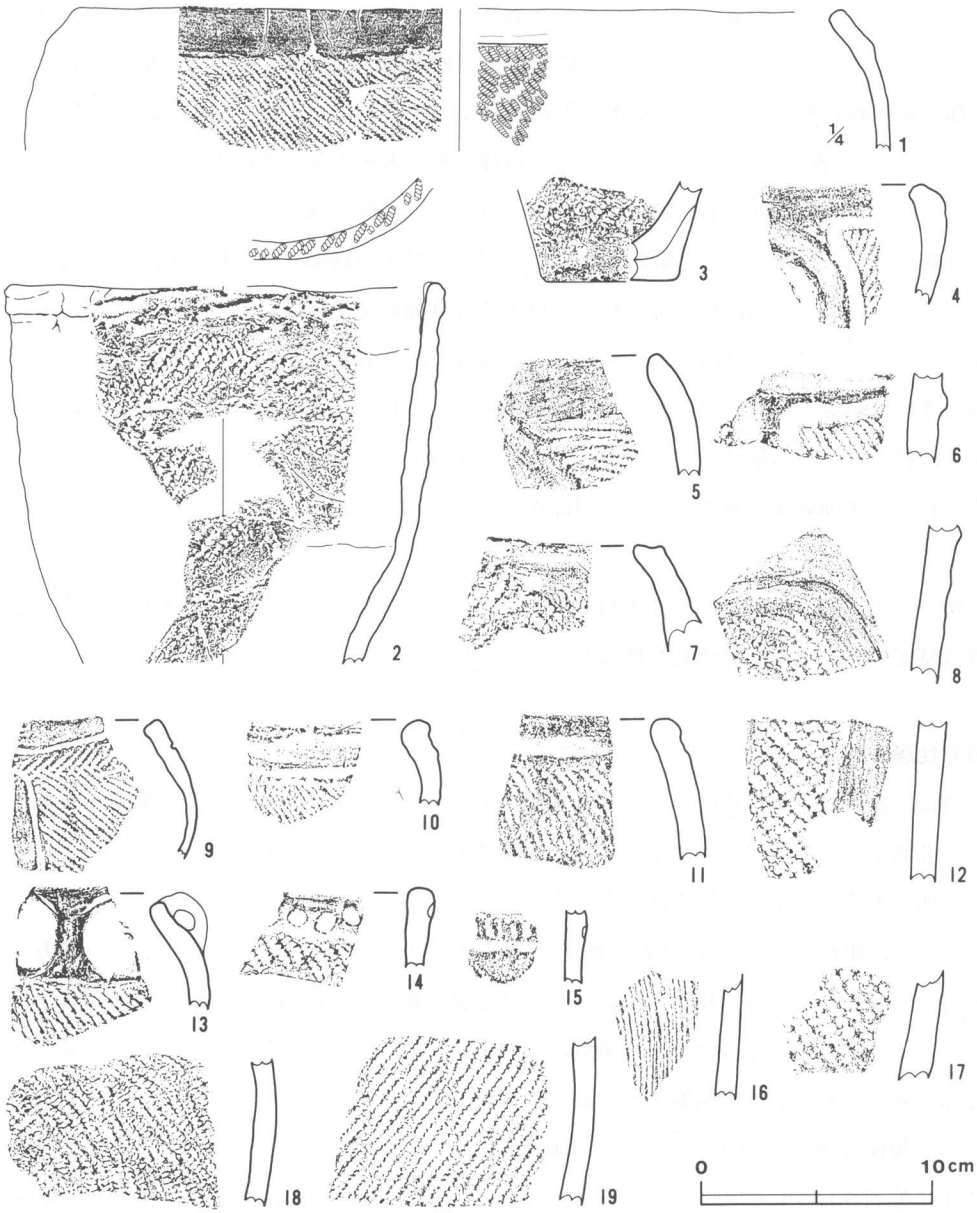
２は，本跡の南東側の覆土の下部から口縁を北方向に向けて逆位で出土した破片と，口縁を南西方向に向けて正位で出土した破片を中心として復元されたものである。全体に作りが粗雑で，凸凹が激しい。口唇部および器面全体に単節縄文ＬＲが横位回転で施文されている。口縁直下は



第89図　第41号住居跡実測図

特に調整が悪く，未調整に近い状況である。内面も横ナデされているが雑である。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は内外面とも褐色を呈している。推定口径は18.5cmで，現存高は16.2cmである。

3は，本跡の西側の床面上から正位で出土した底部片である。外面には粗い縄文が施文されて



第90図　第41号住居跡出土遺物実測図・拓影図

いて，底面近くは横ナデが加えられているが，粗いものである。内面はナデにより調整されている。胎土には粗い砂粒が混入しているが，焼成は良好である。色調は外面が茶褐色で，内面が灰褐色を呈している。推定底径は6.0cmで，現存高は4.0cmである。

4は，隆線とこれに沿う沈線により区画されている口縁部片である。5は，口縁部無文帯を有し，微隆線による区画と縄文を施している。6は，隆線による区画をもつ口辺部片である。7は，

縄文が付されている口縁部片で，下端が若干盛り上っていて，あるいは橋状把手のようなものが付されていたのかもしれない。8は，微隆線による曲線的区画と縄文をもつ胴部片である。9は，口縁部に幅の狭い無文帯を有し，胴部は非常に薄く，細い沈線による逆U字状の区画が描かれている。10は，炉の覆土から出土したもので，口縁部無文帯を1条の沈線で区画し，以下は無節縄文が付されている。器面は若干剝落している。11は，口縁部に浅い1条の沈線を巡らしており，以下は縄文が施されているが，磨滅が激しい。12は，厚手の胴部片で，粗い縄文と磨消懸垂文を有している。13は，口縁部無文帯を有し，以下には無節縄文が施されている。無文部に小さな橋状把手が付けられており特徴がある。14は，口縁部に円形刺突文が施されており，以下には縄文が施文されている。施文具は中空のものと推定される。15は，多截竹管状施文具による爪形状の刺突文が付されている胴部の小片である。16は，条線文がやや深く鋭く施文されている胴部片である。17は，複節縄文が施されている胴部片である。18・19は，縄文だけが施されている胴部片である。

本跡から出土した土器には，加曽利EⅢ式期のものとEⅣ式期のものが含まれている。本跡の時期は確定できないが，加曽利EⅣ式期と考えられる。

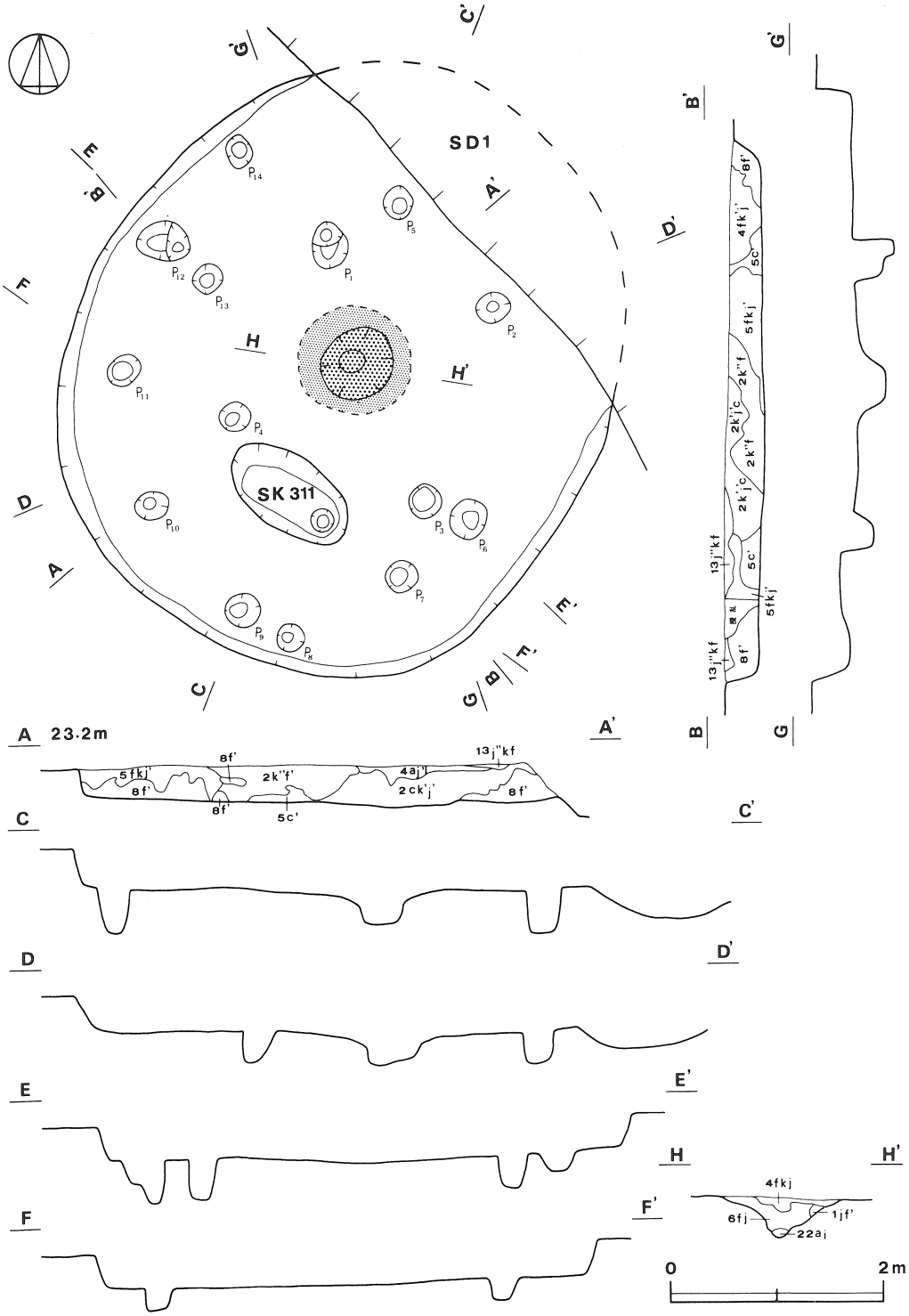
第42号住居跡（第91図）

本跡は，遺跡の中央部F4g_9区を中心に確認されたもので，第30号住居跡の南側6mに位置している。北側から北東側にかけて第1号溝，南側で第311号土壙と重複している。土壙との新旧関係は不明であるが，溝とでは本跡の方が古い。

平面形は，重複のため長径5.6m（推定）・短径5.1mの楕円形状と思われる。長径方向は，N－40°－Eを指している。壁はロームブロックを含み軟らかく，西側と南西側の壁は床面から外傾しているが，ほかの壁はほとんど垂直に立ち上がっている。壁高は，31～34cmである。床面はよく踏み固められており，南側がやや高く，西側及び炉の周辺が凹んでいる。ピットは14か所検出され，規模は径28～50cm・深さ18～54cmである。P_1～P_4は深さが一定しており，炉を囲んで対角線上に配列されているので主柱穴と考えられる。炉は本跡の中央に検出され径68cmの円形で，床面を20cm掘り凹めた地床炉である。炉床と炉壁はよく焼けており，長期間の使用がうかがえる。

覆土は9層からなり，主に暗褐色土・黒褐色土・褐色土が堆積している。いずれの層もよく締まっている。

遺物は，縄文土器片および石器が覆土から大量に，中央の床面から15点出土している。



第91図　第42号住居跡実測図

第42号住居跡出土土器（第92～99図１～106）

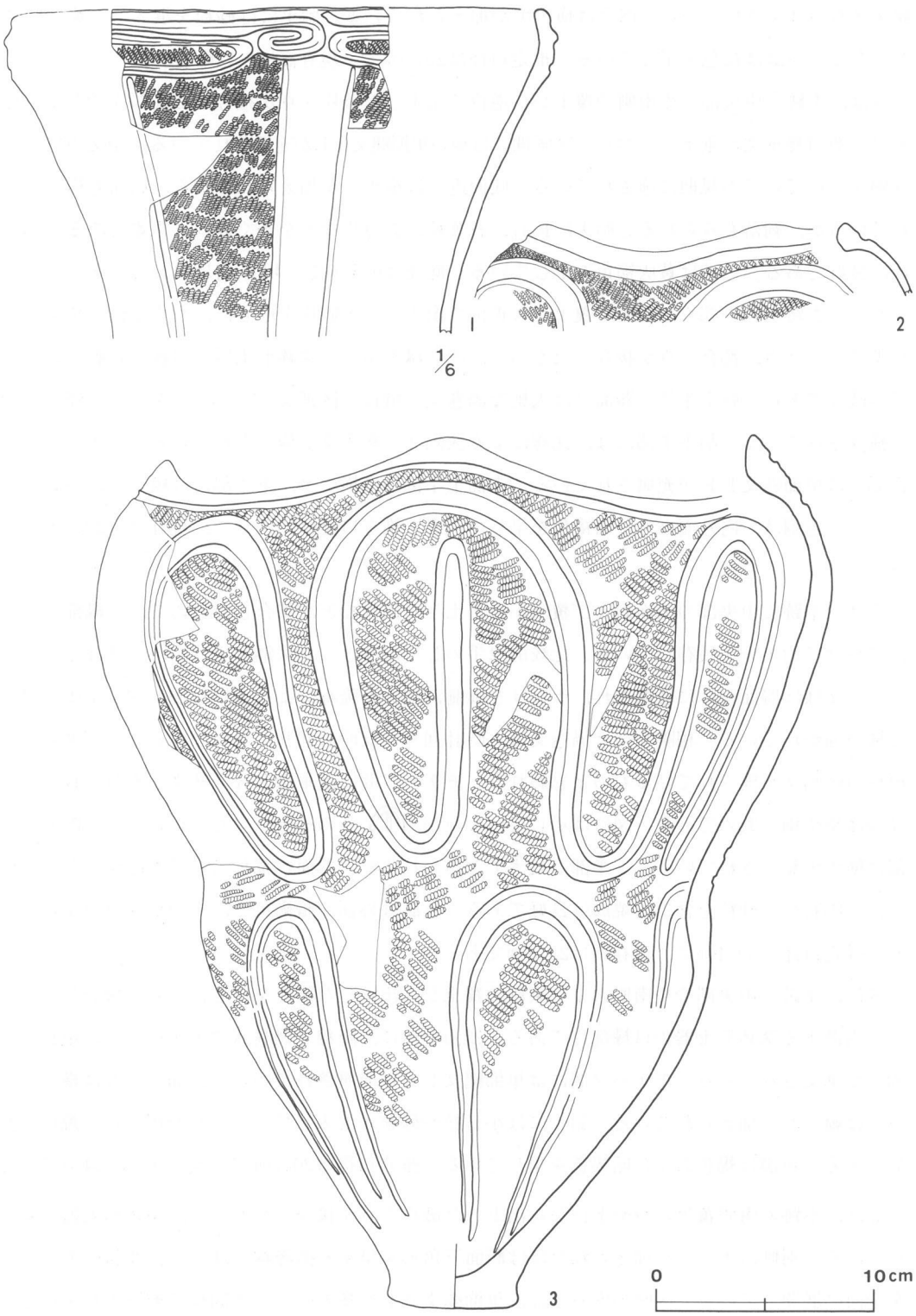
１は，本跡の中央部やや南側の覆土から出土した６点の破片が接合し，ほぼ器形をうかがえるまでに復元されたものである。胴下半部は欠損している。平縁のキャリパー形深鉢形土器であるが，器形はくずれている。口縁部文様帯は異常に幅が狭く，簡略化された渦巻文と長楕円形の区画文で構成されている。口縁部文様帯を区画する隆線も沈線を伴い，弱く低平化している。これに対して，胴部の磨消懸垂文の幅は広くなっている。縄文は単節ＲＬで，口縁部は横位回転，胴部は縦位回転である。懸垂文帯には縦ナデが丁寧に加えられている。内面は横ナデを主としているが，一部に縦ナデも施されている。全体としては厚手のしっかりとした土器であるが，口縁部文様帯が極端に狭い点が特徴的である。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は内外面とも褐色を呈している。推定口径は48.0cmで，現存高は30.0cmである。

２は，本跡の中央部やや北東側の床面上から正位で出土した２点の破片と覆土の下層から出土した破片２点が接合したもので，強く内湾する深鉢形土器の口縁部片である。口唇部内側が肥厚し，器壁は非常に薄い。緩い波状縁を呈し，口縁直下に１条の沈線を施し，胴部には２本組の沈線で曲線的モチーフが描かれている。沈線間は磨り消されている。縄文は細かい単節ＲＬで横位，縦位回転で施文されている。内面は整形が粗く凹凸を有しているが，横ナデが施されている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。推定口径は14.0cmで，現存高は4.9cmである。

３は，本跡の床面中央部から正位で出土した大破片を中心として，付近の覆土から出土した破片が接合し，ほぼ完形となったものである。口縁部から胴下半部にかけての一部が欠損している。本跡の時期決定遺物として貴重なものである。緩い４単位の波状縁を有し，胴部が著しくくびれ，胴下半部が少し張り，以下小さな底部に移行している。波頂部の高さが少し異なり，底部も平坦ではなく傾いている。歪（ゆが）みの大きい土器である。全体の残存率としては約70％程度であろう。

口縁直下に１条の沈線を巡らし，胴上半部には 状のモチーフが４単位施されているものと思われる。胴下半部には，逆Ｕ字状のモチーフが７単位で描かれていると推定される。いずれも２本組の沈線で施文が行なわれ，沈線間は磨消されている。沈線のモチーフ以外の部分には単節縄文ＬＲが充塡されている。底部近くは縄文が付されずに，縦ナデが加えられている。外面の上半部の一部にはわずかに炭化物の付着が認められる。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが顕著に加えられている。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は上半部が暗褐色で，下半部が褐色を呈している。口径は27.1cmで，現存高は40.0cmである。

４は，本跡の中央部やや北側の覆土から逆位で出土した破片と，覆土から出土した破片１点の都合２点が接合したもので，深鉢形土器の口縁部片である。口縁部は内湾し，口縁直下に刺突文を巡らし，これを１本の沈線で区画し，胴部に逆Ｕ字状の磨消帯が施文されている。区画外には単節



第92図　第42号住居跡出土遺物実測図　(1)

縄文ＲＬが施文されている。内面は横ナデが加えられている。胎土には砂粒を混入し，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は25.2cmで，現存高は7.7cmである。

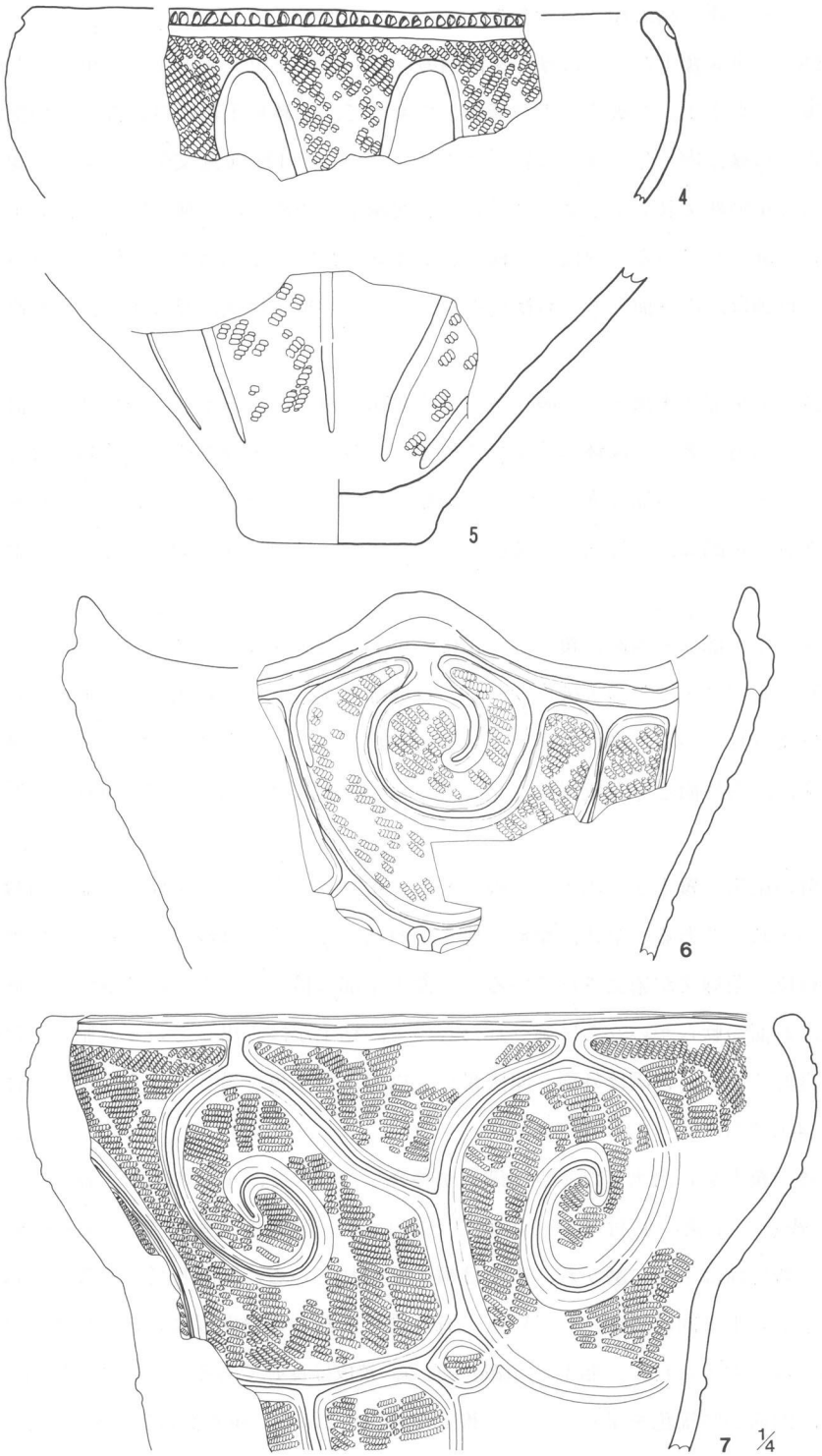
5は，本跡の中央部やや南側の覆土から逆位で出土した破片3点が接合した底部片である。外面には磨消懸垂文が垂下しており，区画間には粗い単節縄文ＲＬが充填されている。縄文の施文は，間隔があいていて不規則に施されている。底面近くは横ナデが加えられている。内面も横ナデされているが，剥落もみられる。胎土に長石，石英粒，雲母片などを多く含み，粗雑であるが，焼成は良好である。色調は黄灰褐色を呈している。底径は6.4cmで，現存高は11.2cmである。

6は，本跡の中央部やや西側の覆土から正位で出土した大破片を中心に，やや南側の覆土から出土の小片2点，都合7点が接合したもので，波状縁を呈する深鉢形土器の口縁から胴部にかけての破片である。胴上半部の器面には大柄な渦巻文と縦長の区画文が，ナゾリを加えた隆線により構成されている。胴下半部には，沈線による区画文と蕨手文が施文されている。モチーフの余白部には単節縄文ＬＲが充填されている。内面上半部には横ナデ，下半部には縦ナデが加えられている。色調は，内外面ともに暗褐色を呈している。推定口径は35.9cmで，現存高は20.0cmである。

7は，本跡の中央部の床面および覆土から出土した破片などが接合したもので，口縁部から胴部にかけて約半分が残存している。比較的厚手のしっかりとした深鉢形土器で，胴部はくびれている。文様は器面全体に展開され，ナゾリを両側に加えた隆線により大柄な渦巻文を主体とする文様が描かれている。相隣り合う渦巻文は，時計回りと反時計回りに巻いている。胴下半部には，縦長の区画文が施されているものと思われる。モチーフ間には単節ＬＲの縄文が充填されている。隆線はやや細く低めである。図には示していないが， 状のモチーフも認められる。内面上半部は横ナデ整形されている。下半部は縦ナデと思われるが，器面が荒れていて不明瞭である。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が暗褐色で，内面が褐色を呈している。推定口径は39.4cmで，現存高は23.3cmである。

8は，本跡の中央部やや南側および東側の覆土から出土した破片を中心に3点が接合したもので，内湾する深鉢形土器の口縁部片である。器面全体に，隆線で渦巻状のモチーフと，縦長の区画文が施文されている。モチーフ間には単節縄文ＬＲが充填されている。内面上半部は横ナデ，以下は縦ナデが加えられている。胎土には小石粒や砂粒が混入していて，やや粗いが，焼成は良好である。色調は褐色および暗褐色を呈している。推定口径は20.7cmで，現存高は7.4cmである。

9は，本跡の南側覆土のやや上位から出土した破片5点が接合したもので，深鉢形土器の胴部片である。両側にナゾリが加えられたほぼ断面三角形を呈する微隆線を使って，曲線的モチーフを全面に展開している。区画の内外には，単節縄文ＲＬが多方向からの回転で充填されている。内面は横ナデにより調整されている。胎土には小石粒や砂粒を含み，焼成は良好である。色調は



第93図　第42号住居跡出土遺物実測図　(2)

褐色を呈している。現存高は10.2cmである。

10は，本跡の南東側覆土から，口縁部を南西方向に向けて正位でまとまって出土した破片16点と，付近の覆土から出土した破片２点が接合したもので，深鉢形土器の口縁部から胴部にかけてのものである。口縁は内湾し，胴部は緩くくびれている。口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下全面に密に単節縄文ＲＬが施文されている。沈線下の一部だけが横位回転で，以下には斜位回転を主として施されている。内面は，横ナデが加えられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は，内外面ともに暗褐色を呈している。推定口径は35.7cmで，現存高は26.0cmである。

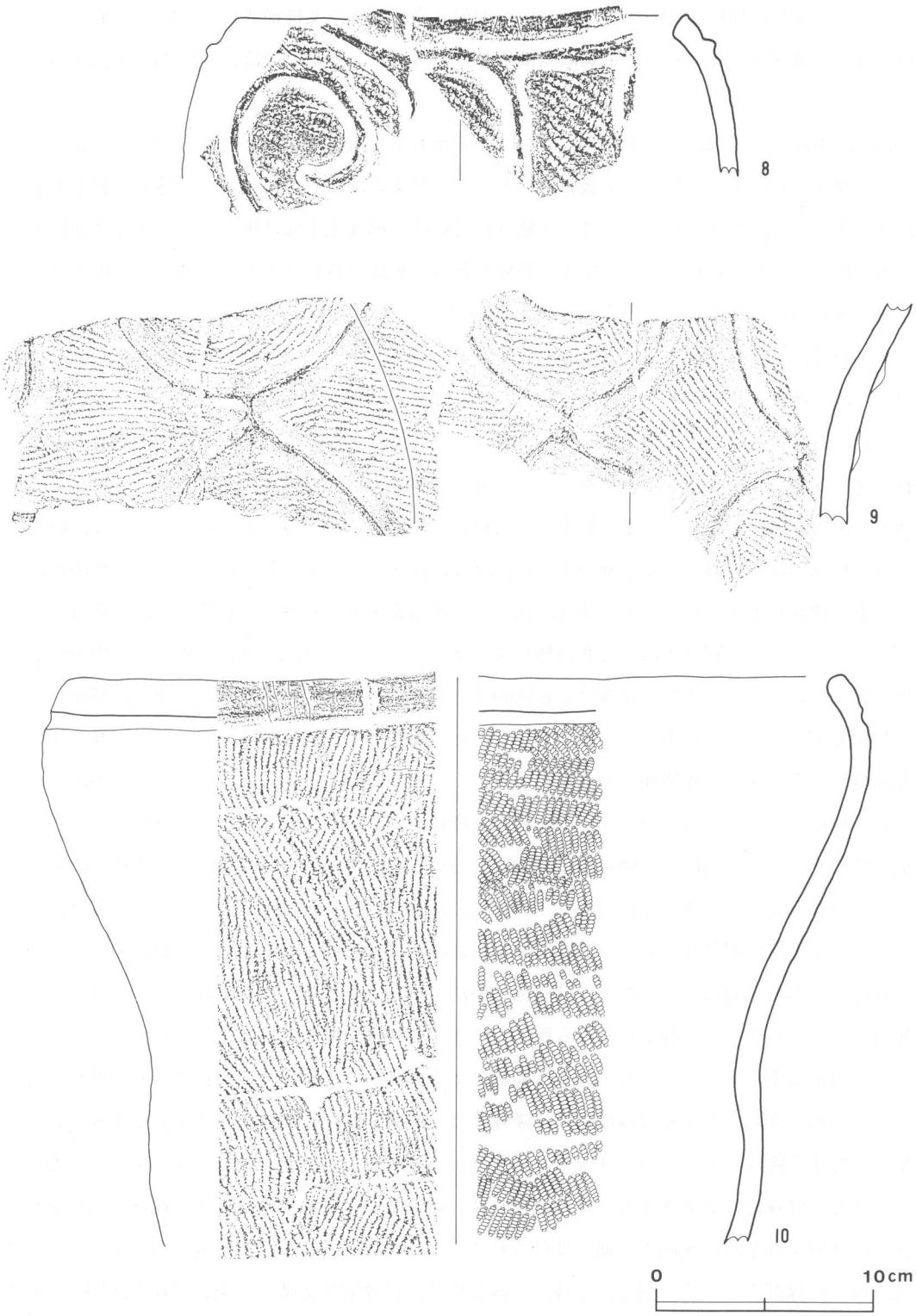
11は，本跡の中央部の床面出土の破片と，やや北側の覆土から出土した破片２点の計３点が接合したもので，内湾の著しい深鉢形を呈している。口縁直下に凹線を巡らし，胴部には単節縄文ＲＬが施文されている。内面は横ナデにより調整されている。胎土には小石粒や砂粒を含み，焼成は良好である。色調は，内外面とも褐色を呈している。推定口径は29.0cmで，現存高は11.4cmである。

12は，本跡の中央部やや西側の覆土から正位で出土した破片８点が接合したもので，深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての大破片である。口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下に縦位の条線文が施文されている。内面は横ナデが加えられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は，内外面とも黄灰褐色を呈している。推定口径は35.5cmで，現存高は15.1cmである。

13は，本跡の南側の覆土から出土した破片８点が接合したもので，深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての大破片である。全体に整形が悪く，凹凸している。口縁直下にわずかに無文部を残し，以下に縦位の条線文が施文されている。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが施されている。条線文は器面の軟らかいうちに施されたもので，粘土がはみ出している。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が暗灰褐色，内面が黒褐色を呈している。推定口径21.6cmで，現存高は16.4cmである。

14は，本跡の覆土から出土した２点の破片が接合したもので，小形の壺形土器である。口縁部に無文帯を残し，１条の貼付隆線で区画されている。胴部は三角形などの区画を隆線で構成している。器外面は丁寧に磨かれ，内面は横ナデされている。区画している隆線には斜位方向からの孔が上から下に向けて穿たれている。有孔鍔付土器の変遷過程において位置づけることが可能な壺形土器と考えられる。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は，外面が褐色，黒褐色を呈し，内面が暗褐色を呈している。推定口径は8.2cmで，現存高は5.0cmである。

15は，本跡の中央部と，やや東側の覆土から正位と逆位で出土した２点の破片が接合した壺形土器の口縁部片である。口縁部無文帯をナゾリにより形成し，隆線で区画している。隆線の一部

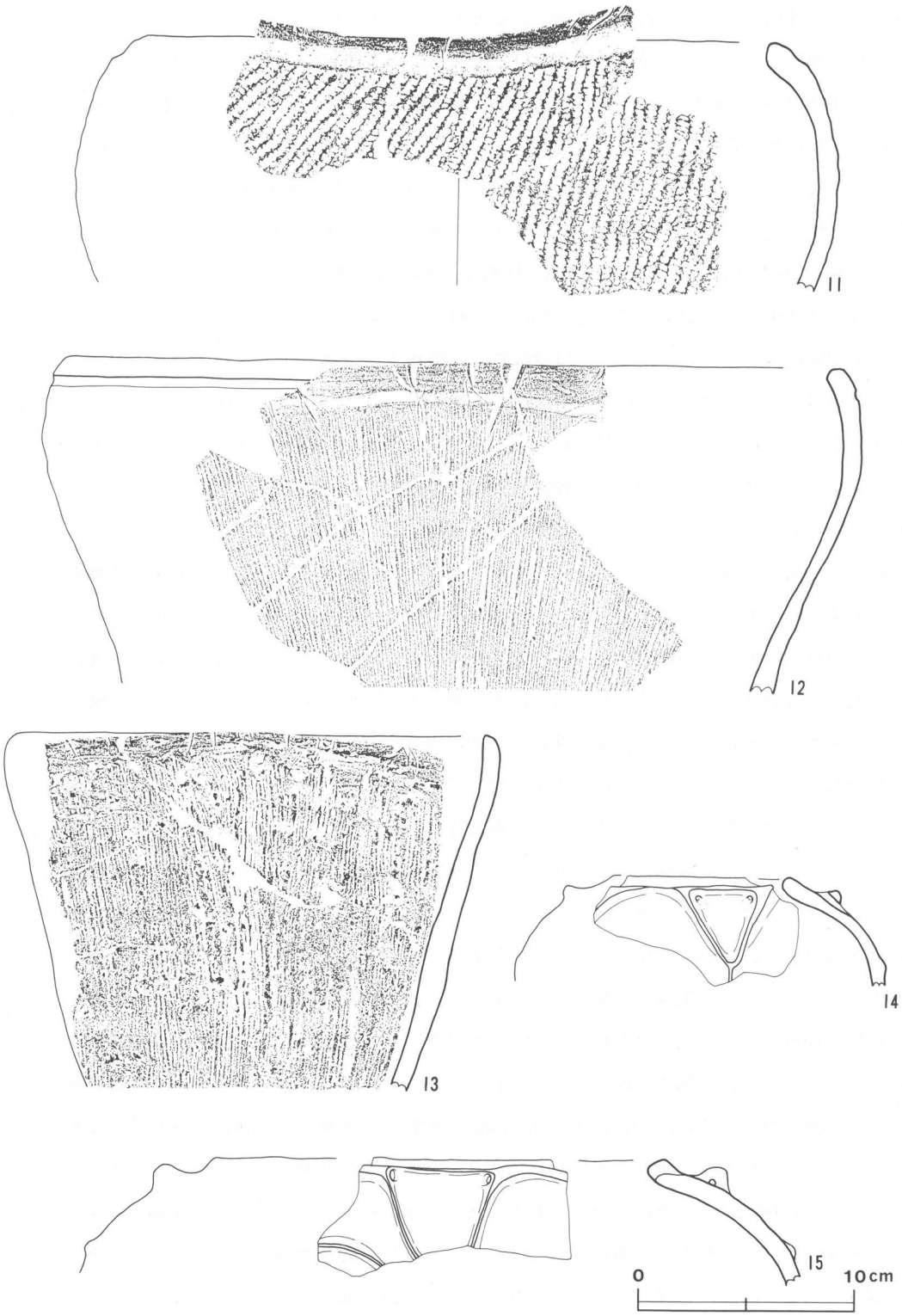


第94図　第42号住居跡出土遺物実測図　(3)

はやや太くなり，横位に孔が穿たれている。胴部は隆線だけで文様構成されている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈している。推定口径は20.7cmで，現存高は5.8cmである。

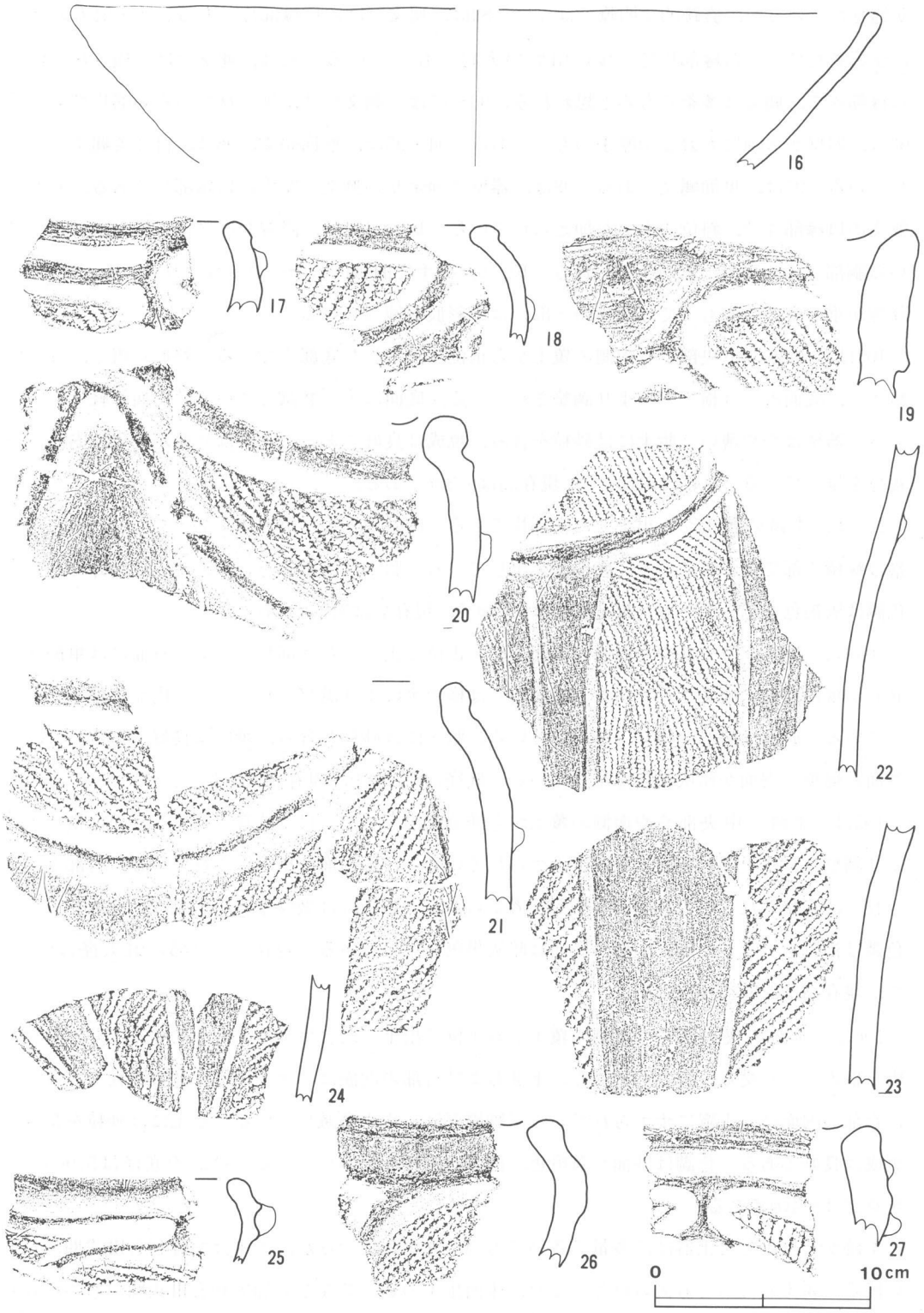
16は，本跡の中央部からやや南側にかけての床面および覆土下層から逆位で出土した３点の破片と，覆土から出土の小片２点が接合したもので，無文の浅鉢形土器である。外面の胴上半部は斜位のケズリ，下半部は縦位のケズリが施されている。内面上半部に横ナデ，下半部には横ナデの後に縦ナデが加えられている。胎土に砂粒を含み，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈している。推定口径は37.0cmで，現存高は7.3cmである。

17・18は，太めの隆線で口縁部に区画文を有するもので，区画内に縄文を充填している。19は，厚手の波状縁を呈する深鉢形土器の口縁部片で，隆線による区画が施されている。胎土には大粒の長石，石英粒，雲母片を多く含み粗い。20は，19と同一個体と思われるが接合はできない。隆線の他に沈線による施文もみられる。21は，大形深鉢形土器の口縁部片で，隆線による半楕円形状の区画内に縄文を施している。胎土には大粒の石英，長石粒が多く含まれ粗い。22は，口辺部片で，口縁部には隆線による区画が施され，胴部には幅の広い磨消帯を有している。磨消帯の中に１本の沈線が加えられている。23は，幅の広い磨消帯を有する厚手の胴部片で，外面はやや磨滅している。24は，胴下半部片で磨消懸垂文が垂下している。色調は外面が褐色で，内面が黒褐色を呈している。25～27は，隆線による区画文を有する口縁部片である。25の隆線は断面三角形を呈する細いもので，拓本の右端は突出している。26は，太めの隆線で，27は，25と26の中間的な隆線である。26には複節縄文が充填されている。28は，やや高めの隆線による区画が施されている口縁部片で，黒褐色を呈している。29は，隆線による区画を有している口縁部片で，25に類似している。30は，胴部片で隆線による曲線的モチーフが描かれている。31は，太めの隆線を主とした施文が行なわれている口辺部片で，胎土には長石，石英粒を多く含んでいる。32は，隆線による区画をもつ胴部片である。33は，２本組の隆線による曲線的モチーフが描かれている厚手の胴部片である。34は，30～33とほぼ同様の手法を有する胴部片で，器壁は薄い。35は，太めの隆線によってモチーフが描かれている胴部片である。36は，35と同様な施文が行なわれているもので，複節縄文が施されている。37も，隆線による曲線的モチーフが描かれている胴部片である。38は，山形の突起を有する口縁部片で，隆線による区画が施された後に縄文が回転されている。39は，低平な隆線とそれに沿う沈線で文様区画がなされている。40は，波状縁を呈する土器の波底部片で，隆線による区画を有している。41は，口縁部に１条の沈線が巡り，胴部に逆Ｕ字状の区画が沈線で描かれ，区画内に縄文は付されていない。42は，沈線による施文が主となっている波状縁の口縁部片である。43は，平縁の口縁部片で，口縁部無文帯を１条の沈線で区切り，胴部には逆Ｕ字状のモチーフが描かれ，内部に粗い縄文が充填されている。44は，沈線による施文が



第95図　第42号住居跡出土遺物実測図（4）

みられる口縁部片である。45も，沈線によるモチーフが主となっている口縁部片である。46～48も，45に類似していて，口縁部に縄文を付し，沈線による曲線的モチーフが描かれている。49は，緩い波状縁を呈するものと考えられ，胴部に蕨手状文が施される点は注目される。50は，口縁部に幅の狭い無文帯を有し，以下に沈線による施文が行なわれている。胎土には小石粒が目立っている。51は，くびれの著しい胴部片で，逆Ｖ字状のモチーフが細い沈線で描かれ，内部に縄文が充塡されている。52は，胴部のくびれ部片で，逆Ｕ字状の沈線区画がみられ，薄手である。53は，胴部片であるがやや厚手で，細い沈線の区画内に縄文が若干被って施文されている。54は，幅の狭い直線的磨消帯をもつ胴部片である。55は，口縁部に３条の浅い凹線を巡らしている。56は，やや低平な隆線が１条巡らされている口縁部片で，隆線下には縄文が付されている。57は，内傾の著しい口縁部片で，幅の広い無文帯下に１条の沈線を巡らし，胴部には縄文を施文している。内外面とも丁寧な横ナデにより調整されている。58は，口縁部に１条の隆線が巡り，以下は単節縄文ＲＬが施文されている。59は，口縁部無文帯を１条の沈線で区切り，胴部には縄文を付している。60も，59と同様のもので，共に内傾している。60は，59より無文帯の幅が広い。61・62も，口縁部に１条の沈線をもつもので，61の沈線は細い。63は，緩い山形突起を有する口縁部片で，円形刺突文が１列に並んでいる。64は，波状縁を呈する土器の波底部片で，口縁直下に刺突列が巡り，胴部には幅の広い曲線的磨消帯が施されている。65・67は，口縁部に刺突文を連ねている。65の刺突文はＤ字状を呈しており，67は，無節縄文上に円形刺突文が施されている。66は，口縁部に１条の沈線を巡らし，口唇部と沈線との間に小さな刺突文を加えている。沈線下には縄文を斜位回転で施している。68は，胴上半部の破片で，幅の広い磨消帯がみられ，破片の上端部には大きめな刺突文が加えられている。69は，胴部片で，Ｕ字状のモチーフを沈線で描き，縄文が充塡されている。70は，隆線による区画をもつ口縁部片で，左右からのせり上りによる接合部は突出している。71は，太い沈線で区画が施されている胴部片である。72は，ごく小形の土器片で，縄文地文上に浅い沈線が施文されていて特異なものである。73～75は，口縁部に１条の沈線を巡らし，以下は縦位の条線文が施されている。76は，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下に縦位の曲線的な条線文が付されている。器面に若干の炭化物が付着し，内面に剝落痕が認められる。77・78は，同一個体で粗い条線文が斜位に付されている。79も，77・78と同様の施文であるが，器面の整形が悪い。80は，わずかな縄文地文上に条線文が乱雑に施されている胴部片である。81は，縦位波状の条線文が付されており，器面がやや磨滅している胴部片である。82は，黒色を呈する胴部片で，条線文を主に若干の縄文が施されている。83は，異条縄文と条線文が重ねて施文されている胴部片である。84～86は，同一個体で縄文地文上に沈線文が懸垂している胴部片である。87は，口縁部に無文帯を有し，胴部全面に縄文が付されている。88は，口縁部に浅い１条の凹線を巡らし，以下に縄文を施している。87・88はともにわずかに浅い凹線状の区画



第96図　第42号住居跡出土遺物実測図・拓影図　(5)

が施されているが，痕跡的で明瞭ではない。89は，縄文だけの口縁部片である。90・91も縄文だけが施されている口縁部片で，緩い山形の突起をもっている。92は，縄文だけが施されている口縁部片で，縄文は多条のものと思われる。93～97は，縄文だけが施されている胴部片である。93は，器壁が2cmにもおよぶ厚手のものである。94・95は，無節縄文，96は，付加条縄文が施されている。97は，単節縄文である。98は，器壁2cm余りの無文の厚手の口縁部片である。99も，無文の口縁部片で，斜位のナデが加えられている。100・101は，隆線だけによる施文が付されている胴部片で，壺形土器かと思われる。100は，薄手で曲線的モチーフが描かれている。101は，隆線が垂下しているもので，破片の一部には赤彩痕が残っている。

102は，本跡の中央部やや南側の覆土から正位で出土した底部片である。整形が粗く，外面は縦ナデ，底面近くは横ナデにより調整されている。底面は少し磨滅している。内面は軽いナデである。器壁はやや薄い。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が灰褐色を呈している。底径は5.6cmで，現存高は6.3cmである。

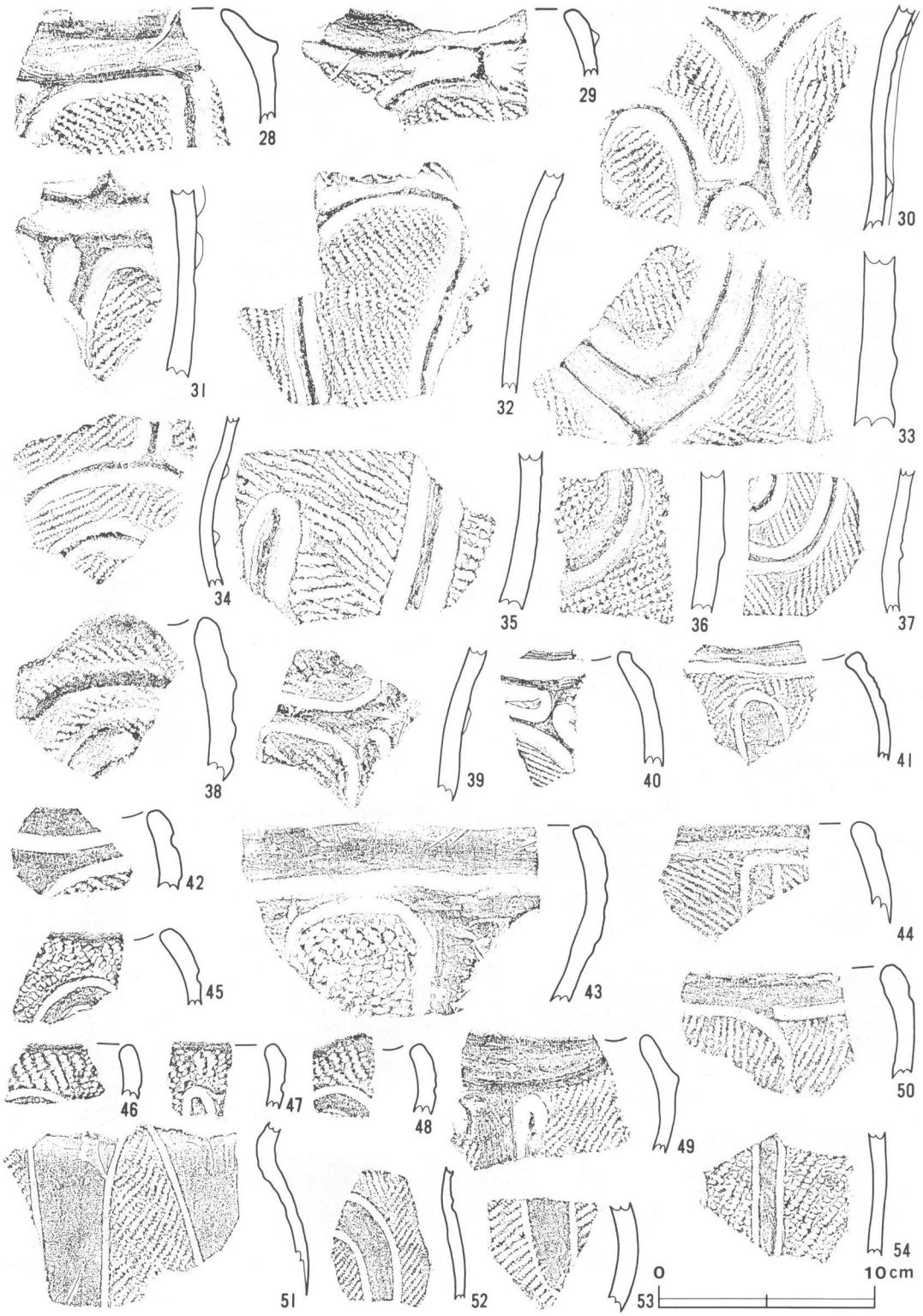
103は，本跡の覆土から出土した底部片である。内外面ともに縦ナデを加えている。残存部上端は輪積み部で剥がれている。底部は突出している。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は灰褐色を呈している。推定底径は6.2cmで，現存高は3.8cmである。

104は，本跡の中央部やや西側の床面上から正位で出土した底部片である。外面には単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されている。底面近くは横ナデにより調整されている。内面は軽くナデられている。底面は整形が粗く，凹凸している。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗灰褐色を呈している。底径は6.2cmで，現存高は4.1cmである。

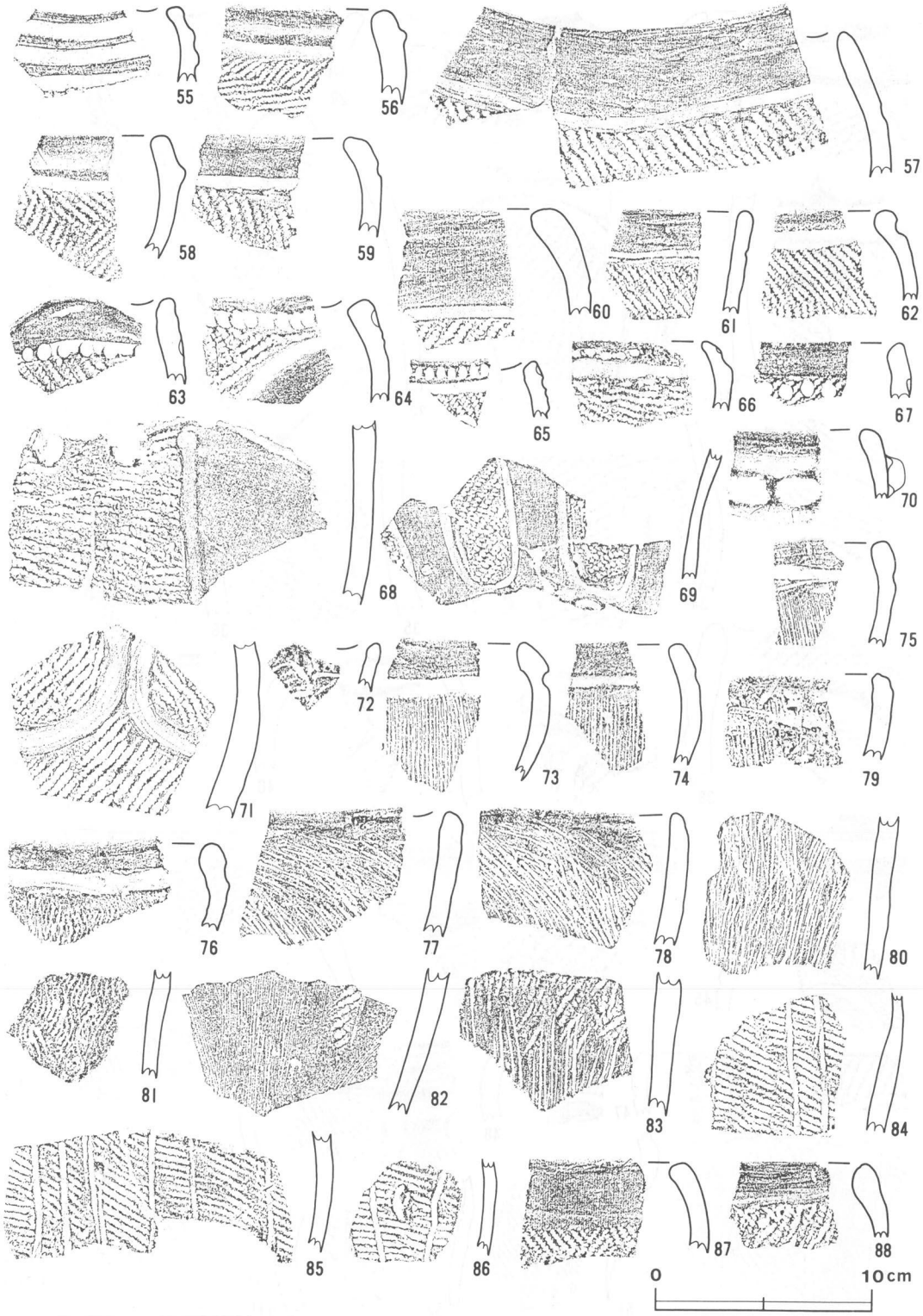
105は，本跡の中央部やや南側の覆土から逆位で出土した台付土器片である。外面は横ナデにより調整され，上部の底面は丁寧にナデられている。台部内面は横ナデされている。台部下端はきれいに調整されていて意図的な整形と考えられる。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。上部の底面は暗灰黒色を呈している。現存する台部の最大径は6.4cmで，現存高は2.5cmである。

106は，本跡の央央部やや東側の覆土から正位で出土した台付土器の台部片である。外面には縦と横のナデが交互に施されている。上部および台部の内面は，ナデにより調整されている。特に台部の内面は，丁寧にナデられている。脚端部は，やや磨滅している。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が黄橙色，内面が灰褐色を呈している。台部の底径は5.9cmで，現存高は3.4cmである。

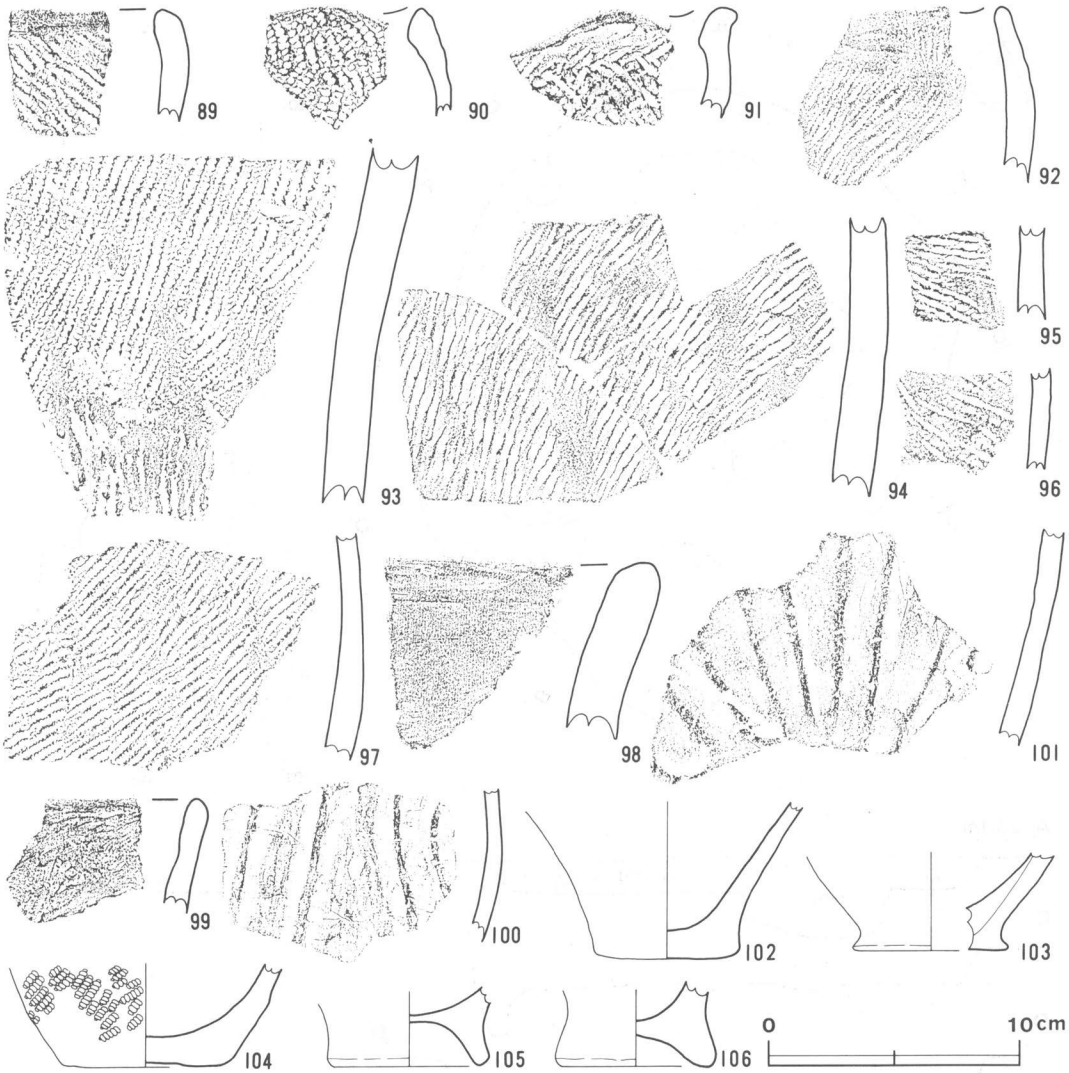
本跡から出土した土器は，多量で各種のものが含まれているが，大半は加曽利ＥⅢ式期の新しい段階に属するものと考えられる。また，床面出土の2，3なども加曽利ＥⅢ式期のものと判断できるので，本跡の時期は加曽利ＥⅢ式期と思われる。



第97図　第42号住居跡出土遺物拓影図　(6)



第98図　第42号住居跡出土遺物拓影図（7）

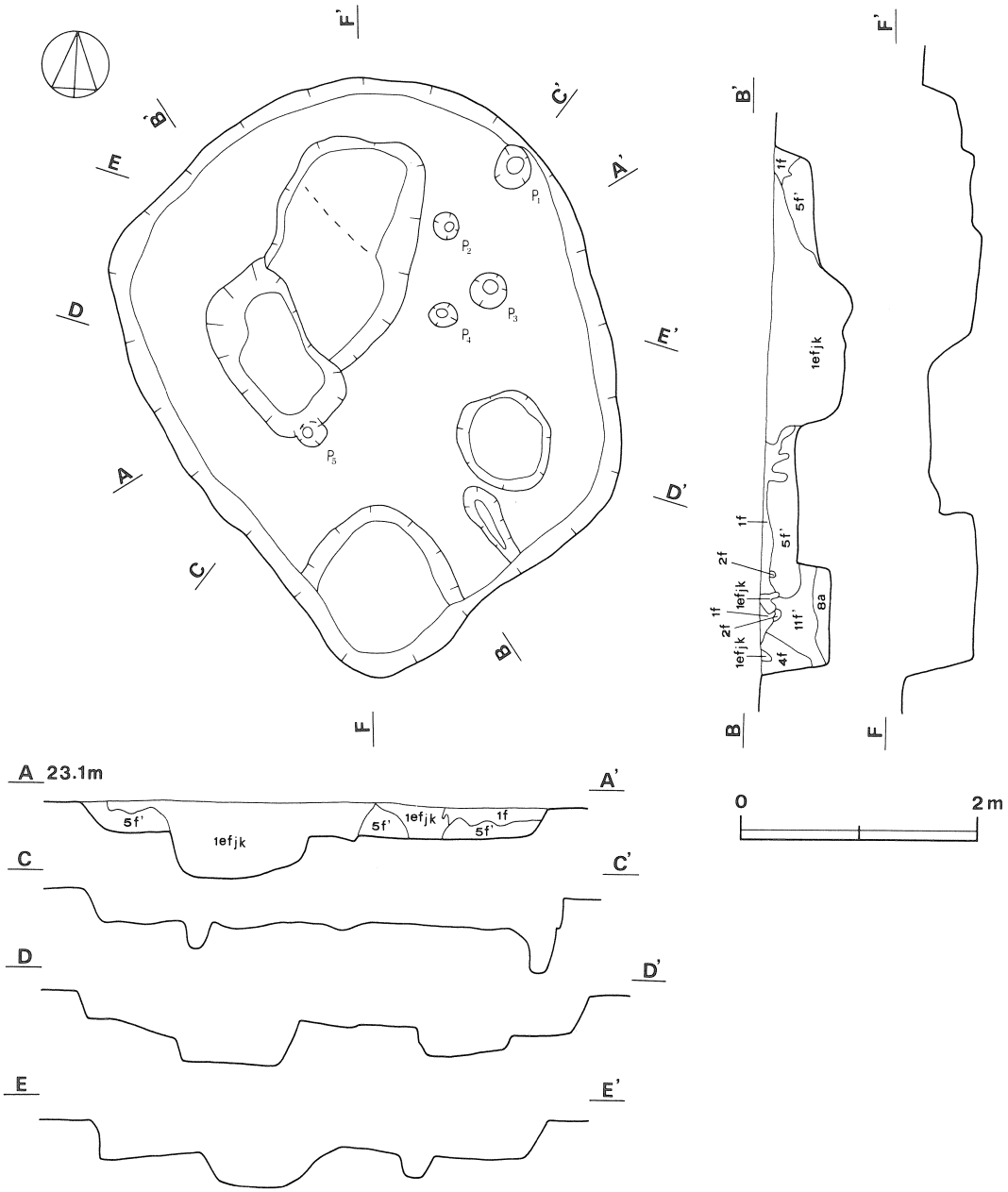


第99図　第42号住居跡出土遺物実測図・拓影図（8）

第43号住居跡（第100図）

本跡は，遺跡の西部G4h_3区を中心に確認されたもので，第41号住居跡の南側５ｍに位置している。

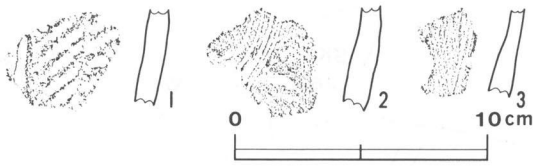
平面形は，長径５ｍ・短径４ｍの楕円形で，長径方向はN－5°－Wを指している。南東壁の一部が床面から緩やかに立ち上がるほかは，垂直に立ち上がっている。壁高は，24～32cmである。床面の大部分は，攪乱を受けて軟弱になり，凹凸がみられる。ピットは10か所検出されている。大形の円形や楕円形のものは攪乱穴であり，後世の掘りこみと思われる。ピットの規模は，径24～34cm・深さ16～35cmである。不規則な配列で，主柱穴の判別はできない。炉は，検出されてい



第100図　第43号住居跡実測図

ない。

覆土は７層からなり，主に暗褐色土・褐色土・明褐色土が堆積している。攪乱穴が掘りこまれているため，覆土の大部分を占める１層は不自然な堆積をしている。３～７の層は締まっており，



6層には粘性がある。

遺物は，縄文土器片が覆土から極少量出土している。

第101 図　第43号住居跡出土遺物拓影図

第43号住居跡出土土器（第101図１～３）

１は，磨消懸垂文が施された胴部片で，単節縄文ＲＬが縦位回転されている。２・３は，条線文が付されている胴部の小破片で，前者が曲線的，後者は直線的に施文されている。

本跡から出土した土器片は，わずかで時期決定資料とはなりえないものである。したがって，本跡の時期は不明である。

第44号住居跡（第102図）

本跡は，遺跡の東部G4h_6区を中心に確認されたもので，第43号住居跡の東側10ｍに位置している。北東側で第261～263号土壙と重複している。土壙との新旧関係は不明である。

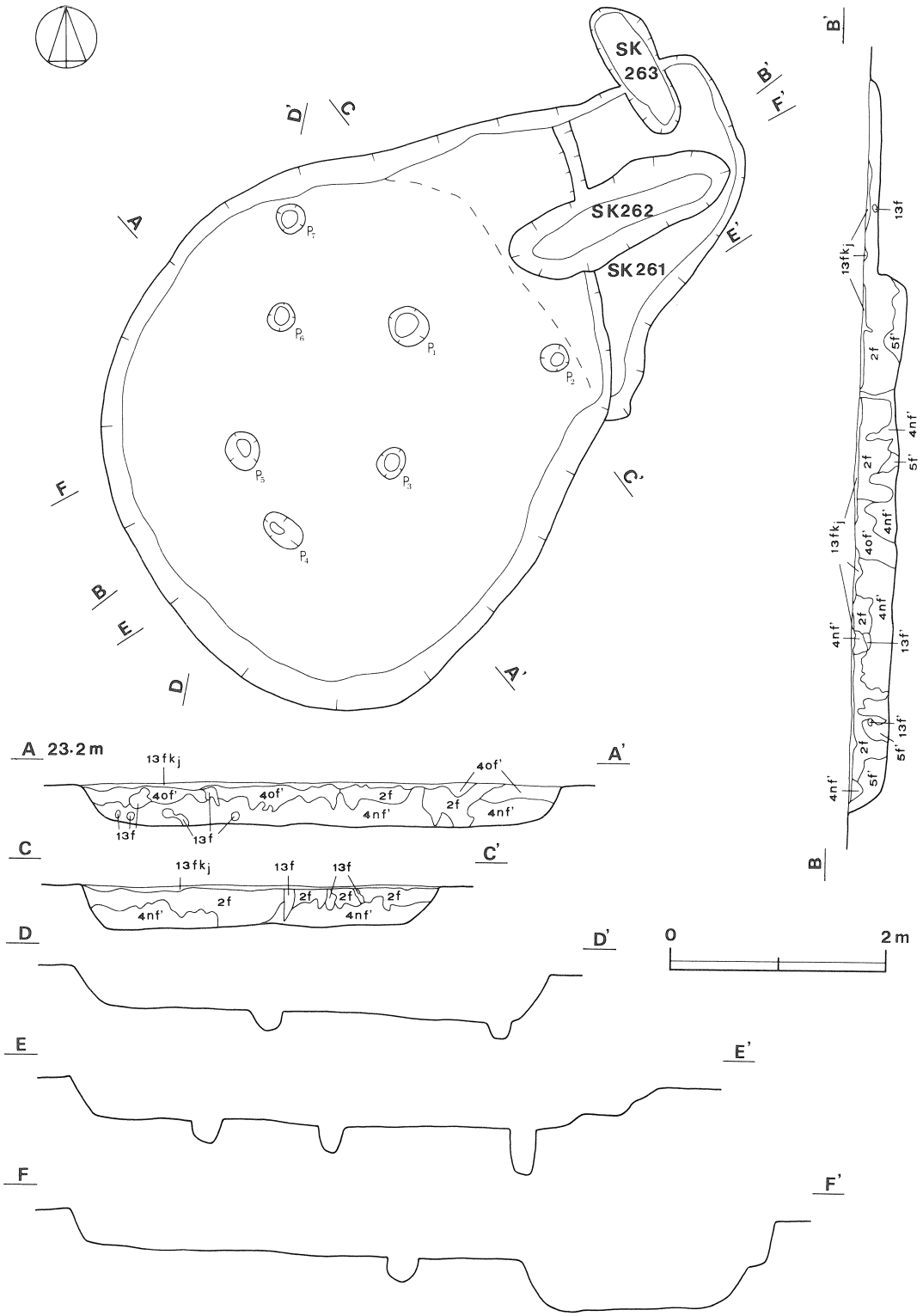
平面形は，長径5.1ｍ・短径4.4ｍの不整楕円形で，長径方向は，Ｎ－1°－Ｅを指している。壁はソフトロームで軟らかく，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，26～41cmである。床面は踏み固められた様子はなく軟らかで，平坦である。ピットは７か所検出され，規模は径28～40cm・深さ16～44cmで，中央にかたまるように配列されている。位置・形状・深さなどから，P_1・P_3・P_4・P_6が主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

覆土は６層からなり，主に黒色土・黒褐色土・褐色土が堆積している。大部分の層が締まっており，４・５層には粘性がある。

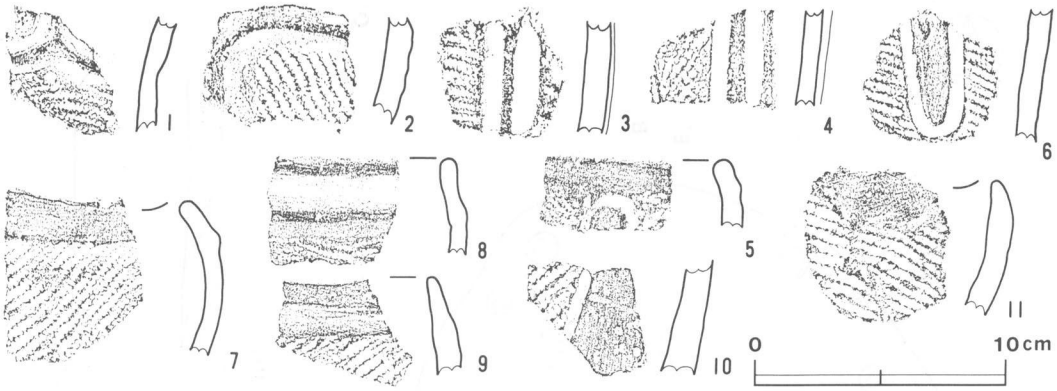
遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第44号住居跡出土土器（第103図１～11）

１～４は，隆線で文様区画がなされているもので，１・２は，口辺部片で，３・４は胴部片である。３・４は，隆線が直線的に垂下し，隆線に沿って沈線が施されている。１・３・４は，胎土に長石などの小石粒を含み，粗い。５・６は，沈線でＵ字，逆Ｕ字状のモチーフを描いており，５は口縁部片，６は胴部片で，ともに区画内を磨消している。７は，口縁部無文帯を１条の微隆線で区画し，以下全面に縄文が付されている。８・９は，７と同様な施文であるが，無文帯を凹線で区画している。10は，胴部片で磨消懸垂文を有している。11は，波状縁を呈する口縁部片で，口縁部無文帯下に無節縄文を施文している。



第102図　第44号住居跡実測図



第103図第44号住居跡出土遺物拓影図

本跡から出土した土器には，図示したものの他に後期加曽利Ｂ式期の土器片が９点ほど含まれており，本跡の時期を中期加曽利Ｅ式期のものと断定できない状況にある。したがって，本跡の時期決定は困難である。

第45号住居跡（第104図）

本跡は，遺跡の中央部G5i_1区を中心に確認されたもので，第42号住居跡の南東側3.5ｍに位置している。

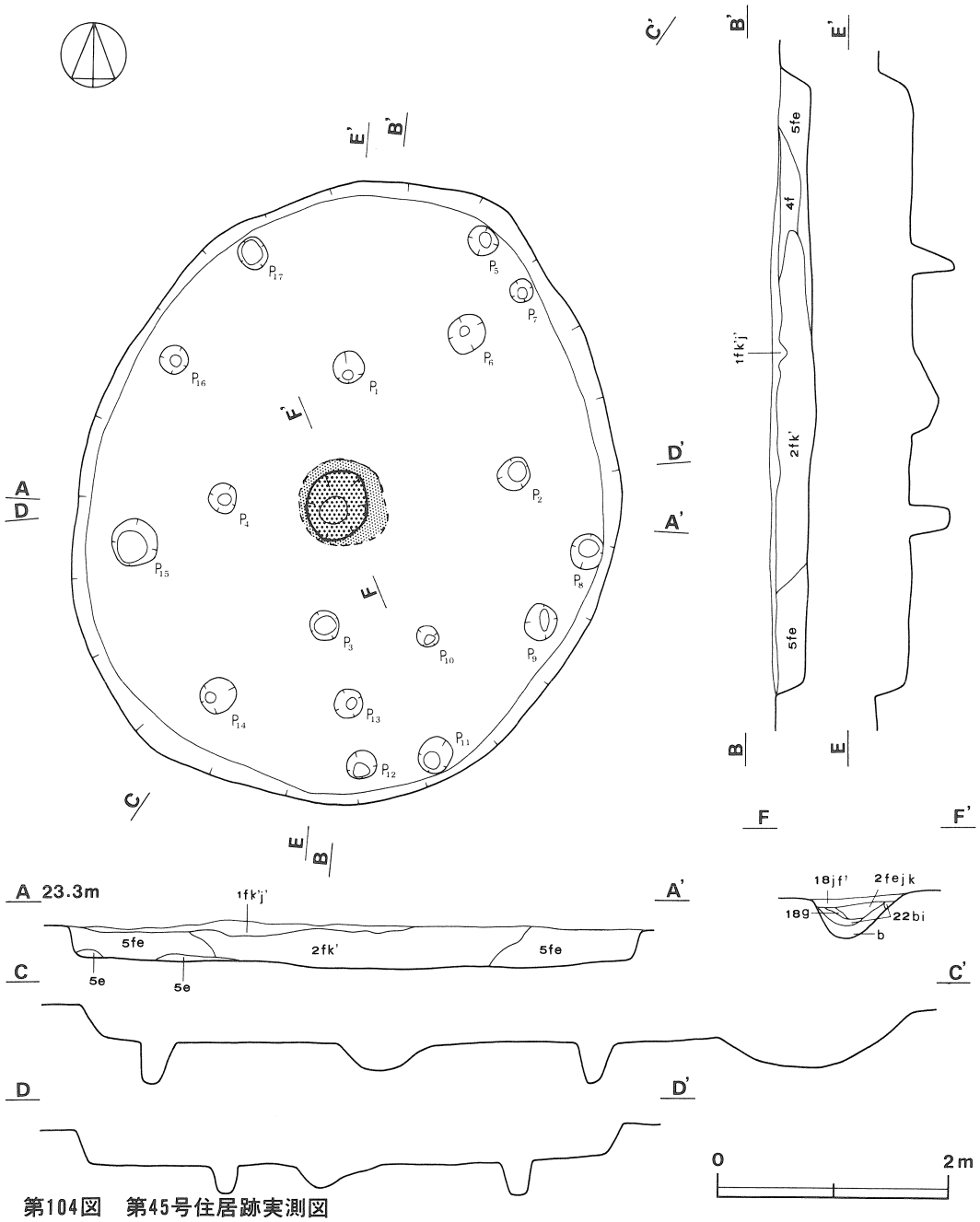
平面形は，長径5.5ｍ・短径4.6ｍの楕円形で，長径方向は，N－32°－Eを指している。壁はソフトロームでよく締まっており，南西側・北東側の壁が床面から外傾して立ち上がるほかは，垂直に立ち上がっている。壁高は，24～30cmである。床面はロームブロックを含み，よく踏み固められ硬く締まっている。全体的に平坦であるが，南東側はやや高く，北西側は４～９cmと低く，緩やかな傾斜をなしている。ピットは17か所検出され，規模は径20～40cm・深さ12～44cmである。P_1～P_4は，深さが一定しており，炉を囲んで対角線上に配列されているので，主柱穴と考えられる。壁にそって円形状に配列されているP_5・P_7～P_9・P_{11}・P_{12}・P_{14}～P_{17}が支柱穴と考えられる。炉は本跡の中央に検出され，径62cmの円形で，床面を17cm掘り凹めた地床炉である。炉の覆土には焼土及び炭化物が多量に含まれ，長期間の使用がうかがえる。

覆土は５層からなり，主に上層が暗褐色土，下層が褐色土で，自然堆積である。すべて締まっており，２～５層は粘性がある。

遺物は，縄文土器片及び土製品が覆土から多量に，床面から５点出土している。

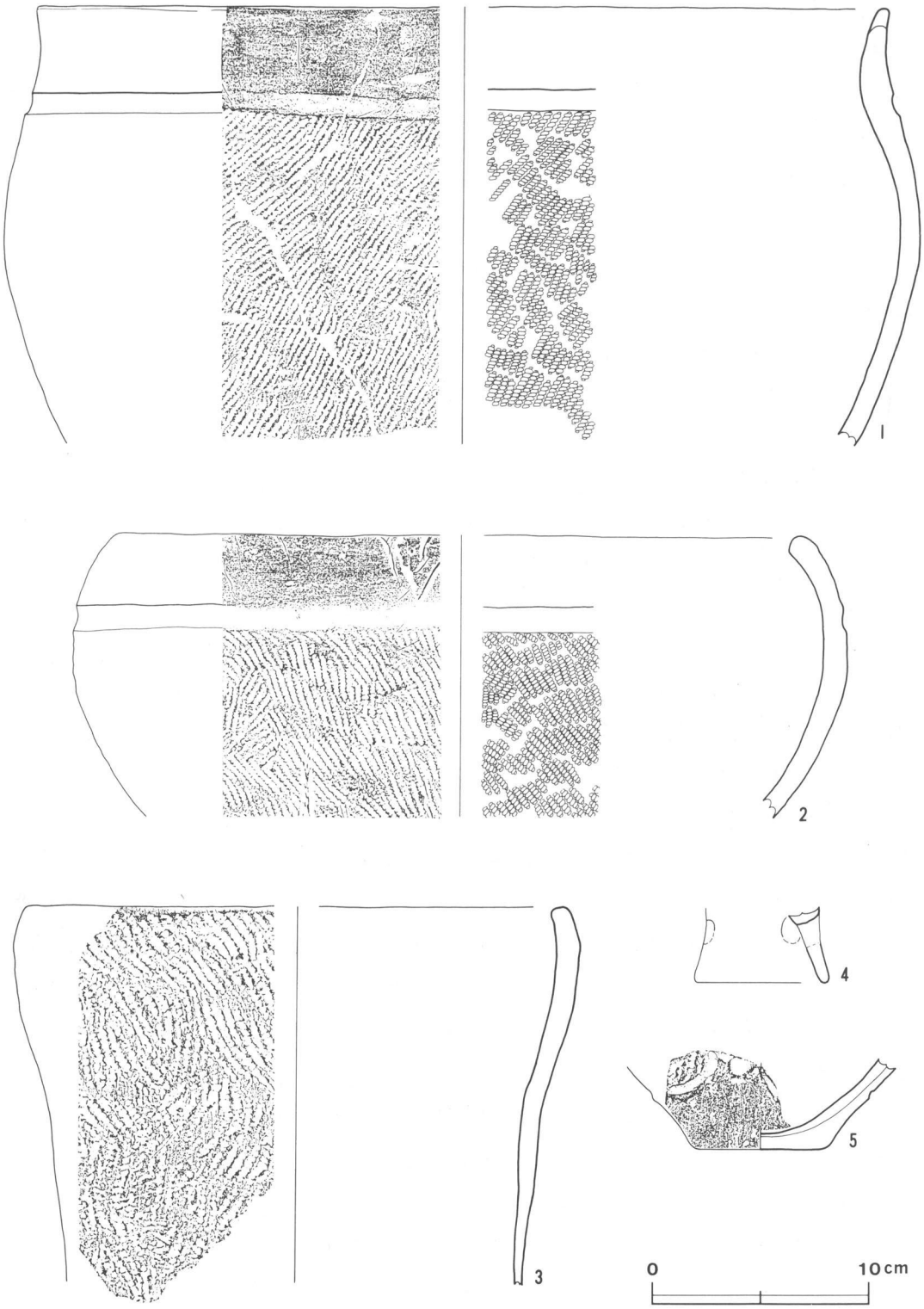
第45号住居跡出土土器（第105～107図１～64）

１は，本跡の中央部のやや西側の覆土から口縁部を北東方向に向けて逆位で一括出土したもので，９点が接合している。大形の鉢形土器と思われ，口縁部無文帯の幅が広く，１条の凹線を巡



第104図　第45号住居跡実測図

らして区画している。以下には単節縄文ＲＬが全面に縦位回転で施されている。内面の上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが加えられている。無文帯も横ナデされている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は，外面が褐色で，一部に２次加熱を受けている部分がみられる。内面はややにぶい褐色を呈している。推定口径は39.4cmで，現存高は20.2cmである。



第105図　第45号住居跡出土遺物実測図　(1)

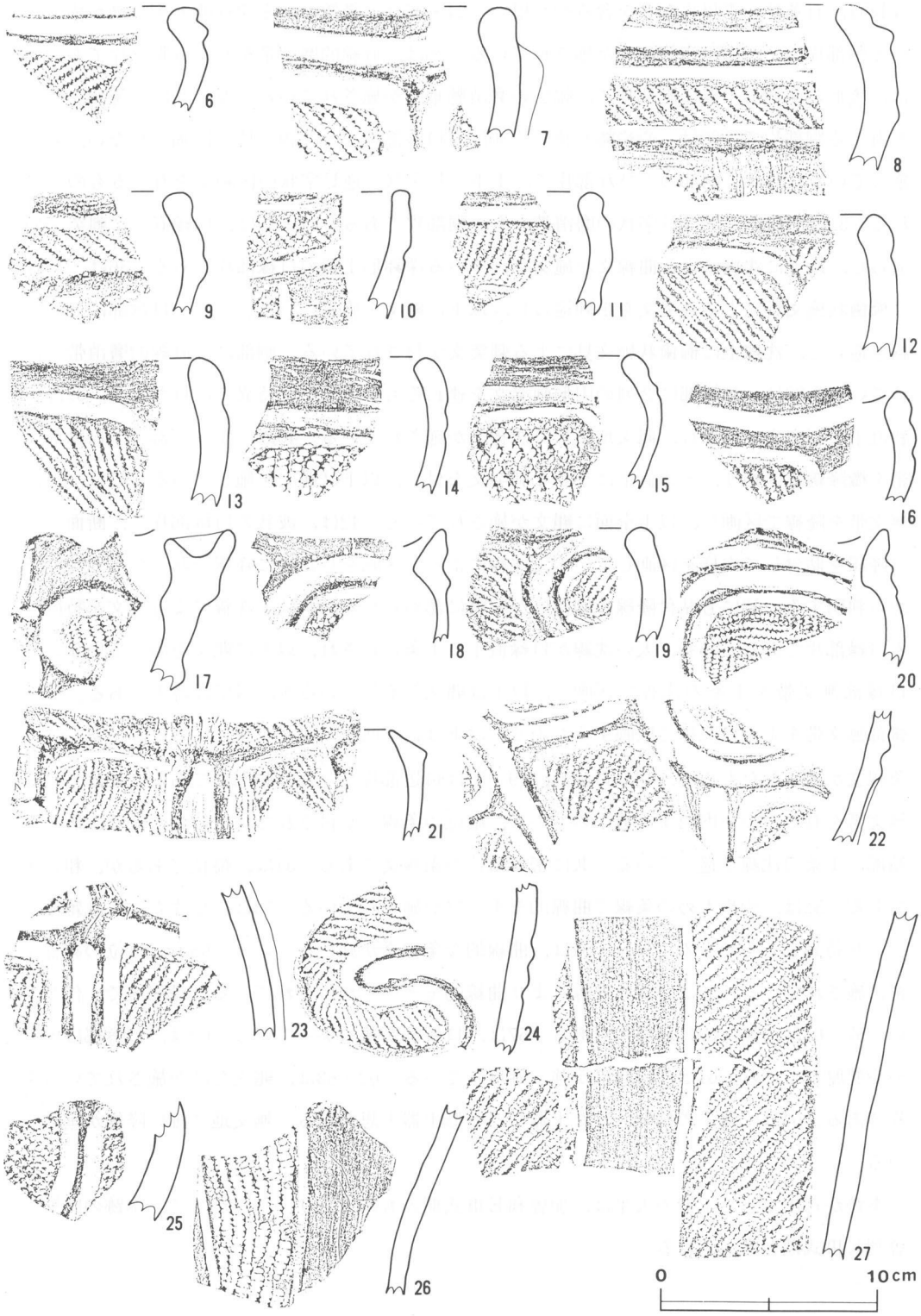
2は，本跡の中央部のやや南西側の覆土から逆位で出土した破片2点が接合したもので，内湾の著しい鉢形土器の口縁部片である。口縁部には横ナデによる無文帯を有し，浅い1条の凹線により区画されている。胴部には単節縄文ＲＬが全面に施されている。内面の上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが加えられている。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が黒褐色，内面が灰褐色を呈している。推定口径31.4cmで，現存高は13.0cmである。

3は，本跡の中央部やや西側の覆土から逆位で出土した深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての大破片である。口縁部がわずかに内湾し，胴部で緩くくびれる器形を呈している。器壁は，胴上半部が厚く，胴下半部が極端に薄くなっており，11mmから4mmという違いがみられる。全面に単節縄文ＲＬが横位を主に，縦位，斜位回転により施文されている。内面は，上半部は横ナデ，下半部は縦ナデを加えている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。推定口径は24.9cmで，現存高は17.4cmである。

4は，本跡の北側の覆土から出土した台付土器の台部片である。内外面とも縦ナデが加えられている。孔が台部の上方に2個確認されているが，全体の数や配列は不明である。脚端部は内外面ともに横ナデされている。脚端部は器壁が薄く，上方に向って器厚を増している。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定の脚端部の径は6.3cmで，現存高は3.5cmである。

5は，本跡の南西側の覆土から逆位で出土した底部片である。残存部の上端に，沈線区画内に縄文を充塡した胴部文様帯の一部が認められる。外面には縦ナデが加えられている。胎土にはやや大粒の石英粒などが多く混入し，粗い。焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定底径は6.2cmで，現存高は3.8cmである。

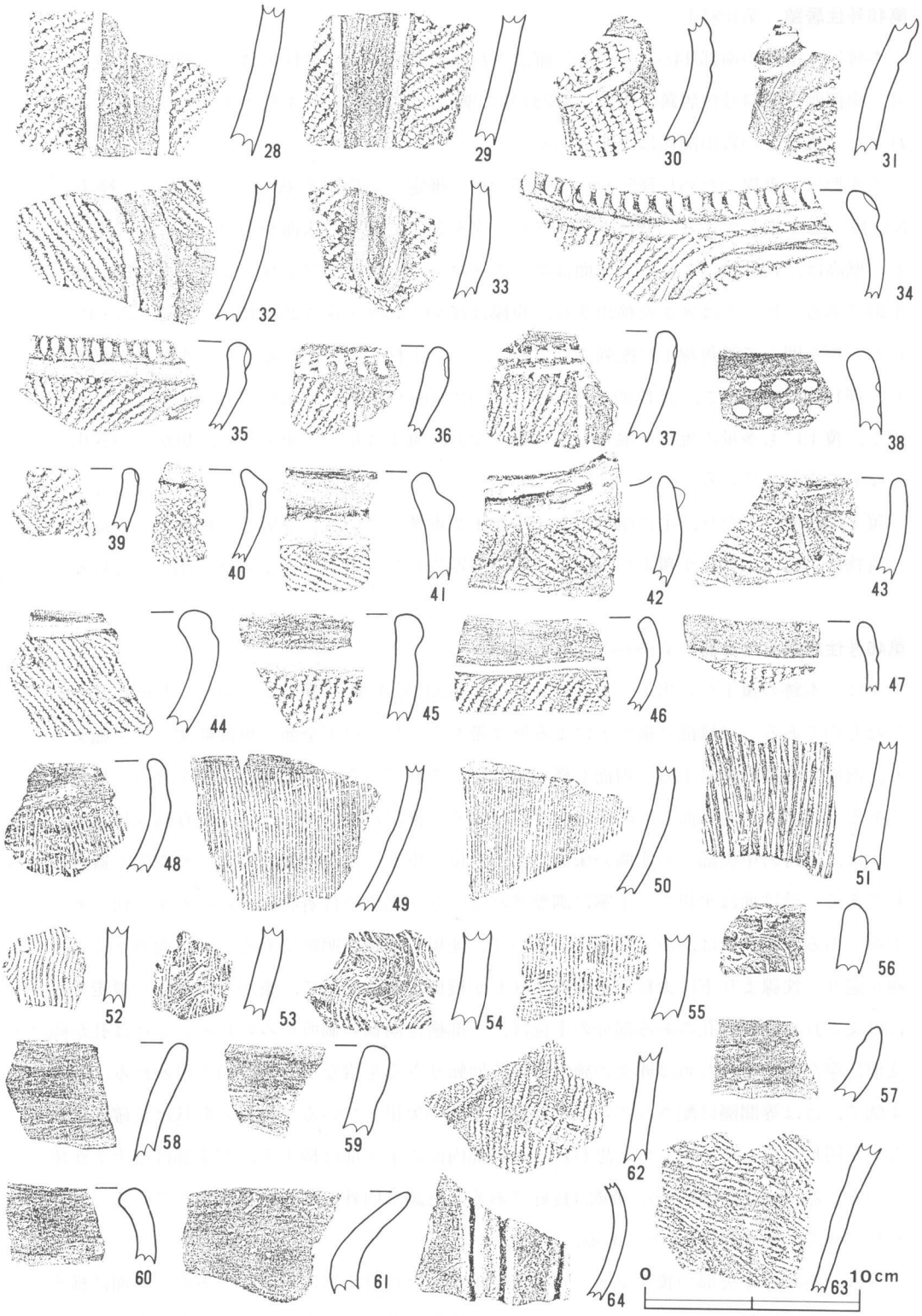
6・7は，キャリパー形の深鉢形土器の口縁部片で，隆線とそれに沿う沈線で区画を行い，区画内に縄文を充塡している。8は，口縁部に隆線による横帯区画文を施し，胴部に磨消懸垂文を有している。9は，太い沈線により文様帯が区画されている。10は，9と類似しているもので，口縁部に沈線による楕円区画文を構成し，胴部に磨消懸垂文が付されている。11・14は，沈線により口縁部文様帯を区画するもので，14は，口縁部無文帯を有している。12・13は，太い沈線により文様が描かれている口縁部片である。15は，14に類似するもので，区画内に縄文を充塡している。16は，波状縁の深鉢形土器の口縁部片で，沈線による文様帯を有している。17は，突起部片で，隆線による区画内に縄文を充塡している。18・19は，隆線による曲線的モチーフが描かれている口縁部片で，18は，波状縁を呈し，口唇部が肥厚し，胴部は器壁が薄くなっている。20は，沈線を沿わせる隆線により文様が描かれているもので，緩い山形の突起を有している。21は，口縁部が内傾し，隆線による施文がおこなわれているもので，口唇部は薄く尖(とが)っている。22は，隆線による曲線的モチーフが描かれている胴部片である。23は，やや太めの隆線による区画文をもつ胴部片で，胎土に



第106図　第45号住居跡出土遺物拓影図　(2)

は長石，石英粒，雲母片などを含みやや粗い。24・25は，隆線による曲線的モチーフが描かれている胴部片で，25には複節縄文が施されている。26は，直線的磨消帯を有する胴部片である。27は，大形の深鉢形土器の胴部片で，幅広い磨消懸垂文が施されている。28・29は直線的な磨消帯を有する胴部片で，29は，やや幅が狭い。30は，口辺部片で，沈線で楕円区画を行ない，縄文を施している。31は，胴部のくびれ部片で，上下にU字状，逆U字状の区画文を有するものと思われる。32は曲線的，33はU字状の磨消帯をもつ胴部片である。34・35は，口縁直下に刺突文列を巡らし，以下に沈線による曲線文が施文されている深鉢形土器の口縁部片である。36は，口縁部に櫛歯状施文具による刺突文を1列巡らし，以下に縄文を施している。37は，口縁部に2条の沈線を巡らし，沈線上に櫛歯状施文具による刺突文が付されている。胴部には直線的磨消帯が施されている。38は，口縁部に2列の円形刺突文を連ねるもので，やや特異で注目される。39は，口唇直下に刺突文が付され，縄文地文上に沈線文が施されている。40は，小形土器で，口縁部無文帯を微隆線で区切り，その直下に小さな刺突文を付し，以下は縄文を施している。41は，口縁部無文帯を隆線で区画し，以下全面に縄文が施されている。42は，波状の口縁部片で，断面三角形の隆線を貼付して文様を区画している。沈線によって区画をした後に隆線を貼ったことが剝離痕から判明する。43にも貼付隆線の剝落痕が明瞭に認められる。44は，沈線による施文を特徴とする口縁部片である。45も，太い沈線が口縁直下に1条巡らされ，以下に縄文を施している。46は，口縁部無文帯を1条の沈線で区画し，以下は縄文を施しているが，器壁は薄手である。47も口縁部無文帯を1条の沈線で区画するもので，以下は斜位回転の縄文が施されている。48～54は，条線文が施されたもので，48は口縁部，49・50は口辺部片で，他は胴部片である。48は，口縁部無文帯を有し，やや内湾する薄手のもので，縦位の条線文が付されている。49・50は，破片の上端部に1条の沈線が巡っている。共に密な縦位の条線文である。51は，縦位であるが，粗い施文である。52は，やや太めの条線で曲線的モチーフが施されている。53は，小片ながら乱雑な施文であり特異なものでものである。54は，曲線的な条線文が施されている。55も，縦位の条線文が密に施されている。56は，浅い沈線により曲線的モチーフが付されている口縁部片で，作りが粗い。57～61は，無文の口縁部片である。57は，口唇部が薄く尖っている。60は，口唇部は内側でやや肥厚している。61は，口縁部が強く外反している。62・63は，縄文だけが施されている胴部片である。64は，薄手の精製された土器で，壺形土器と思われる。無文地に細い隆線が垂下している。

本跡から出土した土器の大半は，加曽利EⅢ式期のものであり，したがって，本跡の時期は加曽利EⅢ式期と考えられる。



第107図　第45号住居跡出土遺物拓影図　(3)

第46号住居跡（第108図）

本跡は，遺跡の南部H4f_7区を中心に確認されたもので，第44号住居跡の南側29mに位置している。南西側で第54号住居跡，東側で第231号土壙，西側で第355号土壙と重複している。本跡とそれぞれの遺構との新旧関係は不明である。

平面形は，重複のため長径5.8m・短径5.2m（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，N－48°－Eを指している。壁はロームブロックを含んで硬く，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，15～19cmである。床面はロームブロックを含むソフトロームで，全体的に軟らかく平坦である。ピットは8か所検出され，規模は径30～46cm・深さ25～45cmである。P_1・P_3・P_5・P_7は，炉を囲んで対角線上に配列されているので，主柱穴と思われる。炉は本跡の中央に検出され，径100cmの円形で，比較的大きく，床を12cm掘り凹めた地床炉である。炉床はよく焼けて硬く，覆土にも多量の焼土が混じっている。なお，焼土は炉の北東方向へ，炉からかき出したような形で広がっている。

覆土は3層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。3層とも締まっている。

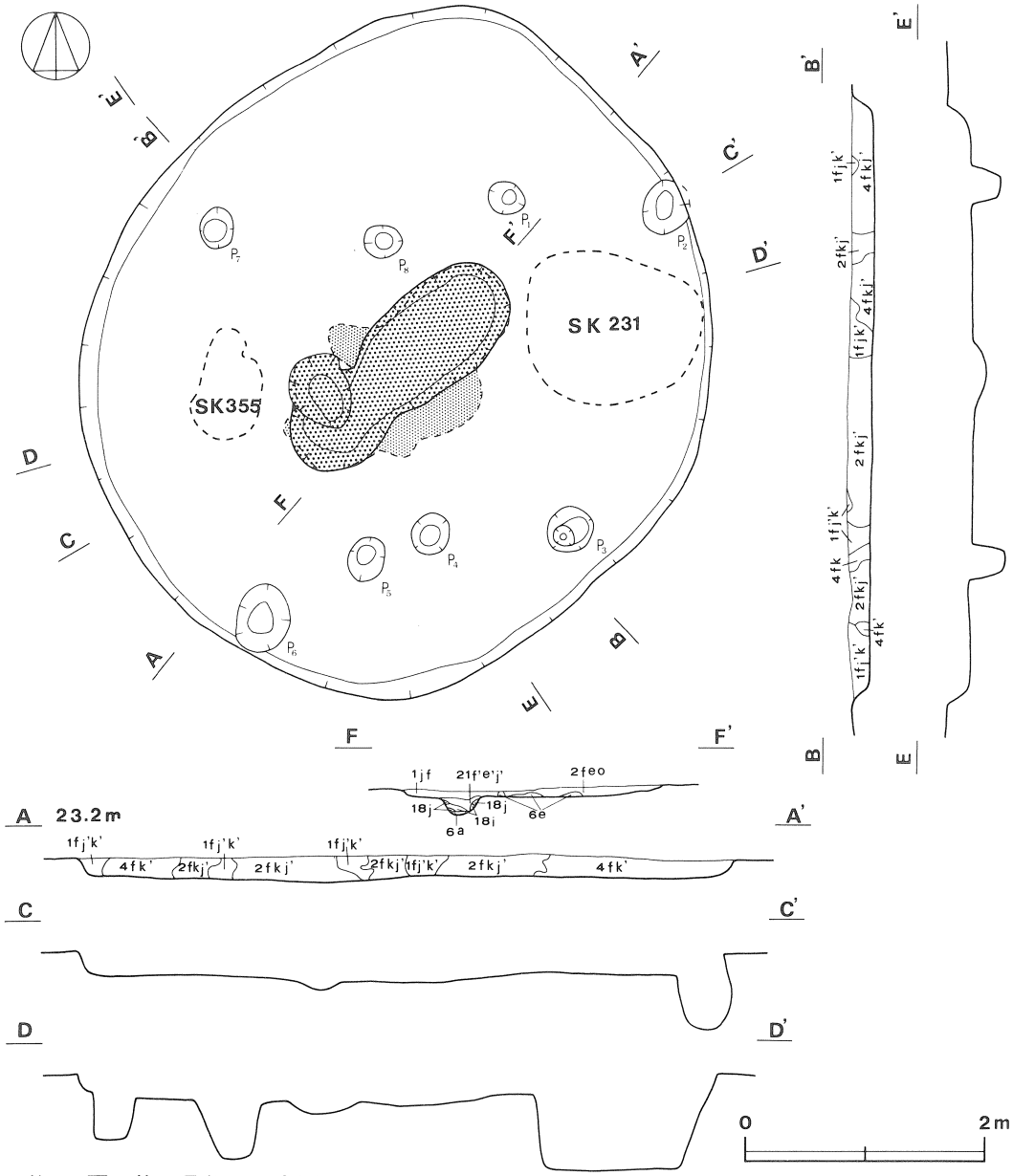
遺物は，縄文土器片が覆土から少量，縄文土器片及び石器が床面から18点出土している。

第46号住居跡出土土器（第109～110図1～32）

1は，本跡の覆土から出土した破片2点と，第231号土壙の覆土から出土した破片8点が接合したものである。口縁部に横ナデによる無文帯を巡らし，以下全面に単節縄文RLを施文している。内湾する鉢形を呈する。内面も横ナデで整形されている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は，内外面とも暗褐色を呈している。推定口径は25.9cmで，現存高は14.1cmである。

2は，本跡の中央部やや北側の床面上から逆位で出土した，脚部が外方にやや開く器台形土器片である。受け面は平坦で，丁寧に調整されている。黒色の付着物がみられるが，何であるかは不明である。受け面は，かなり磨滅していて，使用の痕跡が明瞭である。受け面直下に1条の沈線が巡り，沈線より下に大粒の単節縄文RLが縦位，斜位回転で，条が左傾ないし縦走するように施文されている。孔のある部分の上位は，一部横位回転の個所がみられる。これは孔が縄文施文前に穿たれ，そのために縄文の施文が横位回転せざるを得なかったためと思われる。孔の数は4個で，ほぼ等間隔に配されている。脚部下半部が欠損しているため孔の形状は正確にはわからないが円形を呈していたものと思われる。脚部内面の上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが施されている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は内外面とも褐色を呈している。受け面径は13.3cmで，現存高は6.7cmである。

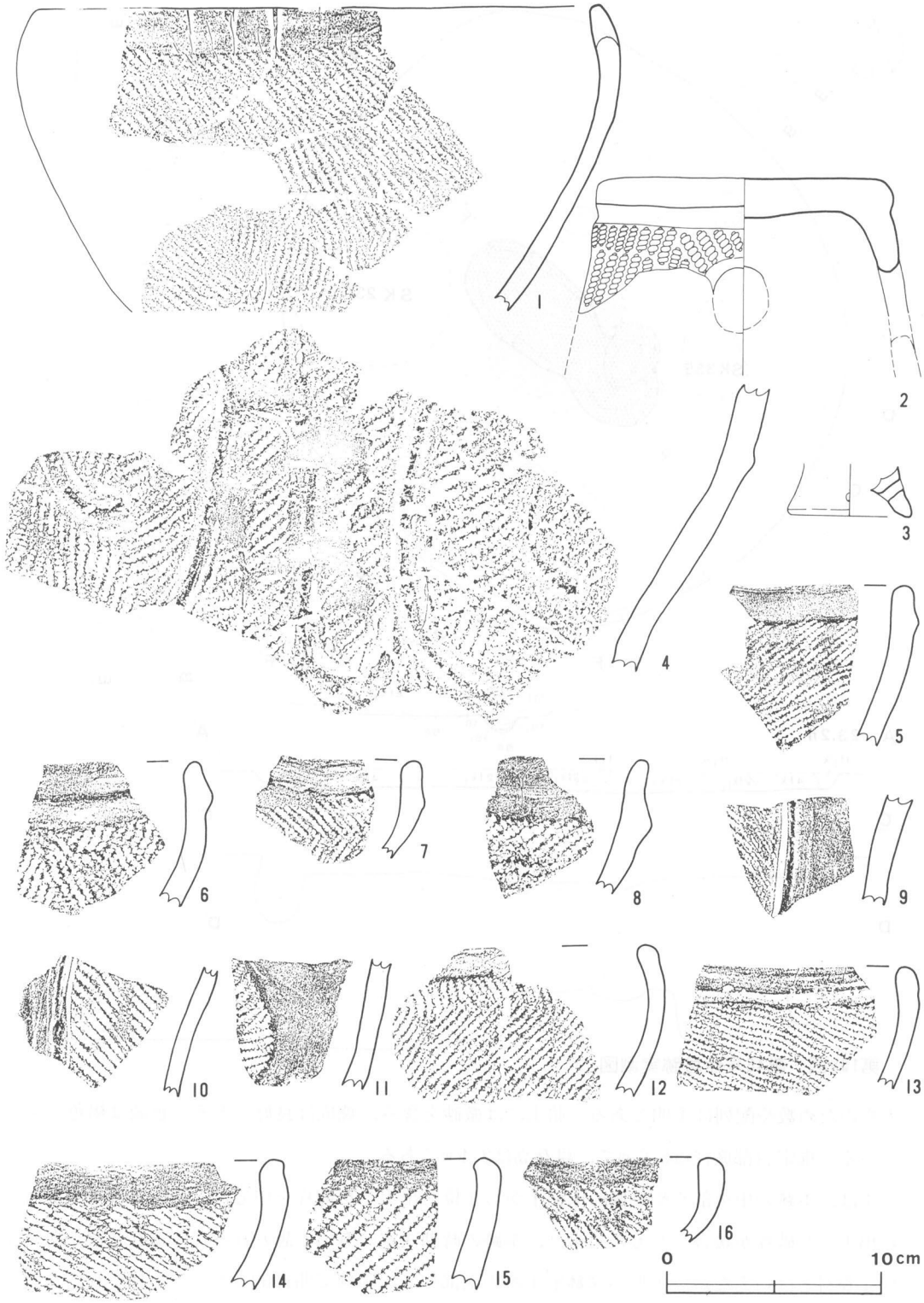
3は，本跡の中央部の覆土下層から逆位で出土した台付土器の台部片である。外面は横ナデが施され，内面は軽いナデが加えられている。脚端部は荒れている。脚部に小孔が穿たれているが，



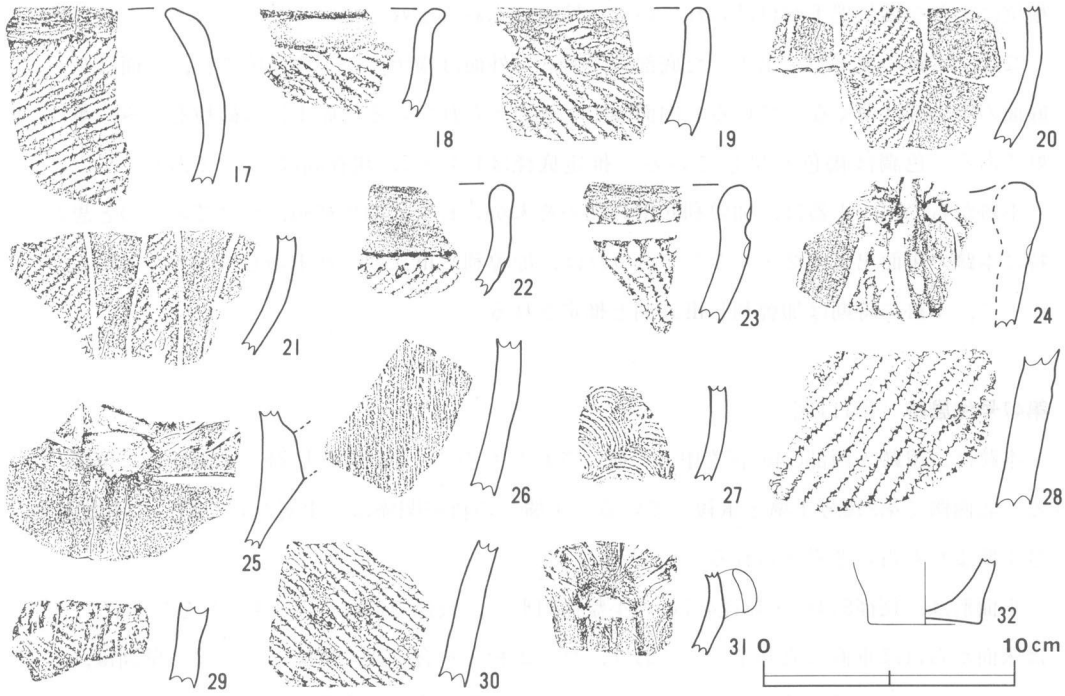
第108図　第46号住居跡実測図

小片のため数や配列は不明である。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定台部底径は5.6cmで，現存高は2.4cmである。

4は，本跡の中央部やや東側の床面上から正位で出土した破片を中心に，南西側の覆土下層から出土した破片が接合したものであり，本跡の時期決定に有力と思われるが，遺存状況が悪く充分な資料とはいえない。大形の深鉢形土器の胴部片で，隆線で曲線的モチーフが描かれ，区画の内外には縄文が充塡されている。胎土には石英，長石粒，雲母片などを多量に含み粗い。器面は磨



第109図　第46号住居跡出土遺物実測図・拓影図　(1)



第110図　第46号住居跡出土遺物実測図・拓影図（2）

滅が目立ち，内面は剝落痕が顕著である。

5～8，12～18は，口縁部に無文帯を有し，以下全面に縄文が施されている。5～8は，口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し，胴部に縄文を施している。いずれも無文帯と縄文帯の境はやや隆起している。12は，無文帯の部分がやや凹み，13は，口縁部に1条の沈線が巡らされている。14～18は，無文帯が微隆線や沈線で区画されておらず，15・16は，無文帯の幅が狭い。17は，口縁部が内湾し，18は，口唇部の外反が顕著である。9～11は，胴部片である。9・10は，微隆線に沿ってやや細めの鋭い沈線を付していて縄文帯を区画している。11は，微隆線による曲線的区画内に縄文が充塡されている。19は，無節縄文が施されている口縁部片である。20・21は，同一個体と考えられる胴部片で，細い沈線でV字状，逆V字状のモチーフが描かれ，区画内には縄文が充塡されている。22は，口縁部無文帯を微隆線で区画し，直下に円形刺突文を付し，胴部に縄文を施している。23・24は，口縁に沿って沈線と刺突文を巡らしているものである。刺突文は，角棒状の施文具によって施されたものと考えられる。23は平縁，24は波状縁である。25は，無文の口辺部片で，橋状把手が剝がれた痕跡が残っている。器面には縦ナデが加えられている。26・27は，条線文が施されている胴部片で，26は縦位で密に，27は曲線的に施文されている。29は，縄文地文上に条線文を重ねた胴部片である。28・30は，縄文だけが付されている胴部片で，前者は単節，後者は無節縄文である。31は，微隆線による施文を主とする壺形土器の胴部片と思われ，

横位に小さな橋状把手が付けられている。外面に赤彩痕が残っている。

32は，本跡の覆土から出土した底部片である。外面は横ナデが丁寧に施され，底面は少し凹み，底面の中央部は薄くなっている。内面はナデが加えられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定底径は4.4cmで，現存高は2.5cmである。

本跡からの出土土器は，加曽利EⅢ式期の終末からEⅣ式期の初頭にかけてのものと思われる。特に本跡の床面出土の２・４などからみれば，加曽利EⅢ式期の終末のものと考えられる。したがって，本跡の時期は加曽利EⅢ式期と推定される。

第47号住居跡（第111図）

本跡は，遺跡の西部G4c$_5$区を中心に確認されたもので，第44号住居跡の北側13mに位置している。北西側で第212号土壙と重複している。土壙との新旧関係は，土層から判断して本跡が第212号土壙よりも古いと考えられる。

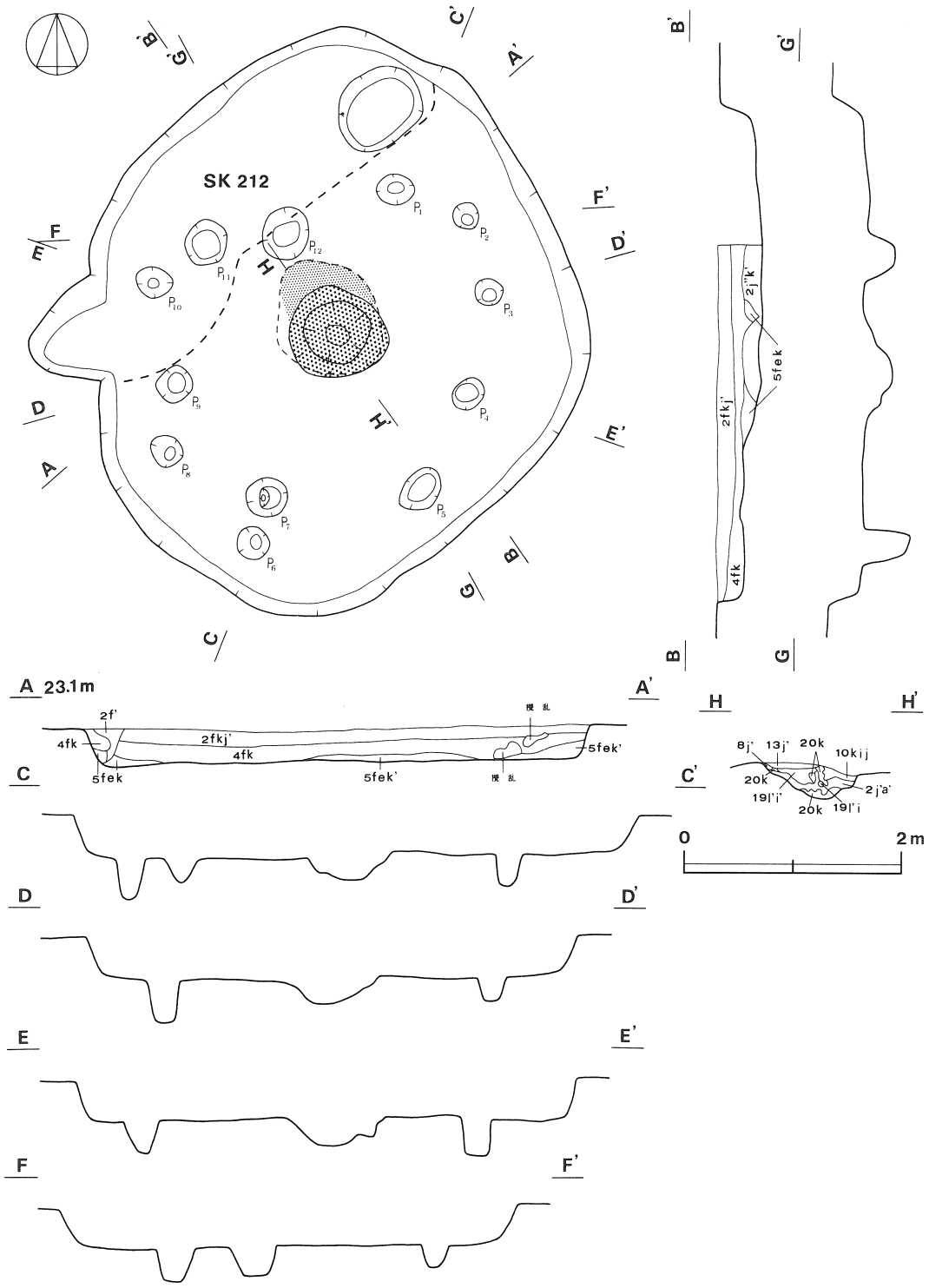
平面形は，長径5.4m・短径4.7mの不整楕円形で，長径方向は，N－4°－Eを指している。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がっており，ローム粒子を含み硬く締まっている。壁高は，28～36cmである。床面は硬く踏み固められ平坦である。南側・東側の床面がやや低くなっている。ピットは12か所検出され，規模は径26～50cm，深さ21～47cmである。その中でもP_1・P_4・P_7・P_{11}は深さが一定しており，炉を囲んで四角形状に配列されているので，主柱穴と考えられる。炉は本跡の同じ位置に，上（FA）下（FB）重なって２基検出されている。FBは径86cm・深さ23cmの円形の炉で，この上にロームを約10cm貼り，上部の炉を築いている。FAは径90cm・深さ11cmの円形の炉である。炉壁のレベルは住居跡の床面よりも２～３cm高くなっている。ともに地床炉である。両炉とも炉床と炉壁はよく焼けている。

覆土は６層からなり，主にローム粒子を含む暗褐色土・褐色土が自然堆積している。４～６層が締まっており，粘性がある。

遺物は，縄文土器片及び石器が，覆土から103点，床面から13点出土している。

第47号住居跡出土土器（第112～113図１～27）

１は，本跡の中央部やや北側の覆土の土器集中個所から出土した土器片の一部と，ピット２の底面出土の破片が接合したもので，平縁の深鉢形土器である。胴下半部は，輪積み部分からきれいに剥離し，欠損している。口縁部にわずかに無文帯を残し，以下全面に無節縄文Lが乱雑に回転施文されている。外面の口縁部から胴部上位にかけては著しい量の炭化物の付着がみられる。内面の上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが加えられている。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が暗褐色，内面が褐色を呈している。推定口径は19.0cmで，現存高は



第111図　第47号住居跡実測図

12.4cmである。

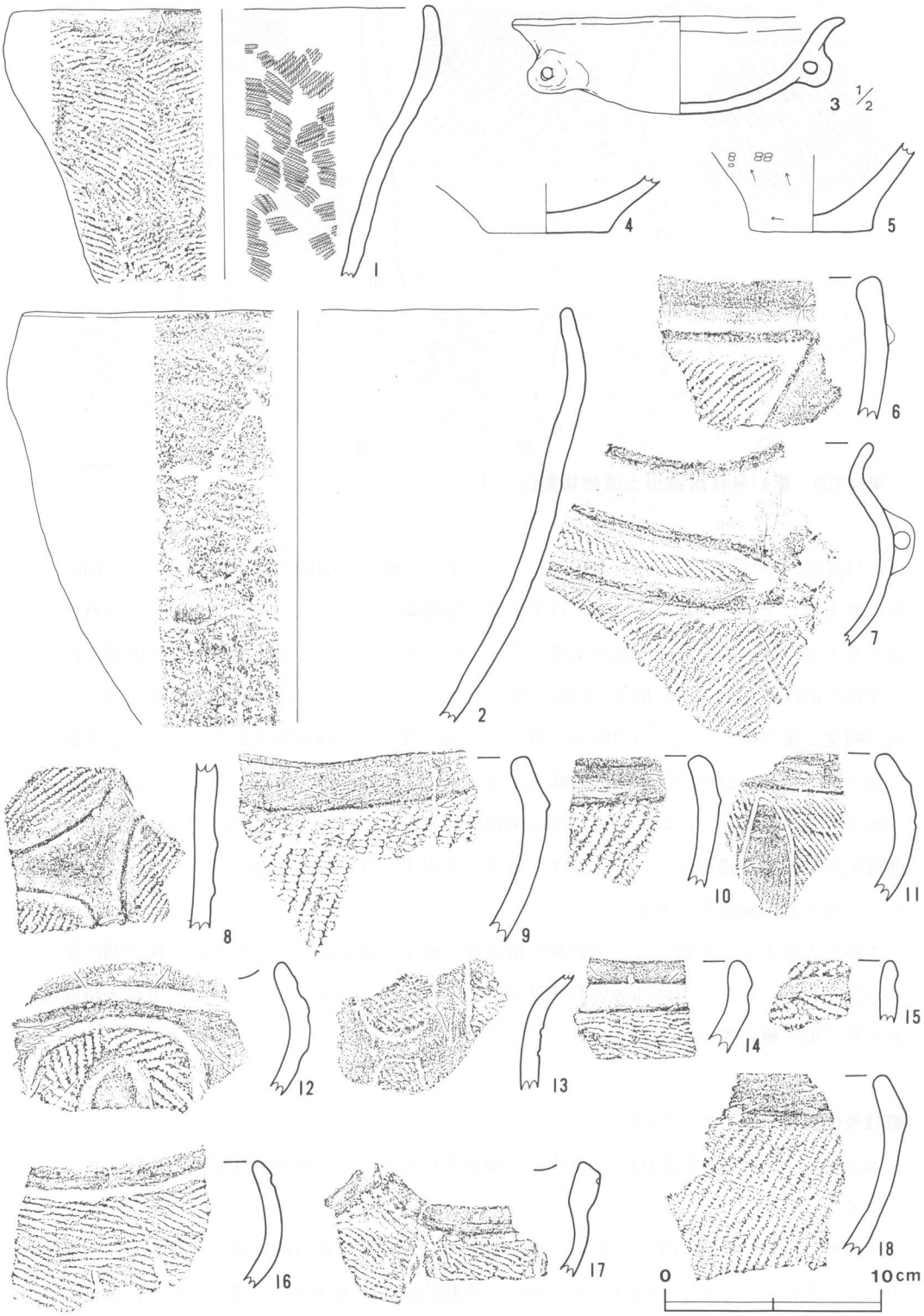
2は，本跡の南東側の床面上から出土した破片を中心に，覆土から出土した破片が合計27点接合したもので，深鉢形土器の口縁から胴部にかけての大破片である。器面は磨滅が著しい。口縁部に無文帯を有し，以下全面に撚りの弱い単節縄文が施文されているが，撚りの方向は明確ではない。ＬＲ縄文を斜位ないし縦位に回転したものと考えられる。器面の整形は悪く，やや凹凸している。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが施されている。胎土には小石粒，粗砂を多く含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が灰褐色を呈している。推定口径は24.9cmで，現存高は19.0cmである。

3は，本跡の北側の覆土から出土した5点の破片が接合したもので，丸底の鉢形を呈している。口縁部の上面観はやや歪(ゆが)み，楕円形状を呈している。口唇部は薄く，端反り気味である。口縁部下の対称の位置に小さな耳状把手が付され，横方向からの穴を有している。口縁部内外面は横ナデで，その他の器面はナデにより調整が加えられている。底面は，少し黒味を帯び若干磨滅している。胎土には長石，石英粒，雲母片などを多く含み粗いが，焼成は良好である。色調はにぶい橙色を呈している。口径の長径は10.0cmで，短径は9.6cmで，現存高は3.0cmである。本土器は蓋とも考えられるが，ここでは鉢として図示した。いずれにしても類例の少ない珍しい土器である。

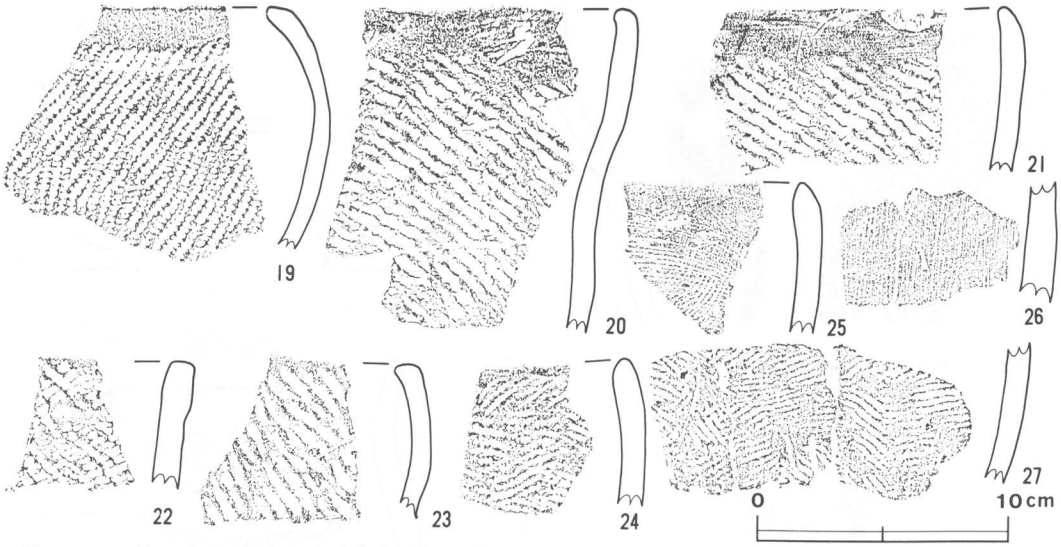
4は，本跡の中央部やや北西側の覆土から逆位で出土した底部片である。外面は縦ナデ，内面は横ナデが施されている。胎土には砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は外面が黒褐色，内面が暗褐色を呈している。底径は5.6cmで，現存高は2.6cmである。

5は，本跡の中央部やや東側の覆土から正位で出土した底部片である。残存部の外面上端には縄文が施され，以下に縦ナデが加えられ，底面近くは横ナデが施され，内面には横ナデを加えている。底面は少し歪んでいる。胎土には砂粒を混入し，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。底径は5.7cmで，現存高は4.2cmである。

6・8は，微隆線による施文が器面全体におよぶものと考えられる。6は口縁部片，8は胴部片で，区画内に縄文を施している。8の胎土には石英，長石粒，雲母片などが多く混入されており粗い。7は，薄手の鉢形を呈すると思われる口縁部片で，外反する口縁部下に隆線で横位の区画文を施し，以下全面に縄文が付されている。区画文の接合部は橋状に突出している。区画内には縄文が充填されている。9・10は，口縁部無文帯を1条の微隆線で区画するもので，以下に縄文を施している。9の縄文は節が大きい。11は，口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し，胴部には細い沈線で逆Ｖ字状のモチーフが描かれ，その内部が磨消されている。12は，緩い波状を呈する口縁部片で，沈線で曲線的モチーフを描き，内部に縄文を施している。13は，胴部のくびれ部片で，細い沈線でＵ字状，逆Ｕ字状の区画文が上下に付され，内部に縄文が施されている。器面の磨滅が著しい。14は，口縁部無文帯を1条の凹線で区画し，以下に無節縄文を施文している。15



第112図　第47号住居跡出土遺物実測図・拓影図　(1)



第113図　第47号住居跡出土遺物拓影図（2）

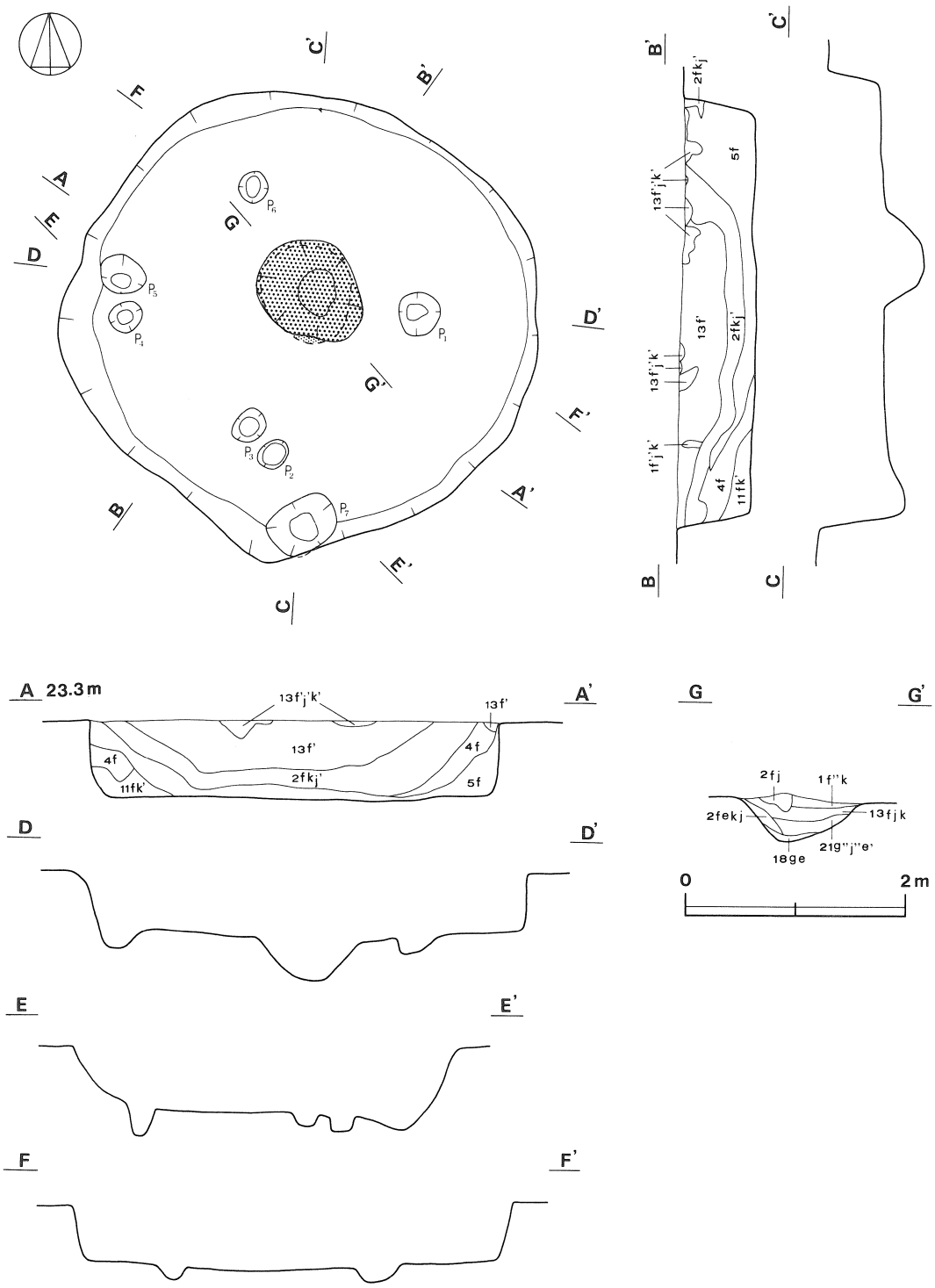
は，口縁部の小片で，１条の凹線が巡り，その上下で縄文の回転方向を変えている。16は，幅の狭い無文帯を１条の沈線で区切り，以下全面に無節縄文が施されている。17は，三角形状の波頂部を有する口縁部片で，口縁部無文帯に沿って刺突列が巡っている。胴部には無節縄文の地文上に沈線で曲線的モチーフを描き，内部を磨消している。18・19は，口縁部無文帯を有し，以下全面に縄文が施されている。19の内湾は著しい。20・21も，口縁部無文帯を有し，以下全面に縄文が施されている。22～24は，全面に縄文が施されたもので，無文帯をもたない。23は，無節縄文が施された口縁部片で，破片の下端部は輪積み部分で剥がれている。25は，口縁部片で条線文で曲線的モチーフが描かれている。26は，縦位の条線文が付された胴部片である。27は，無節縄文だけが施された胴部片である。

本跡から出土した土器には，加曽利ＥⅢ式期の後半に属するものと加曽利ＥⅣ式期に属するものが含まれているが，主体は加曽利ＥⅣ式期のものと思われる。したがって，本跡の時期は加曽利ＥⅣ式期と推定される。

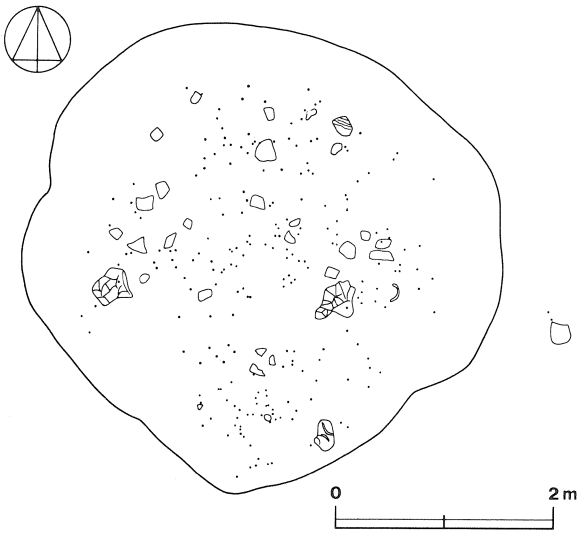
第48号住居跡（第114～115図）

本跡は，遺跡の中央部H4j_9区を中心に確認されたもので，第45号住居跡の南側７ｍに位置している。

平面形は，径4.2ｍの円形である。壁はロームブロックを含み硬く締まっており，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は，47～53cmと比較的高い。床面はよく踏み固められた硬いロームで，南側がやや低いが平坦である。ピットは７か所検出され，規模は径28～64cm・深さ13～29cm



第114図　第48号住居跡実測図



第115図　第48号住居跡遺物出土状態図

である。その中でもP_1・P_2・P_4・P_6は深さが一定しており，炉を囲んで対角線上に配列されているので，主柱穴と考えられる。炉は本跡の中央に検出され，径102cmの円形で，床面を34cmほど掘り凹めた地床炉である。炉床はよく焼けており，炉の覆土にも焼土粒子が充満しているので，長期間使用されたものと思われる。

覆土は８層からなり，主に黒色土・暗褐色土・褐色土が自然堆積している。８層とも締まっている。

遺物は，縄文土器片・土製品及び石器が覆土からきわめて大量に，床面から10点出土している。

第48号住居跡出土土器（第116～126図１～115）

１は，本跡の中央やや北側の覆土の下層部から出土した破片が接合したもので，緩い波状縁を呈する大形の深鉢形土器である。胴上半部は，両側にナゾリが加えられた隆線文で，方形状のモチーフが描かれている。方形区画内のモチーフは，渦巻文が簡略化されたものと考えられる。余白部には縦長の区画文が充塡されている。胴下半部には，２本組の太い沈線による逆Ｕ字状文が施文されている。沈線間は磨消されている。区画内外には，いずれも単節縄文ＬＲが充塡されている。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデにより整形されている。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は38.3cm，現存高は33.0cmである。

２は，本跡の南側床面上に正位で貼りついたような状態で出土したものである。ピット７の東側にあたる床面からわずか0.5cm程しか浮いていない。本跡の時期決定に有力な資料であると思われる。平縁の深鉢形土器で，口縁が内湾し頸部がくびれ，胴部がやや張る器形を呈している。胴下半部は欠損しているが，その断面はきれいに調整されており，意図的に打ち欠かれたものと考えられる。器面全体にナゾリを加えた隆線により，大柄の渦巻文および縦長の区画文が施されている。区画内外には単節縄文ＲＬが縦位，横位，斜位回転により充塡されている。器壁は大形のわりにやや薄く，内面上半部は横ナデが丁寧に加えられている。胴下半部は若干磨滅しているが，縦ナデが認められる。胎土には微砂を含み緻密で，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は37.7cmで，現存高は21.8cmである。

3は，本跡の南東側の覆土から出土した3点の破片が接合したもので，緩い4単位の波状縁を呈する深鉢形土器の口縁部片である。器面全体に2本組の両側にナゾリの加えられた隆線による描線を基本とした曲線的モチーフが描かれている。区画の内外には，単節縄文ＲＬが充塡されている。内面は横ナデにより整形されている。口唇部は，内側に肥厚している。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は48.0cmで，大形の土器と思われる。現存高は15.0cmである。

4は，本跡の西側，南西側の覆土から出土した破片11点が接合したもので，口縁部は波状を呈し，強く内湾し，胴部でしまる深鉢形土器である。波頂部は4単位で，うち2か所に小さな環状把手が付いているものと考えられる。器面全体にナゾリを伴う隆線により大柄な縦長の区画文が描かれており，区画の内外には単節縄文ＬＲが充塡されている。くびれ部にアクセント的に刺突文が1か所付されている。内面は横ナデが加えられている。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は内外面とも暗褐色を呈している。推定口径は23.3cmで，現存高は19.6cmである。

5は，本跡の炉内からの出土土器を主に，本跡の中央部および西側の覆土から出土した破片が接合したもので，胴下半部が欠損している。大形の鉢形土器で，約半周程度残存している。口唇部はやや薄くなっている。口縁部無文帯は幅が広く，頸部にはナゾリを加えた隆線で楕円区画文が施されている。一部に円形の区画文が施され，この上に橋状把手が貼付されていた痕跡が残されている。この橋状把手は対称的位置に1対付されていたものと推定される。区画内および胴部には，単節縄文ＲＬが横位，斜位回転で施文されている。口縁部無文帯および内面は，横ナデが加えられている。口縁部近くの割れ口には輪積み部分強化のためのキザミ目が観察できる。胎土には小石粒，砂粒が混じり，焼成は良好である。色調は内外面とも褐色を呈している。推定口径は39.6cmで，現存高は27.0cmである。

6は，本跡の北側，東側の覆土から出土の破片を主に，他の覆土から出土の破片が接合したもので，深鉢形土器の胴下半部片である。底部は欠損している。胴下半部には両側を沈線でナゾられた隆線による懸垂文が8本垂下しており，これにより作られた区画内には単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されている。内面には縦ナデが加えられている。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。残存部の最大径は20.0cmで，現存高は12.4cmである。

7は，本跡の東側の覆土から立位で出土した破片を中心にその周囲から出土した小破片が接合したもので，瓢(ひさご)形壺形土器の胴下半部と考えられる。残存部の中位に最大径をもち，底部に向けてかなりすぼまっている。器面には両側にナゾリが加えられた隆線による縦長の区画文が施され，内部には単節縄文ＲＬが縦位，斜位に回転されている。胴下半部は縦ナデ調整が著しく，光沢を

おびている。胴中位からやや上位に小さな把手が1個残存しているが，本来は1対存在していたものと思われる。この把手は横位につけられており，通常の例とは異なっている。内面には縦位，斜位のナデが顕著にみられる。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈している。推定胴部最大径は16.5cmで，現存高は14.8cmである。

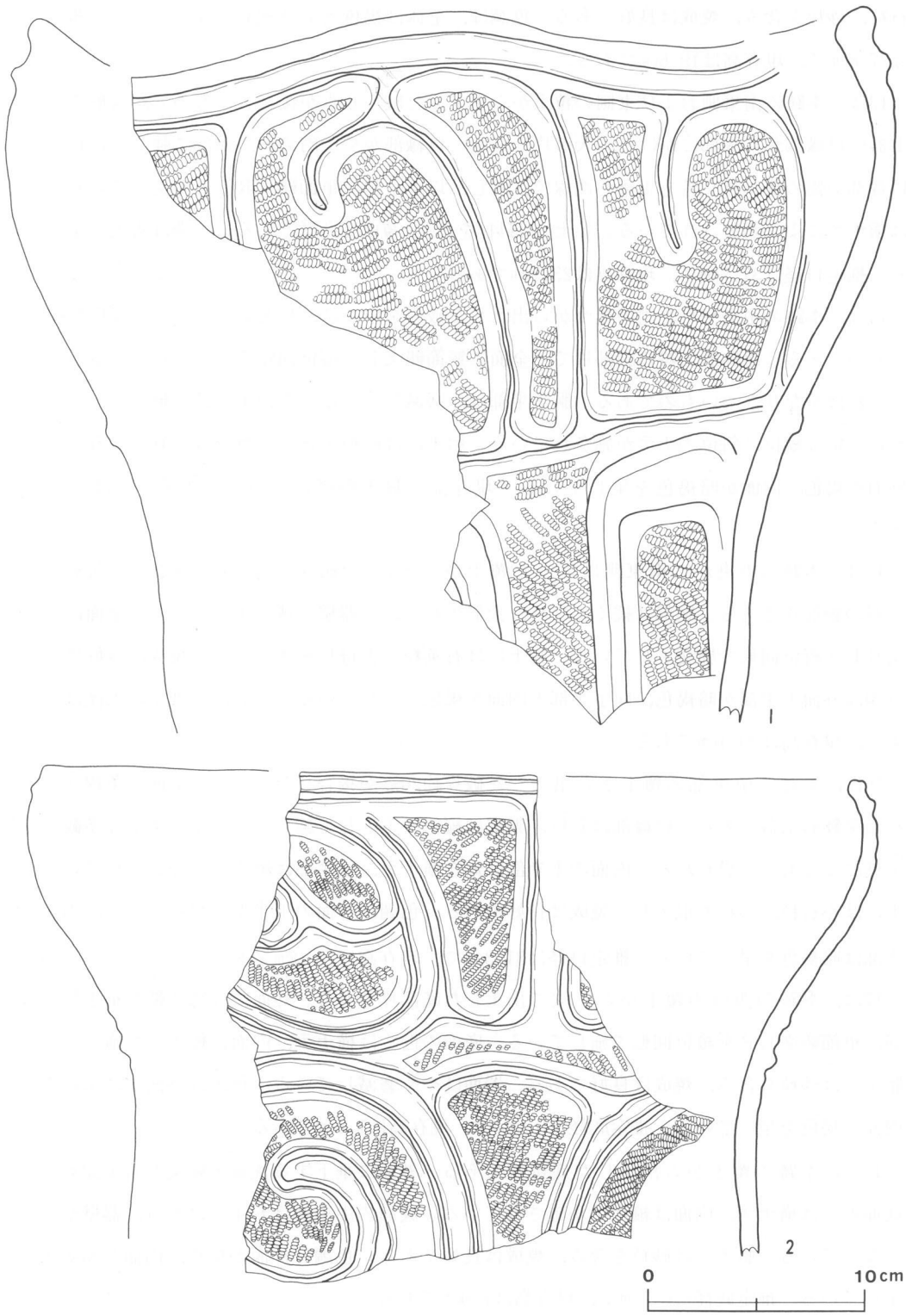
8は，本跡の覆土から出土した深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての大形の破片である。口縁部が緩く内湾し，胴部で弱くくびれる器形を呈している。口縁直下には1条の沈線を巡らし，胴部には2本組の沈線による縦長の区画と1本の沈線による逆U字状区画を連結したものを1単位として，4単位施されているものと考えられる。区画内には単節縄文ＲＬが縦位回転で充塡され，区画外には縦ナデが丁寧に加えられている。無文部の口縁直下には赤彩痕が認められる。内面は上端部だけ横ナデで，以下は縦ナデが加えられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が赤褐色を呈している。

9は，本跡の東側の覆土下層から出土した7点の破片が接合したもので，小形深鉢形土器の胴部片である。薄手で胴部が丸くふくらんでいる。文様は沈線による逆U字状文が施され，区画内には無節縄文Ｌが縦位回転で施されている。区画文の間は縦ナデが施されている。内面の上半部は斜方向のナデ，下半部は縦方向のナデが加えられている。胎土には砂粒が混じり，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈している。胴部最大径は10.6cmで，現存高は8.0cmである。

10は，本跡の北側，北西側，北東側の覆土から出土した破片13点が接合したもので，頸部が強くくびれる深鉢形土器の胴部片である。胴上半部にはU字状の磨消帯を有し，下半部には逆U字状の磨消帯と垂下する磨消帯が施されている。くびれ部には小さな蕨手状に巻く文様が付されている。縄文は単節ＬＲと思われる。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが加えられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。推定最大径は21.2cmで，現存高は11.1cmである。

11は，本跡の西側覆土から逆位で一括出土した破片7点が接合したもので，口縁部が強く内湾する深鉢形土器で，口縁部から胴部にかけてが残存している。口縁部に幅の広い凹線を巡らし，以下全面に単節縄文ＬＲが施文されている。器壁は頸部が薄く5mm程度，胴下半部は厚く12mm程度になっている。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが加えられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は明褐色を呈している。推定口径は19.0cmで，現存高は18.0cmである。

12は，本跡の東側の床面上1cmのところから内面を上に向けて一括出土した土器を復元したもので，平縁の深鉢形土器である。口縁は内湾し，胴部で緩くくびれている。口縁部に約1.5cm幅の無文帯を残し，1条の浅い凹線で胴部と区画している。胴部全面に単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されている。口縁部の内外面は横ナデが加えられているが雑であり，若干磨滅している。内面は丁寧な縦方向のヘラナデが加えられている。胴下半部の欠損部は，磨滅している。胎土には小



第116図　第48号住居跡出土遺物実測図　(1)

石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は，全体に褐色から赤褐色を呈している。推定口径は27.8cmで，現存高は19.6cmである。

13は，本跡の南東側および東側の覆土から出土した破片6点が接合したもので，大形の深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての大破片である。口縁部がやや内湾し，頸部で強くくびれている。口縁部の幅の狭い無文帯を1条の沈線で区画し，以下全面に単節縄文ＲＬを施文している。内面は横ナデにより調整されている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は37.7cmで，現存高は23.5cmである。

14は，本跡の中央やや北側の覆土から出土した破片を中心に，炉内から出土した破片が接合したものである。深鉢形土器の胴部片で，全面に無節縄文Ｌが縦位回転で施文されている。胴部のくびれはかなりきついものである。胴下半部は，磨滅している。内面上半部は横ナデ，くびれ部から下位は縦位，斜位のナデが施されている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は，外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。現存部の最大胴径は21.5cmで，現存高は13.5cmである。

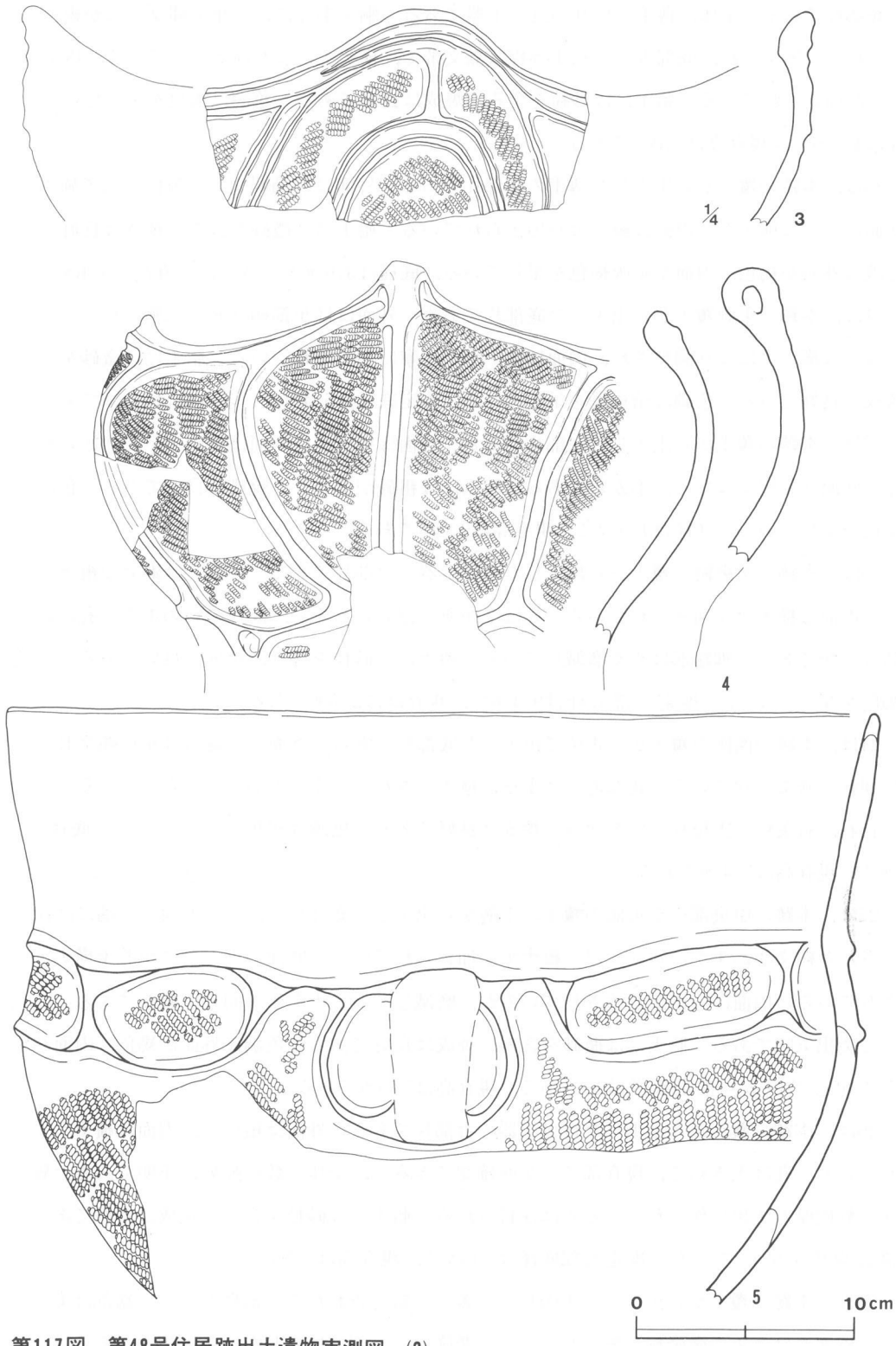
15は，本跡の中央から南東側に寄った覆土から出土した破片，約20点が接合した大形深鉢形土器の胴部片である。胴部は緩くくびれ，大形のわりには器壁の薄い土器である。全面に単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されている。胎土には石英粒，雲母片を多く含み，焼成は良好である。色調は外面上半部が暗褐色，同下半部と内面が褐色を呈している。現存部の推定最大径は約47.0cmで，現存高は39.1cmである。

16は，本跡の中央部の覆土から出土した破片約20点が接合したもので，全面に条線文が施された深鉢形土器である。口縁部は斜位，胴部は縦位に主として施されている。条線は多截竹管状工具によるものと思われる。内面の上半部は雑な横ナデ，下半部は縦ナデが加えられている。胎土には小石粒，砂粒を混入し，焼成は良好である。色調は外面の下半部が褐色を呈し，内面の上半部は暗褐色を呈している。推定口径は31.3cmで，現存高は24.0cmである。

17は，本跡の西側の覆土から正位で出土した底部片である。外面には磨消帯が垂下し，区画間に単節縄文ＬＲを縦位回転で施している。底面の近くは横ナデ，内面は縦ナデを施している。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。器面はやや磨滅している。色調は外面がにぶい赤褐色，内面が褐色を呈している。推定底径は5.6cmで，現存高は7.8cmである。

18は，本跡の覆土から出土した底部片である。外面に垂下する沈線と縄文が若干認められる。底面近くは横ナデ，内面は縦ナデが施されている。底面の中央部はわずかに凹み，器壁が少し薄くなっている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗灰褐色を呈している。推定底径は6.7cmで，現存高は7.0cmである。

19は，本跡の南側の床面上および覆土の下部から出土した破片が接合したもので，深鉢形土器



第117図　第48号住居跡出土遺物実測図　(2)

の底部片である。全体に薄手で作りの良い土器である。胴下半部には，単節縄文ＲＬが縦位回転できれいに施文され，底部近くの約４cm程は無文帯で，横ナデにより調整されている。内面は縦ナデが加えられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。底径は4.2cmで，現存高は9.0cmである。

20は，本跡の覆土から出土した薄手の底部片である。外面に無節縄文Ｌが縦位回転で施され，底面近くには横ナデ，内面は縦ナデが加えられている。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗灰褐色を呈している。底径は3.6cmと小さく，現存高は3.1cmである。

21は，本跡の東側覆土から出土した底部片である。外面には単節縄文ＲＬが施されている。底面近くは横ナデにより調整され，内面は縦ナデが丁寧に加えられている。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈している。推定底径は5.4cmで，現存高は3.6cmである。

22は，本跡の覆土から出土した底部片である。外面は横ナデ，内面は軽いナデが加えられている。底面は平坦ではなく，不安定である。胎土には粗砂が混じり，焼成は良好である。色調は灰褐色を呈している。底径は4.9cmで，現存高は2.0cmである。

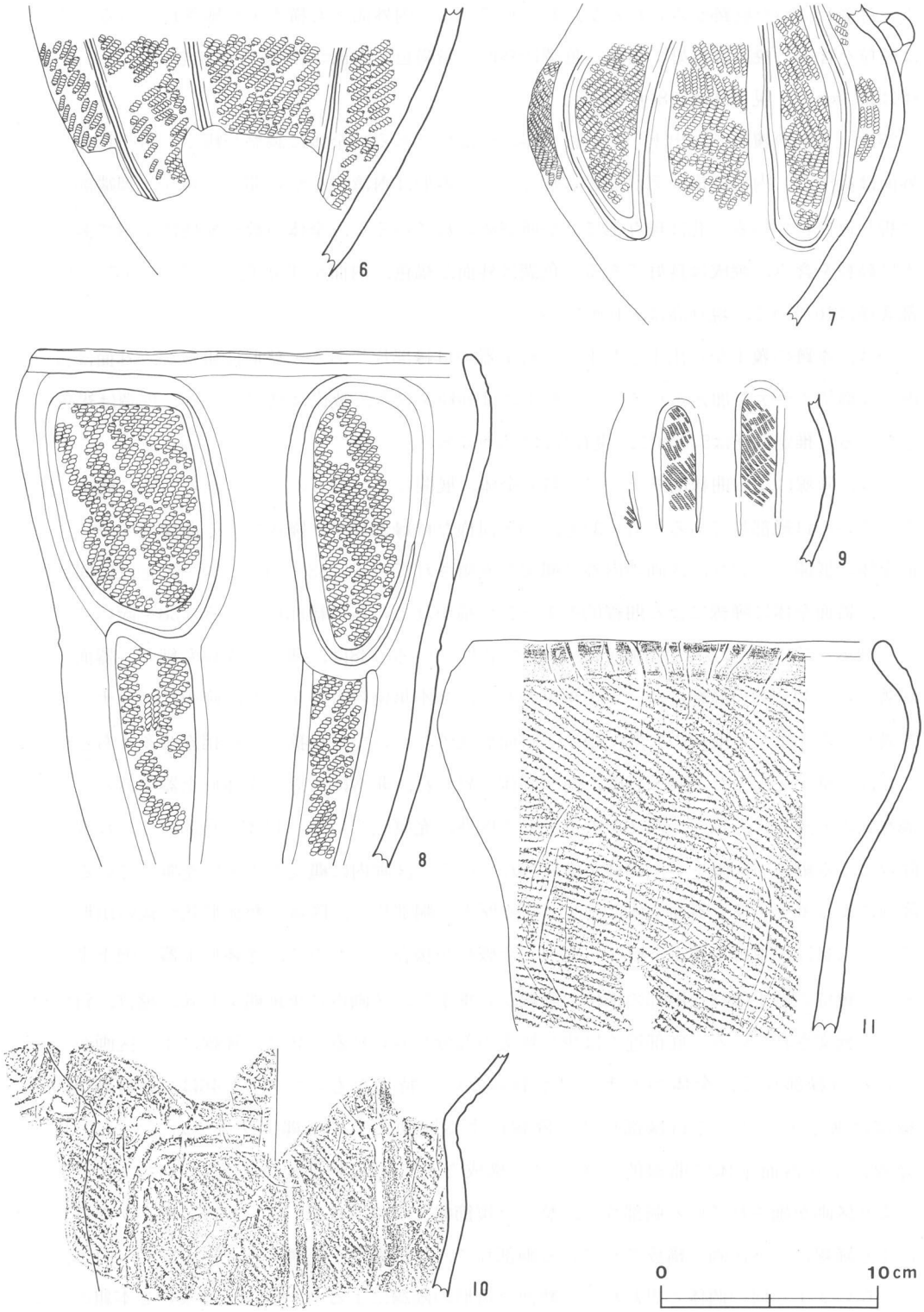
23は，本跡の南東側の覆土から出土した台付土器の台部片である。外面には顕著な縦ナデを施し，内面は横ナデが加えられている。孔は２か所に認められるが，断片のため本来の孔の数や配列は不明である。脚端部はやや磨滅している。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定台部底径は9.4cmで，現存高は2.7cmである。

24は，本跡の西側の覆土から正位で出土した底部片である。外面の上端には単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されている。底部近くは丁寧に横ナデされている。内面もナデられている。胎土には長石，石英粒，雲母片などを含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。底径は7.3cmで，現存高は5.4cmである。

25は，本跡の中央部やや東側の覆土の下層から出土した底部片である。外面の上端には深く施文された縄文がわずかに残り，以下縦ナデが加えられている。底面の近くだけが若干横ナデがなされている。内面にもナデが施されているが，磨滅していてナデの方向は不確かである。底部は少し突出気味である。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が灰褐色を呈している。推定底径は10.1cmで，現存高は5.7cmである。

26は，本跡の覆土から出土した台付土器の台部片である。外面は縦ナデ，内面は横ナデが施されている。孔は大きめで，現存部で３か所確認できるが，全体の数や配列は不明である。脚端部が比較的厚く平坦に作られている点は注目される。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定台部底径は7.0cmで，現存高は2.5cmである。

27は，本跡の覆土から出土した小破片で，蓋形土器と思われる。器壁が薄く，端部は丸みを帯び，器面には２条の微隆線が施されている。微隆線の一部には突起ないしは把手，あるいはつま



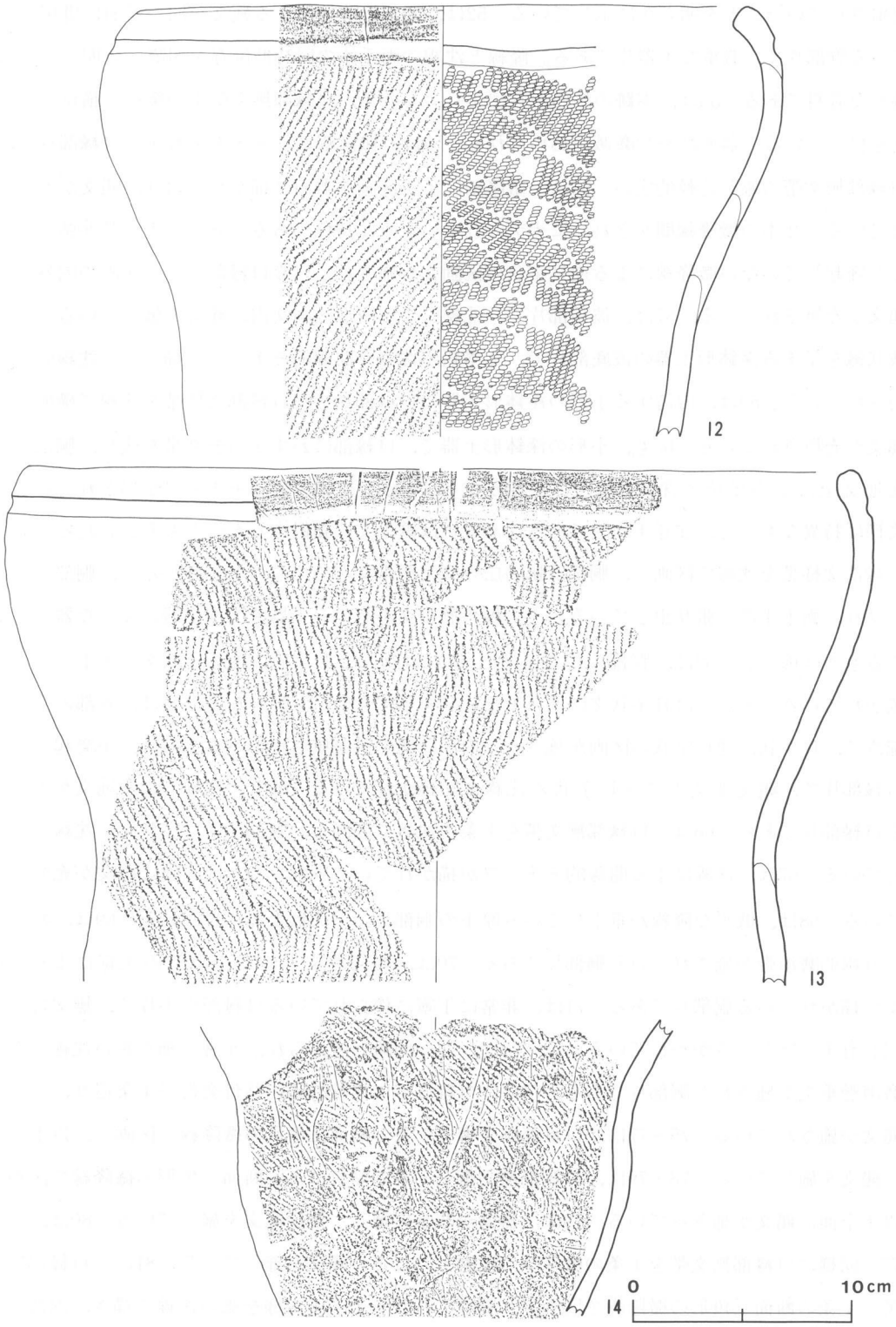
第118図　第48号住居跡出土遺物実測図 (3)

みが付着していた痕跡がみられるが，剝がれている。内外面とも横ナデが施されている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が暗褐色，内面が黒褐色を呈している。推定蓋径は11.0cmで，現存高は2.8cmである。

28は，本跡の覆土から出土した台付土器の台部片である。全体に調整が粗く，凹凸している。外面は縦ナデ，内面は横ナデが加えられている。器形は内湾しながら開いており，脚端部は内側に折り返されている。孔は現存部で2か所認められているが，全体の数や配列は不明である。胎土に砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が黒褐色を呈している。推定台部底径は16.4cmで，現存高は5.1cmである。

29は，本跡の覆土から出土した手づくね土器の口縁部片である。整形は粗いが，外面は縦位の，内面は横位のナデが加えられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は5.0cmで，現存高は4.5cmである。

30は，隆線による曲線的モチーフが器面全体に展開しているもので，区画の内外に縄文が充塡されている口縁部片である。31・32も，30と同様な口縁部片で，隆線による曲線的モチーフを器面全体に展開しており，区画の内外に縄文が充塡されている。33～39も，30～32とほぼ同様のもので，器面全体に隆線による曲線的モチーフが描かれている口縁部片である。38を除いて平縁として図示しているが，大半は緩い波状縁を呈している。38は，薄手で隆線も細い。器面は磨滅が著しい。30～39の隆線には，1本単位のもの，2本単位のものがあり，隆線に沿うナゾリにも差異がある。また，隆線の太さ，細さ，断面形状のちがいなど指摘しうる相違が多々あるが，ここでは一括して示した。40・41は，同一個体と思われ，非常に大形の深鉢形土器である。大柄な渦巻状のモチーフを描き，縄文をモチーフの内外に充塡している。42は，胴部のくびれ部片で，隆線による縦長の区画を主に文様が構成されている。区画内に縄文を丁寧に充塡している。43は，隆線によるモチーフを器面全体に施している厚手の胴部片で，隆線の断面形状が緩い山形を呈している。44は，本跡の覆土下層から出土した破片が接合したもので，深鉢形土器の胴下半部片である。縦位の懸垂隆線が胴部の横位の隆線から垂下し，区画内に単節縄文ＬＲが縦位，斜位回転により施文されている。底部近くは少し無文の部分がみられる。45は，隆線による区画がなされている口縁部片で，全体のモチーフが判らないが特異なものである。46は，口唇部が内傾し極端に薄く尖っている口縁部片で，隆線による区画文上にも縄文が施されている。47は，隆線により器面全体に曲線的モチーフが構成されている胴部片である。48は，低平な隆線により区画が施されている胴部片で，整った複節縄文が付されている。49は，明らかな貼付手法による隆線により区画が構成されている胴部片で，単節縄文が充塡されている。50・51は，接合はしないが1と同一個体と思われる。断面三角形の隆線によるモチーフと，太い2本組の沈線による逆U字状のモチーフが併用された例で，注意すべきものである。この二つの手法が同時期に

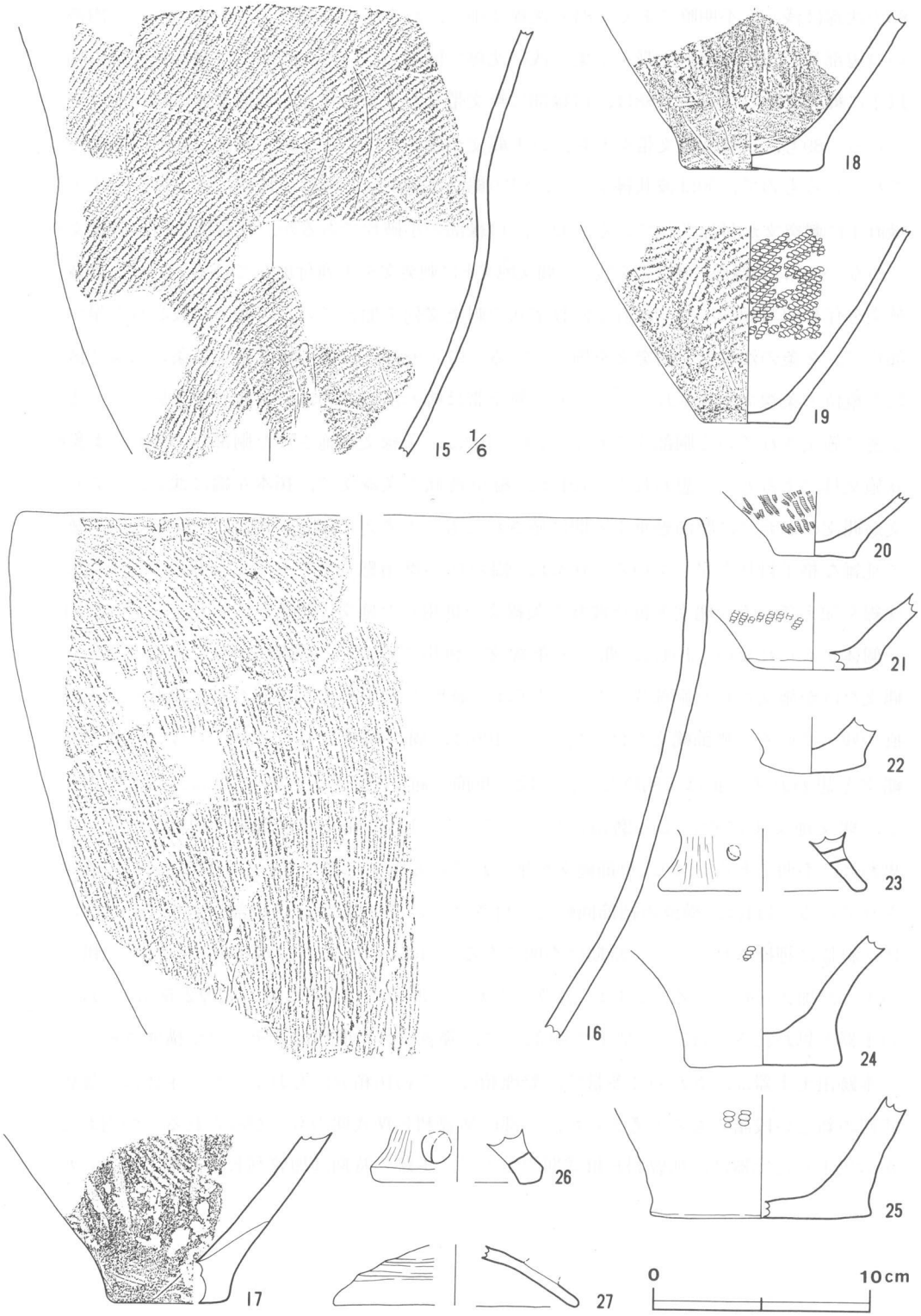


第119図　第48号住居跡出土遺物実測図（4）

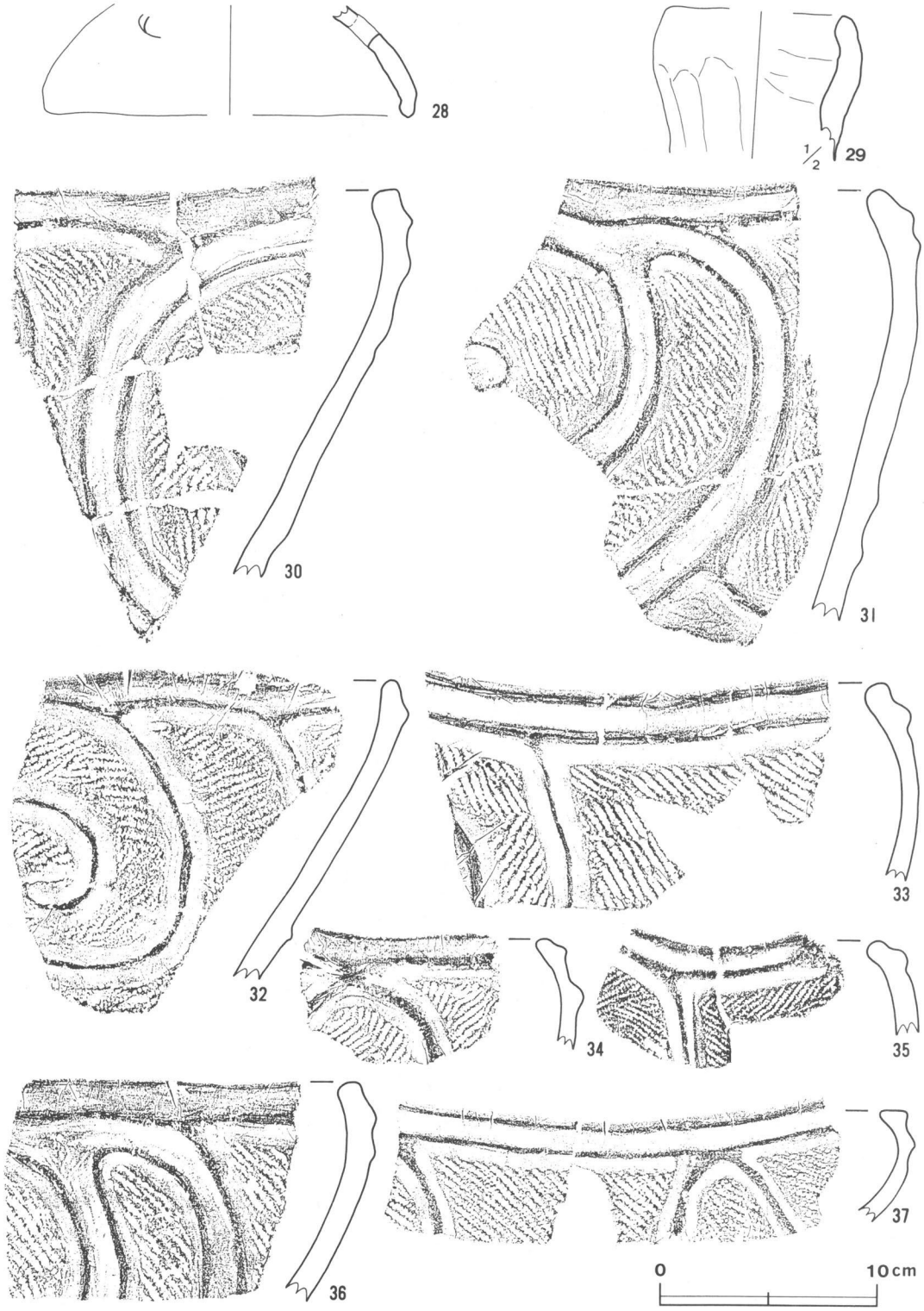
使用されていたことを明らかに示している。52は，隆線と沈線による施文が同一器面に併用されている胴部片で，貴重な土器片である。隆線と沈線の両手法の同時期併存を明瞭に証明している確かな資料である。53は，本跡の炉内から出土したもので，口縁部無文帯下の突起に横位に貫通孔を付している。器面にやや磨滅が認められる。54は，微隆線による区画を有する口縁部片で，口縁部無文帯の幅が比較的広い。55は，微隆線による区画が器面に描かれており，縄文が充塡されている。2本の微隆線間がきれいにナデられている点に特色がある。56は，ナゾリが強くほとんど隆起していない微隆線による逆U字状の区画文が施されている口縁部片で，区画の内外には縄文が充塡されている。57は，波頂部片で，沈線による円形区画文内に縄文を施している。58は，波状縁を呈する深鉢形土器の波底部片で，2本組の沈線で曲線的モチーフが描かれ，沈線間は磨消されている。59は，内湾する小形の深鉢形土器の口縁部片で，口縁部文様帯を沈線で構成し，縄文が充塡されている。60も，小形の深鉢形土器で，口縁部にわずかの無文帯を残し，胴部の縄文地文上に2本単位の沈線により，先端が左右にわかれて渦を巻くモチーフが描かれている。文様は特異なもので，注意すべきである。あるいは蕨手文に類似するものとも考えられる。61は，口縁部文様帯を沈線で区画し，胴部に幅の広い磨消懸垂文を施すものと思われるが，胴部で強くくびれ，胴下半部が張り出している。この種の懸垂文を有する土器で，本土器のような器形を呈するものは珍しい。62は，胴部片であるがくびれは緩く，U字状，逆U字状文が上下に沈線で描かれている。あるいはH字状文に近いモチーフを示すものとも思われる。63は，胴部のくびれ部片で，U字状，逆U字状の区画が施され，内部に縄文が充塡されている。64は，小突起をもつ口縁部片で，縄文地文上に逆U字状の沈線文が描かれている。65も，沈線による施文が主となる口縁部片である。66は，口縁部無文帯を1条の沈線で区画し，胴部に逆U字状文が沈線で描かれている。67は，沈線による曲線的モチーフが描かれている胴部片で，区画内に縄文が充塡されている。68は，低平な隆線が垂下している厚手の胴部片で，大形土器と思われる。69は，幅の広い直線的磨消帯が施されている胴部片である。70は，縄文地文上に2本単位の沈線による弧状文が描かれている胴部片である。71は，非常に丁寧に作られている口縁部の小片で，無文帯は光沢を有するほどにみがかれている。72・73は，同一個体と考えられ，非常に細く鋭い沈線による磨消懸垂文が施された胴部片である。74は，口縁直下に比較的高い貼付突帯が1条巡り，以下に縄文が施されている。75～77は，口縁部無文帯を1条の断面三角形の微隆線で区画し，以下全面に縄文を施している。78・79は，口縁部無文帯を1条の貼付による断面三角形の微隆線で区画し，以下全面に縄文が施されている。79は，器壁が非常に薄く，無節縄文を施している。80は，75～77と同様に口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し，以下に縄文を施している。81は，口縁部無文帯を1条の断面三角形の微隆線で区画し，胴部に∧状を呈する文様を細い沈線で描き，内部を磨消している。82～85は，口縁部無文帯を1条の沈線で区切り，以下全面に縄文が施されている。

83の沈線は浅く，不明瞭である。84の沈線は細く，わずかな段を有している。86は，内湾の著しい口辺部片で，口縁部無文帯を1条の浅い沈線で区画している。87は，口縁部無文帯の幅が広く，以下に縄文を施している。88は，口縁部に無文帯をわずかに残し，器面全体に縄文だけが施されている。89も，口縁部無文帯をもち，以下縄文が施されている。90・91は，全面に縄文だけが施されているもので，90は波状縁を呈し，91の縄文は細かい。92は，沈線による施文を主とし，口縁直下に刺突文が付加されている。93は，口縁部の小破片であるが，沈線間に円形刺突文を付している。94は，口縁部に無文帯を残し，縄文地文上に刺突文を1列付加している。95は，沈線による施文を有する口縁部辺で，口縁直下にD字状の刺突文列を加えている。96は，波状縁を呈する口縁部片で，2条の沈線文と刺突文を施している。97・98は，口縁部無文帯を1条の凹線で区切り，以下縦位の条線文が施されている。97の無文帯は幅が広い。99は，半截竹管状施文具による沈線が密に施文されている胴部片である。100～102は，条線文が施された胴部片で，100は多截竹管状施文具によるものと思われる。101は，縦位波状の条線文で，拓本左端に沈線がみられ，条線文が縄文のかわりに磨消懸垂文の間に施されたものと考えられる。102は，多方向から施文されて乱雑な格子目状を呈している。103は，幅の広い磨消懸垂文を有する胴部片で，中間に1本の沈線を加えている。縄文と縦位波状の条線文を併用した施文に特色がみられる。101は，103と同一個体かもしれない。104は，縄文と条線文が併用されている胴部の小片である。105～111は，縄文だけが施文された胴部片である。105は，壺形を呈するものと思われ，橋状把手の剝がれた痕が残っている。無節縄文を付している。106は，固い繊維で良く撚れていない原体を回転した縄文と思われる。節は不明瞭だが，2段（単節）縄文と考えられる。107は，胴部の小片であるが，縄文地文上に指による磨消が付されている。108の縄文は無節縄文に似ているが異なると思われ，不明である。109は単節縄文が施されている胴下半部片である。110は，付加条縄文が施されている。111は，横位の結節回転文が付されている。112は，口縁部の小片で，器面に縄文原体が斜位に押捺（おうなつ）されている。時期は不明である。113は，無文の口縁部片で，整形が粗く，横位のナデが加えられている。114は，無文のきわめて厚手の口縁部片で，器厚2.5cmにもおよび大形の土器と思われる。115は，厚手の胴部片で，隆線だけで曲線的モチーフが構成されている。

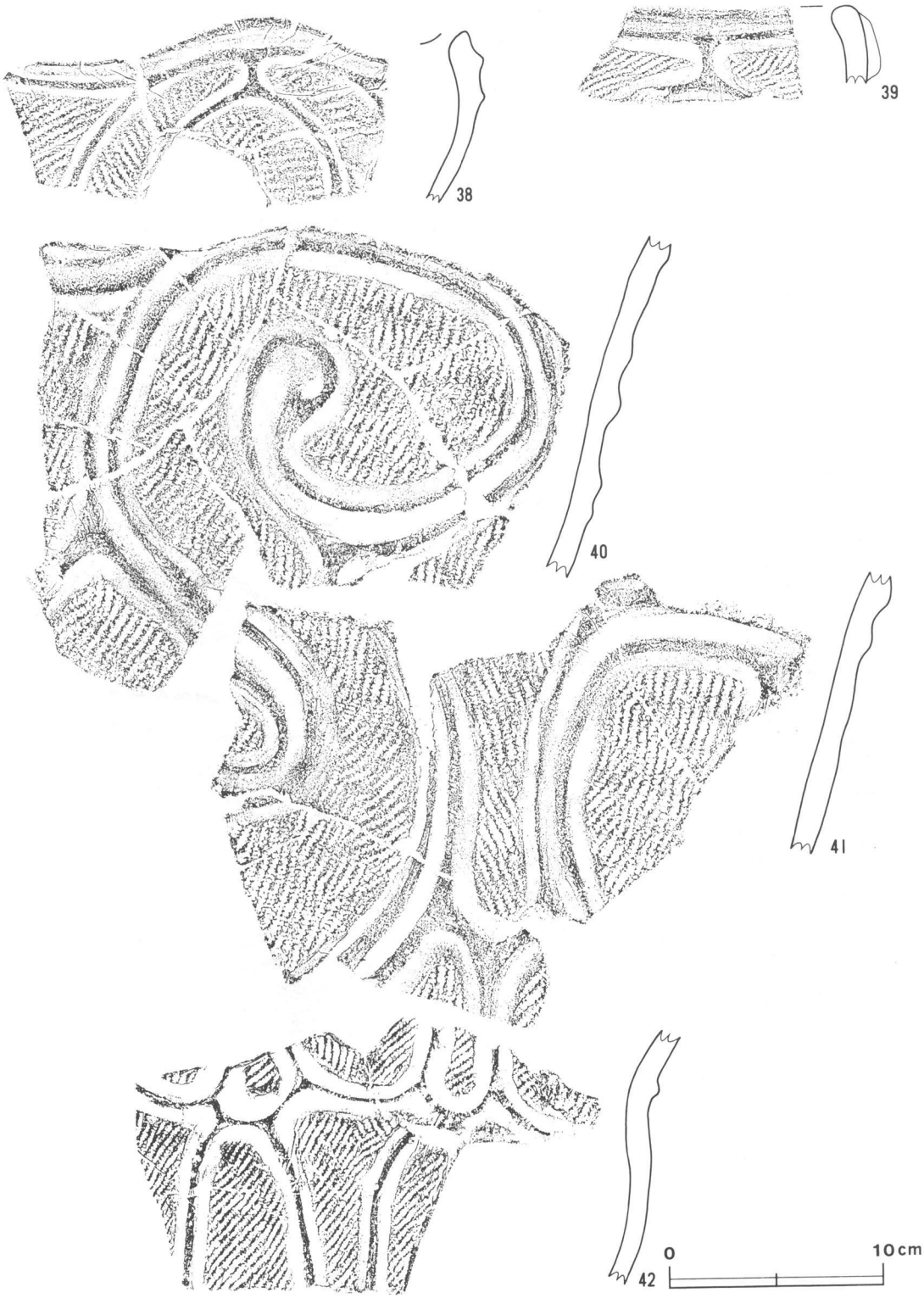
本跡出土土器は，きわめて多量で，整理箱にして約16箱分にもおよんだ。主体は，加曽利EⅢ式期の新しい段階のものと考えられ，一部に加曽利EⅣ式期のものがみられる。炉内および床面から出土した土器は，加曽利EⅢ式期のもので，本跡の時期は加曽利EⅢ式期と考えられる。



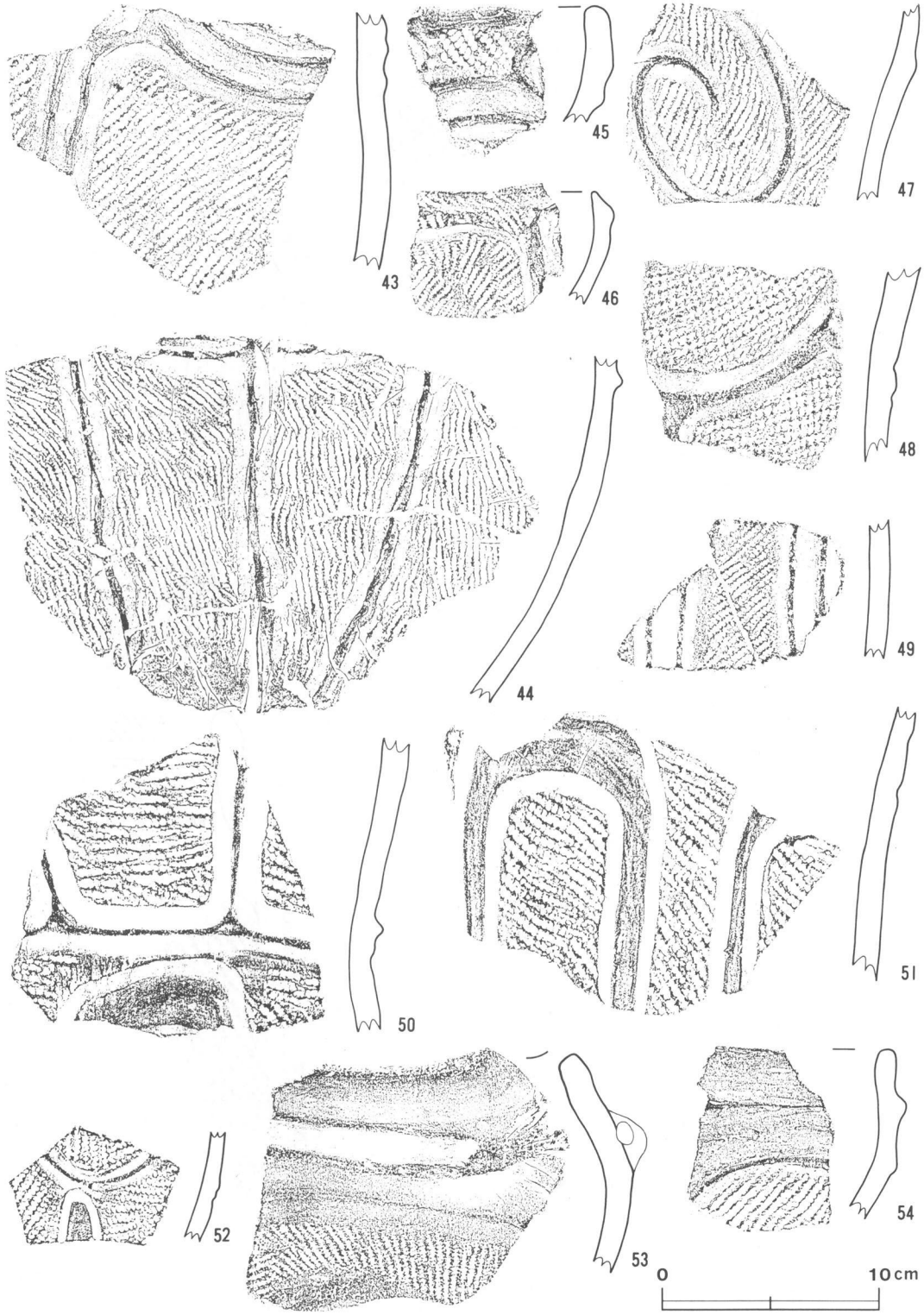
第120図　第48号住居跡出土遺物実測図　(5)



第121図　第48号住居跡出土遺物実測図・拓影図　(6)

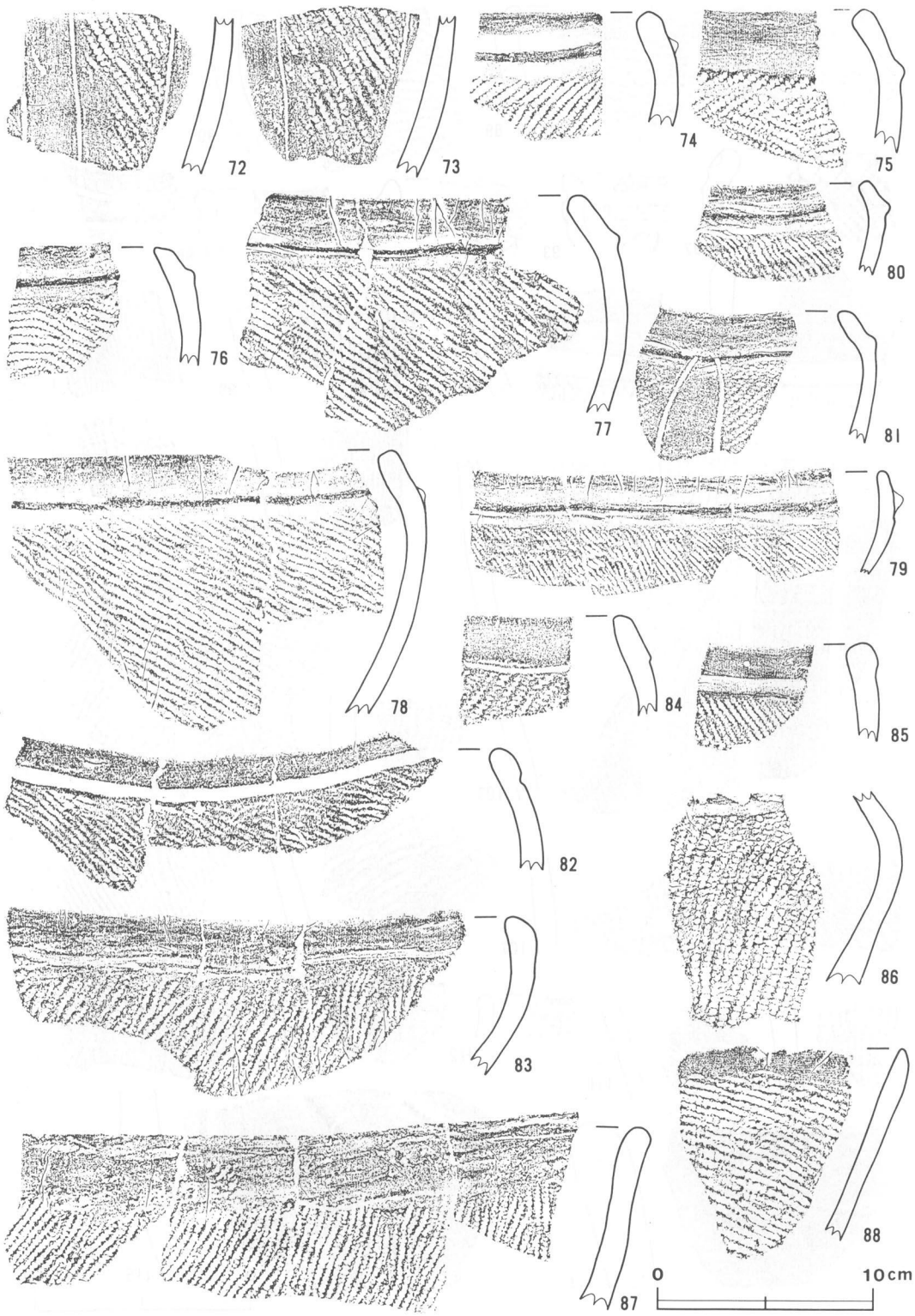


第122図　第48号住居跡出土遺物拓影図　(7)

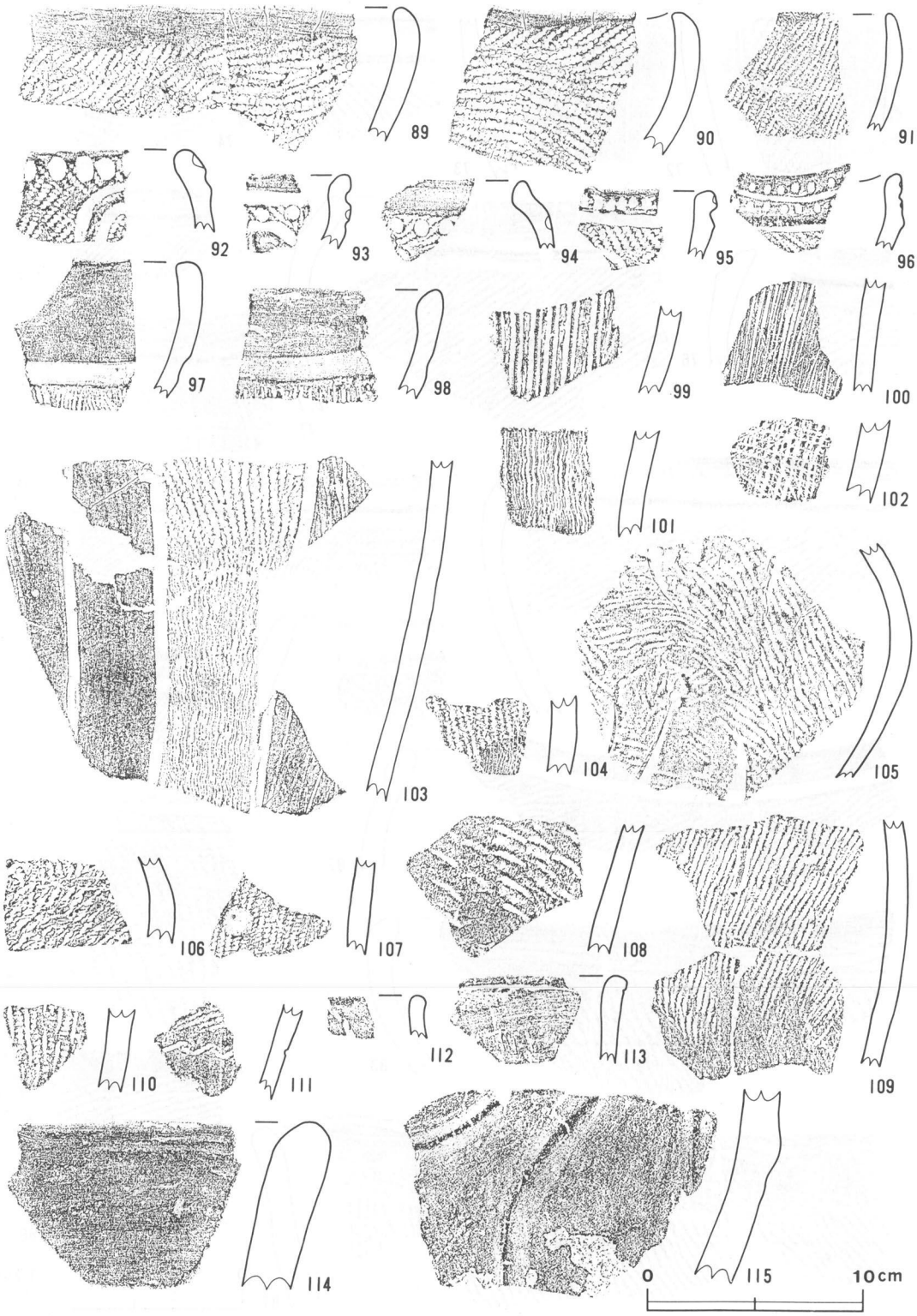


第123図　第48号住居跡出土遺物拓影図　(8)

第124図　第48号住居跡出土遺物拓影図　(9)



第125図　第48号住居跡出土遺物拓影図　(10)



第126図　第48号住居跡出土遺物拓影図 (11)

第49号住居跡（第127図）

本跡は，遺跡の中央部H4j_2区を中心に確認されたもので，第45号住居跡の南東側2.5mに位置している。北側で第312号土壙と重複している。新旧関係は，本跡の炉と第312号土壙の壁の切り合い関係から本跡の方が新しいと考えられる。

平面形は，長径4.5m・短径4.2mの楕円形で，長径方向は，N－44°－Wを指していいる。壁はロームブロックを含み，北壁が床面から垂直に立ち上がるほかは，外傾して立ち上がっている。壁高は，16～24cmである。床面はロームブロックを含み，よく踏み固められており平坦である。ピットは9か所検出され，規模は径22～50cm・深さ18～47cmである。全体として南側にかたより配列が不規則なため，主柱穴は判別できない。炉は本跡の中央からやや北側に検出され，径53cmの円形で，床面を20cm掘り凹めた地床炉である。なお，この炉は第312号土壙の壁面を切って築かれている。炉床はよく焼けているが，炉の覆土の焼土量は少ない。

覆土は5層からなり，主に暗褐色土・褐色土・極暗褐色土が堆積している。一部が攪乱されているが自然堆積である。5層とも締まっている。

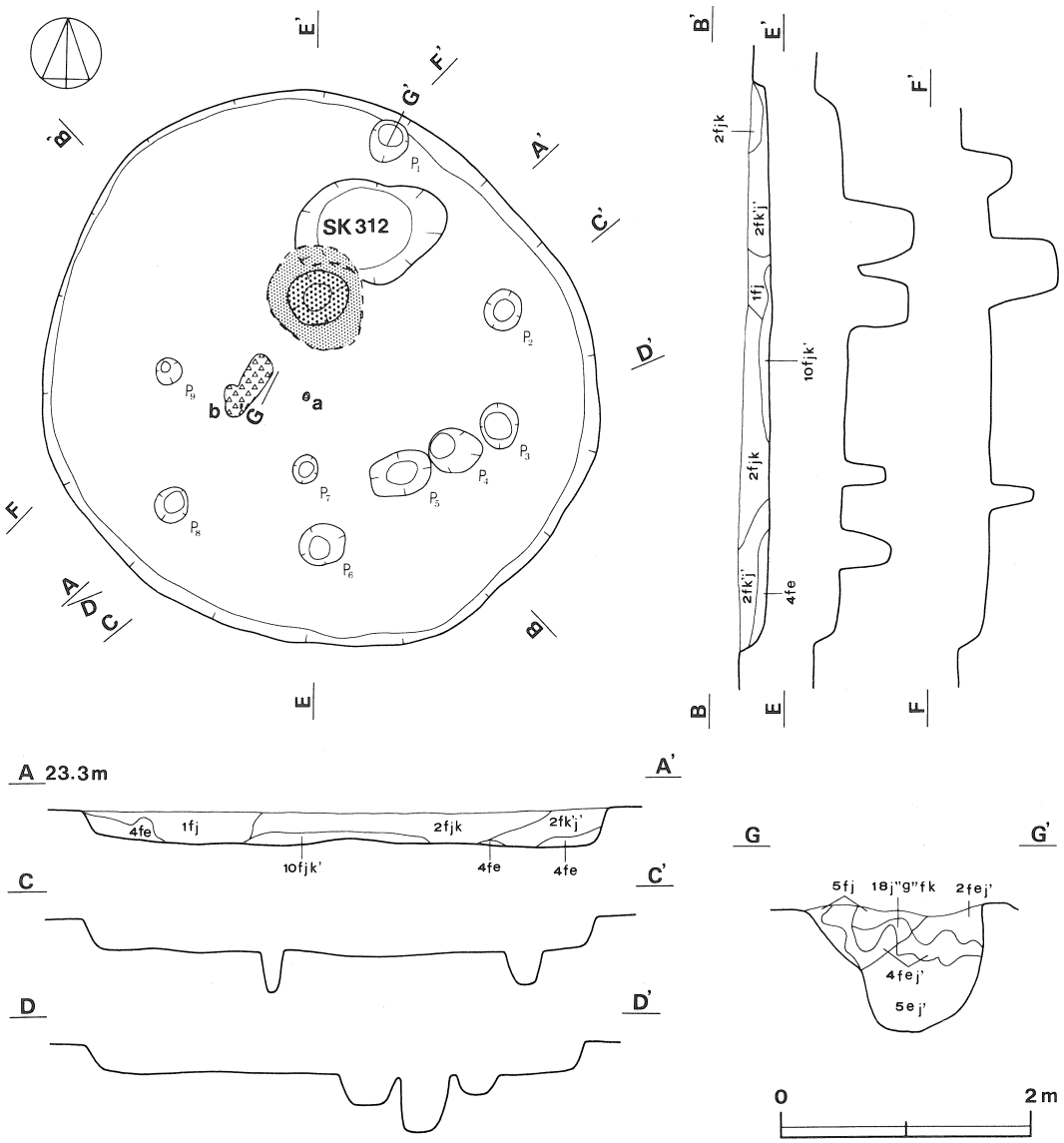
遺物は，縄文土器片・土製品及び石器が覆土から多量に，床面から縄文土器片が1点出土している。

第49号住居跡出土土器（第128～133図1～67）

1は，本跡の北側の覆土から逆位で出土した破片5点が接合したもので，把手を有する内湾の著しい深鉢形土器の口縁部の大破片である。胴下半部は，欠損している。把手の数は不明であるが，口縁部無文帯をまたぐように橋状把手が縦位に付され，その上に直交するような向きで小さな環状把手を重ねている。口縁部無文帯を微隆線で区画し，胴部にも微隆線による区画を施し，区画の内外には単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されている。把手上にも同様に施されている。外面の右上端部には炭化物が厚く付着している。胎土には砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は，内外面とも暗褐色を呈している。推定口径は24.4cmで，現存高は13.2cmである。

2は，本跡のほぼ中央部の覆土から内面を上にして出土した破片が接合したもので，口縁が内傾する平縁の深鉢形土器である。器面全体が著しく磨滅しているが，微隆線による曲線的モチーフが描かれている。口縁部無文帯を区画する微隆線上には舌状突起が付されているが，破片のために数は不明である。縄文は単節ＬＲと思われる。内面は横ナデにより整形されているが，器面があれていて不明確である。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は不良である。色調は黄褐色を呈している。推定口径は25.4cmで，現存高は16.9cmである。

3は，本跡の南側の覆土から内面を上にして一括して出土した深鉢形土器の口縁部片である。口縁が内傾し，器面には2本組の微隆線による曲線的モチーフが描かれている。地文には粗い単



第127図　第49号住居跡実測図

節縄文ＲＬが施されている。内面は横ナデにより整形されているが粗い。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈している。推定口径は31.2cmで，現存高は14.5cmである。

４は，本跡の西側の覆土から内面を上にして出土したもので，小さな把手を有する深鉢形土器の口縁部片である。口縁部無文帯を１条の微隆線で区画し，この無文帯をまたぐように小把手が付されている。小破片のため把手の数は不明である。把手上には凹線が中央に引かれ，無節縄文Ｌが縦位回転で施されている。胴部には把手上と同じ原体の縄文が地文として付され，細い沈線による逆Ｕ字状文が描かれ，内部が磨消されている。また，外面には炭化物の付着が顕著である。

内面は横ナデが施されている。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を主とするが，炭化物の付着部分は黒褐色を呈している。推定口径は22.5cmで，現存高は8.3cmである。

5は，本跡の北側の覆土から内面を上にして出土した大破片を中心に，その周囲の覆土から出土した破片が接合し，約70%ほど復元できた深鉢形土器である。口縁部は内湾し，胴部でくびれ，胴下半部がややふくらみ，小さな底部へいたる器形を呈している。幅1.5～2.0cmの口縁部無文帯をわずかな微隆線で区画し，以下全面に単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されている。口縁部無文帯には丁寧な横ナデが施されている。底面の近くは縦方向のヘラナデが顕著である。内面の上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが加えられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を主とし，暗褐色の部分もみられる。口径は22.4cmで，器高は29.4cm，底径は5.2cmである。

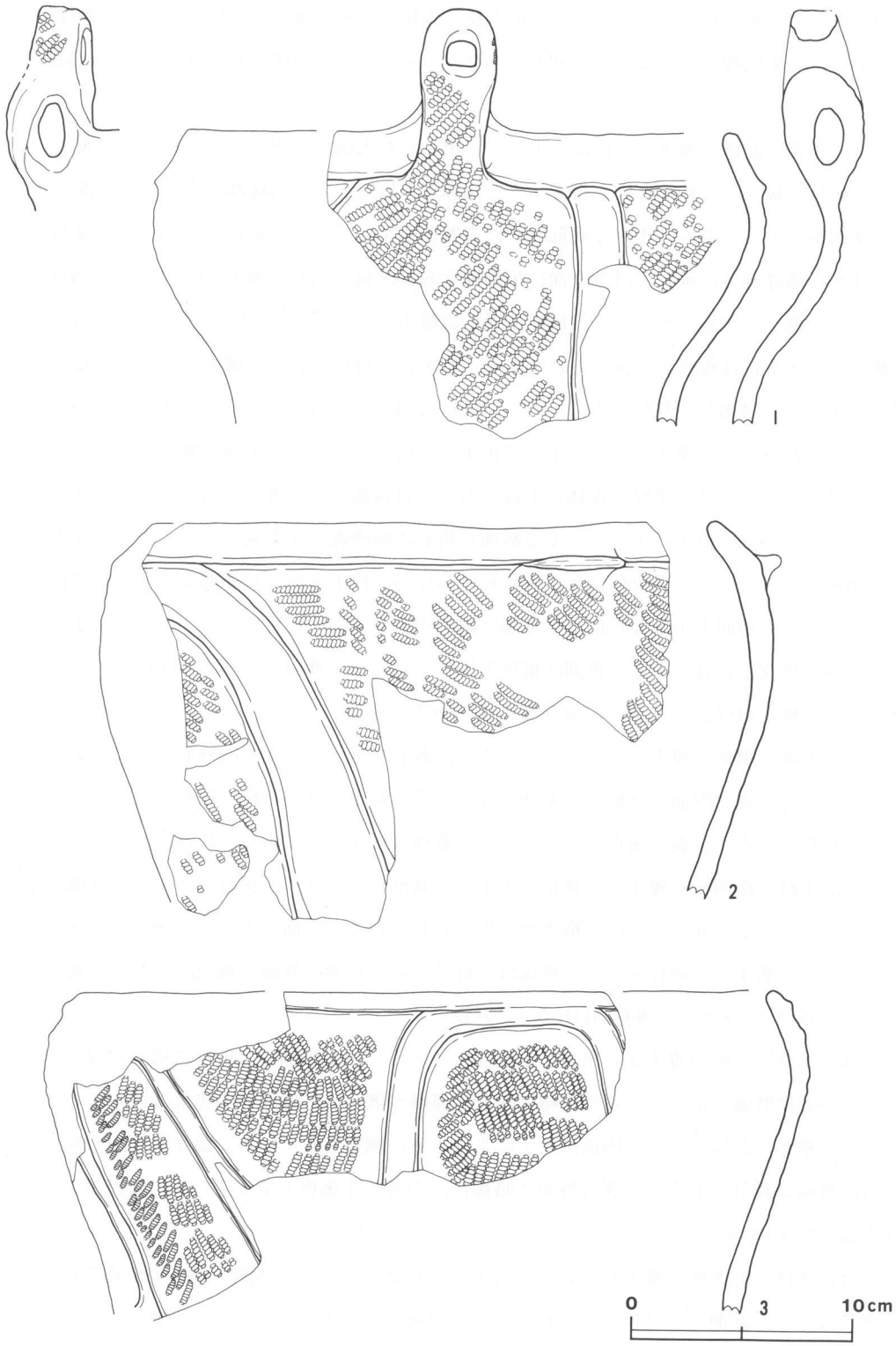
6は，本跡の北側の覆土からまとまって出土した破片を主体に，南西側覆土から出土した破片などが接合したもので，平縁の深鉢形土器である。口縁部だけが著しく内傾し，幅の狭い無文帯を有している。この直下にナゾリによる断面三角形の微隆線が1条巡っている。微隆線下のナゾリは指頭によるもので，部分的にしか付されていない。以下全面に単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されている。内面上半部は斜位，下半部は縦位のナデが加えられている。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈しているが，外面の一部には暗褐色から黒褐色の個所がある。推定口径は25.0cmで，現存高は16.8cmである。

7は，本跡の東側の覆土から出土したもので，蓋形を呈している。内外面とも横ナデによる整形が加えられ，更に内面には縦ナデも施されている。胎土には小石粒，砂粒が含まれ少し粗いが，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。蓋径は推定で11.2cmで，現存高は1.6cmである。

8は，本跡の南西側の覆土から逆位で出土した底部片で，5点が接合している。外面は縦ナデが施されているが，底面近くには横ナデが加えられている。内面にもナデが施され，炭化物も付着している。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が黄褐色を呈している。底径は5.8cmで，現存高は9.5cmである。

9は，本跡の北側の覆土から出土した底部片である。胴下半部には縦位の細い沈線が垂下している。外面は磨滅が進んでいるが，特に底部の周縁が著しい。底面の中央部は凹んでいる。底面の近くは横ナデが加えられ，内面はナデにより丁寧に調整されている。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が暗褐色，内面が赤褐色を呈している。底径は4.7cmで，現存高は2.9cmである。

10は，本跡の北西側の覆土から正位で出土した底部片である。外面は縦ナデが施されているが丁寧ではなく，底面近くは横ナデされている。内面も縦ナデされているが丁寧ではない。底部は若干突出気味で，底面もやや不安定である。胎土には粗砂を含み，焼成は良好である。色調は褐

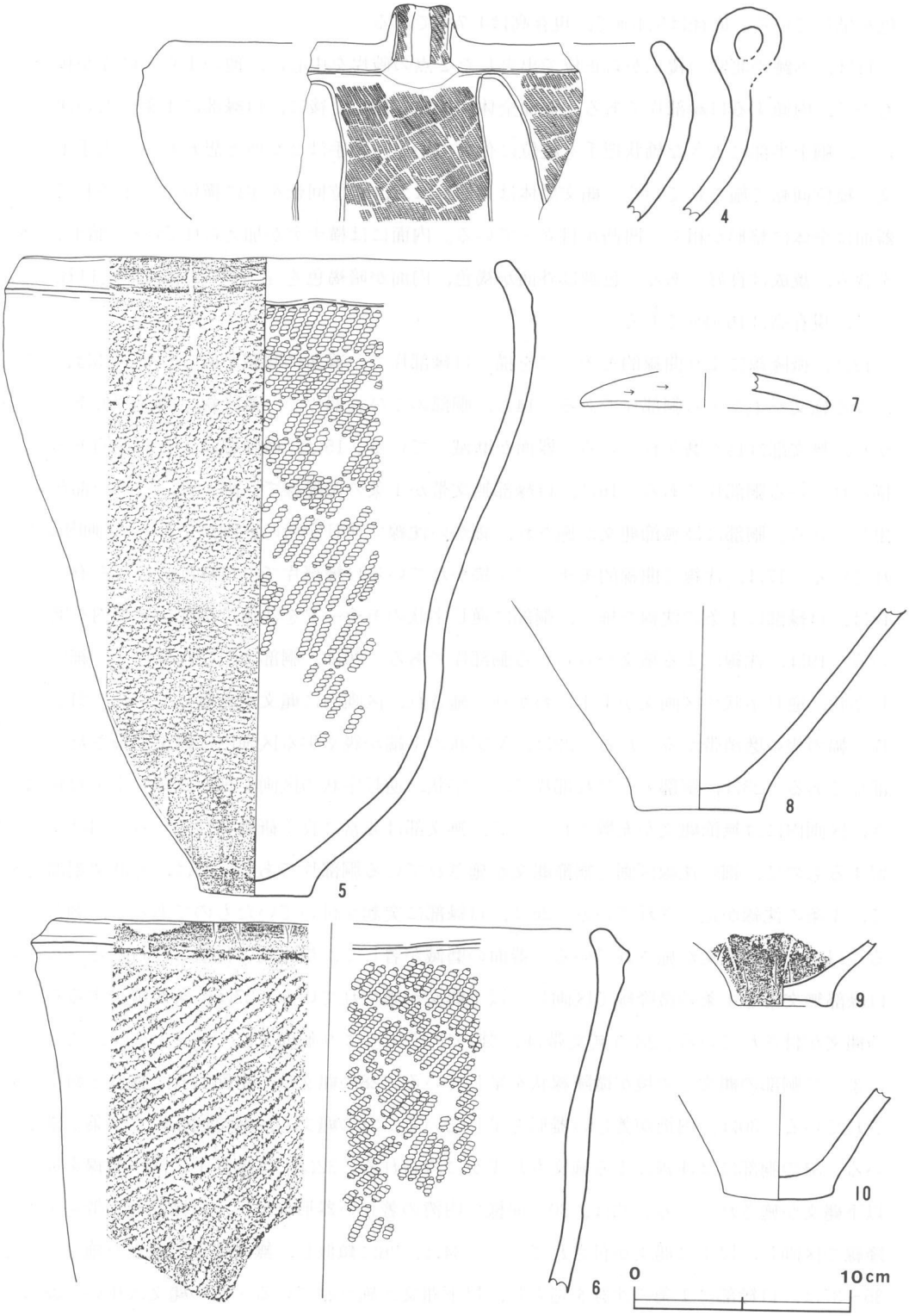


第128図　第49号住居跡出土遺物実測図　(1)

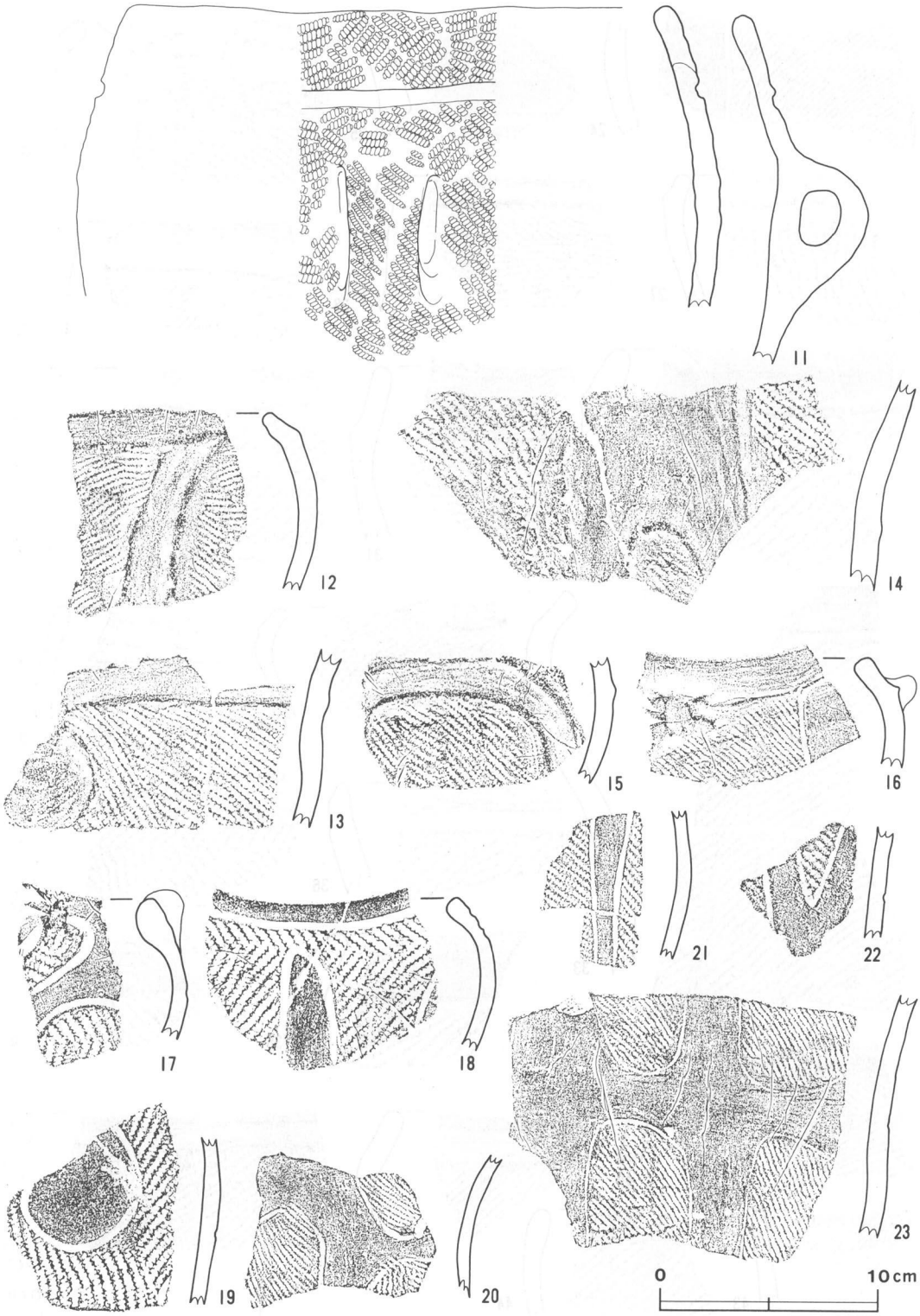
色を呈している。底径は5.1cmで，現存高は4.7cmである。

11は，本跡の北側の覆土から正位で出土した２点の破片を中心に，他の１点の破片が接合したもので，内傾する口縁部片である。器面全体に縄文を施した後に，口縁部に１条の太い沈線を巡らし，胴上半部に大きな橋状把手を縦位に付けている。把手は２か所と思われる。把手上にも縄文が縦位回転で施されている。縄文原体は単節ＬＲで，縦位回転を主に横位にも施されている。器面は全体に整形が粗く，凹凸が目立っている。内面には横ナデが加えられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。推定口径は24.6cmで，現存高は16.0cmである。

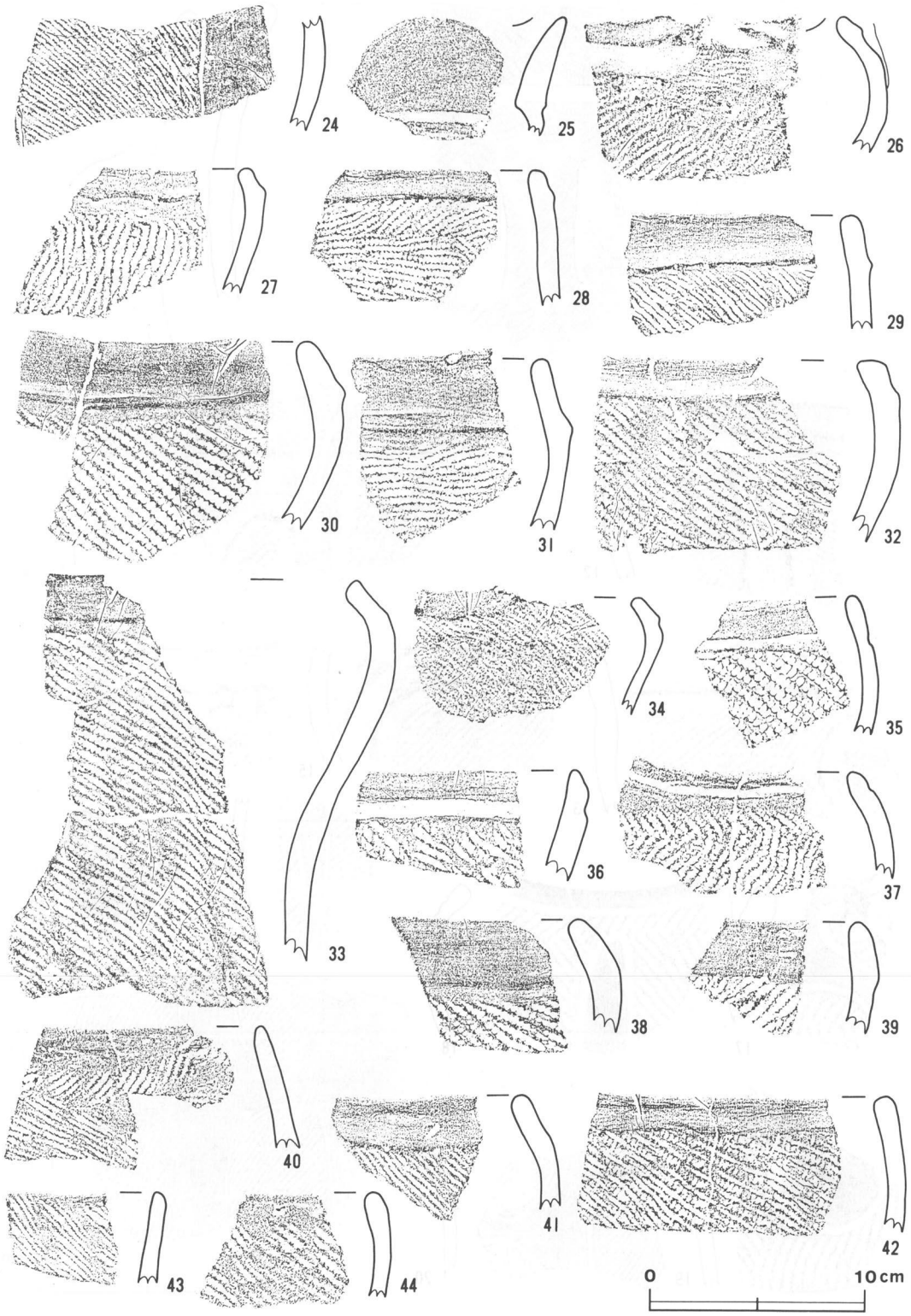
12は，微隆線により曲線的モチーフを描く口縁部片で，器面に磨滅がみられる。13は，微隆線による施文を主とする胴部片である。14も，胴部のくびれ部片で，微隆線で曲線的モチーフが描かれ，無文部は良く磨かれている。器面が磨滅している。15は，微隆線による曲線的モチーフが描かれている胴部片である。16は，口縁部無文帯が１条の微隆線で区画され，その一部が高く突出している。胴部には無節縄文が施され，細かい沈線で逆Ｕ字状の区画がなされ，区画内は磨消されている。17は，沈線で曲線的モチーフが描かれている口縁部片で，口縁部に突起を有している。18は，口縁部に１条の沈線を施し，胴部に逆Ｕ字状のモチーフを沈線で描き，区画内を磨消している。19は，沈線による施文がみられる胴部片である。20は，胴部のくびれ部片で，細い沈線でＵ字状，逆Ｕ字状の区画文が上下にわかれて施され，区画内に縄文を充填している。21も，胴部片で幅の狭い磨消帯がみられる。22は，Ｖ字状の下端が鋭く尖る区画内に縄文が施されている胴部片である。23は，胴部のくびれ部片で，Ｕ字状，逆Ｕ字状の区画を細い沈線で上下対称的に描き，区画内には無節縄文が充填されていて，無文部は非常に良く研磨されている。24は，23に類似するもので，細い沈線区画と無節縄文が施されている胴部片である。25は，弁状突起部の破片で，１条の沈線が巡らされている。26は，口縁部に突起が付いていたものであるが，剝落している。以下全面に縄文が施されている。器面の磨滅が著しく，炭化物の付着もみられる。27～31は，口縁部無文帯を１条の微隆線で区画し，以下縄文が施されている。27は，条が縦走する斜位回転の縄文が付されている。28の無文帯は，強いナゾリにより形成されているもので，このナゾリによって胴部の縄文との境が微隆線状を呈している。28の縄文は，単節ＬＲで横位と斜位に回転されている。30は，内湾が著しい器形を呈している。31の縄文も，斜位回転により条が横走している。31の胴部には沈線による施文もわずかにみられる。32は，口縁直下に浅い凹線を巡らし，以下縄文が施されている。33は，30と同様で内湾の著しい器形を呈し，口縁部無文帯を１条の微隆線で区画し，以下に縄文が付されている。34は，26に類似し，無文帯下に縄文を施している。35～37は，口縁部に１条の沈線を巡らし，以下縄文が施されている。35の縄文は粗い。38は，口縁部無文帯を微隆線で区画し，以下縄文が施されている。39～41は，口縁部無文帯をナゾリによ



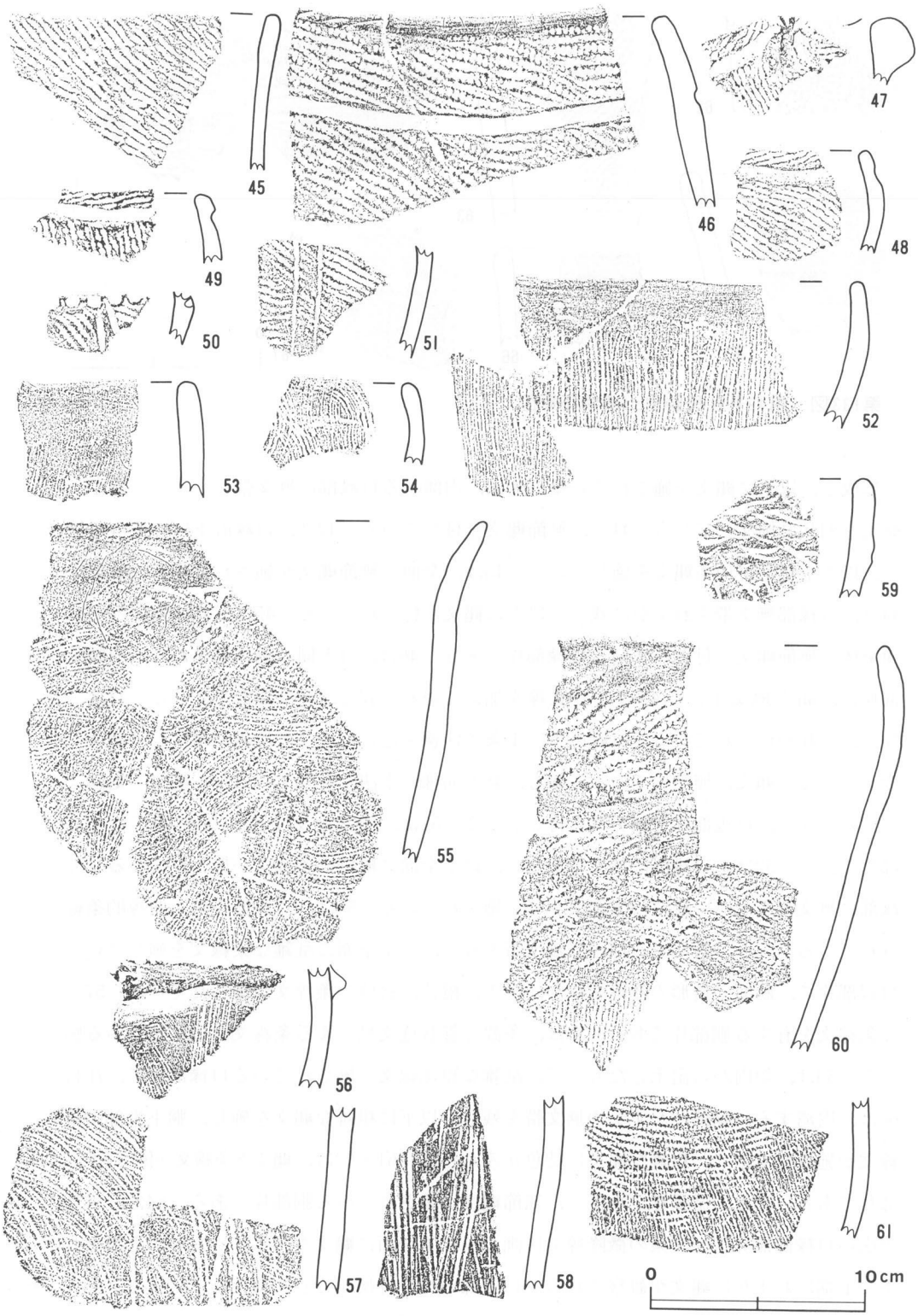
第129図　第49号住居跡出土遺物実測図　(2)



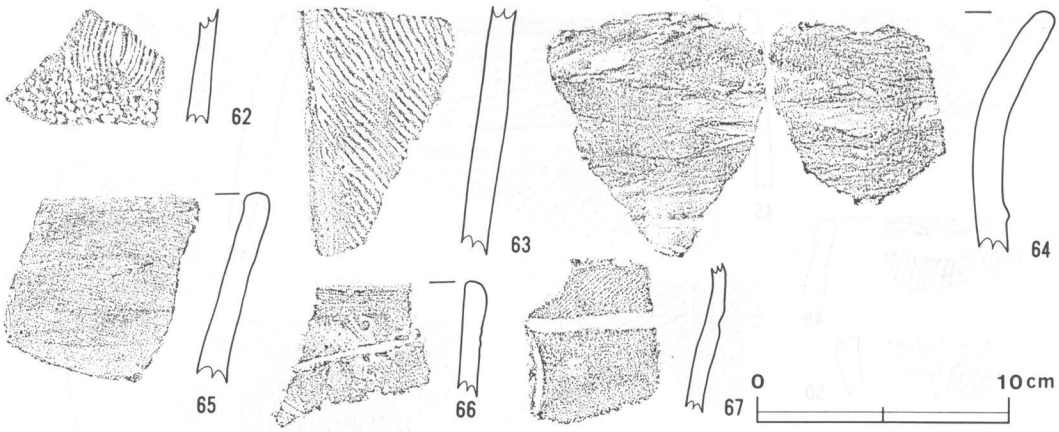
第130図　第49号住居跡出土遺物実測図・拓影図（3）



第131図　第49号住居跡出土遺物拓影図 (4)



第132図　第49号住居跡出土遺物拓影図　(5)



第133図　第49号住居跡出土遺物拓影図（6）

り形成し，以下に縄文が施されている。40は，内傾する口縁部に無文帯をわずかに残し，以下に縄文を羽状に施文している。41は，無節縄文を付している。42は，口縁直下に１条の凹線を巡らし，以下全面に付加条縄文を施している。43は，全面に無節縄文が施されている口縁部片である。44は，口縁部無文帯をわずかに残し，以下に縄文が付されている。45は，43に類似しており，器面全体に無節縄文が付されている口縁部片である。46は，11と同一個体と思われ，内傾する口縁部片で，縄文地文上に１条の太い沈線を加えている。47と，48は類似している。47は，波頂部片で，突起が付されている。口縁直下に１条の沈線を巡らし，この沈線を境にして縄文の走向を変えている。縄文は無節Ｌである。49も，48と同様の手法を有しているが，縄文の走向は異なっている。50は，口辺部片で刺突文を付している。51は，縄文地文上に沈線を垂下させている胴部片である。52は，口縁部に無文帯を残し，以下全面に縦位の条線文が施されている。53も，口縁部に無文帯をもち，縦位の条線文が軽く施されている。54は，口縁直下から曲線的条線文が施されている。55は，外反する口縁部無文帯を残し，以下全面に乱雑な条線文を施している。56は，口辺部片で，断面三角形の隆線を貼り，以下に縦位，斜位の条線文が施されている。57は，乱雑な条線文を有する胴部片である。58は，多截竹管状施文具による条線文が施されている胴部片である。59は，炉内から出土したもので，乱雑な短沈線文が施されている口縁部片で，注目される。60は，内湾する口縁部にわずかの無文帯を残し，以下に粗雑な縄文を施し，胴下半部に縦位の条線文が施されており，粗雑な縄文に特色がみられる。61・62は，縄文と条線文が併用されている胴部片である。63は，微隆線が垂下し，無節縄文が施されている胴部片である。64は，外反する幅の広い口縁部無文帯を１条の微隆線で区画し，以下全面に縄文を施しているものと思われる。拓本の下端にわずかに縄文が観察される。口縁部がやや外反する点に特色がみられる。65は，無文の口縁部片である。66・67は，縄文後期初頭に属する土器片と思われる。66は，粗い整形後に乱

雑な沈線文が引かれている口縁部片である。67は，沈線区画内に細かい縄文が充填されている胴部片である。共に胎土には長石，石英粒を多く含み粗い。

本跡から出土した土器の大半は，微隆線や細い沈線による施文のものが目立ち，加曽利ＥⅣ式期のものと考えられる。したがって，本跡の時期は，加曽利ＥⅣ式期と考えられる。

第50号住居跡（第134図）

本跡は，遺跡の南部H4h_6区を中心に確認されたもので，第44号住居跡の南側34ｍに位置している。北東側で第54号住居跡と重複している。また，第223・226号土壙が北側及び西側の床面内に築かれている。新旧関係は，土層から第54号住居跡とでは，本跡が新しく，第223号土壙とでは，本跡が古いと考えられる。また，第226号土壙とでは，新旧関係は不明である。

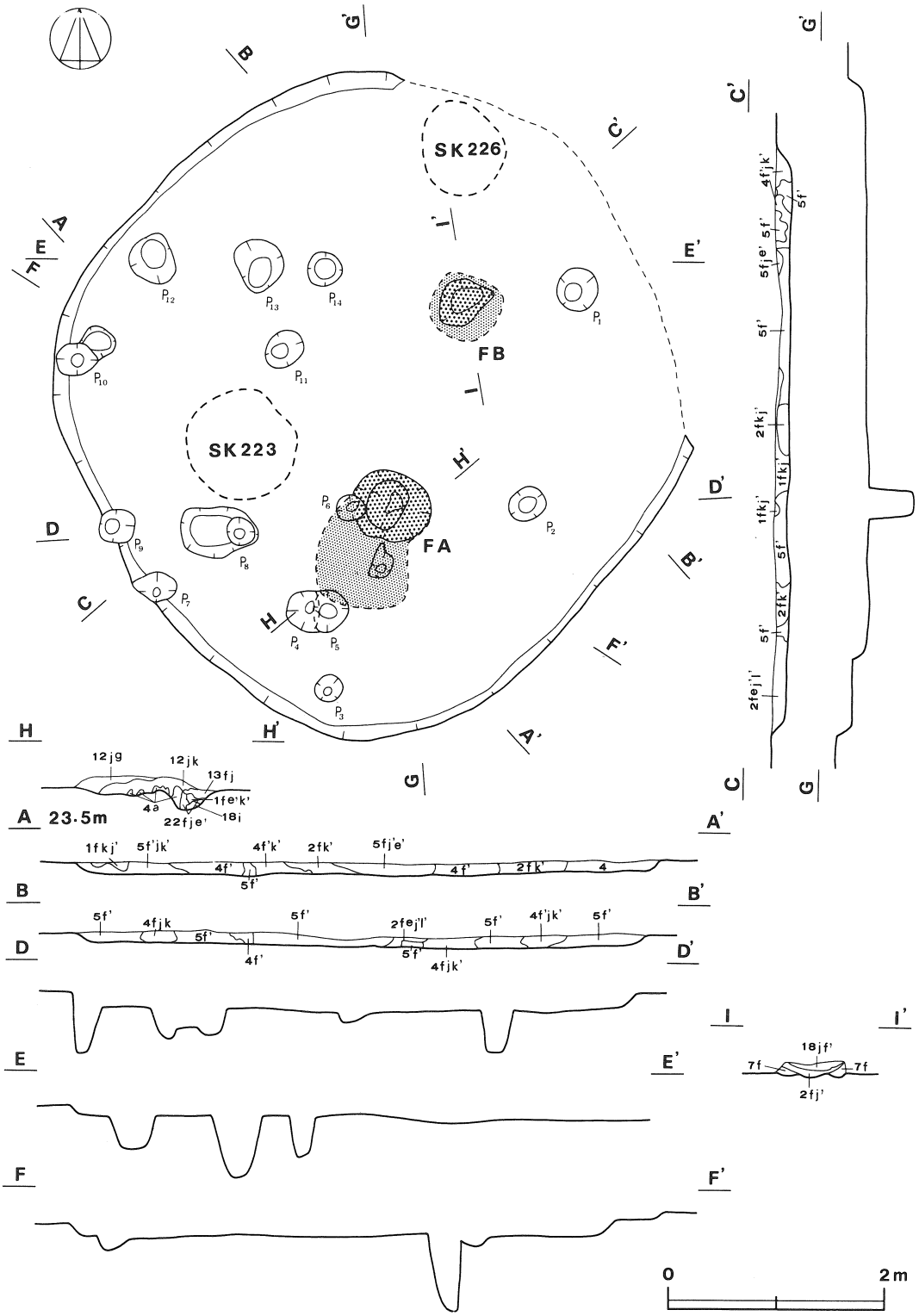
平面形は，重複のため径６ｍ（推定）の円形状と思われる。壁はロームブロックを含むソフトロームで軟らかく，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，７～13cmである。床面はロームブロックを含みやや軟らかく，平坦である。ピットは14か所検出され，規模は径26～72cm・深さ14～63cmである。しかし，不規則な配列のため，主柱穴は判別できない。炉は本跡のほぼ中央から２基検出されている。ＦＡは径60cm・深さ11cmの円形，ＦＢは径50cm・深さ15cmの不整円形である。ＦＡは地床炉で，炉床がよく焼け，炉の覆土にも焼土量が多いが，ＦＢも地床炉だが，炉床もそれほど焼けておらず，炉の覆土には焼土量が少ない。

覆土は７層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。自然堆積である。大部分の層が締まっている。

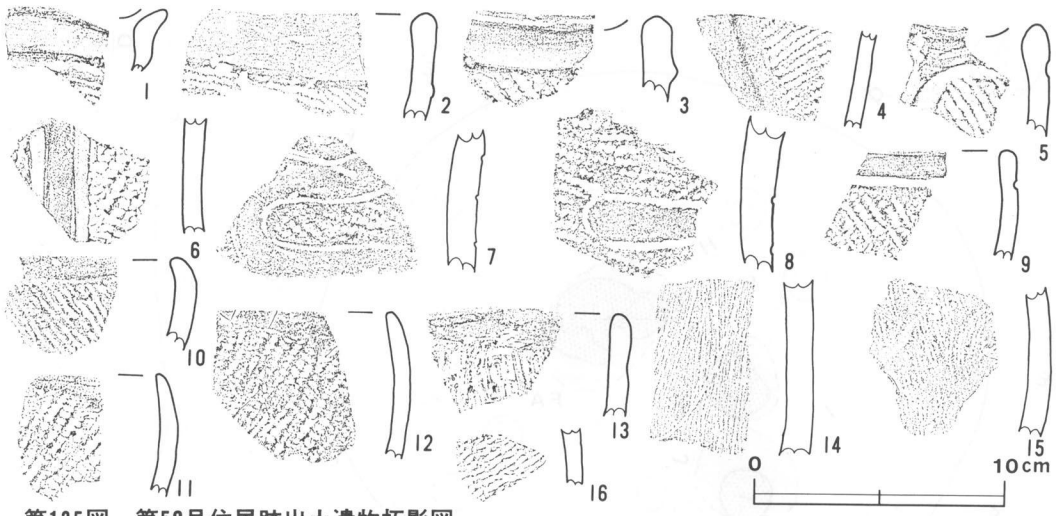
遺物は，縄文土器片及び石器が覆土から少量，床面から８点出土している。

第50号住居跡出土土器（第135図１～16）

１は，小形の波状縁を呈する口縁部片で，口唇部は外反りしている。口縁部無文帯はナゾリが強く，以下に縄文が施されている。２・３は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文を施している。３の口唇部に沈線状の施文がみられるが，ナゾリによるもので沈線ではない。４は，微隆線による区画が施されている胴部片で，胎土に長石，石英粒を多量に混入している。５は，波状の口縁部片で，沈線で楕円区画文が施され，区画内には無節縄文が充填されている。６は，胴部片で幅の狭い磨消帯が垂下している。７・８は，やや厚手の胴部片で，同一個体と思われるが接合はできなかった。縄文地文上に細い沈線で曲線的モチーフを描き，モチーフ内を磨消している。９は，口縁部の幅の狭い無文帯を１条の沈線で区画し，以下に縄文が施されている。10は，口縁直下にわずかの無文帯を残し，以下全面に無節縄文が施文されている。11・12も，口縁直下にわずかの無文帯を有し，以下全面に縄文が施されている。13は，作りの粗雑な口縁部片で，縦位の雑



第134図　第50号住居跡実測図



第135図　第50号住居跡出土遺物拓影図

な条線文が付されている。14～16は，A炉内から出土した胴部片で，本跡の時期決定に役立つものである。14は，細い条線文が施されたものである。15・16は，無節縄文が付されている。

本跡から出土した土器は，少ないが加曽利EⅢ式期のものが主体であり，わずかに加曽利EⅣ式期のものも含まれている。本跡の時期決定は困難であるが，加曽利EⅢ式期と推定される。

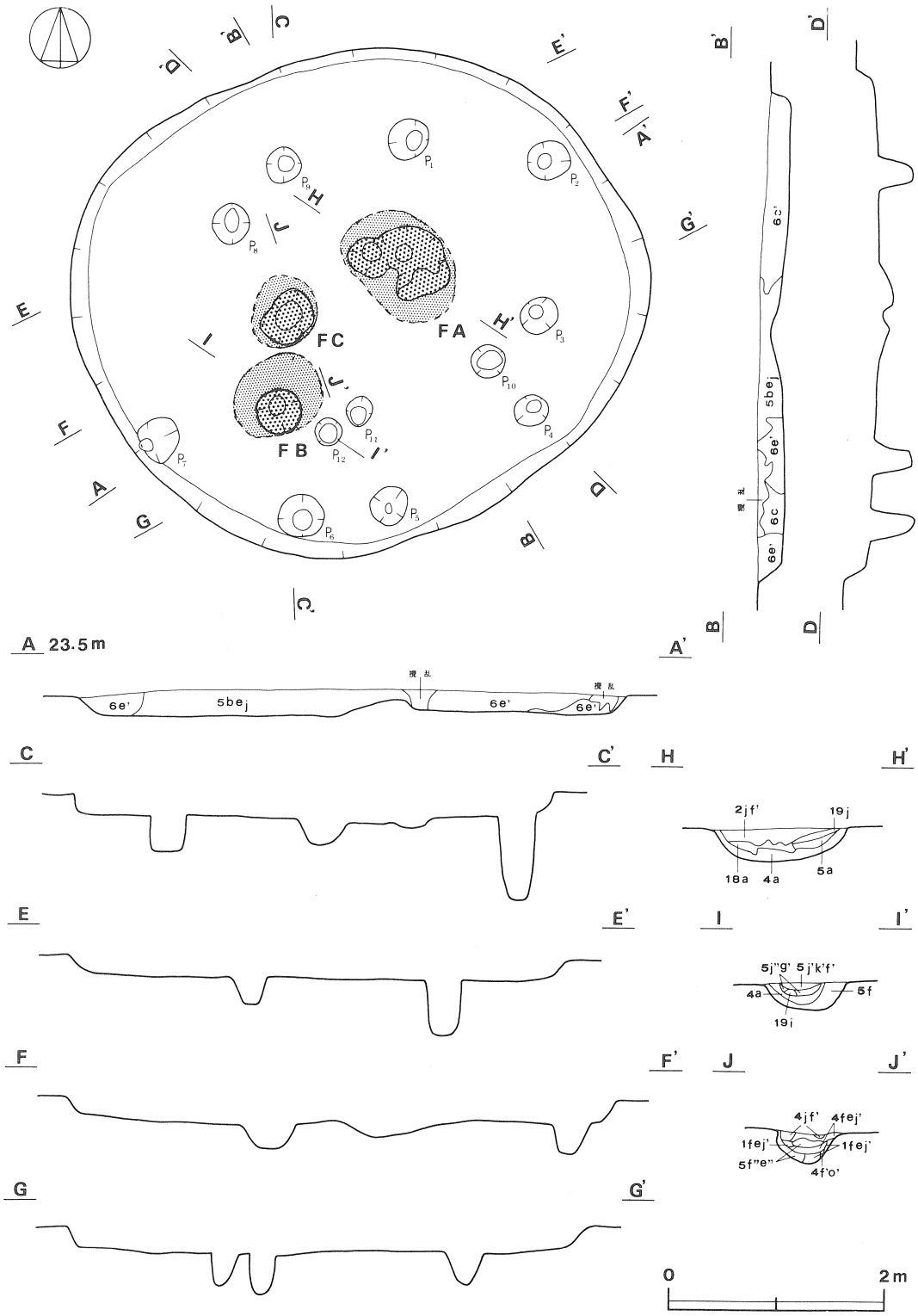
第51号住居跡（第136図）

本跡は，遺跡の中央部H5b$_2$区を中心に確認されたもので，第49号住居跡の南側５ｍに位置している。

平面形は，長径5.4・短径4.6ｍの楕円形で，長径方向は，N－82°－Eを指している。壁はローム粒子を含み軟らかく，北壁が床面から垂直に立ち上がっているほかは，外傾して立ち上がっている。壁高は，14～21cmである。床面はロームブロックを含みよく締まった床で，平坦である。ピットは12か所検出され，規模は径20～44cm・深さ27～80cmである。P_2・P_3・P_5・P_7・P_9は深さが一定しており，炉を囲んで五角形に配列されているので，主柱穴と思われる。炉は，本跡のほぼ中央から３基検出されている。ＦＡ・ＦＣは地床炉であり，ＦＢは土器埋設炉である。ＦＡ・ＦＣは炉床がよく焼けているが覆土には焼土量が少ない。ＦＢは深鉢の胴部を使用したもので，土器埋設のため炉壁は焼けておらず，覆土には焼土量が少ない。炉間は30～50cm離れている。

覆土は４層で，すべて褐色土である。全層とも締まっている。

遺物は，縄文土器片及び石器が覆土から72点，ＦＡの覆土から３点出土している。



第136図　第51号住居跡実測図

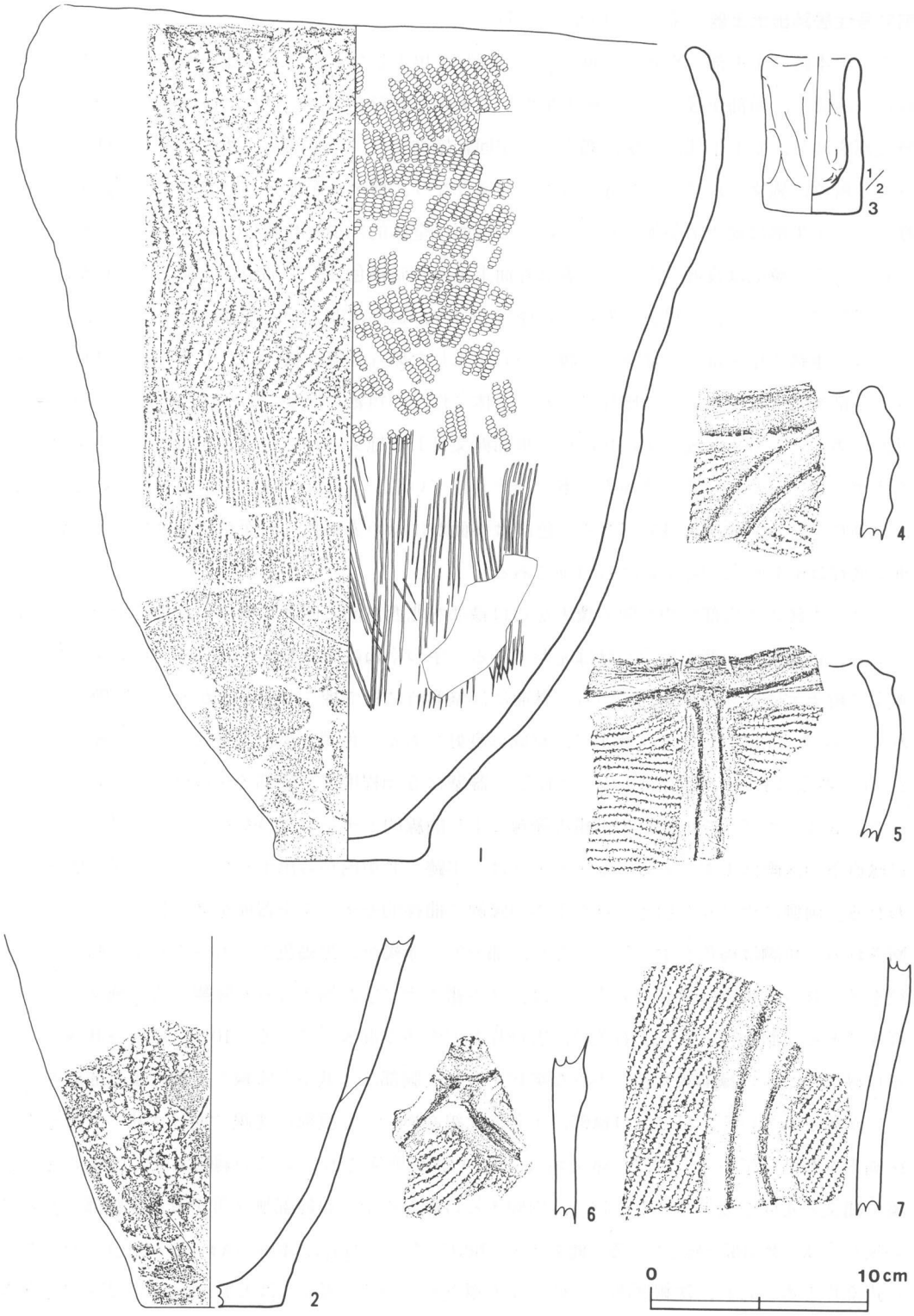
第51号住居跡出土土器（第137～139図１～44）

１は，本跡の中央部やや北側の覆土から一括して出土したもので，ほぼ完形に復元できた。口縁部が内湾し，頸部が緩くくびれ胴下半部が若干張る器形を呈している。口縁部直下にわずかに無文部を残し，胴上半部には単節縄文ＲＬが回転施文され，下半部には多截竹管状工具による条線文が縦位に施文されている。底面近くは無文となり，横ナデが加えられている。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが加えられている。器面は全体的に少し磨滅している。胎土に小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面上半部が暗褐色，下半部が２次加熱のためか，茶褐色を呈している。内面は褐色である。口径は29.1cm，器高は38.5cm，底径は6.7cmである。

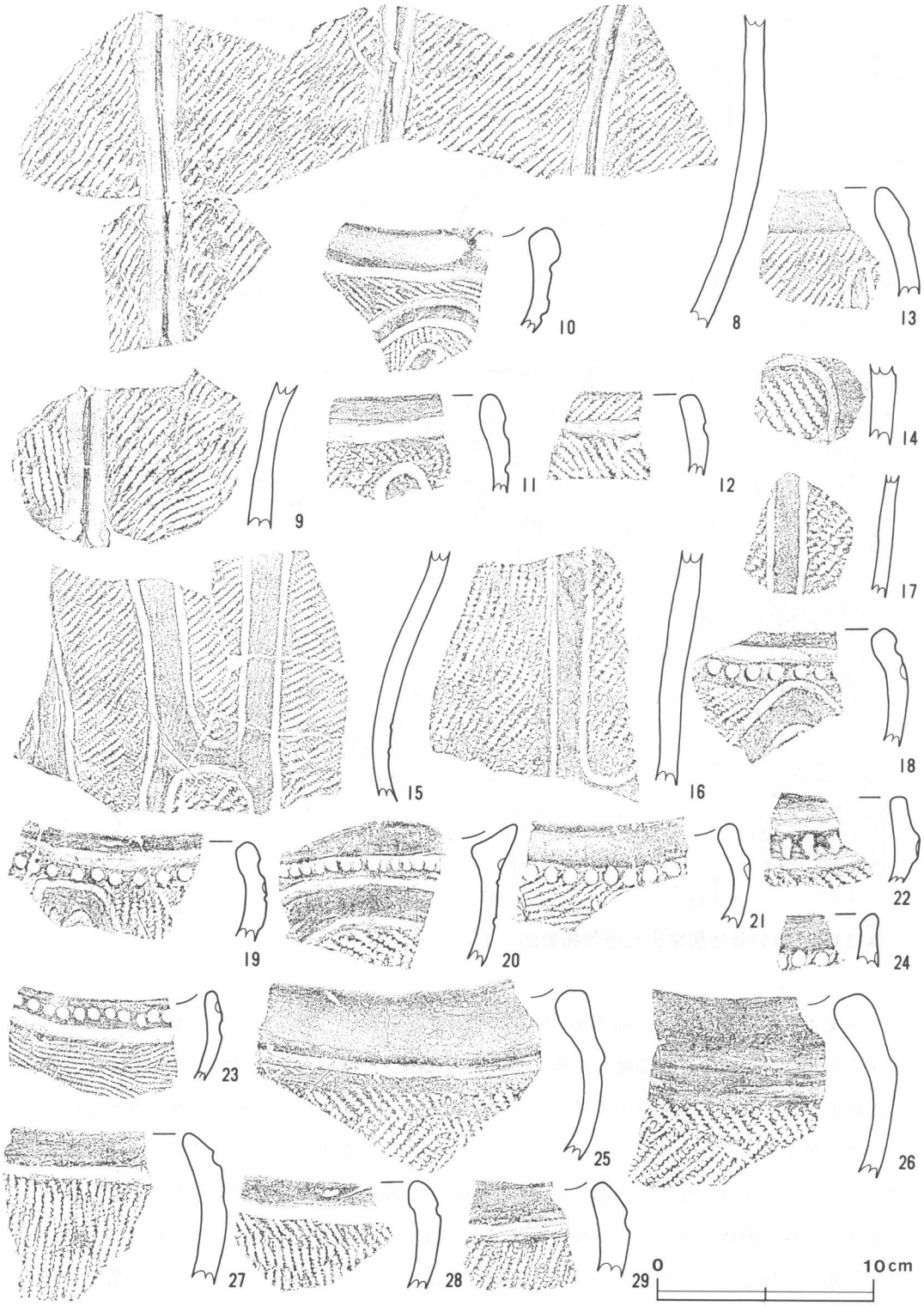
２は，本跡の中央部やや北東側の覆土から出土した破片15点が接合したもので，深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。全体に作りが粗雑で厚手であり，凹凸が激しい。特に外面は著しい。外面は縦ナデの後に粗い単節縄文ＲＬが施文されている。底面近くの４cmほどは横ナデが加えられている。底面も丁寧にナデられている。内面は，縦ナデが施されている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面がにぶい赤褐色，内面が暗褐色を呈している。推定底径は6.4cmで，現存高は17.1cmである。

３は，本跡の中央部やや北側の覆土から口縁部を北西方向に向けて横位の状態で出土したものである。口縁部の一部を欠くがほぼ完形である。手づくねによる整形で，コップ形を呈している。無文で縦ナデにより調整されている。外面には整形時に指で押した痕が４か所ほど明瞭に認められる。胎土には微砂を含み緻密で，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は2.6cm，器高は4.8cm，底径は2.9cmである。器壁は５mm程度で，底部の付近は６mmぐらいである。

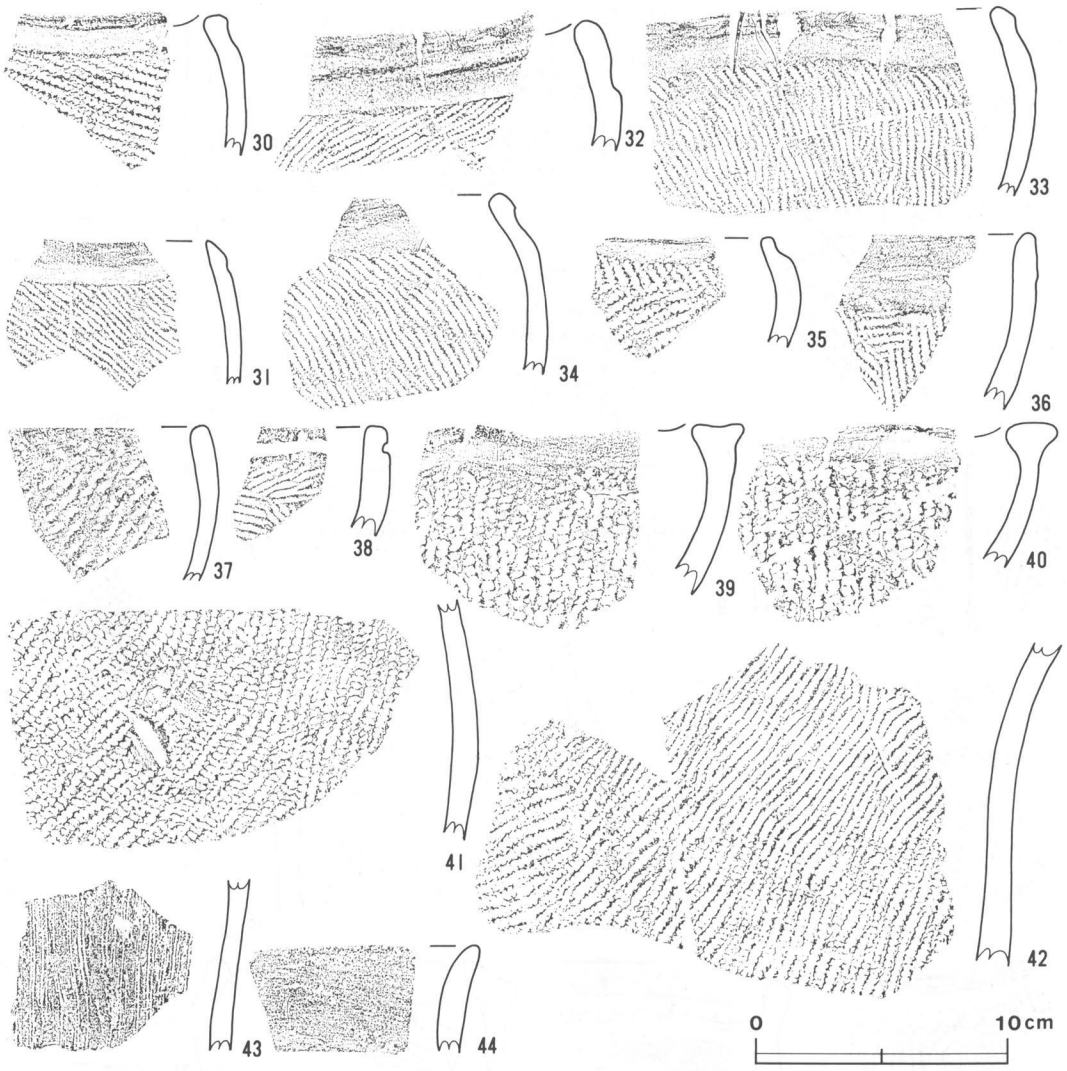
４・５は，ナゾリを加えた２本組の隆線により曲線的モチーフが描かれている口縁部片で，但し，口縁直下の区画は１本である。６・８・９は，本跡のＢ炉内から出土したもので，同一個体と思われる。両側にナゾリが加えられた１本の隆線で曲線的モチーフを器面全体に展開する土器と判断される。色調は褐色を主としているが，部分的に赤褐色，黒褐色の所もみられる。胎土には砂粒を多く含み，焼成は良好である。７は，２本組のナゾリが加えられた隆線による施文をもつ胴部片である。胎土には長石，石英粒，雲母片などを多く混入している。10は，緩い波状縁を呈する口縁部片で，口縁部無文帯に小さな突起を有し，胴部には低平な隆線と沈線による曲線的モチーフが施されている。11は，口縁部に１条の沈線を巡らし，胴部に沈線で逆Ｕ字状の文様を描き，区画内を磨消している。12は，縄文地文上に沈線が施文されている口縁部片で，１条の沈線を境に縄文の走向を変えている。13は，内傾する口縁部片で，口縁部無文帯を有し，胴部に幅の狭い逆Ｕ字状の磨消帯を施している。縄文は15に類似している。14は，本跡のＡ炉内から出土したもので，口辺部片と考えられ，沈線区画内に縄文が充填されている。胎土には大量の長石粒や雲母片を含み粗い。15は，胴部片でいわゆるＨ字状の磨消帯を施し，区画外には整った単節縄文ＲＬが縦位回



第137図　第51号住居跡出土遺物実測図・拓影図　(1)



第138図　第51号住居跡出土遺物拓影図　(2)



第139図　第51号住居跡出土遺物拓影図　(3)

転で施文されている。16は，幅の狭い磨消帯を有する胴部片である。17は，沈線による施文を主とする胴部片で，薄手で複節縄文を施している。18は，口縁部に円形刺突文列と１条の沈線を施し，胴部には沈線による曲線的モチーフが描かれている。19は，18と同一個体と考えられる。20～24は，刺突文が特色となる口縁部片である。20は，緩い波状を呈する口縁部片で，口唇部は内削ぎ状を呈して尖り気味で，内面は肥厚している。口縁部に１条の刺突文列を巡らし，以下には２本組の沈線で曲線的モチーフが描かれている。21は，口縁部無文帯下に円形刺突文列を巡らし，以下に縄文が施されているが，わずかに沈線文も認められる。22は，口縁直下の突帯上にキザミ目状の刺突文を付し，以下に縄文が施されている。23は，口縁直下に円形刺突文列と１条の沈線

を巡らし，以下は条が横走する縄文が施されている。24は，口縁部無文帯下に円形刺突文が巡らされているものである。25・26は，口縁部無文帯をナゾリを加えた隆線により区画し，以下に縄文を付している。27～35，38は，口縁部無文帯を１条の沈線ないし凹線で区画し，以下に縄文を施している。27の縄文は，条が縦走している。28の縄文も条が縦走気味である。30～35は，口縁直下に浅い凹線を巡らし，以下に縄文を施している。31は，薄手で内傾する口唇部は尖っている。32の凹線は，浅く幅が広いものである。33・34は，同一個体と思われるが，接合はできない。35は，内湾が著しい。36は，口縁部に無文帯を有し，以下に縄文が施されている。37は，全面に縄文が施されている口縁部片である。38の沈線は深く明瞭で，無節縄文が付されている。39・40は，口縁直下にわずかの無文帯を残し，以下に粒の粗い単節縄文ＲＬが，条が縦走するように施文されている。口唇部の一部が突出し，肥厚している部分がみられる。41・42は，縄文だけが施された胴部片で，42はくびれ部である。41の胎土には長石粒，雲母片を多く含んでいる。43は，条線文が縦位に施された胴部片である。44は，無文の口縁部片である。

本跡から出土した土器の大半は，加曽利ＥⅢ式期のものであり，Ｂ炉内から出土した土器も隆線による施文が主となっており，加曽利ＥⅢ式期のものと考えられるので，本跡の時期は加曽利ＥⅢ式期と推定される。

第52号住居跡（第140図）

本跡は，遺跡の中央部H5c_4区を中心に確認されたもので，第51号住居跡の東側３ｍに位置している。

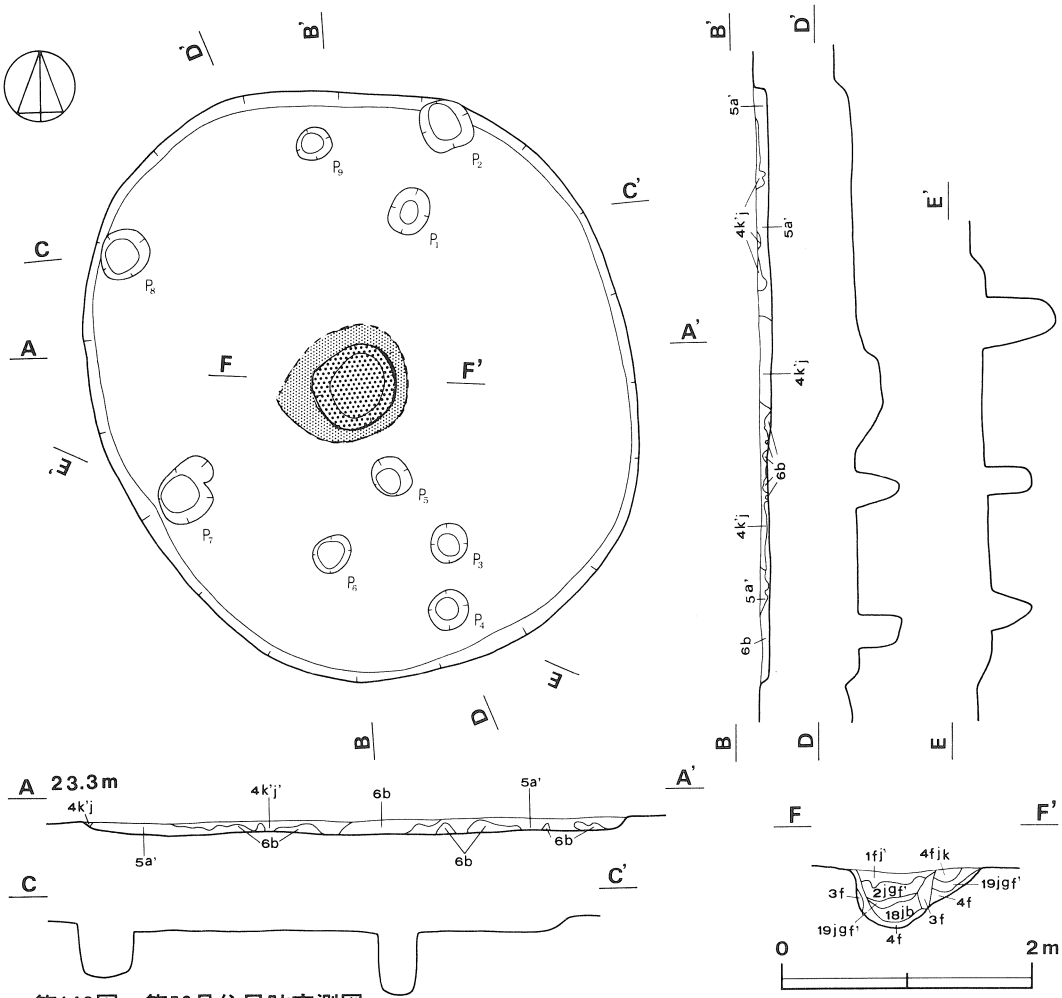
平面形は，長径4.8ｍ・短径4.2ｍの楕円形で，長径方向は，Ｎ－28°－Ｗを指している。壁はロームブロックを含み軟らかく，南壁だけ床面から外傾しているほかは，垂直に立ち上がっている。壁高は，10～12㎝である。床面はロームブロックを含み軟らかく，平坦である。ピットは９か所検出され，規模は径30～42㎝・深さ33～58㎝である。不規則にならんでいるので，主柱穴は判別できない。炉は，本跡の中央に検出され，径70㎝の略円形で，床面を21㎝掘り凹めた地床炉である。炉床はよく焼けており，長期間の使用がうかがえる。

覆土は３層からなり，すべて褐色土が自然堆積している。３層とも締まっており，下層には粘性がある。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第52号住居跡出土土器（第141図１～19）

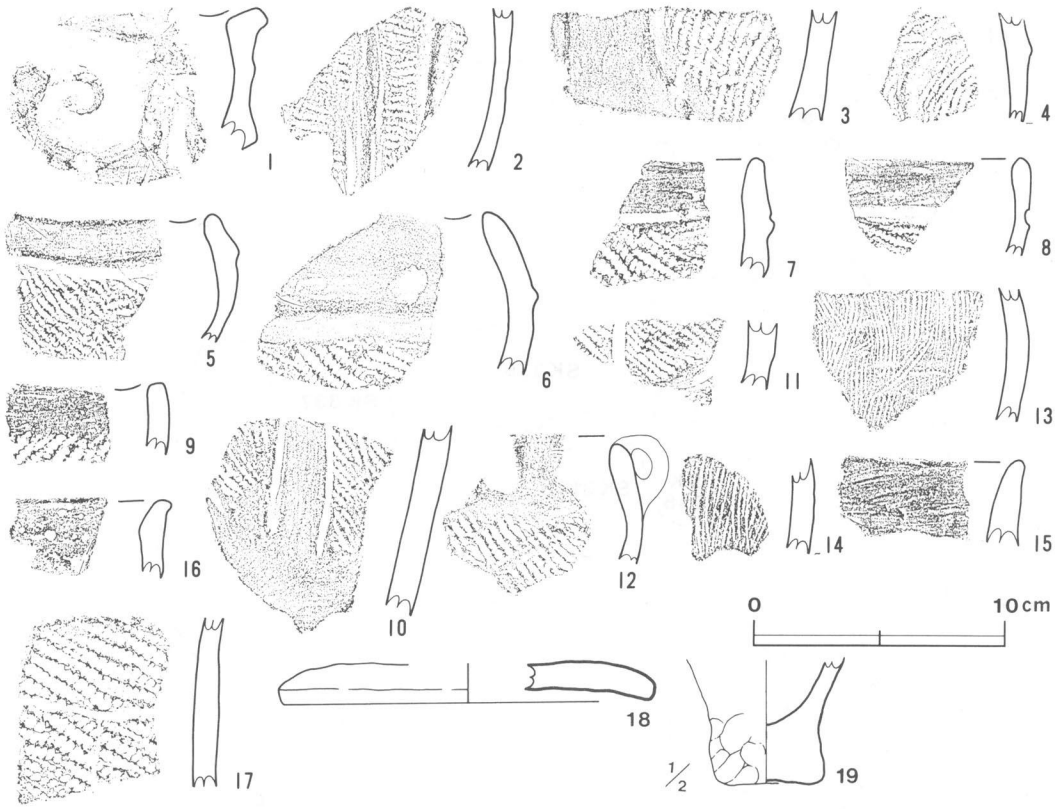
１は，隆線による渦巻文が施されている口縁部片である。２～４は，隆線による施文が主となっている胴部片である。２は，薄手で隆線が垂下している。３・４は，細い隆線による曲線的モ



第140図　第52号住居跡実測図

チーフが描かれている。2・4・5・14は，炉内から出土したもので，本跡の時期決定に役立つものと思われる。5は，口縁部に無文帯を有し，以下に縄文が施されている。6は，幅の広い口縁部無文帯を1条の隆線で区切り，以下に縄文が施されている。7～9は，5・6とほぼ同様のもので，口縁部に無文帯を有し，以下に縄文が付されている。7・8は，1条の沈線で無文帯を区画しているが，9は区画していない。10は，胴下半部片で，細い沈線による直線的磨消懸垂文が垂下している。11は，縄文地文上にU字状の沈線が付されている胴部片である。12は，口縁部に無文帯を残し，以下に無節縄文が施されているが，無文帯をまたぐよう小さな橋状把手が付されている。13・14は，条線文が付された胴部片で，13は曲線的に，14は縦位に施文されている。15・16は，無文の口縁部片で，16の内面には稜を有している。17は，縄文だけが施された胴部片である。

18は，本跡の覆土から出土したもので，蓋形土器と思われる。外面は横ナデ，内面は斜方向の



第141図　第52号住居跡出土遺物実測図・拓影図

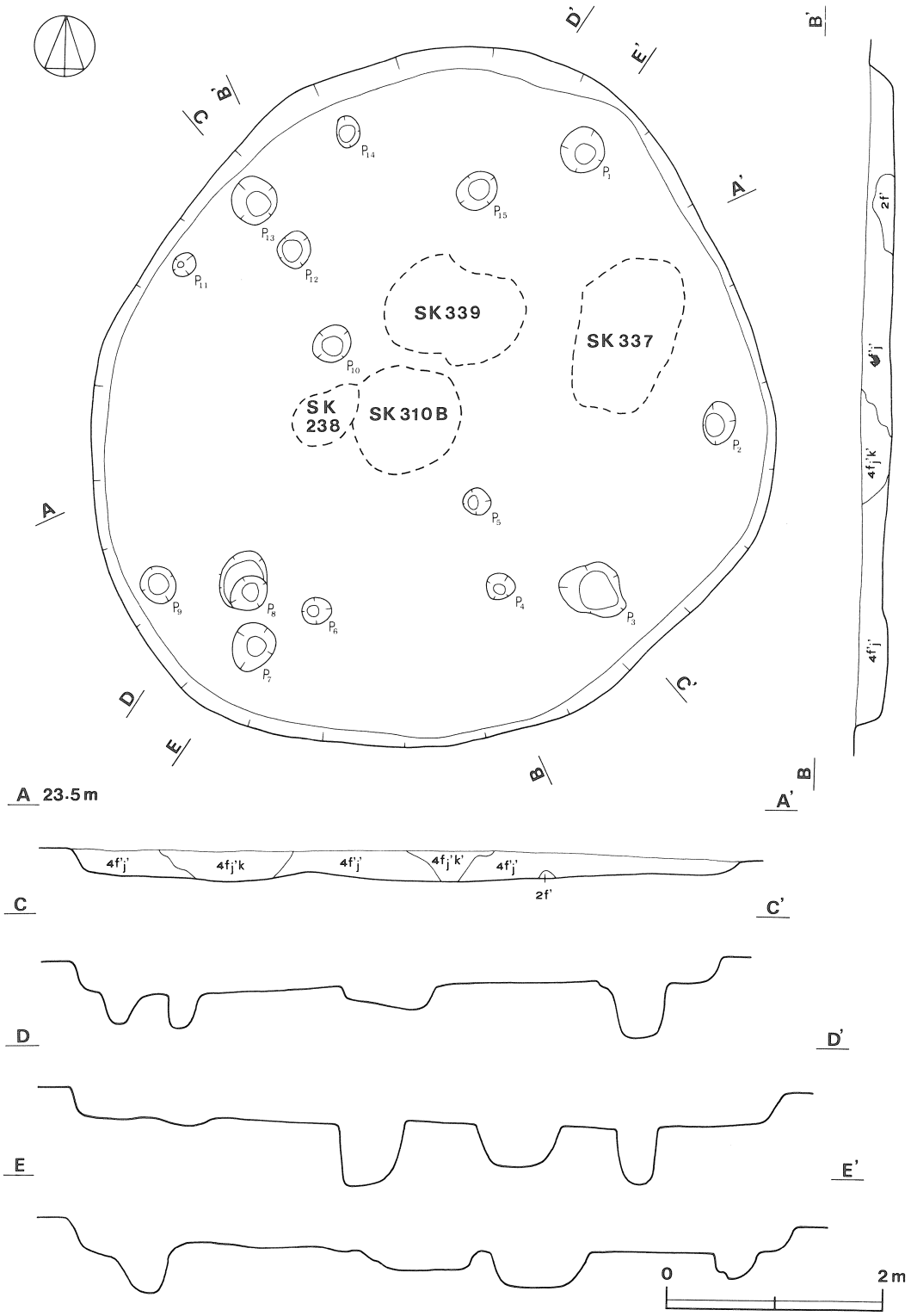
ナデが加えられている。胎土には微砂を混入しており，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は9.7cmで，現存高は1.1cmである。

19は，本跡のピット４内から出土したもので，小さな手づくね土器である。底部が部厚く，1.5cm程の器厚を有している。底面は，若干凹んでいる。外面は縦ナデが雑に施されているが，凹凸が著しい。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈しているが，底部は暗褐色である。底径は2.3cmで，現存高は3.3cmである。

本跡から出土した土器は，少ないが大半は加曽利ＥⅢ式期のものである。また，本跡の炉内から出土した土器片も加曽利ＥⅢ式期のものと考えられる。これらから判断して，本跡の時期は加曽利ＥⅢ式期と思われる。

第53号住居跡（第142図）

本跡は，遺跡の中央部H4b_0区を中心に確認されたもので，第44号住居跡の南東側18mに位置している。中央の床面で310Ｂ・337・238・339号土壙と重複している。土壙との新旧関係は不明である。



第142図　第53号住居跡実測図

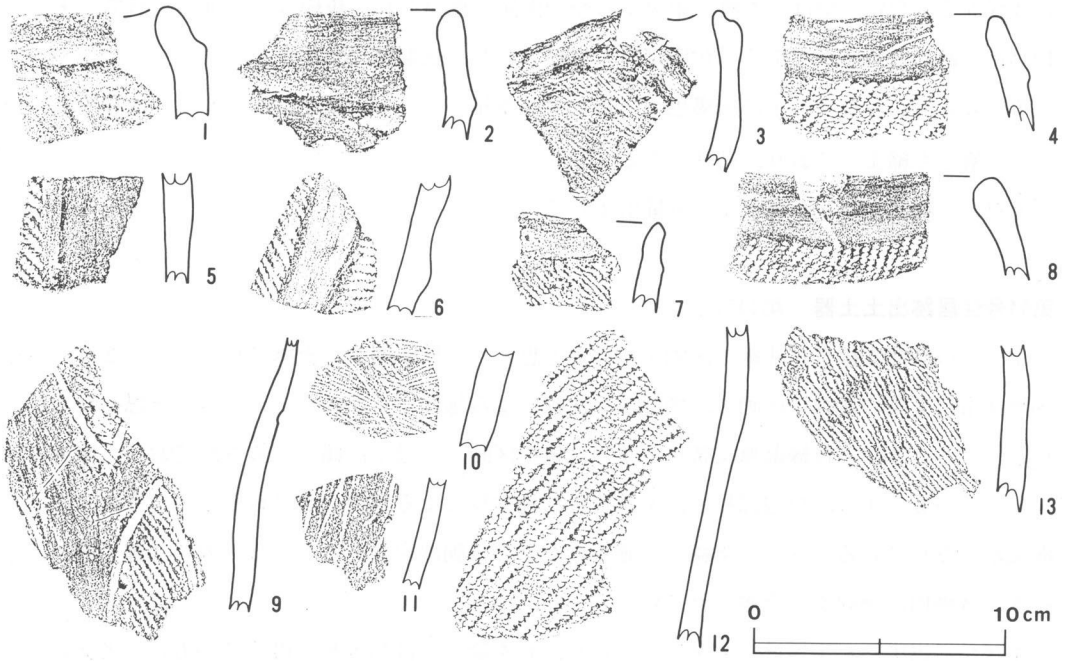
ームブロックを含み軟らかく，北壁を除いて床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，14～31cmである。床面はロームブロックが混入し軟らかであるが，4基の土壙と重複しているので，凹凸が著しい。また，南西壁際は10cm低くなっている。ピットは15か所検出され，規模は径26～68cm・深さ13～34cmである。P_1～P_3・P_8・P_{13}は深さが一定しており，五角形に配列されているので，主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

覆土は3層からなり，すべて褐色土で，自然堆積である。全層とも締まっている。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第53号住居跡出土土器（第143図1～13）

1は，波状を呈する口縁部片で，微隆線による区画内に縄文を充填している。2は，幅の広い口縁部無文帯をもち，胴部には隆線でモチーフが構成されると思われる。胎土に長石粒などが多く含まれており粗く，色調は暗褐色を呈している。3は，波頂部片で，口唇部は薄く尖り気味である。口縁部に無文帯を残し，以下全面に無節縄文が軽く押捺されている。4・7・8は，平縁の口縁部無文帯を有する土器片で，以下全面に縄文が施されている。無文帯と縄文との境は，ナゾリにより4は微隆線状を呈し，7・8は凹線状を呈している。4は単節，7は無節，8は複節の縄文が付されている。5は，本跡のピット15から出土したもので，区画のための微隆線が垂下している胴部片である。6も，微隆線による区画を有する胴部片で，内面は剝落が著しい。9は，



第143図　第53号住居跡出土遺物拓影図

胴部のくびれ部片で，Ｖ字状，逆Ｖ字状の沈線文が上下に分かれて描かれ，区画内に縄文が充塡されている。10は，縄文と条線文が併用された胴部片で，無節縄文の後に条線文が重ねられている。11は，薄手の胴部片で，粗い沈線文が施されている。12・13は，縄文だけが施された胴部片で，13は無節縄文Ｌが縦位回転で施文されている。

本跡から出土した土器は，全体で30点ほどで少ないが，微隆線による施文が目立ち，加曽利ＥⅣ式期のものと考えられる。ピット15から出土した破片も加曽利ＥⅣ式期のものである。他にピット２の底面近くから小形磨製石斧１点が出土している。本跡の時期は，加曽利ＥⅣ式期と推定される。

第54号住居跡（第144図）

本跡は，遺跡の南部H4g_6区を中心に確認されたもので，第53号住居跡の南西側18ｍに位置している。南西側で第50号住居跡，北東側で第46号住居跡と重複している。前記したように，第46号住居跡との新旧関係は不明であるが，第50号住居跡とでは本跡の方が古い。

平面形は，重複のための長径5.9ｍ・短径5.0ｍ（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，Ｎ－63°－Ｗを指している。壁はロームブロックを含み軟らかく，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，７～15cmである。床面はロームブロックを含み踏み固められて硬く，平坦である。ピットは17か所検出され，規模は径32～60cm・深さ20～60cmである。不規則な配列のため，主柱穴は判別できない。炉は，本跡の中央からやや南側に検出され，規模は径46cmの円形で，床面を12cm掘り凹めた地床炉である。炉床はよく焼けており，長期間の使用がうかがえる。

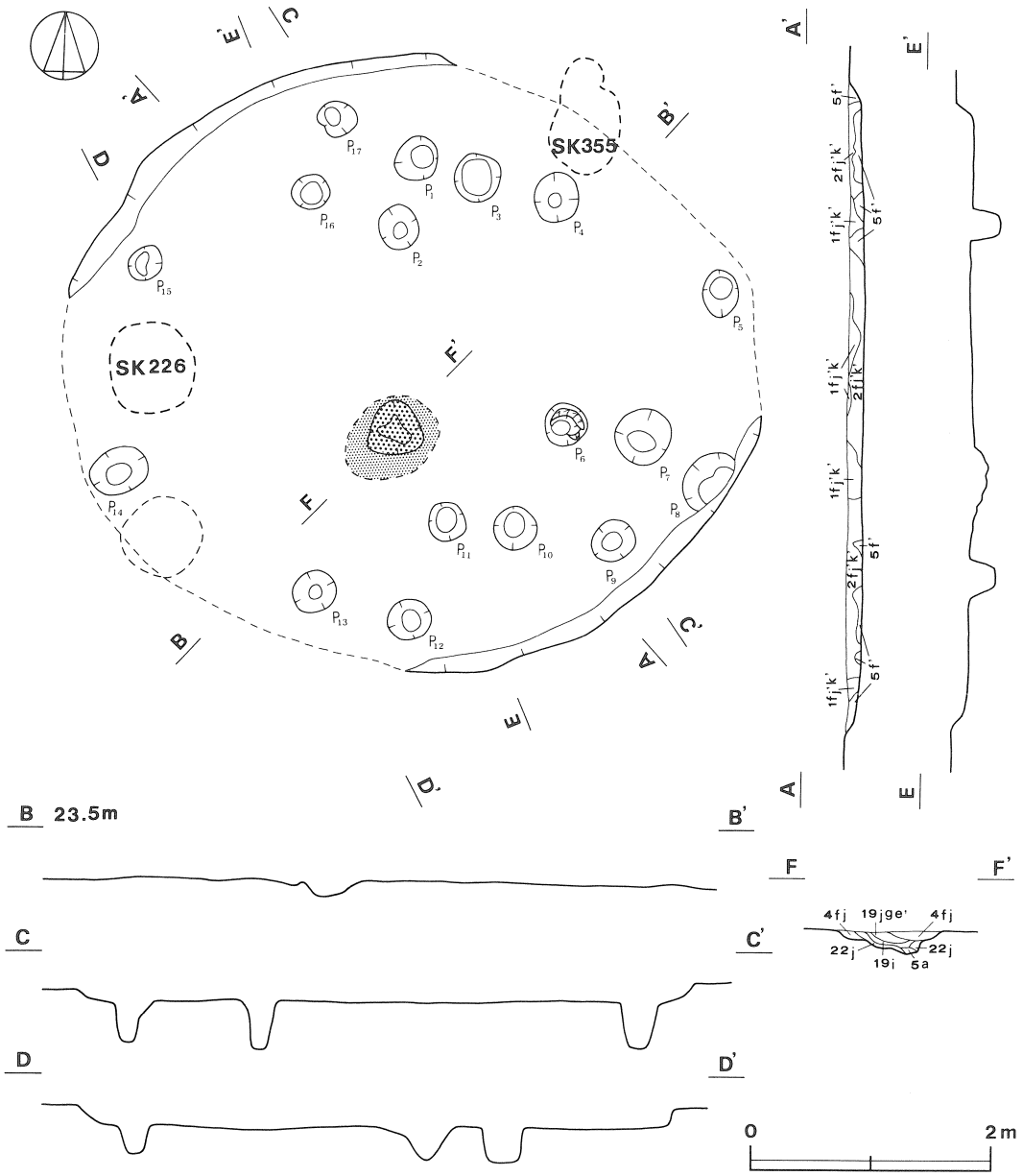
覆土は３層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。覆土は浅いが自然堆積をしている。３層とも締まっており，粘性がある。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

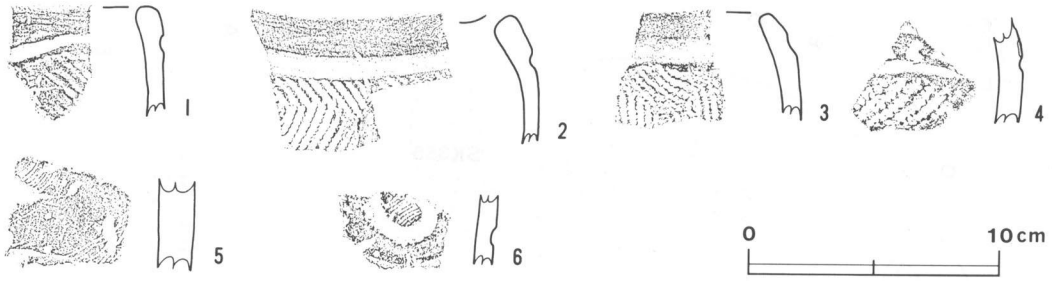
第54号住居跡出土土器（第145図１～６）

１は，口縁部文様帯を沈線で区画するものと思われ，無節縄文が充塡されている。２は，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，胴部には沈線による施文が行なわれているものと思われるが欠損している。３は，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下に縄文が施されており，暗赤褐色を呈している。４は，口辺部片で，半截竹管状施文具による刺突文が口縁直下に付され，以下に縄文が施されている。５は，条線文が施された厚手の胴部片である。６は，太い沈線で曲線文を描き，区画内に細縄文が充塡されている。

本跡から出土した土器は，非常に少ないが，６を除いては加曽利ＥⅢ式期のものと考えられる。したがって，本跡の時期は加曽利ＥⅢ式期と推定される。



第144図　第54号住居跡実測図



第145図　第54号住居跡出土遺物拓影図

第55号住居跡（第146図）

本跡は，遺跡の南部I4i_9区を中心に確認されたもので第46号住居跡の南側27mに位置している。

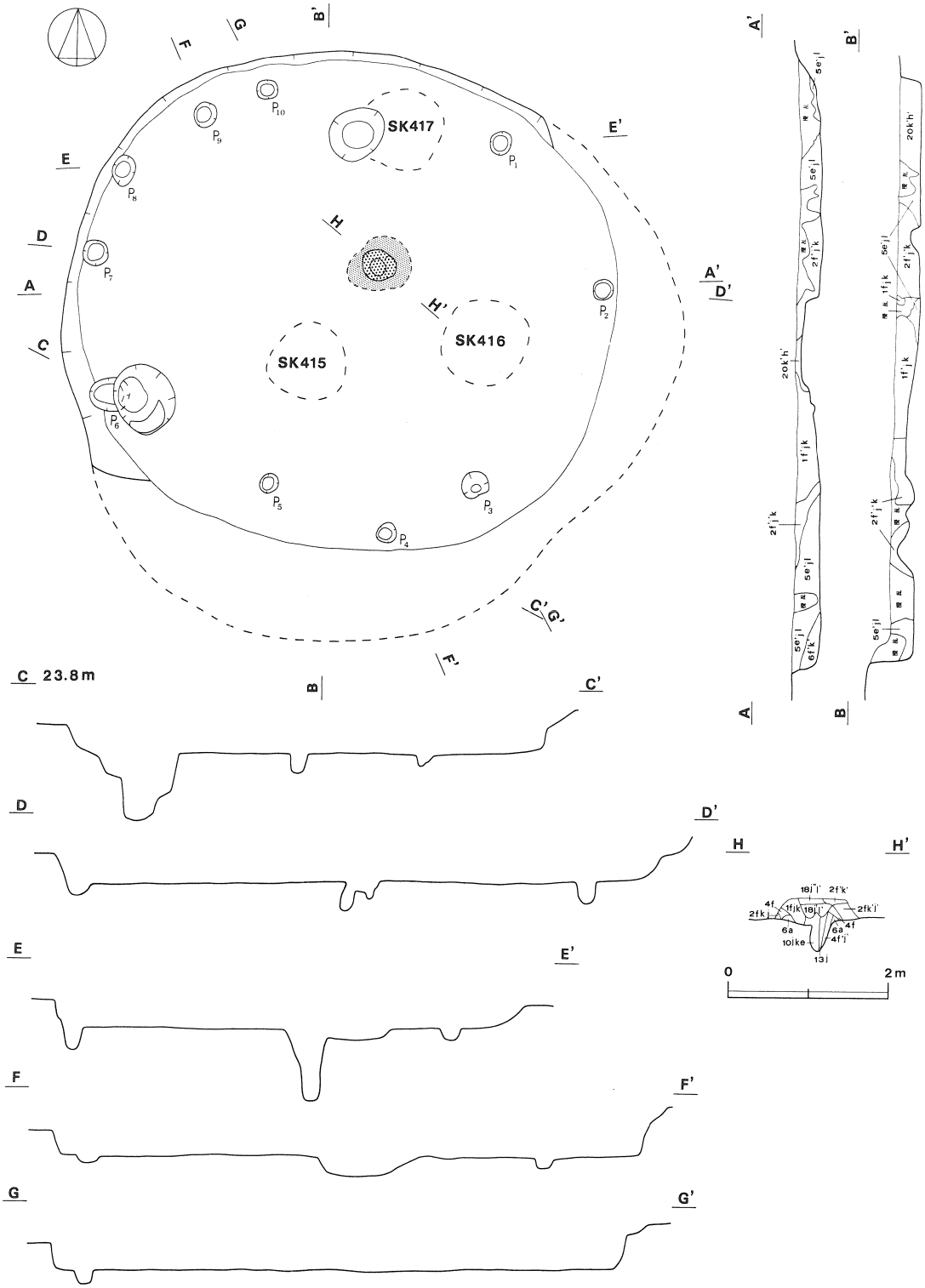
本跡を調査中に，床面から20cmほど高いレベルに焼土層と焼土塊が検出された。また，床面には２種類のピット群が検出された。このことから，２軒の住居跡の重複であると判断し，大形のピットと床面をもつ住居跡を第74号住居跡とし，小形のピットと高いレベルにある炉（焼土層および焼土塊）をもつものを第55号住居跡（本跡）として調査を進めた。したがって，本跡からは炉とピットだけが検出され，壁や床面などは検出されていない。第74号住居跡との新旧関係は，本跡の炉が第74号住居跡の覆土内にあるので，本跡の方が新しいことは明白である。

平面形は，ピットが検出された範囲から推定で径6.7mの円形状と思われる。ピットは第74号住居跡の床面に10か所検出され，規模は径24～50cm・深さ19～29cmである。壁にそって円形状に掘られたものと考えられる。深さは欠損した本跡の床面から測ると，もっと深かったと考えられる。炉は，本跡のほぼ中央に位置すると思われる。径40cmの円形で，10cm程皿状に掘り凹めた地床炉である。炉床と考えられる焼土塊はよく焼けており，炉の覆土には焼土が充満している。

遺物は，第74号住居跡と一緒にとり上げ，遺物の項で区別し掲載した。

第55号住居跡出土土器（第147～153図１～102）

本跡は，第74号住居跡および第75号住居跡と重複しており，調査の過程で，各住居跡に所属する遺物を明確に区別することができなかった。結果的にみれば，本跡と第74号住居跡は同心円状に重複しており，上位の炉を伴う本跡が新しく，下位の土器埋設炉を伴う第74号住居跡が古いことは確実である。しかし，調査の過程では，このことに気付かず２軒の住居跡の覆土から出土した土器の大半を第55号住居出土土器としてしまったことは遺憾である。したがって，本跡および第74号住居跡から出土した土器の実測図，拓影図の中に混在がみられる。なお，第75号住居跡に



第146図　第55号住居跡実測図

明確に伴う土器は認められなかったので図示していない。

以下，本跡から出土した土器について解説を加えていくが，本跡出土土器として取り扱った土器の大半は第74号住居跡に伴うものと考えられる。なお，本項で記載する床面，覆土という表現は特にことわらない限り第55号住居跡のものではなく，第74号住居跡のものであると理解していただきたい。

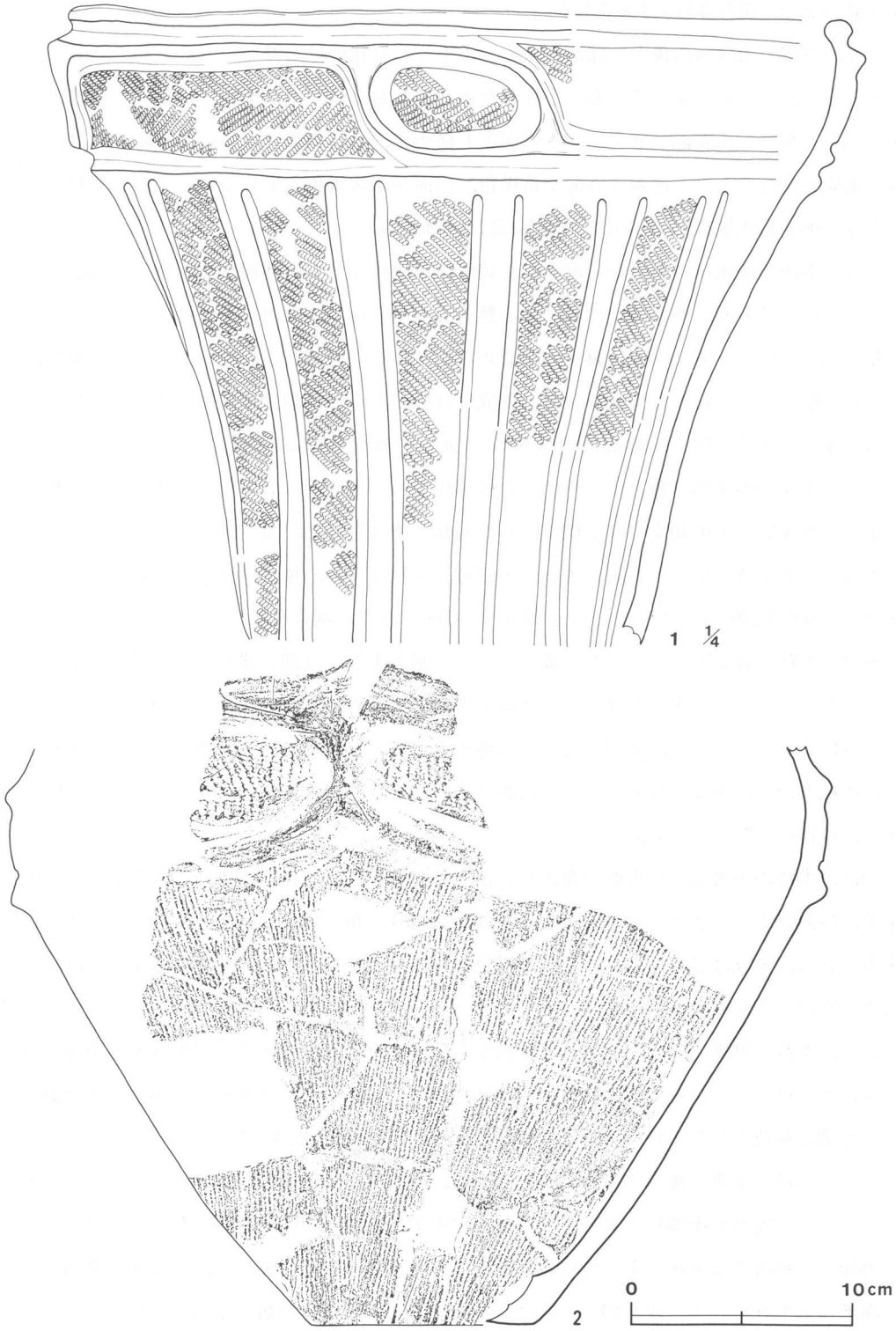
1は，本跡の南側の床面直上および覆土から出土した破片36点が接合したもので，キャリパー形深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての大破片である。口縁部文様帯は隆線で区画され，楕円文と長方形区画文の組みあわせにより構成されている。区画内には単節縄文ＬＲが羽状に充塡されている。胴部にはやや幅の狭い磨消懸垂文が垂下している。区画間には単節縄文ＬＲが縦位回転で施文されている。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが加えられている。胎土に小石粒，砂粒を混入し，焼成は良好である。色調は外面が灰色味の強い褐色，内面が橙色に近い褐色を呈している。推定口径は45.8cmで，現存高は37.8cmである。

2は，本跡の南側の覆土から出土した破片を中心に，南東側の覆土から出土した破片が接合し，器形がほぼうかがえるまでに復元された。鉢形土器で口唇部を欠損しているが，他は底部から口辺部まで残存している。口縁部文様帯は，隆線で楕円区画文を構成し，区画内に単節縄文ＬＲを縦位，斜位回転で充塡している。胴部には多截竹管状施文具による条線文が縦位に施されている。底面の近くは横ナデにより調整されている。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが加えられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗赤褐色を呈している。現存部の推定最大径は37.3cm，推定底径は10.3cm，現存高は25.8cmである。

3は，本跡の南側の覆土から出土した3点の破片が接合したものである。無文で内外面とも横ナデにより調整されている。口縁部無文帯の幅は広く，口縁部は外反している。胎土には石英粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈しているが，外面は少し赤味が強くなっている。推定口径は37.0cmで，現存高は8.0cmである。

4は，本跡の東側の覆土からまとまって出土した破片7点が接合したものである。ほぼ直線的に外傾する口縁部片で，全面に無節縄文が施文されている。口縁部にはわずかに炭化物が付着している。内面上半部は横ナデ，下半部は縦ナデが加えられている。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈しているが，外面の下半部は2次加熱を受けている。推定口径は21.2cmで，現存高は13.1cmである。

5は，本跡の南西側の覆土から出土した破片6点が接合したもので，深鉢形土器の口縁部片である。口縁部に幅約6.5cmの無文帯を有し，以下に縄文が施されている。器形は口縁部が内湾し，頸部が強くくびれ，内面に稜をもっている。無文帯および内面には横ナデが加えられている。胎土に砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が暗褐色，内面が褐色を呈している。推定口



第147図　第55号住居跡出土遺物実測図　(1)

径は34.3cmで，現存高は9.4cmである。

6は，本跡の南西側の覆土上部から正位で出土した有孔鍔付土器片である。約2cm幅の鍔部に下から上に向けて孔を穿っている。小片のため孔の数および配列は不明である。口縁部は直立気味である。胴部の現存部は無文で，内外面とも横ナデにより調整されている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が黄褐色，内面が暗灰褐色を呈している。内面の整形は丁寧である。推定最大胴径は41.4cmで，現存高は6.6cmである。

7は，本跡の南東側の覆土から出土した破片3点が接合した深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。外面には沈線による懸垂文が施され，区画内に単節縄文ＬＲが斜位，横位回転で施文されている。内面は縦ナデが認められているが磨滅が進んでおり，詳しい観察はでききない。胎土には小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は全体的に褐色を呈しているが，内面上半部は黒味が強く，外面は少し赤味が強い。推定底径は7.9cmで，現存高は9.5cmである。

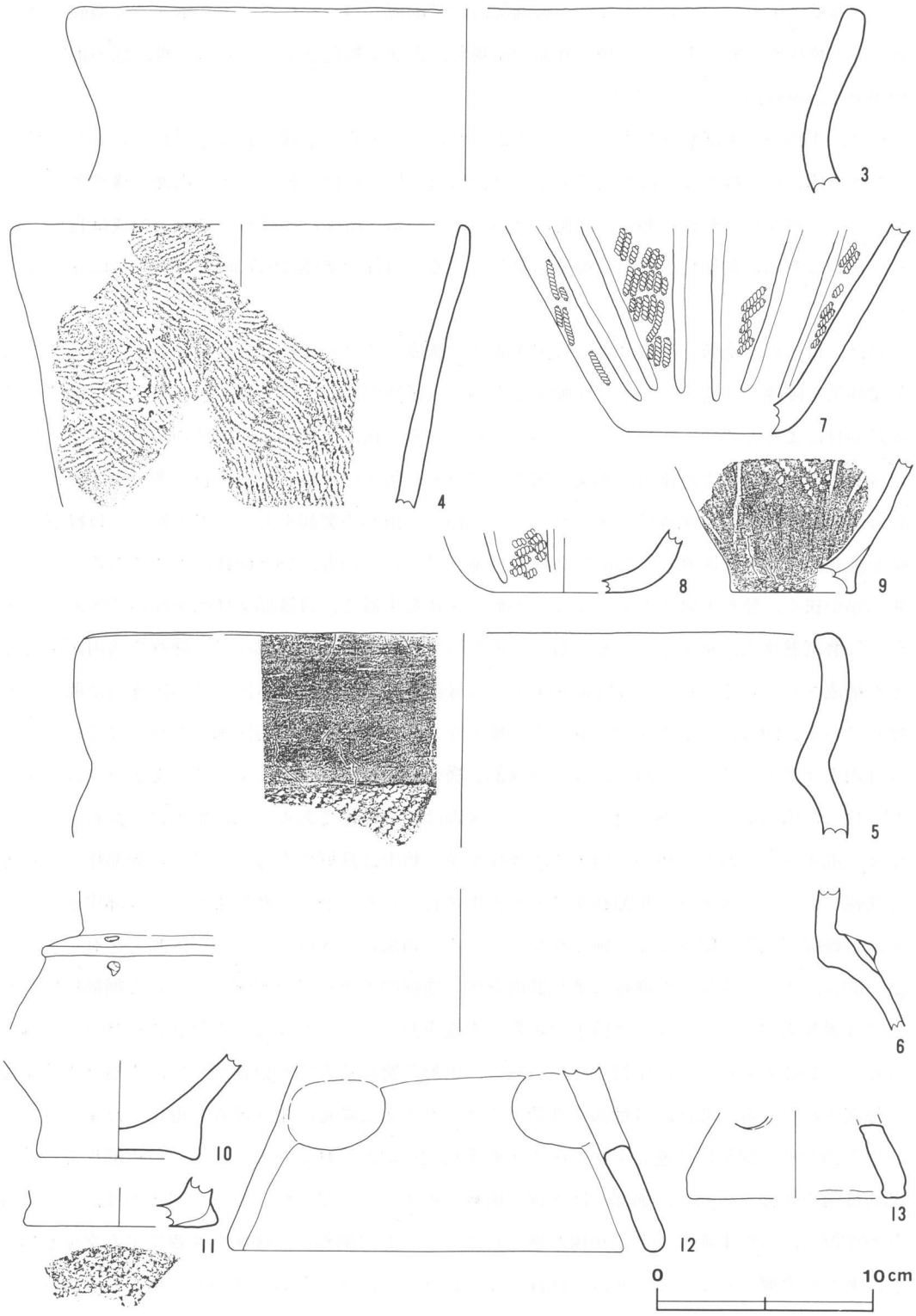
8は，本跡の南東側の覆土から出土した底部片である。外面に2本単位の沈線による懸垂文が垂下し，沈線間に単節縄文ＬＲが横位，斜位回転で施文されている。底部は少し丸味を有し，底面中央部は若干薄くなっている。胎土に小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。推定底径は6.3cmで，現存高は3.0cmである。

9は，本跡の覆土から出土した底部片である。胴下半部には細い沈線による磨消懸垂文が施されていたらしく，その末端と思われる沈線文と縄文が認められる。縄文は単節ＬＲである。以下には縦位のナデが施され，底面の近くには横ナデが加えられている。内面は縦ナデである。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色である。推定底径は5.8cmで，現存高は5.9cmである。

10は，本跡の中央部やや東側の覆土から出土した破片5点が接合した底部片である。外面は横ナデ，内面はナデが加えられている。底面は少し凹み，粗いナデが施されている。胎土には砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は褐色を主としているが，破片により赤褐色の部分もみられる。底径は7.5cmで，現存高は4.4cmである。

11は，本跡の東側のセクションベルト内から出土した底部片である。底部はやや突出気味で，底面に網代痕がみられる。内面は横ナデが施されている。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定底径は8.8cmで，現存高は2.3cmである。

12は，本跡の東側の覆土から出土した破片に，中央部やや南側の覆土から出土した小片が接合したもので，器台形土器片である。受け面などを欠損しているので全容は明らかではない。脚部は外傾し，脚端部は丸味をもっている。無文で，孔のない個所は縦ナデ，孔の下の個所は横ナデが顕著に施されている。現存部では孔は2か所であるが，全体の数や配列は不明である。孔は円形ではなく，楕円形を呈している。内面も孔の間は縦ナデ，孔の下は横ナデと整形方向を変えて

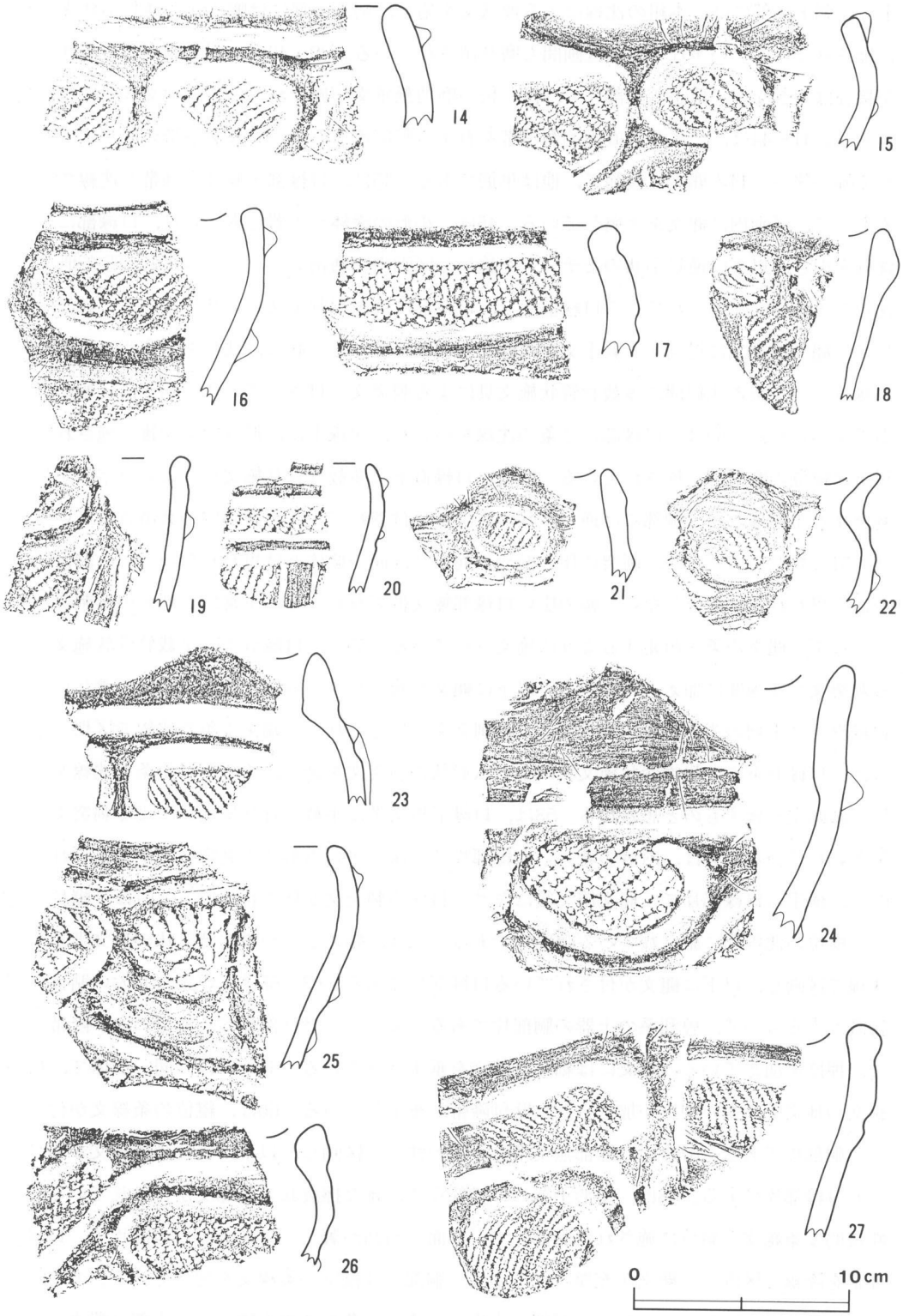


第148図　第55号住居跡出土遺物実測図　(2)

いる。器壁は上方に向けて厚くなり，脚端部は比較的薄くつくられている。胎土には微砂を含み緻密で，焼成も良好である。色調は外面が暗褐色，内面が褐色を呈している。脚端部の推定径は19.6cmで，現存高は8.5cmである。

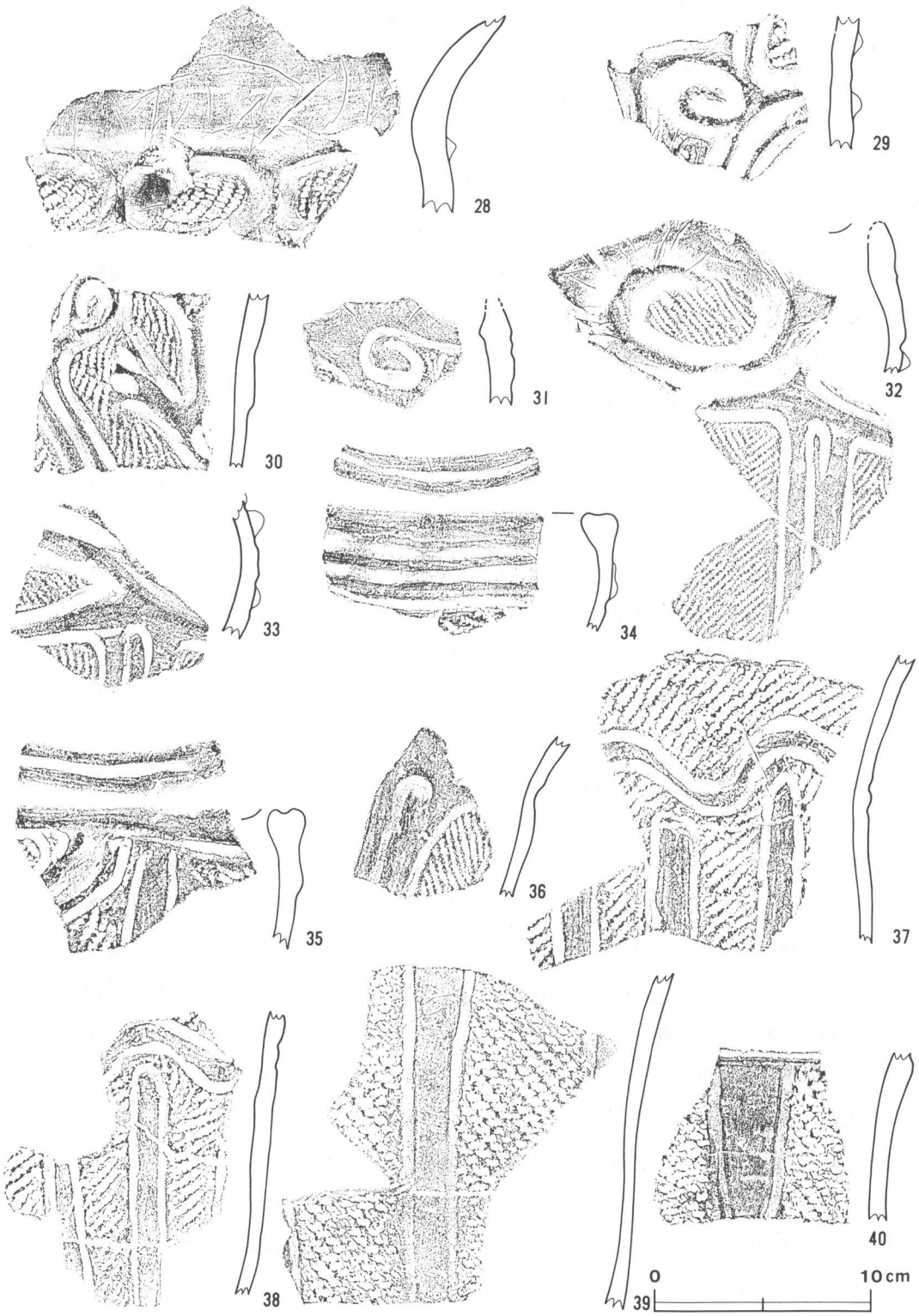
13は，本跡の中央部から出土した台付土器の台部片である。上端に孔が穿たれているが，断片のため全体の孔の数や配列は不明である。外面には斜位，縦位の軽いナデ，内面は横ナデが施されている。脚端部は整形が悪く，内側にはみ出している。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が黄褐色，内面が褐色を呈している。台部の底径は9.7cmで，現存高は3.9cmである。

14は，口縁部文様帯を隆線による楕円区画文で構成している深鉢形土器片である。15も，口縁部文様帯を隆線で，楕円形などに区画するもので，区画内に縄文が充塡されている。口縁部の隆線は貼付によるもので，ナゾリが強く加えられている。16は，第55号住居跡の炉内から出土した口縁部片で，隆線による楕円区画文が施されている。胎土には長石や石英粒を多く含み，粗い。17は，口縁部文様帯が沈線で区画されている。18は，山形の突起をもつ小形土器で，口縁部文様帯を隆線で楕円形に区画し，胴部に磨消帯を施している。19も，18と同様のものであるが，磨消帯の幅が狭く，整形も雑である。20は，小形の深鉢形土器で，口縁部文様帯を隆線で区画し，胴部には磨消懸垂文が垂下している。21は，山形の突起を有する口縁部片で，隆線で楕円区画文などが構成されている。22は，波状縁を呈する口縁部片で，隆線による渦巻状の区画内に縄文を充塡している。23は，山形の突起を有する口縁部片で，隆線による楕円区画文が施されている。口唇部内面は突出している。24～26は，口縁部文様帯を隆線で区画するもので，モチーフは渦巻文が退化した楕円形状の区画が目立つが，25の区画はやや複雑である。26の胎土には長石，石英粒が多く混入されており，粗い。24・25は砂粒が多く胎土は良好である。27は，口縁部片で，隆線と沈線による文様区画内に単節縄文ＲＬが充塡されている。28は，鉢形土器の口辺部片と考えられ，口縁部無文帯の幅が広く，強く外反している。頸部には隆線による楕円区画文を有している。29・30は，ナゾリを加えた隆線により器面全体に曲線的モチーフが展開されている胴部片である。29には渦巻文がみられ，30には低平な隆帯の先端を割って，いわゆる３本指状のモチーフとみられるものが認められる点に注目したい。31は，山形の突起を有する口縁部片で，渦巻状の沈線文が施文されている。32は，口縁部文様帯はナゾリを加えた隆線により渦巻が退化したようなモチーフが描かれ，胴部には逆Ｕ字状の区画と蕨手状文が加えられている。33は，口辺部片で，口縁部文様帯を隆線で区画し，胴部には沈線で曲線的モチーフが描かれている。34・35は，共に口唇部が肥厚し，口唇上面に１条の沈線が施されている。35の胴部には隆線と沈線による文様が施され，縄文も充塡されている。36は，胴部のくびれ部片で，逆Ｕ字状の区画文と蕨手状の沈線文が施されている。器面は少し磨滅している。37・38は，同一個体であるが接合はしない。縄文地文



第149図　第55号住居跡出土遺物拓影図　(3)

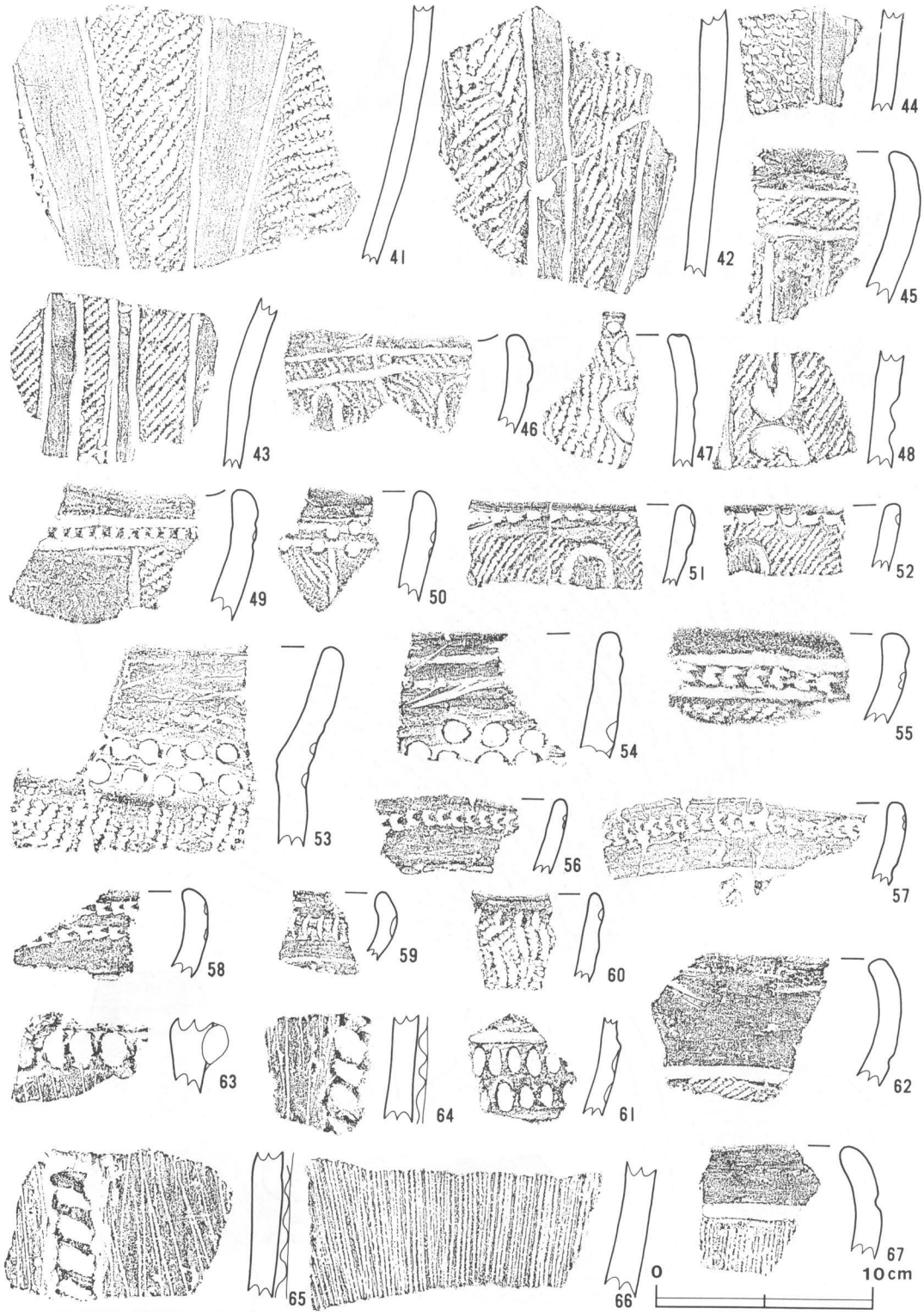
上に，胴上半部には２本組の沈線による波状文を施し，胴下半部には幅の狭い逆Ｕ字状文が数単位施されている。いずれの沈線区画間も磨り消されている。39・40は，同一個体の可能性があるが接合はできない。薄手の胴部片で，幅の狭い磨消懸垂文が施されている。地文は粗い複節縄文である。41～44は，いずれも直線的磨消帯を有する胴部片である。41は磨消帯の幅が広く，他はやや幅が狭い。44の縄文は複節で，他は単節である。45は，口縁部と胴部文様帯を沈線で構成するもので，区画内に縄文を充填している。46は，小形の深鉢形土器と考えられ，口縁部に２条の沈線を引き，以下に逆Ｕ字状のモチーフを施し，区画内を磨消している。47は，縄文地文上に沈線でモチーフが描かれている口縁部片で，口唇部には円形刺突文が付されている。48は，胴部片で，縄文地文上に対向する蕨手文が沈線で施文されている。49は，波状を呈する口縁部片で，口縁直下の２条の沈線間に多截竹管状施文具による刺突文が付されている。胴部には幅の広い磨消帯がみられる。50は，口縁部に２条の沈線を巡らし，沈線上に円形刺突文が雑に施されている。以下に縦位の磨消帯が施されている。51は，口縁直下に多截竹管状施文具によるＤ字状を呈する刺突文が１列施され，胴部には逆Ｕ字状の区画文が付されている。区画内は磨消されている。52は，51に類似しているが，刺突の仕方がやや異なり，同一個体とは思われない。53・54は，同一個体と思われるが接合しない。幅の広い口縁部無文帯を有し，その下端に２列の円形刺突文を施し，以下に縄文の条が縦走するように施文されている。55は，口縁直下に半截竹管状施文具による刺突文が沈線間に加えられている。以下に縄文が施されているが，器面の磨滅が著しい。56は，口縁直下に１列の半截竹管状施文具による刺突文が加えられ，下端を１条の沈線で区切っている。57は，口縁直下に半截竹管状施文具による爪形状の刺突文を施し，その下に１条の沈線を巡らし，以下に縄文を施すものと思われる。58は，口縁部無文帯に半截竹管状施文具による刺突文が２列加えられている。59は，内湾の著しい口縁部片で，深く鋭い爪形状の刺突文列が加えられている。60は，薄手の口縁部片で，縄文施文後にキザミ目状の刺突文が施されている。61は，縦長の刺突文が横位の沈線間に施されている胴部片である。62は，幅の広いやや内湾気味の無文帯を１条の沈線で区画し，以下に縄文が付されている口縁部片である。63～65は，いずれも太い貼付隆帯を特徴とするもので，曽利系の土器の胴部片である。63は，くびれ部片で，横位の太い隆帯を貼付し，押捺を加えている。地文には細い沈線文を垂下させている。64・65は，同一個体で，粗い条線文の地文上に太い押捺が加えられた貼付隆帯が垂下している。66は，縦位の条線文が付されている胴部片である。67は，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下に縦位の条線文が施されている口縁部片である。68は，小形土器の口縁部片で，雑な擦痕状の沈線文が付されている。69は，断続的な条線文が斜位に施された胴部片で，器面の凹凸が著しい。70は，口辺部片で，口縁部文様帯を隆線で区画し，縄文が充填されている。胴部には縦位の条線文を加えている。あるいは２と同一個体かもしれない。71は，胴部の小片で，浅い１条の沈線を挟んで，上部は縄文，下部は



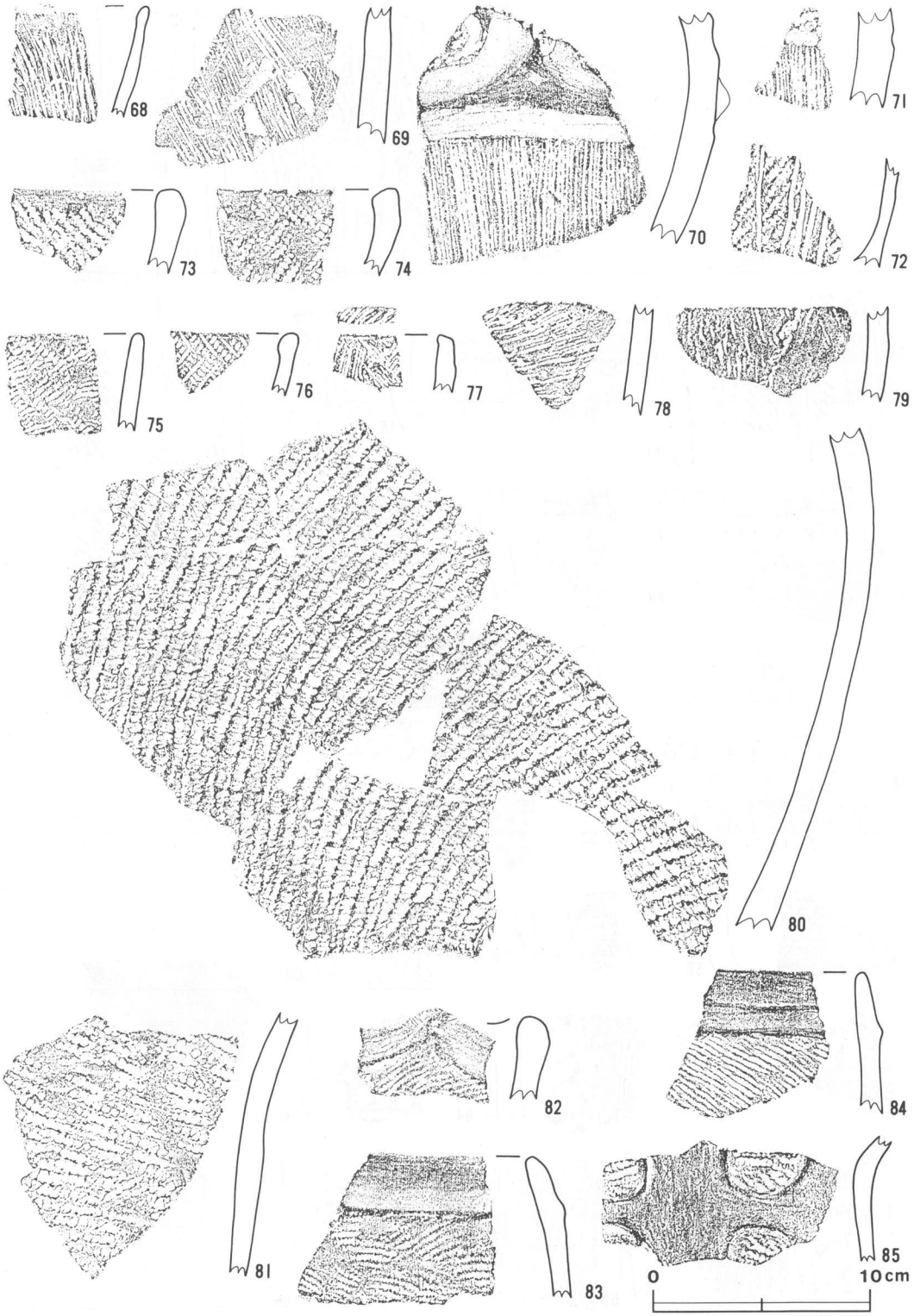
第150図　第55号住居跡出土遺物拓影図　(4)

条線文が施されている。72は，ごく薄手の小形土器の胴部片で，縄文地文上に沈線が数条垂下している。73は，第55号住居跡の炉内から出土した口縁部片で，縄文だけが施されている。74は，縄文が付されている口縁部片で，拓本の左端に沈線文がみられる。75は，短い原体の無節縄文を器面全体に施した口縁部片であるが，器面が軟らかいうちに施文したものらしく，押圧状を呈する部分もみられる。あるいは4と同一個体かもしれない。76は，付加条縄文が付された口縁部の小片で，口唇部内面が肥厚している。77も，口縁部の小片であるが，特異な反撚りと思われる縄文が，口唇部および口縁部に施文されている。78～81は，縄文だけが施されている胴部片である。78の縄文は，反撚りの縄文と考えられる。79の縄文も，不整な無節縄文が縦位回転で施文され，結節文もみられる。77～79の縄文原体については不確実である。80は，第55号住居跡と第74号住居跡の覆土から出土した破片が接合した胴部片で，節の大きい粗い縄文が全面に施されている。81は，粗い縄文が施文されている。82は，山形の突起を有する口縁部片で，微隆線で口縁部無文帯を区画し，以下に縄文を施している。83・84は，口縁部無文帯を微隆線で区画し，以下に縄文を施しているものである。83は単節，84は無節縄文である。85は，胴部のくびれ部片で，微隆線でU字状，逆U字状のモチーフが上下にわかれて施され，区画内には縄文が充填されている。86は，断面三角形を呈する微隆線により曲線的モチーフが描かれ，区画内に縄文が施されている胴下半部片である。内面の上方には炭化物の付着がみられる。87は，断面三角形の微隆線文に沿って，小さく深めの円形刺突文が2列加えられている口縁部片である。刺突文が施された土器の中では時間的に後出のものである。88・89は，無文の口縁部片である。89は，薄手でかなり強く外反している。90・91は，低平な幅の広い隆線で渦巻状のモチーフが描かれている胴部片で，薄手である。胎土には小石粒を含むが緻密で，焼成も良好である。壺形土器片かと思われる。92は，口縁部の小片で，2本組の沈線で弧状のモチーフを描き，区画内は磨り消されている。口唇部の内面は突出し，稜を有している。93は，幾何学的な沈線区画内に縄文が充填されている口縁部の小片で，口唇部は内側に突出し，肥厚している。94は，胴部片で，曲線的沈線文が施され，区画内に縄文が充填されている。95は，口縁部片で，口縁部文様帯を横位，胴部文様帯を縦位に区画し，区画内に雑に細かい縄文を充填している。96・99・100は，同一個体であるが，接合はできない。口縁部がやや外反し，胴部中位でくびれ，下半部がやや張る深鉢形土器である。太い2本組の沈線で曲線的モチーフが施されている。区画内と口縁部には無節縄文が施されている。胎土には非常に多くの長石，石英粒，雲母片などを含み，粗雑である。内面の調整も悪く，凹凸している。100には文様帯の下限を区切る弧状の区画文があり，特徴的である。97・98は，口縁部の小片で，太い沈線による区画内に細縄文が充填されている。101，102は，沈線区画内に細かい単節縄文が施文されている胴部片である。101の区画は直線的，102は曲線的である。

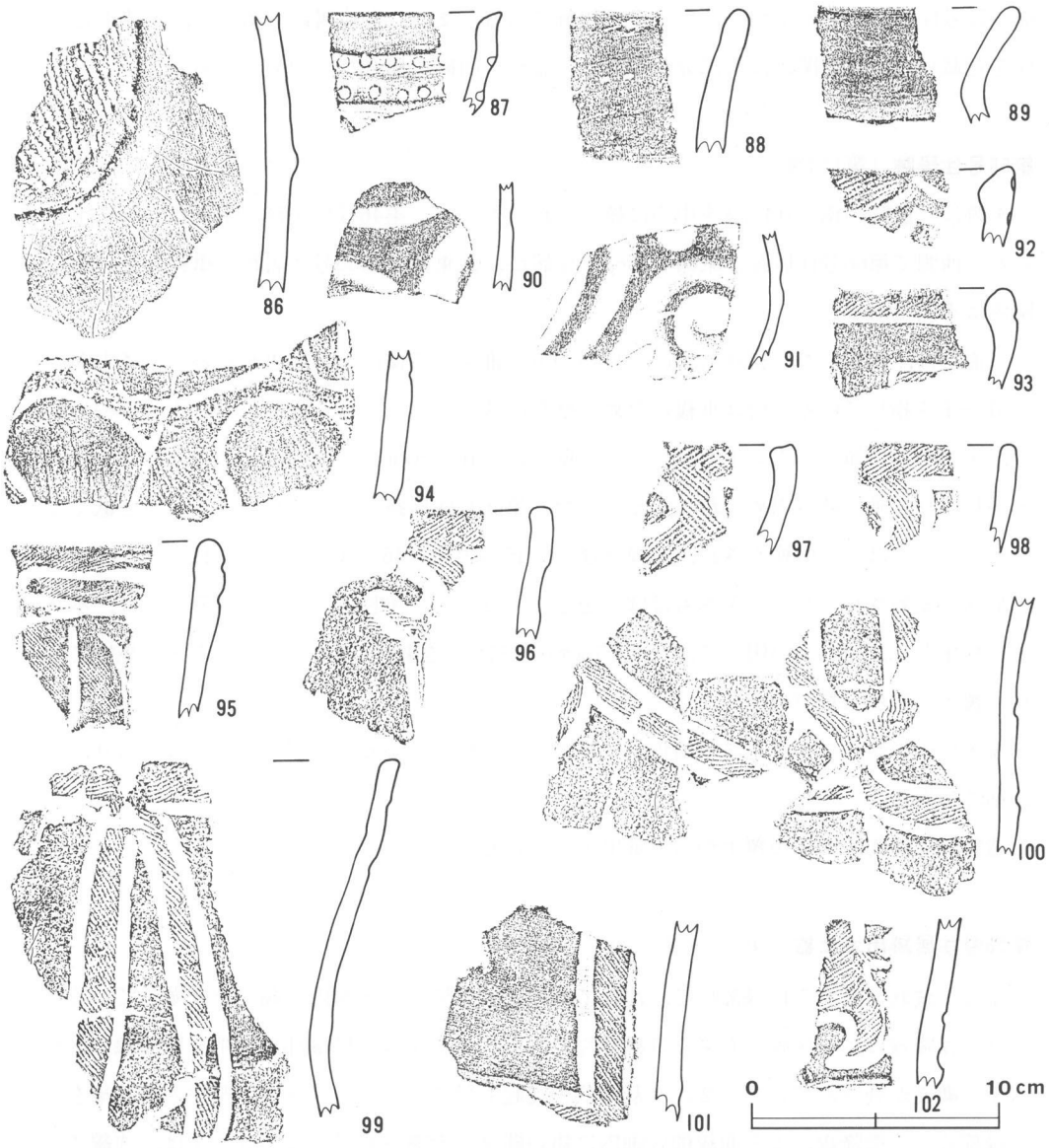
本跡から出土した土器は，多量であるがほぼ2時期に分け得る。加曽利EⅢ式期のものが大半



第151図　第55号住居跡出土遺物拓影図　(5)



第152図　第55号住居跡出土遺物拓影図 (6)



第153図　第55号住居跡出土遺物拓影図（7）

を占め，9・82～87，92～102などが，加曽利EⅣ式期から後期初頭の称名寺式期に比定されるものである。炉内出土の16は加曽利EⅢ式期のものであるが，前記のような住居跡の重複関係などから判断してみると，本跡の時期は，加曽利EⅣ式期から称名寺式期にかけての時期と推定される。

第56号以降の住居跡の大部分は，遺跡の南部に位置し，10，12軒の数で重複し合っている。（遺構全体図参照）第56，60，62～67，76～79号住居跡が1つのブロックで12軒，第57～59，61，

68～73号住居跡がもう１つのブロックで10軒である。また，各住居跡の項では，関連ある重複関係を記載した。新旧関係は大部分が不明であるが，明確な場合だけ記入してある。

第56号住居跡（第154図）

本跡は，遺跡の南部H4i_0区を中心に確認されたもので，第46号住居跡の南東側9.5mに位置している。西側で第66号住居跡，東側で第64号住居跡，南東側で第65号住居跡と重複している。新旧関係は不明である。

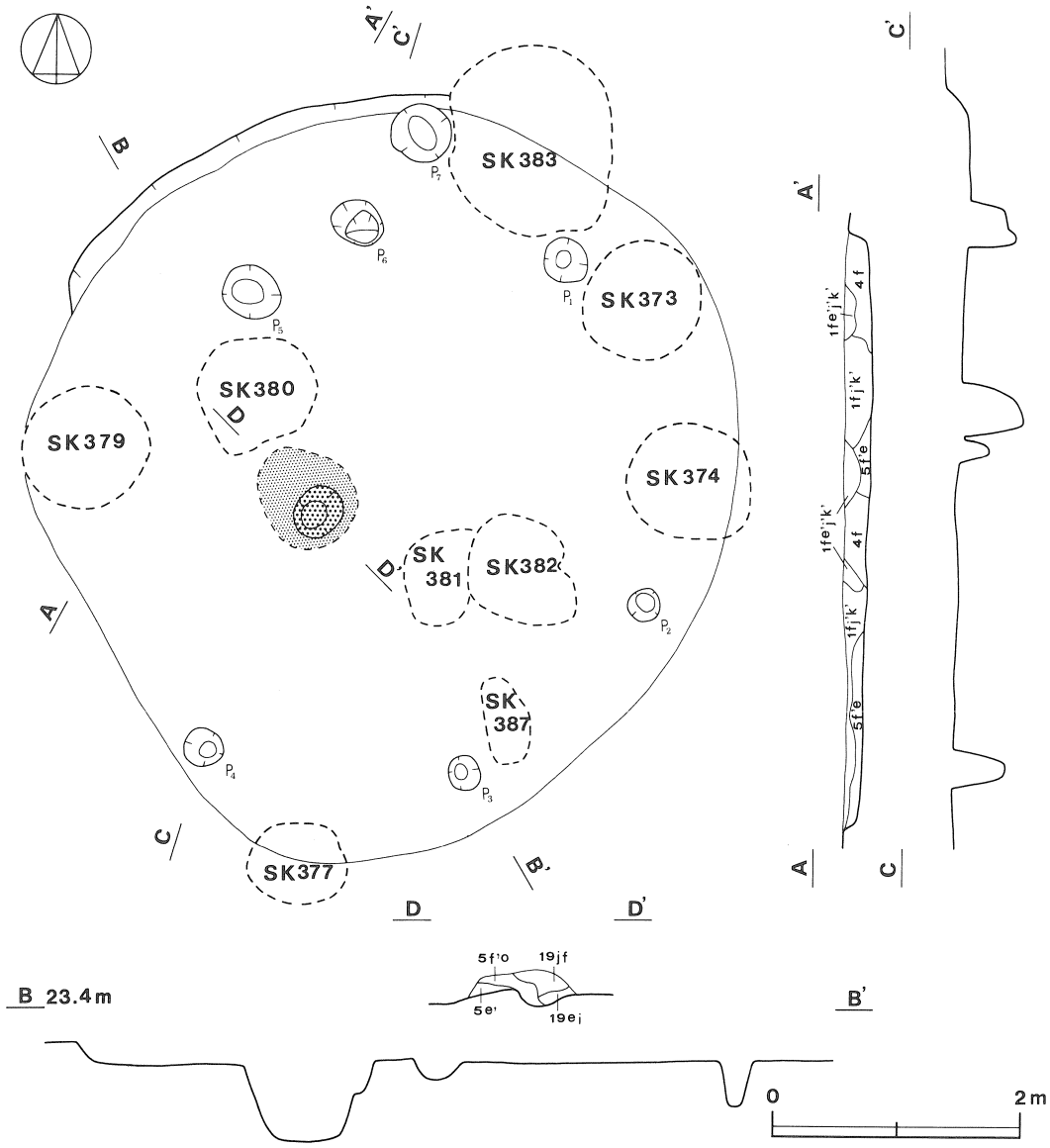
平面形は，重複のため長径5.8m・短径5.0m（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，N－31°－Eを指している。壁は重複のため北壁だけ残っており，ロームブロックを含みやや軟らかく，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，16～20cmである。床面はロームブロックの露出が見られ，硬く踏み固められている。また，第66号住居跡の床面に比べて６cmほど低くなっている。ピットは７か所検出され，規模は径26～45cm・深さ36～40cmである。P_1～P_6は壁にそって円形状に配列されており，深さもほぼ一定しているので，主柱穴と考えられる。炉は，本跡の中央に検出され，径44cmの円形で，床面を15cm掘り凹めた地床炉である。炉床はあまり焼けておらず，炉の覆土にも焼土量が少ない。

覆土は４層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。４層とも締まっており，下層には粘性がある。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第56号住居跡出土土器（第155図１～22）

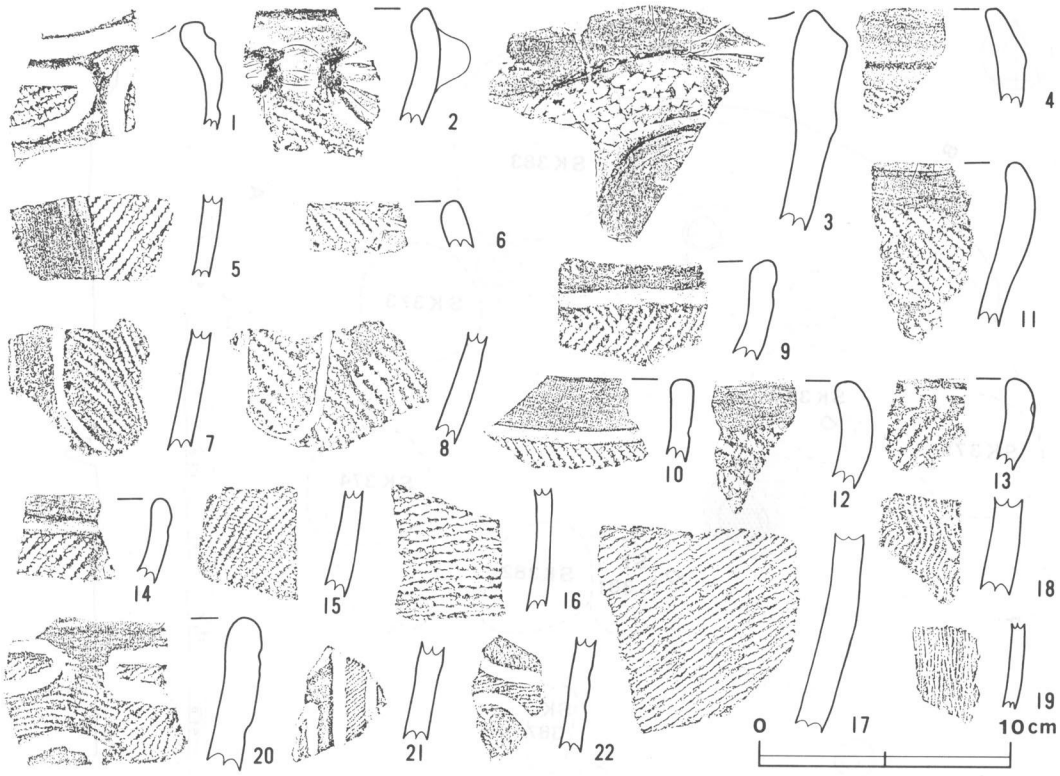
１は，波状を呈する口縁部片で，沈線で楕円区画を施し，区画内に縄文を充塡している。２～４は，微隆線による区画を有する口縁部片である。２・４は，口縁部無文帯を微隆線で区画し，以下に縄文が施されている。２には双頭状の突起も付されている。３は，厚手の波状縁を呈する口縁部片で，微隆線による曲線的区画内に粗い縄文が充塡されている。５・７は，沈線による区画が施されている胴部片で，５は直線的，７は曲線的である。６は，口縁部の小片で，口縁直下から逆Ｕ字状の区画文が施され，区画内は磨り消されている。８は，縄文地文上にＵ字状の沈線文を加えている胴部片である。９・10は，口縁部無文帯を１条の沈線で区切り，以下に縄文を施している。11・12は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文が施されている。共に口縁部が内湾している。13は，口縁直下に刺突文を付し，以下に縄文を施している。14は，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，胴部には沈線文を描いている。15～17は，縄文だけが施されている胴部片である。17は，無節縄文で，胎土に大粒の石英，長石粒，雲母片などが多く混じっている。18・19は，条線文が施された胴部片である。18は厚手で，曲線状を呈し，19は薄手で，縦位に施されている。



第154図　第56号住居跡実測図

20～22は，器面全体に太めの沈線で曲線的モチーフが描かれる土器の口縁部，胴部片である。区画内には縄文が充填されている。

本跡から出土した土器は，加曽利ＥⅢ式期のものが多いが，加曽利ＥⅣ式期のもの，称名寺式期のものもみられ，本跡の明確な時期決定は困難である。



第155図　第56号住居跡出土遺物拓影図

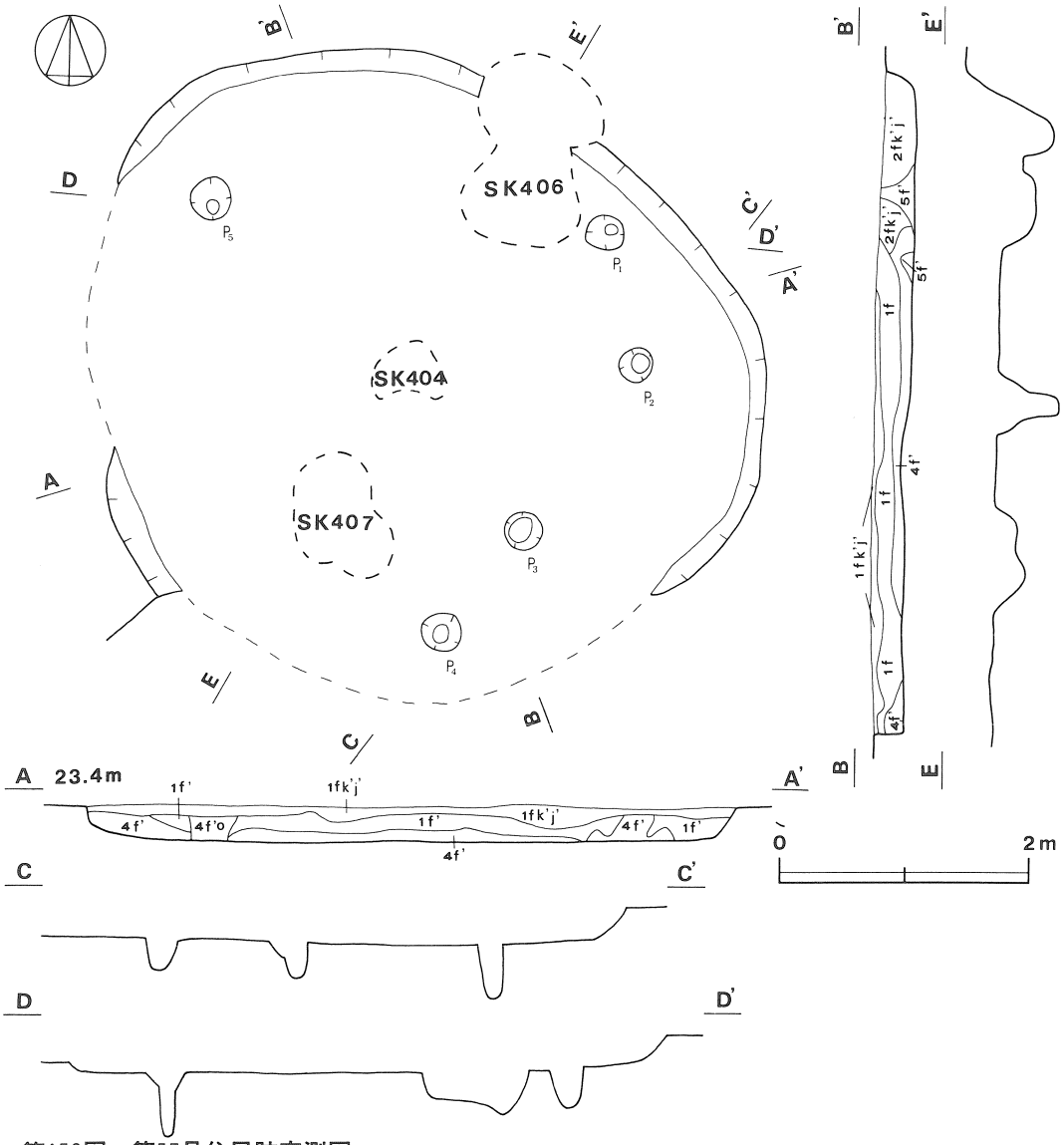
第57号住居跡（第156図）

本跡は，遺跡の南部H4j_9区を中心に確認されたもので，第56号住居跡の南側１ｍに位置している。西側で第70号住居跡，南側で第58・59号住居跡と重複している。新旧関係は不明である。また，中央で第403～408号土壙と重複している。新旧関係は，底面の切り合い関係から，すべて本跡の方が古いと思われる。

平面形は，重複のため長径5.7m（推定）・短径4.8ｍの楕円形と思われる。長径方向は，N－57°－Wを指している。壁はローム粒子・ロームブロックが混合しており軟らかく，残っている北西壁から東壁にかけては，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，21～26cmである。床面はロームブロックの混入が見られ，踏み固められた様子はなく，平坦である。ピットは５か所検出され，規模は径26～34cm・深さ21～49cmである。不規則な配列のため，主柱穴は判別できない。炉は，検出されていない。

覆土は６層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。一部攪乱も見られるがほぼ自然堆積である。６層とも締まっている。

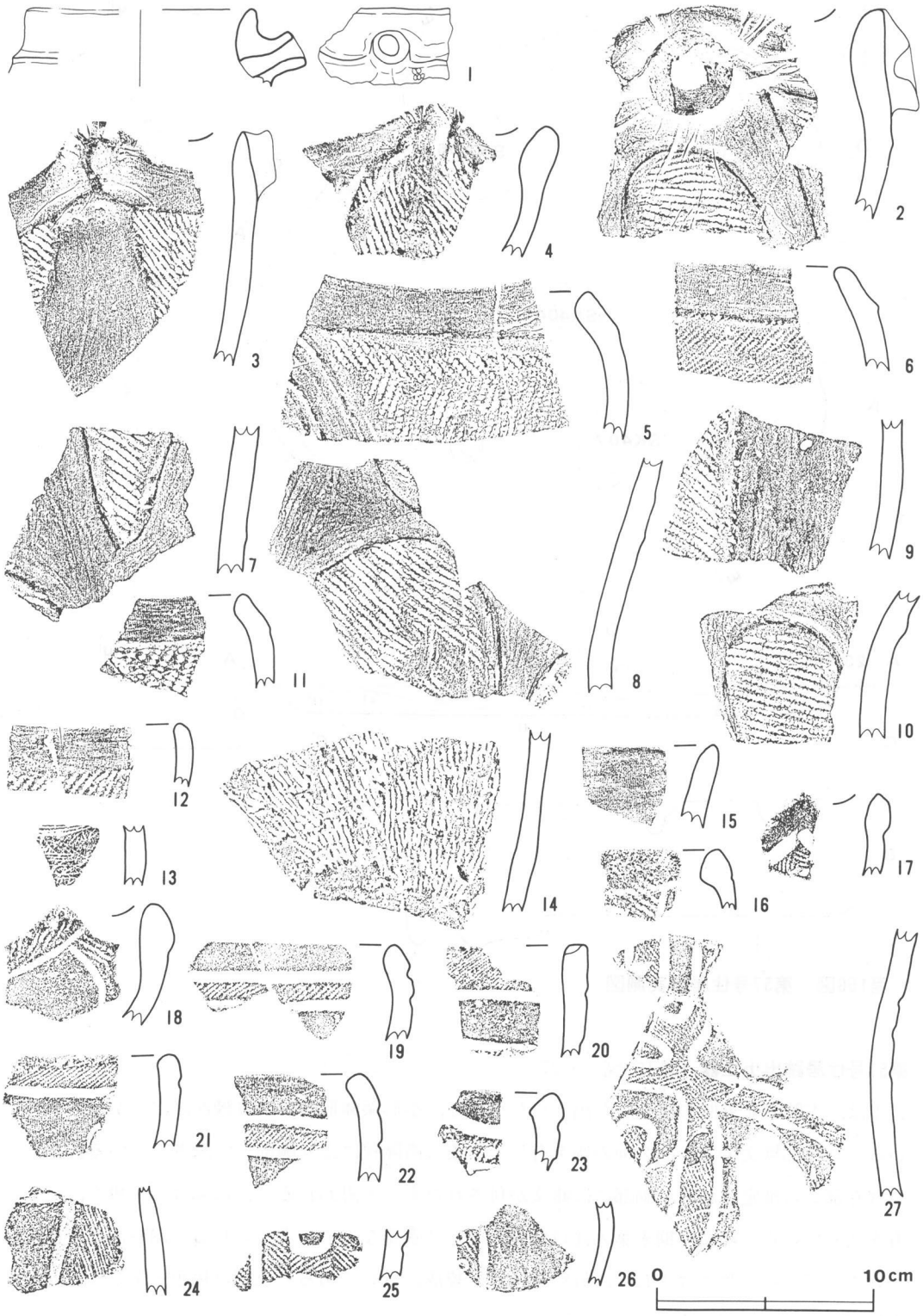
遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。



第156図　第57号住居跡実測図

第57号住居跡出土土器（第157図１～27）

１は，本跡の北東側の覆土から出土した小片で，小形深鉢形土器の口縁部に注口が付けられている。口縁部無文帯は，約２cmの幅を有し，１条の微隆線により胴部と区画されている。わずかな残存部から推定すれば，胴部には縄文が付されたものと思われる。注口部はごく短く，やや上方を向いている。縄文中期末葉の注口付土器として貴重なものと考えられる。内外面とも横ナデが施されている。胎土は小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定口径は10.4cm，現存高は3.6cmである。



第157図　第57号住居跡出土遺物実測図・拓影図

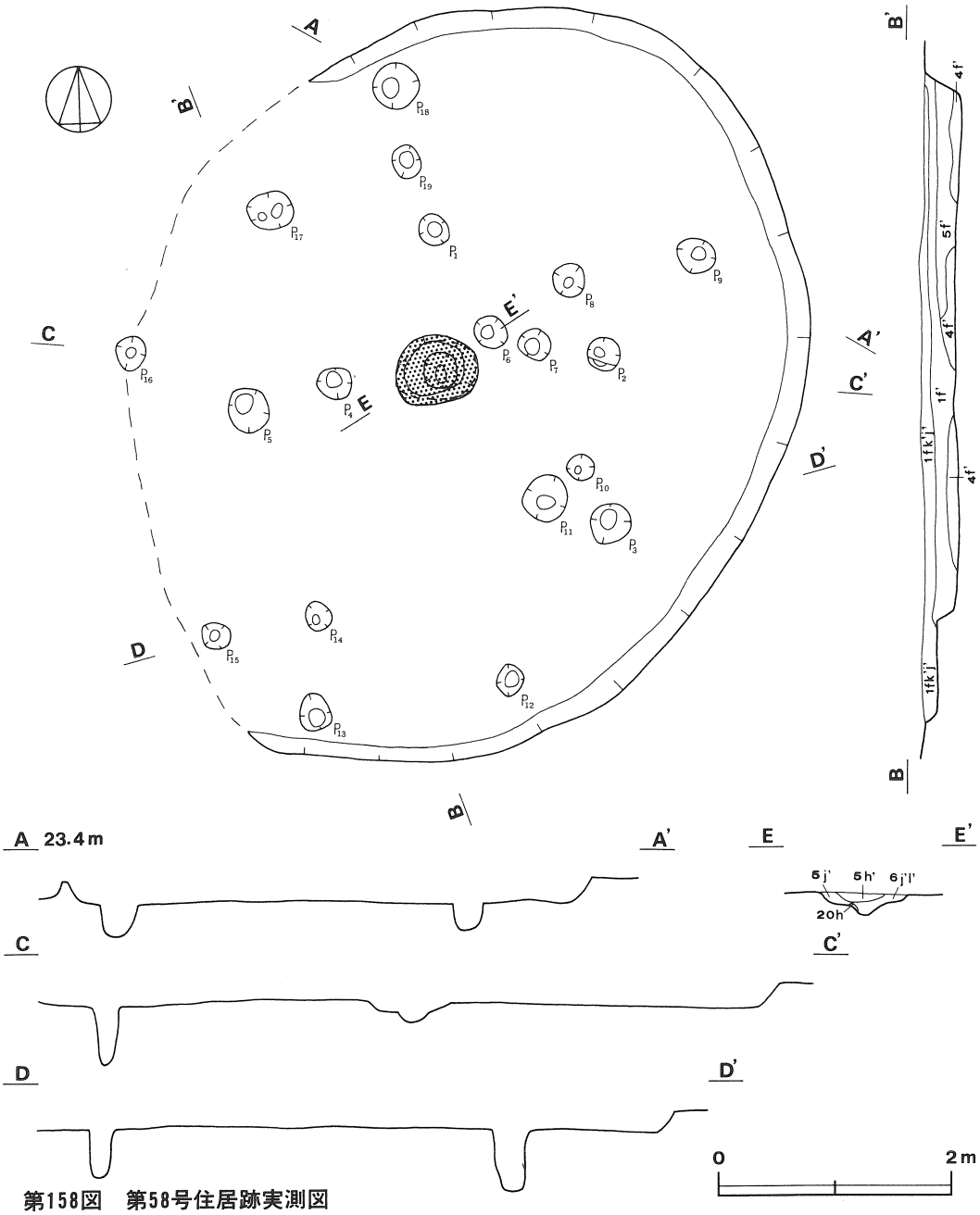
2は，緩い波状を呈する口縁部片で，逆U字状のモチーフが微隆線で描かれ，縄文が充塡されている。円形の貼付文が印象的である。3は，口縁部無文帯を区画する微隆線が，左右よりせり上がって高い突起を形成し，この部分が山形に突出している波頂部片である。胴部も微隆線で区画された縄文が施されているが，無文帯の幅が広い。4は，山形の突起が双頭状を呈する口縁部片で，3・4ともに無節縄文が施されている。5～10は，微隆線で曲線的モチーフが描かれるもので，区画内に縄文が充塡されている。5・6は，口縁部片，7～10は，胴部片である。6は，現存部から見る限りでは，口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し，以下に縄文を付している。7にはV字状，8・10にはU字状，逆U字状の区画が認められ，いずれも内部に縄文が付されている。7・8から観察すれば，胴部文様は，くびれ部で上下に分離しているものと思われる。11は，口縁部無文帯を微隆線で区画し，以下に縄文を施している。12は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文が付されている。13は，条線文が乱雑に施された胴部の小片である。14は，無節縄文だけが施された胴下半部片である。15は，無文の口縁部片で，外反している。16は，口縁部の小片で，口唇部が突出し，磨消縄文が施されている。器面は磨滅が著しい。17・18は，山形の突起を有する口縁部片で，18は内面に縦位の抉(えぐ)りを付している。沈線区画内に縄文が充塡されている。17の胎土には大粒の長石，石英粒を多量に混入し，粗雑なものである。19は，口縁部片で，横位の沈線区画内に縄文が充塡されている。20～22は，19と同様に横位の沈線区画内に縄文が施されている口縁部片である。20の口唇部上面の内側には，深い斜位の押圧が加えられている。胎土には大粒の石英，長石粒を多く含んでいる。22の縄文は，単節の異条縄文と思われる。胎土には微砂を含み，良好である。23は，26と同一個体と思われるが，接合はできない。23は，口縁部片で，太い沈線区画内に縄文と円形竹管文が加えられている。23の口唇部は内側に肥厚し，稜を有している。26は胴部片で，器壁は薄い。24は，幾何学的モチーフが沈線で描かれ，区画内に細かい縄文を施している胴部片である。25も，24と同様な胴部片であるが，胎土に小石粒，砂粒を含んでいる。27は，大形の胴部片で，パネル状の沈線区画内に縄文が充塡されている。

本跡から出土した土器は，さして多くはないが微隆線による施文を特色とする加曽利EⅣ式期のものが主体を占め，これに太い沈線区画による施文を特徴とする称名寺式期のものがかなり多く共存している。したがって，本跡の時期は，加曽利EⅣ式期から称名寺式期にかけての時期と考えられる。

第58号住居跡（第158図）

本跡は，遺跡の南部I4a_0区を中心に確認されたもので，第55号住居跡の北側7.5mに位置している。北側で第57号住居跡，西側で第59号住居跡と重複している。新旧関係は不明である。

平面形は，重複のための長径7.0m・短径5.6m（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，N－30°－Eを指している。壁は北側から南西側にかけて残っており，ロームブロックを含むソフ



第158図　第58号住居跡実測図

トロームで軟らかく，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，15～20cmである。床面はロームブロック混じりで軟らかいが中央はやや高く，壁際で少し低くなっている。ピットは19か所検出されて，規模は径26～40cm・深さ15～52cmである。P_1～P_3・P_{14}・P_5は炉を囲んで五角形に配列されているので，主柱穴思われる。炉は本跡の中央に検出され，径70cmの楕円形で，床面を11

cm掘り凹めた地床炉である。炉床はあまり焼けておらず，炉の覆土には焼土量が少ない。

覆土は4層からなり，主に褐色土・暗褐色土が自然堆積しており，全層ともよく締まっている。

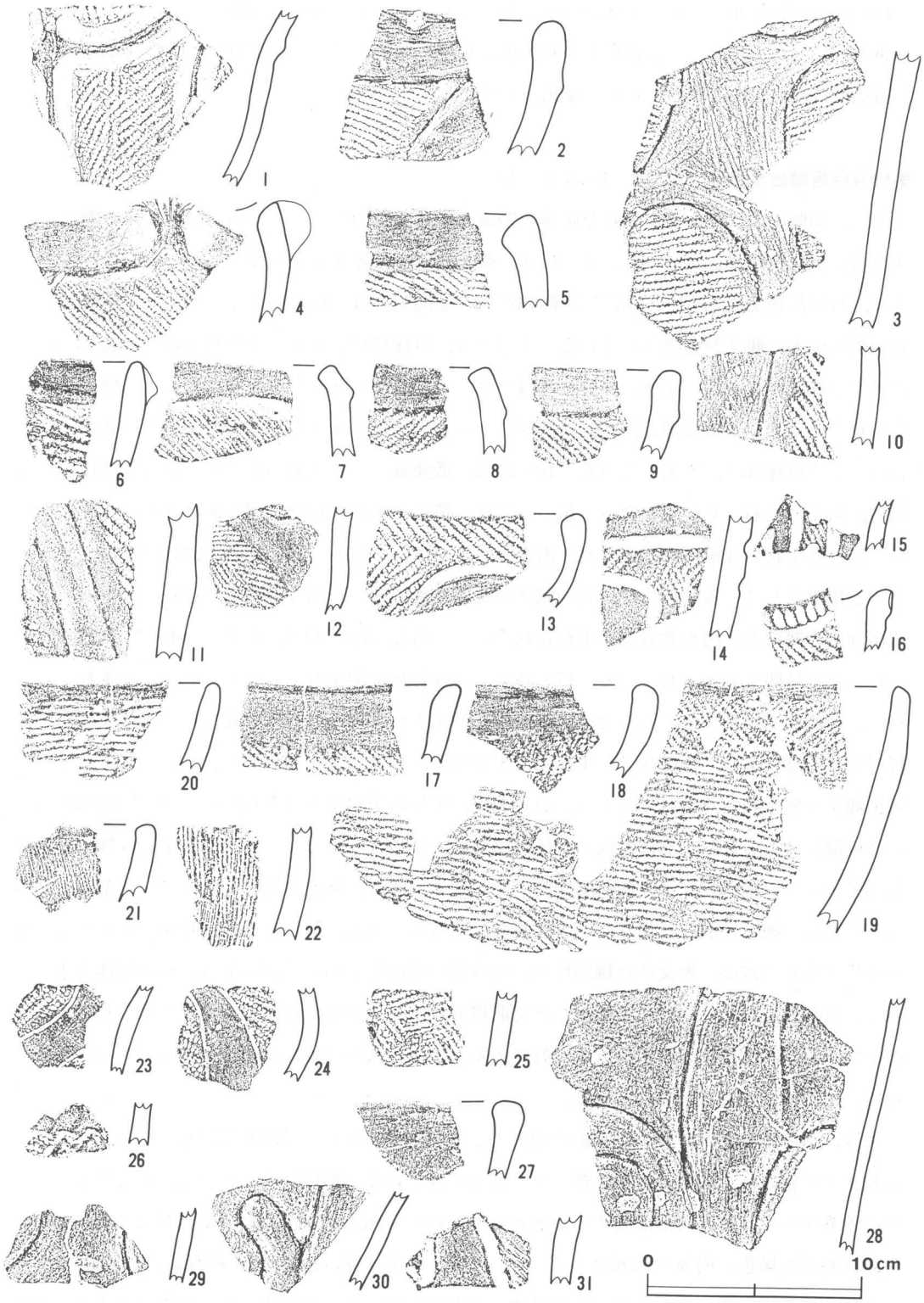
遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第58号住居跡出土土器（第159～160図1～33）

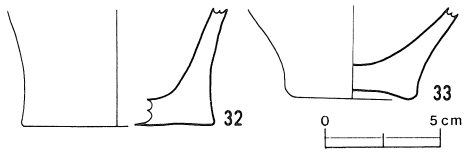
1は，両側にナゾリが加えられた隆線で器面全体に曲線的モチーフが描かれる土器の胴部片で，区画内には縄文が施されている。2～12は，微隆線による施文が主となっている土器片である。2は，口縁部無文帯を有し，胴部には微隆線による曲線的区画が施されている。3は，胴部片で，曲線的区画内に縄文が充塡されている。4～9は，口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し，以下に縄文が施されている。4は，緩い波状縁を呈し，左右からせり上がる隆線によって突出部が形成されている。5の口唇部は，内側に肥厚している。6は，無文帯と縄文帯の境が段状を呈している。7の口縁部は，内屈している。10～12は，微隆線による区画が施されている胴部片である。11は，胎土に長石，石英粒を含み，粗い。12は，薄手である。13は，縄文が施されている口縁部片で，逆U字状の沈線区画が施され，内部が磨り消されている。14は，太い沈線で幾何学的モチーフが構成されている胴部片で，粗い縄文が充塡されている。15は，胴部の小片で，太沈線による区画内の縄文上に円形竹管文が重ねられている。16は，波状の口縁部片で，口縁直下に刺突列が付され，以下に縄文が施されている。17・18は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文が施されている。18は，縄文施文後にナデられたため，縄文の粒が消されている。19は，縄文だけが施文された口縁部から胴部にかけての破片で，単節縄文が上位に，無節縄文が下位に施文されている。20も，無節縄文が施された口縁部片である。21・22は，縦位の条線文が付されたもので，21は口縁部片，22は胴部片である。23・24は，同一個体と思われるが接合はしない。薄手で，細い沈線による曲線的モチーフが描かれ，区画内が磨り消されている。24は，断面の湾曲からみて口辺部片と思われる。25は，縄文が羽状に施されている胴部片である。26は，横位の結節回転文がみられる胴部の小片である。27は，無文の口縁部片で，口唇部が肥厚している。28～30は，同一個体と思われるが，接合はしない。貼付の微隆線だけで曲線的モチーフが描かれている薄手の胴部片である。胎土に小石粒，砂粒を含み，焼成は良好である。31は，太い沈線により区画がなされている胴部片で，反撚りの縄文が付されている。

32は，本跡の南東側の覆土から正位で出土した底部片である。ほぼ直立気味に立ち上がり，外面は縦ナデが施され，底面の近くは横ナデが加えられている。器壁は6～9㎜で，部分によって厚さに差異がみられる。内面は縦ナデが加えられている。胎土には粗砂を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が灰褐色を呈している。推定底径は8.1cmで，現存高は5.0cmである。

33は，本跡の西側の覆土，第59号住居跡との重複部分から正位で出土した底部片である。外面



第159図　第58号住居跡出土遺物拓影図　(1)



第160図　第58号住居跡出土遺物実測図（2）

は横ナデが施され，内面は軽いナデが加えられている。底面は凹んでいる。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が橙色，内面が褐色を呈している。底径は4.8cmで，現存高は4.0cmである。

本跡から出土した土器は，加曽利ＥⅣ式期のものが主体を占め，一部に加曽利ＥⅢ式期，称名寺式期のものが含まれている。したがって，本跡の時期は，加曽利ＥⅣ式期と推定される。

第59号住居跡（第161図）

本跡は，遺跡の南部I4b$_9$区を中心に確認されたもので，第55号住居跡の北側４ｍに位置している。北側で第57号住居跡，東側で第58号住居跡，南側で第68号住居跡，西側で第71号住居跡と重複している。第68・69・71号住居跡との新旧関係は不明である。また，中央・南側の床面で，第402・409・410号土壙と重複している。土壙との新旧関係は，底面の切り合いから本跡が古いと思われる。

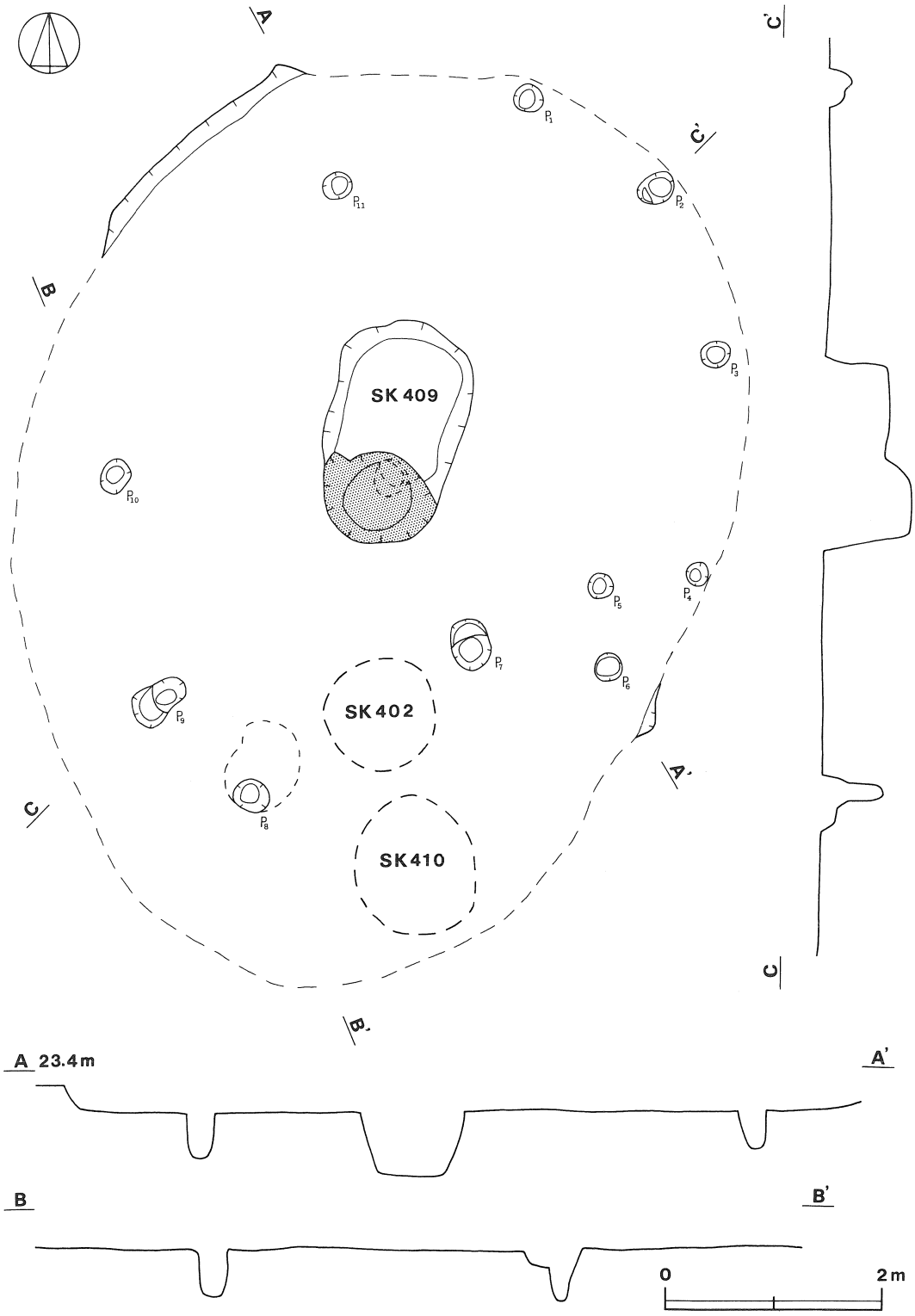
平面形は，重複のため長径8.6ｍ（推定）・短径6.4ｍ（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，Ｎ－14°－Ｅを指している。壁は北西側の一部しか残っておらず，ロームブロックを含み軟らかい。壁高は，19cmである。床面は平坦でロームブロックを含み，軟らかである。ピットは11か所検出され，規模は径30cm・深さ22～59cmである。P_1～P_4・P_6・P_8～P_{11}は規模や位置，深さが一定していることなどから主柱穴と考えられる。炉は検出されていないが，第409号土壙の下の層に焼土が含まれていることから，第409号土壙の構築の際に壊されたと考えられる。

覆土は６層からなり，主に褐色土・明褐色土が堆積している。１～５層は締まっている。

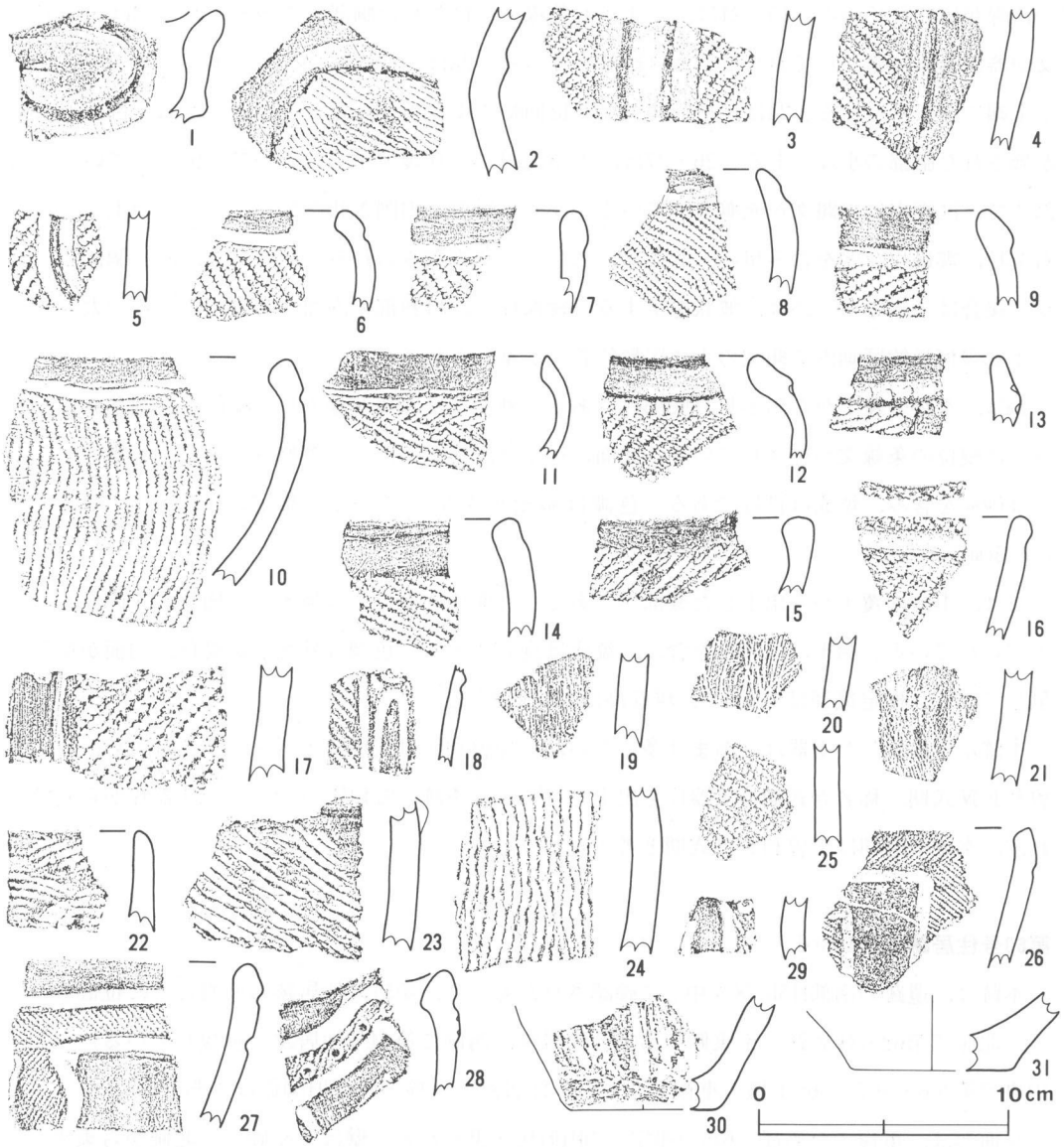
遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第59号住居跡出土土器（第162図１～31）

３・６・７・10・16・24の６点は，本跡の焼土内から出土し，５は，焼土付近の床面上から出土したものである。これらは本跡の時期決定に有力な資料と思われる。その他は，覆土から出土したものである。１は，緩い波状を呈する口縁部片で，隆線で渦巻状のモチーフが描かれている。２は，微隆線で曲線的モチーフが描かれている胴部片で，区画内に無節縄文が施されている。３は，２本組の隆線による施文がみられる胴部片で，胎土にやや大粒の長石，石英粒，雲母片などが混入しており粗い。４は，胴部片で，微隆線による区画内に縄文が充填されている。５は，両側にナゾリを加えた隆線により文様が描かれた胴部の小片である。６～10は，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下に縄文が全面に施されている。８・９の沈線は，浅く幅が広い凹線状を呈



第161図　第59号住居跡実測図



第162図　第59号住居跡出土遺物実測図・拓影図

している。10の縄文は，斜位回転により条が縦走するように施文されている。11は，内湾する薄手の口縁部片で，口縁部無文帯を細い２条の沈線で区画し，以下に縄文を施している。12・13は，口縁部無文帯を１条の微隆線で区画している。12は，微隆線の下端にだけ刺突文が施され，13は，微隆線の上下に円形刺突文が付されている。14・15は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文が施されている。16は，口縁直下の浅い沈線を境に縄文の走向が変っている。更に口唇部の上面にも縄文が施文されており，注目すべきものである。17は，磨消懸垂文が施された厚手の胴部片で，縄文は複節である。18は，小形深鉢形土器の胴部片で，薄手である。磨消帯間にＵ字状，逆Ｕ字状

の沈線が施されている。19～21は，いずれも条線文が付された胴部片である。22・23は，無節縄文が器面全体に施されており，22は口縁部片である。23は，口辺部片で，区画のための貼付隆線が上端に少しみられる。24は，単節縄文で斜位回転により条が縦走している。25は，付加条縄文が施された胴部の小片である。26・27は，太い沈線により幾何学的モチーフが施されている口縁部片で，区画内に細縄文が充塡されている。26の口唇部は内削ぎ状を呈している。胎土には長石，石英粒，雲母片などを含み粗い。27には，スペード状文がみられる。28・29は，同一個体であるが，接合はできない。28は，波状を呈する口縁部片で，口唇部の内面は突出している。太い沈線による幾何学的区画内の縄文の上に円形竹管文が重ねられている。

30は，本跡の覆土から出土した底部片である。外面には沈線が垂下して縦位に区画され，区画内には縦位の条線文が施されている。底面の近くは，横ナデにより調整されているが粗い。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈している。推定底径は5.8cmで，現存高は4.5cmである。

31は，本跡の覆土から出土した底部片である。外面の底面近くは横ナデが施され，内面も軽くナデられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が黄褐色，内面が褐色を呈している。推定底径は6.3cmで，現存高は3.2cmである。

本跡から出土した土器は，あまり多くないが，加曽利EⅢ式期の土器片が多くを占め，他に加曽利EⅣ式期，称名寺式期の土器片も出土している。本跡の焼土内から出土した土器片から判断すれば，本跡の時期は加曽利EⅢ式期と考えられる。

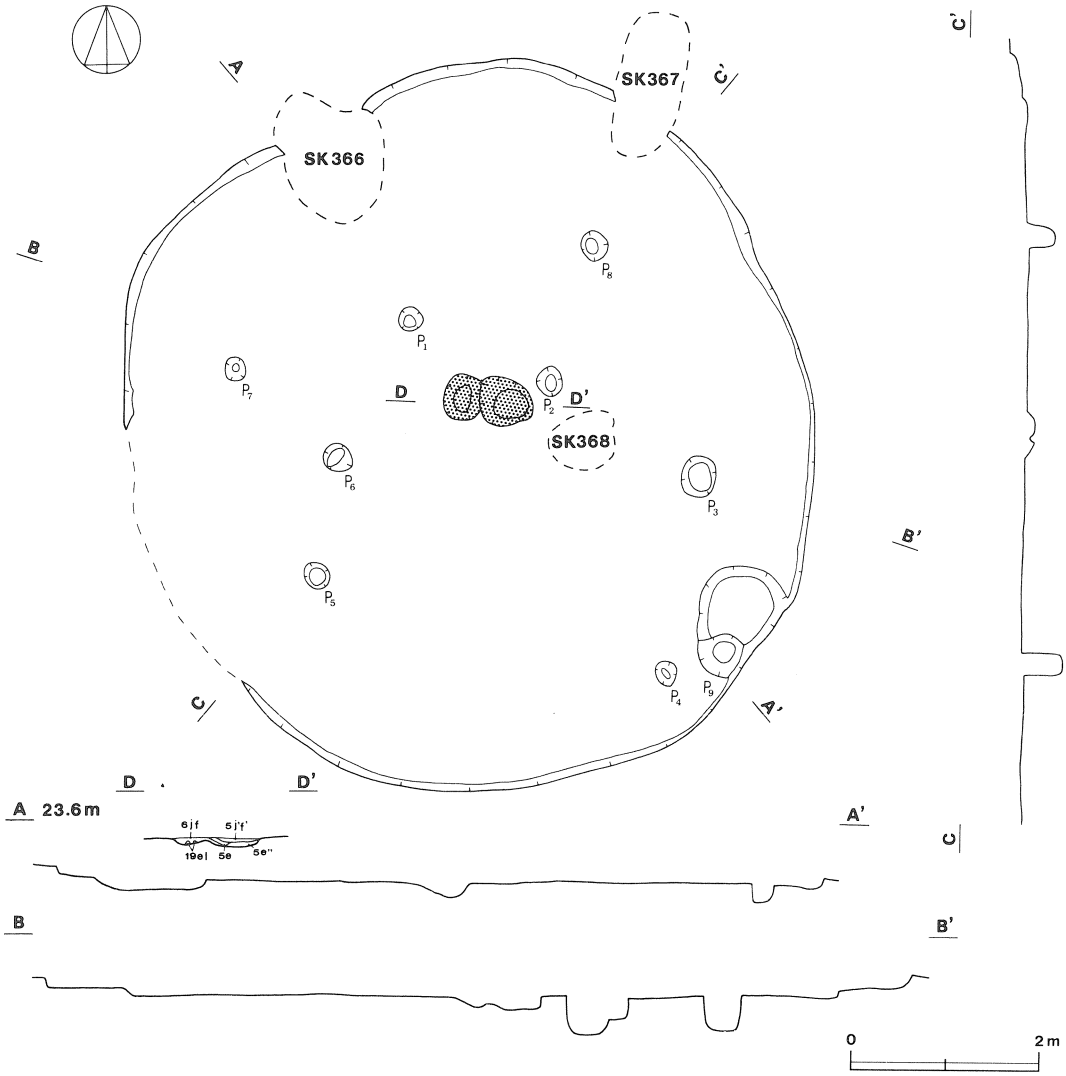
第60号住居跡（第163図）

本跡は，遺跡の南部H5h_1区を中心に確認されたもので，第51号住居跡の南側19mに位置している。北側で第62号住居跡，南東側で第63号住居跡，西側で第64号住居跡と重複している。また，中央で第366・367・368土壙と重複している。住居跡と土壙との新旧関係は不明である。

平面形は，重複のため径7.6m（推定）の円形状と思われる。壁はやや硬く，北側から東側にかけて残っており，ロームブロックを主とした土を掘りこんで，床面からほぼ垂直に立ち上がっている。床面はロームブロックを含み，やや硬く締まっている。また，全体的に平坦である。ピットは9か所検出され，規模は径26～46cm・深さ20～46cmである。その中でもP_3～P_5・P_7・P_8は深さが一定しており，炉を囲んで五角形に配列されているので，主柱穴と考えられる。炉は，中央に検出され，長径64cm・短径50cmの楕円形で，床面を13cm堀りこんだ地床炉である。炉床は左半分がよく焼けているが，炉の覆土には焼土量が少ない。

覆土は5層からなり，主に褐色土・明褐色土が堆積している。

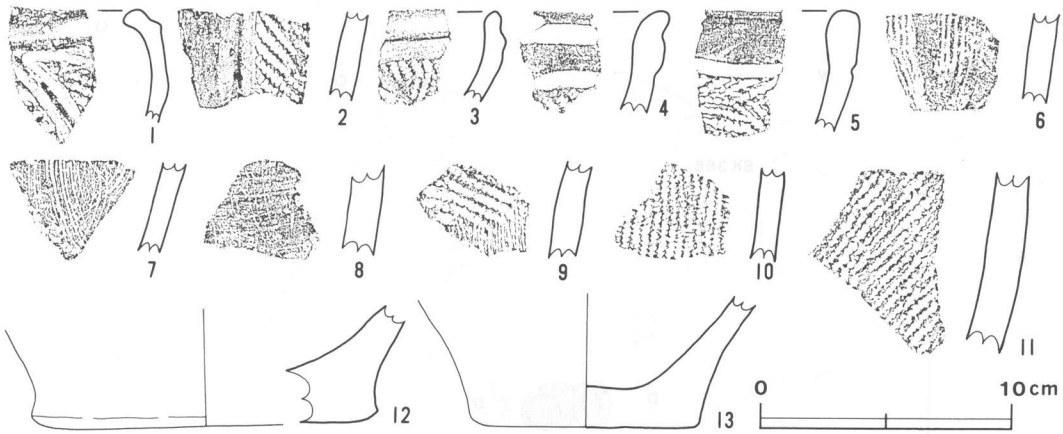
遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。



第163図　第60号住居跡実測図

第60号住居跡出土遺物（第164図１～13）

１～８と11～13は，本跡の覆土から出土したもので，９は，本跡と第63号住居跡の重複部分の覆土から出土したものである。10は，本跡の南東側の壁近くに，本跡を切り込んで検出された土壙の覆土から出土したものである。１は，両側にナゾリが加えられた細い隆線により文様が施された薄手の口縁部片である。２・３は，微隆線による施文が主となるもので，３は口縁部片，２は胴部片である。４は，口縁部文様帯が沈線で構成されるもので，区画内に縄文が充填されている。５は，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下に縄文が施されている。６～８は，条線文が施された胴部片である。９は，縄文と条線文が併用された胴部片である。10・11は，縄文だけが施



第164図　第60号住居跡出土遺物実測図・拓影図

された胴部片である。10の縄文は，条が縦走するように斜位回転されている。

12は，本跡の覆土から出土した厚手の底部片である。外面は縦ナデを施し，底面の近くは横ナデが加えられている。内面も横ナデである。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は灰褐色を呈している。推定底径は13.8cmで，現存高は4.6cmである。

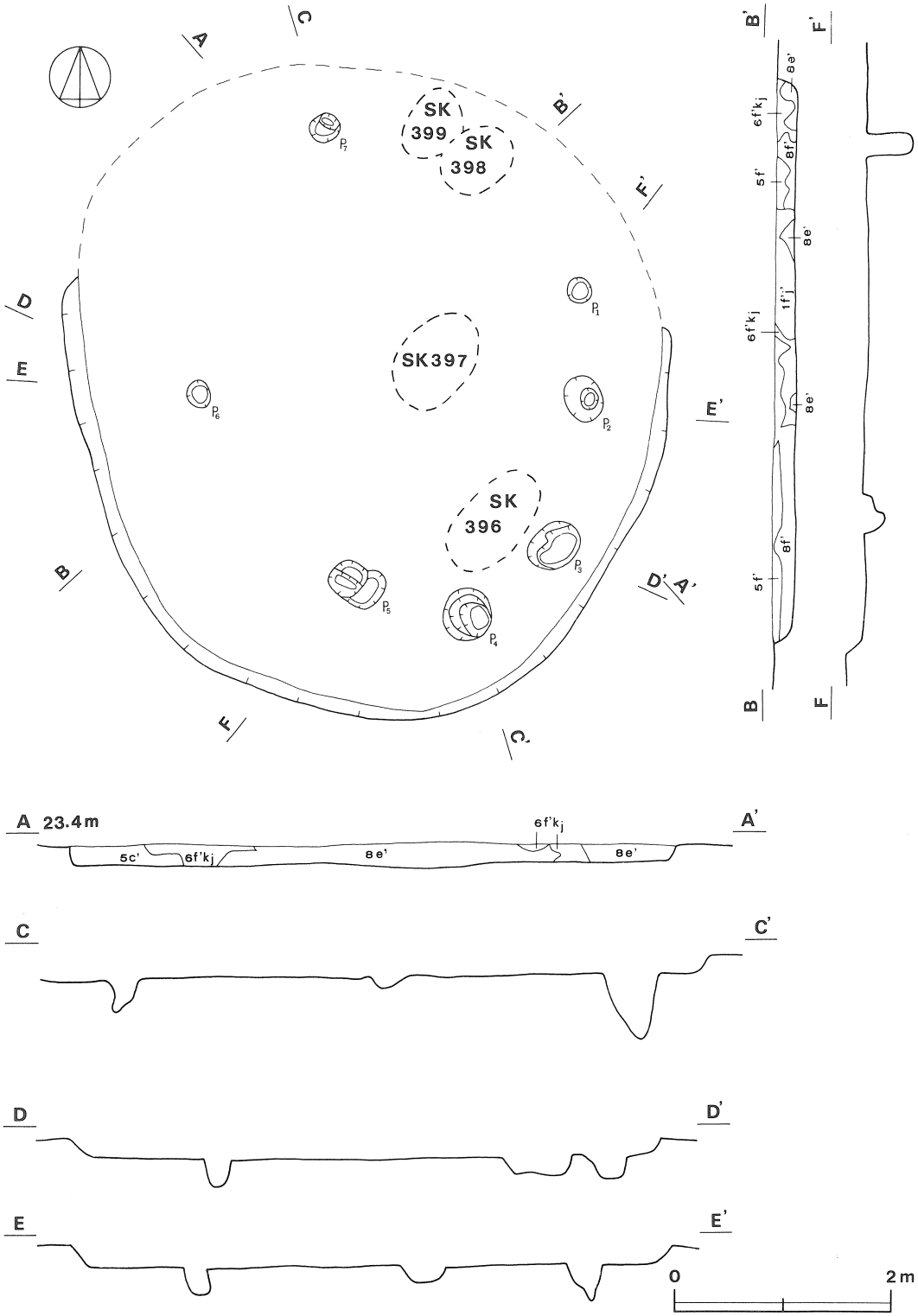
13は，本跡の覆土から出土した底部片である。外面は縦ナデが加えられ，底面の近くは横ナデが施されている。内面には炭化物が少し付着している。胎土には大粒の石英，長石粒をきわめて多量に混入し，粗い。焼成は良好である。色調は外面がにぶい赤褐色，内面が灰褐色を呈している。底径は9.0cmで，現存高は5.3cmである。

本跡から出土した土器は少なく，明確な時期決定をすることはむずかしいが，加曽利EⅢ～Ⅳ式期にかけてのものと考えられる。

第61号住居跡（第165図）

本跡は，遺跡の南部I4c_7区を中心に確認されたもので，第46号住居跡の南側19mに位置している。北側で第72・73号住居跡と重複している。また，中央の床面で第396～399号土壙と重複している。新旧関係は不明である。

平面形は，重複のため長径6.1m（推定）・短径5.5mの楕円形状と思われる。長径方向は，N－14°－Wを指している。壁は北壁・北西壁が欠損し，東壁から西壁にかけて残っており，ローム粒子を含み軟らかい。南西側で床面から外傾して立ち上がっているほかは，垂直に立ち上がっている。壁高は，11～15cmで，南壁がやや低くなっている。床面はハードロームブロックを含み，軟らかく，北西側がやや低く，ほぼ平坦である。ピットは7か所検出され，規模は径24～50cm・深さ24～61cmである。その中でもP_1・P_5・P_6・P_7は位置や深さが一定しており，主柱穴と思わ



第165図　第61号住居跡実測図

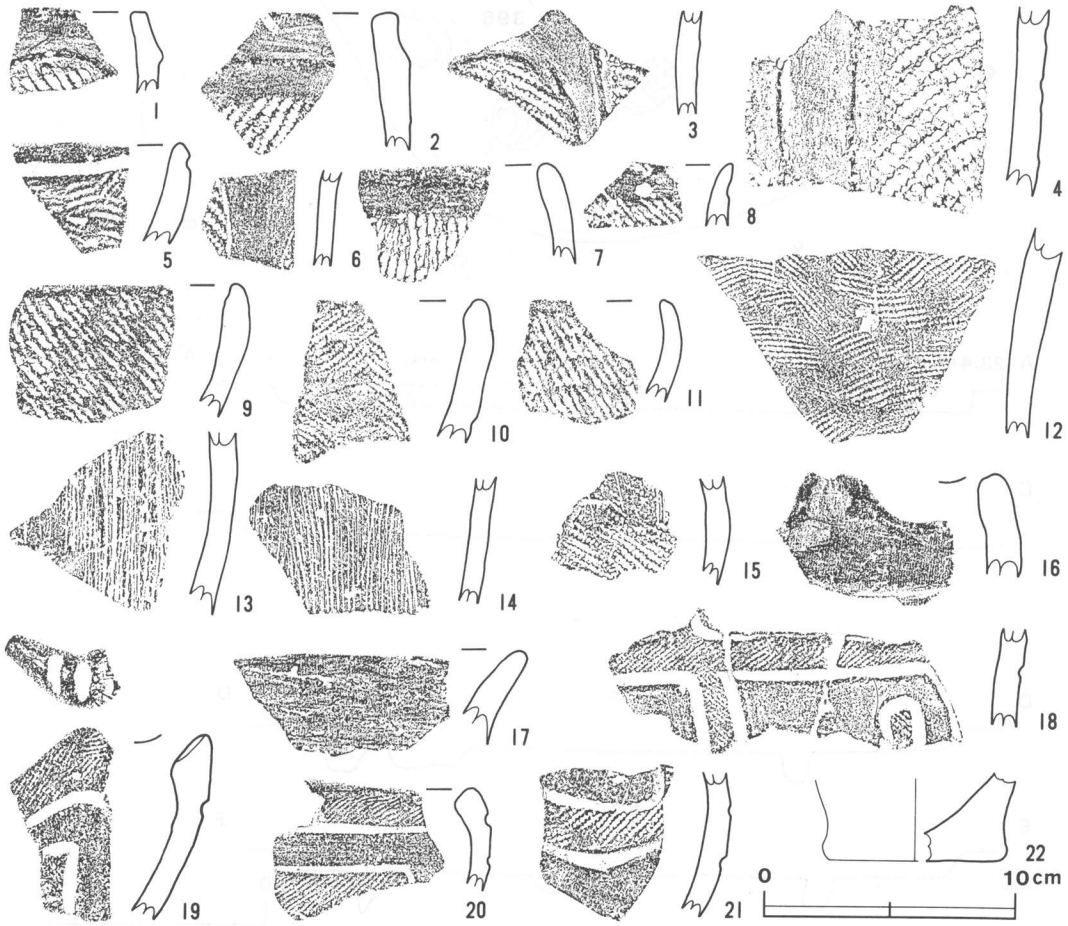
れる。炉は，検出されていない。

覆土は５層で，主に暗褐色土・褐色土・明褐色土が堆積している。一部攪乱もみられるが，自然堆積である。２～５層は締まっている。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量，床面から７点出土している。

第61号住居跡出土土器（第166図１～22）

１～４は，微隆線による施文が主となるものである。１・２は，口縁部片で，３・４は，胴部片である。１の区画内には無節縄文が，２には単節縄文が施文されている。２の胎土には，大粒の長石，石英粒を多く含み粗い。３は薄手で，４はやや厚手である。５は，口縁直下に１条の沈線を巡らし，以下に無節縄文を施している。６は，細い沈線による曲線的区画内に縄文が充塡された胴部の小片で，薄手である。７・８は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文が施されている。７の縄文は，無節で条が縦走している。８は，薄手で口唇部が尖り気味である。９～12は，縄文



第166図　第61号住居跡出土遺物実測図・拓影図

だけが施文されたもので，9～11は口縁部片で，12は胴部片である。9は，全面に無節縄文Lが縦位回転で施されている。10は，やや厚手で，単節縄文が付され，11は，薄手で無節縄文が施されている。12の破片上端部は，輪積み部分で剝がれている。13・14は，縦位の条線文が施された胴部片である。15は，縄文地文上に条線文が重ねられた胴部片である。16は，双頭状の突起を有する口縁部片で，口縁部無文帯を1条の沈線で区画している。17は，無文の口縁部片で，口端に向けて器厚を減じており，外反している。18～21は，沈線で器面全体に幾何学的モチーフが施されたもので，19・20は口縁部片，18・21は胴部片である。区画内には縄文が充塡されている。18は，本跡の覆土から出土した土器片と，第72号住居跡，第11号溝の覆土から出土した破片が接合した胴部片である。19の区画沈線は太く，口唇部は内側に肥厚している。山形突起の内面には3条の抉(えぐ)りが付されている。20の沈線は細めであり，器壁も薄いが，口唇部は内側に肥厚している。21の内面下半部には炭化物の付着がみられる。

22は，本跡の覆土から出土した部厚い底部片であるが，器面の磨滅が著しい。外面は横ナデにより調整されているが，内面は剝落が激しく調整は不明である。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定底径は7.4cmで，現存高は3.2cmである。

本跡から出土した土器は少なく，しかも各時期の土器片が混在しており，本跡の明確な時期決定はむずかしいが，加曽利EⅣ式期，称名寺式期の土器片が多いことから，本跡の時期は，加曽利EⅣ式期から称名寺式期にかけての時期と考えられる。

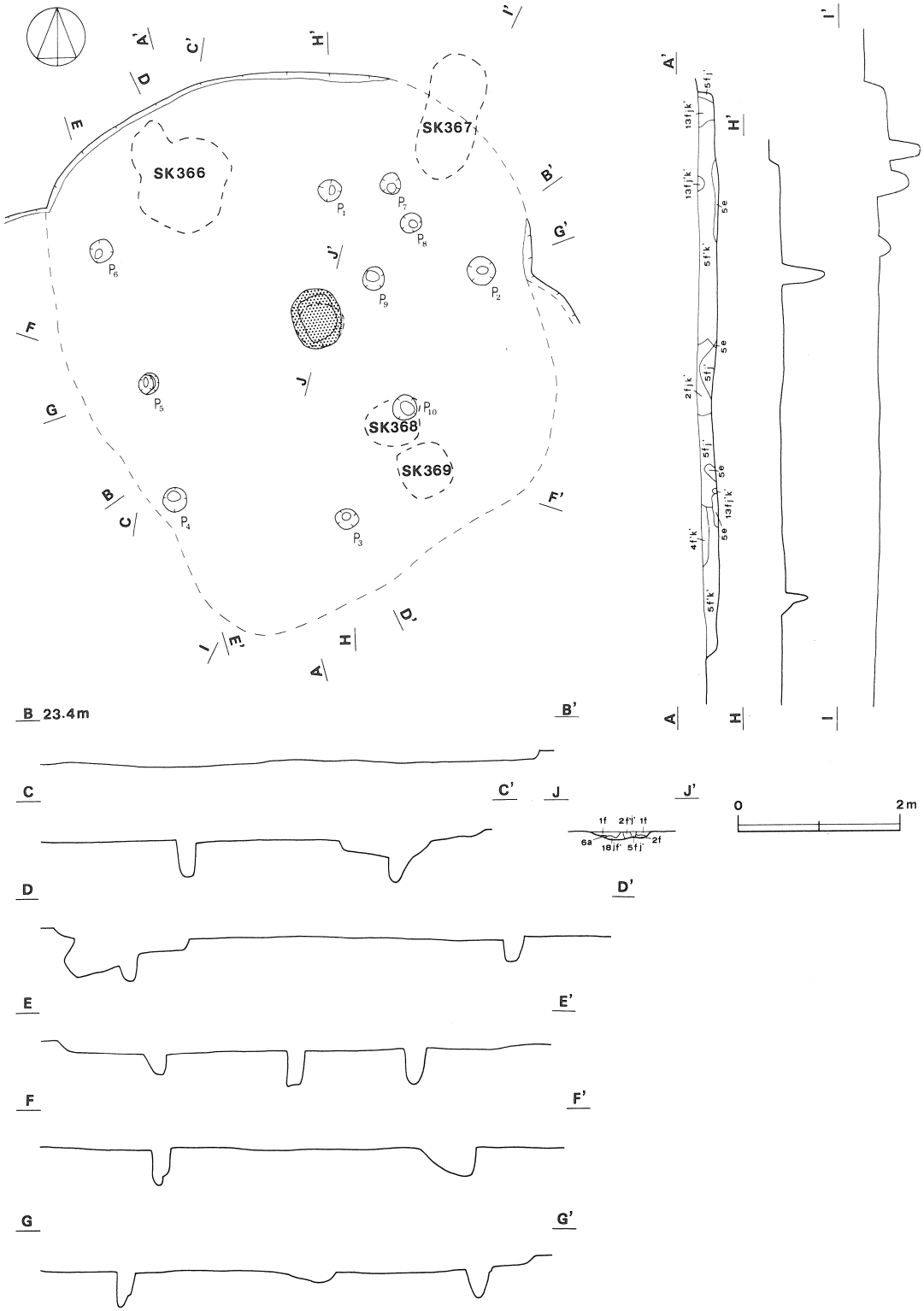
第62号住居跡（第167図）

本跡は，遺跡の南部H5h_1区を中心に確認されたもので，第51号住居跡の南側17mに位置している。南側で第60・63号住居跡，西側で第64号住居跡と重複している。新旧関係は，第60・63号住居とでは不明であるが，第64号住居跡とでは炉とピットの切り合いから本跡が古いと考えられる。

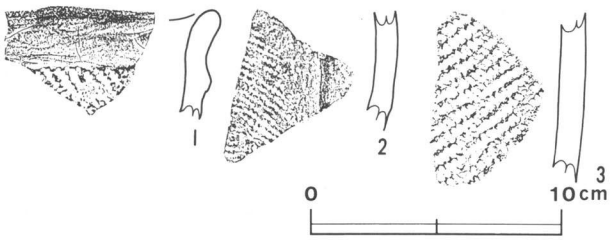
平面形は，重複のため長径6.2m（推定）短径5.5m（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，N－22°－Eを指している。壁は北壁・北西壁だけ残っており，ソフトロームで軟らかく，床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，14cmである。床面はハードロームブロックを含み，炉付近ではよく踏み固められている。ピットは10か所検出され，規模は径26～48cm・深さ15～67cmである。その中でもP_1～P_5は深さが一定しており，炉を囲んで五角形状に配列されているので，主柱穴と考えられる。炉は本跡の中央に検出され，径72cmの略円形で，床面を11cm掘り凹めた地床炉である。中央の炉床がわずかに熱をうけて赤化しているだけで焼土量も少なく，使用期間が短かかったと思われる。なお，炉の南側は，第64号住居跡のP_1のため一部壊されている。

覆土は第60号住居跡と同じく5層からなり，主に褐色土・明褐色土が堆積している。

遺物は，縄文土器片及び石器が床面から6点出土している。



第167図　第62号住居跡実測図



第168図　第62号住居跡出土遺物拓影図

第62号住居跡出土土器（第168図１～３）

１は，緩い波状を呈する口縁部片で，無文帯と縄文施文部との境は，ナゾリによりわずかに隆起している。２は，鈍い断面三角形の隆線で区画が施されている胴部片である。３は，縄文だけの胴部片で，胎土には大粒の石英粒などを含んでいる。

本跡から出土した土器は非常に少なく，本跡の時期決定はむずかしいが，住居跡の重複関係等を加味すれば，加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

第63号住居跡（第169図）

本跡は，遺跡の南部H5i_2区を中心に確認されたもので，第51号住居跡の南側17ｍに位置している。北側で第60・62号住居跡，南側で第67・76～78号住居跡，西側で第64号住居跡と重複している。新旧関係は不明である。

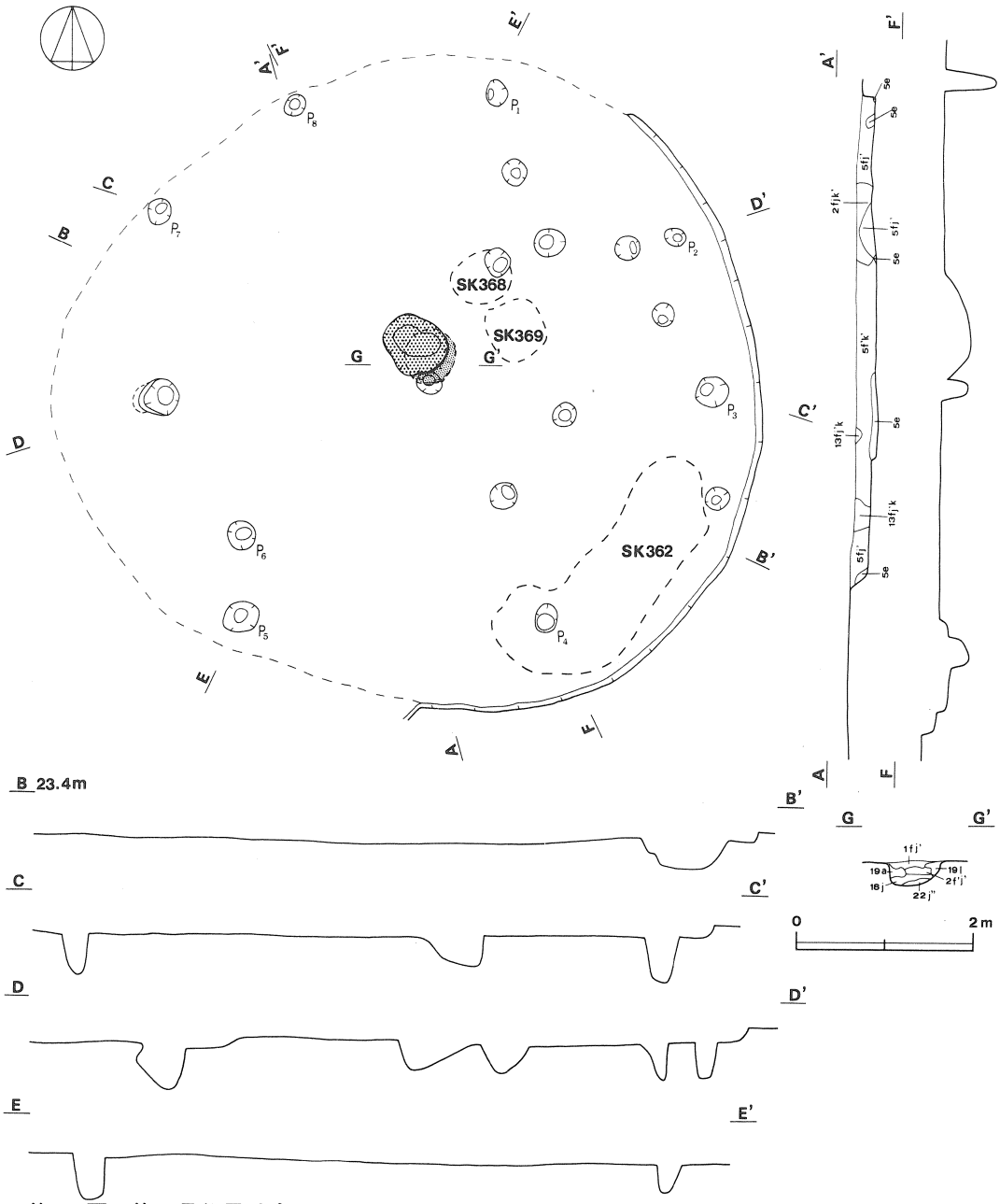
平面形は，重複のため径7.8ｍ（推定）の円形状と思われる。壁は東壁・南壁だけ残存しており，ロームブロックを含み，軟らかく，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は，20cmである。床面はハードロームブロックを含むソフトロームで，平坦である。あまり踏み固められた様子はなく，軟弱である。ピットは16か所検出され，規模は径28～44cm・深さ24～41cmである。P_1・P_3・P_6・P_7は深さが一定し，炉をを囲んで四角形に配列されているので主柱穴と考えられる。炉は本跡の中央に検出され，径74cmの略円形で，床面を26cm掘り凹めた地床炉である。炉壁と炉床は熱を受け，長期間の使用がうかがえる。焼土の一部は南東側にかき出されたように広がっている。

覆土は６層からなり，主に黒褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。全層とも締まっている。

遺物は，縄文土器片および石器が覆土から９点，床面から14点出土している。

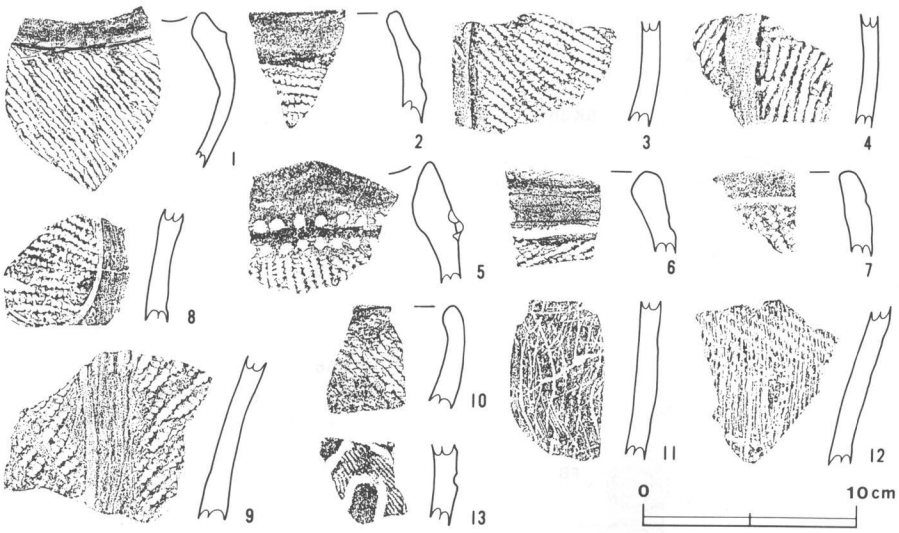
第63号住居跡出土土器（第170図１～13）

１・２は，１条の微隆線によって口縁部無文帯が区画され，以下に縄文が施されている。１は，内湾が著しく，無節縄文が施文されている。３・４は，微隆線による施文がなされている胴部片である。５は，緩い山形突起を有している口縁部片で，やや太めの貼付隆線により無文帯と縄文部分を区画している。隆線の上下に深めの円形刺突文列が付されている。６は，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下に縄文が施されている。口唇部は肥厚している。７・９は，他の図示してない２点とともに本跡のピット６の覆土から出土したもので，同一個体と考えられる。ピット６は，一部が袋状を呈し，第64号住居跡のＡ炉の西北端部を切り込んで作られている。７は口



第169図　第63号住居跡実測図

縁部片で，沈線で口縁部文様帯を区画し，胴部には9からみれば，幅の狭い磨消懸垂文が垂下している。9の外面には炭化物の付着がみられ，内面は剥落している。8は，沈線による曲線的モチーフ内に縄文が充填されている胴部片である。10は，無節縄文が施されている口縁部片である。11・12は，条線文が施された胴部片である。12は，縄文を施文後に条線文が加えられている。13



第170図　第63号住居跡出土遺物拓影図

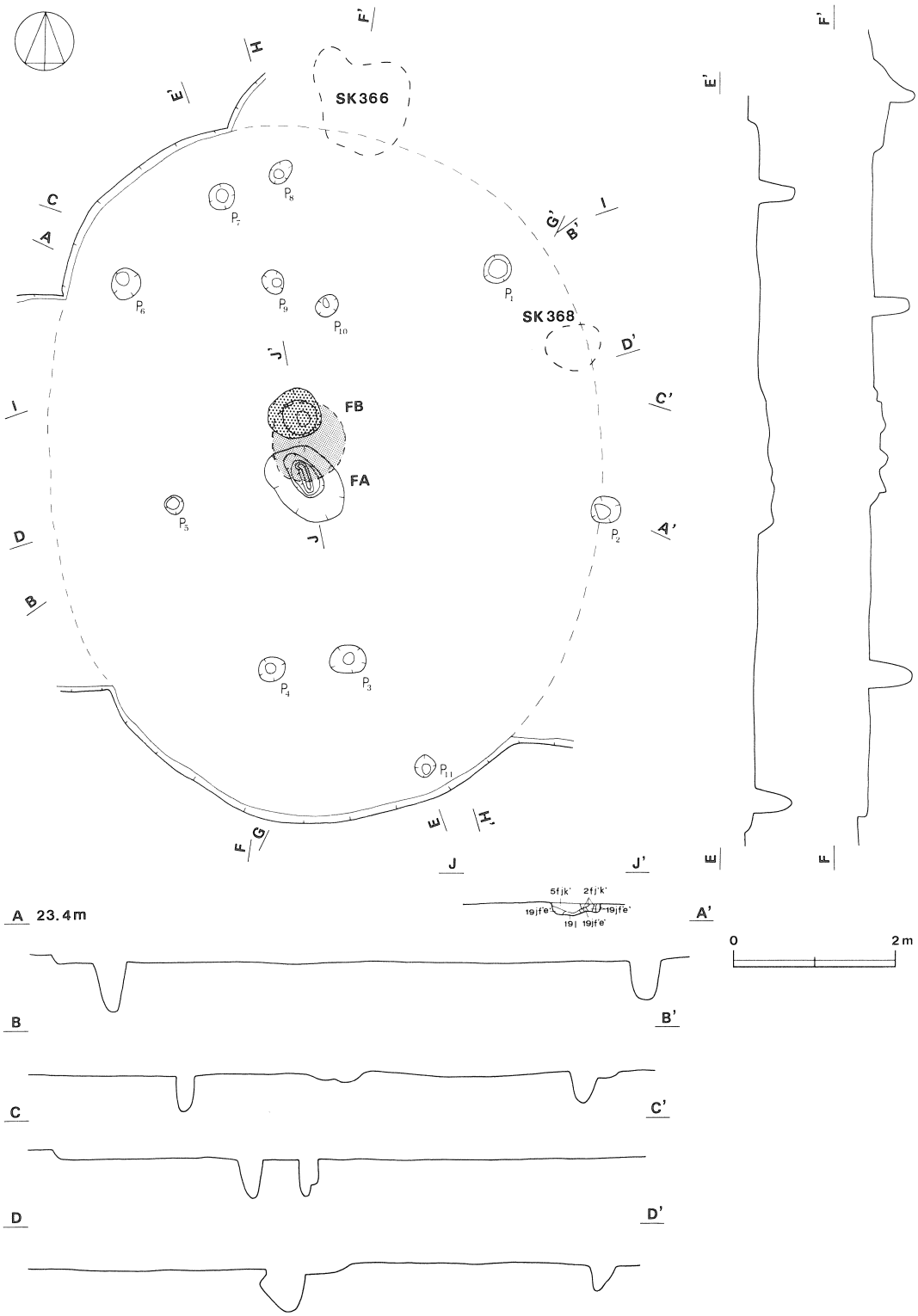
は，太い沈線による区画内に細縄文が充塡されている胴部片である。

本跡から出土した土器は少ないが，加曽利ＥⅢ式，加曽利ＥⅣ式，称名寺式期の土器片が含まれている。本跡の時期は，ピット６から出土した土器片を根拠として加曽利ＥⅢ式期と推定できる。なお，重複，切り合い関係から本跡より古いと判断された第62，64号住居跡も当然加曽利ＥⅢ式期の所産と思われる。

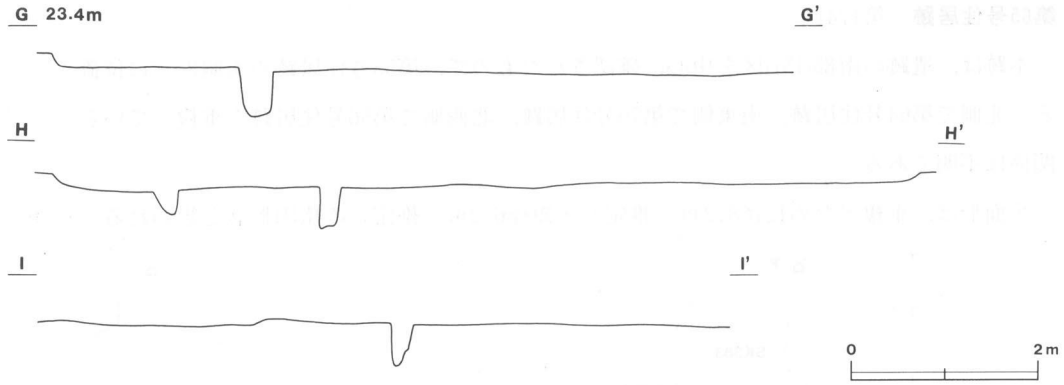
第64号住居跡（第171・172図）

本跡は，遺跡の南部H5i_1区を中心に確認されたもので，第58号住居跡の北側３ｍに位置している。北東側で第60・62・63号住居跡，南東側で第67・76号住居跡，南西側で第65号住居跡，西側で第56号住居跡と重複している。新旧関係は不明である。

平面形は，重複のため長径8.6m（推定）・短径7.2m（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，N－19°－Wを指している。壁は北西側の一部と南側だけ残っており，ハードロームブロックを含み，褐色土である。南壁は床面から外傾して立ち上がり，北西壁は垂直に立ち上がっており，いずれも軟らかい壁である。壁高は，７～13cmである。床面はロームブロックを含み，軟らかく，平坦である。ピットは11か所検出され，規模は径26～44cm・深さ20～62cmである。P_1～P_8は炉をとり囲むように，壁にそって円形状に配列されている。この８か所が主柱穴と考えられる。炉は，２基確認されている。ともに中央にあり，ＦＡは長径61cm・短径36cm・深さ21cmの楕円形で，ＦＢは径66cm・深さ20cmの円形である。ＦＡ・ＦＢとも地床炉である。ＦＡの炉床はそれ程熱をうけていないが，ＦＢの炉床は赤く焼けている。両炉はほぼ20cm離れており，両者の新旧関係は明らかではない。



第171図　第64号住居跡実測図　(1)



第172図　第64号住居跡実測図（2）

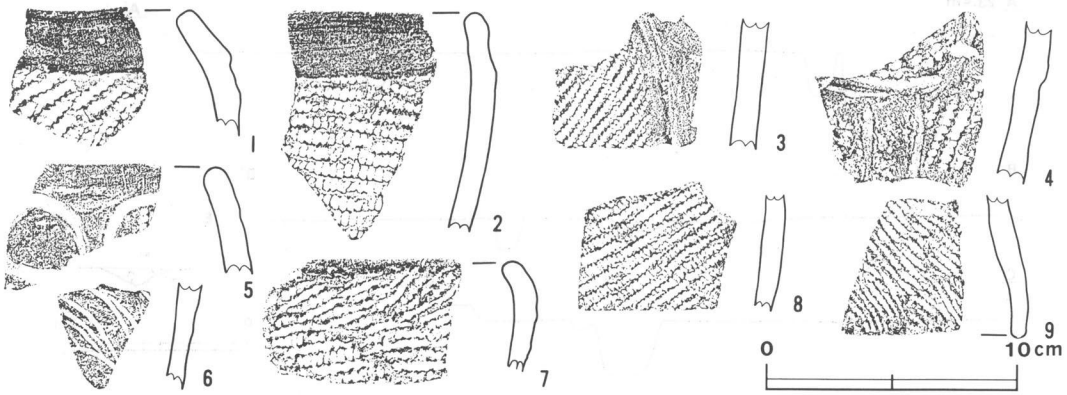
覆土はローム粒子・焼土粒子を含む褐色土層が主体をなしている。

遺物は，縄文土器片及び石器が覆土から少量，床面から５点出土している。

第64号住居跡出土土器（第173図１～９）

１・２は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文が施されている。両者の境は，ナゾリによりわずかに微隆線状を呈している。３は，微隆線による区画文が施されている胴部片である。４・５は第63号住居跡のピット６から出土したものと同一個体と考えられる。５は，口縁部文様帯を沈線で楕円形に区画している。４からみると，胴部には磨消懸垂文が施されている。本跡と第63号住居跡との相互関係を示している。６は，無文地に雑な沈線文が付されている胴部の小片である。７～９は，縄文だけが施されている。７は口縁部片で，８は胴部片である。９は台付器の台部片と考えられる。

本跡から出土した土器は少ないが，他の住居跡との重複関係と出土土器の様相からみると，本跡の時期は加曽利ＥⅢ式期と推定される。

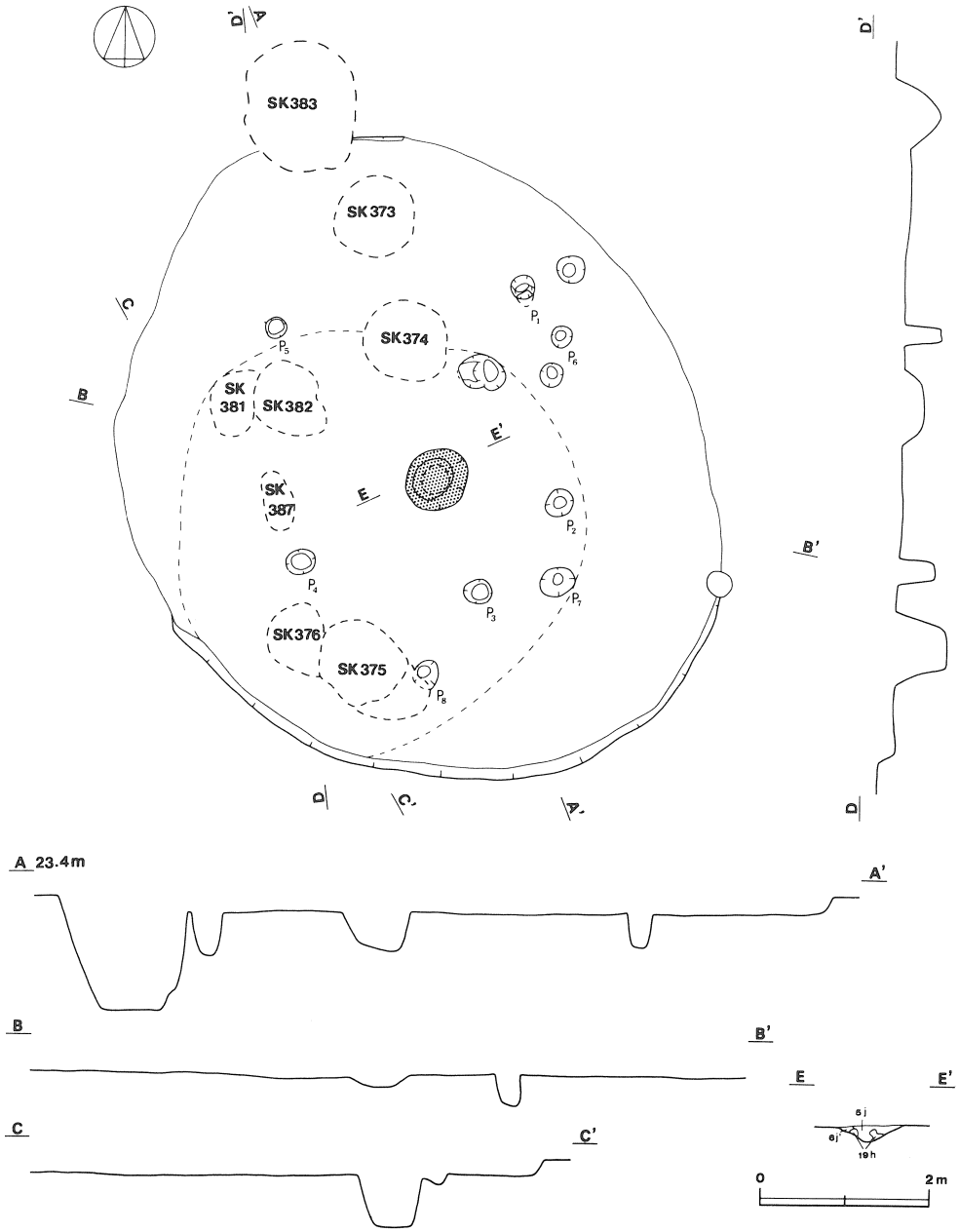


第173図　第64号住居跡出土遺物拓影図

第65号住居跡（第174図）

本跡は，遺跡の南部H5i_1区を中心に確認されたもので，第53号住居跡の南側20ｍに位置している。北側で第64号住居跡，南東側で第76号住居跡，北西側で第56号住居跡と重複している。新旧関係は不明である。

平面形は，重複のため長径8.2ｍ（推定）・短径6.2ｍ（推定）の楕円形状と思われる。長径方



第174図　第65号住居跡実測図

向は，N－32°－Wを指している。壁は南側・西側だけ残存している。南壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり，西壁は外傾して立ち上がっている。いずれもソフトロームで軟らかい。壁高は，16～22cmである。床面は少量のハードロームブロックを含み，やや軟らかい。ピットは11か所検出され，規模は径24～40cm・深さ36～46cmである。P_1～P_5は炉を囲んで五角形に配列され，深さが一定しているので，主柱穴と考えられる。炉は，本跡の中央に検出され，長径68cmの楕円形で，床面を10cm掘り凹めた地床炉である。炉壁は赤く焼けていたが，炉床はそれほど赤く焼けていないので，長期間の使用ではないように思われる。

覆土は第56号住居跡と同じく，4層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。

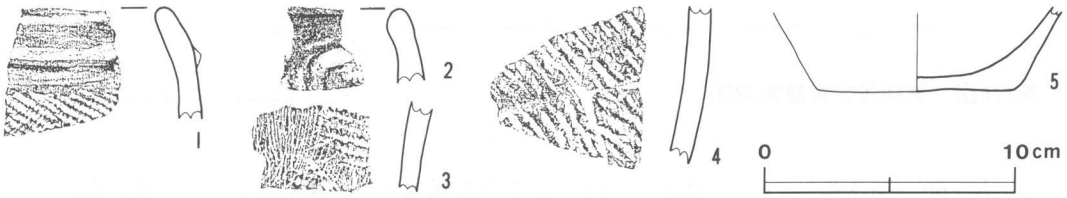
遺物は，縄文土器片が覆土から微量出土している。

第65号住居跡出土土器（第175図1～5）

1は，口縁部無文帯を1条の貼付隆線で区画し，以下に単節縄文が施文されている。2は，沈線で文様帯が構成されている口縁部片である。3は，縄文と条線文が併用されている胴部片である。4は，粗い無節縄文が施された胴部片である。

5は，本跡の南側の覆土から出土した深鉢形土器の底部片である。かなり薄手のもので，大きめの平底を呈している。内外面とも横ナデにより調整が行われているが，外面は磨滅が著しい。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は外面が黄褐色，内面が暗褐色を呈している。底径は7.9cmで，現存高は3.3cmである。

本跡から出土した土器片は非常に少なく，時期決定の資料としては乏しいが，加曽利EⅢ式期と考えられる。

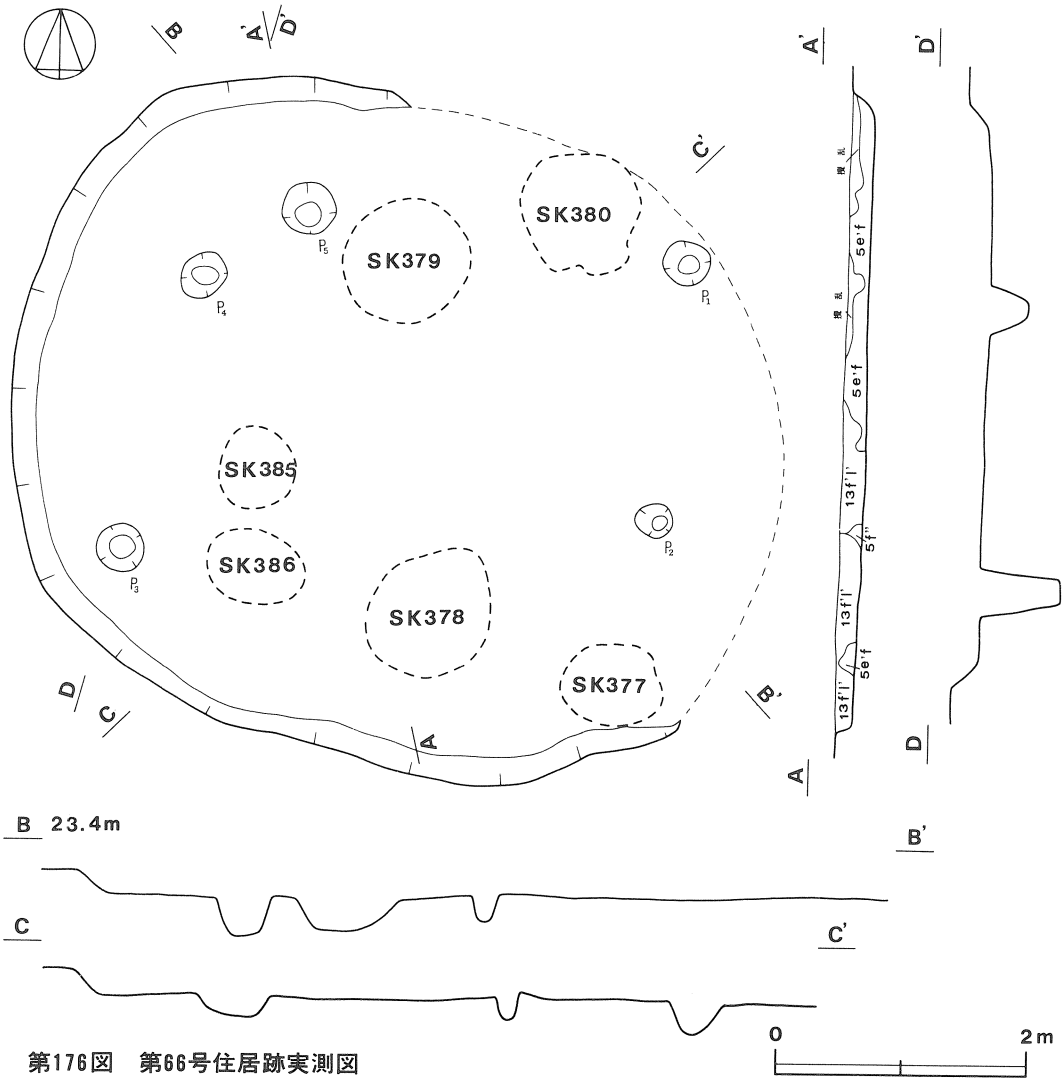


第175図　第65号住居跡出土遺物実測図・拓影図

第66号住居跡（第176図）

本跡は，遺跡の南部H4i_9区を中心に確認されたもので，第50号住居跡の東側12mに位置している。東側で第56号住居跡と重複している。また，床面内で第377～380・385・386号土壙と重複している。新旧関係は，第56号住居跡とでは不明であるが，土壙とでは底面の切り合いから，本跡がいずれの土壙よりも古いと考えられる。

平面形は，重複のため長径6.2m（推定）・短径5.0m（推定）の楕円形状と思われる。長径方



第176図　第66号住居跡実測図

向は，N－60°－Wを指している。壁はハードロームを含む褐色土で，硬く締まっている。また，重複のため北東側・東側が欠損している。南側が床面から外傾して立ち上がるほかは，緩やかに外傾して立ち上がっている。壁高は，18～22cmである。床面は全体的に平坦であるが，あまり踏み固められた様子はみられない。中央から北西側にかけてやや低くなっている。ピットは5か所検出され，規模は径34～42cm・深さ31～64cmで，円形状に配列されている。P_3は少し大きめのピットである。南側にもピットがあったと思われるが，第378号土壙のため欠損したものと考えられる。5か所とも配列から主柱穴と思われる。炉は，検出されていない。

覆土は主に黒褐色土・褐色土が浅く堆積している。

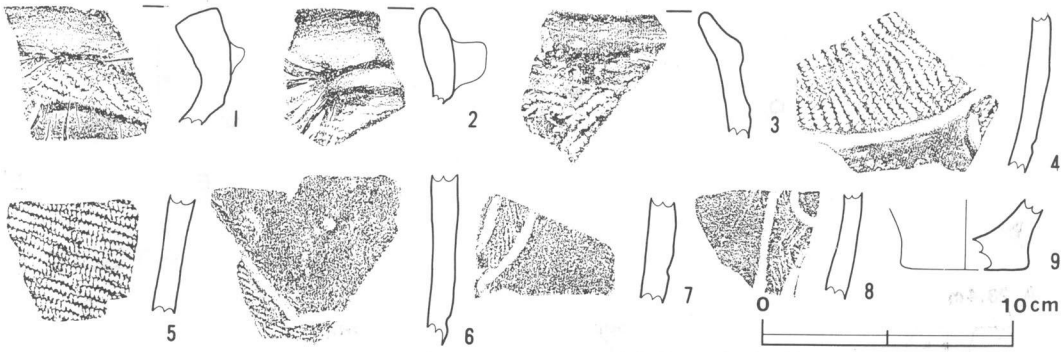
遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第66号住居跡出土土器（第177図１～９）

１・２は，微隆線で曲線的モチーフが描かれている口縁部片である。１の口唇部は著しく肥厚し，口唇上面は平坦に作出されている。２は，無文帯直下に左右からのせり上りによる突出部を形成している。３は，口縁部無文帯を１条の微隆線で区画し，以下に縄文が施されている。４は，沈線区画内に単節縄文が充塡されている胴部片である。５は，縄文だけが施された胴部片である。６～８は，太めの沈線による幾何学的区画内に細縄文が充塡されている胴部片である。６の胎土には，大粒の長石や石英粒が多量に混入されており，粗雑である。

９は，本跡の床面から出土した底部片である。小さな平底を呈し，外面は縦方向の丁寧なナデが施されている。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。推定底径は4.8cm，現存高は2.8cmである。

本跡も出土土器片が少なく，明確な時期比定はむずかしいが，加曽利ＥⅣ式期，称名寺式期の土器片が目立つことから，本跡の時期は，加曽利ＥⅣ式期から称名寺式期にかけての時期と考えられる。

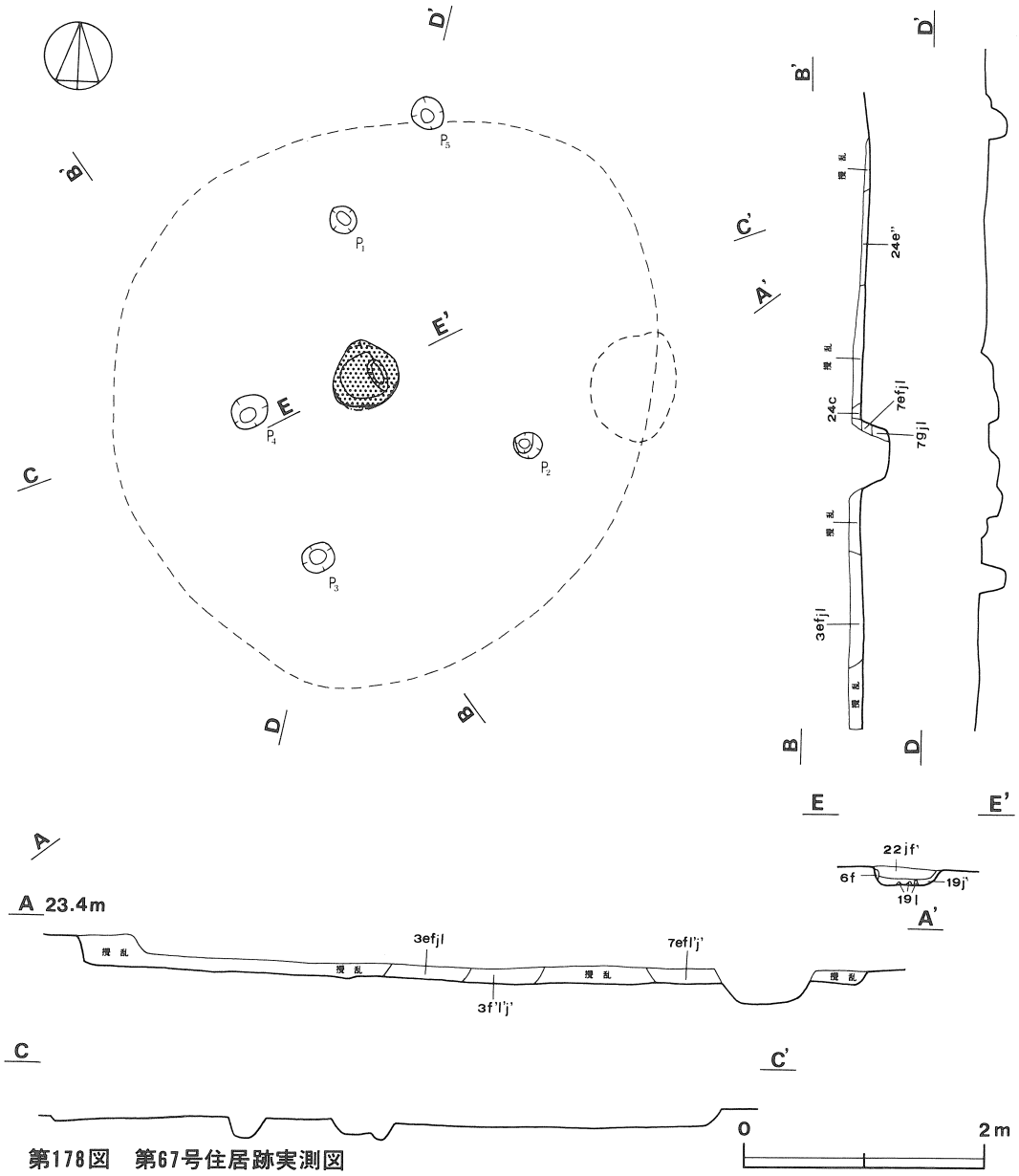


第177図　第66号住居跡出土遺物実測図・拓影図

第67号住居跡（第178図）

本跡は，遺跡の南部H5i_2区を中心に確認されたもので，第66号住居跡の東側10mに位置している。東側で第77号住居跡，南西側で第76号住居跡，南側で第79号住居と重複し，第78号住居跡の内側に検出されている。新旧関係は，第76・78・79号住居跡とでは不明であるが，第77号住居跡とでは本跡の炉と第77号住居跡のピットの切り合いから本跡が新しいと考えられる。

平面形は，重複のため長径4.9m（推定）・短径4.3m（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，N－38°－Eを指している。第78号住居跡内にあるため，同住居跡を確認する際本跡の壁を欠損したため，壁は検出されていない。床面はロームブロックを含み，平坦である。ピットは５か所検出され，規模は径24～32cm・深さ12～17cmと比較的浅い。その中でもP_1～P_4は深さが一定



第178図　第67号住居跡実測図

し，炉を囲んで対角線上に配列されているので，主柱穴と考えられる。炉は，本跡の中央からやや西側に検出され，径64cmの円形で，床面を11cm掘り凹めた地床炉である。炉床と炉壁は赤く硬く焼けている。炉の南東側には第77号住居跡のP_9が重複している。重複している第78号住居跡の炉よりも，本跡の炉が数cm高いレベルにある。

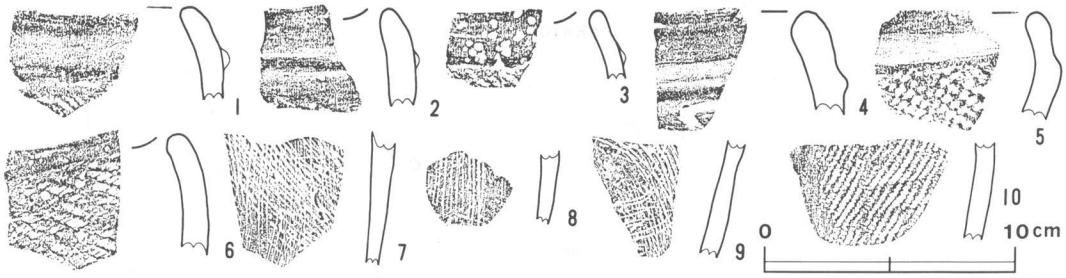
覆土はロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を含む褐色土・黄褐色土がうすく堆積している。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第67号住居跡出土土器（第179図１～10）

１～３・８は，本跡と第76号住居跡の重複部分の覆土から出土したものである。１～３は，口縁部無文帯を１条の貼付の微隆線で区画し，以下に縄文が施されている。４～７，９・10は，本跡と第77号住居跡の重複部分の覆土から出土したものである。４は，口縁部に浅い１条の凹線を巡らし，胴部には沈線文を施している。５は，口縁部無文帯を１条の凹線で区画し，以下に縄文が施されている。６は，無節縄文が全面に付されている口縁部片である。７～９は，条線文が付されている胴部片で，７は粗い斜格子目状，８は縦位，９は曲線的に施文されている。10は，縄文だけが施された胴部片である。

本跡から出土した土器は少なく，明確な出土状況を示す土器も無いために，時期決定はむずかしいが，１～３などから加曽利ＥⅣ式期前後の時期と推定される。



第179図　第67号住居跡出土遺物拓影図

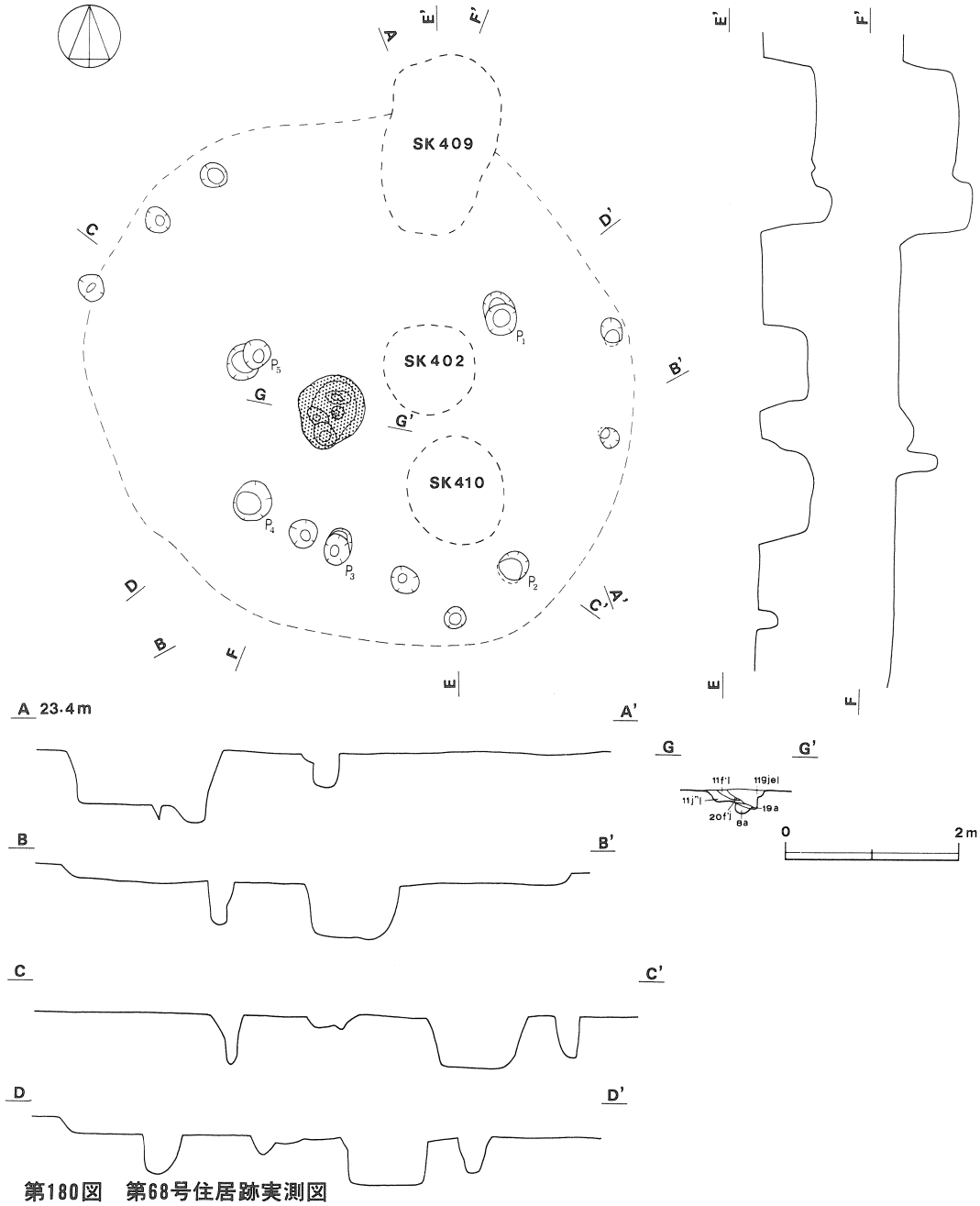
第68号住居跡（第180図）

本跡は，遺跡の南部I4b$_9$区を中心に確認されたもので，第61号住居跡の東側0.5ｍに位置している。北側で第59号住居跡，南側で第69号住居跡と重複している。新旧関係は，第59号住居跡とでは不明であるが，第69号住居跡とでは炉とピットの切り合いから本跡が古いと考えられる。

平面形は，重複のため長径6.6ｍ（推定）・短径6.0ｍ（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，N－41°－Wを指している。壁は重複のため西側の一部しか残っていないが，ロームブロックを含みやや軟らかく，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は，20cmほどである。床面はソフトロームで軟らかく，全体的に平坦であるが，南東側は少し高くなっている。ピットは13か所検出され，規模は径26～46cm・深さ22～50cmである。全体として南側に片寄っていて不規則なため，主柱穴は判別できない。炉は，中央に検出され，径84cmの円形で，床面を28cm掘り凹めた地床炉である。炉床と炉壁は強く熱をうけ赤化している。西・北側が東側よりも赤く焼けている。なお，南側は第69号住居跡のピット（P_4）によって，一部削られている。

覆土はローム粒子・焼土粒子を少し含む暗褐色土がうすく堆積している。

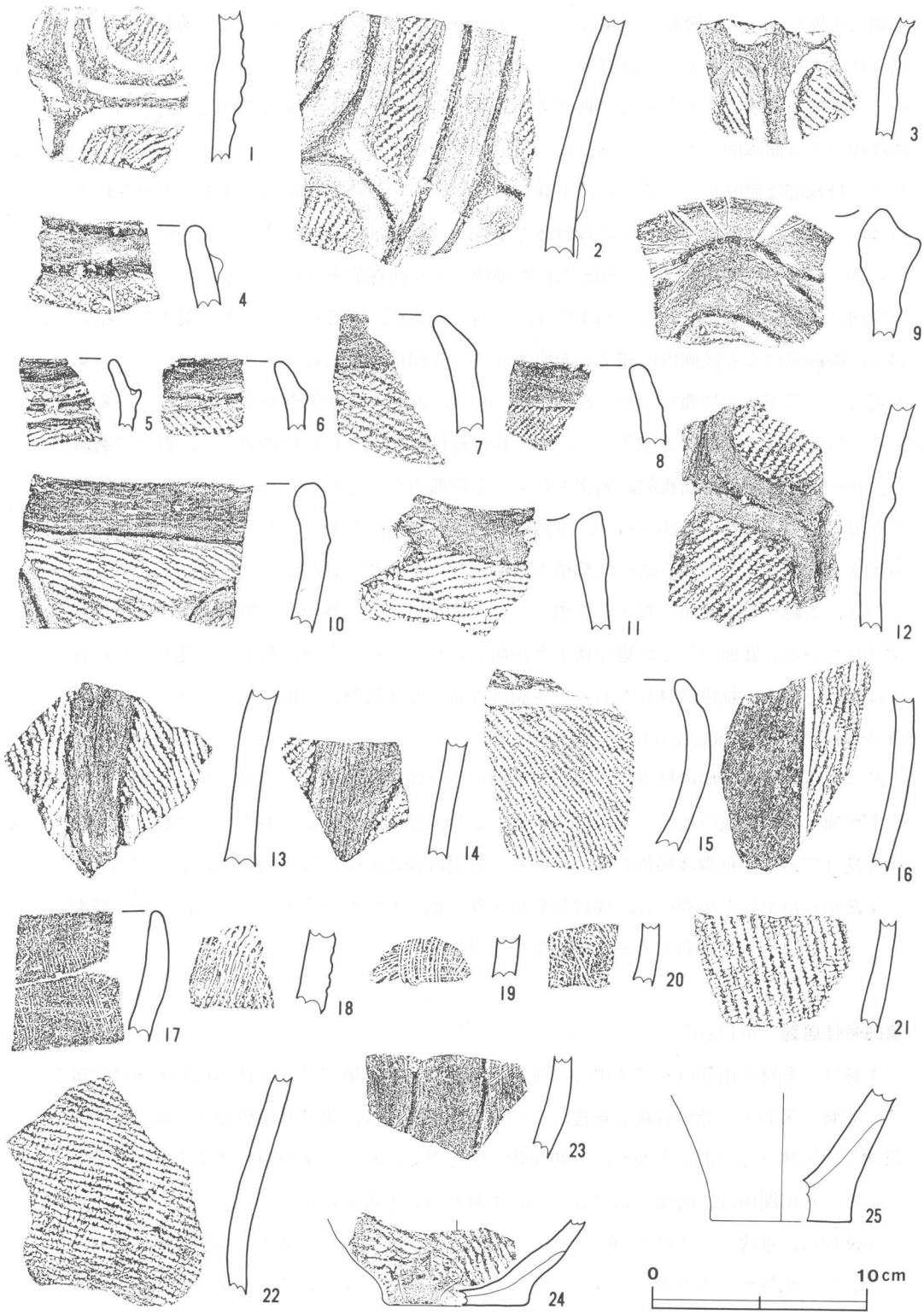
遺物は，縄文土器片および石器が覆土から73点，床面から７点出土している。



第180図　第68号住居跡実測図

第68号住居跡出土土器（第181図１～25）

１・２は，隆線により曲線的モチーフが描かれている胴部片である。１の隆線は低平で，２の隆線は高く，断面三角形に近いものである。３は，くびれ部片で，U字状，逆U字状を呈する沈線区画内に縄文が充填されている。４は，口縁部無文帯を１条の太めの貼付隆線で区画し，以下



第181図　第68号住居跡出土遺物実測図・拓影図

に縄文を施している。隆線の上位はナゾリが加えられている。5～8は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文を施している。5は薄手の口縁部片で，無文帯を区画している隆線は，高く突出している。隆線の上端には上方からの刺突文が付されている。7は口縁部の内傾が著しい。9・10は，微隆線による曲線的モチーフが描かれている口縁部片である。9は，緩い波状を呈する口縁部片で，口縁部は肥厚している。10は平縁である。9・10ともに区画内に縄文が充塡されている。11は，「入」字状をなす珍しい口縁形態を呈している。口縁部無文帯を有し，以下に縄文を施している。12は，両側にナゾリが加えられた隆線により曲線的モチーフが描かれている胴部片で，区画内に縄文が付されている。胎土には，長石，石英粒，雲母片などが多く混入され粗い。13・14は，微隆線による区画内に縄文が充塡されている胴部片である。15は，口縁直下に一条の沈線を巡らし，以下全面に縄文が施されている。16は，直線的な磨消懸垂文が施されている胴部片である。17～20は，条線文が施されている。17は縦位に施文された口縁部片で，器面の磨滅が激しい。18～20は乱雑に，曲線的に施文されている胴部の小片である。21・22は，縄文だけが付された胴部片である。なお，20・21は，本跡の炉内から出土したものである。23は，微隆線だけによる施文の胴部片で，拓本上端には輪積み強化のためのキザミ目が認められる。

24は，本跡の炉の北側の覆土から出土した底部片である。外面には無節縄文Lが縦位回転で施文されている。底面の近くは雑な横ナデが加えられている。内面は縦ナデが施されている。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は外面が暗灰褐色，内面が褐色を呈している。推定底径は6.8cmで，現存高は4.0cmである。

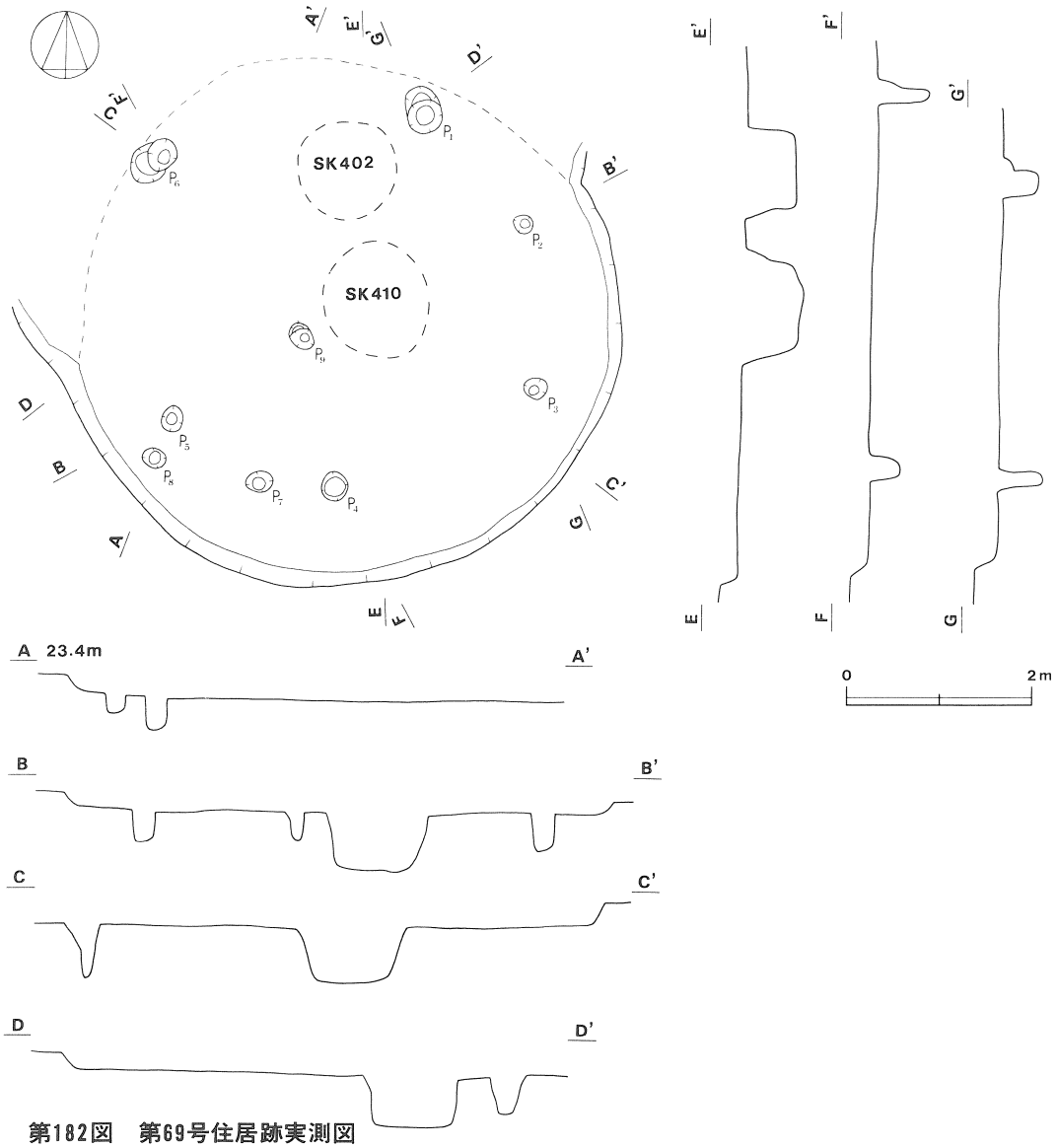
25は，本跡の南西側の壁寄りの覆土から出土した底部片である。部厚い平底を呈し，外面は縦ナデが施され，底面の近くと内面は横ナデにより調整されている。胎土には砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定底径は6.6cmで，現存高は5.8cmである。

本跡から出土した土器には，加曽利EⅢ・Ⅳ式期のものが目立っているが，本跡の時期は，新しい方の加曽利EⅣ式期と考える方が妥当と思われる。

第69号住居跡（第182図）

本跡は，遺跡の南部I4c$_9$区を中心に確認されたもので，第57号住居跡の南側8mに位置している。北側で第59・68号住居跡と重複している。新旧関係は，第59号住居跡とでは不明であるが，第68号住居跡とでは前記の通り，本跡が新しいと考えられる。また中央で第410号土壙と重複している。新旧関係は，底面の切り合いから本跡が古いと考えられる。

平面形は，重複のため径5.8m（推定）の円形状と思われる。壁は北東側から西側にかけ欠損しており，東側から南西側にかけて約半分が残っている。ロームブロックを含むソフトロームで軟らかく，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は，14～22cmである。床面はハードロームブ



第182図　第69号住居跡実測図

ロックを含み，硬く締まっていて平坦である。ピットは９か所検出され，規模はP_1・P_6を除いて，径20～30cm・深さ31～49cmである。P_1（径50cm・深さ40cm）・P_6（52cm・深さ59cm）は大きく，二段に掘りこまれている。P_2～P_5は床面の中央部をとり囲むように配列され，深さもほぼ一定しているので，主柱穴と考えられる。炉は，検出されていないが，第410号土壙の覆土の１・２層から多量の焼土が認められるため，この土壙のために中央にあった炉が破壊されたと考えられる。

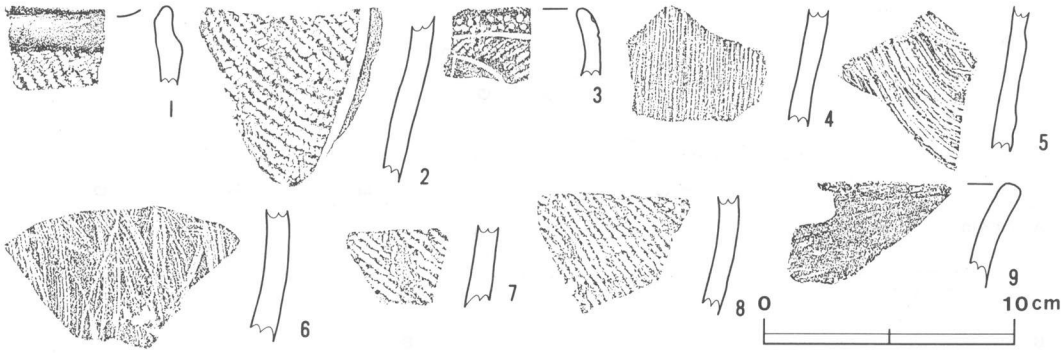
覆土は第68号住居跡とほぼ同じく１層で，暗褐色土が堆積している。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第69号住居跡出土土器（第183図１～９）

１・３・５・６・９の５点は，本跡の炉（第410号土壙の覆土上位）内から出土したもので，２・４・７・８の４点は，覆土内から出土したものである。１は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文が施されている。２は，沈線区画内に縄文が充填されている。３は，薄手の口縁部片で，口縁直下に小さな刺突列を２段に施している。以下に細い沈線による区画内に縄文が施されている。４～６は，条線文が付されている胴部片である。４は密で縦位に，５は曲線的に，６は乱雑な格子目状に施文されている。７・８は，無節縄文だけが施文された胴部片である。９は，無文の口縁部片で，外反している。

本跡から出土した土器は少なく，明確な時期比定はむずかしいが，炉内出土土器から判断すれば，加曽利ＥⅣ式期と考えられる。



第183図　第69号住居跡出土遺物拓影図

第70号住居跡（第184図）

本跡は，遺跡の南部H4i_8区を中心に確認されたもので，第66号住居跡の南西側0.5ｍに位置している。東側で第57号住居跡，南側で第71号住居跡と重複している。新旧関係は不明である。

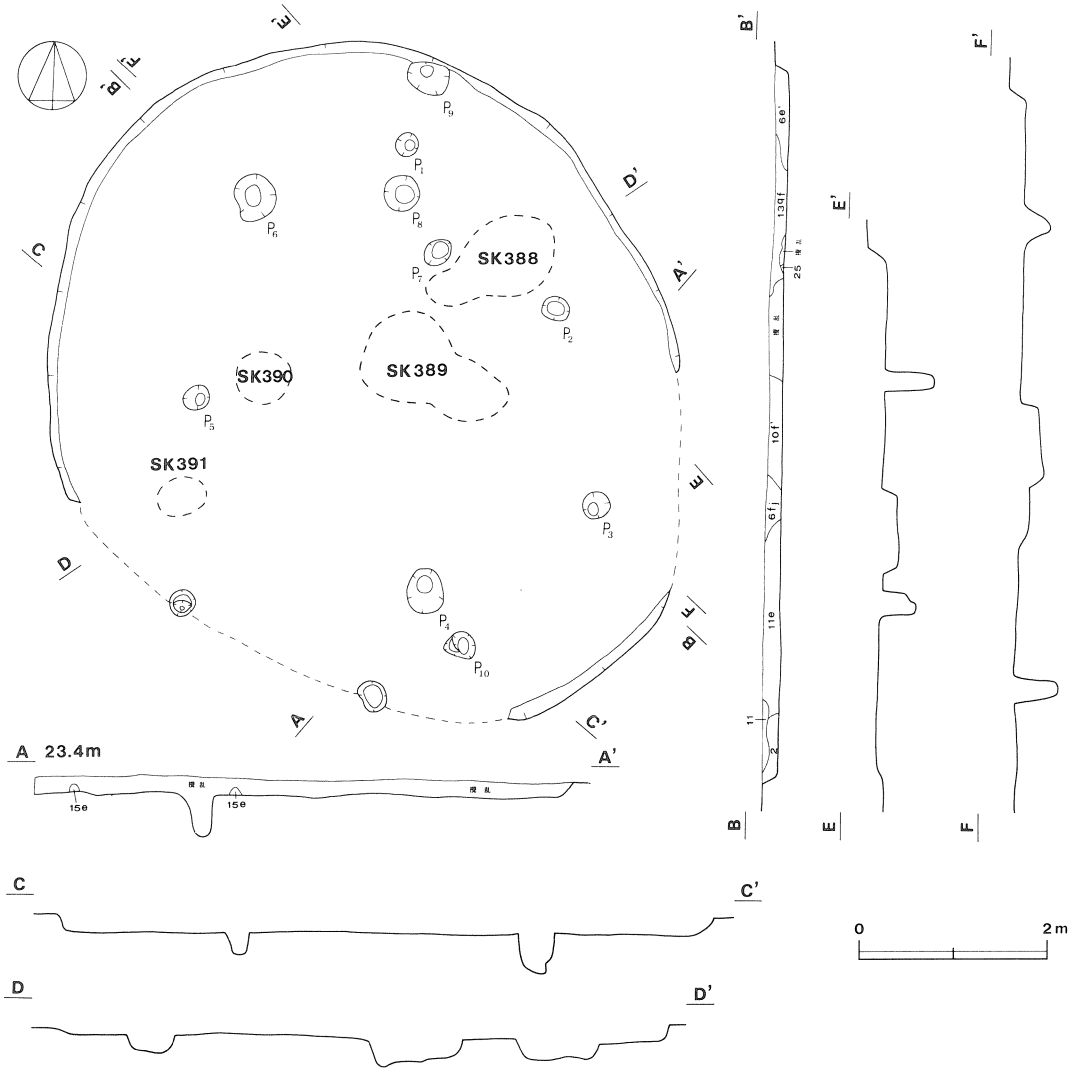
平面形は，長径7.6ｍ・短径6.4ｍの楕円形である。長径方向は，N－30°－Wを指している。壁は重複のため南東側の一部と東側・北側だけ残っており，ロームブロックを含み，軟らかく，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，18cmである。本跡の床面は，重複している他の住居跡の床面よりも４cm低く，ハードロームを含み，踏み固められて硬く，平坦である。ピットは10か所検出され，規模は径50cmほどの円形のものが多く，深さは23cmから52cmである。不規則な配列のため，主柱穴は判別できない。炉は，検出されていない。

覆土は９層からなり，主に黒褐色土・橙色土・褐色土・極暗褐色土・にぶい褐色土が堆積している。

遺物は，縄文土器片及び石器が覆土中から少量出土している。

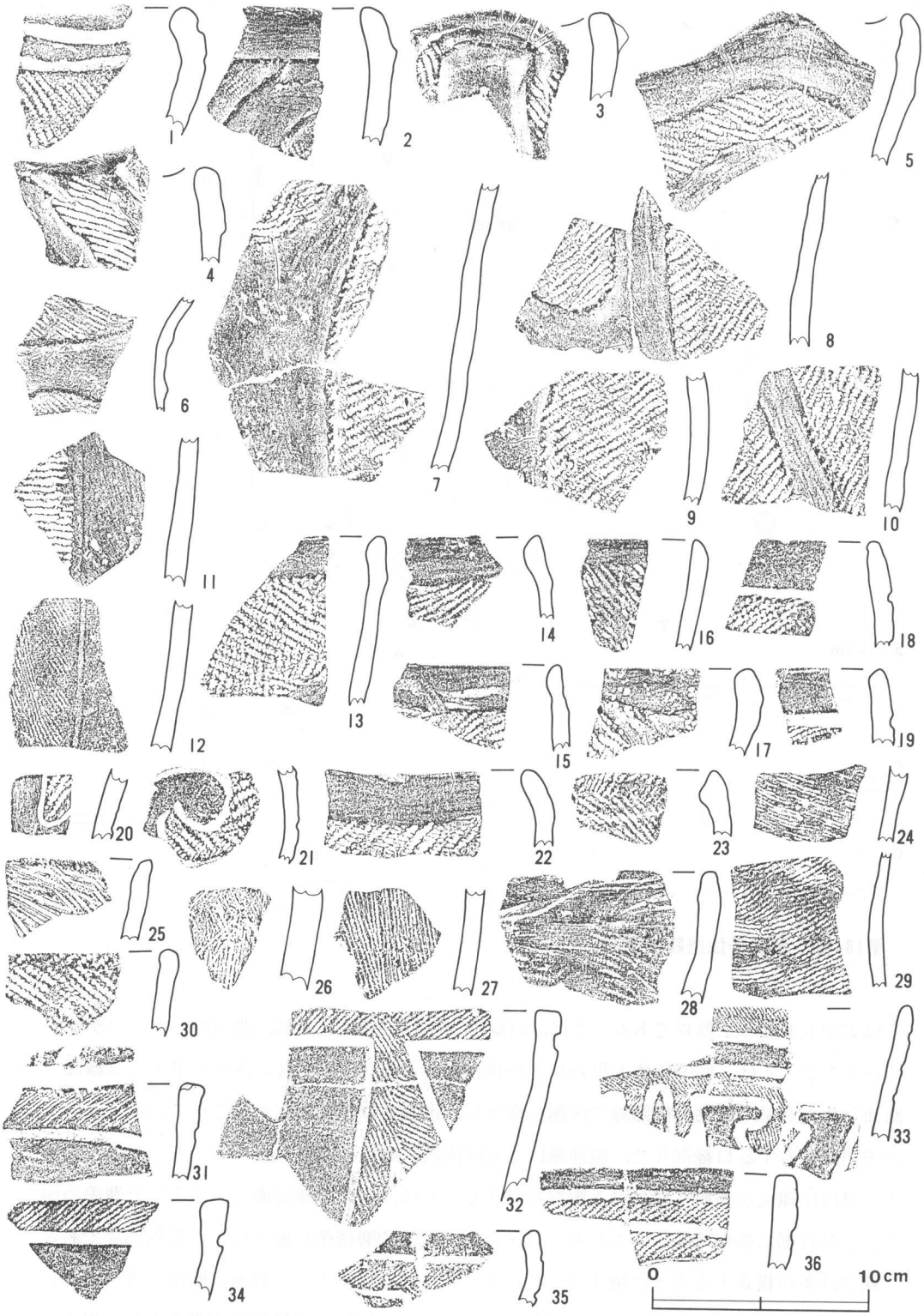
第70号住居跡出土土器（第185～186図１～48）

１は，口縁部に２条の太い沈線を巡らし，以下に縄文が施されている。２～10は，微隆線によ



第184図　第70号住居跡実測図

る施文が主となる土器片である。2は，口縁部に無文帯を残し，胴部に曲線的モチーフが構成されている。3・4は，同一個体と思われるが接合はできなかった。緩い波状を呈する口縁部片で，断面三角形を呈する貼付微隆線で区画を構成し，区画外に無節縄文が施されている。5は，山形の波頂部を有する口縁部片で，微隆線による区画内に縄文を充塡している。6～10は，曲線的モチーフ内に縄文が充塡されている胴部片である。6は，本跡の確認面から出土した薄手の胴部片で，くびれ部に強い湾曲がみられる。11・12は，直線的磨消帯が施されている胴部片である。11の縄文は条が横走するように施文されている。12の縄文は細かく，器面の磨滅が著しい。13は，微隆線による施文が施されている口縁部片である。14～16は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文



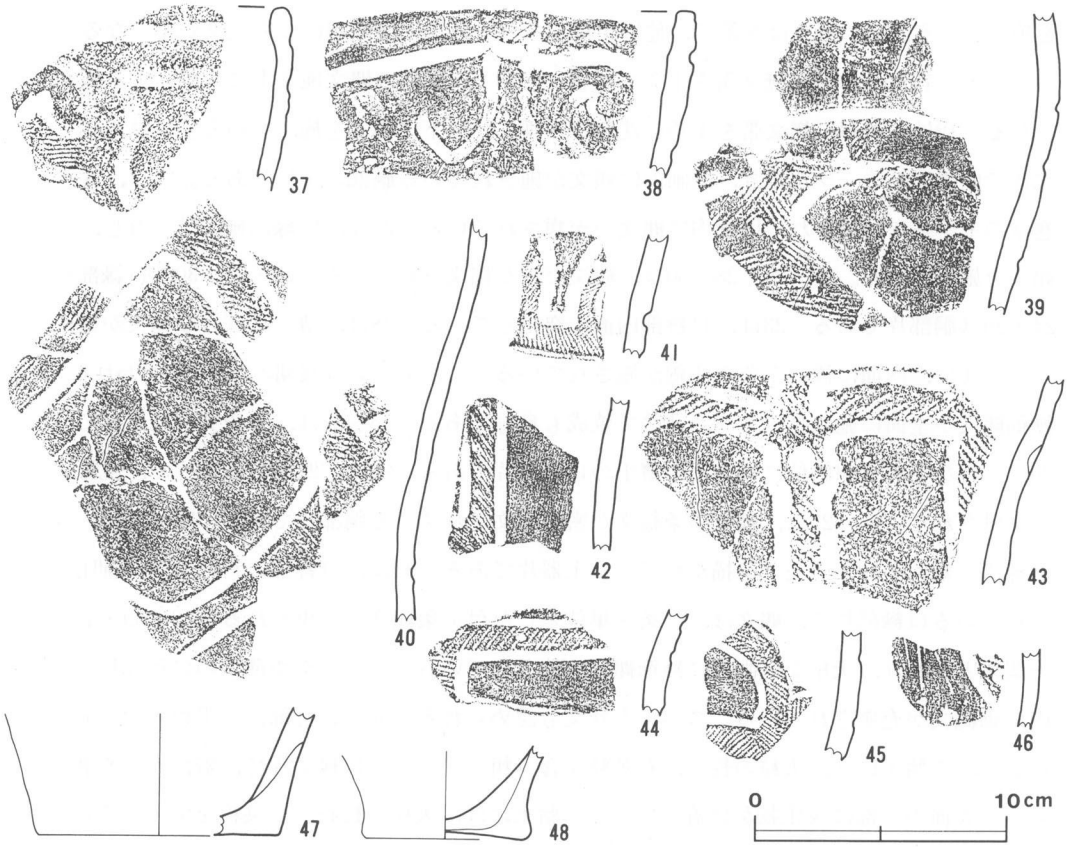
第185図　第70号住居跡出土遺物拓影図　(1)

を施している。16の縄文は無節で，他は単節である。17は，微隆線による施文が主となる口縁部片である。18は，口縁部無文帯を１条の沈線で区切り，胴部の縄文地文上に沈線による施文がみられる。19は，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下に縄文を施している。20は，細く鋭い沈線で曲線的モチーフを描き，区画内に縄文が施されている胴部の小片である。21は，沈線で渦巻状のモチーフが描かれ，区画内に縄文が充填されている。22は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文を施している。23・24・28～30は，縄文だけが施文されている。23・28・30は口縁部片で，24・29は胴部片である。23は，口唇部内面が突出している。28は，薄くまばらな縄文が施されている。30は，内面に浅い１条の沈線が施されているので，あるいは後期のものかと思われる。29は，無節縄文が全面に施されており，薄手で焼成も良好である。25～27は，条線文が施されている。25は，雑な条線文が斜位に施された薄手の口縁部片である。26は，厚手の胴部片で，乱雑に条線文が付されている。27は，縦位の条線文が密に施文されている胴部片である。31～46は，太めの沈線で，幾何学的モチーフが描かれている土器片である。31は，口唇部に斜位の強い押圧が加えられている口縁部片で，縄文は，２条を単位とした付加条縄文かと思われる。32・39・40は，同一個体と思われ，大柄な区画内に無節縄文が施されている。33は，やや薄手の口縁部片で，区画内に細縄文が充填されている。スペード状文も認められる。34の口唇部は，平坦で少し肥厚している。35の胎土には，大粒の長石，石英粒を含み粗い。37は，口縁部片で，器面がやや磨滅している。外面の一部に炭化物が付着している。胎土には，大粒の長石，石英粒を混入していて粗雑である。38は，無文地上に沈線で文様が描かれている口縁部片で，縄文は付されていない。口縁直下に１条の沈線を巡らし，この沈線から「Ｊ」字状を呈するモチーフが降下している。拓本の右側は，器面の磨滅が激しい。41は，太めの沈線で幾何学的区画を描き，区画内に細縄文を充填している胴部片である。42・44・45も，同様な胴部片である。43は，胴部片で，かなり太い沈線で幾向学的モチーフが構成され，縦位の区画内に大きめの円形刺突文が付されており，特徴的である。胎土には大粒の長石，石英粒が多量に混入し，粗雑である。46は，胴部の小片で，沈線区画内の縄文上に円形竹管文を加えている。

47は，本跡の覆土から出土した底部片で，比較的大形の平底である。外面は縦ナデが顕著に施され，内面は軽いナデが加えられている。底面の中央部は少し薄くなっている。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は明褐色を呈している。推定底径は9.7㎝で，現存高は4.8㎝である。

48は，本跡の覆土から出土した底部片で，底部は少し突出気味である。底面の中央部は少し凹み，薄くなっている。内外面とも横ナデにより調整されている。胎土には粗砂を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。底径は6.8㎝で，現存高は3.3㎝である。

本跡から出土した土器の大半は，加曽利ＥⅣ式期から称名寺式期にかけての時期のものである。したがって，本跡の時期も加曽利ＥⅣ式期から称名寺式期にかけてのものと考えられる。

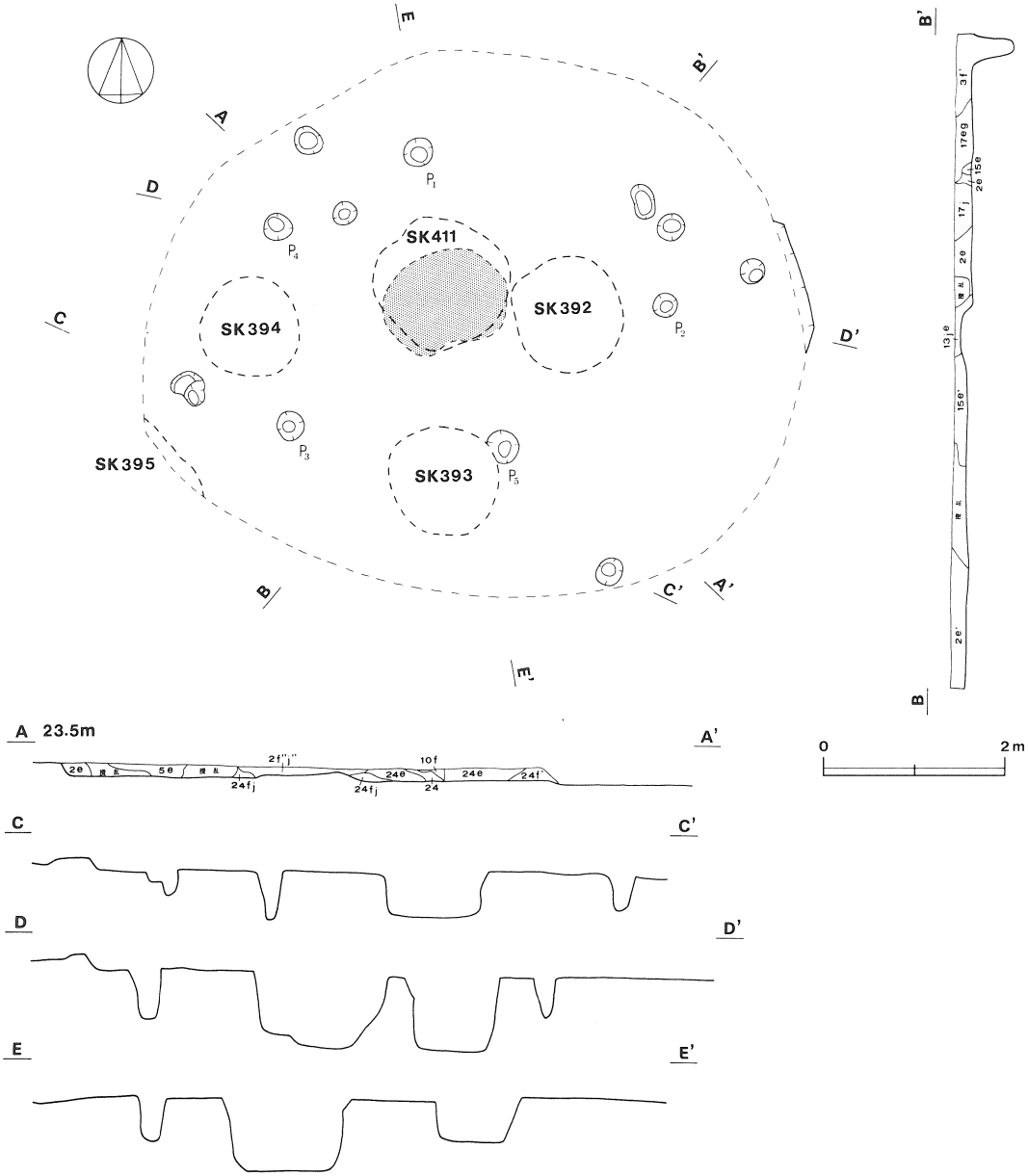


第186図　第70号住居跡出土遺物実測図・拓影図　(2)

第71号住居跡（第187図）

本跡は，遺跡の南部I4a$_8$区を中心に確認されたもので，第57号住居跡の南西側４ｍに位置している。北側で第70号住居跡，東側で第59号住居跡，南側で第72・73号住居跡，西側で第394号土壙，中央で第392・393・411号土壙と重複している。新旧関係は，第411号土壙とでは本跡が古いが，ほかの住居跡・土壙とでは不明である。

平面形は，重複のため長径7.2ｍ（推定）・短径6.4ｍ（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，N－49°－Eを指している。壁は東側の一部だけ残存している。ロームブロックを含み軟らかく，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，19cmである。床面はロームブロックを含み，かなり踏み締められ硬く，土壙との重複によってやや凹凸がある。また，北東側が高く，南西・南東側が低くなっている。ピットは12か所検出され，規模は径28～38cm・深さ18～61cmである。その中でもP_1～P_5は，規模やその配列などから主柱穴と考えられる。また柱穴間の距離がほぼ等間隔である。炉は検出されていないが，第411号土壙のほとんどの層に焼土が多量に含まれているので，土壙によって壊されたと考えられる。



第187図　第71号住居跡実測図

覆土は９層からなり，１・２層は耕作により攪乱をうけているが，残りの大部分の層は自然堆積である。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量，床面から７点出土している。

第71号住居跡出土土器（第188～189図１～35）

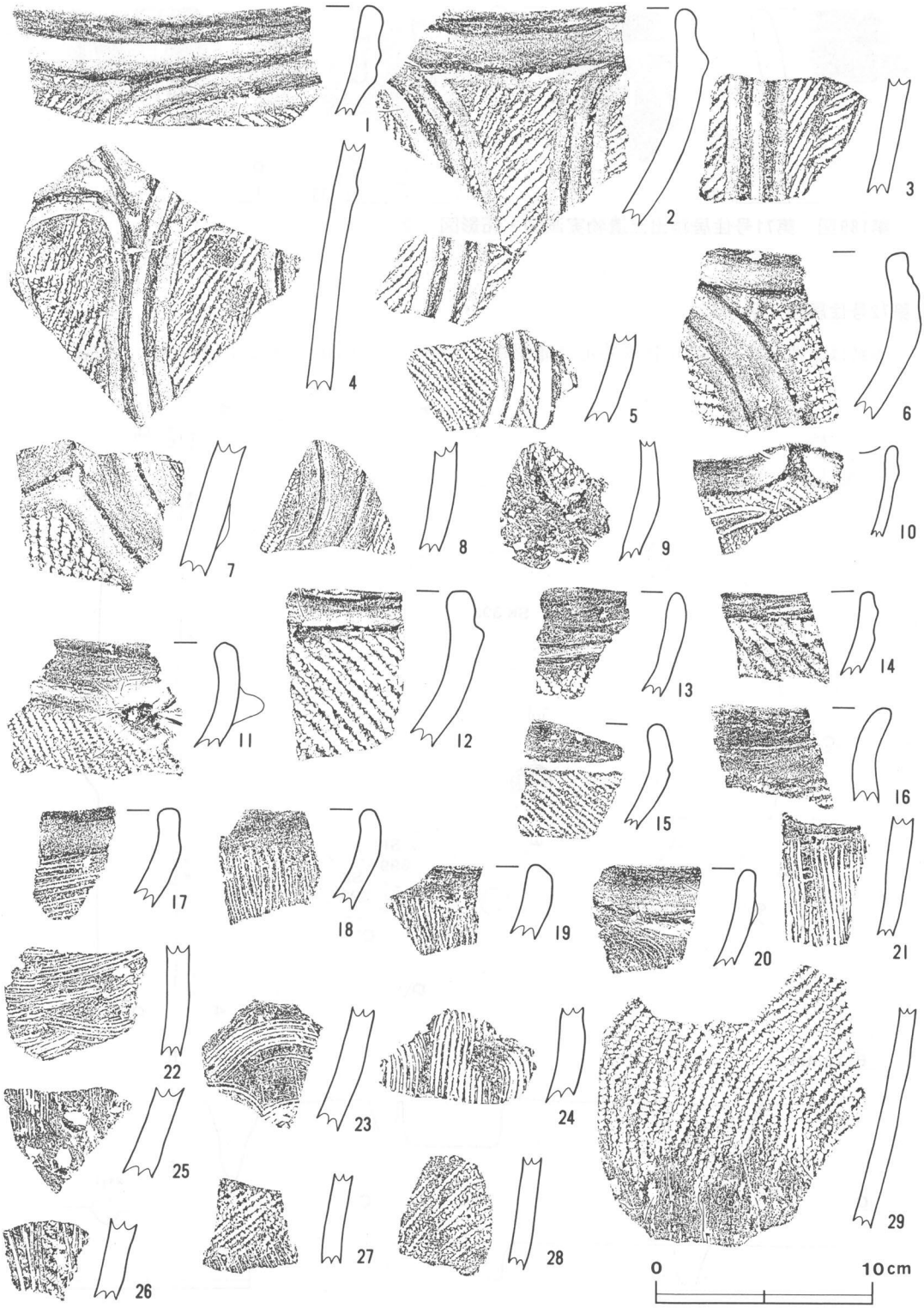
１・２・４・５・11・25・30は，本跡の炉（第411号土壙上面の焼土）内から出土したもので，本跡

の時期決定に有力なものと考えられる。1・2・4・5は，ナゾリが加えられた低平な隆線により大柄な曲線的区画文が施されている土器片で，区画の内外には縄文が施されている。1・2は口縁部片，4・5は胴部片である。3は，低平な隆線による区画文が付されている胴部片である。6は，微隆線による施文を主とする口縁部片である。7は，両側に強いナゾリが加えられて断面三角形を呈する微隆線により区画が描かれている胴部片である。比較的厚手で，胎土に長石，石英粒が目立っている。8・9は，微隆線による区画が施されている胴部片である。10は，幅の狭い口縁部無文帯に，突出部を形成し，胴部には縄文地文上に細い沈線で曲線的モチーフが描かれ，内部が磨り消されている。11は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文が施されている。両者の境の部分には高い突起が付けられている。12は，口縁部無文帯の幅が狭く，1条の微隆線で区画し，以下に単節縄文が施されている。13は，口縁部無文帯を浅い1条の凹線で区画し，以下に縄文を縦位の羽状に施している。14は，幅の狭い口縁部無文帯を有し，以下に無節縄文が施されている。15は，口縁部無文帯を1条の沈線で区画し，以下に縄文を付している。16は，外反する口縁部無文帯を有し，以下に縄文を施している。17～25は，条線文が施文されたものである。17～21は，口縁部無文帯をもち，以下に条線文が施されている。17は，無文帯を横ナデで作り出し，胴部には珍しく横位の条線文が付されている。18・19は，同一個体で，縦位の条線文が施されている。20は，無文帯を貼付隆線で区画し，以下に曲線的条線文が施されている。21は，口辺部片で，拓本の上端部に無文部がみられ，粗い縦位の条線文が付されている。22～25は，各種の条線文が施された胴部片である。22は横位，23は弧状，24は縦位に施文されている。25は，縦位に断続的に施されている。26・27は，縄文と条線文が併用されている胴部片で，縄文が先で条線文が後から施されている。28は，付加条縄文が施文されている胴部片である。29は，縄文だけの胴下半部片で，底部の近くは縦ナデが加えられている。30は，無文の口縁部片である。31・32は，太めの沈線で幾何学的モチーフが描かれ，区画内に細縄文が充塡されている。31は口縁部片，32は胴部片である。33は，胴部のくびれ部片で，沈線間に無節縄文がまばらに施されている。

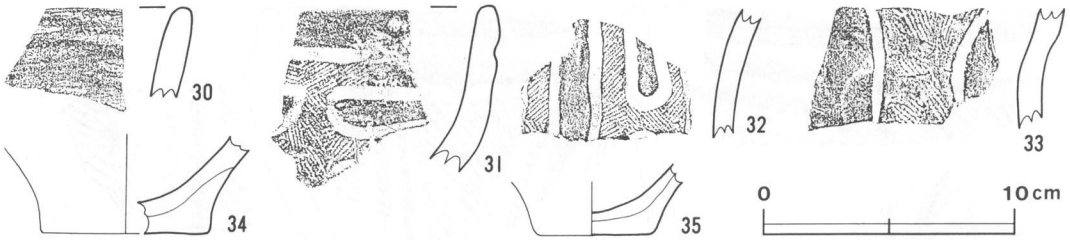
34は，本跡の炉の北西側の覆土から出土した底部片である。外面は横ナデにより調整され，内面もナデが施されている。胎土に砂粒が混入しているが，焼成は良好である。色調は褐色を呈している。推定底径は6.6cmで，現存高は3.4cmである。

35は，本跡の炉内の南側の覆土から出土した底部片であるが，本跡の炉は，第411号土壙により破壊されているので，本土器の所属は確実ではない。外面は縦ナデが施され，内面もナデにより調整されている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。底径は4.8cmで，現存高は2.1cmである。

本跡から出土した土器には，加曽利EⅢ式，EⅣ式期のものや称名寺式期のものも含まれているが，炉内から出土した土器から判断すれば，本跡の時期は加曽利EⅢ式期と考えられる。



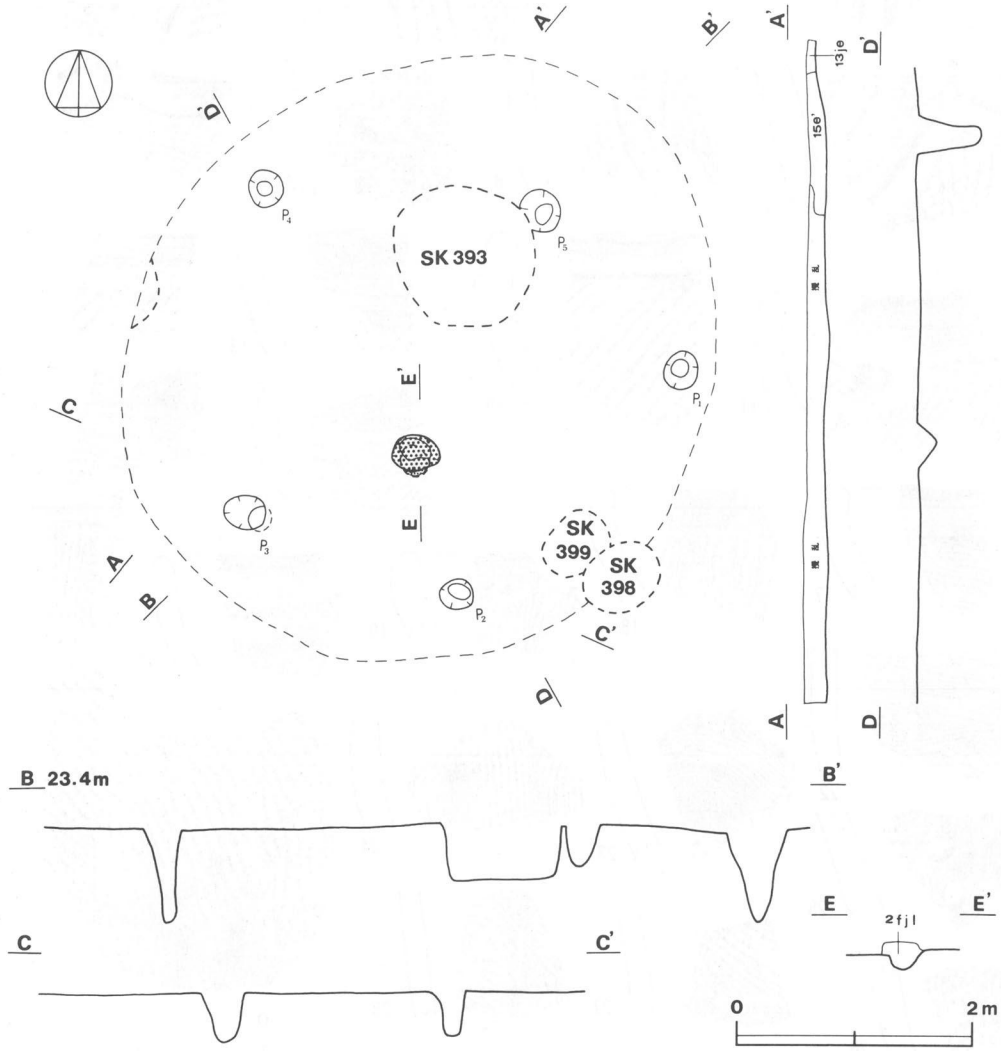
第188図　第71号住居跡出土遺物拓影図　(1)



第189図　第71号住居跡出土遺物実測図・拓影図（2）

第72号住居跡（第190図）

本跡は，遺跡の南部I4b$_7$区を中心に確認されたもので，第70号住居跡の南側４ｍに位置してい



第190図　第72号住居跡実測図

る。北側で第71号住居跡，西側で第73号住居跡，南側で第63号住居跡と重複している。新旧関係は，不明である。

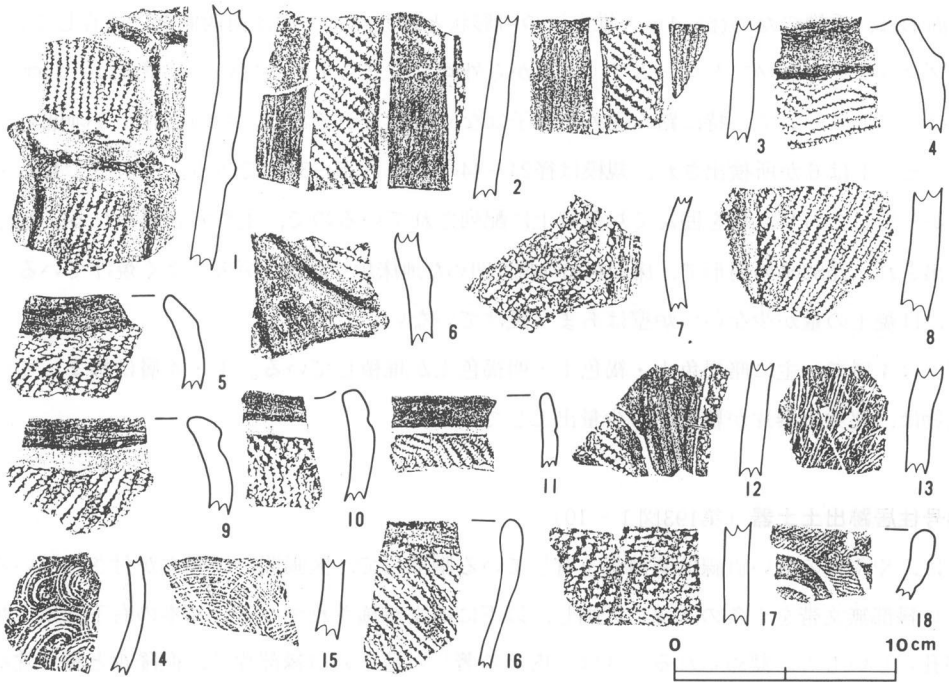
平面形は，重複のため長径5.3m（推定）・短径4.8m（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，N－19°－Eを指している。重複住居跡内にあるので，壁はあまり残っていない。床面はロームブロックを含むソフトロームで，軟らかい。平坦であるが炉の北側がやや高く，炉の西側は少し低い。ピットは5か所検出され，規模は径28～34cm・深さ38～80cmである。各柱穴間の距離はほぼ同じであるが，深さがまちまちで，主柱穴とは判定できない。炉は，本跡の中央に確認され，径40cmの楕円形で，床面を15cm掘り凹めた地床炉である。炉床は赤く焼けたハードロームで，長期間の使用がうかがえる。

覆土はロームブロックを含む褐色土がうすく堆積している。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第72号住居跡出土土器（第191図1～18）

1は，両側にナゾリを加えた隆線による区画が施されている胴部片である。胎土には長石，石英粒が混入し粗い。2・3は，幅の広い直線的磨消懸垂文を有している胴部片で，いずれも単節縄文ＬＲが縦位回転で施文されている。4・5は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文を施している。無文帯と縄文部の境はナゾリにより微隆線状を呈している。6～8は，微隆線による区画を



第191図　第72号住居跡出土遺物拓影図

有している胴部片である。いずれも区画内に縄文が充塡されているが，７・８は，区画後に縄文が施文されたために微隆線上にも施されている。７は，薄手のくびれ部片である。９～11は，口縁部無文帯を１条の沈線で区切り，以下に縄文が施されている。11は，薄手で沈線も細い。12は，細めの沈線区画内に縄文が充塡されている胴部片である。13～15は，条線文が付された胴部片である。13は斜位に，14は半同心円状に，15は弧状に施文されている。16は，内湾する口縁部片で，口縁直下にわずかの無文部を残し，以下に縄文が施されている。17は，複節縄文が施された胴部片である。18は，やや太めの沈線で幾何学的モチーフが描かれ，区画内に縄文が施されている口縁部片で，口唇内面はわずかに肥厚している。

本跡からの出土土器は少なく，しかも加曽利ＥⅢ，Ⅳ式期の土器片を主とするが，称名寺式期のものも混入している。本跡の時期決定はむずかしいが，加曽利ＥⅢ～Ⅳ式期にかけての時期と考えられる。

第73号住居跡（第192図）

本跡は，遺跡の南部I4b_7区を中心に確認されたもので，第56号住居跡の南側10ｍに位置している。東側で第71・72号住居跡，南東側で第61号住居跡，北西側で第11号溝，北側で第395号土壙と重複している。新旧関係は，住居跡とでは不明であるが，溝とでは切り合い関係から本跡が古く，土壙とでは土層の切り合いから本跡が新しいと考えられる。

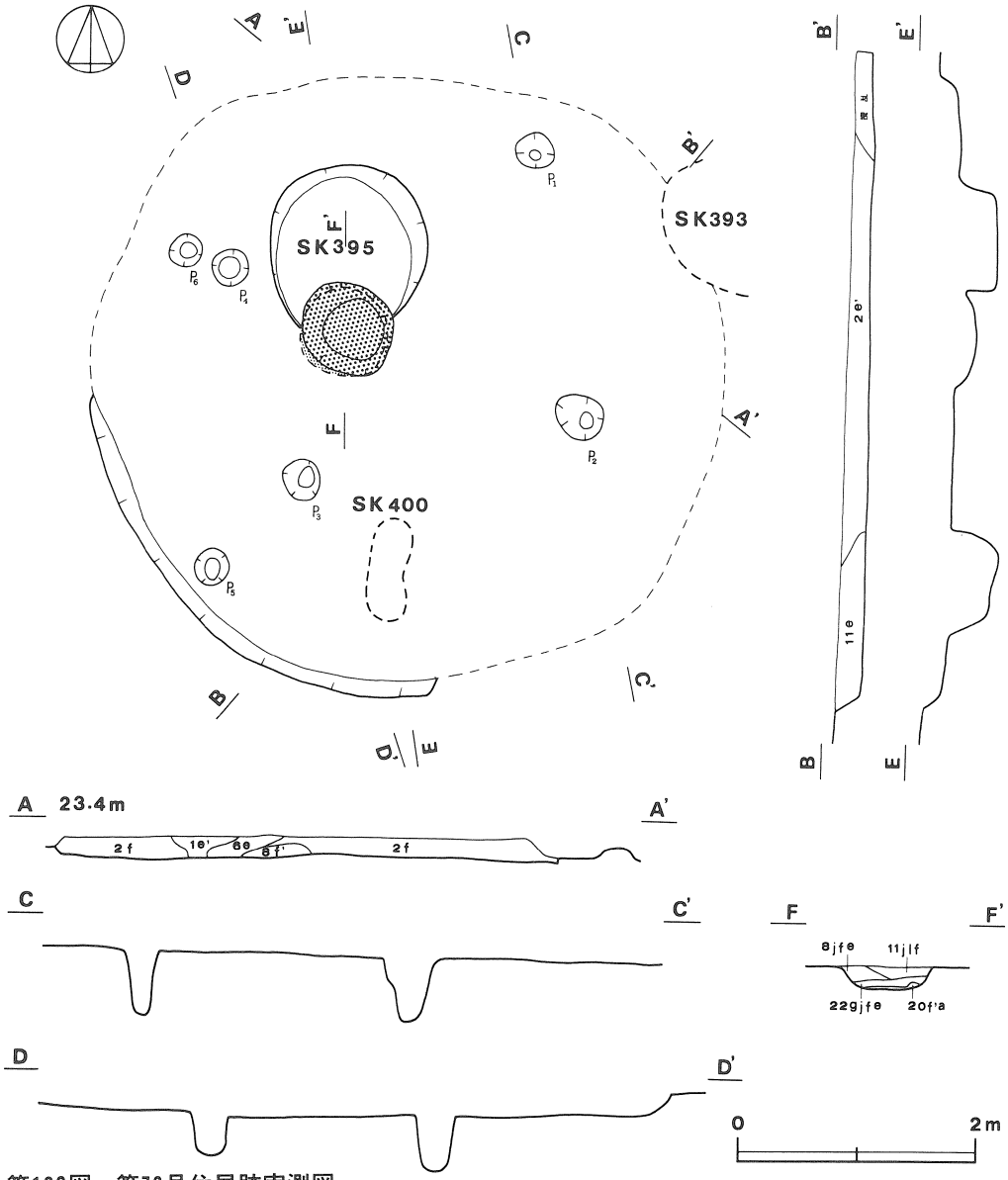
平面形は，重複のため径5.4ｍ（推定）の円形状と思われる。壁は南西側だけ残存しており，ロームブロックを含むソフトロームで，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，16cmである。床面はソフトロームで，特に踏み固めた様子はなく，軟らかである。炉の北側が５cm低くなっている。ピットは６か所検出され，規模は径24～44cm・深さ25～34cmである。その中でもP_1～P_4は深さが一定しており，炉を囲んで対角線上に配列されているので，主柱穴と思われる。炉は中央に検出され，径82cmの円形で，床面を16cm掘り凹めた地床炉である。炉床はよく焼けているが炉の覆土には焼土の量が少ない。炉壁はあまり焼けていない。

覆土は４層で，主に暗褐色土・褐色土・明褐色土が堆積している。１・４層は締まっている。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第73号住居跡出土土器（第193図１～10）

１は，やや幅の広い直線的磨消帯を有している胴部片で，区画間には縄文が付されている。２は，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下に縄文が施されている。拓本の右下部には焼成後の穿孔らしいものが認められる。３は，内湾の著しい薄手の口縁部片で，微隆線と細い沈線による手法の両者が併用されている。口縁部には縄文を付し，幅の狭い無文帯をナゾリにより作出し，

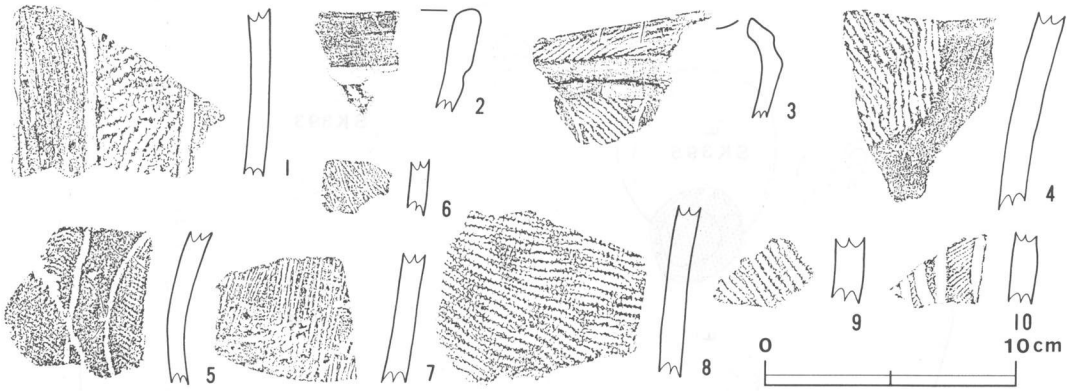


第192図　第73号住居跡実測図

胴部には細い曲線的モチーフを描き，区画内を磨り消している。4は，微隆線による曲線的区画内に縄文が充填されている胴部片である。5は，2本組の沈線により曲線的モチーフが描かれている胴部片で，区画内に縄文が施されており，器面の磨滅が進んでいる。6は，条線文が施されている胴部の小片である。7は，条線文と縄文が併用されており，縄文が後に施されている。8・9は，縄文だけが施されている胴部片である。9は，本跡の炉内から出土したものである。10は，太めの沈線による区画内に細縄文が充填されている胴部片である。

本跡からの出土土器はわずかで，明確な時期比定は困難である。加曽利EⅢ～Ⅳ式期の土器片

の他に称名寺式期の土器片もみられる。本跡の時期は，加曽利E Ⅲ～Ⅳ式期と考えられるが，確実とは言えない。



第193図　第73号住居跡出土遺物拓影図

第74号住居跡（第194図）

本跡は，遺跡の南部I4e$_9$区を中心に確認されたもので，第69号住居跡の南側３ｍに位置している。北側で第55号住居跡，東側で第75号住居跡，中央で第415号土壙と重複している。新旧関係は，第75号住居跡とは不明であるが，第55号住居跡とでは，炉のレベル・柱穴の深さなどから考えて本跡が古いと考えられる。また，土壙とでは，本跡の炉との切り合い関係から本跡の方が新しいと考えられる。

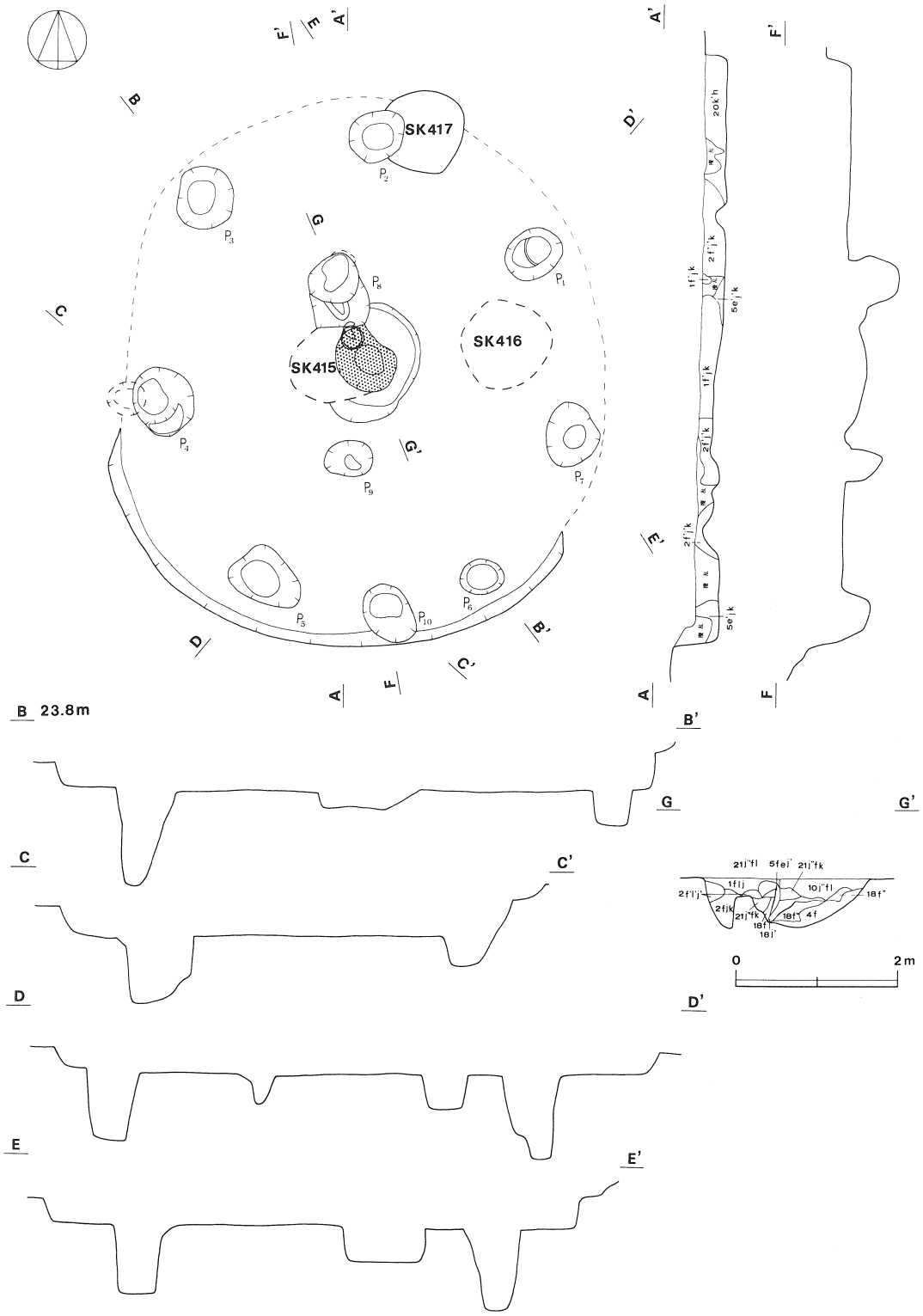
平面形は，重複のため径6.6ｍ（推定）の円形状と思われる。壁は重複のため南側だけが残存しており，ロームブロックを含み軟らかい。床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，23～44cmと比較的高い。床面はロームブロックを含み，よく踏み固められて硬く，全体的に平坦であるが，P_2付近はほかより３～４cm低くなっている。ピットは10か所検出され，規模は径60～92cm・深さ38～113cmでしっかりしている。その中でもP_1～P_7・P_{10}の８か所は，壁にそって円形状に配列されているので主柱穴と考えられる。炉は，中央に検出され，長径86cm・短径60cmの楕円形で，深さ26cmである。炉床の北西側に口径25cm程の深鉢を斜めに埋めこんだ炉である。なお，第415号土壙の東壁を壊して炉が築かれている。炉床と炉壁はよく焼けており，炉の覆土にも焼土が充満しているので，長期間にわたり使用されていたと考えられる。

覆土は５層からなり，主に暗褐色土・赤褐色土・褐色土が堆積している。

遺物は，縄文土器片が覆土から中量出土している。

第74号住居跡出土土器（第195～196図１～34）

１は，本跡の炉内に斜位に埋設されていた深鉢形土器で，口縁部の一部と胴下半部を欠損して



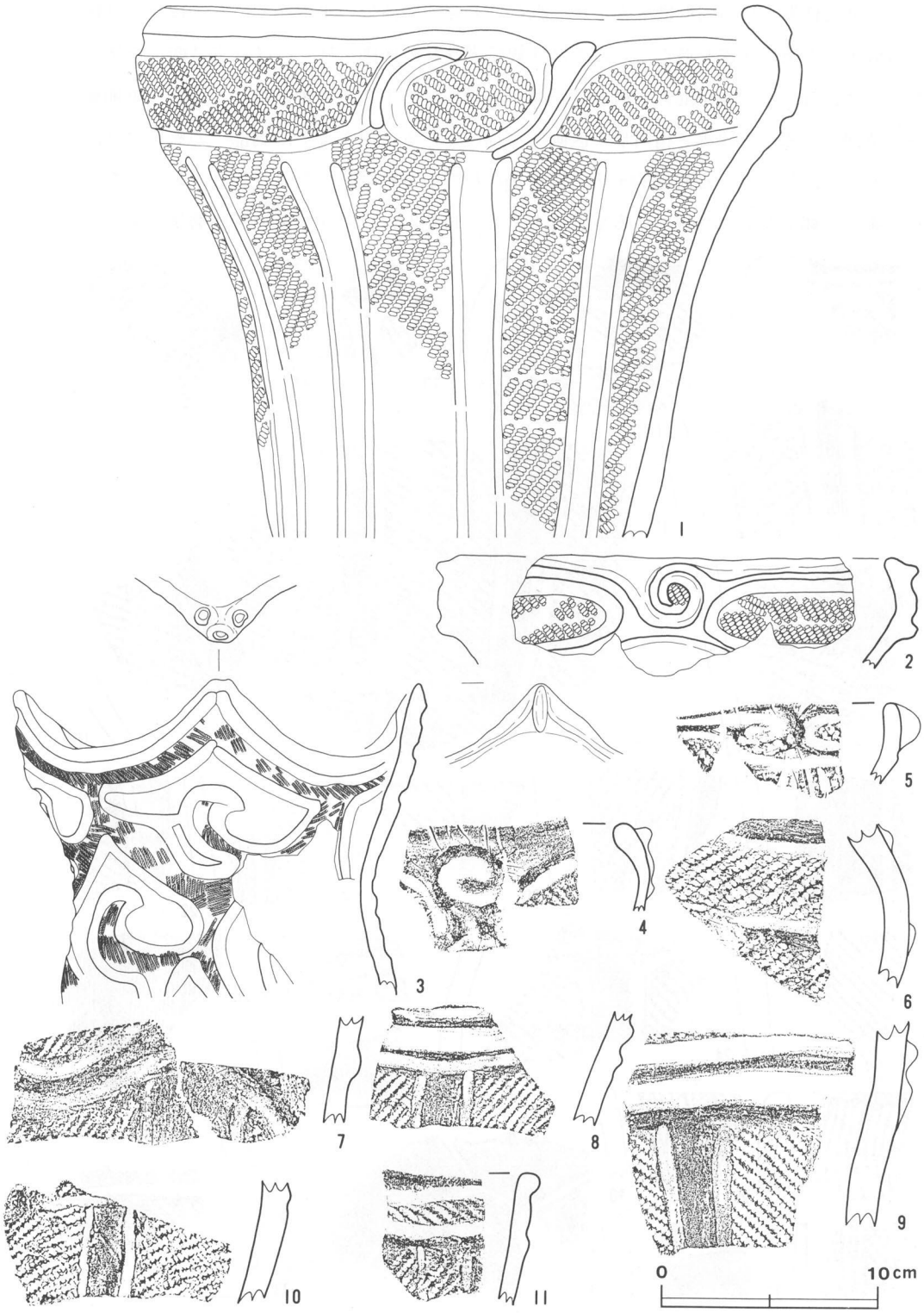
第194図　第74号住居跡実測図

いる。胴下半部は打ち欠かれている。キャリパー形の深鉢形土器で，口縁部文様帯は沈線を主とする楕円文と横長の区画文を組み合わせて構成されているが，４単位とはならずに，３単位半のような状況を呈している。割付けの失敗例と思われ，１個所だけ長さが短くなっている。胴部には比較的幅の狭い磨消懸垂文が11単位施されている。口縁部文様帯と胴部の区画間には単節縄文ＲＬが横位と縦位回転により施文されている。内面は横ナデが加えられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は，２次加熱を受けたためか褐色から暗赤褐色を呈している。全体にもろくなっていて，内外面に若干の剝落痕が認められる。口径は26.6cmで，現存高は24.6cmである。

２は，本跡の南側の覆土から出土した小形のキャリパー形深鉢形土器の口縁部片である。口縁部文様帯を隆線の渦巻文と長楕円形区画文により構成している。区画内には単節縄文ＲＬを横位回転で充塡している。頸部を無文帯としている。内面に横ナデを施している。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は内外面とも暗褐色を呈している。推定口径は20.0cmで，現存高は5.1cmである。

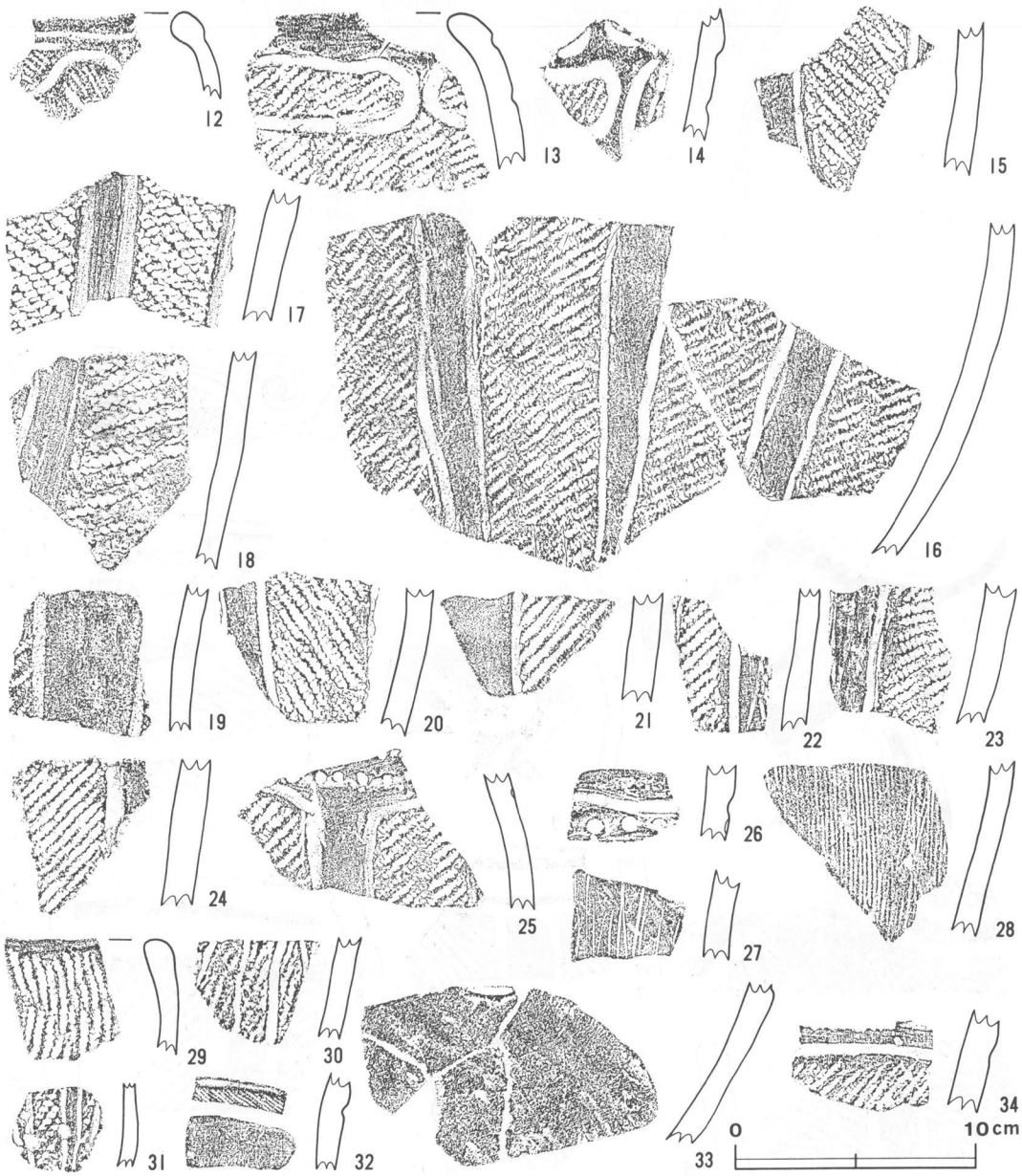
３は，本跡の床面を切り込んで構築された第416号土壙の覆土から出土した破片を主体として，本跡の炉内から出土した土器片，隣接する第417号土壙の覆土から出土した各１点の土器片が接合したもので，本跡に伴うものではなく，第416号土壙に伴うものと考えられる。４単位の波状縁を呈する深鉢形土器で，頸部で強くくびれる。４つの波頂部のうち３か所が残存しているが，１対２か所には縦位の太い抉り込みが付されている。他の１か所には３個の円形刺突文がつけられている。波頂部の平坦部に１つ，左右のせり上り部に各１つが施され，見ようによっては顔の表現ともみられる。向かいあう波頂部がそれぞれ対になるものと考えられ，欠損する個所には円形刺突文が付されていたものと推測できる。口唇部が薄く尖り気味になっている点も特徴的である。器面全体に太い沈線で曲線的モチーフを描き，区画内に細かい無節縄文Ｒが充塡されている。器面は凹凸が著しい。器壁が薄いために外面に沈線を施した際に内面に粘土が盛り上がっている。このためと指による整形のために器面の凹凸が激しいのである。内面は横ナデにより調整されている。胎土には大粒の石英粒を多量に，雲母片も少量含んでおり，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈している。推定口径は18.5cmで，現存高は14.6cmである。

４は，２と同一個体の口縁部片で，隆線で反時計回りの渦巻文が施され，区画内に縄文が充塡されている。５は，本跡の炉内から出土した小形深鉢形土器の口縁部片である。口縁部文様帯を隆線による渦巻文と区画文で構成し，胴部に沈線が垂下している。６は，本跡のピット８から出土したもので，隆線で口縁部文様帯を区画する口辺部片である。７・21・22・24・31・34は，本跡の炉内から出土したものである。７は，両側をナゾられた隆線によって口縁部文様帯を区画し，胴部に幅の広い磨消帯を垂下させている口辺部片である。８も，口辺部片で，隆線による口縁部文様帯の下に直線的磨消帯が施されている。９・10は，口辺部片である。口縁部文様帯を９は隆線で，10は沈線で区画している。いずれも胴部に直線的磨消帯を有している。11は，隆線



第195図　第74号住居跡出土遺物実測図・拓影図　(1)

で口縁部文様帯が長楕円形に区画され，胴部に直線的磨消帯が垂下している。12は，口縁部片で，口縁直下に１条の沈線を巡らし，以下に沈線で渦巻状の区画を施し，区画内に縄文を施している。胎土には長石，石英粒が混入し粗い。13は，口縁部に若干の無文帯を残し，以下に単節縄文ＲＬを縦位回転で施し，沈線で楕円形の区画文を描いている。現存部では胴部への懸垂文は認められない。14は，隆線による曲線的モチーフが描かれている胴部片である。15は，Ｕ字状を呈する沈線区画内に縄文が充塡されている胴部片である。16～24は，いずれも直線的磨消帯を有する胴部



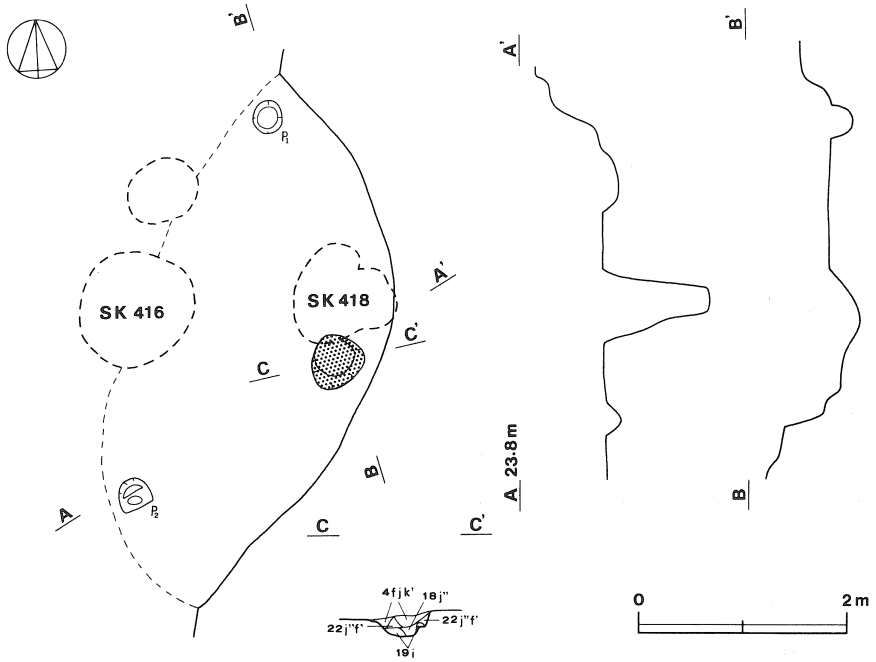
第196図　第74号住居跡出土遺物拓影図　(2)

片である。16は，本跡の床面直上から出土したもので，区画間には単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されている。17の幅は狭く，19の幅は広い。17の縄文は複節で，他は単節である。20は，本跡のピット３から，23は，ピット６から出土している。25は，頸部片と思われ，上端に２列の円形刺突文が付され，以下に逆Ｕ字状の区画文が描かれ，区画内に縄文が充填されている。26は，横位の沈線と円形刺突文が施されている胴部の小片である。27は，粗い条線文が付されている胴部片である。28は，縦位の条線文が付されている胴部片であるが，器面が磨滅している。29は，全面縄文の口縁部片で，条は縦走している。30・33は，本跡のピット１から出土したものである。30は，縄文地文上に数条の沈線が垂下している。31は，ごく小形の土器の胴部片で，直線的磨消帯を有している。５と同一個体と思われる。32は，太い沈線による区画内に細縄文が充填されている。33は，深鉢形土器の胴下半部片と思われ，破片の上端部に沈線文がみられるだけである。34は，沈線区画内に縄文が施されている胴部片である。

本跡からは，加曽利ＥⅢ式期の土器片を主に出土しており，炉に埋設されていた１および炉内から出土した５・７・21・22・24・31・34などから判断すれば，本跡の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

第75号住居跡（第197図）

本跡は，遺跡の南部I4e₀区を中心に確認されたもので，第58号住居跡の南側８ｍに位置してい



第197図　第75号住居跡実測図

る。西側で第55・74号住居跡と，中央で第418号土壙と重複している。新旧関係は，住居跡とは不明であるが，土壙とでは本跡の炉との切り合い関係から本跡が古いと考えられる。

平面形は，径５ｍ以上の円形状のものと思われるが，大半が農道下や重複のため，不明である。壁は重複のため欠損しており，不明である。床面は平坦であるがロームブロックを含み，炉の周辺は踏み固められて硬く締まっている。ピットは２か所検出され，規模は径30cm・深さ15cm・23cmである。炉は，本跡の中央と思われる場所から検出され，径52cm・深さ18cmの略円形の地床炉である。第418号土壙と重複しているが，この土壙が本跡の炉の北側を切っている。炉床と炉壁はよく焼け，炉の覆土には焼土が充満している。

覆土は第55・74号住居跡と同じで５層からなり，主に暗褐色土・赤褐色土・褐色土が堆積している。

遺物は，前記のように本跡に明らかに伴うものは認められなかった。

第76号住居跡（第198図）

本跡は，遺跡の南部H5i_2区を中心に確認されたもので，第58号住居跡の北東側６ｍに位置している。北東側で第67号住居跡，東側で第78号住居跡，南東側で第79号住居跡と重複している。新旧関係は不明である。

平面形は，重複のため長径7.3ｍ（推定）・短径6.3ｍ（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，N－60°－Wを指している。壁は南側の一部だけ残存し，ローム粒子・ロームブロックを含むソフトロームで軟らかである。壁高は，10～12cm程である。床面はロームブロックを含んでいるが，軟らかいほうである。ピットは14か所検出され，規模は径24～32cm・深さ21～35cmである。P_2・P_3・P_5・P_7・P_8は炉を囲んで五角形に配列されることから，主柱穴と考えられる。炉は本跡の中央と思われる位置に検出され，径60cmの略円形で，床面を22cm掘り凹めた地床炉である。炉床はあまり焼けておらず，炉の覆土にも焼土の量は少ない。

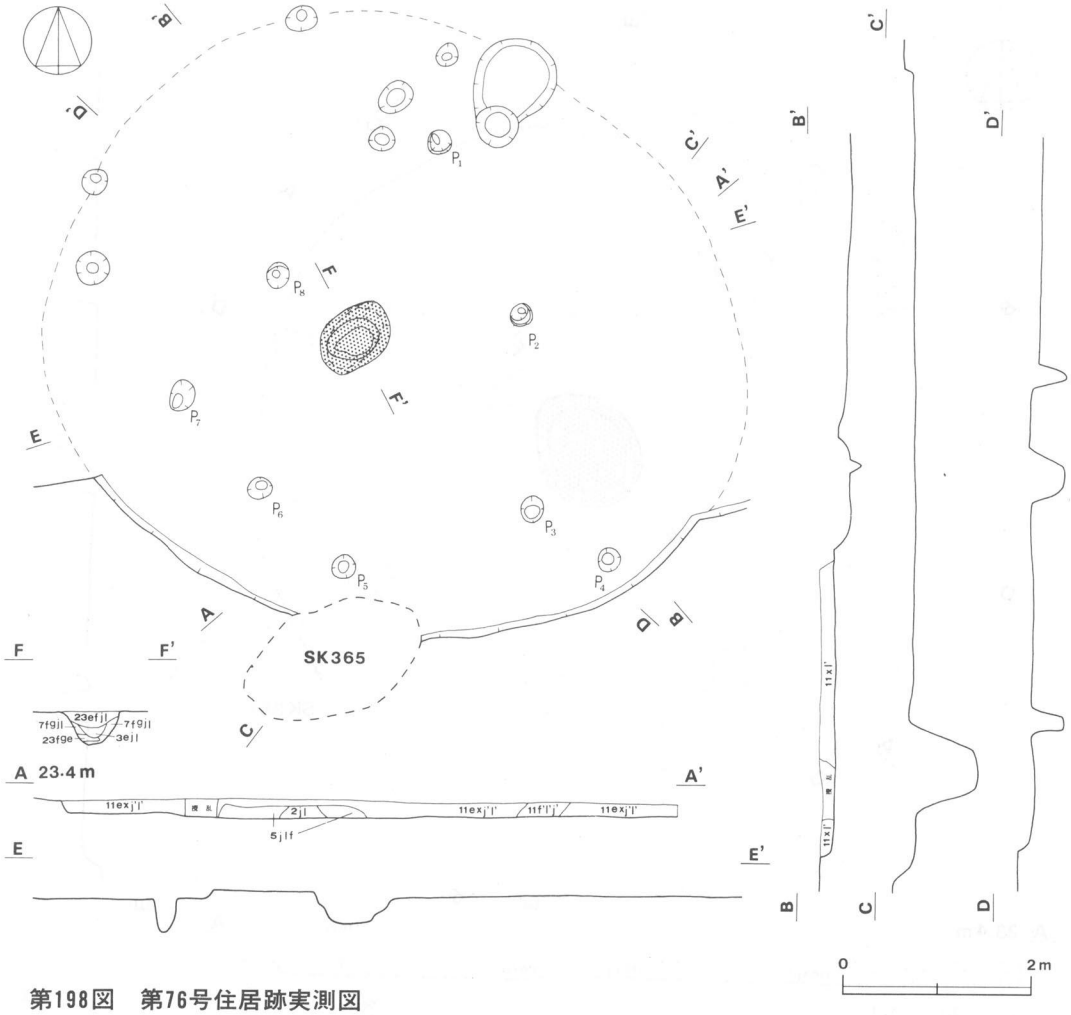
覆土は６層からなり，主に暗褐色土・褐色土・にぶい褐色土が堆積している。

遺物は，縄文土器片及び石器が覆土から微量，石器が床面から１点出土している。

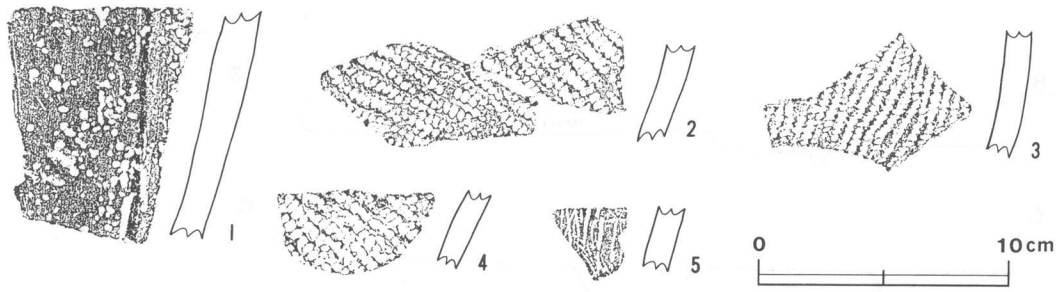
第76号住居跡出土土器（第199図１～５）

１は，本跡の南東側の壁際から出土した胴部片で，幅の広い無文帯を微隆線で区画し，縄文を施している。２は，本跡と第67号住居跡の重複部分の覆土から出土した胴部片で，縄文だけが付されている。３は，本跡のピット２から出土した胴部片で，単節縄文が施されている。４・５は，本跡と第77号住居跡にまたがる土層セクションベルト中から出土したものである。４は，縄文だけの胴部片であるが，円板状に打ち欠かれている。５は，条線文だけの胴部の小片である。

本跡から出土した土器は少なく，時期比定は困難であるが，住居跡の重複関係およびピット２



第198図　第76号住居跡実測図

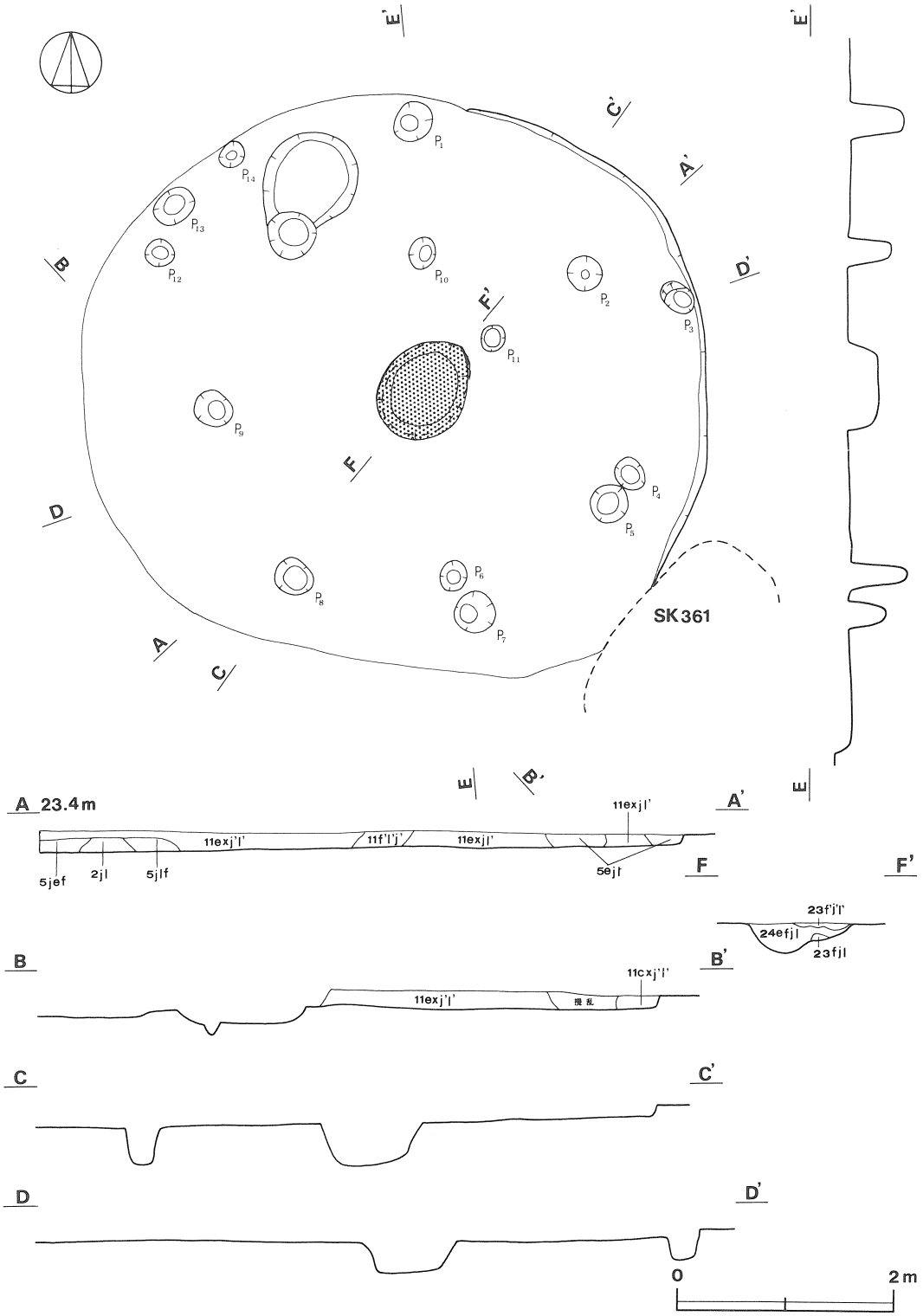


第199図　第76号住居跡出土遺物拓影図

出土の土器片などから判断すれば，加曽利EⅣ式期前後のものと考えられる。

第77号住居跡（第200図）

本跡は，遺跡の南部H5i_2，i_3区を中心に確認されたもので，第58号住居跡の北東側10mに位置



第200図　第77号住居跡実測図

している。西側で第67号住居跡，南西側で第78・79号住居跡と重複している。新旧関係は，第67号住居跡とは前記の通りであるが，第78・79号住居跡とは不明である。

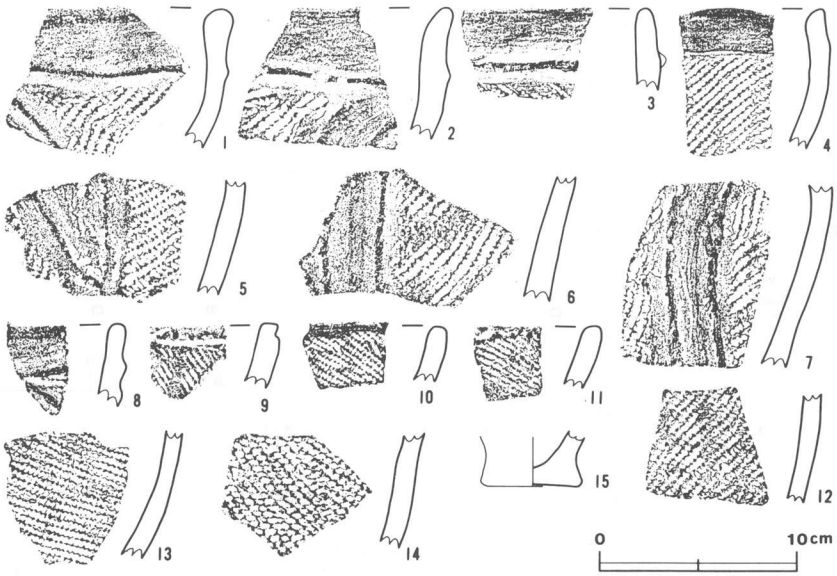
平面形は，重複のため径5.6m（推定）の円形状と思われる。壁は東側・南側だけ残っており，ロームブロックを含むソフトロームで軟らかく，床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，7～12cmである。床は第67号住居跡の床のため中央から西側の大半を欠損しているが，残存している床は，ロームブロックを含んでいて軟らかく，平坦である。ピットは13か所検出され，規模は径22～38cm・深さ21～52cmである。P_2・P_5・P_7～P_{10}は炉を囲んで六角形に配列されており，深さも一定しているので，主柱穴と思われる。炉は中央に検出され，径100cmの楕円形で，床面を25cm掘り凹めた地床炉である。炉床はあまり焼けておらず，炉の覆土には焼土の量が少ない。

覆土は3層で，主に褐色土・にぶい褐色土が堆積している。1層だけ締まっている。

遺物は，縄文土器片及び及び石器が覆土から19点，縄文土器片が床面から5点，炉の覆土から4点出土している。

第77号住居跡出土土器（第201図1～15）

1・3～7・11・14は，本跡の中央部（炉の上面に相当する）から東側の覆土にかけて出土したものである。2・13は，本跡の床面から出土したものである。8・10・12・15は，本跡の炉内から，9は，ピット3から出土したものである。1・2は，微隆線による施文が主となっている口縁部片である。3は，口縁部無文帯を1条の貼付微隆線で区画し，以下に縄文が施されている。4は，緩い波状縁を呈し，口縁部無文帯をナゾリによる微隆線で区画し，以下に縄文を施している。

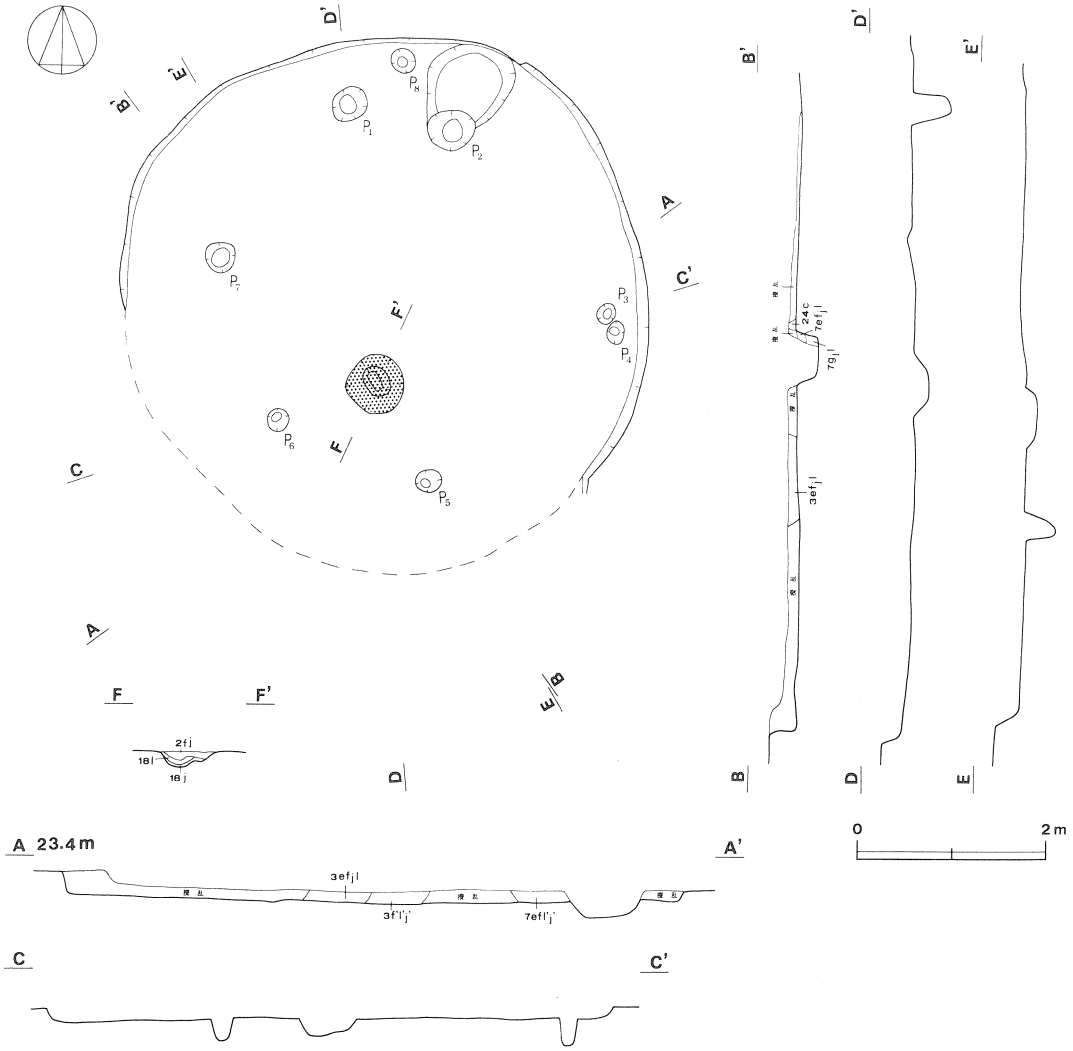


第201図　第77号住居跡出土遺物実測図・拓影図

5～7は，微隆線により曲線的モチーフが描かれている胴部片で，区画内に縄文が充填されている。8は，1・2と同様の微隆線による施文を有している口縁部の小片である。9は，口縁直下に1条の沈線を巡らし，以下に無節縄文が施されている。10～14は，縄文だけが付されている土器片である。10・11は口縁部片で，12～14は胴部片である。11の縄文は無節である。

15は，本跡の炉内から出土した底部片で，底部がやや突出気味になっている。外面は横ナデが加えられ，内面は剥落が著しく，調整方法は不明である。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調は明赤褐色を呈している。底径は5.1cmで，現存高は2.8cmである。

本跡から出土した土器は少ないが，加曽利EⅣ式期の土器片が目立ち，床面，炉内，ピット3から出土した土器片を見ても加曽利EⅣ式期のものと考えられるので，本跡の時期は加曽利EⅣ式期と推定される。



第202図　第78号住居跡実測図

第78号住居跡（第202図）

本跡は，遺跡の南部H5i_2・j_2区を中心に確認されたもので，第70号住居跡の東側15mに位置している。内側で第67号住居跡，西側で第76号住居跡，東側で第77号住居跡，南側で第79号住居跡と重複している。新旧関係は不明である。

平面形は，重複のため径5.8m（推定）の円形状と思われる。壁は北西側から，東側にかけて残存している。ロームブロックを含んで締まっており，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，第67・76号住居跡の床面把握で削ったため，2～3cmしか残っていない。床面はロームブロックを含み，平坦で硬いが，踏み固められた様子はない。ピットは8か所検出され，規模は径22～38cm・深さ16～43cmである。配列が不規則なため，主柱穴は判別できない。炉は中央に検出され，径63cmの円形で，床面を17cm掘り凹めた地床炉である。炉床と炉壁はよく焼けており，長期間の使用がうかがえる。

覆土はロームブロック・焼土粒子・炭化物を少し含んだ褐色土から黄褐色土の土層である。

遺物は，皆無である。

第79号住居跡（第203図）

本跡は，遺跡の南部H5j_2区を中心に確認されたもので，第62号住居跡の南側6mに位置している。北側で第67・76・78号住居跡，北東側で第77号住居跡，南側で第365号土壙と重複している。各遺構との新旧関係は不明である。

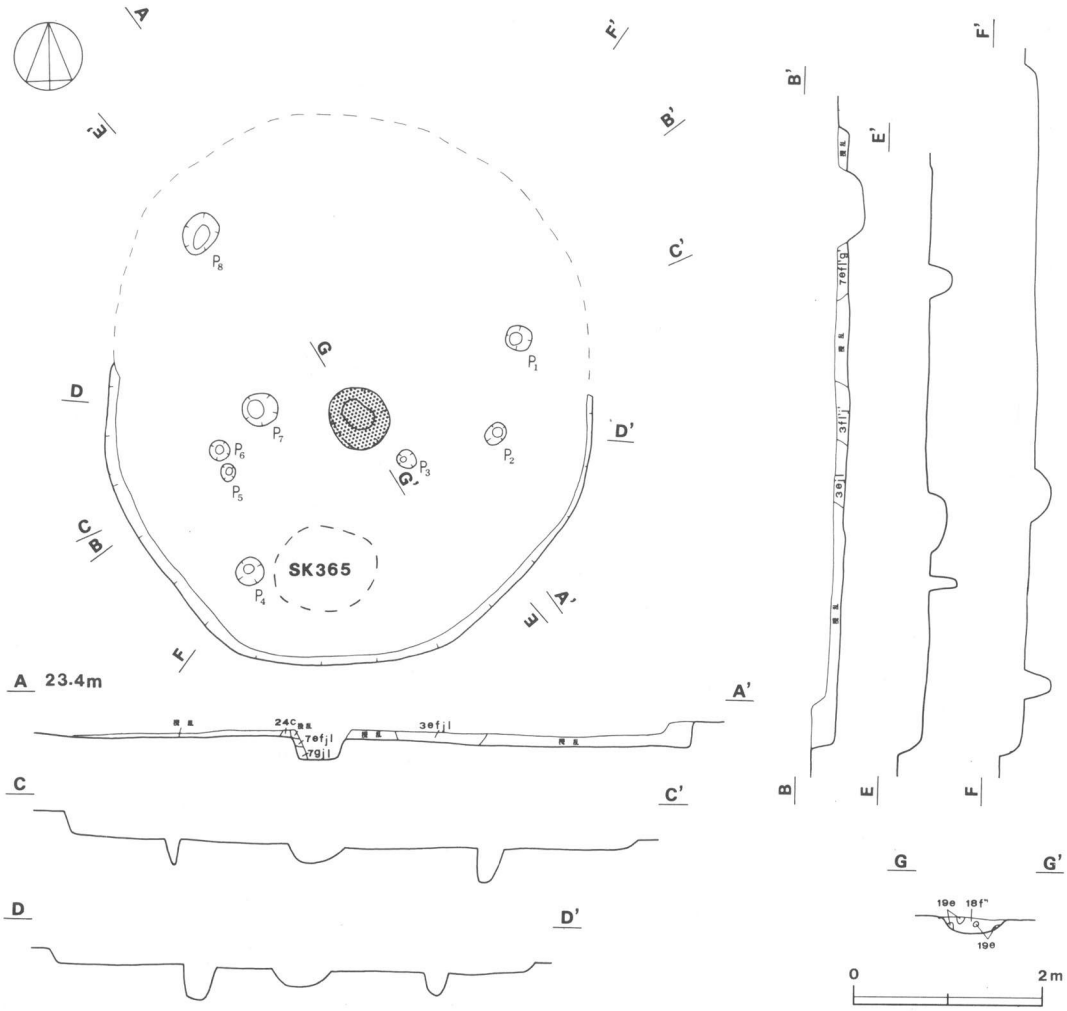
平面形は，重複のため長径5.8m・短径5.4m（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，N－28°－Eを指している。壁は南側だけが残存しており，ロームブロックを含むソフトロームで軟らかく，床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，12～32cmである。床面はロームブロックを含みよく締まっており，平坦であるが，炉の付近だけがやや低くなっている。ピットは8か所検出され規模は径20～40cm・深さ16～36cmである。不規則な配列をしているため，主柱穴はは判別できない。炉は，本跡の中央に検出され，径66cmの楕円形で，床面を19cm掘り凹めた皿状の地床炉である。炉床と炉壁は熱をうけて赤く硬化している。

覆土は11層からなり，層は浅く，攪乱をうけた層が多い。2～4・6・10・11層は締まっている。

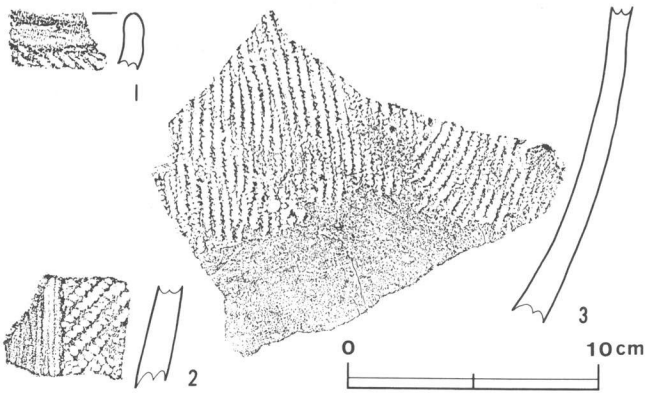
遺物は，縄文土器片が覆土から微量出土している。

第79号住居跡出土土器（第204図1～3）

1～3は，本跡の覆土から出土したものである。1は，口縁直下に1条の浅い凹線を巡らし，以下に縄文を施している。2は，胴部の小片で，直線的磨消帯が施されている。3は，胴下半部



第203図　第79号住居跡実測図



第204図　第79号住居跡出土遺物拓影図

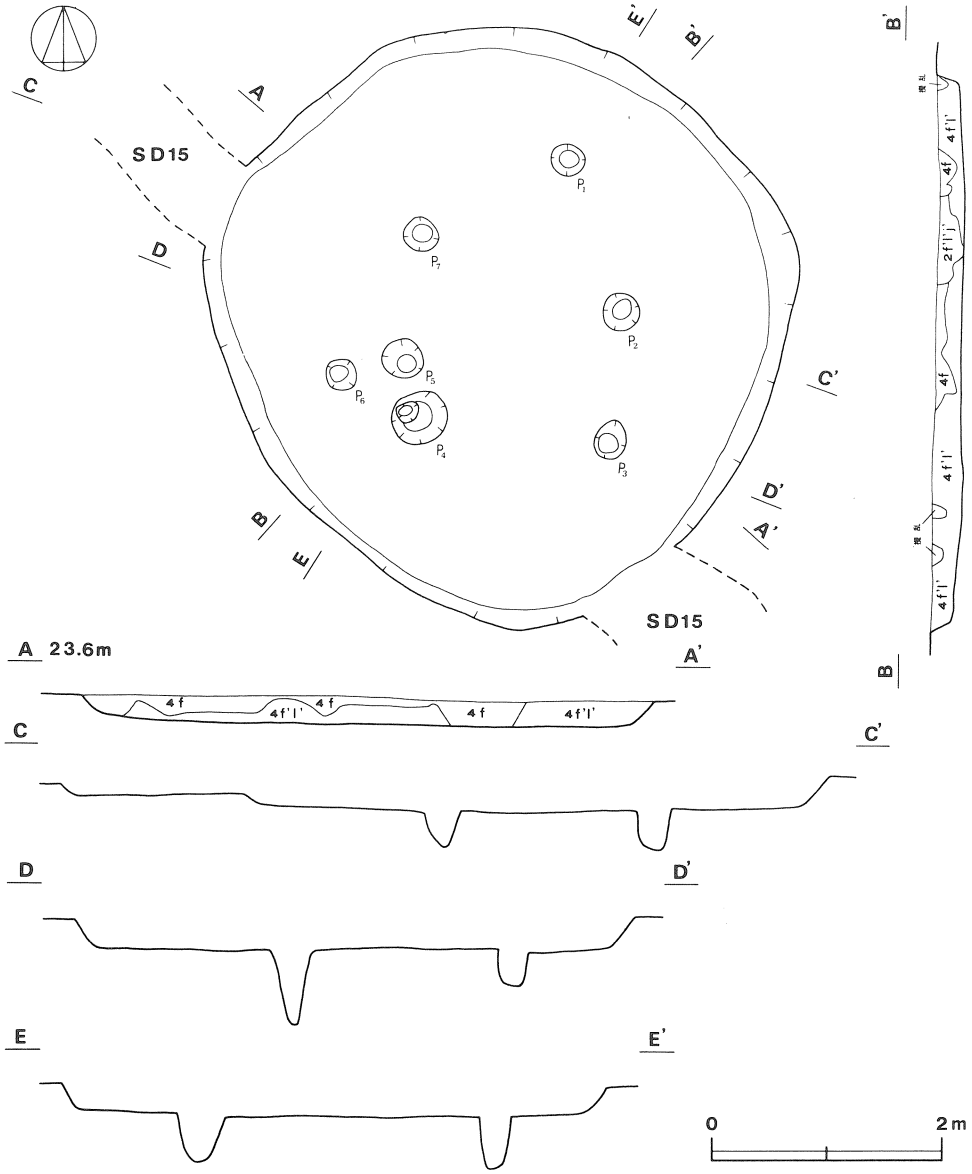
の大破片で，単節縄文ＲＬが斜位および縦位回転で施文されている。底部の近くは無文となり横ナデが加えられ，内面は縦ナデが加えられており，整形は非常に良い。

本跡から出土した土器はわずかで，本跡の時期を決定することはむずかしいが，加曽利ＥⅢ～Ⅳ式期にかけての時期と推定される。

第80号住居跡（第205図）

本跡は，遺跡の最南端I4f₀区を中心に確認されたもので，第74号住居跡の南西側４ｍに位置している。北西側から南東側にかけて第15号溝が横切っているが，本跡の床面までは攪乱をうけていない。溝との新旧関係は，本跡の方が古い。

平面形は，径5.1ｍの不整円形である。壁はローム粒子を含むローム層で，残存している壁は床面から外傾して立ち上がり硬く締まっている。壁高は，12～24cmである。床面はロームブロッ



第205図　第80号住居跡実測図

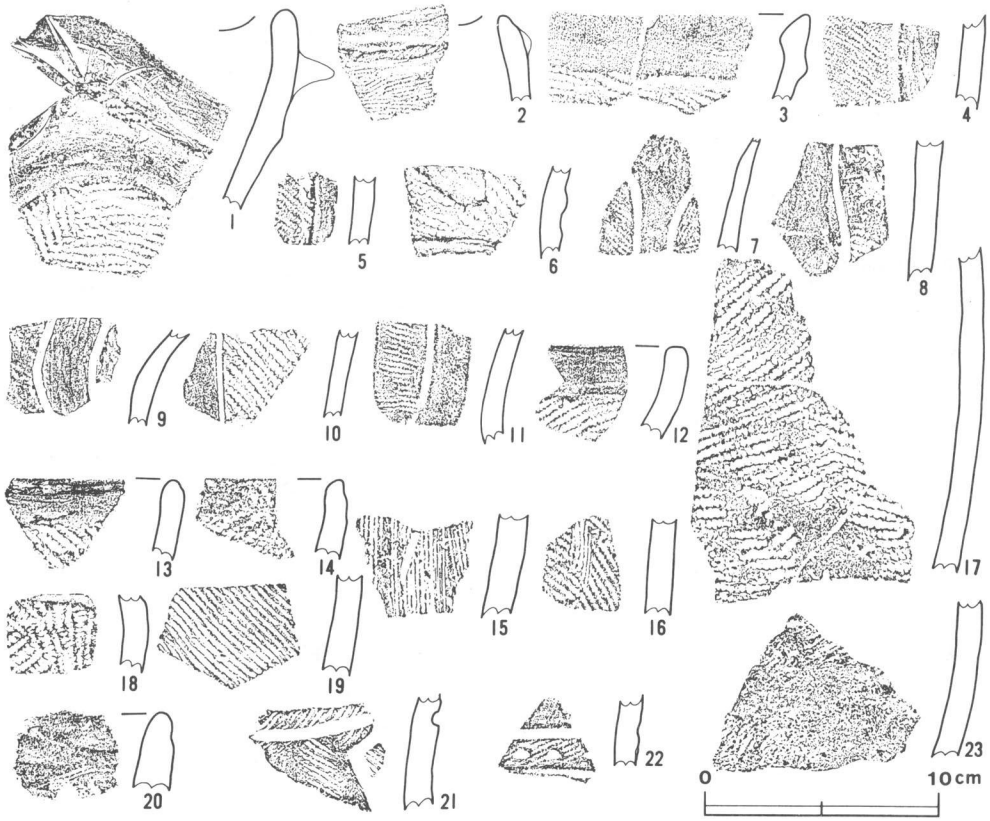
クを含み硬く，特に，床面中央は硬く踏み固められている。ピットは7か所検出され，規模は径30～50cm・深さ33～66cmである。その中でもP_2・P_3・P_6・P_7は，規模や配列などから主柱穴と考えられる。炉は，検出されていない。

覆土は3層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。一部溝による攪乱部分があるが自然堆積である。1・2層は締まっている。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。

第80号住居跡出土土器（第206図1～23）

4・5は，本跡のピット6から，19は，ピット4から出土したもので，他は覆土から出土している。1・2は，共に緩い波状縁を呈する口縁部片で，口縁部無文帯を1条の貼付された断面三角形状を呈する隆線で区画し，以下に縄文が付されている。1の隆線の一部が舌状に突起し，突起部にも縄文が施文されている。2の隆線上にも縄文が付されている。3は，口縁部無文帯を1条の微隆線で区画し，以下に縄文を施している。外面に炭化物の付着が著しい。4～6は，微隆線による区画が施されている胴部片である。7～11は，細い沈線による曲線的区画内に縄文が充



第206図　第80号住居跡出土遺物拓影図

塡されている胴部片である。８・９には無節縄文が施されている。11の区画はＵ字状を呈するものと思われる。12・13は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文が施されている。14は，全面縄文の口縁部片で，複節縄文である。15は，縦位の条線文だけの胴部片である。16は，縄文の後に条線文が重ねられた胴部片である。17は，縄文だけが付された胴部の大破片である。18は，口辺部片と思われ，上端に沈線が観察され，以下に縄文が施されている。19は，無節縄文が施された胴部片である。20は，無文の口縁部片で，口唇部へ向けて器厚を減じている。21・22は，太めの沈線で幾何学的モチーフが描かれた胴部片で，区画内に縄文が施されている。21の縄文は無節で，22は単節である。22の縄文上には刺突文が付加されている。23は，胴部片で，細い反撚りの縄文らしいものが付されている。

本跡から出土した土器は少なく，時期比定はむずかしいが，ピット４・６からの出土土器片および覆土から出土の土器片の様相から判断すれば，本跡の時期は，加曽利ＥⅣ式期と考えられる。

第81号住居跡（第207図）

本跡は，遺跡の南部I4b_4区を中心に確認されたもので，第70号住居跡の西側6.5ｍに位置している。北西側で第13号溝，東側で第85号住居跡，西側で第84号住居跡・第422号土壙とそれぞれ重複している。新旧関係は住居跡とでは不明であるが，土壙・溝とでは土層から本跡が古いと考えられる。

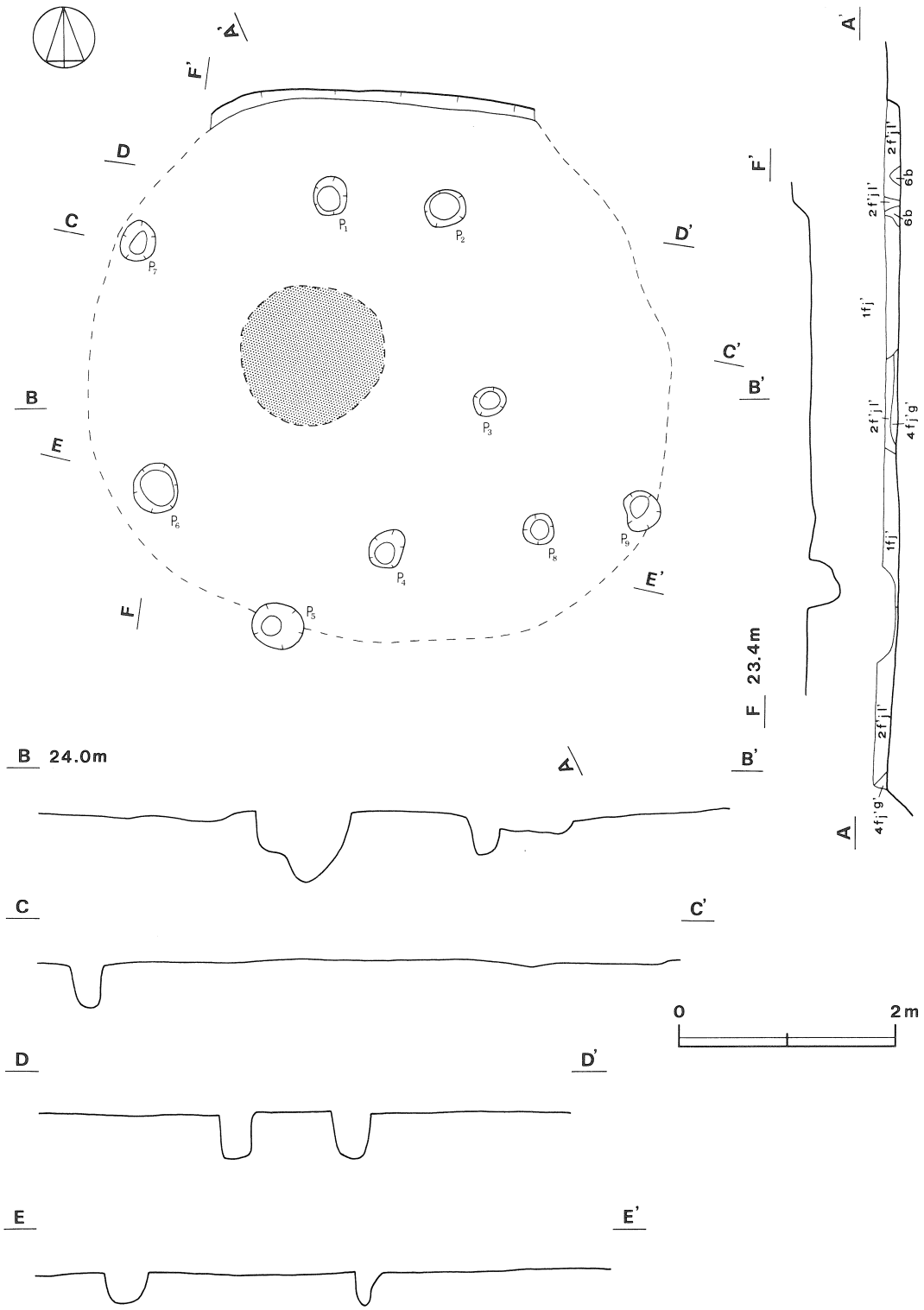
平面形は，重複のため長径5.7ｍ（推定）・短径5.1ｍ（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，Ｎ－52°－Ｗを指している。壁は北側だけ残存しており，ロームブロックを含むソフトロームで軟らかく，床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，10cmである。床面はロームブロックを含んで軟らかく，北側だけがやや高くなっている。ピットは９か所検出され，規模は径28～48cm・深さ30～44cmである。P_1～P_7の７か所は中央を囲むように七角形に配列されているので，主柱穴と考えられる。炉は検出されていないが，中央の第422号土壙の覆土の１層に多量の焼土が認められているので，この土壙によって破壊されたものと考えられる。

覆土は４層からなり，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。１～３層は締まっている。

遺物は，縄文土器片及び石器が覆土から中量，床面から５点出土している。

第81号住居跡出土土器（第208～210図１～64）

本跡は，第84・85号住居跡と重複しており，調査の過程で，各号住居跡に伴う土器を充分に分別できなかった。そこで便宜的ではあるが，本項において，分別しえなかった土器を一括して解説することにした。なお，第84・85号住居跡に伴うと判断された土器については別項にて記述している。



第207図　第81号住居跡実測図

7・10～14，17・19・41は，本跡の炉（第422号土壙の覆土上位）内から出土した胴部片で，19は，幅の広い磨消帯が施され，区画内には単節縄文ＲＬが縦位回転で施文されている。本跡の時期決定に有効なものと思われる。

1は，波状縁を呈し，口縁部文様帯を隆線で楕円形に区画し，胴部に幅の広い磨消帯を付しており，19と同一個体かと思われる。2・3も1と同一個体と考えられる。山形の波頂部を有する口縁部片で，口縁部文様帯を隆線で区画し，胴部には幅の広い磨消帯が施されている。4は，隆線で口縁部文様帯を構成し，区画内に縄文を充填している。5は，波状を呈する口縁部片で，隆線と沈線で楕円区画を施し，区画内に縄文を施している。6は，平縁で口縁部文様帯を隆線で区画している。7・10は，口縁部文様帯を沈線で楕円形に区画するもので，区画内に縄文を施している。8は，口縁部文様帯を区画する隆線の一部が突出している。9は，薄手の波状口縁部片で，区画隆線の末端が渦状を呈している。11・13は，同一個体と考えられる。幅の広い口縁部無文帯をもち，頸部に隆線による楕円区画文を施し，以下に縄文が施文されるもので，鉢形土器と考えられる。12は，強いナゾリが加えられた隆線により区画されている胴部片である。14は，波状を呈する口縁部片で，両側に沈線を沿わせた隆線による曲線的モチーフが全面に展開されている。15は，胴下半部片と思われ，破片上端にやや大きめの突起が貼付されている点が特色である。16は，沈線で口縁部文様帯が区画されている波状口縁部片で，山形に突出した頂部の上面に1個の刺突文が付されている。17は，口辺部片で，縄文地文上に渦巻状の沈線文が加えられている。18～21は，直線的磨消帯を有する胴部片である。20は，幅の狭い磨消帯間に1条の沈線を追加しているもので，器形も内湾が著しく，壺形か鉢形を呈するものと思われる。21の区画間には複節縄文が付されている。22も，直線的磨消帯を有する胴部片であるが，磨消帯を挟んで片側には縄文，一方には条線文が付されている。23は，沈線による逆Ｕ字状の区画内に単節縄文を施している胴部片である。24は，胴部の小片で，2本組の沈線で曲線的モチーフが描かれ，区画内に縄文が充填されている。25は，内湾する口縁部片で，口縁部文様帯を沈線で区画している。26・27は，横位，縦位の沈線区画内に単節縄文ＲＬが充填されている胴部片で，同一個体である。28は，口縁部無文帯を1条の貼付隆線により区画し，以下に縄文が施されている。29は，口縁部にＣ字状を呈する爪形状の刺突文が施されている。30は，厚手の胴部片で，押捺を加えた太い貼付隆帯を施している。地文は粗い沈線で，いわゆる曽利系の土器片である。31・32は，全面縄文の口縁部片で，31は複節，32は単節縄文である。33は，内湾の著しい口辺部片で，細い沈線による逆Ｕ字状の区画内に無節縄文が施されている。34は，複節縄文の地文上に円形刺突文が付されている胴部片である。35は，ごく細い縄文原体を使用した反撚りの縄文を施した胴部片と思われるが，詳細は不明である。36は，幅の広い口縁部無文帯を1条の凹線で区画し，以下に縦位の条線文が施されている。37・38は，条線文が施されている胴部片である。37は，太めの条線文を縦位で曲線

第208図　第81，81・84・85号住居跡出土遺物拓影図（1）

的に，38は，縦位で密に施文されている。39・40は，無文の口縁部片で，いずれも横ナデにより整形されている。41は，薄手の口縁部片で，断面三角形の貼付微隆線によって文様が描かれている。内面には赤彩痕が残っており，特殊な器形を呈するものと思われる。42・43は，太めの沈線区画内に縄文が充塡されている。42は口縁部片で，単節縄文ＬＲ，43は胴部片で，単節縄文ＲＬが充塡されている。

44は，第81・84・85号住居跡が重複する部分で，I4b$_4$グリッドのほぼ中央部の覆土から正位で出土した底部片である。外面には，単節縄文ＲＬが縦位や斜位に回転されている。底面の近くは横ナデにより調整されているが，磨滅が著しい。底面も著しく磨滅している。外面には炭化物が厚めに付着している。内面は，横ナデにより調整されている。胎土には砂粒が混入し，焼成は良好である。色調は，黒褐色を呈している。推定底径は5.0cmで，現存高は7.0cmである。

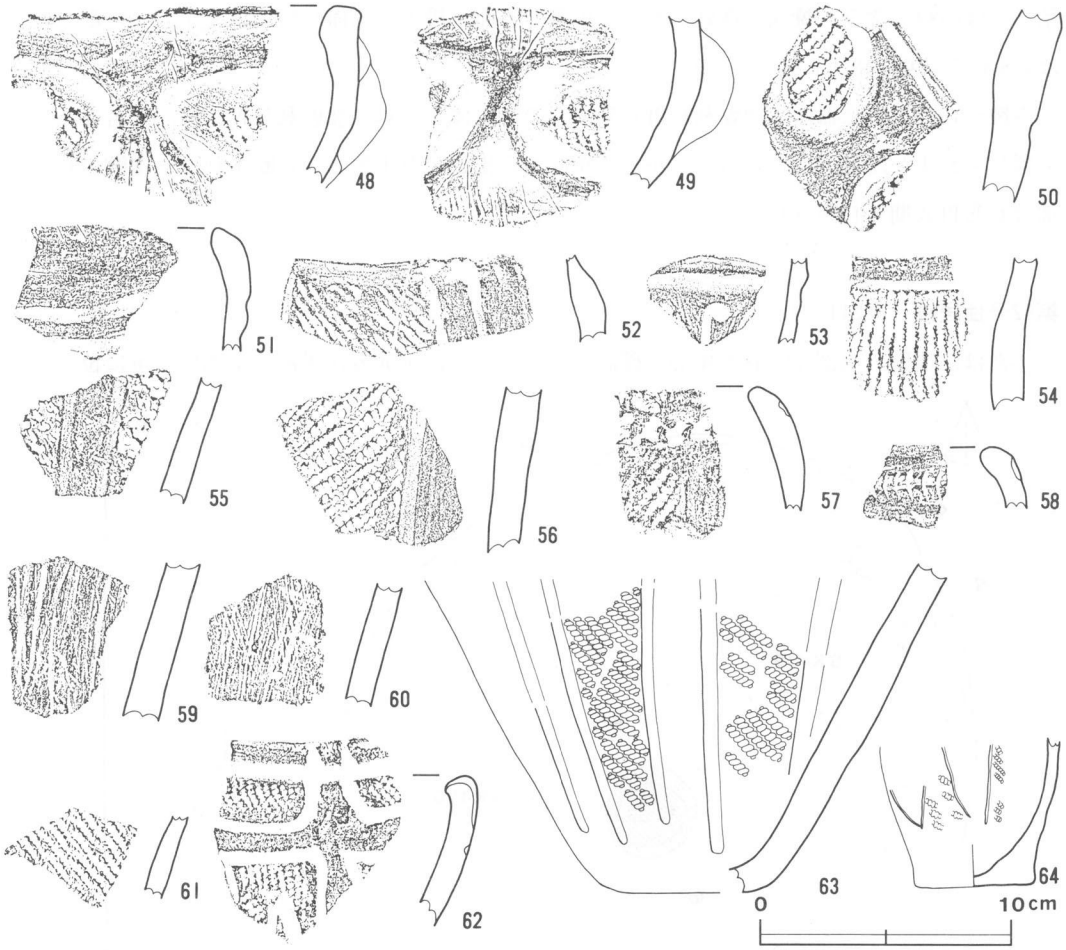
45は，第81・84号住居跡が重複する部分で，I4b$_5$グリッドの中央部やや東側の覆土から正位で出土した底部片である。第81号住居跡の推定で東壁際にあたる個所である。外面には縦ナデを施し，内面には丁寧なナデを加えている。胎土は微砂を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗灰色を呈している。底径は6.2cmで，現存高は3.1cmである。

46は，第81・84号住居跡が重複する部分の南側の覆土から出土した底部片である。薄手で，高台状を呈している。高さは３～５㎜である。外面は横ナデ，内面はナデを施している。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面がにぶい赤褐色を呈している。高台径は3.9cmで，現存高は1.4cmである。

47は，第81・84号住居跡が重複する部分の覆土から出土した底部片である。外面は横ナデ，内面は軽いナデが加えられている。底面には線刻状の沈線がみられるが，意味不明である。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。推定底径は4.4cmで，現存高は1.7cmである。

48は，口縁部文様帯を隆線で楕円形に区画し，区画内に縄文を充塡している。49は，口辺部片で，口縁部文様帯を隆線で楕円形に区画し，区画内に縄文を施し，以下に縦位の条線文を施している。50は，波状縁の波頂部片であるが，頂部を欠損している。沈線で楕円区画を構成し，区画内に単節縄文ＲＬを充塡している。51は，内湾する口縁部片で，口縁部無文帯を２条の沈線で区画している。52は，破片の上端部が極端に薄くなる頸部片で，垂下する磨消帯間に蕨手状の沈線を加えている。地文の縄文は無節である。53は，薄手の胴部片で，蕨手状文がみられる。54は，胴部片で，横位の沈線区画内に条が縦走する縄文を付している。55・56は，直線的磨消帯を有する胴部片で，55は複節，56は異条縄文を施している。57・58は，共に刺突文を付している口縁部片で，57は胴部に磨消帯がみられる。58の刺突文は，細く鋭い爪形状を呈している。59は，厚手の胴部片で，粗い擦痕文が施されている。60は，粗い斜格子目状に条線文が施文されている胴部片である。61は，縄文だけの胴部の小片であるが，単節縄文ＬＲに細い糸状のものを付加して縦位に回転している。62は，太めの沈線で幾何学的モチーフが描かれ，区画内に縄文が充

第209図　第81，81・84・85号住居跡出土遺物実測図・拓影図　(2)



第210図　第81，81・84・85号住居跡出土遺物実測図・拓影図　(3)

塡されている口縁部片で，口唇部にまで沈線が入り込んでいる。内面に炭化物の付着がみられる。

63は，第81・84号住居跡が重複する部分で，I4b$_5$グリッドの北西側の覆土から逆位で出土した深鉢形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。器壁が厚いが，底面は若干薄くなっている。外面には磨消懸垂文が垂下し，区画間には，大粒の単節縄文ＬＲが縦位回転で施文されている。底面の近くは無文となり，縦位のナデが加えられている。内面は縦ナデを施し，底面の内面は横ナデが加えられている。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面がにぶい赤褐色，内面が暗褐色を呈している。推定底径は6.8cmで，現存高は12.5cmである。

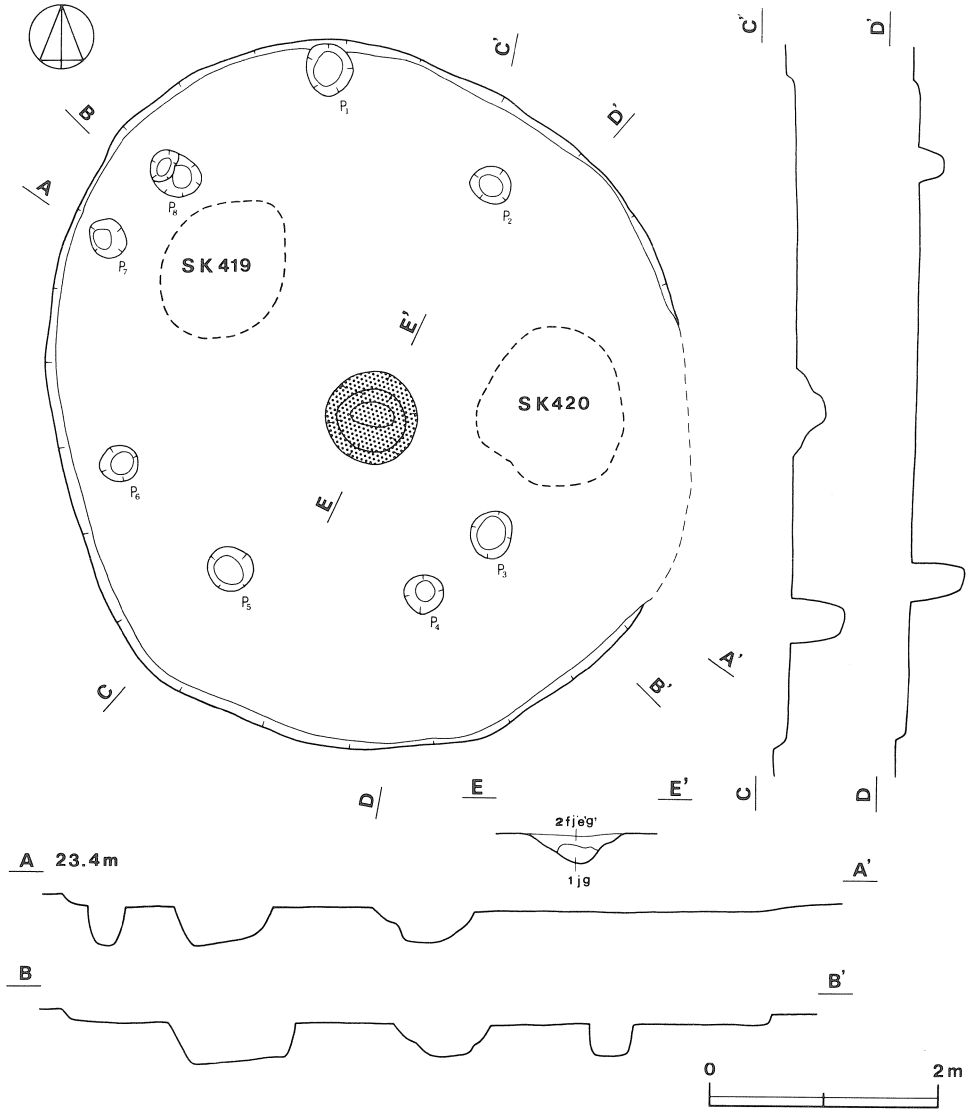
64は，第81・85号住居跡が重複する部分で，I4b$_4$グリッドの中央部やや北側の覆土から正位で出土した小形土器の胴下半部から底部にかけての破片である。器壁は薄い。外面には，細い沈線で曲線的モチーフを描き，区画内は磨消されている。区画の先端は，逆Ｖ字状に尖っている。縄縄文は単節ＬＲの縦位回転である。底面の近くは縦ナデを加えている。内面は軽いナデである。

胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面が褐色，内面が暗褐色を呈している。底径は4.8cmで，現存高は5.8cmである。

本跡からの出土土器は，加曽利ＥⅢ式期のものが主体を占め，加曽利ＥⅣ式期，称名寺式期の土器片もわずかに混入している。しかし，炉内から出土した土器から判断すれば，本跡の時期は加曽利ＥⅢ式期と判断される。

第82号住居跡（第211図）

本跡は，遺跡の南部H4i_3区を中心に確認されたもので，第50号住居跡の南西側８ｍに位置して



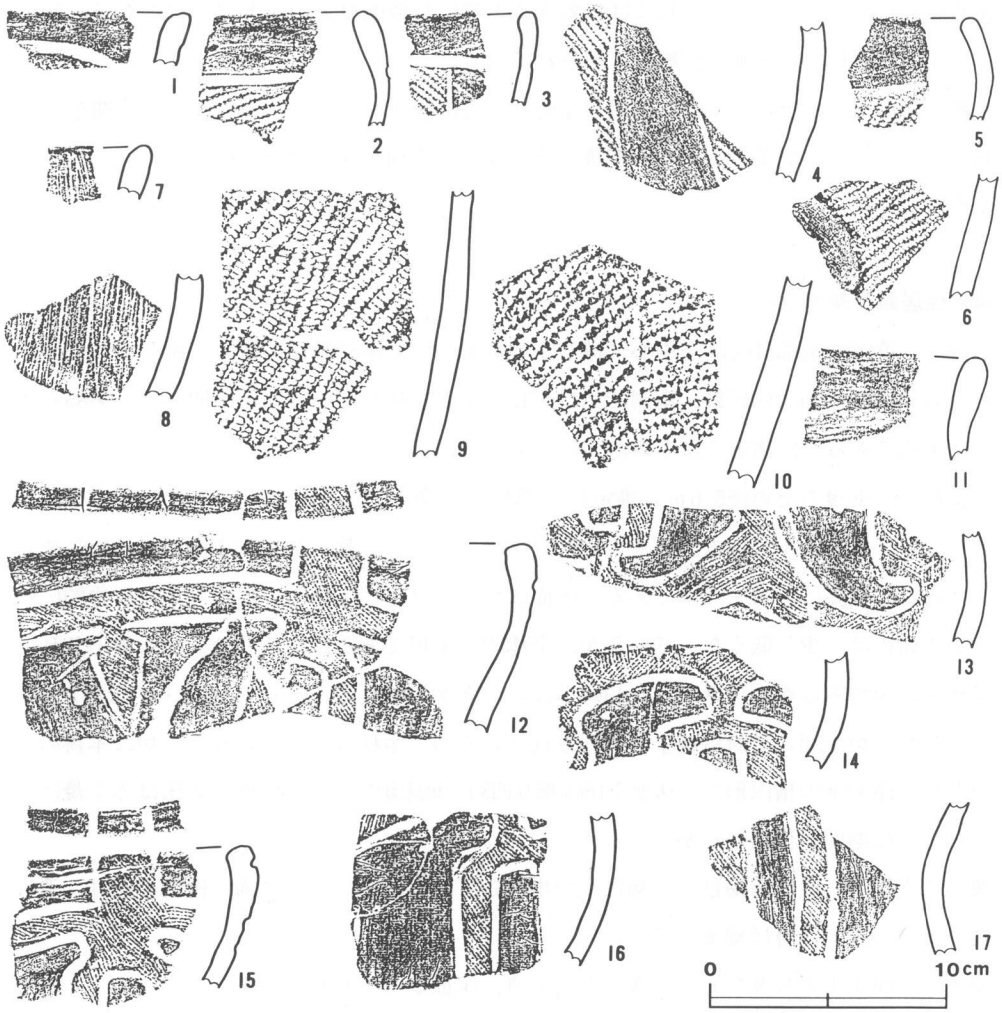
第211図　第82号住居跡実測図

いる。東側・南側で第13号溝と重複している。新旧関係は，土層から本跡が古いと考えられる。

平面形は，長径6.3m・短径5.5mの楕円形で，長径方向は，N－22°－Wを指している。壁は重複により東側が欠損しているが，残っている壁はソフトロームで軟らかく，床面から外傾して立ち上がっている。残存壁高は，4～11cmである。床面はロームブロックを含んでおり，軟らかく平坦である。ピットは8か所検出され，規模は径34～48cm・深さ22～49cmである。その中でもP_2・P_3・P_6・P_8は，規模やその配列などから主柱穴と考えられる。炉は本跡の，中央に検出され，径60cmの円形で，床面を27cm掘り凹めた地床炉である。炉床が赤く焼け，レンガ状に硬くなっているが，炉壁はあまり焼けていない。

本跡は，確認面からの掘りこみが浅く，暗褐色土・褐色土がわずかに堆積しているだけである。

遺物は，縄文土器片が覆土から少量出土している。



第212図　第82号住居跡出土遺物拓影図

第82号住居跡出土土器（第212図１～17）

１・３は，口縁部文様帯が沈線で構成されているもので，区画内に縄文が施されている。３には縦位の区画線がみられる。２・５は，口縁部無文帯を１条の浅い沈線で区画し，以下に縄文が施されている。４は，細い沈線で曲線的モチーフが描かれている胴部片である。６は，微隆線による曲線的文様が施されている胴部片である。７・８は，縦位の条線文が施されている。７は口縁直下から施されている小片で，８は胴部片である。９・10は，縄文だけの胴部片である。９は単節で，10は複節縄文である。11は，無文の口縁部片である。12～17は，縄文が類似しており，同一個体と考えられる。12・15は口縁部片，13・14・16・17は胴部片である。太い沈線で，幾何学的モチーフが描かれ，区画内に細縄文が充塡されている。深鉢形土器で，口縁部が内湾気味に開き，頸部でくびれ，胴部が張る器形を呈するものと思われる。12・15は，施文が口唇上面にまでおよび，沈線や縄文が加えられている。12には称名寺式土器に特徴的なスペード文が付されている。13は，胴部のくびれ部片で，区画線が縦位に施されている。

本跡から出土した土器は少なく，明確な時期決定はむずかしいが，加曽利ＥⅣ式期から称名寺式期にかけてのものが多くみられ，本跡の時期は，加曽利ＥⅣ式期から称名寺式期にかけての時期と考えられる。

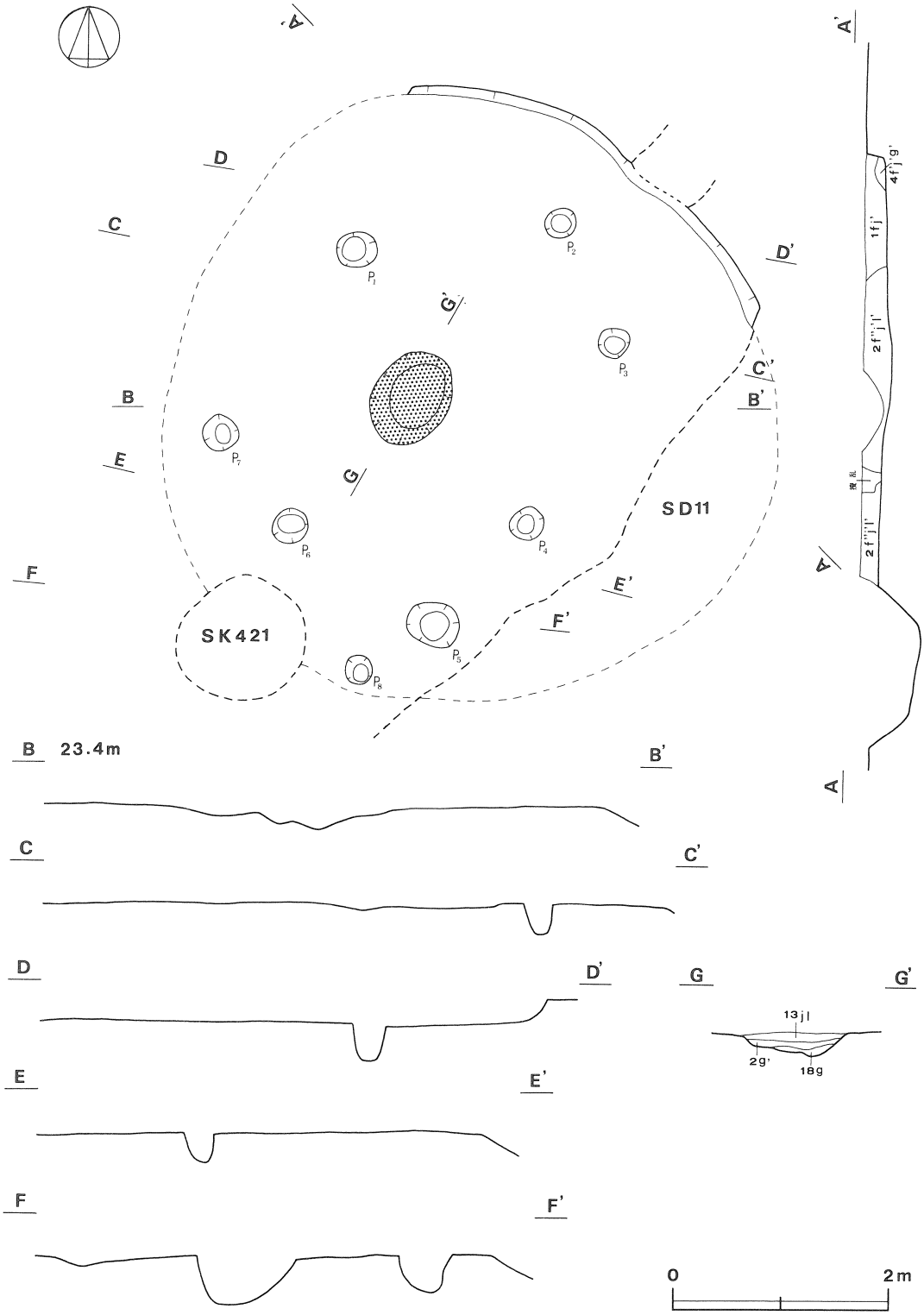
第84号住居跡（第213図）

本跡は，遺跡の南部I4b_5区を中心に確認されたもので，第82号住居跡の南側５ｍに位置している。東側で第81・85号住居跡，南側で第11・12号溝と重複している。新旧関係は，第85号住居跡とでは不明であるが，溝とでは本跡が古いと考えられる。

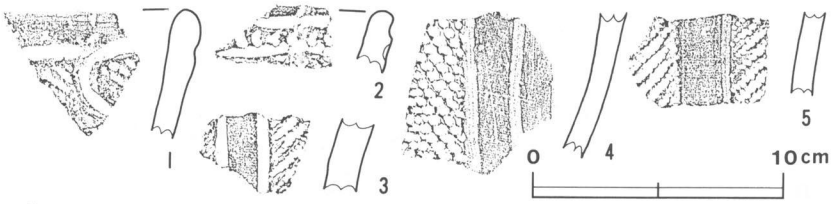
平面形は，重複のため径5.6ｍ（推定）の円形状と思われる。壁は北側・北東側の一部が残っており，ローム粒子・ロームブロックを含むソフトロームで軟らかく，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，10～25cmである。床面はロームブロックを含んでいるが，全体的に軟らかい。炉の周辺は，少し低くなっているが，全体的に平坦である。ピットは８か所検出され，規模は径26～50cmであるが，深さが５～43cmとばらつきがみられる。P_1・P_2・P_4・P_7は深さがほぼ一定しており，炉を囲んで対角線上に配列されているので主柱穴と考えられる。炉は本跡の中央に検出され，径90cmの楕円形で，床面を18cm掘り凹めた地床炉である。炉壁と炉床は赤く焼けて鮮紅色を示し，長期間の使用がうかがえる。

覆土は４層で，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。第11・12号溝の攪乱を受け，遺存状態は良くない。１～３層は締まっている。

遺物は，縄文土器片及び石器が覆土から30点，床面から１点出土している。



第213図　第84号住居跡実測図



第214図　第84号住居跡出土遺物拓影図

第84号住居跡出土土器（第214図１～５）

１は，口縁部文様帯を沈線で区画し，区画内に縄文を充填している。２～４は，本跡の炉内から出土したものである。２は，口縁部の２条の横位の沈線間に爪形状の刺突文を付している。３・４は，直線的な磨消帯を有する胴部片である。４は，無文帯間に１本の沈線を加えている。５は，本跡のピット１から出土したもので，３・４と同様の磨消帯を有している。

本跡から出土した土器はわずかであるが，炉内およびピット１から出土した土器片から判断すれば，本跡の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

第85号住居跡（第215図）

本跡は，遺跡の南部I4b$_5$区を中心に確認されたもので，第82号住居跡の南東側６ｍに位置している。東側で第81・84号住居跡，南側で第12号溝・第421号土壙と重複している。新旧関係は，住居跡・土壙とでは不明であるが，溝とでは土層から本跡が古いと考えられる。

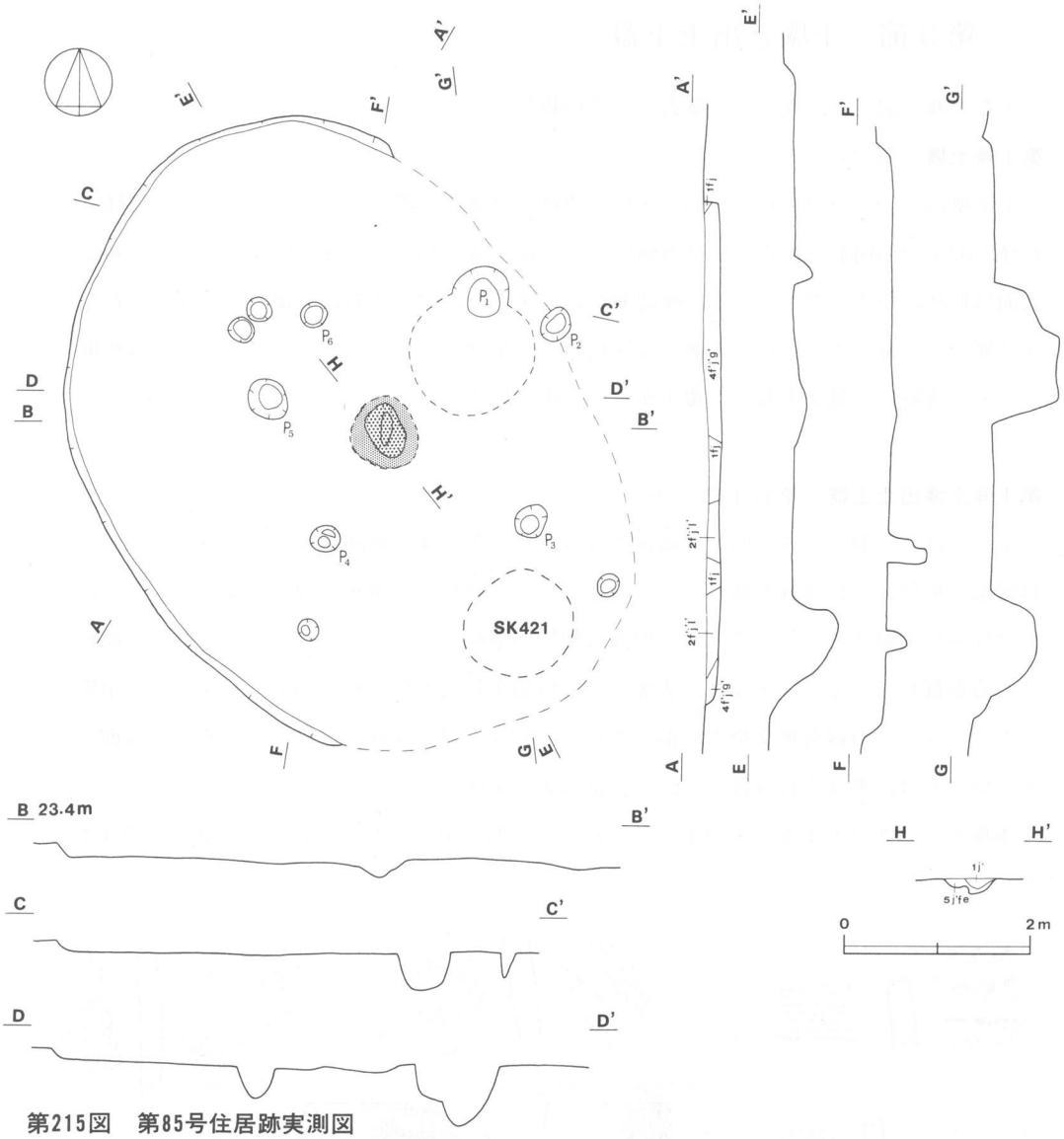
平面形は，重複のため長径7.3ｍ・短径5.2ｍ（推定）の楕円形状と思われる。長径方向は，N－36°－Wを指している。壁は北側・西側だけ残っており，ロームブロックを含み，軟らかく，床面から外傾して立ち上がっている。壁高は，８～20cmである。床面はロームブロックを含み，全体的に軟らかく平坦であるが，北側はやや高くなっている。ピットは10か所検出され，規模は径26～50cm・深さ22～44cmである。P_1～P_6は深さもほぼ一定しており，炉を囲んで六角形に配列されているので主柱穴と考えられる。炉は中央に検出され，径60cmの楕円形で，床面を18cm掘り凹めた地床炉である。炉床と炉壁はあまり焼けておらず，長期間使用されたとは考えられない。なお，炉床は凹凸が激しい。

覆土は３層で，主に暗褐色土・褐色土が堆積している。全層とも締まっている。

遺物は，縄文土器片及び石器が覆土から少量出土している。

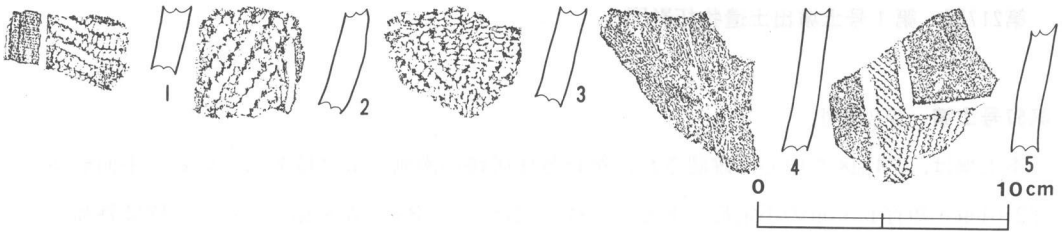
第85号住居跡出土土器（第216図１～５）

１・２は，直線的磨消帯が施文されている胴部片である。３は，縄文だけの胴部片である。４も，胴部片で，細い条線文が付されている。５は，太めの沈線で幾何学的区画が施され，区画内に単節縄文が充填されている胴部片である。



第215図　第85号住居跡実測図

本跡から出土した土器は少ないが，加曽利ＥⅢ式期のものが多く，称名寺式期の土器片が１点含まれている。本跡の時期決定はむずかしいが，出土土器からみれば，加曽利ＥⅢ式期と考えられる。



第216図　第85号住居跡出土遺物拓影図

第３節　土壙と出土土器

主な土壙を記述し，残りは一覧表にして掲載した。

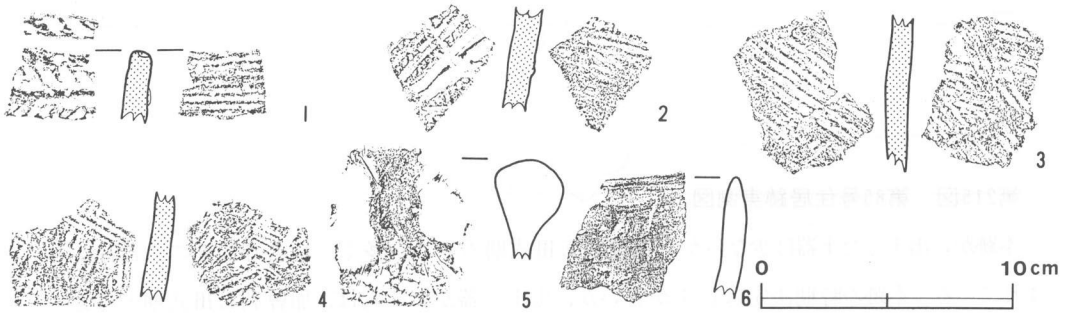
第１号土壙（第334図）

本土壙は，G6b$_9$区を中心に確認され，遺跡の東端に位置している。平面形は，長径3.87ｍ・短径2.02ｍの楕円形である。長径方向は，N－64°－Wを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は皿状に中央が凹んでいる。確認面からの深さは，64cmである。覆土は，９層からなり，１・２層はよく締まっている。１層には炭化物が少量含まれているが，全層ともほぼ自然堆積をしている。遺物は，縄文土器片が覆土から20点出土している。

第１号土壙出土土器（第217図１～６）

１～４は，早期のもので胎土に繊維を含み，貝殻条痕文と微隆起線文が施されている。１は，口縁部に横位の貼付隆線を施し，これを中心にして綾杉状に微隆起線を充塡している。口唇部上面には斜位の刺突文を付している。内面は横位の条痕文である。２は，斜位の微隆起線が施されている胴部片である。３・４は，表裏ともに貝殻条痕文が付されている。５・６は，中期のものである。５は，口縁部無文帯の一部が突出しており，以下は縄文を施しているが，器面の磨滅が著しい。６は，無文の口縁部片で，口唇部は尖り気味である。

本壙からは20点の土器片が出土しているが，早期と中期のものがあり，本壙の時期は不明である。



第217図　第１号土壙出土遺物拓影図

第57号土壙（第340図）

本土壙は，F4j$_6$区を中心に確認され，第18号住居跡の南側１ｍに位置している。平面形は，長径2.01ｍ・短径1.53ｍの不定形である。長径方向は，N－85°－Wを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は起伏がある。確認面からの深さは，42cmである。覆土は，４層からなっている。

遺物は，縄文土器片が覆土から21点出土している。

第57号土壙出土土器（第218図１～５）

１は，口縁部に刺突文が施され，以下には磨消帯がみられる。２は，斜位の沈線と爪形状を呈する刺突文が組みあわされている朋部片である。３・４は，条線文が付されており，３は，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下は条線文を弧状に施文している。４は，曲線的に施している胴部片である。５は，縄文だけの胴部片である。

本壙から21点の土器片が出土しているが，加曽利ＥⅢ式期のものや称名寺式期のものが混在しており，本壙の時期は不明である。なお，本壙からは砥石片が１点出土している。

第218図　第57号土壙出土遺物拓影図

第61号土壙（第341図）

本土壙は，F5b$_9$区を中心に確認され，第８号溝・第23号住居跡と重複している。平面形は，不定形で，Ａ・Ｂに分かれる。長径方向は，N58°－Ｗである。北西側にあるＡは，長径1.75ｍ・短径1.3ｍの楕円形で，深さは82cmである。南東側のＢは，長径1.2ｍ・短径1.12ｍの楕円形で，深さは73cmである。壁はＡ・Ｂとも垂直に立ち上がり，底面は平坦である。土層の堆積状況から，Ａ・Ｂとも同時期のものと考えられる。覆土は，９層からなり，各層が交互に入りくんだ複雑な堆積をしている。また，３・４層には焼土が含まれている。遺物は，縄文土器片が，Ａの覆土から９点，Ｂの覆土から46点出土している。

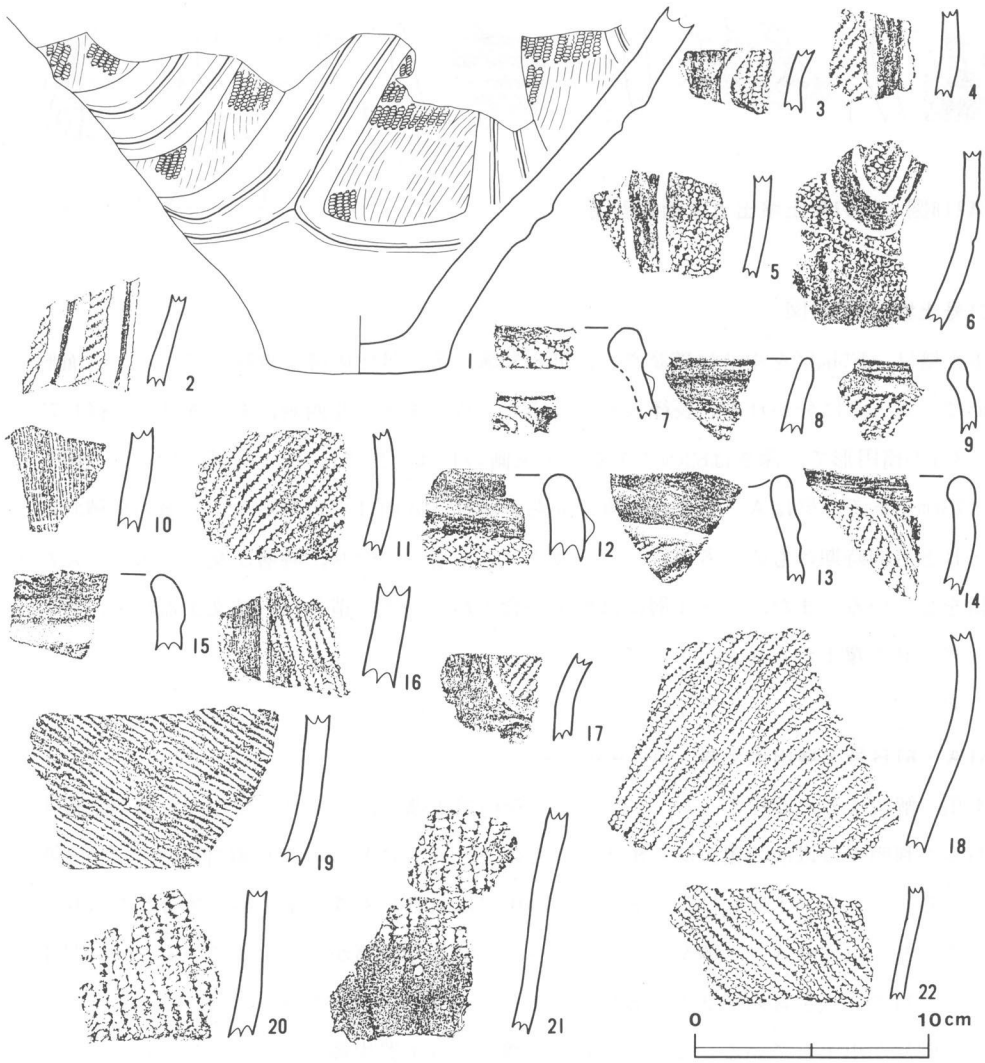
第61Ａ・61Ｂ号土壙出土土器（第219図１～22）

本項で解説する土器片のうち，２～８は，第61号土壙が，Ａ・Ｂの２つの土壙の重複する遺構であると判明する以前の覆土から出土したもので，Ａ・Ｂどちらの土壙に伴うものかが不明な土器片である。これらの土器片は30点あり，その中には61Ｂ号土壙出土土器と接合した破片も含まれている。９～11は61Ａ号土壙から，１・12～22は61Ｂ号土壙から出土している。61Ａ号土壙からは，９～11の３点を含めて９点の破片が出土しており，61Ｂ号土壙からは，１・12～22を含めて46点の破片が出土している。なお，61Ｂ号土壙からは土器片錘２点が出土している。

１は，61Ｂ号土壙の中央部の覆土から正位で出土した深鉢形土器の底部に，同土壙の覆土から

出土した３点および隣接する61Ａ号土壙の覆土から出土した小破片２点が接合したものである。きわめて厚手の土器で，残存部上端の内面と外面の一部には炭化物が付着している。器面には両側にナゾリを加えた断面三角形を呈する隆線により，曲線的モチーフが描かれ，モチーフの内外には無節縄文に類似する撚りの緩い単節縄文ＬＲが充填されている。上部から同一原体で施文したため，下部に到り，撚りがくずれたものと思われる。底部の近くは無文となっており，縦位，斜位方向のナデ調整が加えられている。内面は横ナデで丁寧な調整である。胎土には非常に多量の長石，石英粒，雲母片などが含まれており，粗雑である。焼成は良好で，色調は褐色を呈している。底径は7.7cmで，現存高は15.1cmである。

２は，ナゾリを加えた隆線で文様を構成する薄手の胴部片である。３・５・６は，沈線で曲線



第219図　第61Ａ・Ｂ号土壙出土遺物実測図・拓影図

的モチーフを描き，区画内を磨消し，区画外に縄文を施している胴部片である。4は，直線的磨消帯を有する胴部片である。7は，口縁部に1条の太い沈線を巡らし，以下に隆線で文様を構成していると思われるが欠損している。口唇部が肥厚している。8は，口縁部無文帯を有し，以下に縄文を施している。薄手である。9は，口縁直下に1条の凹線を巡らし，以下に縄文を施している。10は，縦位の条線文を付している胴部片である。11は，縄文だけの胴部片で，胎土には長石，石英粒，雲母片などを多く含み，粗い，12は，口縁部無文帯を1条の貼付隆線で区画し，以下に縄文を施している。13は，波状を呈する口縁部片で，隆線による施文がみられる。14は，口縁直下から曲線的区画を施し，区画内に縄文を施している。15は，口縁部無文帯を1条の沈線で区切っている。16は，直線的磨消帯を有する厚手の胴部片である。17は，胴部のくびれ部片で，U字状の区画内に縄文を充填している。18～22は，縄文だけが施されている胴部片である。20・21は，粗い縄文が条が縦走するように施され，21の下半部は無文となっている。縄文が類似していることから両者は同一個体と思われる。

61A・B土壙とも出土土器から判断すれば，加曽利EⅢ式期のものと考えられる。

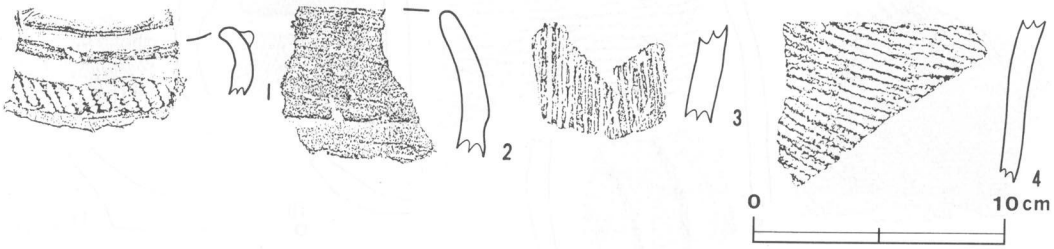
第63号土壙（第303図）

本土壙は，F6c$_1$区に確認され，第24号住居跡の西側2mに位置している。平面形は，径1.2mの円形である。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，23cmである。覆土は，3層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から25点出土している。

第63号土壙出土土器（第220図1～4）

1は，内湾する口縁部片で，隆線で口縁部文様帯を楕円形に区画し，区画内に縄文を充填している。2は，口縁部無文帯を1条の浅い凹線で区切っている。3・4は胴部片で，3は縦位の粗い条線文，4は縄文が施されている。

本壙からは25点の土器片が出土しており，その中には早期の条痕文系土器片も1点含まれているが，主体は加曽利EⅢ式期のものである。本壙の時期は，加曽利EⅢ式期と考えられる。



第220図　第63号土壙出土遺物拓影図

第69号土壙（第303図）

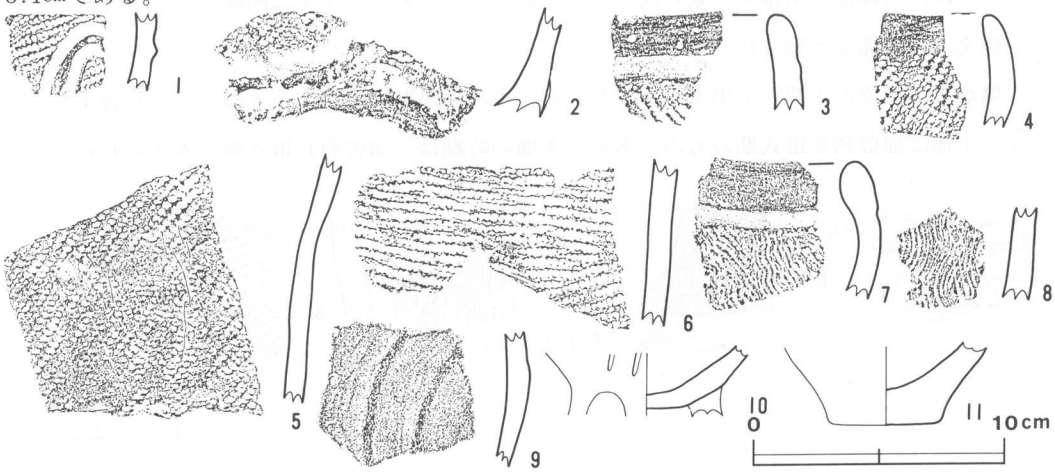
本土壙は，F6d$_3$区を中心に確認され，第15号住居跡の南西側３ｍに位置している。平面形は，径1.38ｍの円形である。壁は垂直に立ち上がり，底面は平坦で，円筒形状に掘りこまれている。確認面からの深さは，104cmと深い。覆土は，５層からなり，各層がレンズ状に堆積する自然堆積である。遺物は，縄文土器片が覆土から69点出土している。その中には，台付土器の底部も含まれている。

第69号土壙出土土器（第221図１～11）

１は，両側に沈線を沿わせた隆線による施文を有する胴部の小片である。２は，底部近くの破片で，縄文地文上に太めの隆帯を弧状に貼付している。３は，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下に縄文を付している。４は，口縁部に無文帯を残し，以下に縄文を施している。５・６は，縄文だけが施されている胴部片である。４・５は，縄文が類似しており同一個体と考えられるが，接合はしない。共に外面に炭化物が付着している。７・８は，条線文が施されている。７は，口縁部無文帯を１条の沈線で区画し，以下には縦位波状に施文している。８は，胴部片で同様な施文である。９は，無文地上に細い隆線で曲線的モチーフを描く胴部片である。

10は，台付土器の接合部の破片で，台部と上部は別々に作られ，後に接合されている。上部の外面には数条の沈線が垂下している。台部は三脚状を呈すると思われ，注目される。上部の器壁は６～７mmと薄い。内外面とも縦ナデにより調整されている。胎土には微砂を含み，緻密である。焼成は良好で，色調は褐色を呈している。現存高は2.5cmである。

11は，深鉢形土器の底部片で，外面は丁寧な横ナデにより調整されている。胎土には微砂を含み，焼成は良好である。色調はにぶい赤褐色を呈している。推定底径は4.5cmあり，現存高は3.1cmである。



第221図　第69号土壙出土遺物実測図・拓影図

本壙からは69点の土器片が出土し，いずれも加曽利ＥⅢ式期のものと考えられる。したがって本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。本壙からは，土器片錘，有孔円板が各１点出土している。

第74号土壙（第341図）

本土壙は，F6h_5区を中心に確認され，第25号住居跡の東側９ｍに位置している。Ｂ号土壙の平面形は，長軸3.00ｍ・短軸1.90ｍの不整方形で，深さは17cmである。本土壙の中に，第74Ａ号土壙がある。Ａ号土壙は，長径2.2ｍ・短径0.8ｍの楕円形で，深さは20cmである。Ｂ号土壙の中にやや深いＡ号土壙が掘りこまれたと考えられる。壁は両方とも外傾して立ち上がり，Ｂ号土壙の底面は平坦であるが，Ａ号土壙の方はやや起伏がみられる。覆土は，Ｂ号土壙が５層，Ａ号土壙が７層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から78点出土している。

第74Ａ・Ｂ号土壙出土土器（第222図１～９）

１・４～８は，Ａ号土壙から，２・３・９は，Ｂ号土壙から出土している。

１は，Ａ号土壙の西側の覆土から出土した20点余の小破片が接合したもので，４単位の波頂部を有する深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。ほぼ直線的に外傾する尖底土器と考えられる。口唇部には斜位のキザミ目を付し，内外面ともに貝殻条痕文を施している。外面は斜位，内面は剝落が著しいが，上半部は横位，下半部は斜位に施文されたものと思われる。胎土には，砂粒と繊維の混入がみられる。焼成は良好で，色調は赤褐色を呈している。推定口径は33.1cmで，現存高は16.5cmである。

４～８は，１と同一個体と考えられるが，１とは接合できなかった。４～７は口縁部片で，斜位の貝殻条痕文が施され，口唇部にはやや間隔をおいたキザミ目が付されている。４～５にはキザミ目があり，６・７にはキザミ目がみられない。内面は剝落が激しく，調整は不明である。

２は，口縁部の小片で，縦位の沈線間に刺突を加え，口唇部にもキザミ目を付している。３は，斜位の貝殻条痕文が施されている口縁部片で，口唇部にも斜位のキザミ目を加えている。９は，縦位の太めの貝殻条痕文が施されている胴部片である。２・３・９とも内面は剝落が著しく，調整は不明である。

Ａ号土壙からは51点の土器片が出土しており，そのほとんどが条痕文系土器片であり，中期の土器片は３～４点混在しているにすぎない。したがって，本壙の時期は早期の貝殻条痕文系土器群の時期と考えられる。

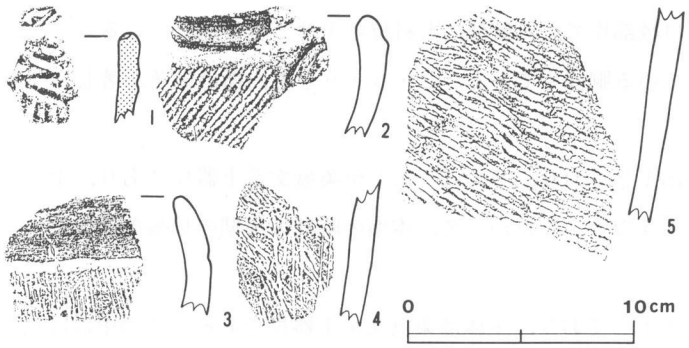
Ｂ号土壙からは27点の土器片が出土しており，主体は条痕文系土器片である。この中には後期安行式の磨滅した破片１点が混在しているだけである。Ａ号土壙との重複関係および出土した土

器片から判断すれば，本壙の時期も貝殻条痕文系土器群の時期と考えられる。

第222図　第74A・B号土壙出土遺物実測図・拓影図

第78号土壙（第320図）

本土壙は，F6i$_8$区を中心に確認され，第25号住居跡の東側18mに位置している。平面形は，長径1.57m・短径1.32mの楕円形である。長径方向は，N－22°－Wを指している。壁は北西が垂直に立ち上がる他は，外傾して立ち上がっている。底面は平坦である。確認面からの深さは，72cmである。覆土は，6層からなっており，1～5層は自然堆積である。遺物は，縄文土器片が覆土から24点出土している。



第223図　第78号土壙出土遺物拓影図

第78号土壙出土土器

（第223図1～5）

1は，早期の口縁部片で胎土に繊維を含み，微隆起線で幾何学的文様を描き，口唇部に斜位のキザミ目を付している。2は，微隆線で曲線的モチーフが描かれ

ている口縁部片で，モチーフ内に異条の単節縄文を施している。3・4は，条線文が付されるもので，3は口縁部片，4は胴部片である。3は，口縁部無文帯を1条の沈線で区画し，以下に縦位の条線文を密に施している。4は，乱雑に施文されており，破片上端に縄文が認められる。5は，全面に無節縄文が施されている胴部片である。

本壙からは24点の土器片が出土しており，1以外は加曽利EⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利EⅢ式期と考えられる。

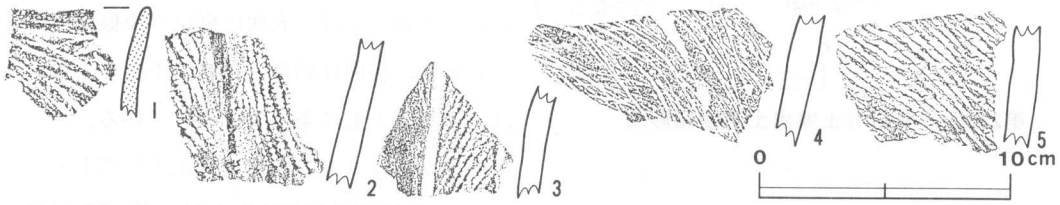
第79号土壙（第314図）

本土壙は，F6i_7区に確認され，第25号住居跡の東側17mに位置している。平面形は，長径0.82m・短径0.71mの不整円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面は平坦である。ほぼ円筒形状に掘りこまれている。確認面からの深さは，66cmである。覆土は，4層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から20点出土している。

第79号土壙出土土器（第224図1～5）

1は，早期の条痕文土器の口縁部片で，表裏に貝殻条痕文が付されている。表面は斜位，裏面は横位に施されている。2は，隆線による区画間に縄文を施している胴部片である。3は，直線的磨消帯を有する胴部片である。4・5も，胴部片である。4は粗い斜位の条線文が付され，5には無節縄文が施され，炭化物の付着もみられる。

本壙からは20点の土器片が出土しており，早期のものは1だけで，他は加曽利EⅢ式期のものである。したがって，本壙の時期は加曽利EⅢ式期と考えられる。本壙からは土器片錘1点が出土している。



第224図　第79号土壙出土遺物拓影図

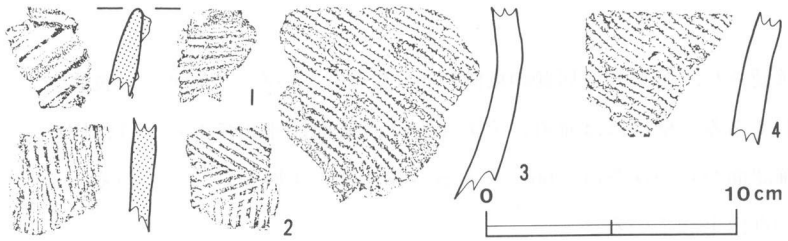
第84号土壙（第303図）

本土壙は，F6j_0区に確認され，遺跡の東端に位置している。平面形は，長径1.25m・短径1.1mの楕円形である。長径方向は，N－55°－Wを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は皿状に凹んでいる。確認面からの深さは，24cmである。覆土は，3層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から21点出土している。

第84号土壙出土土器（第225図１～４）

１・２は，早期のもので野島式土器と思われる。１は，微隆起線による斜位の区画内に細沈線を充塡している口縁部片で，裏面には横位の貝殻条痕文が付されている。２は胴部片で，貝殻条痕文が表裏面に施されている。表面は縦位に，裏面は多方向から施文されている。３・４は，中期のもので縄文だけが施されている胴部片である。

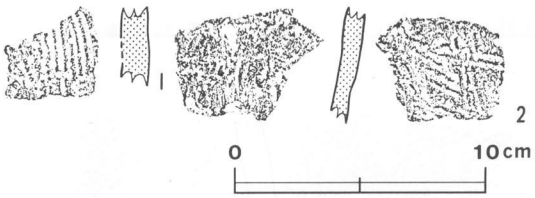
本壙からは21点の土器片が出土しているが，早期のものと中期のものが混在しており，本壙の時期は不明である。



第225図　第84号土壙出土遺物拓影図

第87号土壙（第304図）

本土壙は，G6a_0区に確認され，遺跡の東端に位置している。平面形は，長径0.9m・短径0.8mの楕円形である。長径方向は，N－42°－Wを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，25cmである。覆土は，３層からなり，各層がレンズ状に堆積する自然堆積である。遺物は，縄文土器片が覆土から５点出土している。



第226図　第87号土壙出土遺物拓影図

第87号土壙出土土器（第226図１～２）

１・２は，共に早期の貝殻条痕文系土器の胴部片である。１は，表面に縦位の条痕文を付しているが，裏面は剝落のために不明である。２は，表裏面ともに条痕文を施している。

本壙からは５点の土器片が出土しており，図示した１・２以外は磨滅が著しく，時期不明である。本壙の時期は早期と考えられる。

第114号土壙（第304図）

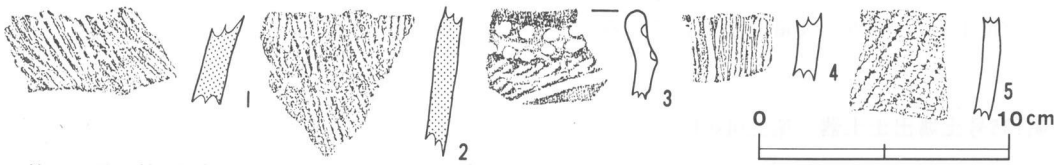
本土壙は，F6i_4区を中心に確認され，第33号住居跡内に位置している。新旧関係は，住居跡の炉を壊しているので本土壙が新しいと考えられる。平面形は，長径1.26m・短径1.07mの楕円形で，第33号住居跡の炉を壊して掘りこまれている。長径方向は，N－49°－Wを指している。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。確認面からの深さは，17cmと浅い。覆土は，３層から

なっている。遺物は，縄文土器片が覆土から13点出土している。

第114号土壙出土土器（第227図１～５）

１・２は，早期の条痕文系土器の胴部片で，共に表面に貝殻条痕文，裏面に擦痕文が付されている。３は，口縁部に２列の円形刺突文を加え，胴部には無節縄文の地文上に，曲線的沈線区画を施し，区画内を磨消している。４・５は，胴部片である。４は，縦位の沈線間に縦位の条線文を施している。５は，縄文だけが付されている。

本壙からは13点の土器片が出土しており，早期のものは１・２の２点で他は中期のものである。第33号住居跡との重複関係および出土遺物から，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。



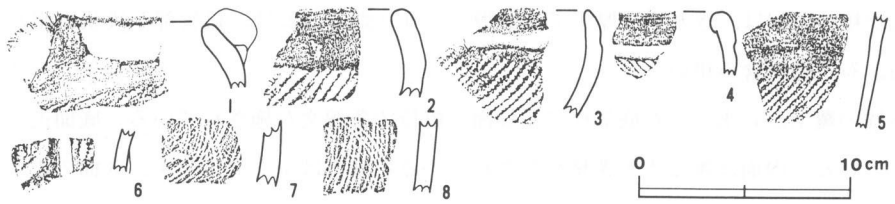
第227図　第114号土壙出土遺物拓影図

第124号土壙（第321図）

本土壙は，G5a$_4$区を中心に確認され，第28号住居跡の南東側７ｍに位置している。平面形は，長径2.65ｍ・短径1.73ｍの楕円形である。長径方向は，N－60°－Wを指している。壁は垂直に立ち上がり，底面は皿状に中央が凹んでいる。確認面からの深さは，75ｍである。覆土は，３層からなっている。遺物は，縄文土器片が覆土から68点出土している。

第124号土壙出土土器（第228図１～８）

１は，口縁部無文帯を微隆線で区画し，以下に縄文を施している。無文帯の一部が左右からのせり上りによって突出しており，突起の下にはわずかに赤彩されていた痕跡を残している。２は口縁部無文帯をナゾリによる微隆線で区画し，以下に縄文を施している。３・４は，幅の狭い口縁部無文帯を１条の沈線で区切り，以下に縄文を付している。５は，薄手の胴部片で，上半は無文，下半は縄文が施されている。胎土には長石，石英，雲母片などを含み粗い。６も，薄手の胴部片で，隆線により曲線的モチーフを描いている。７・８は，共に条線文が曲線的に施文されて



第228図　第124号土壙出土遺物拓影図

いる胴部片である。

本壙からは68点の土器片が出土しており，そのすべてが中期のものである。加曽利ＥⅢ式期の土器片が主体を占めるので，本壙の時期は加曽利ＥⅢ式期と考えられる。

第135号土壙（第305図）

本土壙は，G5g$_4$区に確認され，第31号住居跡の南側１ｍに位置している。平面形は，長径1.4ｍ・短径1.28ｍの楕円形である。長径方向は，Ｎ－35°－Ｅを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面は平坦で，円筒形状に掘りこまれている。確認面からの深さは，105cmと深いほうである。覆土は，９層からなり，断面でみると縦に長い堆積のしかたをしている。遺物は，縄文土器片が覆土から166点と大量に出土している。

第135号土壙出土土器（第229図１～27）

１・２は，内湾する口縁部片で，低隆線で区画を構成し，区画内には縄文が充塡されている。３は，薄手の口縁部片で，幅の狭い口縁部無文帯の一部が突出している。４・５は，ナゾリを加えた隆線により文様が施される胴部片である。４はやや厚手で，曲線的モチーフ内には縄文を施し，モチーフ外は無文としている。５は薄手で，垂下する隆線間に縄文を施している。６は，幅の狭い口縁部無文帯を１条の貼付隆線で区画し，以下は縄文を施している。隆線の上下に小さな刺突列を加えている。７は，口縁部無文帯を１条の沈線で区切り，その下に円形刺突文を沿わせている。胴部に曲線的区画文を付している。８は，口縁部無文帯を１列の円形刺突文列で区画し，以下に縄文と沈線文を加えている。９は，口縁直下に円形刺突文列と１条の沈線文を巡らし，胴部には隆線による文様が描かれている。10は，縄文地文上に円形刺突文が施された胴部片である。11・12は，縄文地文上に沈線で施文する口縁部片である。11は，口縁直下に太めの凹線が巡らされ，12は，口縁部無文帯に１条の沈線を施し，細く鋭い沈線を加えている。13は，口縁部無文帯を１条の凹線で区画し，以下に縄文を施している。14は，直線的磨消帯を有する胴部片である。15～17は，曲線的な沈線区画内に縄文を充塡している胴部片で，17の沈線は太く強い。18は，異条縄文が付されている胴下半部片である。19～21は，縦位の密な条線文が施されている胴部片である。22～25は，無文の口縁部片である。22は，比較的薄手で横ナデが著しく，外反している。23は，整形が粗い。24は，きわめて厚手で，器厚2.3cmを測る。25は，口唇部が段状に肥厚し，胎土に長石，石英粒を含み粗い。

26は，本壙の覆土から出土した底部片で，外面に縦位の条線文が施されている。底面近くは横ナデを加えている。内面は雑なナデ調整がなされている。底部は全く突出せず，底面の周縁は，ヘラで丸く削られている。底面はわずかに凹んでいる。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。